資料2

感染症定期報告に関する今後の対応について

平成１６年度第５回
運営委員会確認事項
（平成１６年９月１７日）

１ 基本的な方針

運営委員会に報告する資料においては、

(1) 文献報告は、同一報告に由来するものの重複を廃した一覧表を作成すること。

(2) 8月の運営委員会において、国内の輸血及び血漿分画製剤の使用した個別症例の感染症発生報告は、定期的にまとめた「感染症報告事例のまとめ」を運営委員会に提出する取り扱いとされた。これにより、感染症定期報告に添付される過去の感染症発生症例報告よりも、直近の「感染症報告事例のまとめ」を主として利用することとすること。

２ 具体的な方法

(1) 感染症定期報告の内容は、原則、すべて運営委員会委員に送付することとするが、次の資料概要を作成し、委員の資料の確認を効率的かつ効果的に行うことができるようにする。

① 研究報告は、同一文献による重複を廃した別紙のような形式の一覧表を作成し、当該一覧表に代表的なものの報告様式（別紙様式第2）及び該当文献を添付した**「資料概要A」**を事務局が作成し、送付する。

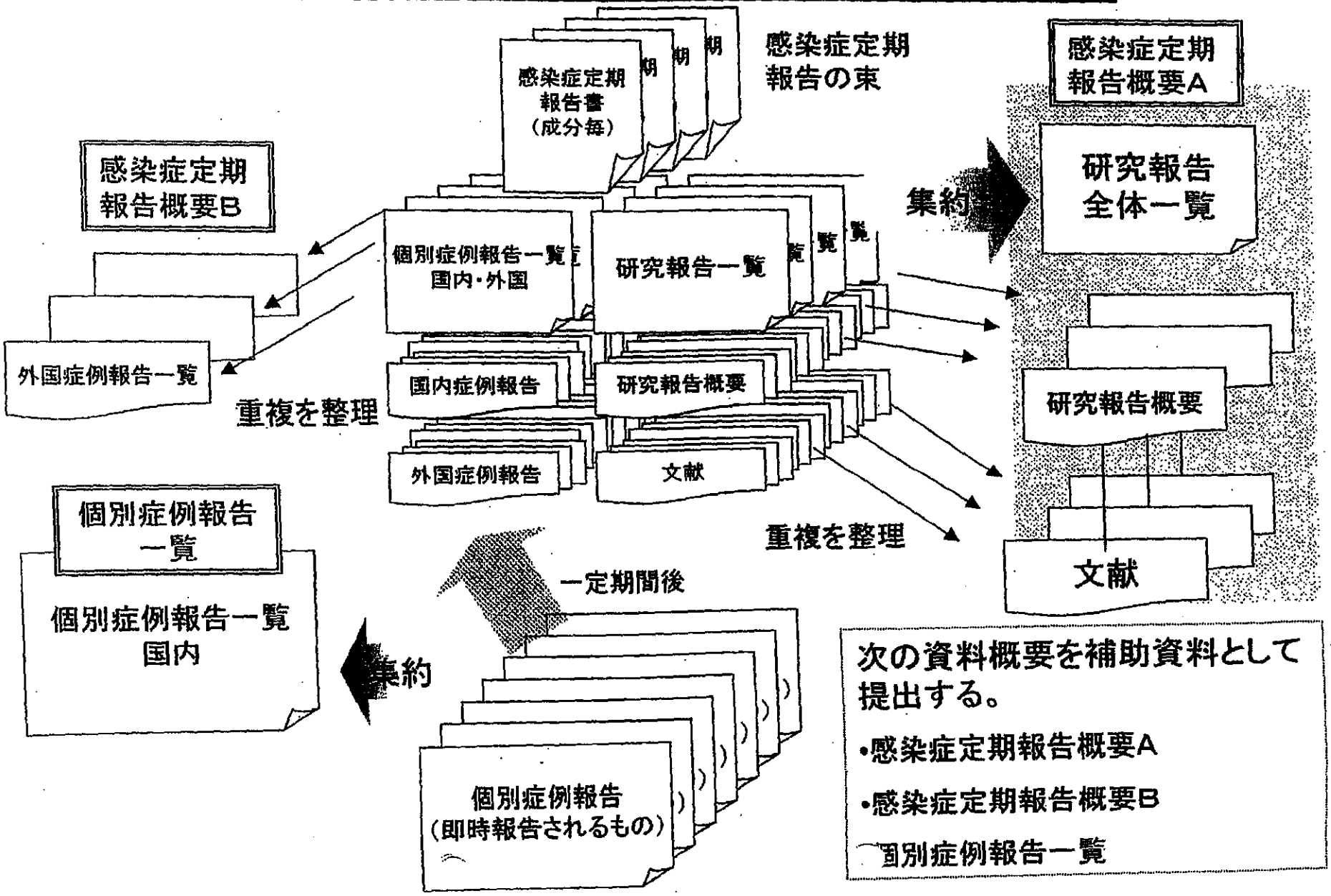
② 感染症発生症例報告のうち、発現国が「外国」の血漿分画製剤の使用による症例は、同一製品毎に報告期間を代表する感染症発生症例一覧（別紙様式第4）をまとめた**「資料概要B」**を事務局が作成し、送付する。

③ 感染症発生症例報告のうち、発現国が「国内」の輸血による症例及び血漿分画製剤の使用による感染症症例については、「感染症報告事例のまとめ」を提出することから、当該症例にかかる「資料概要」は作成しないこととする。ただし、運営委員会委員から特段の議論が必要との指摘がなされたものについては、別途事務局が資料を作成する。

(2) 発現国が「外国」の感染症発生症例報告については、国内で使用しているロットと関係がないもの、使用時期が相当程度古いもの、因果関係についての詳細情報の入手が困難であるものが多く、必ずしも緊急性が高くないと考えられるものも少なくない。また、国内症例に比べて個別症例を分析・評価することが難しいものが多いため、緊急性があると考えられるものを除き、その安全対策への利用については、引き続き、検討を行う。

(3) 資料概要A及びBについては、平成16年9月の運営委員会から試験的に作成し、以後「感染症的報告について（目次）」資料は廃止することとする。

感染症定期報告・感染症個別症例報告の取り扱い



次の資料概要を補助資料として提出する。

- 感染症定期報告概要A
- 感染症定期報告概要B
- 個別症例報告一覧

感染症定期報告概要

（平成２４年１２月１９日）

平成２４年８月１日～１０月３１日受理分

Ａ　研究報告概要
Ｂ　個別症例報告概要

Ａ　研究報告概要

○　一覧表（感染症種類毎）
○　感染症毎の主要研究報告概要
○　研究報告写

研究報告のまとめ方について

１　平成２４年８月１日～１０月３１日までに報告された感染症定期報告に含まれる研究報告（論文等）について、重複している分を除いた報告概要一覧表を作成した。

２　一覧表においては、前回の運営委員会において報告したもの以降の研究報告について、一覧表の後に当該感染症の主要研究報告の内容を添付した。

感染症定期報告の報告状況(2012/8/1～2012/10/31)

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120094	27-Sep-12	B型肝炎	Transfusion. 52(2012)880-892	南アフリカにおける個別核酸増幅検査(ID-NAT)済み血液輸血によるB型肝炎ウイルス(HBV)感染に関する報告。2005年以来4年間で2,921,561の供血血液が、南アフリカにてHBV ID-NATスクリーニングを受け、149件のHBs抗原陰性のHBV NAT陽性供血が同定された。遡及調査によって1件のHBV感染疑い症例が同定された。供血者及び受血者から分離したHBVのゲノム配列決定、増幅、系統発生解析を行ったところ、149件のHBV NAT陽性検体中114件は抗HBc抗体が検出される前のウインドウピリオド(WP)で、35件は抗HBc抗体WP後であると分類された。HBV DNA陰性の状態での抗HBc抗体WP前、後における急性感染リスクはそれぞれ1:40,000と1:480,000であると推算された。報告されたHBV感染症例は、抗HBc抗体検出前のWPにおけるID-NAT陰性の輸血を受けた患者であった。	1
120094	28-Sep-12	B型肝炎	J Hepatol. Jun 2, 2012	台湾におけるワクチン接種プログラムによるB型肝炎ウイルス(HBV)感染の低減に関する報告。台湾で1984年に開始された乳幼児へのユニバーサルワクチン接種プログラムの評価として、25年後の血清疫学調査が行われた。30歳未満の各年齢集団から約100人ずつ、3,332人の被験者を登録し、HBs抗原、HBs抗体、HBc抗体の陽性率を比較したところ、2009年におけるプログラム開始後に出生した被験者と、1984年のベースライングループとの間で大きく異なっていた。また、前回(プログラム開始20年後)調査よりも、HBs抗原保有率がワクチン接種群でさらに減少していた。ワクチン無効者のうち86%は、母親がHBs抗原陽性であった。この結果より、若年者へのワクチンの有効性が明確であることが示された。	2
120095	03-Oct-12	B型肝炎	Virology Journal 2012, 9: 2	ニワトリの血清及び肝中に含まれるB型肝炎ウイルス(HBV)に関する報告。ブロイラーの血液検体129例及び肝臓検体193例を用いて、HBV関連検査を行ったを行ったところ、HBsAg、HBsAb、HBcAbの全陽性率はそれぞれ26.8%、53.49%、17.05%であり、一方HBeAg及びHBeAbが検出されたのは僅かであった。透過型電子顕微鏡(TEM)により血液検体を分析した結果、HBVと類似した粒子が確認された。また、2例の肝臓検体において確認されたウイルスDNA配列は、既知のHBV株と97.9%の相同性があることが示された。今後ニワトリで確認されたHBVがヒトHBVと同一であると示されるならば、ニワトリのHBV感染は重要な問題となり得るであろう。	3
120121	27-Oct-12	B型肝炎	J Infect Dis. 206(2012)478-485	B型肝炎ウイルス(HBV)感染症患者の体液を介した実験的HBV感染に関する報告。慢性HBV感染症の小児39例及び成人8例における尿、唾液、涙液及び汗中のHBV DNAをリアルタイムPCRを用いて調査したところ、尿検体の73.7%、唾液検体の86.8%、涙液検体の100%、汗検体の100%にHBV DNAが検出された。血清検体と、唾液及び涙液のHBV DNAレベル間には有意な相関が見られた。また、小児1例の涙液検体をヒト肝細胞移植キメラマウス2匹に静注したところ、接種1週間後にキメラマウスの血清はいずれもHBV DNA陽性となった。マウスにおいて涙液の感染性が確認されたことから、高レベルのウイルス血症を有するHBV保有者の体液に直接接触することを防ぐ対策が必要である。	4
120121	28-Oct-12	C型肝炎	J Infect Dis. 206(2012)654-661	C型肝炎ウイルス(HCV)感染者の経過と伝播様式に関する報告。738例のHCV抗体陽性供血者について感染のリスク要因と経過に関して評価された。まず偽陽性排除のために第3世代リコンビナント免疫ブロット法(RIBA)を用いてHCV抗体を検査したところ、469例(64%)がRIBA陽性、217例(29%)が陰性、52例(7%)が不確定であった。主な独立リスク因子は静注薬物使用、輸血や経鼻コカイン使用であった。計384例(82%)のRIBA陽性供血者がHCV RNA陽性であり、うち185例(48%)からの肝生検検体において33%に線維化は見られず、52%に軽度の線維化、12%に架橋線維化が見られた。感染後平均25年で2%に肝硬変が確認された。反復生検を行った63例の解析の結果、8%が5年以上でIshakステージ2以上に進行したことを示した。	5

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120094	29-Sep-12	E型肝炎	Emerging Infectious Diseases. 18(2012)869-872	オランダにおける臓器移植レシピエントのE型肝炎ウイルス(HEV)感染に関する報告。HEV感染は免疫抑制状態にある患者にとって生命を脅かす可能性がある。2000～2011年、オランダにおいて臓器移植を受けた1200例の生存レシピエントに対しHEV RNA検査を行ったところ、12例のHEV感染が判明し、11例は慢性感染症であった。患者の年齢中央値は56.9歳、9例(75%)が男性であった。慢性HEV感染症の全患者で肝酵素レベルが上昇しており、HEV RNA検出はALTレベルの上昇と同時かまたはその後に続いた。HEV RNA陽性時からIgMが検出されるまでの期間の中央値は32日、IgGが検出されるまでの期間は平均124日であった。11例のHEV感染患者のサンプルから分離したウイルスは全てジェノタイプ3であった。HEV感染の原因が市中感染か院内感染かは不明であった。慢性HEV感染患者ではRNAが検出されてからIgM及びIgGの検出までに期間があるため、高い肝酵素値を示す臓器移植患者におけるHEV感染の診断にRNAの検出を行うべきである。	6
120094	30-Sep-12	E型肝炎	Vox Sang. 103(2012)89-90	スウェーデン、ドイツ及び米国からの血漿供血におけるE型肝炎ウイルス(HEV)陽性率に関する報告。各国由来の血漿供血において、96供血以下ミニプール血漿中のHEV RNAについて調査した。その結果、スウェーデン由来供血の95,835本中12本、ドイツ由来の18,100本中4本がHEV RNA陽性であった。ミニプールを考慮すると、HEV陽性供血の割合はスウェーデンでは1:7,986、ドイツでは1:4,525であった。一方、米国由来の51,075供血においてHEV陽性は検出されなかった。分子学的及び血清学的分析が行われた12本の供血について、HEV株は全てジェノタイプ3であり、ウイルス量は3.2-5.7 log10IU/mL HEV RNAと日本人献血者での報告と同様の範囲であった。IgGおよびIgMの測定を行ったところ、大部分のサンプルはウインドウ期供血であった。また、検査された12本のウイルス血症供血のうちALTレベルの上昇がみられたのは3本のみであった。これはALTによるスクリーニングがHEVの除外の方法として信頼できないことを示している。	7
120094	02-Oct-12	パルボウイルス	Emerging Infectious Diseases. 18(2012)680-683	カメルーンにおけるヒトパルボウイルス4(PARV4)感染の報告。2009年に採取されたカメルーン人の血清サンプル451例を用いてPARV4抗体陽性率の調査を行った結果、79例(17.5%)がPARV4抗体を有していた。PARV4抗体陽性はマラリア予防薬の静脈注射、結核の非経口治療、避妊薬の筋肉注射に関連があった。また、高齢者よりも60－64歳の初老の人に陽性者が多かった。これはウイルス曝露の経年的変化や、PARV4抗体価が次第に弱まっていき、最終的に偽陰性となること等が考えられる。今回の調査結果より、ある程度のPARV4非経口感染があることが示唆された。	8
120094	03-Oct-12	パルボウイルス	Transfusion. 52(2012)1482-1489	血友病患者におけるヒトパルボウイルス4(PARV4)の感染に関する報告。血漿由来ウイルス不活化凝固因子製剤の治療を受けている血友病患者に対するPARV4の潜在的伝播を調査するため、血友病患者集団194例におけるPARV4抗体の陽転化についてスクリーニングを行った。その結果、検査開始時のPARV4抗体陽性率は44%であり、観察期間中9例の被験者(うち7例はHIV陽性)において抗体が陽転化した(発生率、1.7%/年)。感染した被験者は比較的長期のウイルス血症期間を示し、感染急性期に弱い一過性のIgM応答を示した。この研究により、PARV4はウイルス不活化処理に抵抗性を持つ輸血感染性病原体であることが確認された。血漿由来血液製剤を使用する人々において、定期的に感染が発生する可能性が懸念される。	9
120137	31-Oct-12	インフルエンザ	http://www.cdc.gov/flu/spotlights/h3n2v-more-cases.htm	米国におけるインフルエンザA(H3N2)v感染の報告。米国疾病予防管理センター(CDC)は、米国において新たに12例のH3N2vインフルエンザ感染が発生し、オハイオ州で初めての死亡例が報告されたことを発表した。死亡した患者は複数基礎疾患を持つ高齢者で、祭りでブタに直接接触していた。本ウイルスのヒト-ヒト感染は限られており、散発的に発生しているが、集団での持続的な発生は認められていない。	10

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120141	01-Nov-12	鳥インフルエンザ	MMWR. 61(2012)726-727	メキシコにおける高病原性鳥インフルエンザA(H7N3)ウイルス感染の発生報告。メキシコハリスコ州の農場一帯で報告されている家きんでの高病原性鳥インフルエンザA(H7N3)の集団発生に関連して、同ウイルスへのヒト感染事例が2例報告された。1例はインフルエンザA(H7N3)が検出された飼育場の従事者の32歳女性であり、2012年7月に結膜炎と診断された。両眼のスワブの検査により、インフルエンザA(H7)ウイルスが陽性であった。もう1例は1例目の患者の親族であり、同じく2012年7月に結膜炎を発症し、インフルエンザA(H7)ウイルス感染が判明した。両症例とも重篤な症状に至ることなく回復している。	11
120132	06-Nov-12	ウエストナイルウイルス	http://www.cdc.gov/ncidod/dvbid/westnile/index.htm/2012/08/17	米国におけるウエストナイルウイルス(WNV)感染の発生状況に関する報告。2012年8月第2週時点で、米国43州において26例の死亡を含むWNVヒト感染例693例が報告されている。これは1999年に米国で初めて検出されて以降最多のペースである。693例のうち406例(59%)が神経侵襲性疾患、287例(41%)が非神経侵襲性疾患であった。	12
120121	06-Nov-12	デング熱	Transfusion. 52(2012)1657-1666	プエルトリコにおける輸血によるデング熱感染に関する報告。2007年、プエルトリコにおいて計10,508例のデング熱疑い症例が報告された。これを受けて、供血がデングウイルス(DENV)RNAについて検査され、RNA陽性供血の受血者は輸血感染の評価のために追跡された。検査された検体15,350例のうちTMA法によるDENV RNA検査に対する繰り返し反応(RR)が確認されたのは29例であり、1/529の割合であった(0.19%)。蚊での培養により感染性を示した12例において、RT-PCRによりウイルス力価105～109copies/mLでDENV 1型、2型及び3型が検出された。TMA-RR供血の受血者29例のうち3例が検査されたところ、108copies/mLのDENV-2を含む赤血球を輸血されたプエルトリコの受血者1例が輸血3日後に発熱し、デング出血熱に進行した。受血者もDENV-2陽性であり、供血者と受血者の両方が同一のエンベロープ配列を有していた。	13
120094	07-Oct-12	HHV-8感染	J Med Virol. 84(2012)792-797	サウジアラビアの血液透析患者の口腔及び血液中のヒトヘルペスウイルス8(HHV-8)に関する報告。サウジアラビアにおいて、血液透析患者72例の血漿中抗HHV-8抗体及びCD45(+)末梢血液細胞におけるHHV-8 DNA感染率を、供血者178例、妊婦60例と比較した。その結果、血液透析患者と健康な被験者間での抗体検出率は16.7%対0.4%、DNA検出率は4.2%対0.4%であった。また、透析患者の口腔内におけるHHV-8を調査したところ、HHV-8 DNAが口腔内から検出された患者5例における唾液中に排出されたウイルス量は、8,600～119,562,500GE/mlにまで分布した。さらに、サブゲノムシークエンスを実施したところ、口腔内のHHV-8は、4例がジェノタイプC2、1例がジェノタイプA1及びC2に属していたことが示された。血液透析患者の口腔内のHHV-8は高ウイルス量で、多様性があったことから、血液とともに唾液はHHV-8感染を媒介し、血液透析患者における高いHHV-8感染リスクとなり、腎移植後のカポシ肉腫の原因となることが推測された。	14
120094	05-Oct-12	ハンタウイルス	Emerging Infectious Diseases. 18(2012)750-757	ボリビアにおける新規アンデスウイルスに関する報告。南アメリカにおけるハンタウイルスの遺伝的多様性を調べるため、2008年～2009年にボリビア中央部のチャパレで発熱患者の血液検査を行ったところ、ハンタウイルス属RNAは死亡した1例を含む3例の患者に認められた。ウイルスのS及びMセグメントの部分的RNA配列はアンデスウイルス系統に最も密接に関連していたが、既報告株とは異なっていた。チャパレ住民間での抗ハンタウイルスIgG抗体調査は人口の12.2%が過去にハンタウイルスへ曝露していたことを示し、農業従事者間で最も検出率が高かった。ハンタウイルス株へ曝露する人が多いことと、結果的に生じる疾病が重大であることから、この新しいハンタウイルスの宿主、浸淫地域、及び公衆衛生への影響を決定するための更なる研究が必要とされる。	15

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120094	06-Oct-12	ハンタウイルス	Euro Surveill. 2012;17(21):pii=20180	ドイツにおけるヒトハンタウイルス感染症報告増加の報告。2011年10月から2012年8月、852件のヒトハンタウイルス感染症がドイツで報告され、そのうち68%がバーデンーヴュルテンベルク州で発生していた。ヒトハンタウイルスは保有宿主であるハタネズミの排泄物への曝露によりヒトに伝播し、2～4週間の潜伏期後に流行性腎症を引き起こす。2012年第17週の最新報告数は87件であり、歴史的な最多報告数である2007年第22週の96件にほぼ到達している。症例数急増の原因は不明であるが、気候要因と、恐らく2011年のブナの繁茂によるハタネズミの増加に関連すると推定されている。2012年夏季期間にさらなる症例数増加が見込まれるため、予防対策のためのさらなる情報が必要とされる。	16
120094	30-Sep-12	ウイルス感染	ProMED-mail 20120713.1200936	カンボジアの幼児における手足口病(HFMD)に関する報告。カンボジアの幼児において原因不明の致死性疾患が報告されたことを受け、31例の患者サンプルについてパスツール研究所で検査を行ったところ、大部分の症例の原因はHFMDの重症型であるという結論に至った。サンプルの多くがHFMDの原因であるエンテロウイルス71(EV-71)陽性であった。確認された計78症例のうち61例について調査を行った結果、大部分の患者は3歳以下で、異なる14州から報告があり、数例は慢性状態であることが分かった。WHOや関連機関の援助を受け、保健省は調査を継続するとともに、全てのHFMD患者を報告するよう指示し、サーベイランスを強化した。	17
120095	02-Oct-12	ウイルス感染	WHO/GAR/Disease Outbreak News. Jul 9, 2012	原因不明の疾患で死亡したカンボジアの小児におけるウイルス検出の報告。カンボジアにおいて、2012年4月から7月5日までの間に原因不明の疾患にかかった小児59例が報告され、うち52例が死亡した。患者は大多数が3歳未満であり、男女比は1.3:1であった。最新の検査結果によると、患者検体の多くで手足口病(HFMD)を引き起こすエンテロウイルス71(EV-71)に対して陽性反応を示した。他にも、デング熱とブタ連鎖球菌等の病原体について検出されたが、インフルエンザウイルスやSARS、ニパウイルスには陰性であった。更なる検査が現在進行中であり、数日以内に結論が出される予定である。	18
120095	04-Oct-12	ウイルス感染	Chinese journal of Zoonoses. 28(2012)442-448	中国におけるヒトへの山羊痘感染発生の報告。2010年、中国重慶市において山羊痘感染症例が34例報告された。そのうち5例から小嚢液、眼脂又はかさぶたを採取し、4例の山羊痘感染ヤギの検体と共にウイルスDNAの検出を行ったところ、全ての検体が山羊痘ウイルスA29L遺伝子に陽性であった。また、ヒト症例5例中4例について山羊痘ウイルスP32遺伝子に対しても陽性であった。ヒト2例及びヤギ1例から得られたP32遺伝子の配列を比較すると100%の相同性が得られ、双方のウイルスが同一であることが示された。今回の感染者には全て罹患ヤギとの接触歴があったため、直接ヤギと接触したことが、山羊痘感染の主な原因であったと考えられた。	19
120098	26-Sep-12	ウイルス感染	Arch Virol. 157(2012)521-524	中国のブタにおけるブタ・サイトメガロウイルス(PCMV)及びサポウイルス(SaV)の抗体陽性率に関する報告。2005年5月から2010年10月にかけて、中国湖南省でブタの血清検体500例中のPCMV及びSaVに対する抗体をELISAにより評価した。対象のブタは省内の10の地域に分布する農場から集められた。その結果、全陽性率はPCMVについて96.40%、SaVについて63.40%であり、繁殖期の雌ブタで陽性率が最も高かった。調査結果はPCMV及びSaV感染の両方が湖南省のブタで広く流行していることを示している。	20

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120121	18-Nov-12	ウイルス感染	Hepatol Res. 41(2011)971-981	高いALTレベルの献血者から分離された新規DNA配列に関する報告。ALT値が上昇した500例の献血者の血清検体についてPCRによりスクリーニングされ、得られた配列のウイルス特性について調査された。その結果、4例の血液サンプルに9496 bpの新しいDNA配列が含有されていることが判明し、これをKIs-Vと命名した。KIs-Vは制限酵素SalI及びBstXIに反応した。KIs-Vはヒト白血球DNAから検出されなかった。連続濾過により、KIs-Vは30-50nmの粒子であることが示唆された。in silico分析より、KIs-Vは13のORFを含むことが分かり、既報告のいかなるウイルスタンパク質とも相同性を示さなかった。1つの遺伝子は、DNAポリメラーゼ領域に類似性を示した。転写開始及びCpGアイランドの強いシグナルが確認された。KIs-Vのヌクレオチド構成は複製開始点と終点を含む環状DNAゲノムの特徴を示した。予備研究において、KIs-Vは高いALT値を示すE型肝炎ウイルス抗体陽性者において度々検出された。これらの結果より、KIs-Vはエンベロープを有する新しい分類の二本鎖環状DNAゲノムであることが示された。	21
120128	31-Oct-12	ウイルス感染	Euro Surveill. 2012;17(21):pii=19935	ドイツにおける初めてのウスツウイルス感染の報告。2012年8月、Bernhard Nocht熱帯医学研究所(BNI)はドイツにおいて初めてのウスツウイルス感染者が検出されたことを発表した。4200例の血液検体に対して検査を行った結果、1例の陽性が検出された。感染が確認された男性に感染症状はなかった。2011年夏期に、南ドイツでウスツウイルス感染により多数のクロウタドリが死亡し、2012年においても既に多数の鳥の死亡が報告されていた。	22
120128	01-Nov-12	ウイルス感染	ProMED-mail 20120821.1255556	ドイツにおける初めてのウスツウイルス感染の報告。2012年8月、Bernhard Nocht熱帯医学研究所(BNI)はドイツにおいて初めてのウスツウイルス感染者が検出されたことを発表した。4200例の血液検体に対して検査を行った結果、1例の陽性が検出された。感染が確認された男性に感染症状はなかった。2011年夏期に、南ドイツでウスツウイルス感染により多数のクロウタドリが死亡し、2012年においても既に多数の鳥の死亡が報告されていた。	23
120142	02-Nov-12	ウイルス感染	WHO/GAR/Disease Outbreak News. Sep 23, 2012	サウジアラビアにおける新規コロナウイルス感染者の報告。49歳のカタール国籍の男性がサウジアラビアへの旅行から帰国後、急性の呼吸器症候群を発症した。患者は2012年9月にカタールのICUへ入院した後に英国へ緊急搬送され、英国健康保護局(HPA)での検査により新規のコロナウイルスへの感染が判明した。遺伝子配列の解析の結果、2012年始めに死亡した60歳のサウジアラビア人の肺組織から得られたウイルスと99.5%の相同性が示された。WHOは更なる情報収集を行っている。	24
120121	16-Nov-12	細菌感染	Vox Sang. 103(2012)93-98	皮膚疾患患者と対照群での皮膚細菌の比較に関する報告。供血を延期された皮膚疾患の供血者55例について、各症例に3例のコントロールを対応させ、静脈穿刺前腕部の皮膚から細菌培養サンプルを採取して検査を行った。その結果、コロニーを形成した皮膚細菌の全数の中央値は、コントロール群(105 CFUs/例)に比べ症例群(224 CFUs/例)で有意に高かった。黄色ブドウ球菌は、コントロール群(7%)と比較して症例群(49%)で有意により多く存在した。他の細菌属に関しては症例群とコントロール群の間に違いは見られなかった。この研究は、皮膚疾患を有する供血者の現行供血延期ガイドラインが、皮膚に細菌を多く有する者や黄色ブドウ球菌保有者を効果的に識別することを示している。	25
120128	30-Oct-12	細菌感染	Euro Surveill. 2012;17(21):pii=20186	英国における、ヒトからヒトへの感染が疑われたオウム病症例の報告。2012年2月、テイサイド州において肺炎患者5例が報告された。患者は親族の4例と医療従事者1例であり、この医療従事者は最初に症状が認められた患者の世話をしていた。患者検体より、Chlamydophila psittaciがPCR法により確認された。感染源の推定は不可能であったが、症例発現の時間範囲が1～22日間であったことから、ヒトからヒトへの感染が示唆された。オウム病は一般的に動物(主に鳥類)からヒトへの感染症と考えられていたが、ヒト間で感染する可能性があることが報告された。	26

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120121	17-Nov-12	赤痢	Jpn J Infect Dis. 65(2012)277-278	東京における男性と性交渉のある男性(MSM)間での赤痢アウトブレイクの報告。2011年9月から11月に5例の細菌性赤痢患者が東大医科学研究所に入院した。患者は全てHIVに感染したMSMであり、CD4 T細胞数は168－415 cell/μLで、3例は既にART治療を受けていた。患者は腹痛、水様下痢、発熱などを呈した。全員の糞便培養からShigella sonneiが検出され、レボフロキサシンによる治療を受けた。患者の平均発症期間は10日と、通常(2-3日)より少し長かった。問診では5例の患者間における直接性的接触のような密接な関係は認められなかった。全患者の分離株の分析の結果、類似のパターンを示すことが明らかとなり、単一のS.sonnei株がMSM間に広まったことが示唆された。日本でのMSMにおける初めての赤痢菌アウトブレイクの報告は、MSMに対して赤痢菌を含む性感染性病原体に対する予防行為の重要性をより強調するものとなる。	27
120095	01-Oct-12	マラリア	http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/Blood/ucm077061.htm	輸血関連マラリア感染のリスク低減のための輸血管理に関するガイドラインのドラフトが発表された。主に以下の供血延期措置をとるよう勧告されている。 ・マラリア感染既往がある者は、治療成功証明書がない限り無期限の供血延期とする。 ・マラリア流行国での居住後3年間は供血延期とする。 ・マラリア流行地域への渡航歴及び通過歴のある者は出国後1年間の供血延期とする。ただし、メキシコの中でもマラリア感染率が低い特定の州に対する渡航は供血延期に該当しない。	28
120121	07-Nov-12	バベシア症	Transfusion. 52(2012)1509-0516	米国におけるBabesia microti(B.microti)抗体陽性供血者の遡及調査に関する報告。コネチカット州において、1999年から2005年の間に、B.microti検査が陽性であり遡及調査対象となった474供血、656製剤から、合計208例の抗体陽性供血者が同定された。63例の受血者がB.microti検査を受け、8例(12.7%)が免疫蛍光アッセイ(IFA)やPCRで陽性であった。抗体陽性供血者の供血延期実施後の2001年(3/48人、6.3%)に比べて、1999年から2000年(5/15人、33.3%)においてB.microti陽性受血者の割合が有意に高いことが判明した。有意差は、IFA陽性となった供血と前回供血及び寄生虫血症供血者と非寄生虫血症供血者からの製剤受血者の陽性率を比較した時にも見られた。遡及調査を通してB.microti感染が検出されたこの報告は、米国の血液受血者におけるB.microti感染を減少させるための介入が必要であることを示している。	29
120121	08-Nov-12	バベシア症	Emerging Infectious Diseases. 18(2012)1318-1321	米国におけるバベシア症の垂直感染に関する報告。2002年9月16日、生後6週目の女児が発熱、不穏、食欲不振から入院した。母親は妊娠中、出産後とも無症候であり、妊娠中にダニに咬まれた覚えはなかった。乳児のダニ曝露は確認されておらず、母子ともに輸血歴はなかった。児の末梢血スメアは赤血球の4%にB.microtiを示し、血液検体はB.microti DNA陽性であった。また、総B.microti抗体価は256倍以上であった。生後3日目に採取した血液が検査されたところ、B.microti DNAは陰性であり、IgM抗体陰性であるが、総抗体は陽性(128倍以上)であることが分かった。パラフィン包埋胎盤組織の検査によりBabesia DNAが検出された。児の罹患時、母親はPCRとスメアではBabesia陰性であったが、総抗体価は陽性であった(256倍以上)ことが判明した。以上より本症例は、母親の分娩前感染症が原因の先天性バベシア症であると診断された。患児の生後3日目の血液サンプルの分析で検出されたBabesia抗体は、恐らく母親のIgG抗体が移行したことを意味する。バベシア症の流行地域における乳児の発熱及び溶血性貧血の鑑別診断において、この診断は考慮されなくてはならない。	30

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120121	02-Nov-12	アメリカ・トリパノソーマ症	Transfusion; published online. Mar 8, 2012	米国の供血者におけるシャーガス病原因原虫の昆虫媒介性感染に関する報告。米国内の昆虫媒介性感染負荷を評価し、推定されるリスク要因を明らかにするため、約2900万供血のスクリーニングから確認された1084例のTrypanosoma cruzi(T.cruzi)陽性者のうち調査参加資格を満たす供血者37例について調査が行われた。15例(41%)が血清学検査結果が4回もしくは5回陽性であり、T.cruzi感染陽性とみなされ、うち1例は血液培養検査陽性だった。15例中3例が流行国の農村地域を訪れたことがあったが、2週間以上滞在した者はいなかった。全例がT.cruzi媒介昆虫や感染したほ乳類の生息地に居住した経験があり、13例が野外でレジャーや仕事をしたと報告し、11例が私有地で宿主動物を見たと報告した。この研究に基づく土着性感染の推定割合は供血者354,000人につき1人である。米国での昆虫媒介性感染の発生源を特定することが、感染リスクのさらなる評価のために必要である。	31
120121	03-Nov-12	アメリカ・トリパノソーマ症	32nd International congress of the ISBT. 5D-S43-03	米国の供血者におけるTrypanosoma cruzi(T. cruzi)新規感染発生の検証に関する報告。米国において、供血者の新規T.cruzi感染はないという予備データに基づき、一度T.cruzi抗体検査が陰性であれば、将来の全ての供血を適格とする選択的抗体検査について検証された。現在、T.cruziがハイリスクである4つの地域で全数検査が維持される一方で、残りは選択的検査が実施されている。4年間の研究において、422万人の複数回供血者が1.435年の平均供血間隔で追跡されたところ、抗体が陽転した供血者はいなかった。調査期間中、前回の供血がELISAで陰性であったRIPA陽性供血者が22例確認されたが、さらなるサンプリングにおける抗体陽性は断続的で、40日以上4年間の追跡調査中に完全に抗体陽転化することはなかった。また、PCRや培養により寄生虫血症となった供血者はいなかった。よってこれら22例は偽陽性または遠い過去での初感染であったと思われる。今回の調査結果より、観察された新規感染率がゼロであることに基づき、米国において初回陰性結果に基づく選択的検査は、全数検査に匹敵する安全性を提供していると示された。	32
120095	30-Sep-12	クロイツフェルト・ヤコブ病	Transfusion. 52(2012)1290-1295	フランスの供血者における無症候の弧発性クロイルフェルト・ヤコブ病(sCJD)患者に関する疫学的研究の報告。フランスにおける1999～2008年のデータを用いて、一般でのsCJD症例及び献血者集団の人口統計学的特性から、臨床症状を呈する前のsCJD供血者の年間推定患者数が推定された。その結果、供血時から1年以内にsCJDを発症するドナーは毎年平均1.1例であり、5年以内が6.9例、10年以内が18.0例、そして15年以内の発症が33.4例であると推定された。供血時にほとんどのsCJD感染者が後期前臨床段階でないことが予想された。今回の結果及び長年に渡ってsCJDの増加が世界的に確認されていないことは、輸血によるsCJD感染のリスクが非常に低いことを示している。	33
120090	25-Sep-12	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Emerging Infectious Diseases. 18(2012)901-907	医原性クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)の最終評価に関する報告。医原性CJDの発現はほぼ収束を迎えたが、例外的に長い潜伏期間を伴う発現症例が現在もみられている。主因はCJD感染死体に由来する成長ホルモンや硬膜移植片であり、他には少数例として脳神経外科器具の汚染、角膜移植片、性腺刺激ホルモンを介したものや、輸血による変異型CJDの二次感染が挙げられる。医原性感染を防止する最良の方法は一次感染の防止であるが、無症状の感染者を特定する検査がない限り、リスクを完全に除くことはできない。従って、現段階では、①CJD発症リスクが高い人間の識別及び臓器提供の延期、②医療器具の殺菌時や組織及び体液の処理へのプリオン低減工程の組み込み、という方法をとらざるを得ず、この組み合わせがリスクを最小化することに繋がっている。	34

血対課ID	受理日	感染症(PT)	出典	概要	新出文献番号
120094	08-Oct-12	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Prion 2012. PO-251	赤血球輸血経由vCJD感染のリスク評価モデルバリデーションに関する報告。英国とフランスにおける輸血感染vCJD(TTvCJD)のリスク推定モデルが開発された。入力値として両国の潜在的vCJD有病率、供血者数と赤血球輸血数、疾病の感染性、受血者の感受性等が使用された。英国の有病率は疫学的モデリング研究から算出された低い推定値と、組織サーベイランス研究による高い推定値に層別化され、フランスの有病率は英国のデータを元にそれぞれ算出された。モデルの評価のため、1980年以降の症例数予測を観察症例数と比較したところ、TTvCJDリスク推定はモデルに使用された推定有病率に大きく依存していたが、低い推定有病率を用いたモデルは臨床TTvCJD報告数とほぼ一致していた。また、高い推定値を用いると、推定無症候性感染数は推定臨床症例数の10倍以上多いと予測された。これは感染した受血者の約90%が明確なvCJD兆候を示す前に他の要因で亡くなった可能性を示している。将来、このモデルは米国におけるTTvCJDリスク及び現在の安全性介入の有効性の推定に適用されることが予測される。	35
120095	29-Sep-12	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	http://www.fda.gov/downloads/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/Blood/UCM307137.pdf	米国FDAによる、血液製剤を介した変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の伝播リスク減少のための措置に関するガイダンス案。動物実験およびFDAのリスク・アセスメントの結果、血漿分画製剤によりvCJDを発症する可能性は極めて低いが、完全には排除できないと結論付けられた。これを受け、血漿分画製剤の添付文書において新たにvCJDに言及し、その感染リスクを明記するよう勧告する。同様に、血漿由来のアルブミン及び血漿由来アルブミンを使用した製品についても、改訂を勧告する。本ドラフトが最終版となる際には、2010年のCJD/vCJDガイダンスのセクションVII.Bに置き換わるものである。	36
120135	31-Oct-12	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Health Protection Report. 6(2012)4-5	英国における異常プリオンの保有率に関する報告。英国海綿状脳症諮問委員会が、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病の有病率を調査するため、2000年～2012年に英国の41病院から収集された虫垂検体32441例を免疫組織化学的に検査したところ、異常プリオンが16例において検出された。これらの陽性検体は既知の英国vCJD症例176例のものではなかった。全体の有病率の推定値は百万分の493(95%信頼区間:282～801)で、1995年～1999年に実施された前回調査結果の百万分の237(95%信頼区間:49～692)と統計的に一致していた。今回の調査では、前回よりも広い出生集団においてプリオンが存在していることが示された。	37

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 4. 21	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Vermeulen M, Dickens C, Lelie N, Walker E, Coleman C, Keyter M, Reddy R, Crookes R, Kramvis A. Transfusion. 2012 Apr;52(4):880-92. doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03355.x. Epub 2011 Oct 7.	公表国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			南アフリカ

研究報告の概要

○南アフリカでの4年間の個別核酸増幅検査(ID-NAT)済み血液輸血によるB型肝炎感染

背景: 2005年以来、2,921,561の供血血液が、南アフリカ国立血液サービスの実施するB型肝炎ウイルス(HBV)ID-NATスクリーニングを受けた。4年間で149件のHBs抗原陰性の急性期HBV NAT陽性供血が同定された(1:19,608)。遡及調査によって1件のHBV感染疑い症例が同定された。

研究方法: 供血者及び受血者から分離したHBVのゲノム配列決定、増幅、系統発生解析を行った。HBVウィンドウピリオド(WP)感染リスクは、最小感染ウイルス量を3.7 HBVビリオン、HBV DNAが一時的に検出可能な感染発生率補正係数を1.34と想定して推算された。

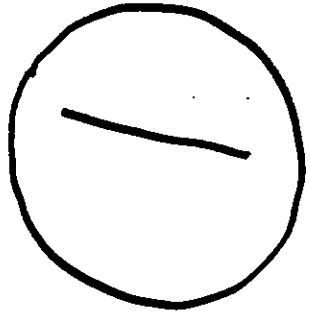
結果: 149件の急性期HBV NAT陽性結果のうち、114件(1:25,627)は抗HBc抗体が検出される前のWPで、35件(1:83,473)は抗HBc抗体WP後であると分類された。HBV DNA陰性 抗HBc抗体WP前、後(それぞれ15.3日、1.3日)における急性感染リスクはそれぞれ1:40,000と1:480,000であると推算された。1件のHBV感染(1:2,900,000)は抗HBc抗体検出前のWPにおけるID-NAT陰性の輸血を受けた患者に認められた。配列解析によって供血者と受血者間で99.7%の核酸相同性を持つHBVサブジェノタイプA1の感染であることが確認された。感染性赤血球製剤のウイルス量は、20 mLの血漿中に32(22-43)HBV DNAコピーであったと推定された。

結論: ID-NATを使用した血液スクリーニングをすり抜けた血液による、南アフリカにおける初めての輸血関連HBV感染症例であり、0.34/100万供血のHBV感染率である。ID-NATスクリーニングを受けた供血者人口における急性期前の感染リスクの推算値は、観察されたWP感染率より73倍高かった。南アフリカにおける血液供給の安全性はID-NATの導入によって非常に強化されたが、感染リスクが完全に排除されたわけではないことを今回の研究結果は証明している。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等



報告企業の意見	今後の対応
南アフリカで行われた4年間にわたる供血血液へのHBV ID-NATスクリーニングにおいて、2,921,561供血から149件のHBs抗原陰性の急性期NAT陽性供血が同定され、遡及調査によって1件のID-NAT陰性の輸血関連感染疑い症例が確認されたとの報告である。 これまで、本剤によるHBV感染の報告はない。また本剤の製造工程には、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿ったウイルス・プロセスバリデーションによって検証された2つの異なるウイルス除去・不活化工程が含まれている。さらに最終製品についてHBV-NAT陰性であることを確認しており、安全性は確保されていると考える。	これまでの使用実績やバリデーション成績に鑑み、特別の対応を必要としないが、HBV感染に関する新たな知見等について今後も情報の収集に努める。

Hepatitis B virus transmission by blood transfusion during 4 years of individual-donation nucleic acid testing in South Africa: estimated and observed window period risk

Marion Vermeulen, Caroline Dickens*, Nico Lelie, Evangelia Walker, Charl Coleman, Mark Keyter, Ravi Reddy, Robert Crookes, and Anna Kramvis*

BACKGROUND: Since October 2005, a total of 2,921,561 blood donations have been screened by the South African National Blood Service for hepatitis B virus (HBV) by individual-donation nucleic acid testing (ID-NAT). Over 4 years, 149 hepatitis B surface antigen–negative acute-phase HBV NAT–positive donations were identified (1:19,608). The lookback program identified one probable HBV transmission.

STUDY DESIGN AND METHODS: The complete genomes of HBV isolated from the donor and recipient were sequenced, cloned, and analyzed phylogenetically. The HBV window period (WP) transmission risk was estimated assuming a minimum infectious dose of 3.7 HBV virions and an incidence rate correction factor of 1.34 for transient detectability of HBV DNA.

RESULTS: Of 149 acute-phase HBV NAT yields, 114 (1:25,627) were classified as pre–antibody to hepatitis B core antigen (anti-HBc) WP and 35 (1:83,473) as post–anti-HBc WP. The acute-phase transmission risk in the HBV DNA–negative pre- and post–anti-HBc WPs (of 15.3 and 1.3 days, respectively) was estimated at 1:40,000 and 1:480,000, respectively. One HBV transmission (1:2,900,000) was identified in a patient who received a transfusion from an ID-NAT–nonreactive donor in the pre–anti-HBc WP. Sequence analysis confirmed transmission of HBV Subgenotype A1 with 99.7% nucleotide homology between donor and recipient strains. The viral burden in the infectious red blood cell unit was estimated at 32 (22-43) HBV DNA copies/20 mL of plasma.

CONCLUSION: We report the first known case of transfusion-transmitted HBV infection by blood screened using ID-NAT giving an observed HBV transmission rate of 0.34 per million. The estimated pre–acute-phase transmission risk in the ID-NAT screened donor population was 73-fold higher than the observed WP transmission rate.

In October 2005, the South African National Blood Service (SANBS) implemented individual-donation nucleic acid testing (ID-NAT) to screen all blood donations for human immunodeficiency virus (HIV), hepatitis C virus (HCV), and hepatitis B virus (HBV).[1] Although the development of systems to screen blood donations using NAT has significantly reduced the residual risk of transfusion-transmissible infections (TTIs),[1-5] it has not eliminated it completely.[4,6-12] Factors that contribute to the transmissibility of infections by blood transfusion during the window period (WP) include the level of viremia, the sensitivity of the screening assay, and the minimal infectious dose.[13,14] The length of the WP is determined by the doubling time of viremia and the analytical sensitivity of the testing system used for screening.[13,15,16] ID-NAT is generally more sensitive and detects

ABBREVIATIONS: ID = individual donation; ID_{50} = 50% minimum infectious dose; LOD = limit of detection; MP = mini-pool; OBI = occult hepatitis B infection; SANBS = South African National Blood Service; TTI(s) = transfusion-transmissible infection(s); WP(s) = window period(s).

From the Donation Testing Department, South African National Blood Service (SANBS), Roodepoort, South Africa; the Hepatitis Virus Diversity Research Programme, Department of Internal Medicine, Faculty of Health Sciences, University of the Witwatersrand, Johannesburg, South Africa; and Lelie Research, Paris, France.

Address correspondence to: Marion Vermeulen, SANBS, 1 Constantia Boulevard, Constantia Kloof, Roodepoort, South Africa; e-mail: marion.vermeulen@sanbs.org.za.

*These authors contributed equally to the study.

The sequence analysis in this study has been supported by a grant received from the National Research Foundation (NRF), South Africa (GUN 65530).

Received for publication April 4, 2011; revision received August 2, 2011, and accepted August 2, 2011.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03355.x

TRANSFUSION 2012;52:880-892.

lower levels of nucleic acid compared to minipool (MP) NAT, although for HBV, three head-to-head comparison studies showed no significant difference in analytical and clinical sensitivity between the Ultrio assay (Novartis Diagnostics, Emeryville, CA) in ID-NAT format and the TaqScreen assay (Roche Molecular Systems, Pleasanton, CA) utilized in MP6 configuration.[17-19]

A review of the literature revealed that to date there has been no documented case of transfusion-transmitted HBV where these latter systems have been used to screen donated blood. However, there have been a number of cases of HBV transmission that have been reported in blood screened by NAT using larger pool sizes.[7,20-22] Interestingly, when some of these donations were tested by ID-NAT they were also not reactive, but the diagnostic polymerase chain reaction (PCR) methods used in these cases might have been less sensitive than the current triplex NAT blood screening assays.

The benefit of implementing a more sensitive ID-NAT system (as opposed to an MP system) is expected to be greater in regions of high HBV incidence and prevalence, where the rate of donations in the WP and in cases of occult hepatitis B infection (OBI) is high.[23]

Before the implementation of hepatitis B vaccination in the immunization program of infants in 1995, it was reported that more than 70% of the South African population had been exposed to HBV, with an estimated 10% being hepatitis B surface antigen (HBsAg) carriers.[24] Interestingly, when the background prevalence of HBV was examined in an adult population 5 years after introduction of infant immunization, the HBsAg- and anti-HBc–positive rate was reported to be lower (3.3 and 36.7%, respectively), which indicated that beneficial factors other than HBV vaccination play a role in reducing HBV transmission in a community.[24] The HBsAg and anti-HBc prevalences in a South African blood donor population were reported to be 0.54 and 6.0%,[1,25] six times lower than in the general population.[24] Even though the potential transmission of HBV infection by blood transfusion in South Africa has been significantly reduced by ID-NAT, the residual risk of HBV transmission by donations in the window phase remains relatively high.[1] SANBS operates a comprehensive lookback program to identify possible cases of transfusion-transmitted HIV, HCV, and HBV infections. Donor-triggered lookback investigations are undertaken on all HBV DNA– and/or HBsAg-positive donations, including OBI, for donations procured within 1 year of the positive (index) donation. SANBS does not routinely screen for anti-HBc; however, should recent seroconversion to anti-HBc be identified, a lookback investigation will be conducted. Recipient triggered lookback investigations are carried out whenever there is a reported case of a possible transfusion-transmitted infection.

In this study, we report the first case of transmission of HBV by a blood donation in the HBV DNA–negative WP, which occurred during the fourth year of ID-NAT screening and which was confirmed by comprehensive nucleic acid sequencing and phylogenetic analyses. Moreover, we compare the observed HBV WP transmission rate with the estimated transmission risk caused by donors with acute HBV infection undetectable by ID-NAT.

MATERIALS AND METHODS

Screening and confirmation of HBV infection

All blood donations in South Africa are donated by voluntary, nonremunerated donors and are routinely screened for HIV, HBV, and HCV by both serologic testing and ID-NAT. Screening for HBsAg was performed on a chemiluminescent immunoassay system (Abbott PRISM ChLIA system, Abbott, Delkenheim, Germany) and, for HBV DNA, on a multiplex NAT assay system (Procleix Ultrio multiplex system on TIGRIS, Novartis Diagnostics). Serology and ID-NATs were performed concurrently using two donor samples, a citrated plasma sample for HBsAg and an ethylenediaminetetraacetic acid gel-separated plasma sample for NAT. Initial reactive donations in the Ultrio assay are tested in duplicate on the primary test tube as well as in the discriminatory probe assays. Donors that are concordantly repeat reactive in Ultrio or dHBV assays and the HBsAg assay are considered HBV infected. HBsAg-negative donations that are Ultrio repeat reactive or reactive in the dHBV assay are tested for viral load by quantitative PCR (on the Cobas TaqMan, Roche Molecular Diagnostics, Pleasanton, CA) assay as well as by triplicate or fivefold Ultrio and dHBV assays on samples taken from the frozen plasma unit. These potential HBV NAT–yield samples are also tested for immunoglobulin (Ig)M anti-HBc, total anti-HBc, and anti-HBs titer (Elecsys, Roche Molecular Systems, Pleasanton, CA).

Potential HBV NAT–yield donors, as well as HBsAg neutralization–positive donors with Ultrio-nonreactive or nonrepeatable reactive results, are recalled to confirm HBV infection markers in a follow-up sample. On the basis of the pattern of results in index and follow-up samples, HBV NAT–yield infections in first-time, lapsed, and repeat donors are categorized into acute and chronic NAT-yield cases. The first group is further classified as pre-HBsAg or pre–anti-HBc WP if all serum markers in the index donation are nonreactive or as post HBsAg or post–anti-HBc WP (or early recovery phase) when IgM anti-HBc is positive (Elecsys, Roche Molecular Systems). If two sequential samples were HBV DNA reactive followed by seroconversion to anti-HBc (and anti-HBs) in a later follow-up sample, we classified the infection as primary OBI (Fig. 1). In some of these cases, it is unlikely that HBsAg would have been detectable at some point in time because of the length of the sampling intervals. A second subcategory of WP infections could be classified as either abortive HBV infection or, more likely, vaccine breakthrough infections,

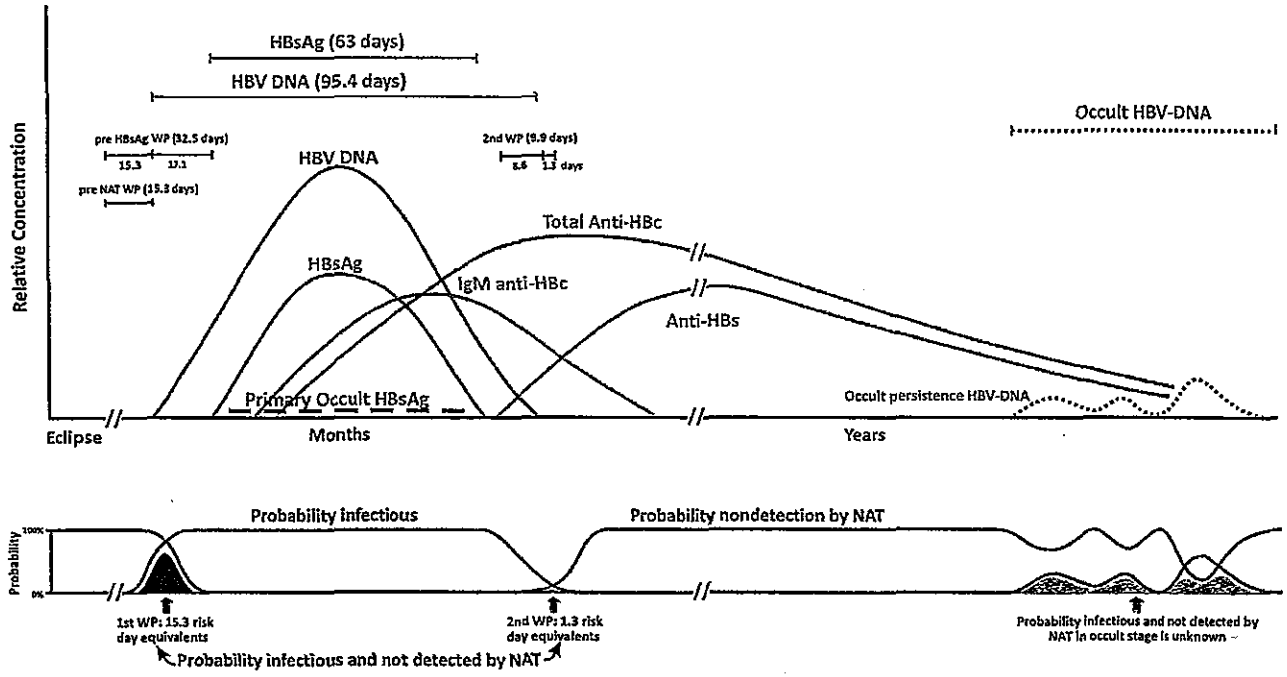


Fig. 1. Course of serum markers in acute resolving hepatitis B infection. The curves in the upper part of the diagram show the relative concentration of the markers in a typical infection. The lines above the curves show the mean lengths of the detection periods of HBV DNA and HBsAg as estimated from the numbers of HBV NAT yields with and without detectable HBsAg. The lengths of the pre- and post-HBsAg WPs and pre- and post-NAT (Ultrio) WPs were calculated for RBCs (20 mL of plasma) from the 50% LODs of 9.5 and 1000 copies/mL for HBV DNA and HBsAg by the transmission risk model of Weusten and coworkers,[16] assuming a 50% minimum infectious dose of 3.7 copies in the ramp-up viremia phase and 370 copies in the declining viremia phase. The resulting probability curves that RBCs are infectious and the probability of nondetection by Ultrio based on 95 and 50% LODs of 98.5 and 9.5 copies/mL determined by comparison against the Eurohep standard are shown at the bottom part of the diagram. The shaded area shows the probability that RBCs are infectious but not detected by NAT and give the number of risk-day equivalents in the first and second WPs, which were estimated to be 15.3 and 1.3 days, respectively, for Ultrio and 12.6 and 0.74 days, respectively, when the more sensitive Ultrio Plus assay with 95 and 50% LODs of 46.9 and 4.5 copies/mL would be used. In a later stage of OBI when anti-HBs titers have declined to below 10 to 100 mIU/mL occult persisting HBV DNA in the liver can reappear in plasma and the blood can become potentially infectious again. The probability that blood from occult HBV carriers is infectious but not detected by NAT is unknown and not addressed in this article.

when HBV DNA was detectable in the presence of anti-HBs as the sole detectable serum marker, followed by an increase in anti-HBs titer and delayed anti-HBc seroconversion. If, however, no follow-up sample was available or no increase in anti-HBs titer was observed, it cannot be excluded that the donor was a chronic occult HBV carrier with anti-HBs as the sole detectable marker. Since there were only a few of these, we classified them as acute NAT yields.

Analyses of the HBV transmission case

A 47-year-old regular male blood donor tested positive for HBsAg and HBV DNA on his 53rd whole blood donation in January 2009. The donor had given a whole blood donation 60 days before the positive index donation (X) and this donation had tested negative for all markers of TTI. The previous whole blood donation (X – 1) had been processed into a red blood cell unit (RBC), a random-donor platelet (PLT) unit, and a fresh-frozen plasma (FFP) unit.

Once it was confirmed that the X donation was positive for HBsAg and HBV-DNA, a donor- triggered lookback investigation was initiated. This investigation established that the RBC unit and PLT unit of the X-1 donation had been transfused and that the fresh frozen plasma (FFP) unit had been forwarded to the South African National BioProducts Institute (Pinetown SA), a plasma fractionation facility.

To confirm transmission of HBV by the X-1 donation, follow-up blood samples were taken from the recipient and from the donor at 110 days and 120 days post-transfusion, respectively. The follow-up samples were

sequenced and genotyped (see below) and tested for HBsAg, anti-HBc (IgM), anti-HBc (total), and anti-HBs titer. Liver function tests—alanine transaminase (ALT), aspartate transaminase (AST), alkaline phosphatase (ALP), gamma-glutamyl transferase (GGT), lactate dehydrogenase (LDH) and total bilirubin—were also performed on donor and recipient samples.

Written informed consent to perform additional laboratory tests, including tests to characterize the virus, was obtained from both the donor and the recipient. Approval to molecularly characterize the HBV isolates was obtained from the Human Ethics Committee of the University of the Witwatersrand.

Viral load estimation

The FFP unit from the X – 1 donation was recovered from the National Blood Fractionation Centre and aliquoted into 3.5 mL samples and frozen at –80°C. Probit analysis can be used to estimate the HBV concentration and the number of viral particles in the units transfused, which are below the detection limit of the Ultrio assay. This was undertaken by testing the donor's FFP unit in 30 replicate tests on the Ultrio and the new generation Ultrio Plus assay and comparing the proportions of positive results with those found on the Eurohep HBV DNA Subgenotype A2 standard dilutions calibrated in copies/mL,[26] comparable to the copies/mL quantified by the Versant bDNA 3.0 viral load assay (Siemens, Tarrytown, NY).[16] The Eurohep standard has subsequently been used for preparation of batches of the WHO standard and it has been estimated that one IU of the lyophilized material in the international standard is equivalent to approximately 5 HBV DNA copies or virions.[26,27] An aliquot of plasma from the FFP unit was also provided to Gen-Probe for testing 30 replicates on the Procleix Ultrio Plus assay. Another aliquot was sent to the Paul Ehrlich Institute for testing 12 replicates in the Ultrio and TaqScreen assays (Roche Molecular Systems) in ID format.

HBV amplification

For both the donor and the recipient, total DNA was extracted from the plasma samples using a DNA mini kit (QIAamp, QIAGEN GmbH, Hilden, Germany), according to the manufacturer's instructions. The surface and basic core promoter regions of both the donor and the recipient HBV isolates were amplified directly from DNA extracted from serum. A nested PCR procedure was carried out to amplify the complete S open reading frame: primers S1F 5′-TCAATCGCCGCGTCGCAGAAGAT CTCAATC-3′ (2410-2439 from *Eco*RI site) and S1R 5′-TCCAGACCXGCTGCGAGCAAAACA-3′ (1314-1291 from *Eco*RI site) were used for the first round (denaturation 94°C for 60 sec, annealing 66°C for 3 min, extension 72°C for 3 min, 40 cycles) and S2F 5′-AATGTTAGTATTCCTT GGACTCATAAGGTGGG-3′ (2451-2482 from *Eco*RI site) and S2R 5′-AGTTCCGCAGTATGGATCGGCAGAGGA-3′ (1280-1254 from *Eco*RI site) for the second round (denaturation 94°C for 60 sec, annealing 68°C for 3 min, extension 72°C for 3 min, 40 cycles).

The basic core promoter/precore region was amplified using a slight modification of a previously published nested PCR:[28] primers BCP1F 5′-GCATGGAGAC CACCGTGAAC-3′ (1606-1625 from *Eco*RI site) and BCP1R 5′-GGAAAGAAGTCCGAGGGCAA-3′ (1974-1955 from *Eco*RI site) were used for the first round (denaturation 94°C for 60 sec, annealing 55°C for 1 min, extension 72°C for 2 min, 40 cycles) and BCP2F 5′-CATAAGAGGA CTCTTGGACT-3′ (1653-1672 from *Eco*RI site) and BCP2R 5′-GGCAAAAAACAGAGTAACTC-3′ (1959-1940 from *Eco*RI site) for the second round, with the identical cycling conditions as the first-round PCR.

The complete HBV genome was amplified using a single amplification,[29] with modified primers P1 5′-CTTTT TCACCTCTGCCTAATCA-3′ (1820-1841 from *Eco*RI site) and P2RM 5′-AAAAAGTTGCATGRTGMTGG-3′ (1825-1806 from *Eco*RI site).

Cloning

The complete genome amplicons were gel purified using a gel DNA recovery kit (Zymoclean, Zymo Research, Irvine, CA) and cloned individually into a cDNA vector (pSMART, Lucigen, Middleton, WI) according to the protocol provided by the manufacturer and the clones sequenced directly.[30]

Sequencing

The amplicons and clones were prepared for direct sequencing using a cycle sequencing ready reaction kit (BigDye Terminator v3.1, Applied Biosystems) and sequenced on a genetic analyzer with 16 capillaries (ABI3130xl, Applied Biosystems). In addition to the primers used for amplification, vector-specific primers as well as HBV-specific primers (1959F 5′-CTTCTGACTT CTTTCCTTC-3′ [1959-1977 from *Eco*RI site]; 2837R 5′-CCAAGAATATGGTGACC-3′ [2837-2821 from *Eco*RI site]; 2454F 5′-GTTAGTATTCCTTGGACT-3′ [2454-2471 from *Eco*RI site]; 185R 5′-GTCCTAGGAATCCTGATG-3′ [185-168 from *Eco*RI site]; 60F 5′-CTGGTGGCTCC AGTTC-3′ [60-75 from *Eco*RI site]; 734R 5′-CTGAAAG CCAAACAGT-3′ [734-719 from *Eco*RI site]; 595F 5′-CACCTGTATTCCCATC-3′ [595-610 from *Eco*RI site]; 1431R 5′-GACGTAAACAAAGGACG-3′ [1431-1415 from *Eco*RI site]; 1258F 5′-CTGCCGATCCATACTG-3′ [1258-1273 from *Eco*RI site]; and 1769R 5′-CAATTTATGCCTACAGCCTC-3′ [1769-1777 from *Eco*RI site]) were used for sequencing. All sequences were analyzed in both the forward and the reverse directions. The accession numbers of HBV isolates sequenced in this study have been deposited in GenBank/EMBL/DDBJ: JN182318-JN182334.

Phylogenetic analyses

Complete and subgenomic HBV sequences were compared with corresponding sequences belonging to the eight genotypes of HBV (A-H) from GenBank. Multiple sequence alignments and nucleotide divergence calculations were carried out using Dambe.[31] The alignments were edited manually in GeneDoc[32] and fed into PHYLIP (Phylogeny inference package) version 3.69.[33] DNAML (maximum likelihood) alone and DNADIST consecutively with NEIGHBOR (neighbor-joining) were used to generate dendograms. SEQBOOT, DNADIST, and NEIGBOR were used for bootstrapping of 1000 data sets. CONSENSE was used to compute a consensus tree. Trees were visualized using TreeView Win 32 Version 1.6.6.[34]

WP transmission risk analysis

We used the recently refined transmission risk model of Weusten and colleagues[16] to estimate the HBV residual transmission risk posed by RBC transfusions from repeat donors. Using a preformatted calculation spreadsheet the relevant variables were entered, that is, the MP size, the amount of plasma in a RBC unit (estimated at 20 mL), the total number of repeat donations over 4 years of testing, the number of acute HBV infections or HBV DNA and/or HBsAg seroconversions in the repeat donors, the mean preseroconversion interdonation interval, the mean viral doubling time of 2.56 days for the ramp-up phase, and the mean half-life of HBV (1.6 days) in the recovery phase.[35] For the Ultrio assay the recently established 95% and 50% detection limits on the Eurohep genotype A2 standard in a SANBS validation study were used for the calculations (98.5 and 9.5 copies/mL, respectively). The 50% minimum infectious dose (ID_{50}) estimated in the pre–ID-NAT WP was estimated at 3.7[15] but in the second HBV DNA–negative WP the ID_{50} was estimated to be approximately 100-fold higher (and set at 370 copies) as could be deduced from infectivity studies in human liver chimera mice.[36]

The formula below describes the WP transmission risk for HBV in repeat donors:

$$\text{risk} = \frac{r_{\text{days}}}{t_{\text{between}}} \frac{D_{\text{conv}}}{D_{\text{total}}} \times \text{incidence rate adjustment factor},$$

where the total number of risk-day equivalents in the acute phase is the sum of that in the first and second WP, t_{between} is the mean preseroconversion interdonation interval in repeat donors with interdonation intervals less than 12 months, D_{conv} is the number of seroconverting repeat donors, and D_{total} is the total amount of repeat donations. Because of the transient detectability of HBsAg and HBV DNA in the acute phase, the observed incidence rate is an underestimation since seroconversion to anti-HBc and anti-HBs, without detectable HBsAg and HBV DNA, remains unrecognized. Korelitz and colleagues[37] estimated a mean HBsAg detection period of 63 days on the basis of previous follow-up studies. The length of the HBV DNA detection period in acute infection can be estimated from the number of concordant HBsAg and HBV DNA–reactive donations in repeat donors and the additional number of acute NAT-yield infections in this study. The NAT detection period can then be estimated by dividing the total number of viremic acute infections by the number of acute HBsAg-positive infections and multiplying the estimated HBsAg detection period with this factor.[35]

The incidence rate adjustment factor can then be deduced by dividing the mean preseroconversion interdonation interval by the estimated HBV DNA detection period. To estimate the risk of HBV infection in first-time, lapsed, and all donations, the acute-phase NAT-yield rate in repeat donors was compared with those in first-time, lapsed, and all donors. The HBV transmission risk in first-time, lapsed, and all donors was then determined by multiplying the residual risk in repeat donors with the NAT-yield rate ratios in the respective donation categories.

RESULTS

Classification of acute HBV infections

To estimate the risk of HBV transmission by WP donations, it is important to classify the HBV NAT–yield donations as acute or chronic infections. Table 1 shows the number of acute and chronic HBV infections in first-time, lapsed, and repeat donations as detected by HBV DNA and HBsAg screening during 4 years of ID-NAT screening. Over 4 years, 170 repeat donors seroconverted to both HBsAg and HBV DNA, while another 84 seroconverted to HBV DNA without detectable HBsAg. The mean preseroconversion interdonation interval (and range) in the total of 254 acutely infected repeat donors was 127 (35-364) days.

Of the 149 acute-phase NAT-yield cases found in first-time, lapsed, and repeat donors, 114 were classified as early WP donations in the pre-HBsAg or pre–anti-HBc seroconversion phase. Seventy-nine (69%) of these WP infections were confirmed by the presence of HBsAg, HBV DNA, and/or anti-HBc in a follow-up sample, whereas in 35 (31%) no follow-up sample was available. These latter seronegative donations were classified as being in the WP because the TaqMan viral load assay was positive and/or HBV DNA was reactive in multiple replicate Ultrio and dHBV assays on aliquots taken from the frozen plasma unit. Six infections were classified as probable primary OBIs because HBV DNA was reactive in at least two follow-up samples several weeks apart without seroconversion to HBsAg, followed by seroconversion to anti-HBc and anti-HBs in a later sample. Thirteen infections were classified as possible abortive or vaccine breakthrough infections because of presence of HBV DNA in anti-HBs–

TABLE 1. Acute and chronic HBV infection rates as detected by HBV-DNA and HBsAg screening

	Number HBV infections in donations			
HBV infection classification	First time	Lapsed	Repeat	All
Number donations	315,488	302,970	2,303,103	2,921,561
HBsAg+, DNA+	2,302	113	170	2585
(rate)	(1:137)	(1:2,681)	(1:13,548)	(1:1,130)
Acute NAT yield	46	19	84	149*
(rate)	(1:6,858)	(1:15,946)	(1:27,418)	(1:19,608)
Chronic OBI NAT yield	89	27	61	177†
(rate)	(1:3,545)	(1:11,221)	(1:34,375)	(1:16,506)
HBsAg+/DNA–	86	0	0	86
(rate)	(1:3,668)			(1:33,972)
Unclassified	3	1	6	10
All HBV infections	2,523	159	315	3,007
(rate)	(1:125)	(1:1,905)	(1:7311)	(1:972)

* Of 149 acute-phase NAT yields, 95 donors were in the pre–anti-HBc WP, six were likely to be primary occult infections, 13 were possible vaccine breakthrough infections, and 35 were in the IgM anti-HBc+ early recovery phase.

† Of 177 donors with chronic OBI, 75 were potentially infectious (anti-HBc+, anti-HBs–) and 102 were not infectious (anti-HBc+, anti-HBs+). Another five donors could have been classified as OBI with anti-HBs as the sole marker, but we chose to classify these as acute phase NAT yields.

positive (or negative) donations, followed by a significant increase in anti-HBs titer in the second sample (and in four cases followed by delayed anti-HBc seroconversion detected in a third or fourth sample obtained from the donor). In four of the possible vaccine breakthrough infections no follow-up sample was available. Theoretically, these donations could also be classified as occult carriers with anti-HBs as the sole detectable serum marker, but for the purposes of this study they were assumed to be acute infections. One of these four infections was a repeat donor. Misclassification of this case as an acute phase NAT yield would negligibly affect the incidence rate of 254 in 2.3 million repeat donations.

Another group of acute NAT yields, most of them with very low viral loads (below the detection limit of the viral load assay), were the IgM anti-HBc–positive donations in the early recovery phase. In 33 of the 35 early recovery NAT-yield donations, the anti-HBs titer was determined. In 23 of 33 (70%), anti-HBs was reactive and in 19 (58%) anti-HBs titers were above 100 mIU/mL. Ten of the IgM anti-HBc–reactive early recovery phase donations (30%) were anti-HBs negative (<10 mIU/mL) and potentially infectious. A total of 177 (54%) of the HBV NAT yields were OBIs, of which 75 (42%) had no detectable anti-HBs and could potentially be infectious.

HBV transmission case

The blood donor was confirmed positive for HBsAg and HBV DNA on his 53rd whole blood donation. It was determined that the RBC component had been transfused to a 28-year-old male undergoing surgery after a motor vehicle accident. This recipient developed clinical signs and symptoms of acute hepatitis B, 84 days after transfusion, with markedly abnormal liver function test results: ALT 866 IU/L (normal range <50 IU/L), AST 470 IU/L (normal range <38 IU/L), ALP 254 µmol/L (normal range 40-130 µmol/L), GGT 222 IU/L (normal range <60 IU/L), LDH 322 IU/L (normal range 100-250 IU/L), and total bilirubin of 60 µmol/L (normal range 5-21 µmol/L). A further sample taken 110 days after transfusion showed that the recipient was positive for HBV DNA, HBsAg, and IgM anti-HBc. Six months after transfusion the recipient was clinically asymptomatic but did not avail himself for repeat serologic and liver function testing. The PLT unit was issued to a patient with an unreported diagnosis, who, despite concerted efforts, remains untraceable.

The donor remained clinically asymptomatic throughout the follow-up period and upon questioning did not reveal any risk behavior for HBV. He was retested at 2 and 5 months after the X (positive) donation (Table 2). Two months after the X donation, although he was HBsAg negative, HBV DNA was still detectable by ID-NAT. This sample was anti-HBc IgM positive and anti-HBs negative. Five months after the X donation, the donor was anti-HBc and anti-HBs positive and HBV DNA negative.

Viral load estimation

Table 3 shows the proportion of reactive results in replicate Ultrio, Ultrio Plus, and TaqScreen assays in the HBV transmission sample as found by three laboratories. Three of 30 (10%) replicate Ultrio and 10 of 30 (33%) replicate Ultrio Plus assays performed on the recovered FFP unit tested positive for HBV DNA by SANBS. The sample was also tested in Ultrio Plus assays by Gen-Probe and was found reactive in 7 of 30 (23%) replicates. In the Paul Ehrlich Institute the infectious HBV WP sample tested reactive in 2 of 12 (17%) replicates in both the TaqScreen and the Ultrio assay. Using probit analysis, the 95 and 50% detection limit on the Eurohep standards were 98.5 (59-189) and 9.5 (6.5-13.9) copies/mL for the Ultrio and 46.9 (28.4-89) and 4.5 (3.0-6.7) copies/mL for the Ultrio Plus assays, respectively, showing a 2.1 (1.2-4.0)-fold enhancement in analytical sensitivity of the Ultrio Plus assay. From the probit curves the HBV DNA concentration in the plasma unit was estimated to be 1.5 (1.2-1.8) and 1.6 (1.1-2.1) copies or virions/mL in Ultrio and Ultrio Plus, respectively. From this estimation of the low viral load the RBC unit would have contained 32 (22-43) HBV virions in 20 mL of plasma. According to the infectivity risk formula

TABLE 2. HBV markers in samples from both donor and recipient post transfusion

	Donor (47-year-old regular blood donor)			
Marker	Index donation	(X + 2 months)	(X + 5 months)	Recipient (110 days after transfusion)
HBsAg (S/CO ratio)	Positive (352)	Negative (0.27)	Negative	Positive (743.45)
HBV DNA (S/CO ratio)	Positive*	Positive†	Negative	Positive (14.3)
dHBV (S/CO ratio)	Positive (23.1)		Negative	Positive (25.2)
Anti-HBc (IgM)		Positive	Negative	Positive
Anti-HBc (total)		Positive	Positive	Positive
Anti-HBs		Negative	Positive (310 U/L)	Negative

* Positive on three replicates (S/CO ratios of 15.3, 15.6, and 14.9).
† Positive on two replicates (S/CO ratios of 13.3 and 12.8) and negative on one replicate (S/CO ratio 0.12).
S/CO = signal to cutoff.

TABLE 3. Proportion of reactive test results on WP sample in different laboratories*

Laboratory	cobas TaqScreen MPX test	Ultrio assay	Ultrio Plus assay
Paul Ehrlich Institute	2/12 (17)	2/12 (17)	
SANBS		3/30 (10)†	10/30 (33)
Gen-Probe			7/30 (23)†

* Data are reported as number (%) reactive.
† Estimated concentration in probit analysis against the Eurohep Genotype A2 standard was 1.5 (1.2-1.8) and 1.6 (1.1-2.1) copies/mL in Ultrio and Ultrio Plus, respectively.

of Weusten and colleagues,[16] the transmission risk of the amount of HBV virions in the RBC unit would have been 99.7% (98.4%-100%).

Sequence analysis of HBV in donor and recipient

The complete genome of HBV isolated from both the recipient and the donor was amplified and cloned. The full 3221 nucleotides of the HBV genome were successfully sequenced from five clones from the donor and three clones from the recipient. In addition, less than genome length sequences were obtained for four clones from the donor and five clones from the recipient because nucleotides were lost from the 5′ and 3′ ends during the cloning process. These sequences were compared phylogenetically to reference sequences from public databases. Neighbor joining trees for both the complete HBV genome (Fig. 2) and a 3141-nucleotide subgenomic fragment (Nucleotides 1855-1775; Fig. 2 inset) show the isolates from both the donor and the recipient cluster together and belong to Subgenotype A1.

The intragroup divergence of the recipient and donor clones did not differ significantly from each other or from the donor-recipient clone intergroup divergence. On the other hand, the mean intragroup nucleotide divergence for the donor-recipient HBV clones (0.31 ± 0.0006%, mean ± standard deviation [SD]) was significantly lower than intragroup divergences for the South African (2.1% ± 0.006, mean ± SD), African (2.33% ± 0.006, mean ± SD), and global (2.81% ± 0.85, mean ± SD) Subgenotype A1 sequences, respectively ($p < 0.05$).

The consensus sequence of the donor HBV clones was identical to that of the recipient HBV clones but differed at 28 nucleotide positions from the consensus generated from 33 Subgenotype A1 sequences. Fifteen of these mutations were synonymous and 13 were nonsynonymous (Fig. 3).

HBV WP transmission risk

ID-NAT screening interdicted an additional 84 of 254 (33%) acute viremic infections in repeat donors. From the relative proportions of detection of HBsAg and HBV DNA it was estimated that the mean HBsAg detection period of 63 days[37] was extended to 95.4 days (Fig. 1) by multiplying the 63-day period by a factor of 254 in 170 or 1.49. Assuming a 50% HBsAg seroconversion point at 1000 copies/mL[18] in HBsAg PRISM and a ID_{50} of 3.7 copies[15] the infectious pre-HBsAg WP is estimated at 32.5 days, which can be reduced to 15.3 days by Ultrio and 12.6 days with the Ultrio Plus assay in ID-NAT format, when modeled on the detection limits found on the Eurohep standard. The WP reduction times by introduction of ID-NAT are then calculated to be 17.1 days for Ultrio and 19.9 days for Ultrio Plus. Using the same seroconversion risk model of Weusten and colleagues[16] in a reversed manner in the declining HBsAg and HBV DNA clearing phase it can be estimated that with a half-life of 1.6 days[35] and a 100-fold reduced infectivity of HBV because of immune neutralization,[36] still 1.29 and 0.74 risk-day equivalents remain in the second WP for Ultrio or Ultrio Plus, respectively (Fig. 1). If the relative sensitivity of HBsAg and HBV DNA assays were to be the same in the pre-HBsAg ramp-up phase as in the HBsAg declining phase, the reversed Weusten model estimates a post-HBsAg infectious WP of 9.9 days. This means that Ultrio has shortened the second post-HBsAg WP by 8.6 days. However, when the risk-day equivalents are estimated on the basis of the proportion of IgM anti-HBc–positive NAT yields we can calculate a shorter reduction period as follows: In 14 repeat donors HBV DNA was detectable

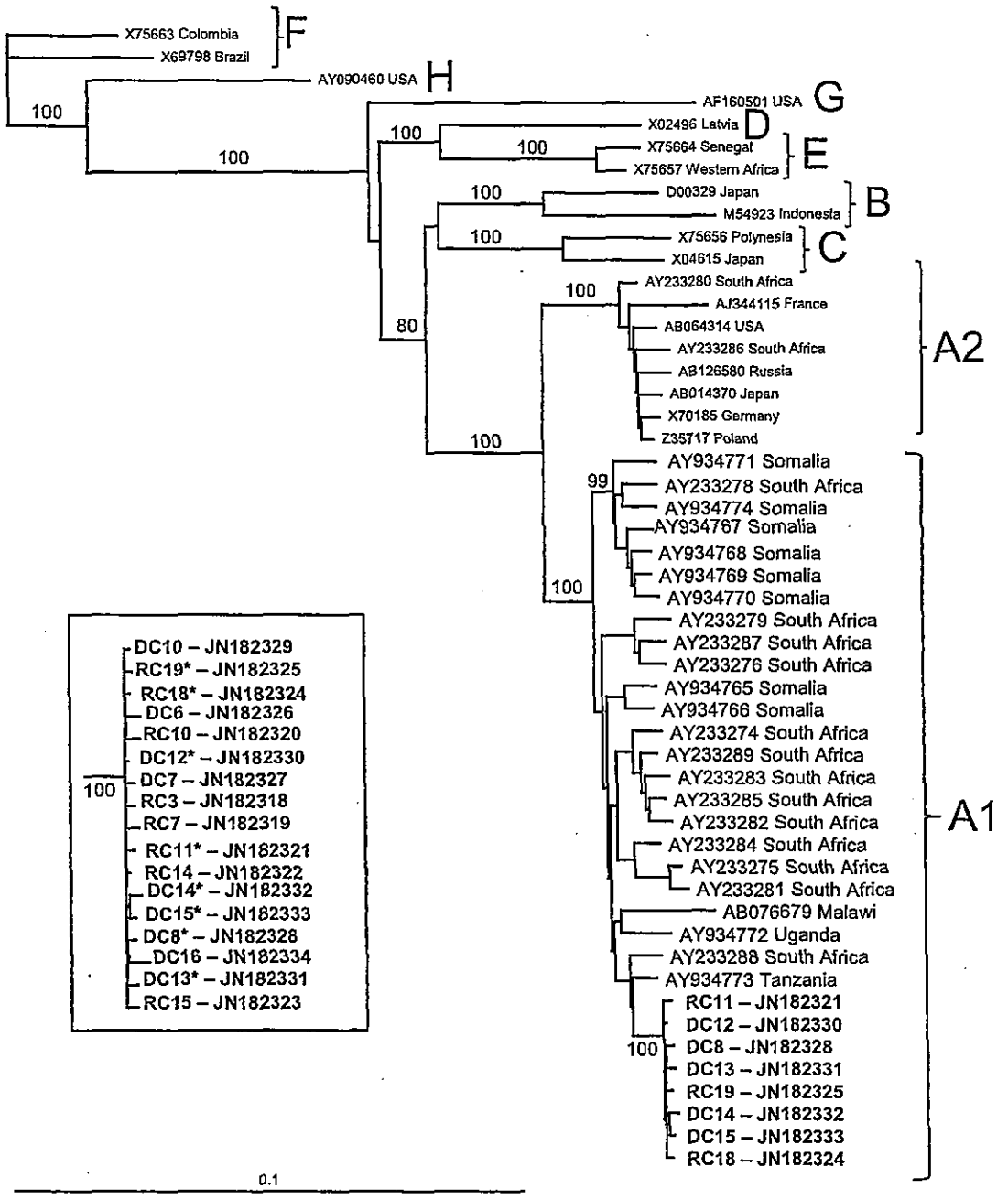


Fig. 2. Phylogenetic relationship of eight HBV clones, shown in bold (five from the donor and three from the recipient) to full-length sequences of other HBV isolates obtained from GenBank, established using neighbor-joining methods. Bootstrap statistical analysis was performed using 1000 data sets with the numbers on the nodes indicating the percentage of occurrences. Clones are designated DC (donor clone) or RC (recipient clone) followed by their GenBank accession number. Other sequences are designated by their GenBank accession number followed by the country of origin. (Inset) Phylogenetic relationship of a 3141-nucleotide subgenomic fragment (minus nucleotides 1775-1855) from an additional nine shorter than full-length HBV clones (four from the donor and five from the recipient) relative to the full-length clones (*), established using neighbor-joining methods.

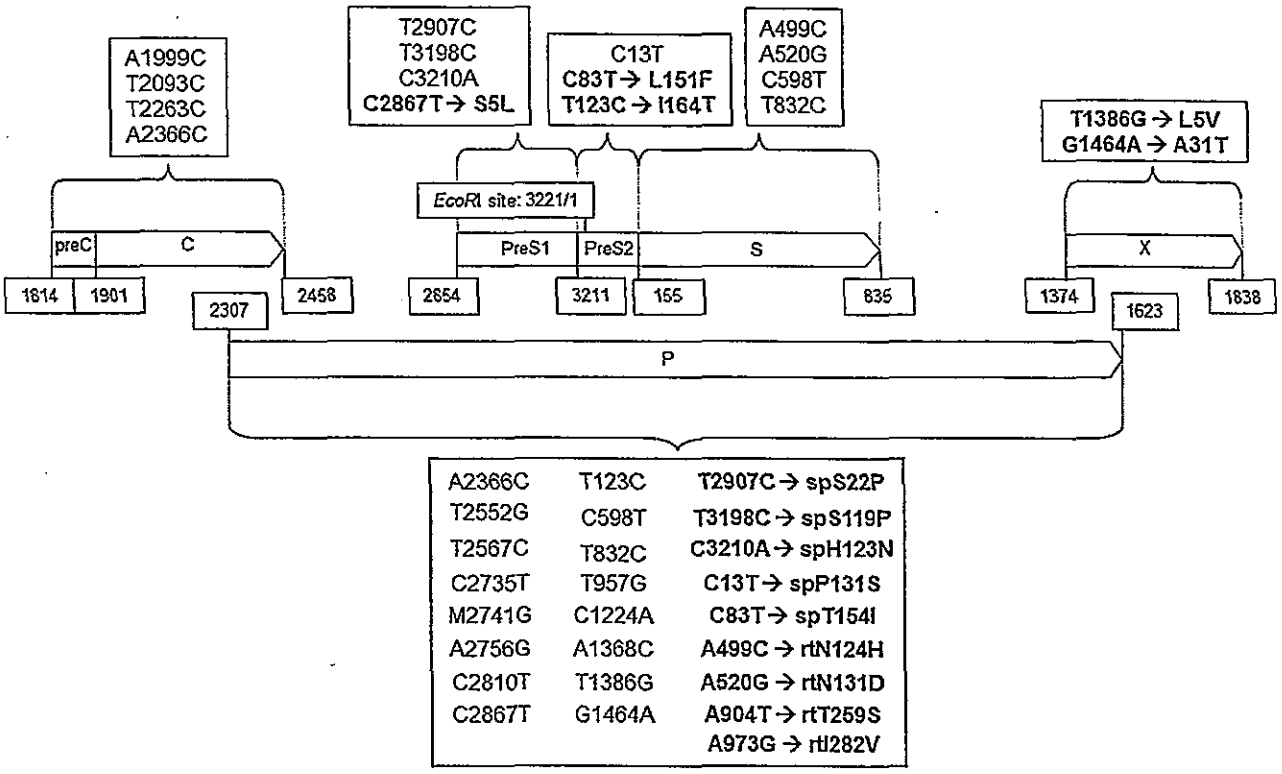


Fig. 3. Comparison of the genomic organization of the donor-recipient consensus sequence and Subgenotype A1 consensus sequence showing the differences found in each of the four open reading frames. Both the synonymous and the nonsynonymous (indicated by bold type) mutations are shown, with the corresponding amino acid changes for the nonsynonymous mutations included. The start and end sites of the four open reading frames are indicated: preC = precore; C = core; P = polymerase gene; S = surface gene; X = X gene. The first T of the *Eco*RI cleavage site (5′-GAATTC-3′) is Position 1.

longer than HBsAg in the IgM anti-HBc–positive early recovery phase. Since we found 70% of IgM anti-HBc–positive donors to be anti-HBs positive (>10 mIU/mL), 30% of the 14 repeat donors (equivalent to 4.2 cases) could be potentially infectious. Hence the proportion of HBsAg-negative donors in the anti-HBs–negative, but HBV DNA– and IgM anti-HBc–positive detection phase, can be estimated to be 4.2 in 254 (1.6%). Since the HBV DNA detection period by Ultrio in ID-NAT was estimated at 95.4 days the length of the HBV DNA–positive but HBsAg- and anti-HBs–negative second WP would be 0.016 × 95.4 days or 1.5 risk-day equivalents. This is less than the 8.6 risk-day equivalents determined by the reversed modeling according to Weusten and coworkers,[16] indicating that worst-case risk estimates for the second WP were calculated in this report.

Since the mean preseroconversion interval in repeat donors was 127 days and the length of the HBV DNA detection period was estimated at 94.5 days, one-third of the acute HBV infections would remain unrecognized. Therefore, the incidence rate in our study needs to be multiplied with an adjustment factor of 127 per 94.5 or 1.34. Using the refined risk analysis[15] for Ultrio in ID-NAT based on 15.3 and 1.3 risk-day equivalents for the first and second WP (total 16.6 risk-day equivalents) a residual HBV transmission risk of 17.9 per million donations in the first WP and 1.5 per million in the second WP was calculated (for a total residual risk of 19.4 HBV transmissions per million repeat donations). Since the HBV WP NAT-yield rate (Table 1) was found to be 4.00-, 1.72-, and 1.40-fold higher in first-time, lapsed, and all donations, respectively, we estimated the residual risk in these donations to be accordingly higher than in repeat donations, that is, 77.6, 33.4, and 27.1 per million, respectively. In other words, the residual HBV transmission risk from acute HBV infections was estimated at 1:12,880, 1:29,966, 1:46,164, and 1:36,800 donations in first-time, lapsed, repeat, or all donors, respectively. Note that these risk estimates do not take into account the unknown risk caused by ID-NAT–negative donors with OBI (see Fig. 1). During 4 years of observation the SANBS lookback program has revealed one clinical posttransfusion hepatitis B event in 2.9 million ID-NAT–screened donations, an observed HBV transmission rate of 0.34 per million.

DISCUSSION

This communication reports the first transfusion-transmitted HBV infection by blood that had been screened by ID-NAT. Definitive proof of a TTI can only be obtained by genomic analysis of both the donor and the recipient viral strains.[38] In this case, the clones of the HBV strains derived from the donor and the recipient were 99.7% homologous but had a number of nucleotide positions, which distinguished this strain from the consensus sequence of Subgenotype A1, the predominant subgenotype circulating in South Africa[39] (Fig. 3). Of the mutations depicted in Fig. 3, as far as we can ascertain, only the synonymous C1224A mutation in the polymerase open reading frame could possibly have any functional or regulatory significance. The C1224A mutation is within the NF-1 binding site of the HBV enhancer I[40] and may therefore affect transcription of the pregenomic and HBx mRNAs.[41] Further functional characterization would be required to confirm this. The high homology of the consensus sequences of the HBV strains from both the donor and the recipient excludes any possibility of a hospital-acquired infection or viral reactivation in the recipient. Furthermore, these strains form a unique branch within the Subgenotype A1 clade with 100% bootstrap support (Fig. 2).

The viral load in the pre–ID-NAT WP donation was estimated by probit analysis to be 1.6 (1.1-2.1) copies/mL and was only detectable in 10% of replicate Ultrio assays. This translates to approximately 32 (22-43) HBV virions in the estimated volume of 20 mL of plasma in the transfused RBC unit. The viral load in the WP donation was also below the detection limit of the more sensitive Ultrio Plus and TaqScreen assays, which detected the sample 33 and 17% of the time in replicate assays, respectively.

The possibility that a unit of blood will transmit virus to a blood recipient is determined by the infectious WP. For HBsAg, using the Abbott PRISM ChLIA system, the infectious WP has been estimated to be 35.5 days if one viral particle or DNA copy in a RBC transfusion is infectious.[18] The WP reduction, using an HBV NAT assay system with a 50% limit of detection (LOD) of approximately 10 copies/mL, was independently calculated to be 17.9[13] and 14.9 days,[19] yielding a calculated WP for HBV by ID-NAT of 20.4 and 24.3 days, respectively. We previously estimated the 50% LOD to be 29 copies/mL and the infectious WP to be 24.3 days.[1] These reported WP estimates were all based on the assumption that one virus in a blood transfusion is enough to be infectious. The variation in the estimated lengths of the WPs in these reports is mainly caused by variation in the 95% and 50% detection limits observed in the analytical sensitivity studies. In this study the infectious WPs with Ultrio were considerably shorter because the refined transmission risk model of Weusten and colleagues[16] also brings the likelihood of infectivity of a low viral burden or the ID_{50} into the equation. Using a ID_{50} of approximately four HBV DNA copies (as found after recalibration of the viral load in a chimpanzee challenge plasma with a known infectivity titer[13] in multiple bDNA assays[15]), we estimated an infectious WP of 15.3 risk-day equivalents with the Ultrio assay and an additional 1.3 risk-day equivalents in the second anti-HBc–positive WP. Compared to the calculated infectious WP for HIV by ID-NAT (2.9 days) and the calculated infectious WP for HCV by ID-NAT (1.3 days),[15] it is evident that there is statistically a greater probability that a blood donation will be in an HBV infectious WP relative to those of HIV and HCV.

During the first 4 years of ID-NAT testing, SANBS detected 2523 HBV confirmed positive donations in 315,488 first-time donations, a prevalence of 0.80%. In the same period the incidence rate of acute HBV infections was 254 in 2,303,103 repeat donations (1:9067). In all 2,921,561 donations 3007 HBV infections were confirmed, yielding an infection rate of 0.10%. Of these confirmed positive HBV infections, 336 donations were detected by ID-NAT only and, of these, 149 were in the HBsAg-negative WP, 177 were OBIs, and 10 were unable to be classified. Therefore, for 149 WP donations interdicted by ID-NAT (rate, 1:19,600), only one donation was found to be in the pre–ID-NAT WP and caused infection in the recipient (1:2,900,000). We estimated the residual risk of a donation being in the first or second infectious WPs for HBV in South Africa to be 27.1 per million donations (1:36,800). This translates to 79.2 HBV transmission events in the 4-year ID-NAT screening period or an estimated 19.8 HBV transmissions per year.

Why is the estimated residual risk far higher using mathematical modeling than the observed transmission rate? Several reasons may account for the 80-fold lower observed transmission rate than the estimated WP transmission risk: 1) A proportion of approximately 40% of the transfusion recipients in South Africa have already been exposed to HBV and are immune;[24] 2) the younger population has, since 1995, been vaccinated in infancy against hepatitis B;[24] 3) low levels of HBV that escape ID-NAT screening can be easily neutralized by anti-HBs present in simultaneously administered blood products; 4) the infectious dose of HBV in ID-NAT–nonreactive WP donations may not lead to clinically recognized HBV infections in the majority of recipients since previous studies in prisoners showed that the incubation time and the occurrence of clinical hepatitis B was inversely correlated with the infectious dose;[42] 5) HBV infection in lookback programs may be underreported and underdiagnosed for several reasons among which is lack of pretransfusion sampling and fortuitous timing of HBV assays in posttransfusion samples; 6) the incubation time of HBV can be much longer when HBV is present in immune complexes;[11] and 7) possible reduction of the infectivity of HBV in stored RBC units.

Many studies have focused on the transmission risk posed by donors with chronic OBI.[23,43] So far, two lookback studies have been reported that indicate that the risk of HBV transmission by low viral load occult HBV carriers is 3% or less.[9,44] The HBV transmission case in this report is consistent with the premise that transfusion-transmitted HBV is greater than 10-fold more likely to occur when the donor is in a recent postexposure infectious WP compared to the presence of low-level viremia in OBI.[9] The risk of HBV transmission by ID-NAT–screened blood donations from donors with OBI is considered to be very low, but further systematic lookback studies are required to confirm this.

It has been suggested that the variation in analytical sensitivity of the current Ultrio test system may not only be HBV genotype dependent but also individual strain dependent.[17] In particular, a variation in relative sensitivities of HBV DNA detection on the Tigris system compared to the Roche s201 (Roche Molecular Systems) has been observed with Genotype A seroconversion panels.[17] This variation in sensitivity may have further contributed to the lack of detection of HBV DNA on the initial ID-NAT screening of the blood donation in this HBV transmission case. However, the comparison of the proportions of reactive results in the WP transmission sample did not demonstrate a large difference in sensitivity between the Ultrio, Ultrio Plus, and TaqScreen assays. The HBV transmission sample was not detectable 90% of the time in replicate Ultrio assays, but would also not be detectable 67% to 83% of the time by the Ultrio Plus and TaqScreen assays in ID-NAT configuration. Clearly, ID-NAT is not sensitive enough to prevent HBV transmission by donations in the early window phase. Further studies are required to determine whether ID-NAT is sensitive enough to prevent HBV transmission by donors with OBI. In the South African high-prevalence setting of hepatitis B a lookback program in recipients of donors, later identified as occult carriers, can only provide meaningful results if a control group of recipients that received blood from anti-HBc–negative donors is also subjected to the same lookback procedures and the proportion of anti-HBc–positive recipients in each group is compared to determine significant difference between the two groups. So far such a comparison study of prevalence of HBV markers, in particular anti-HBc, in recipients of blood from occult HBV carriers and a noninfected control group has not been undertaken.

This communication reports the first known case of transmission of HBV by blood that had been screened by ID-NAT and confirms that blood donations that test negative for HBV DNA may transmit the virus when the donation is in the infectious WP. Transmission was confirmed by the 99.7% sequence homology between the complete genome sequences of both the donor and the recipient viral strains. Our study has demonstrated that the introduction of ID-NAT has significantly enhanced the safety of the blood supply in South Africa, but does not completely eliminate the transmission risk.

ACKNOWLEDGMENTS

The estimation of the undetectable viral load by multiple replicate NAT assays has been performed by Jeff Linnen (Gen-Probe, San Diego, CA) and Micha Nübling (Paul Ehrlich Institute, Langen, Germany). A preformatted calculation spreadsheet has been provided by Dr Jos Weusten (the Netherlands).

CONFLICT OF INTEREST

The authors declare that they have no conflicts of interest relevant to the manuscript submitted to **TRANSFUSION**.

REFERENCES

1. Vermeulen M, Lelie N, Sykes W, Crookes R, Swanevelder J, Gaggia L, Le Roux M, Kuun E, Gulube S, Reddy R. Impact of individual-donation nucleic acid testing on risk of human immunodeficiency virus, hepatitis B virus, and hepatitis C virus transmission by blood transfusion in South Africa. Transfusion 2009;49:1115-25.
2. Fang CT, Field SP, Busch MP, Heyns Adu P. Human immunodeficiency virus-1 and hepatitis C virus RNA among South African blood donors: estimation of residual transfusion risk and yield of nucleic acid testing. Vox Sang 2003; 85:9-19.
3. Heyns Adu P. Risk of transmitting HIV and other diseases with a blood transfusion in South Africa. CME (South African Med Assoc) 1999: 854-61.
4. Kleinman SH, Lelie N, Busch MP. Infectivity of human immunodeficiency virus-1, hepatitis C virus, and hepatitis B virus and risk of transmission by transfusion. Transfusion 2009;49:2454-89.
5. Zou S, Dorsey KA, Notari EP, Foster GA, Krysztof DE, Musavi F, Dodd RY, Stramer SL. Prevalence, incidence, and residual risk of human immunodeficiency virus and hepatitis C virus infections among United States blood donors since the introduction of nucleic acid testing. Transfusion 2010;50:1495-504.
6. Ferreira MC, Nel TJ. Differential transmission of human immunodeficiency virus (HIV) via blood components from an HIV-infected donor. Transfusion 2006;46:156-7.
7. Inaba S, Ito A, Miyata Y, Ishii H, Kajimoto S, Tanaka M, Maruta A, Saito S, Yugi H, Hino M, Tadokoro K. Individual nucleic amplification technology does not prevent all hepatitis B virus transmission by blood transfusion. Transfusion 2006;46:2028-9.
8. Phelps R, Robbins K, Liberti T, Machuca A, Leparc G, Chamberland M, Kalish M, Hewlett I, Folks T, Lee LM, McKenna M. Window-period human immunodeficiency

virus transmission to two recipients by an adolescent blood donor. Transfusion 2004;44:929-33.
9. Satake M, Taira R, Yugi H, Hino S, Kanemitsu K, Ikeda H, Tadokoro K. Infectivity of blood components with low hepatitis B virus DNA levels identified in a lookback program. Transfusion 2007;47:1197-205.
10. Schmidt M, Korn K, Nubling CM, Chudy M, Kress J, Horst HA, Geusendam G, Hennig H, Sireis W, Rabenau HF, Doerr HW, Berger A, Hourfar MK, Gubbe K, Karl A, Fickenscher H, Tischer BK, Babiel R, Seifried E, Gurtler L. First transmission of human immunodeficiency virus Type 1 by a cellular blood product after mandatory nucleic acid screening in Germany. Transfusion 2009;49:1836-44.
11. Wendel S, Levi JE, Biagini S, Candotti D, Allain JP. A probable case of hepatitis B virus transfusion transmission revealed after a 13-month-long window period. Transfusion 2008;48:1602-8.
12. Liu CJ, Lo SC, Kao JH, Tseng PT, Lai MY, Ni YH, Yeh SH, Chen PJ, Chen DS. Transmission of occult hepatitis B virus by transfusion to adult and pediatric recipients in Taiwan. J Hepatol 2006;44:39-46.
13. Kleinman SH, Busch MP. Assessing the impact of HBV NAT on window period reduction and residual risk. J Clin Virol 2006;36 Suppl 1:S23-9.
14. Komiya Y, Katayama K, Yugi H, Mizui M, Matsukura H, Tomoguri T, Miyakawa Y, Tabuchi A, Tanaka J, Yoshizawa H. Minimum infectious dose of hepatitis B virus in chimpanzees and difference in the dynamics of viremia between genotype A and genotype C. Transfusion 2008;48:286-94.
15. Biswas R, Tabor E, Hsia CC, Wright DJ, Laycock ME, Fiebig EW, Peddada L, Smith R, Schreiber GB, Epstein JS, Nemo GJ, Busch MP. Comparative sensitivity of HBV NATs and HBsAg assays for detection of acute HBV infection. Transfusion 2003;43:788-98.
16. Weusten J, Vermeulen M, van Drimmelen H, Lelie N. Refinement of a viral transmission risk model for blood donations in seroconversion window phase screened by nucleic acid testing in different pool sizes and repeat test algorithms. Transfusion 2011;51:203-15.
17. Assal A, Barlet V, Deschaseaux M, Dupont I, Gallian P, Guitton C, Morel P, David B, De Micco P. Comparison of the analytical and operational performance of two viral nucleic acid test blood screening systems: Procleix Tigris and cobas s 201. Transfusion 2009;49:289-300.
18. Assal A, Barlet V, Deschaseaux M, Dupont I, Gallian P, Guitton C, Morel P, van Drimmelen H, David B, Lelie N, De Micco P. Sensitivity of two hepatitis B virus, hepatitis C virus (HCV), and human immunodeficiency virus (HIV) nucleic acid test systems relative to hepatitis B surface antigen, anti-HCV, anti-HIV, and p24/anti-HIV combination assays in seroconversion panels. Transfusion 2009;49:301-10.
19. Koppelman MH, Assal A, Chudy M, Torres P, de Villaescusa RG, Reesink HW, Lelie PN, Cuypers HT. Multicenter performance evaluation of a transcription-mediated amplification assay for screening of human immunodeficiency virus-1 RNA, hepatitis C virus RNA, and hepatitis B virus DNA in blood donations. Transfusion 2005;45:1258-66.
20. Matsumoto C, Tadokoro K, Fujimura K, Hirakawa S, Mitsunaga S, Juji T. Analysis of HBV infection after blood transfusion in Japan through investigation of a comprehensive donor specimen repository. Transfusion 2001;41:878-84.
21. Soldan K, Barbara JA, Dow BC. Transfusion-transmitted hepatitis B virus infection in the UK: a small and moving target. Vox Sang 2002;83:305-8.
22. Gerlich WH, Bremer C, Saniewski M, Schuttler CG, Wend UC, Willems WR, Glebe D. Occult hepatitis B virus infection: detection and significance. Dig Dis 2010;28:116-25.
23. Allain JP, Belkhiri D, Vermeulen M, Crookes R, Cable R, Amiri A, Reddy R, Bird A, Candotti D. Characterization of occult hepatitis B virus strains in South African blood donors. Hepatology 2009;49:1868-76.
24. Tsebe KV, Burnett RJ, Hlungwani NP, Sibara MM, Venter PA, Mphahlele MJ. The first five years of universal hepatitis B vaccination in South Africa: evidence for elimination of HBsAg carriage in under 5-year-olds. Vaccine 2001;19:3919-26.
25. Cable R, Lelie N, Bird A. Individual donation Testing (IDT) in the western Cape of South Africa using nucleic acid amplification technology (NAT): a 5 year review. Vox Sang Abstracts 2011;101:196-97.
26. Heermann KH, Gerlich WH, Chudy M, Schaefer S, Thomssen R. Quantitative detection of hepatitis B virus DNA in two international reference plasma preparations. Eurohep Pathobiology Group. J Clin Microbiol 1999;37:68-73.
27. Saldanha J, Gerlich W, Lelie N, Dawson P, Heermann K, Heath A. An international collaborative study to establish a World Health Organization international standard for hepatitis B virus DNA nucleic acid amplification techniques. Vox Sang 2001;80:63-71.
28. Takahashi K, Aoyama K, Ohno N, Iwata K, Akahane Y, Baba K, Yoshizawa H, Mishiro S. The precore/core promoter mutant (T1762A1764) of hepatitis B virus: clinical significance and an easy method for detection. J Gen Virol 1995;76(Pt 12):3159-64.
29. Gunther S, Li BC, Miska S, Kruger DH, Meisel H, Will H. A novel method for efficient amplification of whole hepatitis B virus genomes permits rapid functional analysis and reveals deletion mutants in immunosuppressed patients. J Virol 1995;69:5437-44.
30. Kramvis A, Restorp K, Norder H, Botha JF, Magnius LO, Kew MC. Full genome analysis of hepatitis B virus genotype E strains from South-Western Africa and Madagascar reveals low genetic variability. J Med Virol 2005;77:47-52.
31. Xia X. Data analysis in molecular biology and evolution. Boston, MA, Dordrecht, London: Kluwer Academic Publishers; 2000.

32. Nicholas K, Nicholas HB, Deerfield DW. GeneDoc: analysis and visualization of genetic variation. EMBNEW.NEWS 4:14 [monograph on the internet]. 1997. [cited 2011 Sep 15]. Available from: URL: http://www.psc.edu/biomed/genedoc
33. Felsenstein J. PHYLIP (Phylogenecy Inference Package). Department of Genetics. University of Washington, Seattle, Washington [monograph on the internet]. 1995. [cited 2011 Sep 15]. Available from: URL: http://evolution.genetics.washington.edu/phylip.html
34. Page RD. TreeView: an application to display phylogenetic trees on personal computers. Comput Appl Biosci 1996;12:357-8.
35. Yoshikawa A, Gotanda Y, Itabashi M, Minegishi K, Kanemitsu K, Nishioka K. HBV NAT positive [corrected] blood donors in the early and late stages of HBV infection: analyses of the window period and kinetics of HBV DNA. Vox Sang 2005;88:77-86.
36. Tabuchi A, Tanaka J, Katayama K, Mizui M, Matsukura H, Yugi H, Shimada T, Miyakawa Y, Yoshizawa H. Titration of hepatitis B virus infectivity in the sera of pre-acute and late acute phases of HBV infection: transmission experiments to chimeric mice with human liver repopulated hepatocytes. J Med Virol 2008;80:2064-8.
37. Korelitz JJ, Busch MP, Kleinman SH, Williams AE, Gilcher RO, Ownby HE, Schreiber GB. A method for estimating hepatitis B virus incidence rates in volunteer blood donors. National Heart, Lung, and Blood Institute Retrovirus Epidemiology Donor Study. Transfusion 1997;37:634-40.
38. Candotti D, Allain JP. Transfusion-transmitted hepatitis B virus infection. J Hepatol 2009;51:798-809.
39. Kimbi GC, Kramvis A, Kew MC. Distinctive sequence characteristics of subgenotype A1 isolates of hepatitis B virus from South Africa. J Gen Virol 2004;85:1211-20.
40. Guo WT, Bell KD, Ou JH. Characterization of the hepatitis B virus EnhI enhancer and X promoter complex. J Virol 1991;65:6686-92.
41. Moolla N, Kew M, Arbuthnot P. Regulatory elements of hepatitis B virus transcription. J Viral Hepat 2002;9:323-31.
42. Barker LF, Murray R. Relationship of virus dose to incubation time of clinical hepatitis and time of appearance of hepatitis–associated antigen. Am J Med Sci 1972;263:27-33.
43. Allain JP. Occult hepatitis B virus infection: implications in transfusion. Vox Sang 2004;86:83-91.
44. Yuen M, Wong D, Lee C, Yasuhit T, Allain JP, Fung J, Leung J, Lin C, Sugiyama M, Sugauchi F, Mizokami M. Transmissibility of hepatitis B virus (HBV) infection through blood transfusion from blood donor with occult HBV infection. Clin Infect Dis 2011;52:624-32.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 6. 25	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Ni YH, Chang MH, Wu JF, Hsu HY, Chen HL, Chen DS. J Hepatol. 2012 Jun 2. [Epub ahead of print]	公表国 台湾
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			

研究報告の概要

○25年間のユニバーサルワクチン接種プログラムによるB型肝炎感染の最小化

背景と目的:1984年に乳幼児へのユニバーサルワクチン接種プログラムが実施されるまで、台湾ではB型肝炎ウイルス(HBV)感染が非常に流行していた。ワクチン接種プログラムの開始から1年未満、5年後、10年後、15年後、20年後と、計5回の血清疫学調査がこれまでに行われた。

方法:30歳未満の各年齢集団から約100人ずつ、3,332人の被験者を登録した。これまでの調査同様、被験者は台北の学校や施設から任意で採用された。HBV血清マーカーにはHBs抗原、HBs抗体、HBc抗体が含まれた。HBc抗体陽性でHBs抗原陰性の被験者のみHBV DNAが測定された。

結果:HBs抗原、HBs抗体、HBc抗体の陽性率は2009年におけるプログラム開始後に出生した被験者と、1984年のベースライングループとの間で大きく異なった(それぞれ0.9%対10%、55.9%対24.5%、7.0%対28%)。この6回目の調査において、HBs抗原保有率がワクチン集団でさらに減少したことを示した。ワクチン無効者のうち86%は、母親がHBs抗原陽性であった。HBV DNAはHBc抗体陽性/HBs抗原陰性被験者の4.2%(6/142)から検出された。これらは全てHBVジェノタイプCであった。

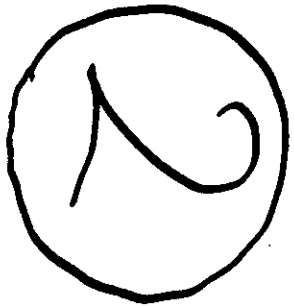
結論:台湾における乳幼児ユニバーサルHBV予防接種プログラムに対する25年間の追跡調査が完了し、若年者へのワクチンの有効性が明確であることが分かった。HBs抗原陽性率が継続して減少していることは、HBV感染症の撲滅が現実となりつつあることを示唆している。母子感染はワクチン無効の主要な原因であるため克服が必要である。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
台湾の25年間に亘る乳幼児対象ユニバーサルB型肝炎ワクチン接種プログラムの追跡調査において、ワクチン接種集団におけるHBs抗原陽性率は継続して減少していることが分かり、若年者に対するワクチンの有効性は明確であったとの報告である。なお、現在日本では、母子感染プログラムは実施されているが、多くの国で行われている全小児へのユニバーサルワクチン接種は行われていない。本情報は今後日本のHBV感染予防対策を検討する上で有益な情報である。	これまでの本製剤の使用実績やバリデーション成績に鑑み、特別の対応を必要としないが、HBV感染に関する新たな知見等について今後も情報の収集に努める。



Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program

Yen-Hsuan Ni[1,*], Mei-Hwei Chang[1,2], Jia-Feng Wu[1], Hong-Yuan Hsu[1,3], Huey-Ling Chen[1,3], Ding-Shinn Chen[2]

[1] *Department of Pediatrics, Hospital and College of Medicine, National Taiwan University, Taipei, Taiwan;* [2] *Hepatitis Research Center, Hospital and College of Medicine, National Taiwan University, Taipei, Taiwan;* [3] *Department of Primary Care Medicine, Hospital and College of Medicine, National Taiwan University, Taipei, Taiwan*

Background & Aims: Hepatitis B virus (HBV) infection was hyperendemic in Taiwan before the implementation of the universal infant hepatitis B immunization program; which was launched in 1984. Five previous seroepidemiologic surveys were conducted at 0, 5, 10, 15, and 20 years after the launch of the vaccination program.

Methods: We enrolled 3332 subjects younger than 30 years of age, with approximately 100 of them in each age cohort. Subjects were recruited voluntarily from schools and other institutions in Taipei, as in previous surveys. HBV seromarkers included hepatitis B surface antigen (HBsAg) and antibodies to HBsAg (anti-HBs) and hepatitis B core antigen (anti-HBc). HBV DNA levels were measured in anti-HBc positive/HBsAg negative subjects (anti-HBc only).

Results: The HBsAg, anti-HBs, and anti-HBc seropositive rates were very different between subjects born after the program in 2009 and the baseline group in 1984 (0.9% *vs.* 10%, 55.9% *vs.* 24.5%, and 7.0% *vs.* 28%, respectively). In this 6th survey, we showed that HBsAg prevalence further decreased in the vaccinated cohorts. A positive maternal HBsAg status was found in 86% of vaccine failures. Serum HBV DNA was detected in 4.2% (6/142) of anti-HBc positive/HBsAg negative subjects, with a low level of HBV DNA. All of these six subjects' HBV were genotype C.

Conclusions: The universal infant HBV immunization program in Taiwan has completed its 25-year follow-up and its efficacy in young adults is clear. The continued decrease in HBsAg prevalence suggests that the elimination of HBV infection is becoming a reality.

Keywords: Hepatitis B; Vaccination; Genotype; Occult infection.

Received 21 March 2012; received in revised form 21 May 2012; accepted 24 May 2012

* Corresponding author. Address: Department of Pediatrics, National Taiwan University Children's Hospital, 8, Chung-Shan South Road, Taipei, Taiwan. Tel.: +886 2 23123456x71516; fax: +886 2 23114592.

E-mail address: yhni@ntu.edu.tw (Y.-H. Ni).

Abbreviations: HBV, hepatitis B virus; HBsAg, hepatitis B surface antigen; anti-HBs, antibodies to HBsAg; anti-HBc, antibodies to hepatitis B core antigen; HBeAg, hepatitis B e antigen; HCC, hepatocellular carcinoma.

Introduction

The world's first nationwide hepatitis B virus (HBV) universal vaccination program for infants was launched in Taiwan in July 1984 [1]. All infants were mandated to receive scheduled HBV vaccinations. In addition, infants born to hepatitis B e antigen (HBeAg) positive mothers received hepatitis B immunoglobulin (HBIG) 24 h after birth [2]. Through January 2010, the coverage rate for infants who completed the 3-dose HBV vaccination program was estimated to be 96.5% (http://www.cdc.gov.tw/public/Data/09714425771.pdf).

We have serially performed five seromarker surveys in the young people covered by the universal infant HBV vaccination program in Taipei City. The first survey was a baseline study conducted just before the launch of the universal program in 1984 [3], and the ensuing seroepidemiologic surveys were done every 5 years in 1989, 1994, 1999, and 2004 [4–7]. In children <15 years of age, the seroprevalence of hepatitis B surface antigen (HBsAg) declined from 10% [3] (pre-vaccination era) to 0.6% after 20 years of universal vaccination[7]. Consistent with the decrease in chronic HBV infection, the incidence of HBV-related pediatric hepatocellular carcinoma (HCC) in Taiwan also decreased [8]. From 1981 to 1994, the incidence of pediatric HCC declined from 0.52 to 0.13 per 100,000 person-years. In 2004, the incidence of HCC in the 6–9, 10–14, and 15–19 age groups decreased to 0.15, 0.19, and 0.16, respectively [9,10].

The 25-year universal infant HBV vaccination program has provided long-term protection (>20 years), and subjects who received a primary vaccination did not require a universal booster [11]. Though largely diminished, mother-to-infant transmission was not completely blocked by immunoprophylaxis [7]. The emerging escape mutants caused some concerns, but they did not increase the risk of chronic infection [12]. Occult HBV infection had recently attracted some attention. Even if subjects are HBsAg negative, they may harbor HBV DNA in serum or liver [13]. In addition to the risk of transmission of infection to others, persons with occult HBV infection are at risk of reactivation when they receive chemotherapy or immunosuppressive therapy [14,15].

This study will continue to monitor the HBV seroprevalence in children and adults in the same area that has been surveyed for the last 25 years. We aimed at eradicating HBV infection by targeting all possible sources of infections, including mother-to-infant transmission and occult HBV infection.

Please cite this article in press as: Ni Y-H, et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

Research Article

Patients and methods

Vaccination program

The HBV universal infant vaccination program was launched in Taiwan on July 1, 1984 [1]. Before July 1992, four doses of plasma-derived vaccine (Hevac B; Pasteur-Mérieux, Lyon, France, or its equivalent derivative, Lifeguard hepatitis B vaccine; Hsin-Chu, Taiwan) were given to infants at 0, 1, 2, and 12 months of age. After July 1992, three doses of the recombinant vaccine H-B-Vax II (5 μg/0.5 ml; Merck Sharp & Dohme, Rahway, NJ, USA) or Engerix-B (20 μg/L ml; SmithKline Beecham, Rixensart, Belgium) were administered at <1 week, 1 month, and 6 months of age.

In addition, all pregnant women were screened for HBsAg. If HBsAg was positive, hepatitis B e antigen (HBeAg) would be checked. HBIG 0.5 ml (100 IU) was given within 24 h after birth to newborns of HBeAg positive carrier mothers. Details of the vaccination program have been previously described [2,16].

Study population

From January to December 2009, serum samples were collected from 3332 apparently healthy individuals (M:F = 1696:1636) younger than 30 years of age. All the subjects were recruited from schools, institutes, or workplaces in Taipei City, the same area in which the baseline and follow-up seroepidemiologic studies were conducted. The study protocol was approved by the National Taiwan University Hospital's Institutional Review Board.

The 3332 subjects consisted of 290 children <3 years of age enrolled from the well-baby clinic and nursery room of the Department of Pediatrics, National Taiwan University Hospital, and one day-care center; 453 children aged 3–6 years from four kindergartens; 715 children aged 6–13 years from two elementary schools; 595 adolescents aged 13–18 years from two middle schools and one high school; 406 college students aged 18–22 years from two universities; and subjects aged between 22 and 29 years including 495 graduate students from the graduate schools of our university and 378 new employees of two general hospitals and two local commercial companies.

All the subjects were voluntarily recruited through poster advertisements, or health staff invitations. Either the subjects themselves or their parents signed an informed consent and provided the vaccination history, which was recorded in a health booklet distributed to each newborn by the Department of Health (DOH), if available. Because the HBV vaccination program did not include all newborns until 1986, only the vaccination histories of those below 23 years of age (born after 1986) were included in the inquiries. Once an HBsAg positive carrier was detected, we not only checked their vaccination histories and family histories provided by the subjects themselves, but also verified their vaccination histories using the HBV vaccination database of the Department of Health and confirmed the family history by taking blood samples, if possible.

HBV serology

The presence of serum HBsAg, its antibody (anti-HBs), and hepatitis B core antibody (anti-HBc) was tested in all the subjects (Abbott Laboratories, North Chicago, IL, USA). Anti-HBs is considered positive if the titer is ⩾ 10 m IU/ml. The maternal HBsAg status was also investigated, if indicated.

HBV DNA detection/quantification

To elucidate any occult HBV infection, we assayed HBV DNA levels of anti-HBc positive and HBsAg negative subjects, irrespective of the presence of anti-HBs. HBV DNA viral load measurements were performed as described previously [17]. Briefly, HBV DNA was extracted from 50 μl of serum and subjected to polymerase chain reaction (PCR). Real-time PCR measurement was performed using the LightCycler analysis software, version 3.5 (Roche Diagnostics Applied Science, Mannheim, Germany). HBV genotypes were analyzed by PCR using type-specific primers, as described previously [18].

Statistics

Differences in frequency between groups were examined using the Chi-square test with Yates' correction or the Fisher's exact test, where appropriate. A p value of <0.05 was deemed to indicate statistical significance. A trend test was used to evaluate the cohort study.

Results

The universal vaccination program significantly decreased HBV prevalence

HBsAg prevalence in this and five previous seroepidemiologic surveys showed a clear effect: subjects who were born after the implementation of the universal HBV vaccination program had a low seropositive rate compared to those born before the implementation (Fig. 1). The prevalence of HBsAg and anti-HBc in children <15 years of age was 0.5% (9/1651) and 2.9% (45/1550), respectively. The prevalence rate of HBsAg in the population ⩽25 years of age, born in or after the year of the launch of the program, was 0.9% (Table 1). This is notably lower than that of subjects aged 26–30 years, who were born before the vaccination program (8.2%, 31/378) (p <0.0001, Chi-square test) (Table 1). Overall, HBsAg, anti-HBs, and anti-HBc seropositive rates were 0.9%, 55.9%, and 7.0%, respectively, in subjects born after the vaccination program (<25 years old) in 2009.

No increase in HBsAg prevalence with age by birth cohorts

Table 2 lists the HBsAg seropositive rates of each birth cohort born after the universal vaccination program, at different ages, in the five seroepidemiologic surveys conducted in 1989, 1994, 1999, 2004, and in the present study (2009) [3–7]. We did not include the cohort of those born from 1984 to 1986 when only neonates born to HBsAg-carrier mothers received HBV immunoprophylaxis. In the cohort born during the period 1987–1988, a trend towards a decrease of HBsAg positivity was observed 22 years after the primary vaccination. A similar trend was observed in all birth cohorts across all the surveys (Table 2). Though the HBsAg seropositivity did not increase in these birth cohorts, the anti-HBc seropositivity, which is a surrogate marker of natural infection, increased gradually in the longitudinal follow-up (Table 3).

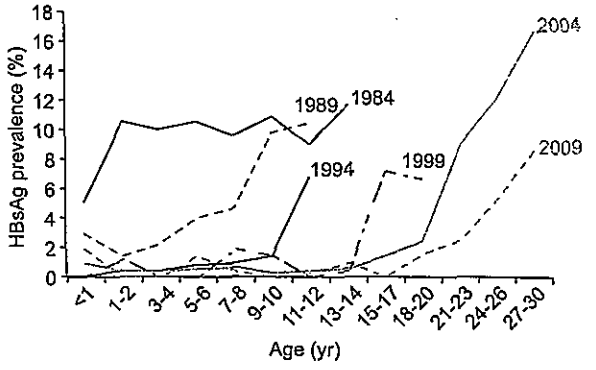


Fig. 1. Age-specific hepatitis B surface antigen seropositive rates in 1984, 1989, 1994, 1999, 2004, and 2009 in Taipei, Taiwan. In 1984, none of the subjects were under universal vaccination coverage. In 1989, only children <5 years of age were covered. Subsequently, children less than 10, 15, 20, and 25 years of age were covered by the universal vaccination in 1994, 1999, 2004, and 2009 respectively. Those who were born before the implementation of this program had a higher HBsAg carrier rate than those born after the implementation.

Please cite this article in press as: Niu Y-H, et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

Table 1. HBV seroprevalence 25 years after implementation of the universal vaccination in Taipei, Taiwan: HBsAg positive and anti-HBc positive rates (%).

Age (yr)	No. persons	HBsAg* (95% CI)	Anti-HBc alone (95% CI)	Anti-HBc + anti-HBs (95% CI)	Anti-HBs alone (95% CI)	Negativity (95% CI)#
<1	101	2.0 (1.7-2.3)	6.9 (6.4-7.4)	70.2 (69.4-71.2)	21.8 (21.0-22.6)	1.0 (0.8-1.2)
1-2	189	0	0	2.6 (2.5-2.8)	89.4 (89.1-89.7)	7.9 (7.6-8.2)
3-4	253	0	0	1.2 (1.1-1.3)	77.5 (77.2-77.8)	21.3 (21.0-21.6)
5-6	200	1.5 (1.4-1.6)	0	1.5 (1.4-1.6)	43.5 (43.0-44.0)	54.5 (54.0-55.0)
7-8	206	0.5 (0.4-0.6)	1.0 (0.9-1.1)	1.5 (1.3-1.6)	55.8 (55.3-56.3)	41.3 (40.8-41.7)
9-10	191	0	0	2.1 (1.9-2.2)	39.2 (38.8-39.8)	58.6 (58.1-59.1)
11-12	318	0.3 (0.3-0.4)	2.5 (2.4-2.6)	1.9 (1.8-2.0)	23.3 (23.0-23.5)	72.3 (72.1-72.6)
13-14	193	1.0 (0.9-1.1)	0.5 (0.4-0.6)	2.6 (2.4-2.7)	19.2 (18.8-19.6)	75.1 (74.7-75.6)
15-17	402	0.3 (0.2-0.3)	1.7 (1.7-1.8)	2.5 (2.4-2.6)	29.9 (29.6-30.1)	65.7 (65.4-65.9)
18-19	221	1.4 (1.3-1.5)	1.4 (1.3-1.5)	2.3 (2.1-2.4)	43.9 (43.5-44.3)	51.1 (50.7-51.6)
20-21	185	1.6 (1.5-1.8)	0	2.2 (2.0-2.3)	51.4 (50.8-51.9)	44.9 (44.3-45.4)
22-23	297	2.0 (1.9-2.1)	1.7 (1.6-1.8)	4.4 (4.2-4.5)	64.6 (64.3-65.0)	27.3 (27.0-27.6)
24	101	3.0 (2.7-3.3)	0	10.9 (10.3-11.5)	68.3 (67.4-69.2)	17.8 (17.1-18.6)
Total	2857	0.9 (0.9-0.9)	1.1 (1.1-1.1)	5.0 (5.0-5.0)	50.9 (50.9-50.9)	45.9 (45.8-45.9)
25	97	6.2 (5.7-6.7)	0	10.3 (9.7-10.9)	62.9 (61.9-63.9)	19.6 (18.8-20.4)
26-27	199	6.0 (5.8-6.3)	0	9.5 (9.3-9.8)	70.4 (69.9-70.8)	14.6 (14.2-14.9)
28-29	179	10.6 (10.3-11.0)	4.5 (4.2-4.7)	16.8 (16.4-1.2)	50.2 (48.7-50.8)	17.9 (17.5-18.3)

*All HBsAg positive subjects were anti-HBc positive.
#Negativity represents those subjects who were negative for all three HBV seromarkers, i.e. HBsAg, anti-HBc, and anti-HBs.
CI, confidence interval.

Sources of HBV infection in vaccine failures

We detected 25 HBsAg carriers born after the implementation of the universal infant vaccination program. All were confirmed to have received at least three doses of hepatitis B vaccine based on the subjects' own records and the DOH database. The histories of HBV infection in the families of these 25 subjects were investigated. One subject declined the inquiry and the family histories of two subjects could not be traced. Among the remaining 22 subjects, 17 had a HBsAg carrier mother (but not father), both parents of two of them were HBsAg positive, and two had a HBsAg carrier father. Only one subject had no family history of HBV infection, however, he did have a history of blood transfusion during early childhood. In other words, 86.4% (19/22) of the vaccination failures were likely related to the maternal HBsAg carrier status.

Detection of occult HBV infection

Among the subjects born after the launch of the universal vaccination program (n = 2954), 71 were anti-HBc positive and HBsAg negative. Twenty-one of these 71 subjects were anti-HBc positive and two of the 21 had detectable HBV DNA (4.7×10^3, and 2.7×10^3 copies/ml), while one of the remaining 50 subjects positive for both anti-HBc and anti-HBs was HBV DNA positive (2.0×10^3 copies/ml). All three were genotype C and born to HBsAg carrier mothers.

Among the 378 subjects born before the launch of the universal infant vaccination program, 71 were anti-HBc-positive and HBsAg-negative. Nine of the 71 were anti-HBc positive and anti-HBs negative. One of the nine subjects had detectable HBV DNA (mixed genotypes B and C, 3.8×10^3 copies/ml). Two of the remaining 62 subjects who were both anti-HBc and anti-HBs positive had detectable HBV DNA (1.3×10^3 and 1.6×10^3 copies/ml, respectively) (Table 4). Again, both were genotype C. The family histories of these three cases were not solicited.

Occult HBV infection was significantly more prevalent in subjects born before the implementation of the universal infant vaccination program than in those born after (3/378 *vs.* 3/2954, $p = 0.003$, Fisher's exact test). The frequency of occult infection

Please cite this article in press as: Niu Y-J, et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

Research Article

Table 2. HBsAg seropositive rates in birth cohorts born after the vaccination program in five consecutive surveys conducted in 1989, 1994, 1999, 2004, and 2009.

Birth year	1989		1994		1999		2004		2009		p value*
	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	
1987-1988	3/205 (1.46)	1	3/371 (0.81)	0.55 (0.09-3.43)	0/296 (0)	0 (0-1.54)	71/4088 (1.74)	1.19 (0.39-3.60)	5/262 (1.91)	1.31 (0.34-5.02)	0.07
1989-1993	-	-	2/574 (0.35)	1	7/455 (1.54)	4.28 (0.81-29.9)	51/6298 (0.81)	2.33 (0.62-9.53)	6/595 (1.01)	2.91 (0.67-14.28)	0.19
1994-1998	-	-	-	-	1/241 (0.41)	1	8/1790 (0.45)	1.08 (0.17-8.57)	3/606 (0.50)	1.13 (0.16-10.82)	1.00
1999-2003	-	-	-	-	-	-	7/1479 (0.47)	1	2/479 (0.42)	0.88 (0-3.75)	1.00
2004-2008	-	-	-	-	-	-	1/110 (0.91)	1	2/560 (0.36)	0.39 (0.05-4.29)	0.42
2009	-	-	-	-	-	-	-	-	2/101 (1.98)	-	-

* Trend test.
OR, Odds' ratio; CI, confidence interval.

Table 3. Anti-HBc seropositive rates in birth cohorts born after the vaccination program in four consecutive surveys conducted in 1994, 1999, 2004, and 2009.

Birth year	1994		1999		2004		2009		p value*
	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	N (%)	OR (95% CI)	
1987-1988	9/342 (2.63)	1	3/301 (1)	0.37 (0.08-1.51)	188/4088 (4.60)	1.78 (0.92-3.47)	15/262 (5.73)	2.25 (0.99-5.11)	0.002
1989-1993	11/604 (1.82)	1	22/461 (4.77)	2.70 (1.24-6.00)	149/6298 (2.37)	1.31 (0.71-2.40)	30/595 (5.04)	2.86 (1.44-5.69)	<0.001
1994-1998	-	-	6/161 (3.73)	1	23/1790 (1.28)	0.34 (0.14-0.81)	25/639 (3.91)	1.05 (0.44-2.54)	<0.001
1999-2003	-	-	-	-	17/1479 (1.15)	1	11/479 (2.30)	2.02 (0.96-4.27)	0.07
2004-2008	-	-	-	-	-	-	12/564 (2.13)	-	-

*To avoid the interference by maternal-transferred anti-HBc effect, we excluded data obtained in the first year of life. A trend test was used.
OR, Odds' ratio; CI, confidence interval.

in the anti-HBc-alone and anti-HBc plus anti-HBs groups, irrespective of the year of birth, was 10% (3/30) and 2.7% (3/112) (OR: 5.6; 95CI: 1.2–26.5; Fisher's exact test, $p = 0.036$), respectively. This suggests that the presence of anti-HBs may indicate a more complete protection and a lower risk of HBV carrier status than anti-HBc alone.

Discussion

In this 2009 survey, the seropositivity rates of the subjects born after the program were as follows: HBsAg 0.9%, anti-HBs 55.9%, and anti-HBc 7.0%. In contrast, in the baseline 1984 study, HBsAg, anti-HBs, and anti-HBc positive rates were 10%, 24.5%, and 28%, respectively [3]. Therefore, the younger generations in Taiwan now enjoy a low HBV prevalence.

In the 2004 study, we found higher HBsAg (1.5%) and anti-HBc (4.0%) seropostive rates in subjects aged 15–17 years (1986–89 birth cohorts), and HBsAg and anti-HBc seropostive rates of 2.1% and 6.8%, respectively, in those aged 18–19 years (1984–86 birth cohort) [7]. The 15–17 year old group in the 2004 study (HBsAg seropositive rate, 1.5%) is the same cohort as the 20–21 age group in the 2009 study, which had an almost identical HBsAg seropositive rate (1.6%). The HBsAg seropositive rate of the 18–19 age group in 2004 was 2.1%, similar to the 2.0% in 2009. The relatively higher HBsAg seropositivity of these two cohorts may be explained by the lower coverage rates of HBV vaccination. A nationwide seroepidemiologic survey conducted in the 6-year old subjects in 1993 showed a hepatitis B vaccination coverage rate (≥3 doses of vaccine) of 88.7% in the entire country [16]. According to the data provided by the Taiwan CDC, the national coverage rate increased to 97% in 2002 and later on (http://www.cdc.gov.tw/public/Data/09714425771.pdf). The importance of extensive primary vaccination coverage cannot be overemphasized. Such good coverage in infants could not be replaced or compensated by the later boost program because the chronic infection status is established early in life, and only rarely in the adolescence or young adulthood.

The birth cohort analysis (Table 3) showed no increase in HBsAg seropositive rates in subjects aged >20 years. After the primary vaccination in infancy, a universal booster strategy may not be necessary since the HBsAg seropositivity is not increasing [19–22]. Beyond early childhood, HBV infection is usually associated with a favorable outcome. The risk of chronic HBV infection decreases markedly with increasing age, with approximately 25% of preschool children and 2.7% of university students infected [23,24]. One recent study showed that immune memory to HBV vaccines may have disappeared in some university students

Please cite this article in press as: Niu Y-H et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

Table 4. Serum HBV DNA positivity rates in subjects with occult HBV infection: anti-HBc positive and negative HBsAg.

Positive serum HBV DNA	Anti-HBs (-) and anti-HBc (+)	Anti-HBs (+) and anti-HBc (+)	*p* value
Birth cohort*			
After (n = 2954)	2/21	1/50	0.15
Before (n = 378)	1/9	2/62	0.27

*2954 subjects were born after the implementation of the universal infant vaccination program in 1984 in Taiwan while 378 subjects were born before that point. These subjects were recruited from the general population as described in the "Study population" section.

[25]. This is consistent with our observation that anti-HBc seropositivity, but not that of HBsAg, increased after this age.

Mother-to-infant transmission remains the most important route of HBV acquisition in the post-vaccination era. A high vaccination coverage rate can rule out compliance as a concern for new HBsAg carriage in Taiwan. Intrauterine HBV infection [26] and a high maternal viral load [27] are possible underlying causes of vaccine failure in mother-to-infant transmission. Only a few horizontal transmitted infections remained in this study, perhaps through close family contact or occult infection.

The prevalence of occult HBV infection was about 0.1% (3/2954) in a population under universal vaccination program coverage. Occult HBV infection may cause problems in special circumstances, such as transfusion or organ donation. Once the majority of the donor population is born after the implementation of the universal program, we may exclude subjects with positive anti-HBc as donors to minimize the risk of occult HBV infection. This scenario is expected to occur in the near future, since most donors are young adults. The anti-HBc positive rate is now 6.2% in subjects aged <25 years, which is lower than that (80%) of the population not covered by the vaccination program [28].

To move toward the elimination of HBV infection, three issues must be addressed: (1) elimination of infectious sources, (2) interruption of all transmission routes, and (3) immunization of all susceptible individuals [29]. The program we describe here has successfully addressed the third issue. With respect to the first issue, the pool of infected people has been markedly reduced in the vaccinated population. An effective treatment strategy for the eradication of the virus from all the infected persons is now required. Most current treatments are unable to achieve this goal [30]. Concerning the second issue, the mother-to-infant transmission route must be interrupted, perhaps by administering antiviral agents to pregnant mothers [31]. In addition, patients with HBV infection, even the occult one, should be excluded from use in blood transfusion and organ transplantation [32]. The illicit drug user and sexual transmission routes should be handled by general preventive measures and immunization.

Genotype B is dominant in Taiwan and outnumbers genotype C at a 3:1 ratio [33]. However, genotype C was prevalent in the vaccination failure cases in our previous study [34]. This study demonstrated that genotype C predominated in occult HBV infections. HBeAg seroconversion in genotype C patients occurred decades later compared to those with other genotypes [33]. Genotype C-infected pregnant mothers tend to be HBeAg positive and have a high viremia; thus, these mothers are more likely to transmit the infection to their infants [34].

In conclusion, our data demonstrate that universal vaccination in infancy provides long-term protection against HBV infection. This strategy transformed a hyperendemic area into one of low prevalence. Elimination of this infection in the next several decades is therefore feasible. Mother-to-infant transmission remains the key route of vaccine failure that needs to be overcome. To achieve complete control of HBV infection, an effective strategy for detecting all the vaccination failure cases is needed, including occult infection, which would allow implementation of an appropriate treatment as early as possible.

Financial support

This study was supported by Grants from the National Taiwan University Hospital (NTUH-98P23).

Conflict of interest

The authors who have taken part in this study declared that they do not have anything to disclose regarding funding or conflict of interest with respect to this manuscript.

Acknowledgements

We thank Miss. Ro-Lan Han and Miss. Li-Chin Fan for subject enrolment and administrative work.

References

[1] Chen DS, Hsu NHM, Sung JL, Hsu TC, Hsu ST, Kuo YT, et al. A mass vaccination program in Taiwan against hepatitis B virus infection in infants of hepatitis B surface antigen-carrier mothers. JAMA 1987;257:2597–2603.
[2] Hsu HM, Chen DS, Chuang CH, Lu JCF, Jwo DM, Lee CC, et al. Efficacy of a mass hepatitis B vaccination program in Taiwan: studies on 3464 infants of hepatitis B surface antigen-carrier mothers. JAMA 1988;260:2231–2235.
[3] Hsu HY, Chang MH, Chen DS, Lee CY, Sung JL. Baseline seroepidemiology of hepatitis B virus infection in children in Taipei, 1984: a study just before mass hepatitis B vaccination program in Taiwan. J Med Virol 1986;18:301–307.
[4] Tsen YJ, Chang MH, Hsu HY, Lee CY, Sung JL, Chen DS. Seroprevalence of hepatitis B virus infection in children in Taipei, 1989: five years after a mass hepatitis B vaccination program. J Med Virol 1991;34:96–99.
[5] Chen HL, Chang MH, Ni YH, Hsu HY, Lee PI, Lee CY, et al. Seroepidemiology of hepatitis B virus infection in children. JAMA 1996;276:906–908.
[6] Ni YH, Chang MH, Huang LM, Chen HL, Hsu HY, Chiu TY, et al. Hepatitis B virus infection in children and adolescents in a hyperendemic area: 15 years after mass hepatitis B vaccination. Ann Intern Med 2001;135:796–800.
[7] Ni YH, Huang LM, Chang MH, Yen CJ, Lu CY, You SL, et al. Two decades of universal hepatitis B vaccination in Taiwan: impact and implication for future strategies. Gastroenterology 2007;132:1287–1293.
[8] Chang MH, Chen CJ, Lai MS, Hsu HM, Wu TC, Kong MS, et al. Universal hepatitis B vaccination in Taiwan and the incidence of hepatocellular carcinoma in children. N Engl J Med 1997;336:1855–1859.
[9] Chang MH, Chen THH, Hsu HM, Wu TC, Kong MS, Liang DC, et al. Prevention of hepatocellular carcinoma by universal vaccination against hepatitis B virus: the effect and problems. Clin Cancer Res 2005;11:7953–7957.
[10] Chang MH, You SL, Chen CJ, Liu CJ, Lee CM, Lin SM, et al. Decreased incidence of hepatocellular carcinoma in hepatitis B vaccinees: a 20-year follow-up study. J Natl Cancer Inst 2009;101:1348–1355.
[11] Ni YH, Chen DS. Hepatitis B vaccination in children: the Taiwan experience. Pathol Biol (Paris) 2010;58:296–300.
[12] Hsu HY, Chang MH, Ni YH, Chiang CL, Chen HL, Wu JF, et al. No increase in prevalence of hepatitis B surface antigen mutant in a population of children and adolescents who were fully covered by universal infant immunization. J Infect Dis 2010;201:1192–1200.

Please cite this article in press as: Ni Y-H et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

Research Article

[13] Torbenson M, Thomas DL. Occult hepatitis B. Lancet Infect Dis 2002;2:479–486.

[14] Liu CJ, Lo SC, Kao JH, Tseng PT, Lai MY, Ni YH, et al. Transmission of occult hepatitis B virus by transfusion to adult and pediatric recipients in Taiwan. J Hepatol 2006;44:39–46.

[15] Su WJ, Ho MC, Ni YH, Wu JF, Jeng YM, Chen HL, et al. Clinical course of de novo hepatitis B infection after pediatric liver transplantation. Liver Transpl 2010;16:215–221.

[16] Hsu HM, Lu CF, Lee SC, Lin SR, Chen DS. Seroepidemiologic survey for hepatitis B virus infection in Taiwan: the effect of hepatitis B mass immunization. J Infect Dis 1999;179:367–370.

[17] Ni YH, Chang MH, Chen PJ, Tsai KS, Hsu HY, Chen HL, et al. Viremia profiles in children with chronic hepatitis B infection and spontaneous e antigen seroconversion. Gastroenterology 2007;132:2340–2345.

[18] Yeh SH, Tsai CY, Kao JH, Liu CJ, Kuo TJ, Lin MW, et al. Combined real time PCR quantification and signature single nucleotide polymorphism genotyping of hepatitis B virus in one-tube reaction. J Hepatol 2004;41: 659–666.

[19] Lu CY, Chiang BL, Chi WK, Chang MH, Ni YH, Hsu HM, et al. Waning immunity to plasma-derived hepatitis B vaccine and the need for boosters fifteen years after neonatal vaccination. Hepatology 2004;40:1415–1420.

[20] McMahon BJ, Bruden DL, Petersen KM, Bulkow LR, Parkinson AJ, Nainan O, et al. Antibody levels and protection after hepatitis B vaccination: results of a 15-year follow-up. Ann Intern Med 2005;142:333–341.

[21] Lu CY, Ni YH, Chiang BL, Chen PJ, Chang MH, Chang LY, et al. Humoral and cellular immune responses to a hepatitis B virus vaccine booster fifteen to eighteen years following neonatal immunization. J Infect Dis 2008;197:1419–1426.

[22] McMahon BJ, Dentinger CM, Bruden D, Zanis C, Peters H, Hurlburt D, et al. Antibody levels and protection after hepatitis B vaccine: results of a 22-year follow-up study and response to a booster dose. J Infect Dis 2009;200:1390–1396.

[23] Beasley RP. Rocks along the road to the control of HBV and HCC. Ann Epidemiol 2009;19:231–234.

[24] Beasley RP, Hwang LY, Lin CC, Ko YC, Twu SJ. Incidence of hepatitis among students at a university in Taiwan. Am J Epidemiol 1983;117:213–222.

[25] Jan CF, Huang KC, Chien YC, Greydanus DE, Davies HD, Chiu TY, et al. Determination of immune memory to hepatitis B vaccination through early booster response in college students. Hepatology 2010;51:1547–1554.

[26] Tang JR, Hsu HY, Lin HH, Ni YH, Chang MH. Hepatitis B surface antigenemia at birth: a long-term follow up study. J Pediatr 1998;133:374–377.

[27] Wang Z, Zhang J, Yang H, Li X, Wen S, Guo Y, et al. Quantitative analysis of HBV DNA level and HBeAg titer in hepatitis B surface antigen-positive mothers and their babies: HBeAg passage through the placenta and the rate of decay in babies. J Med Virol 2003;71:360–366.

[28] Sung JL. Hepatitis B. Virus infection and its sequelae in Taiwan. Gastroenterol Jpn 1984;19:363–366.

[29] Chen DS. Toward elimination and eradication of hepatitis B. J Gastroenterol Hepatol 2010;25:19–25.

[30] Lok AS, McMahon BJ. Chronic hepatitis B: update 2009. Hepatology 2009;50:661–662.

[31] Xu WM, Cui YT, Wang L, Yang H, Liang ZQ, Li XM, et al. Lamivudine in late pregnancy to prevent perinatal transmission of hepatitis B virus infection: a multicentre, randomized, double-blind, placebo-controlled study. J Viral Hepat 2009;16:94–103.

[32] Marshall DA, Kleinman SH, Wong JB, et al. Cost-effectiveness of nucleic acid test screening of volunteer blood donations for hepatitis B, hepatitis C and human immunodeficiency virus in the Unites States. Vox Sang 2004;86:28–40.

[33] Ni YH, Chang MH, Wang KJ, et al. Clinical relevance of hepatitis B virus genotype in children with chronic infection and hepatocellular carcinoma. Gastroenterology 2004;127:1733–1738.

[34] Wen WH, Chen HL, Ni YH, Hsu HY, Kao JH, Hu FC, et al. Secular trend of viral genotype distribution in children with chronic hepatitis B virus infection after universal infant immunization. Hepatology 2011;53:429–436.

Please cite this article in press as: Ni YH, et al. Minimization of hepatitis B infection by a 25-year universal vaccination program. J Hepatol (2012), http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2012.05.021

別紙様式第 2-1
番号 8

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 7 月 17 日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄
一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン		研究報告の公表状況	Virology journal 2012; 9(2)	公表国 中国	
販売名 （企業名）	①献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL　（ベネシス） ②献血ヴェノグロブリン IH5%静注 1g/20mL　（ベネシス） ③献血ヴェノグロブリン IH5%静注 2.5g/50mL　（ベネシス） ④献血ヴェノグロブリン IH5%静注 5g/100mL　（ベネシス） ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　（ベネシス） ⑥グロブリン筋注 450mg/3mL「ベネシス」　（ベネシス） ⑦グロブリン筋注 1500mg/10mL「ベネシス」　（ベネシス）					

研究報告の概要

背　　景

B 型肝炎ウイルス(HBV)は最も重要なヒト病原体の一つで、食用動物でのその存在は、公衆衛生に重大な脅威である。疫学的研究は、ガボンとコンゴのヒト集団に相当する大型類人猿での HBV 感染の高い有病率を示した。更にまた、我々のチームはブタでの HBV の存在を発見し、食用動物における HBV 感染の可能性を示した。

ヒトが食用動物関連の HBV 変異型に感染した証拠は今のところないが、食用動物における HBV の存在は研究者と一般市民にはより大きな注目に値する。鶏は世界中でヒトによって広く消費されているが、鶏が HBV 感染に罹っているかどうかは明らかでない。本研究の目的は、HBV が鶏の血清及び肝臓に存在するかどうかを判断することであった。

結　　果

血清検体の高いパーセンテージは、HBsAg（28.68%、37/129）、抗 HBs（53.49%、69/129）及び抗 HBc（17.05%、22/129）が陽性であることが分かった、ところが HBeAg と抗 HBe の検体はそれぞれ 4.65%（6/129）と 9.3%（12/129）だけ検出した。129 の血清検体の僅か 3 つは、HBsAg と HBeAg が陽性だった。TEM によるこれらの血清検体の更なる分析は、HBV の完全で空のウィルス粒子と非常に類似したサイズと形態が 2 種類の粒子を含むことが分かった。HBV の Dane 粒子であるように見えた 40nm の直径のものは、そして他は 20nm の直径で、ヒト血清中の HBV の小さな球状粒子と類似していた。

免疫組織化学染色は、鶏からの肝臓組織が HBsAg と HBcAg に陽性であることを示した。顕微鏡下で、HBsAg は肝細胞の細胞質で発見された、一方 HBcAg は主に肝細胞の核の中に配布していた。その上、幾つかのリンパ球は HBV が鶏に病原性であることを示した門脈部と肝細胞の間で見つかった、そして HBV の複製はセクションで観察される肝炎障害に対して責任があるかもしれない。

193 の肝臓検体の内、僅か二つが同じ配列の HBV DNA を含むことが分かった。この DNA は、それぞれ既知の HBV 株 EF157291（B 型肝炎ウイルス分離株 B3586-YKH94、完全なゲノム、日本）のヌクレオチド配列の 92.2%を、そして HBV 株 AB014397（B 型肝炎ウイルス、ゲノム DNA、完全配列、分離株 38Y20HCC、日本）のヌクレオチド配列の 97.9%を共有していた。

議　　論

（ 略 ）

使用上の注意記載状況・
その他参考事項等

代表として献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL の記載を示す。

2. 重要な基本的注意

(1)本剤の原材料となる献血者の血液については、HBs 抗原、抗 HCV 抗体、抗 HIV-1 抗体、抗 HIV-2 抗体及び抗 HTLV-I 抗体陰性で、かつ ALT（GPT）値でスクリーニングを実施している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV 及び HCV について核酸増幅検査（NAT）を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該 NAT の検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した血漿を原料として、Cohn の低温エタノール分画で得た画分からポリエチレングリコール 4000 処理、DEAE セファデックス処理等により人免疫グロブリンを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において 60℃、10 時間の液状加熱処理、ウイルス除去膜によるろ過処理及び pH3.9～4.4 の条件下での液状インキュベーション処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

結　　論

結論として、HBV 抗原と抗体の高い有病率は鶏の血清と肝臓検体で見つかり、鶏での HBV 感染症を示した。
鶏で見つかった HBV がヒト HBV と同じであることが確認されることができるならば、鶏の HBV 感染は鶏、或いは鶏製品で働く人々に大変重要な危険性を意味するだろう。

報告企業の意見	今後の対応
HBV は直径 42nm の球形をした DNA ウイルスで、ウイルス粒子は二重構造をしており、ウイルス DNA をヌクレオカプシドが包む直径約 27nm のコア粒子と、これを被うエンベロープから成り立っている。万一、原料血漿に HBV が混入したとしても、BVD 及び BHV をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、本剤の製造工程において不活化・除去されると考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

Tian et al. Virology Journal 2012, 9:2
http://www.virologyj.com/content/9/1/2

VIROLOGY JOURNAL

RESEARCH Open Access

Detection of Hepatitis B virus in serum and liver of chickens

Jijing Tian[1], Kangkang Xia[1,2], Ruiping She[1*], Wengui Li[1,3], Ye Ding[1], Jiande Wang[2], Mingyong Chen[1*] and Jun Yin[1]

Abstract

Hepatitis B virus (HBV) is one of the most important human pathogens. Its existence in food animals could present a significant threat to public health. The objective of this study was to determine if HBV is present in serum and liver of chickens. A total of 129 serum samples from broiler chickens were collected for the detection of HBV antigens and antibodies, and 193 liver samples were tested for HBV DNA sequence by PCR and for the existence of HBV antigens by immunohistochemistry. The overall prevalence of HBsAg, anti-HBs, anti-HBc was 28.68%, 53.49%, 17.05%, respectively, whereas HBeAg, anti-HBe were barely detectable. Three serum samples were found to be positive for both HBsAg and HBeAg. Further analysis of these samples with transmission electron microscopy (TEM) revealed two morphologic particles with 20 nm and 40 nm in diameter, which were similar to small spherical and Danes particles of HBV. The viral DNA sequence identified in two of the chicken livers shared 92.2% of one known HBV strain and 97.9% nucleotide sequence of another HBV strain. Our results showed the existence of HBV in chickens. This would present a significant risk to people who work with live chickens or chicken products if HBV found in chicken could be confirmed to be the same as human HBV.

Background

Hepatitis B virus (HBV) is one of the most important human pathogens. More than 350 million people worldwide are persistently infected with HBV and are at risk of developing chronic liver disease, cirrhosis and hepatocellular carcinoma [1]. While vertical transmission of HBV from mother to neonate always results in chronic hepatitis, infection during adulthood results in lifelong protective immunity [2]. Although measures such as vaccination have been taken for years, the prevalence of HBV has not been controlled effectively, and it is still a major threat to human health.

The HBV genome is a relaxed circular DNA of ~ 3 200 nucleotides and consists of full length of the negative strand and a shorter positive strand. Serologic markers of hepatitis B virus infection include both viral antigens (surface antigen, HBsAg, and e antigen, HBeAg) and antibodies (anti-HBs, anti-HBc, anti-HBe). HBsAg is the most frequently used to screen for the presence of HBV infection. The presence of HBeAg in a host's serum is associated with much higher rates of viral replication and enhanced infectivity [3]. Detection of all the serologic markers is meaningful for clinical diagnosis of HBV in human.

Infection of HBV has already been documented in non-human primates (NHPs)[4] such as chimpanzees [5,6] and gorillas [7,8] in sub-Saharan Africa; gibbons and orangutans in South-East Africa [7,9]. Epidemiological studies have shown a high prevalence of HBV infection in great apes, that is comparable to human population in Gabon and Congo [7]. Furthermore, our team has found the existence of HBV in swine [10], indicating the possibility of HBV infection in food animals. Although there is currently no evidence that human population have been or are infected with food animal-associated HBV variants, existence of HBV in food animals deserves greater attention from researchers and the general public. Chickens are widely consumed by people all over the world, but it is not clear whether chickens have HBV infection. The objective of this project was to determine if HBV is present in chickens.

Results

High percentages of the serum samples were found to be positive for HBsAg (28.68%, 37/129), anti-HBs

* Correspondence: sheruiping@126.com; bjmychen@sohu.com
[1]Department of Veterinary Pathology, Key Laboratory of Zoonosis of Ministry of Agriculture, College of Veterinary Medicine, China Agricultural University, Beijing, 100193, China
Full list of author information is available at the end of the article

Table 1 Detection of HBV Markers in Chicken Serum Samples

	Samples (n)	Positive Samples (n)	Positive Ratio (%)
HBsAg	129	37	28.68
anti-HBs	129	69	53.49
anti-HBc	129	22	17.05
HBeAg	129	6	4.65
anti-HBe	129	12	9.30
HBsAg + HBeAg	129	3	2.33

(53.49%, 69/129) and anti-HBc (17.05%, 22/129), whereas HBeAg and anti-HBe was detected only in 4.65% (6/129) and 9.3% (12/129) of the samples respectivel. Only three of the 129 serum samples were positive for both HBsAg and HBeAg (Table 1).

Further analysis of these serum samples with TEM found that they contained two types of particles, the size and morphology of which were very similar to complete and empty viral particles of HBV (Figure 1). The one with a diameter of 40 nm appeared to be HBV Dane particle; and the other, with a diameter of 20 nm, was similar to small spherical particles of HBV in human serum.

Immunohistochemical staining showed that liver tissues from chickens were positive for HBsAg and HBcAg

Table 2 Detection of HBsAg and HBcAg in Chicken Liver Samples By Immunohistochemical Staining (n = 193)

	HBsAg	HBcAg
Positive Samples (n)	106	86
Positive Ratio (%)	54.9	44.6

(Table 2). Under the microscope, HBsAg was detected in cytoplasm of hepatocytes, while HBcAg was mainly distributed in the nucleus of hepatocytes. In addition, a number of lymphocytes were found in the portal area and among hepatocytes, indicating that HBV was pathogenic to chickens, and replication of HBV might be responsible for the hepatitis lesions observed in the sections (Figure 2).

Of the 193 liver samples, only two were found to contain HBV DNA (Figure 3) of the same sequence (Figure 4). This DNA shared 92.2% of the nucleotide sequence with the known HBV strain EF157291 (Hepatitis B virus isolate B3586-YKH94, complete genome, Japan)[11] and 97.9% of nucleotide sequence for the HBV strain AB014397 (Hepatitis B virus genomic DNA, complete sequence, isolate 38Y20HCC, Japan)[12], respectively (Table 3).

Discussion

The present study is the first to report high prevalence of HBV infection in chickens, as indicated by the findings that 28. 68% and 53.49% of the chicken serum

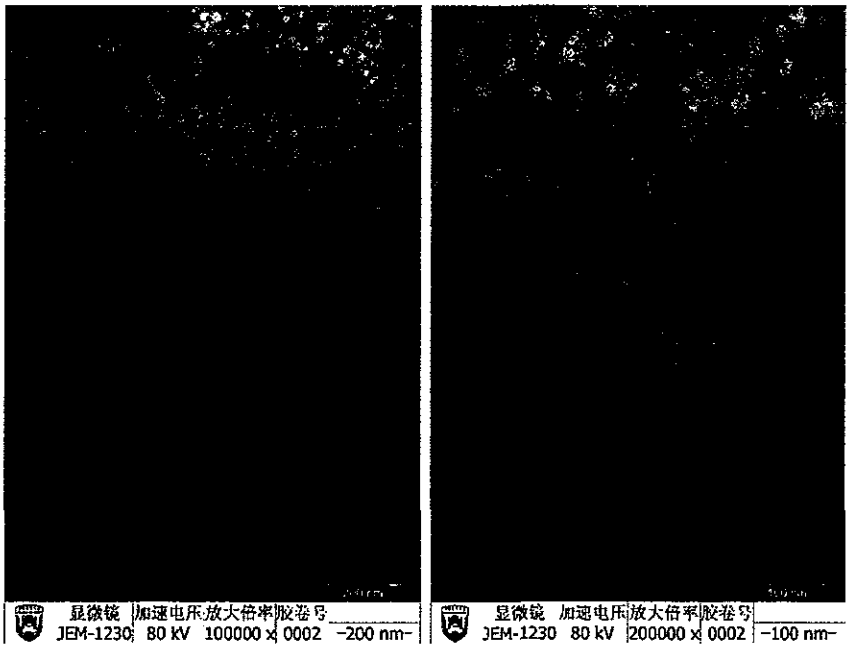


Figure 1 Observation of hepatitis B virus like particles in chicken serum with TEM. Arrows show HBV-like particles (A, Bar 200 nm; B, Bar = 100 nm).

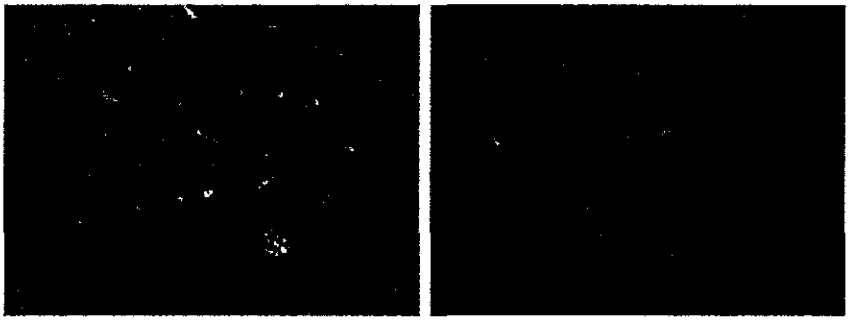


Figure 2 Immunohistochemical analysis of HBsAg and HBcAg in liver tissues of chickens. HBsAg was distributed mostly in cytoplasm of hepatocytes (A, 400×), and HBcAg was distributed mostly in the nucleus of hepatocytes (B, 400×).

samples were positive for HBsAg and anti-HBs, and 54.9% and 44.6% of the liver samples were positive for HBsAg and HBcAg (Table 1, Table 2). Hepatitis B virus has been reported in other mammals (orthohepadnaviruses) and birds (avihepadnaviruses). Avihepadnaviruses have been reported in various duck species (WMHBV), grey herons (HHBV), geese (GHBV), Ross's goose (RGHBV), storks (STHBV), and cranes (CHBV) [13-15]. However, there were no reports of chicken HBV in the literature. How did the chickens get infected by HBV is unknown. Duck hepatitis B virus was the first of its kind to utilize an avian host where it was found in the bloodstream of an egg-laying duck. The virus was passed on from the infected duck to the egg resulting in congenital infection [16]. It is conceivable that the same could happen with HBV in chickens. The fact that different HB antigens and antibodies were detected in some of the chicken serum and liver samples but not in others might reflect different stages of HBV infections in the chickens. Interestingly, two types of viral particles, found in serum samples positive for both HBsAg and HBeAg, were similar to Dane particle and small spherical particle of human HBV in size and morphology, providing morphological evidence of HBV infection in chickens.

Immunohistochemistry staining is a common method for HBV detection [17]. Others reported that the marker and intensity of hepatocytes staining positive for HBsAg, as well as the cellular pattern of distribution, were related to HBV replication in patients with HBeAg-positive chronic hepatitis B (CHB). In general, HBsAg was located in the cytoplasm, whereas HBcAg was predominantly located in the nucleus in livers of HBV infection [18,19]. In this study, positive signals of HBsAg and HBcAg were both observed in liver specimens from chickens. Distribution pattern of the two antigens was

Figure 3 Identification of the PCR products ofHBV in livers of chickens by agarose gel electrophoresis. 1, 5: DL2000 DNA marker; 2: Negative control; 3, 4: Liver samples.

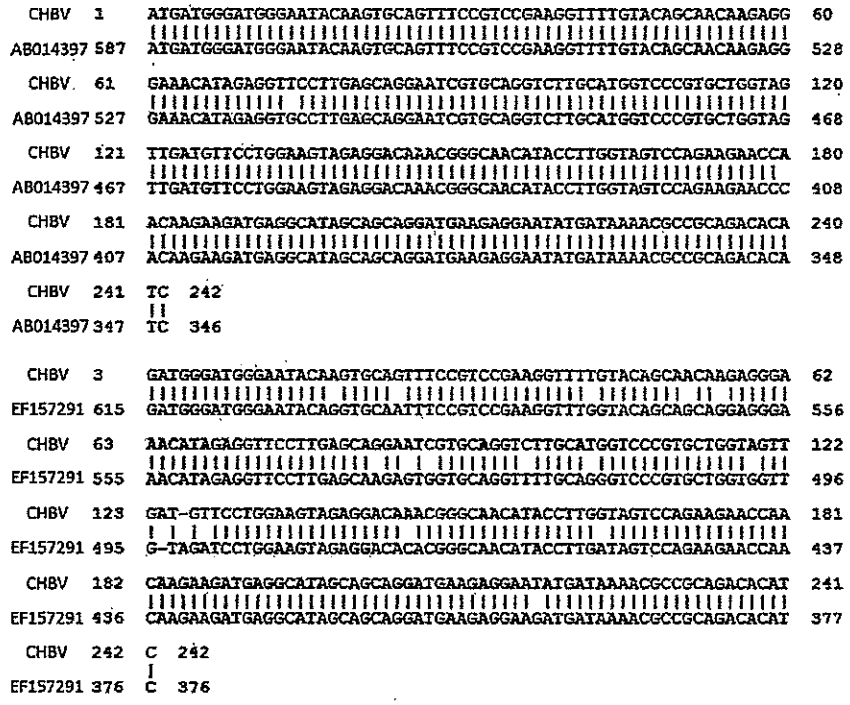


Figure 4 Sequences of HBV in chickens and two related Human HBV strains. DNA sequence of HBV in chickens shared 92.2% of human HBV strain EF157291 and 97.9% of the nucleotide sequence of AB014397.

the same as observed in HBV patients. Moreover, inflammatory signs observed in some of the liver samples such as accumulation of lymphocytes in the portal area and among hepatocytes suggest that HBV infection could lead to pathological changes in the liver of chickens. However, prevalence of HBsAg and HBcAg in liver was much higher than HBV DNA detected by PCR method. We found the same phenomenon in HEV (hepatitis E virus) infection in swine and chicken (data not show).

Alhough hepadnaviruses are usually host specific, HBV infections also occur frequently in chimpanzee, gorillas, gibbon and other ape populations in sub-Saharan Africa and South-east Asia where the HBV infection rate in apes was remarkably comparable to that of human population in these areas [5-9]. Scientists are concerned about the ability of HBV to cross species barriers. PCR detection in this study confirmed the existence of HBV in liver tissues of chickens. Although HBV DNA was detected in only two of the 193 liver samples, the DNA sequences from the two samples were identical, indicating the same HBV strain might be responsible for the HBV infection in chickens. It was not surprising that why HBV DNA was only detected in two liver samples that were positive for HBsAg and HBcAg by immunochemistry method, because HBV was only detectable during the incubation period and many of the chickens probably had passed that period.

Most HBV infection in human can be traced to neonatal transmission, drug-injection, sexual activity, or occupational exposure. Other, causes of infection, less frequent, include household contact, hemodialysis, transmission from a surgeon [20], and a receipt of organ or blood products. However, for more than 20%-30% of patients, no clear risk factors could be identified. The high homology of DNA sequence of HBV from chicken with the known human HBV strains is of concern from a public health point of view, because it raises the

Table 3 Comparison of Amplified Sequences from the HBV in Chickens with That from HBV EF157290 and AB014397*

Strain No.	ChickenHBV		EF157290	AB014397
ChickenHBV		100.0	92.2	97.9
	0.0		92.2	97.9
EF157290	8.3	8.3		91.5
AB014397	2.2	2.2	9.1	

*The identities (%) are in the right-up part of the table, and the divergences (%) are in the left-down part of the table.

possibility that the HBV found in chicken could be the same or a variant of HBV that is responsible for hepatitis B in human. Our team has reported the presence of HBV in another food animal, the swine [10]. It is very common that people come into contact with food animals such as swine and chickens or food animal products. If chickens were infected by HBV, chicken meat could become a source of infection for people who work with it, especially when they have accidental cuts in their hands. However, it is premature to speculate that HBV infection in food animals such as chicken might contribute to the spread of HBV among human populations. Further research is needed to confirm how common HBV infection is in chickens and whether HBV can be passed from people to chickens and vice versa.

Conclusions

In conclusion, high prevalence of HBV antigens and antibodies was found in chicken serum and liver samples, indicating HBV infection in chickens. If the HBV found in chicken could be confirmed to be the same as human HBV, HBV infection in chicken would represent a very significant risk to people who work with chickens or chicken products.

Methods

Broiler chickens (42 days old) were processed in a slaughter house in Beijing, following the standard "Chicken Slaughtering Operation Procedures GB/T 19478-2004". Blood was drawn from the jugular vein immediately after the chickens were stunned by an electric shock. Serum was collected after blood samples were allowed to coagulate and centrifuged, and was kept frozen at -20°C until analysis. All serum samples were screened for hepatitis B serological markers (anti-HBc, HBsAg, anti-HBs, HBeAg, and anti-HBe) with respective enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA) kits (SIIC Kinghaw Biotech Co. Ltd., Beijing, China) according to the manufacturer's recommendations. The absorbance was read at 450 nm (Multiscan Titertek MCC). Blank, negative and positive controls were included on each plate.

To obtain ultrastructural evidence for the presence of HBV-related viral particles in chickens, the three serum samples found to be positive for both HBsAg and HBeAg, were centrifuged at 4000 rpm for 10 min, then 0.01 M poly ethylene glycol 6000 (PEG6000) was added into the subsequent upper aqueous phase. After incubation overnight at 4°C, the serum was centrifuged at 20,000 rpm for 1 h, resuspended in PBS and stained for 1 min with 1% uranyl acetate. For the thin section study, the fixative used was 2.5% paraformaldehyde-glutaraldehyde in 0.1 M cacodylate buffer (pH 7.4). The sections were postfixed in 1% OsO4 for 1 h, and treated with 1% uranyl acetate, dehydrated in ethanol and embedded in Epon 812. All electron micrographs were obtained with JEV1230 transmission electron microscope (JEOL Ltd., Tokyo, Japan) at 80 kV.

Liver samples were collected when chickens were eviscerated. A portion of each liver sample was fixed in 2.5% (v/v) glutaraldehyde-polyoxymethylene solution immediately with the rest frozen at -80°C for the detection of HBV DNA sequence. The fixed liver tissue samples were dehydrated and embedded in paraffin wax. Serial paraffin sections (4 μm) were prepared and kept at 37°C for more than 12 h. The sections were immersed in three consecutive washings in xylene for 5 min to remove paraffin, and then hydrated with five consecutive washings with alcohol in descending order 100, 95, 80, 70, 50% and deionized water respectively. Sections were incubated for 15 min and blocked with 3% peroxide at room temperature for endogenous peroxidase ablation. The following steps were carried out in a moist chamber. Sections were incubated with blocking buffer (Zymed Laboratories Inc., San Diego, USA) containing 20% normal goat serum (Gibco) and 80% PBS (0.01 M, pH 7.4) at room temperature for 30 min. After discarding the goat serum, sections were incubated in primary monoclonal antibodies against HBsAg and HBcAg (Zhongshan Golden Bridge Biotech Co. Ltd., Beijing, China) diluted in PBS, for 2 h at 37°C. After rinsing for 3 times in PBS-T, sections were incubated with the goat anti-mouse IgG conjugated with HRP (Sigma) at 37°C for 40 min and rinsed 3 times in PBS-T. The specimens were incubated with 3,3-diaminobenzidin (DAB; Zymed Laboratories Inc) at room temperature for 10 min in the dark. Finally, sections were stained with hematoxylin for 5 min after rinsing for 3 times in PBS-T, dehydrated, and mounted with neutral gums. Sections for the negative control group were prepared by the same steps as described above but with the HBsAg and HBcAg antibodies replaced by PBS.

Liver tissues (50 mg) were homogenized in 450 μl of Tris/NaCl/EDTA. After addition of $NaDodSO_4$ (Sodium dodecyl sulfate) and proteinase K to a final concentration of 1% (wt/vol) and 1 mg/ml, respectively, the homogenates were incubated for 24 h at 42 ~ 48°C before they were extracted with a phenol- chloroform-isoamylol, 25:24:1 (vol/vol) mixture. The DNA was precipitated by adding 1/10 vol of 3 M NaOAc and 2 vol of 100% EtOH. After being centrifuged and washed with 70% ice-cold ethanol, the DNA was dried under vacuum at room temperature. It was redissolved in TE buffer and store at -20°C.

Two primers [21] were used to detect genetically divergent strains of HBV (Table 4). Amplification conditions for PCR was: 30 cycles of 94°C for 4 min; 94°C for 30 s, 58°C for 30 s, 72°C for 40 s; 72°C for 5 min. Negative (water) control was included in each detection to

Table 4 Primers Used in Detection of Hepatitis B Virus in Chicken Livers

	Sequence	Location	Product Size
HBVs-F1	5'-GAT GTG TCT GCG GCG TTT TA-3'	S gene	281 bp
HBVs-R1	5'- TTTTTCACCTCTGCCTAATCA-3'		

exclude the possibility of contamination and failure of amplification. PCR products were sequenced by BGI (Beijing Genomics Institute, China). The sequences were compared to two known Japan HBV strains [11,12] in the GenBank database over the Internet by using the NCBI BLAST server [22].

Acknowledgements
This work was supported by the National Natural Science Foundation of China (Grant No. 30871853 and No. 31072110) and Innovative Research Teams in Chinese Universities (No. IRT0866).
We thank Dr. Changzheng Wang from Kentucky State University for his critical review of the manuscript.

Author details
[1]Department of Veterinary Pathology, Key Laboratory of Zoonosis of Ministry of Agriculture, College of Veterinary Medicine, China Agricultural University, Beijing, 100193, China. [2]Beijing Huadu Broiler Corporation, Beijing 102211, China. [3]College of Animal Science and Technology, Yunnan Agricultural University, Kunming 650201, China.

Authors' contributions
JJT carried out the immunohistochemical staining and drafted the manuscript. KKX carried out the serological analysis of hepatitis B virus markers and PCR detection. WGL carried out the homology analysis. YD and MYC completed the transmission electron microscope investigations. JDW and JY did the pretreatment of animal samples. RPS carried out the design of the study and revision of the manuscript. JJT and KKX are joint first authors of this paper. All authors read and approved the final manuscript.

Competing interests
The authors declare that they have no competing interests.

Received: 28 June 2011 Accepted: 4 January 2012
Published: 4 January 2012

References

1. Rehermann B, Nascimbeni M: **Immunology of hepatitis B virus and hepatitis C virus infection.** *Nat Rev Immunol* 2005, 5:215-229.
2. Fattovich G: **Natural history and prognosis of hepatitis B.** *Seminars in Liver Dis* 2003, 23:47-58.
3. Hoofnagle JH: **Serologic markers of hepatitis B virus infection.** *Annu Rev Med* 1981, 32:1-11.
4. Robertson BH, Margolis HS: **Primate hepatitis B viruses–genetic diversity, geography and evolution.** *Rev Med Virol* 2002, 12:133-141.
5. Takahashi K, Brotman B, Usuda S, Mishiro S, Prince AM: **Full-genome sequence analyses of hepatitis B virus (HBV) strains recovered from chimpanzees infected in the wild: implications for an origin of HBV.** *Virology* 2000, 267:58-64.
6. MacDonald DM, Holmes EC, Lewis JC, Simmonds P: **Detection of hepatitis B virus infection in wild-born chimpanzees (Pan troglodytes verus): phylogenetic relationships with human and other primate genotypes.** *J Virol* 2000, 74:4253-4257.
7. Starkman SE, MacDonald DM, Lewis JC, Holmes EC, Simmonds P: **Geographic and species association of hepatitis B virus genotypes in non-human primates.** *Virology* 2003, 314:381-393.
8. Makuwa M, Souquiere S, Telfer P, Bourry O, Rouquet P, Kazanji M, Roques P, Simon F: **Hepatitis viruses in non-human primates.** *J Med Primatol* 2006, 35:384-387.
9. Sa-nguanmoo P, Thongmee C, Ratanakorn P, Pattanarangsan R, Boonyarittichaikij R, Chodapisitkul S, Theamboonlers A, Tangkijvanich P, Poovorawan Y: **Prevalence, whole genome characterization and phylogenetic analysis of hepatitis B virus in captive orangutan and gibbon.** *J Med Primatol* 2008, 37:277-289.
10. Li W, She R, Liu L, You H, Yin J: **Prevalence of a virus similar to human hepatitis B virus in swine.** *Virol J* 2010, 7:60.
11. Tamada Y, Yano K, Komatsu T, Yatsuhashi H, Takahashi K, Mishiro S: **First domestic case of acute hepatitis caused by an HBV genotype H Strain.** *Jpn Soc Hepatol* 2007, 48:109-111.
12. Takahashi K, Akahane Y, Hino K, Ohta Y, Mishiro S: **Hepatitis B virus genomic sequence in the circulation of hepatocellular carcinoma patients: comparative analysis of 40 full-length isolates.** *Arch Virol* 1998, 143:2313-2326.
13. Funk A, Mhamdi M, Will H, Sirma H: **Avian hepatitis B viruses: molecular and cellular biology, phylogenesis, and host tropism.** *World J Gastroenterol* 2007, 13:91-103.
14. Prassolov A, Hohenberg H, Kalinina T, Schneider C, Cova L, Krone O, Frölich K, Will H, Sirma H: **New hepatitis B virus of cranes that has an unexpected broad host range.** *J Virol* 2003, 77:1964-1976.
15. Pult I, Netter HJ, Bruns M, Prassolov A, Sirma H, Hohenberg H, Chang SF, Frolich K, Krone O, Kaleta EF, Will H: **Identification and analysis of a new hepadnavirus in white storks.** *Virology* 2001, 289:114-128.
16. Kim MC, Kwon YK, Joh SJ, Kwon JH, Lindberg AM: **Differential diagnosis between type-specific duck hepatitis virus type 1 (DHV-1) and recent Korean DHV-1-like isolates using a multiplex polymerase chain reaction.** *Avian pathology* 2008, 37:171-177.
17. Thompson AJ, Nguyen T, Iser D, Ayres A, Jackson K, Littlejohn M, Slavin J, Bowden S, Gane EJ, Abbott W, *et al*: **Serum hepatitis B surface antigen and hepatitis B e antigen titers: disease phase influences correlation with viral load and intrahepatic hepatitis B virus markers.** *Hepatology (Baltimore Md)* 2010, 51:1933-1944.
18. Diniz G, Aktas S, Ortac R, Unlu I, Vergin C: **A comparative immunohistochemical study of HBsAg, HBcAg and CD57 in chronic hepatitis B pediatric patients with and without malignant disorders.** *Turk J Gastroenterol* 2003, 14:234-238.
19. van der Laan LJ, Taimr P, Kok A, Sprengers D, Zondervan PE, Tilanus HW, Janssen HL: **Flowcytometric quantitation of hepatitis B viral antigens in hepatocytes from regular and fine-needle biopsies.** *J Virol Methods* 2007, 142:189-197.
20. Harpaz R, Von Seidlein L, Averhoff FM, Tormey MP, Sinha SD, Kotsopoulou K, Lambert SB, Robertson BH, Cherry JD, Shapiro CN: **Transmission of hepatitis B virus to multiple patients from a surgeon without evidence of inadequate infection control.** *N Engl J Med* 1996, 334:549-554.
21. Brechtbuehl K, Whalley SA, Dusheiko GM, Saunders NA: **A rapid real-time quantitative polymerase chain reaction for hepatitis B virus.** *J Virol Methods* 2001, 93:105-113.
22. NCBI, Available at: http://blast.ncbi.nlm.nih.gov/Blast.cgi.

doi:10.1186/1743-422X-9-2
Cite this article as: Tian *et al.*: Detection of Hepatitis B virus in serum and liver of chickens. *Virology Journal* 2012 9:2.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 17	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Komatsu H, Inui A, Sogo T, Tateno A, Shimokawa R, Fujisawa T. J Infect Dis. 2012 Aug;206(4):478-85. Epub 2012 Apr 16.	公表国 日本
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)			

研究報告の概要

○慢性B型肝炎ウイルス(HBV)感染症の子どもの涙はHBVを媒介する:ヒト型肝臓キメラマウスを用いた涙液による実験的HBV感染

背景: HBV保有者の唾液、尿、汗及び涙などの体液は、HBV感染源となりうる。

方法: 慢性HBV感染症の子ども39人及び成人8人が研究に登録された。HBV DNAの定量にはリアルタイムPCRが用いられた。

結果: 尿サンプルの73.7%(14/19)、唾液サンプルの86.8%(33/38)、涙液サンプルの100%(11/11)、汗サンプルの100%(9/9)にHBV DNAが検出された。平均HBV DNA量(±SD)は、尿4.3±1.1log copies/mL、唾液5.9±1.2log copies/mL、涙液6.2±0.7log copies/mL、汗5.2±0.6log copies/mLであった。血清検体と、唾液及び涙液のHBV DNAレベル間には有意な相関が見られた(r=0.88; P<0.001)。ある子どもの涙液検体をヒト肝細胞移植キメラマウス2匹に静注したところ、接種1週間後、キメラマウスの血清はいずれもHBV DNA陽性であった。

結論: 幼児の涙液検体におけるHBV DNAレベルは高かった。キメラマウスを用いて、涙液の感染性が確認された。高レベルのウイルス血症を有するHBV保有者の体液に直接接触することを防ぐ徹底的な対策が必要である。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
慢性HBV感染患児の涙液のHBV DNAレベルは高いことが分かり、ヒト型肝細胞移植キメラマウスを用いた実験により涙液の感染性が示されたとの報告である。	日本赤十字社では、化学発光酵素免疫測定法(CLEIA)によりHBs抗原、HBc抗体検査を実施することに加えて、精度を向上させたNATシステムを導入し、20プールでスクリーニングNATを行い、陽性血液を排除している。なお、2012年8月より抗体検査の判定基準を強化し、HBc抗体(C.O.I.)1.0以上かつHBs抗体価200mIU/mL未満の感染既往を示す者の献血を不適としている。HBV感染に関する新たな知見等について、今後も情報の収集に努める。

MAJOR ARTICLE

Tears From Children With Chronic Hepatitis B Virus (HBV) Infection Are Infectious Vehicles of HBV Transmission: Experimental Transmission of HBV by Tears, Using Mice With Chimeric Human Livers

Haruki Komatsu,[1] Ayano Inui,[1] Tsuyoshi Sogo,[1] Akihiko Tateno,[2] Reiko Shimokawa,[3] and Tomoo Fujisawa[1]

[1]Division of Hepatology and Gastroenterology, Department of Pediatrics, Eastern Yokohama Hospital, Kanagawa; [2]Department of Pediatrics, Toho University Sakura Medical Center, Chiba; and [3]Department of Pathology, Eastern Yokohama Hospital, Kanagawa, Japan

(See the editorial commentary by Heiberg and Hogh, on pages 464–5.)

Background. Body fluids such as saliva, urine, sweat, and tears from hepatitis B virus (HBV) carriers are potential sources of HBV transmission.

Methods. Thirty-nine children and 8 adults who were chronically infected with HBV were enrolled. Real-time polymerase chain reaction was used for the quantification of HBV DNA.

Results. HBV DNA was detected in 73.7% of urine samples (14 of 19), 86.8% of saliva samples (33 of 38), 100% of tear samples (11 of 11), and 100% of sweat samples (9 of 9). Mean HBV DNA levels (±SD) in urine, saliva, tears, and sweat were 4.3 ± 1.1 log copies/mL, 5.9 ± 1.2 log copies/mL, 6.2 ± 0.7 log copies/mL, and 5.2 ± 0.6 log copies/mL, respectively. A statistically significant correlation was observed between the HBV DNA level in serum specimens and HBV DNA levels in saliva and tear specimens ($r = 0.88$; $P < .001$). Tear specimens from a child were injected intravenously into 2 human hepatocyte-transplanted chimeric mice. One week after inoculation, both chimeric mice had serum positive for HBV DNA.

Conclusions. The levels of HBV DNA in tear specimens from young children were high. Tears were confirmed to be infectious, using chimeric mice. Strict precautions should be taken against direct contact with body fluids from HBV carriers with high-level viremia.

Hepatitis B virus (HBV) infection causes acute and chronic liver diseases. Fortunately, HBV infection is a vaccine-preventable disease, and as of 2008, 177 countries (92%) have integrated HBV vaccine into routine infant immunization programs. However, Japan and northern European countries, where the endemicity of HBV is low, continue to implement an HBV immunization strategy that targets high-risk groups, rather than a universal vaccination program [1]. Nonetheless, HBV infection by sexual contact and household contact does occur in Japan [2–5]. Children with chronic HBV infection are usually asymptomatic and have high-level viremia. Therefore, it is believed that children with chronic HBV infection may be a major reservoir for spreading HBV to other close susceptible individuals [6–8]. This scenario would especially threaten the countries that adopt an "at-risk" immunization strategy [6, 9–13].

Body fluids such as saliva, semen, urine, sweat, and tears are also potential sources of HBV transmission. Several studies have reported that HBV DNA in these body fluids can be detected by polymerase chain reaction (PCR) [9–18]. Of these body fluids, however, only serum,

Received 17 December 2010; accepted 16 September 2011; electronically published 16 April 2012.

Correspondence: Haruki Komatsu, MD, PhD, Division of Hepatology and Gastroenterology, Department of Pediatrics, Eastern Yokohama Hospital, 3-6-1 Simosueyoshi Tsurumi, Yokohama, Kanagawa, Japan (haruki-komatsu@chive.ocn.ne.jp).

The Journal of Infectious Diseases 2012;206:478–85

DOI: 10.1093/infdis/jis293

saliva, and semen have been demonstrated to be infectious in humans or experimental animal models [19–21].

In this study, HBV DNA levels in urine, saliva, tears, and sweat were quantified by real-time PCR. Body fluid samples were collected from HBV-carrier children and HBV-carrier mothers. After quantification of HBV DNA levels for each specimen type, we evaluated the infectivity of tears from HBV carriers. Mice with severe combined immunodeficiency, carrying a urokinase-type plasminogen activator transgene controlled by an albumin promoter (uPA/SCID), and with transplanted human hepatocytes have recently been used as an appropriate animal model for studying viral hepatitis due to HBV and hepatitis C virus [22–24]. Using these mice, we evaluated whether tears from HBV-carrier children were infectious.

MATERIALS AND METHODS

Patients and Materials

Eligible patients were chronic HBV carriers who attended our outpatient clinic. Their chronic HBV infection status was routinely evaluated by blood examination. All of the patients were asymptomatic. Serum, urine, saliva, tears, and sweat samples were collected when possible from each patient.

Serum samples were collected in preparation tubes. Each urine sample was collected in a sterile plastic tube. Saliva, tear, and sweat samples were collected using an indicating FTA Micro Card (Whatman, GE Healthcare, Tokyo, Japan) and sterile foam-tipped applicators (Whatman). When children shed tears spontaneously, we collected tear samples using the FTA cards. Serum, urine, saliva, tear, and sweat specimens were collected on the same day. Informed consent was obtained from all patients or all patients' parents. This study was approved by the Research Ethics Committee of Eastern Yokohama Hospital.

HBV DNA Extraction and Real-Time PCR

HBV DNA in serum was measured by COBAS TaqMan HBV DNA test, version 2.0 (Roche Diagnostics, Tokyo, Japan). HBV DNA was extracted from 200 μL of urine, using the QIAamp DNA Blood Mini Kit (QIAGEN, Hilden, Germany). HBV DNA was extracted from saliva, tear, and sweat specimens that were spotted on FTA cards, using QIAamp DNA Mini kit (QIAGEN). Three circles were punched from the FTA card by use of a single-hole paper puncher (Harris Micro Punch 3.00 mm, GE Healthcare) and were used for HBV DNA extraction. The extracted DNA was dissolved in 100 μL of elution buffer.

Quantification of HBV DNA in urine, saliva, tear, and sweat samples was performed using an in-house TaqMan real-time assay. The real-time PCR was performed using a genotype-independent method described previously [25]. PCR was performed in an MX3000P (Stratagene), and the results were analyzed with MxPro software (version 3.0). The lower limit of detection was >100 copies/mL. All assays were performed in duplicate with negative control samples. This assay was standardized using HBV DNA samples of known concentrations measured by the COBAS TaqMan HBV DNA test and recombinant plasmid controls. In this study, the standard of qualification is based on the result of COBAS TaqMan HBV DNA test. Therefore, the conversion factor between HBV copies/mL and HBV IU/mL is considered to be 5.82 copies/IU. Genotyping of HBV was determined by the PCR-Invader assay [26].

Tear Specimen for Experimental Transmission

For experimental transmission, a tear specimen was collected from a 10-month-old girl with chronic HBV infection. The source of her HBV infection was mother-to-child transmission due to the failure of prophylactic treatment. A total of 200 μL of tears were gently collected from her face when she cried, using a 1.0-mL syringe. The 200-μL tear specimen was diluted with 1300 μL of sterile saline, yielding a total volume of 1500 μL. The specimen underwent filter sterilization with a 0.2-μm filter.

Inoculation of Chimeric Mice With Livers Repopulated by Human Hepatocytes

Three male chimeric mice were purchased from PhoenixBio (Hiroshima, Japan). Human hepatocytes were imported from BD Bioscience (Woburn, MA). Of the 3 mice, 2 (mouse 101 and mouse 102) were inoculated once intravenously with 100 μL of the sterilized tear sample. The remaining mouse (mouse 103) was orally inoculated with 100 μL of the sterilized tear sample every 4 weeks. After inoculation, blood samples for real-time PCR assay were collected from the chimeric mouse every week.

HBV DNA Extraction From Mice Samples and Real-Time PCR

A total of 50 μL of whole blood samples were collected from the mice every week after inoculation, and serum was separated. Saliva and tear specimens were collected from chimeric mice, using FTA cards. HBV DNA was extracted from 20 μL of mouse serum, using SMI-TEST EX-R&D (Medical Biological Laboratories, Aichi, Japan). The extracted DNA was dissolved in 20 μL of nuclease-free water. HBV DNA was quantitatively measured using real-time PCR with the TaqMan PCR Core Reagent kit (Applied Biosystems, Foster City, CA). Real-time PCR was performed in a 25-μL reaction mixture containing 0.125 μL Ampli Taq Gold with 0.2 μM primers (forward primer: 5′-CACATCAGGATTCCTAGGAC C-3′ [nucleotides 166-186]; reverse primer: 5′-AGGTTGGTG AGTGATTGGAG-3′ [nucleotides 325-344]), 0.3 μM probe (5′-FAM-CAGAGTCTAGACTCGTGGTGGACTTC-TAMRA-3′ [nucleotides 242-267]), and 5 μL extracted DNA. The nucleotide position was based on GenBank accession number AB300361 (genotype C). After incubation for 2 min at 50°C and for 10 min at 95°C, the PCR cycling program underwent

53 2-step cycles, one at 95°C for 20 seconds and the other at 60°C for 1 minute. TaqMan PCR was performed with an ABI Prism 7500 (Applied Biosystems). In this study, the volume of serum collected from each mouse was 20 μL, which is a very small amount compared with that used in human studies. Therefore, we considered the upper limit of detection of real-time PCR for a small-volume sample to be >10 000 copies/mL, which provided us with more reliable results. This assay was standardized using mouse HBV DNA samples of known concentrations and the recombinant plasmid controls, as previously described [27].

Immunostaining for HBV Surface Antigen (HBsAg) and HBV Core Antigen (HBcAg)

Immunostaining for HBsAg and HBcAg was performed on frozen sections, using the Ventana i VIEW DAB detection kit (Ventana Medical Systems, Tucson, AZ) and the Dako Envision kit (Dako, Tokyo, Japan), respectively. Primary monoclonal antibodies to HBsAg (Santa Cruz Biotechnology, CA), at a 1:100 dilution, and polyclonal antibodies to HBcAg (Dako), at a 1:500 dilution, were used. Liver tissue was taken from mice after they were euthanized, and the tissue was stored at −80°C.

Statistical Analysis

Categorical variables were compared between groups, using the Yates corrected χ^2 test or the Fisher exact test. Noncategorical variables were compared between groups by the Mann–Whitney *U* test. For analysis of the correlation between log HBV DNA level in serum and in saliva and tears, we used the Pearson correlation coefficient. All tests were 2-sided, and a *P* value of ≤.05 was considered to indicate statistical significance. All statistical analyses were performed with StatMate IV for Windows (Advanced Technology for Medicine & Science, Tokyo, Japan) and Microsoft Office Excel 2007.

RESULTS

Patients and Materials

Between August 2009 and September 2010, 39 children and 8 adults who were chronically infected with HBV were randomly enrolled in this study. Twenty-six subjects were male, and 21 were female; the mean age (±SD) was 12.4 ± 12.0 years, and the median age was 9 years (range, 0–47 years. The 47 HBV carriers fell into the following age groups: 0–5 years, n = 18 (16 were HBV e antigen [HBVeAg] positive); 6–10 years, n = 11 (9 were HBeAg positive); 11–19 years, n = 9 (7 were HBeAg positive); and 20–27 years: n = 9 (7 were HBeAg positive). Of the 47 patients with chronic HBV infection, 39 were positive for HBeAg. In addition, 39 patients had serum HBV DNA levels of ≥6 log copies/mL. One, 6, and 40 patients were infected with genotype A, genotype B, and genotype C, respectively. Serum samples were collected from all patients. From the 47 patients, we collected 19 urine samples, 38 saliva samples, 11 tear samples, and 9 sweat samples. One subject provided urine, saliva, and tears only; 3 provided urine, saliva, and sweat only; 10 provided urine and saliva only; 10 provided saliva and tears only; 1 provided urine and sweat only; 1 provided saliva and sweat only; 4 provided urine only; 13 provided saliva only; and 4 provided sweat only. Samples were collected individually at the same time. The characteristics of body fluid samples are shown in Table 1. There were no significant differences in sex, the number of patients with a serum HBV DNA level of >6 log copies/mL, and the prevalence of genotype C among patients supplying different types of samples. However, there was a significant difference in the age of patients supplying the different kinds of samples.

HBV DNA Detection in Body Fluids

All patients were positive for HBV DNA in serum by the COBAS TaqMan HBV DNA test. The levels of serum HBV DNA ranged from 2.1 log copies/mL to >9 log copies/mL. The median HBV DNA level in serum was >9 log copies/mL. HBV DNA was detected in 73.7% of urine specimens (14 of 19), 86.8% of saliva specimens (33 of 38), 100% of tear specimens (11 of 11), and 100% of sweat specimens (9 of 9) (*P* = .07). In patients with a high viral load (ie, >6 log copies/mL), HBV DNA was detected in 85.7% of urine samples (12 of 14), 100% of saliva samples (32 of 32), 100% of tear samples (11 of 11), and 100% of sweat samples (9 of 9) (*P* = .24). Although the frequency of HBV DNA detection in urine was slightly lower than that in other body fluids, there were no significant differences in the frequency of HBV DNA detection among body fluids.

Quantification of HBV DNA From Body Fluids

Figure 1 shows the levels of HBV DNA in body fluids. Mean levels (±SD) of HBV DNA in urine, saliva, tears, and sweat specimens were 4.3 ± 1.1 log copies/mL, 5.9 ± 1.2 log copies/mL, 6.2 ± 0.7 log copies/mL, and 5.2 ± 0.6 log copies/mL,

Table 1. Characteristics of Body Fluid Samples

Characteristic	Body Fluid				
	Urine (n = 19)	Saliva (n = 38)	Tears (n = 11)	Sweat (n = 9)	*P*
Male sex, no. (%)	10 (52.6)	23 (60.5)	8 (72.7)	4 (44.4)	.29
Age, years, median (range)	11 (1–40)	7 (1–38)	1 (0–3)	16 (8–40)	<.05[a]
HBV DNA in serum, no. (%)					
>6 log copies/mL	14 (73.7)	32 (84.2)	11 (100)	9 (100)	.13
Genotype C	14 (73.7)	33 (86.8)	9 (81.8)	9 (100)	.31

[a] Significant difference between urine and saliva, between urine and tears, between saliva and sweat, and between tears and sweat.

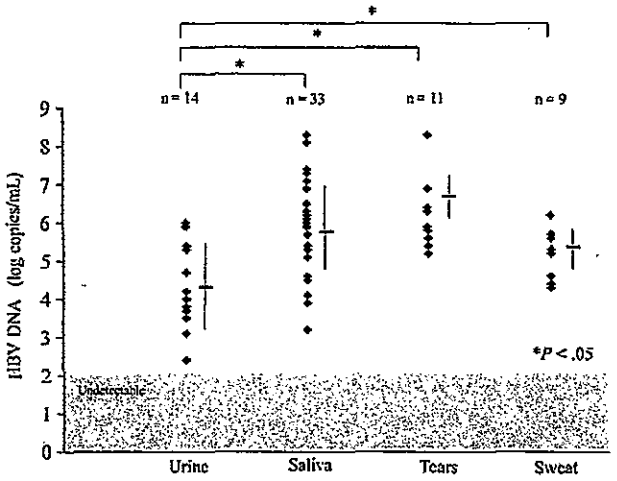


Figure 1. Hepatitis B virus (HBV) DNA levels in urine, saliva, tear, and sweat specimens from 47 patients. The levels of HBV DNA in urine samples were significantly lower than those in saliva, tear, and sweat samples ($P < .05$). The bar indicates the mean of the levels of HBV DNA. SDs are indicated by vertical bars.

respectively. Levels of HBV DNA in urine were significantly lower than those in other body fluids. Levels of HBV DNA in body fluids from patients who had a high viral load (ie, >9 log copies/mL) in serum are shown in Figure 2. Mean levels (±SD) of HBV DNA in urine (n = 10 specimens), saliva (n = 23), tears (n = 8), and sweat (n = 8) were 4.4 ± 0.9 log copies/mL, 6.4 ± 0.9 log copies/mL, 6.4 ± 0.9 log copies/mL, and 5.3 ± 0.6 log copies/mL, respectively. Even after the HBV load in serum was well matched, the HBV DNA levels in urine specimens were significantly lower than those in saliva and tear specimens.

Although there was no significant difference in HBV DNA levels between saliva, tears, and sweat specimens from patients with high viral load in serum, the quantification of HBV DNA in saliva and tear specimens showed almost the same levels (Figure 2). Levels of HBV DNA in the 11 pairs of saliva and tear specimens are shown in Figure 3. Mean HBV DNA levels (±SD) in saliva and tear specimens were 6.1 ± 1.0 log copies/mL and 6.2 ± 0.8 log copies/mL, respectively. The levels of HBV DNA in tear specimens were as high as those in saliva specimens.

The association between the levels of HBV DNA in serum specimens and in saliva and tear specimens was evaluated. Because the upper detection limit of the COBAS TaqMan HBV DNA test was >9 log copies/mL, we used data from patients in whom the levels of HBV DNA in serum ranged from 2.9 to 8.8 log copies/mL. Data from 15 patients (15 serum samples, 15 saliva samples, and 3 tears samples) were available for the correlation analysis. A significant correlation was observed in the levels of HBV DNA between serum specimens and saliva and tear specimens ($r = 0.88$; $P < .001$) (Figure 4A). The relationship between HBV DNA in serum specimens and HBV DNA in saliva and tear specimens was described as follows: [log HBV DNA load in saliva and tear specimens] = −3.23 + 1.06 × [log HBV DNA load in serum specimens]. On the other hand, there was no significant

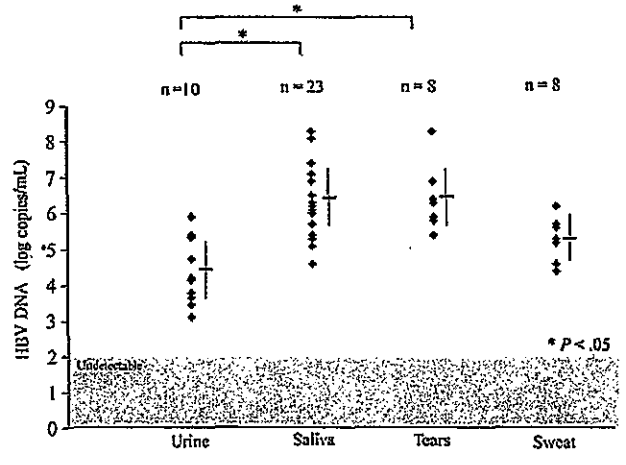


Figure 2. To adjust serum hepatitis B virus (HBV) DNA levels among groups, we show the HBV DNA levels in urine, saliva, tear, and sweat samples from patients whose levels of HBV DNA in serum were ≥9 log copies/mL. Although a significant difference in HBV DNA levels between urine and sweat specimens was not present, HBV DNA levels in urine specimens were significantly lower than those in saliva and tear specimens ($P < .05$). The bar indicates the mean of the levels of HBV DNA. SDs are indicated by vertical bars.

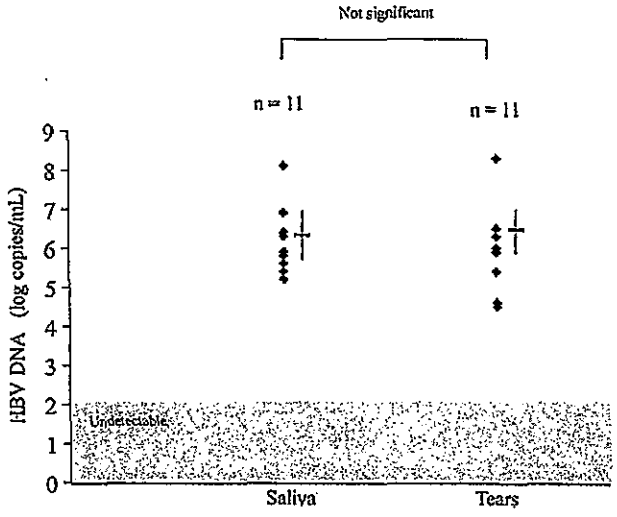


Figure 3. Hepatitis B virus (HBV) DNA levels in saliva and tear samples that were paired. Both groups showed the same HBV DNA levels. The bar indicates the mean of the levels of HBV DNA. SDs are indicated by vertical bars.

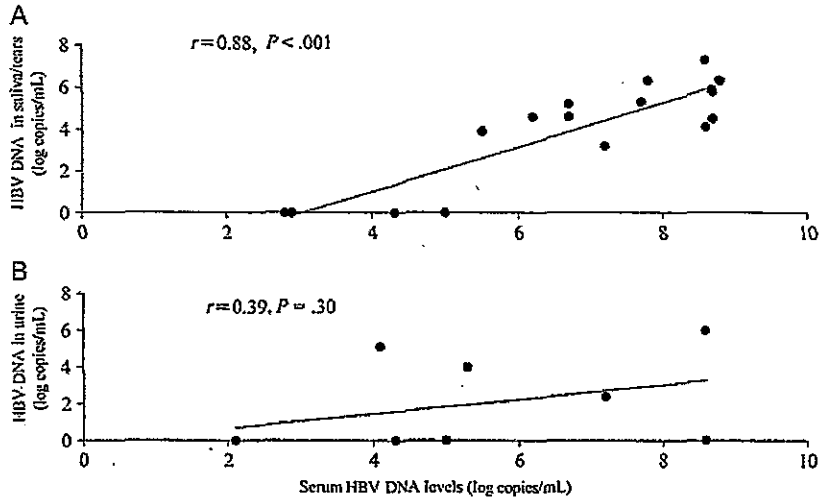


Figure 4. *A*, The association between hepatitis B virus (HBV) DNA levels in serum samples and saliva and tear samples (n = 18). Data from patients whose levels of HBV DNA in serum ranged from 2.9 to 8.8 log copies/mL were used for analysis. There was a significant correlation between HBV DNA levels in serum specimens and saliva and tear specimens ($r = 0.88$; $P < .001$). *B*, The association between HBV DNA levels in serum and urine samples (n = 9). Data from patients whose serum HBV DNA levels ranged from 2.1 to 9.0 log copies/mL were used for analysis. There was no significant correlation between HBV DNA levels in serum and urine specimens ($r = 0.41$; $P = .10$).

association between HBV DNA loads in serum and urine specimens (HBV DNA levels in 9 serum specimens ranged from 2.1 to 8.6 log copies/mL; $r = 0.39$; $P = .30$) (Figure 4*B*).

Transmission of HBV by Tears

The level of HBV DNA in tear specimens collected from a 10-month-old girl (genotype C; serum HBV DNA load, >9.0 log copies/mL) were 7.1 log copies/mL. The final concentration of HBV DNA in filter-sterilized tear specimens was 6.1 copies/mL.

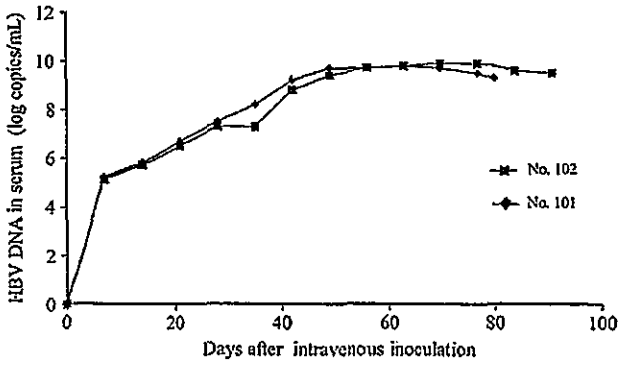


Figure 5. Hepatitis B virus (HBV) DNA levels in serum from chimeric mice after intravenous inoculation with tear specimens. The level of HBV DNA in a tear specimen collected from a girl with failure of immunoprophylaxis (HBV DNA load in serum, >9.0 log copies/mL) was 7.1 log copies/mL. After sterilization, the final concentration of HBV DNA in the tear sample was 6.1 copies/mL. One hundred microliters of the tear specimen was injected intravenously into chimeric mice.

A total of 100 μL of the filter-sterilized tear specimen was injected intravenously into 2 chimeric mice. One week after inoculation, both chimeric mice became positive for HBV DNA in serum (no. 101 had an HBV DNA level of 5.2 log copies/mL, and no. 102 had an HBV DNA level of 5.1 log copies/mL). The levels of HBV DNA in serum from the chimeric mice gradually increased with time. Seven weeks after inoculation, the levels of HBV DNA in serum from the chimeric mice increased to 9 log copies/mL and remained at this level thereafter (Figure 5). Saliva and lacrimal fluids were collected using FTA cards at day 80 (for mouse 101) and day 91 (for mouse 102). Although HBV DNA was extracted from a very small spot (1 pinched-out circle from the FTA card), the levels of HBV DNA were 4.4 log copies/mL (in saliva) and 4.5 copies/mL (in lacrimal fluids) in mouse 101 and 4.0 log copies/mL (in saliva) and 4.3 log copies/mL (in lacrimal fluids) in mouse 102. The remaining chimeric mouse (mouse 103) was orally inoculated with 100 μL of the filter-sterilized tear specimen. Unfortunately, we had to discontinue oral administration because of the deterioration of the mouse's health 35 days after inoculation. The chimeric mouse (mouse 103) had been inoculated orally twice (on days 0 and 28) before discontinuation. Real-time PCR performed 6 times (on days 0, 7, 14, 21, 28, and 35) detected no HBV DNA in serum.

Immunohistological Analysis of Liver Tissue for HBV Antigens

Immunohistochemical staining was performed on a liver specimen from the mouse with HBV viremia (no. 101). The hepatocytes were positive for HBsAg and HBcAg (Figure 6).

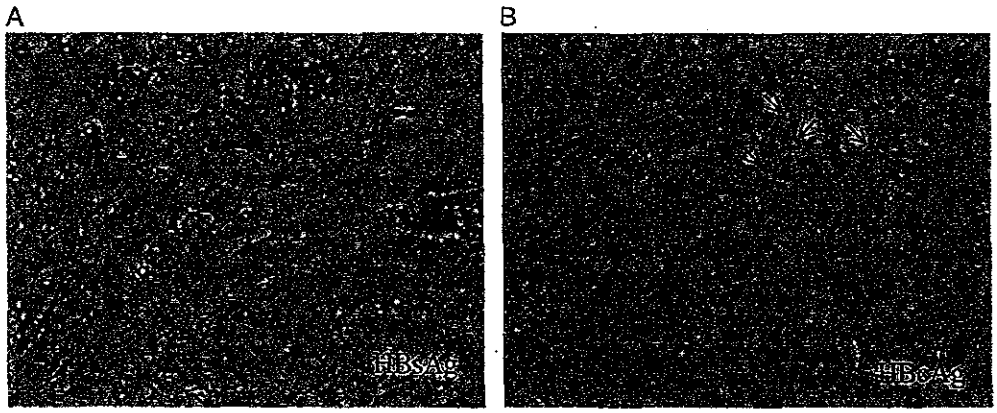


Figure 6. Immunohistological staining for liver tissue with antibodies to hepatitis B virus (HBV) surface antigen (HBsAg) and HBV core antigen (HBcAg). *A*, HBsAg was expressed on cytoplasmic membrane (original magnification ×400). *B*, HBcAg were expressed in nuclei of hepatocytes (original magnification ×400). Arrows indicate the nuclei of HBcAg-positive staining.

These findings indicated that HBV transmission from tears could be replicated in a human liver chimeric mouse model.

DISCUSSION

Although it has been reported that HBV DNA was detectable by PCR in tears from chronic HBV carriers [11, 17], tears have been considered to be low risk for HBV transmission. However, this study demonstrated that tears from children chronically infected with HBV were highly infectious. HBV DNA from serum could be detected in both chimeric mice 1 week after inoculation. Moreover, the levels of HBV DNA in serum continuously increased and reached the upper limit of the PCR assay 7 weeks after inoculation. A previous study showed that chimeric mice usually became positive for HBV DNA in serum 4 weeks after intravenous inoculation with serum from HBV carriers [28]. The levels of HBV DNA in tears used for this study were much higher than those in serum used in the previous study. Therefore, HBV DNA in serum from the chimeric mice became detectable quickly after inoculation.

Recent studies measuring HBV DNA in body fluids from HBV carriers have been conducted in the Netherlands, Sweden, and Denmark. Including the present study, all studies are from counties in which a selective HBV immunization program has been implemented [9–13]. Clearly, physicians from these countries are keen to know whether various body fluids might be sources of HBV transmission. Additionally, physicians are concerned that a vaccination strategy that focuses on at-risk groups is ineffective for prevention of HBV infection. Although recent studies have shown that HBV DNA in urine, saliva, tear, and sweat specimens from chronic HBV carriers was detectable by PCR, these studies did not show that body fluids from chronic HBV carriers were infectious in animal experiments. Approximately 30 years ago, the infectivity of semen and saliva from HBV carriers was proven by experimental transmission, using gibbons [20, 21]. Since then, no other body fluids have been evaluated for infectivity. This study is the first to confirm that tears are infectious sources of HBV.

Tears are presumed to originate from circulating blood. HBV DNA was first detected in tears in 1994 by PCR. In a previous study, tear specimens from 47.1% of HBV carriers (16 of 34) were positive for HBV DNA [17]. In 2006, a previous study measured HBV DNA in paired saliva and tear specimens. Of 7 patients with chronic HBV infection, 4 (57%) had tear specimens that were positive for HBV DNA. The levels of HBV DNA in tear specimens ranged from 0.2×10^3 to 1.4×10^4 copies/mL [11]. Compared with the previous study, the levels of HBV DNA in tears were relatively high in this study. There are 2 possible explanations for the difference in HBV DNA levels between these studies. First, the majority of the patients supplying tear samples in our study were very young children (median age, 1 year). Young children with chronic HBV infection are usually in the immunotolerant phase and have a high viral load. Second, the FTA card was effective at collecting body fluids and extracting DNA. Although the number of tear samples was small, this study demonstrates that tears, as well as saliva, contain a large amount of HBV DNA. Interestingly, HBV DNA in lacrimal fluid and saliva could also be detected in the chimeric mice. These findings suggest that tears, like saliva, have the potential to transmit HBV.

Among body fluids, the highest levels of HBV DNA are detected in blood. However, HBV DNA can also be detected in urine, saliva, tears, and sweat. In this study, HBV DNA was detected in a high proportion of body fluid samples. In addition, there was a statistically significant correlation in the

levels of HBV DNA between tear and saliva specimens and serum specimens, in which [log HBV DNA level in saliva and tear specimens] = $-3.23 + 1.06 \times$ [log HBV DNA level in serum specimens]. Similarly, previous studies reported that the levels of HBV DNA in saliva specimens were significantly related to the levels of HBV DNA in blood specimens. In this study, however, the levels of HBV DNA in urine specimens were not significantly associated with the levels of HBV DNA in serum specimens. The levels of HBV DNA in urine samples were significantly lower than those in saliva and tear samples. This finding is also consistent with that of a previous study [13]. We cannot provide any clear explanation why the levels of HBV DNA were lower than those in other body fluids. Further studies are required to study not only the infectivity of urine but also the mechanism of the reduction of the HBV DNA level in urine.

It has been known that the oral administration of serum from HBV carriers causes HBV infection [19]. After we confirmed the infectivity of tears through the intravenous route, tears were administered orally to a chimeric mouse. Although both transmission routes were investigated using the same sample, this study, like previous animal experiments [20, 21], failed to demonstrate that HBV infection occurred through an oral route; unfortunately, the period of observation was not sufficient to evaluate the infectivity of tears. We tried to detect HBV DNA in the liver of chimeric mouse 103 after discontinuation of oral administration of tear specimens, but HBV DNA was not detectable in the liver by real-time PCR (data not shown).

There are few studies that have measured the levels of HBV DNA in sweat specimens from chronically infected patients. A previous study quantified HBV DNA levels in Olympic wrestlers, who were negative for HBsAg but positive for HBV DNA in blood [14]. In the previous study, a statistically significant relation between the levels of HBV DNA in blood and sweat was observed. In the present study, all sweat samples were positive for HBV DNA. In addition, the levels of HBV DNA in sweat specimens were high (mean level [±SD], 5.2 ± 0.6 log copies/mL). Therefore, sweat from HBV carriers might also have the potential to cause horizontal HBV infection.

The US Centers for Disease Control and Prevention considers that the risk of transmission in child-care settings is very low [29–31]. However, Ireland, Norway, and Sweden have a policy that children should be immunized if another child in a day care center is positive for HBsAg. This study showed that various body fluids from young HBV carriers have a high concentration of HBV DNA. Previous studies have reported that 10% of HBV particles are infectious [32]. Therefore, all body fluids from HBV carriers should be considered to be infectious, and HBV vaccine should be recommended for day care staff.

In conclusion, HBV DNA was detected at high proportions in urine, saliva, tear, and sweat specimens from chronic HBV carriers. The levels of HBV DNA in saliva and tear specimens from young children were extremely high. In addition, tear samples from a child with chronic HBV infection were confirmed to be infectious, using chimeric mice. Although the HBV transmission risk between young children in nurseries or day care centers may be limited, strict precautions should be taken against contact with body fluids from HBV carriers with high-level viremia, especially in counties implementing an immunizing program focused on individuals at-risk for HBV infection.

Notes

Financial support. This work was supported by the Ministry of Health, Labor, and Welfare of Japan.

Potential conflicts of interest. All authors: No reported conflicts.

All authors have submitted the ICMJE Form for Disclosure of Potential Conflicts of Interest. Conflicts that the editors consider relevant to the content of the manuscript have been disclosed.

References

1. Zuckerman J, van Hattum J, Cafferkey M, et al. Should hepatitis B vaccination be introduced into childhood immunisation programmes in northern Europe? Lancet Infect Dis 2007; 7:410–9.
2. Aomatsu T, Komatsu H, Yoden A, et al. Fulminant hepatitis B and acute hepatitis B due to intrafamilial transmission of HBV after chemotherapy for non-Hodgkin's lymphoma in an HBV carrier. Eur J Pediatr 2010; 169:167–71.
3. Komatsu H, Inui A, Sogo T, Hiejima E, Kudo N, Fujisawa T. Source of transmission in children with chronic hepatitis B infection after the implementation of a strategy for prevention in those at high risk. Hepatol Res 2009; 39:569–76.
4. Komatsu H, Sugawara H, Inui A, et al. Does the spread of hepatitis B virus genotype A increase the risk of intrafamilial transmission in Japan? J Infect Chemother 2011; 17:272–7.
5. Yano K, Tamada Y, Yatsuhashi H, et al. Dynamic epidemiology of acute viral hepatitis in Japan. Intervirology 2010; 53:70–5.
6. Davis LG, Weber DJ, Lemon SM. Horizontal transmission of hepatitis B virus. Lancet 1989; 1:889–93.
7. Shapiro CN, Hadler SC. Hepatitis A and hepatitis B virus infections in day-care settings. Pediatr Ann 1991; 20:435–41.
8. Williams I, Smith MG, Sinha D, et al. Hepatitis B virus transmission in an elementary school setting. JAMA 1997; 278:2167–9.
9. van der Eijk AA, Niesters HG, Gotz HM, et al. Paired measurements of quantitative hepatitis B virus DNA in saliva and serum of chronic hepatitis B patients: implications for saliva as infectious agent. J Clin Virol 2004; 29:92–4.
10. Heiberg IL, Hoegh M, Ladelund S, Niesters HG, Hogh B. Hepatitis B virus DNA in saliva from children with chronic hepatitis B infection: implications for saliva as a potential mode of horizontal transmission. Pediatr Infect Dis J 2010; 29:465–7.
11. Kidd-Ljunggren K, Holmberg A, Blackberg J, Lindqvist B. High levels of hepatitis B virus DNA in body fluids from chronic carriers. J Hosp Infect 2006; 64:352–7.
12. Knutsson M, Kidd-Ljunggren K. Urine from chronic hepatitis B virus carriers: implications for infectivity. J Med Virol 2000; 60:17–20.
13. van der Eijk AA, Niesters HG, Hansen BE, et al. Paired, quantitative measurements of hepatitis B virus DNA in saliva, urine and serum of chronic hepatitis B patients. Eur J Gastroenterol Hepatol 2005; 17:1173–9.

14. Bereket-Yucel S. Risk of hepatitis B infections in Olympic wrestling. Br J Sports Med 2007; 41:306–10; discussion 310.
15. Hui AY, Hung LC, Tse PC, Leung WK, Chan PK, Chan HL. Transmission of hepatitis B by human bite—confirmation by detection of virus in saliva and full genome sequencing. J Clin Virol 2005; 33:254–6.
16. Marie-Cardine A, Mouterde O, Dubuisson S, Buffet-Janvresse C, Mallet E. Salivary transmission in an intrafamilial cluster of hepatitis B. J Pediatr Gastroenterol Nutr 2002; 34:227–30.
17. Ishida K, Kaku M, Irifune K, et al. In-vitro and in-vivo activity of a new quinolone AM-1155 against *Mycoplasma pneumoniae*. J Antimicrob Chemother 1994; 34:875–83.
18. Noppornpanth S, Sathirapongsasuti N, Chongsrisawat V, Poovorawan Y. Detection of HbsAg and HBV DNA in serum and saliva of HBV carriers. Southeast Asian J Trop Med Public Health 2000; 31:419–21.
19. Krugman S, Giles JP, Hammond J. Infectious hepatitis. Evidence for two distinctive clinical, epidemiological, and immunological types of infection. JAMA 1967; 200:365–73.
20. Bancroft WH, Snitbhan R, Scott RM, et al. Transmission of hepatitis B virus to gibbons by exposure to human saliva containing hepatitis B surface antigen. J Infect Dis 1977; 135:79–85.
21. Scott RM, Snitbhan R, Bancroft WH, Alter HJ, Tingpalapong M. Experimental transmission of hepatitis B virus by semen and saliva. J Infect Dis 1980; 142:67–71.
22. Tanaka Y, Sanchez LV, Sugiyama M, et al. Characteristics of hepatitis B virus genotype G coinfected with genotype H in chimeric mice carrying human hepatocytes. Virology 2008; 376:408–15.
23. Kurbanov F, Tanaka Y, Chub E, et al. Molecular epidemiology and interferon susceptibility of the natural recombinant hepatitis C virus strain RF1_2k/1b. J Infect Dis 2008; 198:1448–56.
24. Noguchi C, Imamura M, Tsuge M, et al. G-to-A hypermutation in hepatitis B virus (HBV) and clinical course of patients with chronic HBV infection. J Infect Dis 2009; 199:1599–607.
25. Liu Y, Hussain M, Wong S, Fung SK, Yim HJ, Lok AS. A genotype-independent real-time PCR assay for quantification of hepatitis B virus DNA. J Clin Microbiol 2007; 45:553–8.
26. Tadokoro K, Kobayashi M, Yamaguchi T, et al. Classification of hepatitis B virus genotypes by the PCR-Invader method with genotype-specific probes. J Virol Methods 2006; 138:30–9.
27. Abe A, Inoue K, Tanaka T, et al. Quantitation of hepatitis B virus genomic DNA by real-time detection PCR. J Clin Microbiol 1999; 37:2899–903.
28. Tabuchi A, Tanaka J, Katayama K, et al. Titration of hepatitis B virus infectivity in the sera of pre-acute and late acute phases of HBV infection: transmission experiments to chimeric mice with human liver repopulated hepatocytes. J Med Virol 2008; 80:2064–8.
29. Weinbaum CM, Williams I, Mast EE, et al. Recommendations for identification and public health management of persons with chronic hepatitis B virus infection. MMWR Recomm Rep 2008; 57:1–20.
30. Mast EE, Margolis HS, Fiore AE, et al. A comprehensive immunization strategy to eliminate transmission of hepatitis B virus infection in the United States: recommendations of the Advisory Committee on Immunization Practices (ACIP) part 1: immunization of infants, children, and adolescents. MMWR Recomm Rep 2005; 54:1–31.
31. Shapiro CN, McCaig LF, Gensheimer KF, et al. Hepatitis B virus transmission between children in day care. Pediatr Infect Dis J 1989; 8:870–5.
32. Heermann KH, Gerlich WH, Chudy M, Schaefer S, Thomssen R. Quantitative detection of hepatitis B virus DNA in two international reference plasma preparations. Eurohep Pathobiology Group. J Clin Microbiol 1999; 37:68–73.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 17	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況		公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)		Allison RD, Conry-Cantilena C, Koziol D, Schechterly C, Ness P, Gibble J, Kleiner DE, Ghany MG, Alter HJ. J Infect Dis. 2012 Sep;206(5):654-61. Epub 2012 Jun 27.	米国

研究報告の概要

○初期無症候性供血者集団におけるC型肝炎ウイルス感染の臨床的及び組織学的経過とその伝播様式に関する25年間の研究

背景: 合計738人のHCV抗体陽性の献血者が、15年間の研究中及び推定感染成立日から最高54年までリスク要因と経過に関して評価された。

方法: 真のHCV抗体陽性と偽陽性を区別するために第3世代リコンビナント免疫ブロット法(RIBA)が実施された。HCV PCRの結果により、被験者を慢性HCV感染者か治癒した者かに分類した。肝生検検体は、Ishak線維化スコアによりステージ化され、組織活動性指標によってグレード化された。

結果: 738人のHCV抗体陽性被験者のうち、469人(64%)がRIBA陽性、217人(29%)が陰性、52人(7%)が不確定であった。主な独立リスク因子は静注薬物使用(オッズ比[OR]、35.0;P<0.0001)、輸血(OR、9.9;P<0.0001)、及び静注薬物使用や輸血を否定した「麻薬吸入者」79人を含む経鼻コカイン使用(OR、8.5;P<0.0001)であった。分類・回帰木及びランダムフォレストによりこれらのリスク要因を確認した。合計384人(82%)のRIBA陽性供血者がHCV RNA陽性であった;そのうち185人(48%)からの肝生検検体において、33%に線維化は見られず、52%に軽度の線維化、12%に架橋線維化が見られた。感染後平均25年で2%に肝硬変が見られた。反復生検63件の解析結果は、8%が5年以上でIshakステージ2以上に進行したことを示した(平均進行、0.06 Ishakステージ/年)。

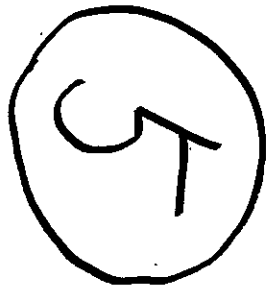
結論: 1990年以前の静注薬物使用と輸血は、HCV感染の有意なリスク因子である;経鼻コカイン使用は非経口伝播の潜在的な経路である可能性がある。HCV感染後平均25年の組織学的な経過は比較的軽度であった(85%は線維化が見られないか軽度であり、わずか2%のみが肝硬変になった。1/5近くが自然治癒した)。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
無症候性供血者集団におけるHCV感染の臨床的及び組織学的経過と伝播様式に関する研究を行ったところ、1990年以前の主な感染リスク因子は静注薬物使用及び輸血であり、経鼻コカイン使用は潜在的な非経口感染経路である可能性が示唆された。また組織学的変化は比較的軽度であることが分かったとの報告である。	日本赤十字社では、HCV抗体検査を実施することに加えて、精度を向上させたNATシステムを導入し、HCVについて20プールでスクリーニングNATを行い、陽性血液を排除している。HCV感染に関する新たな知見等について、今後も情報の収集に努める。



MAJOR ARTICLE

A 25-Year Study of the Clinical and Histologic Outcomes of Hepatitis C Virus Infection and Its Modes of Transmission in a Cohort of Initially Asymptomatic Blood Donors

Robert D. Allison,[1] Cathy Conry-Cantilena,[1] Deloris Koziol,[2] Cathy Schechterly,[1] Paul Ness,[3] Joan Gibble,[4] David E. Kleiner,[5] Marc G. Ghany,[6] and Harvey J. Alter[1]

[1]Department of Transfusion Medicine and [2]Biostatistics and Clinical Epidemiology Service, Clinical Center, [5]Laboratory of Pathology, National Cancer Institute, and [6]Liver Diseases Branch, National Institute of Diabetes and Digestive and Kidney Diseases, National Institutes of Health, Bethesda, and [3]Departments of Pathology and Oncology, The Johns Hopkins Medical Institute, and [4]Greater Chesapeake & Potomac Region, American Red Cross, Baltimore, Maryland

Background. A total of 738 volunteer blood donors who were positive for anti–hepatitis C virus (HCV) were assessed for risk factors and outcomes for up to 15 years within the study and up to 54 years from the estimated onset of infection.

Methods. A third-generation recombinant immunoblot assay (RIBA) was performed to distinguish true from false anti-HCV reactivity. Findings of HCV polymerase chain reaction classified subjects as having chronic HCV infection or as having recovered. Liver biopsy specimens were staged by Ishak fibrosis score and graded by histologic activity index.

Results. Of 738 anti-HCV–positive subjects, 469 (64%) had positive RIBA results, 217 (29%) had negative results, and 52 (7%) had indeterminate results. Primary independent risk factors were injection drug use (odds ratio [OR], 35.0; $P < .0001$), blood transfusion (OR, 9.9; $P < .0001$), and intranasal cocaine use, including 79 "snorters" who repeatedly denied injection drug use or blood transfusion (OR, 8.5; $P < .0001$). Classification and regression tree and random forest analyses confirmed these risk factors. A total of 384 RIBA-positive donors (82%) were HCV RNA positive; of these, liver biopsy specimens from 185 (48%) showed no fibrosis in 33%, mild fibrosis in 52%, bridging fibrosis in 12%, and cirrhosis in 2% a mean duration of 25 years after infection. Analysis of 63 repeat biopsy specimens showed that 8% progressed ≥2 Ishak stages over 5 years (mean progression, 0.06 Ishak stages/year).

Conclusions. Injection drug use and blood transfusion before 1990 are dominant risk factors for HCV acquisition; intranasal cocaine use may be a surreptitious route of parenteral spread. After a mean of 25 years of HCV infection, histologic outcomes were relatively mild: 85% had no or mild fibrosis, and only 2% had cirrhosis. Nearly one-fifth spontaneously recovered.

While the frequency of new hepatitis C virus (HCV) infections in the United States has declined considerably in the past decade, the disease burden from cumulative infections over the past 50 years is substantial and is rising, as the long duration of individual infections allows evolution into cirrhosis and hepatocellular carcinoma (HCC) [1, 2]. The full spectrum of HCV-related outcomes is difficult to discern because milder disease often goes unrecognized, and slowly evolving chronic sequelae generally are not amenable to prospective ascertainment. The introduction of routine donor screening for antibody to HCV in 1990 afforded the opportunity to place otherwise unselected subjects into long-term follow-up to assess (1) the proportion of HCV-infected

Received 10 October 2011; accepted 17 February 2012; electronically published 27 June 2012.

Correspondence: Harvey J. Alter, MD, Clinical Studies Section and Department of Transfusion Medicine, NIH, 10 Center Dr, Bldg 10, Rm 1C711, Bethesda, MD 20892 (halter@cc.nih.gov).

The Journal of Infectious Diseases 2012;206:654–61
Published by Oxford University Press on behalf of the Infectious Diseases Society of America 2012.
DOI: 10.1093/infdis/jis410

individuals who become chronic carriers, (2) the risk factors for HCV acquisition, (3) the long-term outcomes based on findings of liver histologic evaluations, and (4) the relationship of liver fibrosis to a variety of demographic, virologic, serologic, and biochemical indices. This cohort of anti-HCV–positive blood donors was previously analyzed in 1995 [3]. Reported herein is a further decade of data accrual, allowing for up to 15 years of follow-up within the study and a mean interval of 25 years from the time of a parenteral exposure that presumably initiated the infection to the time of liver biopsy.

METHODS

Screening and Confirmation of HCV Infection

At study initiation, a first-generation enzyme immunoassay (EIA) was used by the American Red Cross (ARC; EIA1.0; Ortho Diagnostics, Raritan, NJ) and the National Institutes of Health (NIH) (EIA1.0; Abbott Laboratories, Abbott Park, IL) to screen donated blood for HCV antibodies. A more sensitive second-generation EIA (EIA2.0; Ortho Diagnostics and Abbott Laboratories) was introduced in 1992. The specificity of anti-HCV–positive reactions was tested by second and/or third-generation recombinant immunoblot assays (RIBA HCV 2.0 SIA; Chiron, Emeryville, CA) [4]. Donors who were RIBA positive were considered to have confirmed antibody to HCV and, thus, to have been infected with HCV. Donors who were RIBA negative were considered to have false-positive antibody reactivity by EIA and, thus, not to have been infected with HCV. The HCV antibody status of donors with an indeterminate result of RIBA could not be determined, and donors with this result underwent testing for HCV RNA but were otherwise excluded from analysis.

At least 1 sample from each participant was tested in duplicate for HCV RNA, using reverse-transcription polymerase chain reaction (PCR; COBAS Amplicor HCV Test, version 2.0; Roche, Branchburg, NJ; limit of detection, 100 IU/mL) [3]. Quantitative serum HCV RNA levels were measured by the COBAS Amplicor HCV Monitor Test, version 2.0 (Roche), and genotyping was performed by the INNO-LiPA 2.0 assay (Innogenetics, Ghent, Belgium). Samples that were obtained prior to licensure of these PCR assays were retrieved from frozen storage for later testing.

Enrollment of Participants

Volunteer blood donors from the Greater Chesapeake and Potomac Region of the ARC and from the NIH Department of Transfusion Medicine who tested anti-HCV positive on replicate testing and provided informed consent were enrolled beginning in August 1990. The study protocol was approved by the ARC and NIH institutional review boards and has been reviewed annually.

Initial Evaluation and Follow-up

On the initial visit, the donor was interviewed by a physician, who completed an extensive questionnaire that recorded demographic characteristics, blood donation history, sexual history, and past medical history, including assessments of alcohol use, illicit drug use, and other potential risk factors for HCV infection. Participants completed a second questionnaire in private about illicit drug use. A physical examination was performed, and samples for biochemical and hematologic blood tests were obtained at baseline. A physician performed an interim history and physical examination annually, and laboratory testing was repeated biannually for the duration of study. RIBA-positive subjects continue to be followed up in this ongoing study; donors who were repeatedly RIBA negative and HCV RNA negative were discharged from the study after 6–12 months of follow-up because they were considered to have been unexposed to HCV and to have had false-positive results of EIA.

Histologic Evaluation of Liver Biopsy Specimens

Biopsy specimens were obtained from 185 HCV RNA-positive, treatment-naive participants. All specimens were read by the same hepatic pathologist (D.E.K.) without knowledge of the patient's clinical history. A biopsy specimen was considered adequate if it contained >10 portal tracts. The extent of liver fibrosis was scored from 0 to 6, using the Ishak fibrosis scale (0 = no fibrosis, 1–2 = portal fibrotic expansion, 3–4 = bridging fibrosis, and 5–6 = cirrhosis) [5]. Necrosis and inflammation were graded using a modification of the histologic activity index (HAI) on a scale of 0–18 [6, 7].

Mortality Follow-up

Vital status, date of death, and cause-specific mortality from 1990 through 2005 were obtained by searching the National Death Index (National Center for Health Statistics, Hyattsville, MD).

Statistical Analysis

Analyses were performed with standard statistical packages (SPSS v15.0 for Windows, SPSS, Chicago, IL; SAS v9.2, SAS Institute, Cary, NC). Only data collected prior to HCV treatment were included. Associations between categorical variables were assessed with the unadjusted χ^2 statistic or a 2-tailed Fisher exact test.

Univariate analysis of variance was used to assess associations between continuous variables and group status. When normality could not be assumed, the Kruskal-Wallis test was used. The Bonferroni method was used to adjust for multiple comparisons. When an a priori order in the group status was assumed, the Jonckheere nonparametric test for trend was used, with a 2-sided P value. For comparisons of proportions to population proportions, the exact binomial test was used.

A multivariate logistic regression model was used for analysis of risk factors. A forward selection method with a

significance level of 0.05 for entry was used, and odds ratios (ORs) with 95% confidence intervals were calculated based on the profile likelihood. Subjects who were EIA positive but RIBA negative and HCV RNA negative were used as controls in the risk factors analysis. Results of the forward logistic regression analysis were confirmed using backward and stepwise selection methods. Classification and regression tree (CART) and random forest analyses were used to confirm the findings of logistic regression and were performed with R statistical computing language.

RESULTS

Enrollment, Demographic Characteristics, and RIBA Status

Seven hundred and thirty-eight anti-HCV–positive blood donors were enrolled: 692 (94%) were enrolled from the ARC, 36 (5%) were enrolled from the NIH, and 10 (1%) were enrolled from other blood centers. A total of 454 anti-HCV–positive ARC donors were enrolled from 1990 through 1994 (11% of all anti-HCV–positive ARC donors in the region); 238 ARC donors were enrolled from 1995 through 2005 (43% of all anti-HCV–positive donors). Correspondingly, 28 anti-HCV–positive NIH donors (84% of the total detected) were enrolled from 1990 through 1994, and 8 (17% of the total) were enrolled from 1995 through 2005.

Demographic data on 1 040 713 blood donors who donated at the ARC between 1990 and 2005 were compared with the 692 ARC donors enrolled in the study. The populations had a similar sex distribution, but study participants were older (41.4 vs 38.0 years; $P < .01$), more likely to be African American (14% vs 8.9%; $P < .01$), and less likely to be first-time donors (23.8% vs 76.5%; $P < .01$).

Demographic data on 14 400 NIH volunteer blood donors who donated during the study period were compared to data for the 36 who were enrolled. Enrolled donors were similar with respect to sex and African American race (13.9% vs 6.5%; $P = .16$), were younger (41.9 vs 49.0 years; $P < .01$), and were less likely to be first-time donors (13.9% vs 80.1%; $P < .01$). Study participants from the ARC and the NIH were compared, and there were no differences in sex, age, African American race, or first-time donor status.

Among anti-HCV–positive blood donors, 469 (64%) were positive by the third-generation RIBA, 217 (29%) were negative, and 52 (7%) had indeterminate results. Characteristics of RIBA-positive and RIBA-negative individuals are compared in Table 1.

Table 1. Characteristics of Blood Donors, by Hepatitis C Virus (HCV) Antibody Status

Characteristics	Results of Third-Generation RIBA[a] Positive (n = 469)	Negative (n = 217)	P
Age, mean ± SD (years)	40 ± 10	44 ± 12	<.001
Female sex	215 (46)	96 (44)	.742
Race			
White	372 (79)	190 (88)	.010
African American	85 (18)	15 (7)	<.001
No college education	212 (45)	49 (23)	<.001
First-time donor	145 (31)	18 (8)	<.001
History of STD	127 (27)	22 (10)	<.001
MSM	19 (4)	1 (0.5)	.007
ALT level, mean (IU/L)[b]	54	22	<.001

Data are no. (%) of donors, unless otherwise indicated.

Abbreviations: ALT, alanine aminotransferase; MSM, men who have sex with men; RIBA, recombinant immunoblot assay; STD, sexually transmitted disease.

[a] All subjects had positive anti-HCV findings by enzyme immunoassay (EIA). Donors with positive results of RIBA are considered to have been infected with HCV. Donors with negative results of RIBA are considered to have false-positive anti-HCV findings by EIA.

[b] At initial evaluation, ALT level was elevated in 48% of RIBA-positive donors, compared with 6% of RIBA-negative donors ($P < .001$).

Risk Factors Analysis

Independent risk factors for HCV infection in the multivariate logistic regression analysis (Table 2) included, in order of entry into forward and stepwise logistic regression models, intranasal cocaine use (OR, 6.4; $P < .0001$), blood transfusion prior to 1991 (OR, 9.9; $P < .0001$), history of injection drug use (IDU; OR, 35.0; $P < .0001$), sexual promiscuity (>5 partners/year, history of sexually transmitted disease, exchanging sex for drugs or money, or a combination of these factors; OR, 2.3; $P < .001$), ear piercing (OR, 1.8; $P < .01$), and occupational exposure to human blood (OR, 3.8; $P = .018$). Ear piercing was a significant risk factor in 70 (28%) of 253 RIBA-positive men ($P < .0001$) but not in women.

Among 292 RIBA-positive subjects who snorted cocaine, 213 (73%) also reported a history of IDU or blood transfusion prior to 1991; 79 (27%) who snorted cocaine repeatedly denied IDU or other parenteral risk factors both in personal interviews and on a questionnaire. Among 70 men who had ear piercing as a risk factor, 67 (96%) had also snorted cocaine, had received a blood transfusion prior to 1991, had a history of IDU, or had a documented needlestick exposure to human blood.

The CART analysis identified the same risk factors for HCV infection and in the same order of importance as did the forward, backward, and stepwise logistic regression methods, except that CART did not identify occupational exposure as an important variable. Random forest analysis confirmed the importance of the risk factors identified by logistic regression; occupational exposure and sex were ranked as least important. CART and random forest analyses confirmed

Table 2. Multivariate Logistic Regression of Risk Factors for Hepatitis C Virus Infection

Risk Factor[a]	Results of Third-Generation RIBA		Multivariate Logistic Regression Analysis[b]	
	Positive, no. (%) (n = 469)	Negative, no. (%) (n = 217)	Odds Ratio (95% CI)	*P*
IDU	195 (42)	2 (1)	35.0 (10.4–218.0)	<.0001
Blood transfusion	126 (27)	17 (8)	9.9 (5.6–18.3)	<.0001
Intranasal cocaine use	292 (62)	23 (11)	6.4 (3.8–11.2)	<.0001
Intranasal cocaine use without IDU or blood transfusion	79 (49)[c]	20 (10)[c]	8.5 (4.9–15.1)	<.0001
Occupational exposure	27 (6)	5 (2)	3.8 (1.3–12.4)	.0176
Sexual promiscuity	243 (52)	48 (22)	2.3 (1.4–3.7)	.0006
Males[d]	148 (58)	36 (30)	3.3 (2.1–5.3)	<.0001
Females[e]	95 (44)	12 (13)	5.5 (3.0–11.2)	<.0001
Ear piercing	273 (58)	86 (40)	1.8 (1.2–2.8)	.0088
Males[d]	70 (28)	1 (<1)	45.9 (9.9–815)	.0002
Females[e]	203 (95)	85 (89)	...	NS
Male sex	254 (54)	121 (56)	...	NS
Tattooing	102 (22)	9 (4)	...	NS
Acupuncture	29 (6)	5 (2)	...	NS

Data are ordered by odds ratio.

Abbreviations: CI, confidence interval; IDU, injection drug use; NS, nonsignificant; RIBA, recombinant immunoblot assay.

[a] Order of entry into the model (forward selection method): (1) intranasal cocaine use, (2) blood transfusion, (3) IDU, (4) sexual promiscuity, (5) ear piercing, and (6) occupational exposure.

[b] Ellipses indicate that the risk factor did not meet criteria for entry into the model.

[c] Results from analysis of a subset of 361 subjects who denied IDU and blood transfusion (163 RIBA positive, 198 RIBA negative).

[d] Results from analysis of a subset of 375 males (254 RIBA positive, 121 RIBA negative).

[e] Results from analysis of a subset of 311 females (215 RIBA positive, 96 RIBA negative).

findings of the subset analyses of 361 subjects, presented in Table 2.

Survey of Intranasal Cocaine Use

Six hundred and ninety-two donors completed a detailed survey on cocaine use. Of 273 RIBA-positive subjects who used intranasal cocaine, 236 (86%) had shared straws or other snorting devices, 87 (32%) had experienced epistaxis during or after intranasal use, and 67 (25%) observed epistaxis in others with whom they were sharing materials. Longer duration of intranasal cocaine use was associated with positive RIBA results ($P = .01$) but not with detection of HCV RNA. Intranasal cocaine use was a significant independent risk factor for HCV infection, whether analyzed in the entire population ($P < .0001$) or in the subset of 79 who snorted cocaine but denied IDU and blood transfusion ($P < .0001$; Table 2).

Detection of HCV RNA by PCR and Follow Up of HCV RNA–Positive Subjects

Among 469 RIBA-positive blood donors, 384 (82%) were HCV RNA positive, and 85 (18%) were repeatedly HCV RNA negative. Of the 85 RIBA-positive, HCV RNA–negative donors, RIBA was performed a mean of 7 times over a mean period of 2.75 years, during which results remained persistently positive. The longest interval of RIBA-positive, HCV RNA–negative status documented in this study was 9.7 years. Patients who were RIBA positive, HCV RNA negative on at least 2 occasions were presumed to have been exposed to HCV and spontaneously recovered. All 217 RIBA-negative donors and 52 persistently RIBA-indeterminate donors tested negative for HCV RNA. Among RIBA-positive subjects, age, sex, and race were not significantly different between those who were HCV RNA positive and those who were HCV RNA negative: mean age, 40.2 versus 38.6 years ($P = .18$), male sex, 54% versus 53% ($P = .81$), and white race, 78% versus 85% ($P = .19$).

At the time the database was frozen for analysis, 257 of 384 HCV RNA–positive subjects (67%) were still being actively followed; 95 (37%) were treated for HCV infection. Since this was a natural history study, outcomes in these patients were only analyzed up to the time that treatment was initiated.

Among 258 HCV RNA–positive repeat blood donors, 65% were donating potentially HCV-infected blood for >10 years, and 42% had donated ≥10 times.

ALT Levels and Clinical Liver Disease in HCV RNA–Positive Subjects

Elevated alanine aminotransferase (ALT) levels were found at initial evaluation in 214 HCV RNA–positive subjects (56%).

Table 3. Pattern of Mean Alanine Aminotransferase (ALT) Level Elevations Among Hepatitis C Virus RNA–Positive Blood Donors

ALT Level, Mean	No. (%)	No. (%) Biopsied	Mean HAI	No. (%) Severe Fibrosis[a]
Normal[b]	127 (33)	42 (33)	6.19	3 (7)
Elevated	255 (67)	142 (55)	7.50	24 (17)
1–2 × ULN	185 (48)	94 (51)	7.08 $P \leq .001$[c]	13 (14) $P < .001$[d]
2–5 × ULN	64 (17)	45 (70)	8.20	10 (22)
>5 × ULN	6 (2)	3 (50)	10.33	1 (33)

Abbreviations: HAI, histologic activity index; ULN, upper limit of normal.

[a] Defined as Ishak stage 3–6 (bridging fibrosis or cirrhosis).

[b] Persistently normal in 57 of 127 donors (45%). Of these 57, 7 (12%) underwent biopsy, with none having severe fibrosis.

[c] There is a significant trend of increasing HAI with increasing ALT group.

[d] There is a significant trend of severe fibrosis with increasing ALT group.

Over an average follow-up of 5.7 years, the mean ALT level was 62 U/L (range, 13–344 U/L), compared with 22 U/L in 354 among HCV RNA–negative subjects ($P < .001$). Fifty-seven HCV RNA–positive subjects (15%) had persistently normal ALT levels; 7 (12%) underwent biopsy, with all having an Ishak fibrosis score of ≤ 1. The pattern of mean ALT level elevations is shown in Table 3.

Fifty-one of 384 HCV RNA–positive patients (13%) had physical signs of chronic liver disease: icteric sclerae was detected in 6, spider angiomata in 40, collateral venous circulation in 1, palmar erythema in 9, splenomegaly in 2, and encephalopathy in 1; none had ascites.

Extent of Liver Disease at Biopsy

On initial liver biopsy of 185 chronically infected subjects, 61 (33%) had no fibrosis, 97 (52%) had mild fibrosis, 23 (12%) had bridging fibrosis, and 4 (2.2%) had cirrhosis (Figure 1). One patient developed HCC. Associations with liver fibrosis are shown in Table 4. Both age at infection and duration of HCV infection were extrapolated from the reported date of probable exposure, specifically, blood transfusion prior to 1991, the first year of IDU, or the date of a well-defined needlestick exposure; 125 (69%) of 185 biopsied patients had these defined risk factors. On the basis of these risk exposures, the mean age at the onset of HCV infection was 21 years (range, birth to 59 years), and the mean duration between infection and the last liver biopsy specimen obtained in the study was 25 years (range, 9–43 years). Within this time frame, the duration of infection was not associated with increasing severity of fibrosis.

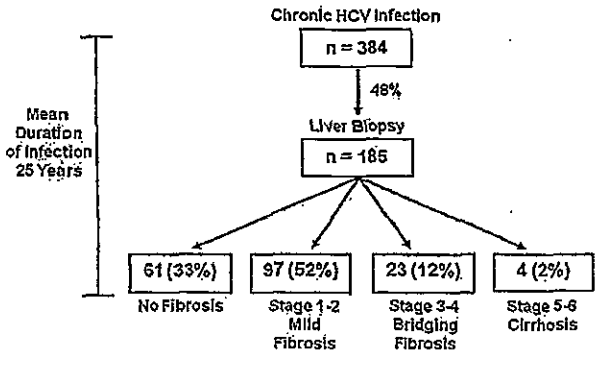


Figure 1. Stage of liver fibrosis among 185 hepatitis C virus (HCV)–positive patients undergoing initial liver biopsy. After a mean of 25 years based on the interval since a known parenteral exposure, 85% had no or minimal fibrosis, 2% had cirrhosis, and 12% had bridging fibrosis that might progress to cirrhosis.

Sex, race, education level, alcohol use at the time of HCV diagnosis, and total peak alcohol use were not significantly associated with the stage of fibrosis; body mass index was positively correlated with worsening fibrosis ($P = .005$; Table 4). Patients with bridging fibrosis or cirrhosis had higher HAI scores than those with mild or no fibrosis ($P < .001$). Elevated levels of serum markers of liver inflammation were highly associated with increasing stage of fibrosis (ALT and aspartate aminotransferase levels, $P < .002$; lactate dehydrogenase level, $P = .010$). The alpha-1 fetoprotein level was only significant when one patient who developed HCC was included ($P = .006$).

Among biopsied patients, 182 (98%) were genotyped, and 136 (76%) were genotype 1; 111 (60%) of biopsied patients had quantitative HCV RNA load measured, with a mean level of 3.32×10^6 copies/mL (range, 1.14×10^3 to 4.81×10^7 copies/mL; median, 1.20×10^6 copies/mL). Neither genotype nor HCV load were associated with a more severe stage of liver fibrosis.

Extent of Liver Disease at Repeat Liver Biopsy

Sixty-three patients (34%) underwent a second biopsy after a mean interval of 4.6 years between biopsies. Over that interval, 21 (33%) had fibrosis that increased by at least 1 Ishak stage (5 increased by at least 2 stages), 34 (54%) had no change, and 8 (14%) showed a decrease of ≥1 Ishak stage (Figure 2). The

Table 4. Characteristics of 185 Hepatitis C Virus–Positive Patients Who Underwent Liver Biopsy, Staged by Ishak Fibrosis Score

Characteristic	Score				*P*
	0	1	2	3–6	
Patients (no. [%])	61 (33)	64 (35)	33 (18)	27 (15)	
Age at infection, mean (years)[a]	19.3	21.7	21.4	24.5	.037
Age at initial biopsy, mean (years)	40.4	43.3	43.3	45.4	.009
Duration of infection, mean (years)[a]	23.9	25.9	24.5	24.0	.555
Sex					
Male	26 (28)	33 (35)	21 (22)	14 (15)	.284
Female	35 (39)	31 (34)	12 (13)	13 (14)	
Race					
White	55 (34)	53 (33)	31 (19)	23 (14)	.221
African American	5 (25)	10 (50)	1 (5)	4 (20)	
Alcohol consumption (no. drinks/week)					
Current use	5	7.1	6	6.5	.993
Peak use	16	25.1	39.2	29.3	.044
Total peak use (no. drinks/year × total years)	7910	11 476	11 388	18 663	.174
Body mass index, mean (kg/m^2)	25.5	26.1	27.9	31	.004
HAI inflammation, mean	6.1	7.5	7.3	9.3	<.001
ALT level, mean (IU/L)	57	70	77	87	<.001
Peak ALT level, mean (IU/L)	113	124	138	142	.006
AST level, mean (IU/L)	39	46	48	66	<.001
Peak AST level, mean (IU/L)	70	80	81	102	<.001
GGTP level, mean (IU/L)	57	57	70	97	.025
Total bilirubin level, mean (mg/dL)	0.6	0.7	0.7	0.7	.064
Albumin level, mean (g/dL)	4.3	4.3	4.4	4.3	.888
Platelet count, mean (platelets/mm^3)	248	229	240	188	<.001
Prothrombin time, mean (s)	12.2	12.4	12.3	12.7	.062
Partial thromboplastin time, mean (s)	27.9	28.7	27.4	28.7	.928
Alpha-1 fetoprotein level, mean (ng/mL)	8	5	5	15	.014[b]
Alkaline phosphatase level, mean (IU/L)	77	72	79	87	.289
Lactate dehydrogenase level, mean (IU/L)	161	164	172	180	.008
Creatine kinase level, mean (IU/L)	124	134	132	104	.909
Viral measurements					
Quantitative RNA load, mean (× 10^6 copies/mL)	3.43	3.17	4.55	1.96	.189
Genotype					
1	46 (34)	49 (36)	22 (16)	19 (14)	.414
2	10 (32)	9 (29)	9 (29)	3 (10)	
3	1 (14)	2 (29)	1 (14)	3 (43)	
4	0	1	0	1	
6	0	1	0	0	
Mixed	0	2	1	0	

Abbreviations: ALT, alanine aminotransferase; AST, aspartate aminotransferase; GGTP, γ-glutamyl peptidase; HAI, histologic activity index.

[a] For 125 subjects, inferred from the date of blood transfusion, the first year of injection drug use, or the date of a well-defined needlestick exposure.

[b] $P = .024$ after excluding data for 1 study subject, who had hepatocellular carcinoma.

mean progression rate between biopsies was 0.06 Ishak stages per year (0.28 for patients whose fibrosis increased).

Treated Versus Untreated HCV RNA–Positive Subjects

Among 384 HCV RNA–positive subjects, 95 (25%) were treated with interferon with or without ribavirin, or with pegylated interferon plus ribavirin. Compared with those who were not treated, subjects who received treatment were of similar age (40.2 vs 40.1 years; $P = .97$) and similar sex (48% vs 56% were male; $P = .18$). However, subjects who received treatment were more likely to be white (89% vs 74%; $P < .01$) and had a higher mean ALT level (78.5 vs 56.4; $P < .01$).

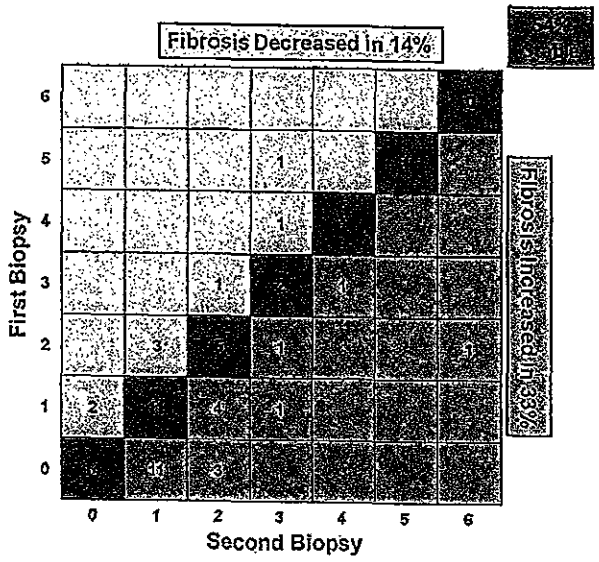


Figure 2. Fibrosis progression among 63 hepatitis C virus (HCV)–positive patients undergoing repeat liver biopsy. After a mean interval between biopsies of 4.6 years, 54% showed no change in interval biopsies, 14% showed lessened fibrosis, and 33% showed increased fibrosis by at least 1 stage; 5 (8%) increased by ≥2 stages.

When liver histologic findings were compared between biopsied subjects who were and those who were not treated, treated subjects had a higher mean Ishak fibrosis stage (1.65 vs 0.87; $P < .01$) and HAI (7.90 vs 6.64; $P < .01$).

Mortality

From 1990 to 2005, there were 28 deaths (4%) in the total study population, and 22 (79%) of those who died were HCV RNA positive (OR, 3.5; $P < .01$). The mean age at death was 51 years. Among those chronically infected with HCV, only 2 (9%) died from liver-related causes, one from HCC and the other from complications of cirrhosis.

DISCUSSION

Informed decisions for the treatment of chronic HCV infection require knowledge of the natural history of the disease because the key issue is not which drug or dosage to use, but whether treatment is indicated. Given that current treatments are arduous, expensive, and fraught with adverse events, and given that fibrosis progression is neither linear nor inevitable, one has to balance the probability of disease progression against the near certainty of deleterious drug-induced side effects. Early retrospective studies overestimated the severity of chronic HCV infection by focusing on those with established chronic liver disease while excluding the much larger number of silent infections [8–10]. This study prospectively followed asymptomatic individuals found to be anti-HCV positive at the time of blood donation. Although the study is biased by limiting enrollment to volunteer blood donors, we believe it provides a valid model for assessing transmission patterns in low-risk populations, the rate of spontaneous recovery in immunocompetent individuals, and the long-term outcomes of HCV infection.

Epidemiologic comparisons between RIBA-positive and RIBA-negative (EIA false-positive) controls demonstrated striking differences. Although all donors denied IDU at the time of donation, in subsequent private interviews with a physician, 41% of RIBA–positive donors admitted to IDU at some point in their life, compared with only 1% of RIBA-negative controls; none were current drug addicts. Thus, even in a presumed low-risk population, IDU was the greatest risk factor for HCV acquisition, with an OR of 35.0 ($P < .0001$). Unexpectedly, intranasal cocaine use was an additional strong independent risk factor in a multivariate logistic regression analysis and in CART and random forest analyses. Although intranasal cocaine use often overlapped IDU, there were 79 RIBA-positive subjects who snorted cocaine and repeatedly denied IDU or blood transfusion, and cocaine snorting remained a strong independent risk in this subset (OR, 8.5; $P < .0001$). Although one can never be certain of the veracity of IDU denial, there is plausibility to the concept that cocaine snorting might transmit HCV, in that (1) 86% of those who snorted admitted to the shared use of snorting devices, a previously implicated risk factor [11, 12]; (2) cocaine is known to denude mucous membranes, allowing direct access to blood vessels; (3) HCV RNA has been detected in nasal secretions [13]; (4) approximately 30% of subjects who snorted either experienced or observed nosebleeds during shared intranasal cocaine use; and (5) anti-HCV positivity was significantly associated with the duration of cocaine use. Thus, intranasal cocaine use may be a covert parenteral route of viral transmission, a route that might be applicable to human immunodeficiency virus and hepatitis B virus infection, as well as to HCV infection.

Over a mean interval of 25 years from onset of infection to liver biopsy, only 14% had severe histologic outcomes, and only 2% had cirrhosis; 85% had no or minimal fibrosis. Other studies have shown a similarly low proportion of severe histologic outcomes during the first 2–3 decades of HCV infection [14–17]. Further, this low incidence of severe outcomes is a worst-case scenario because biopsied patients had higher average ALT levels than nonbiopsied subjects, as there was reluctance to biopsy the approximate 30% who had normal or low-level ALT elevations. Thus, although this study has a selection bias based on the propensity to biopsy and treat those with the most severe clinical or biochemical profiles, this bias would be in the direction of observing more severe histologic outcomes rather than the relatively mild outcomes actually

observed. If subjects with spontaneous recovery (15%) are factored into the outcome analysis, the number of acutely infected patients who progress to severe outcomes would be proportionately less. However, there is a further caveat to this outcome analysis. Despite a mean duration of follow-up of 25 years between the time of probable exposure and the time of the last available biopsy, patients biopsied in this study were still relatively young and had not reached the 30–40-year disease duration that seems critical to fibrosis progression in HCV infection [18]. Indeed, the histologic progression observed between 5-year-interval biopsies in one-third of our patients portends worse outcomes for some in the ensuing decades. Nonetheless, it is probable that those who have shown no or little fibrosis progression over 25 years will have a nonprogressive or slowly progressive course that will provide time for more effective and safer therapies to emerge and induce sustained virologic responses that appear tantamount to cure [19]. Clearly, a subset of patients will have progressive histologic deterioration either because treatment was not accessed or because antiviral therapy failed to achieve a sustained virologic response. Identification of silent HCV carriers and access to treatment remain major public health hurdles, but among treated subjects the number who will not achieve a sustained virologic response has been reduced dramatically with the recent licensure of protease inhibitors [20, 21]. Since the majority of HCV-infected individuals will not be treated in the near term, continued long-term follow-up is critically needed to provide better estimates of clinical and histologic outcomes after ≥3 decades of HCV infection, although one small study has shown relatively benign outcomes even after a mean observation period of 45 years [22]. Although the prognosis for the individual patient with HCV infection can be increasingly optimistic, the global burden of this disease is staggering on the basis of the sheer magnitude (estimated 100 million) of those who are already chronically infected.

Notes

Financial support. This work was supported by the Intramural Research Program of the Clinical Center, National Institute of Diabetes and Digestive and Kidney Diseases and the National Cancer Institute, National Institutes of Health.

Potential conflicts of interest. All authors: No reported conflicts.

All authors have submitted the ICMJE Form for Disclosure of Potential Conflicts of Interest. Conflicts that the editors consider relevant to the content of the manuscript have been disclosed.

References

1. Alter MJ. Hepatitis C virus infection in the United States. J Hepatol 1999; 31:88–91.
2. El-Serag HB. Hepatocellular carcinoma: recent trends in the United States. Gastroenterology 2004; 127:27–34.
3. Conry-Cantilena C, VanRaden M, Gibble J, et al. Routes of infection, viremia, and liver disease in blood donors found to have hepatitis C virus infection. N Engl J Med 1996; 334:1691–6.
4. Tobler LH, Lee SR, Stramer SL, et al. Performance of second and third-generation RIBAs for confirmation of third-generation HCV EIA-reactive blood donations. Retrovirus Epidemiology Donor Study. Transfusion 2000; 40:917–23.
5. Ishak K, Baptista A, Bianchi L, et al. Histological grading and staging of chronic hepatitis. J Hepatol 1995; 22:696–9.
6. Desmet VJ, Gerber M, Hoofnagle JH, Manns M, Scheuer PJ. Classification of chronic hepatitis: diagnosis, grading and staging. Hepatology 1994; 19:1513–20.
7. Knodell RG, Ishak KG, Black WC, et al. Formulation and application of a numerical scoring system for assessing histological activity in asymptomatic chronic active hepatitis. Hepatology 1981; 1:431–5.
8. Tong MJ, el-Farra NS, Reikes AR, Co RL. Clinical outcomes after transfusion-associated hepatitis C. N Engl J Med 1995; 332:1463–6.
9. Kiyosawa K, Sodeyama T, Tanaka E, et al. Interrelationship of blood transfusion, non-A, non-B hepatitis and hepatocellular carcinoma: analysis by detection of antibody to hepatitis C virus. Hepatology 1990; 12:671–5.
10. Niederau C, Lange S, Heintges T, et al. Prognosis of chronic hepatitis C: results of a large, prospective cohort study. Hepatology 1998; 28:1687–95.
11. Karmochkine M, Carrat F, Dos Santos O, Cacoub P, Raguin G. A case-control study of risk factors for hepatitis C infection in patients with unexplained routes of infection. J Viral Hepat 2006; 13:775–82.
12. Tortu S, McMahon JM, Pouget ER, Hamid R. Sharing of noninjection drug-use implements as a risk factor for hepatitis C. Subst Use Misuse 2004; 39:211–24.
13. McMahon JM, Simm M, Milano D, Clatts M. Detection of hepatitis C virus in the nasal secretions of an intranasal drug-user. Ann Clin Microbiol Antimicrob 2004; 3:6.
14. Wiese M, Gruengreiff K, Guethoff W, Lafrenz M, Oesen U, Porst H. Outcome in a hepatitis C (genotype 1b) single source outbreak in Germany-a 25-year multicenter study. J Hepatol 2005; 43:590–8.
15. Kenny-Walsh E. Clinical outcomes after hepatitis C infection from contaminated anti-D immune globulin. Irish Hepatology Research Group. N Engl J Med 1999; 340:1228–33.
16. Seeff LB, Hollinger FB, Alter HJ, et al. Long-term mortality and morbidity of transfusion-associated non-A, non-B, and type C hepatitis: A National Heart, Lung, and Blood Institute collaborative study. Hepatology 2001; 33:455–63.
17. Vogt M, Lang T, Froesner G, et al. Prevalence and clinical outcome of hepatitis C infection in children who underwent cardiac surgery before the implementation of blood-donor screening. N Engl J Med 1999; 341:866–70.
18. Poynard T, Bedossa P, Opolon P. Natural history of liver fibrosis progression in patients with chronic hepatitis C. The OBSVIRC, METAVIR, CLINIVIR, and DOSVIRC groups. Lancet 1997; 349:825–32.
19. Hoofnagle JH, Seeff LB. Peginterferon and ribavirin for chronic hepatitis C. N Engl J Med 2006; 355:2444–51.
20. Poordad F, McCone J Jr, Bacon BR, et al. Boceprevir for untreated chronic HCV genotype 1 infection. N Engl J Med 2011; 364:1195–206.
21. Zeuzem S, Anderone P, Pol S, et al. Telapravir for retreatment of HCV infection. N Engl J Med 2011; 364:2417–28.
22. Seeff LB, Miller RN, Rabkin CS, et al. 45-year follow-up of hepatitis C virus infection in healthy young adults. Ann Intern Med 2000; 132:105–11.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 5. 8	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Pas SD, de Man RA, Mulders C, Balk AH, van Hal PT, Weimar W, Koopmans MP, Osterhaus AD, van der Eijk AA. Emerg Infect Dis. 2012 May;18(5):869-72. doi: 10.3201/eid1805.111712.	公表国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			オランダ

研究報告の概要

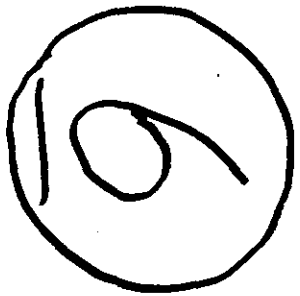
○臓器移植レシピエントにおけるE型肝炎ウイルス感染、オランダ
2000年～2011年、オランダ最大の臓器移植センターで、臓器移植を受けた1200人の生存レシピエントに対してRT-PCRを用いたHEV RNA調査を行った。そのうち12人(心臓移植5人、肺移植1人、肝臓移植3人、腎臓移植1人、複数臓器移植2人)のHEV感染が判明し、11人は慢性感染症であった。患者の年齢中央値は56.9歳(19.9～63.5歳)、9人(75%)が男性であった。慢性HEV感染症の全患者で肝酵素レベルが上昇し、ビリルビン値は患者の45.5%で上昇した。HEV RNA検出は、ALTレベルの上昇と同時かまたはその後に続いた。HEV RNA陽性時からIgMが検出されるまでの期間の中央値は32日、IgGが検出されるまでの期間は平均124日であった。11人のHEV感染患者のサンプルから分離したウイルスは全てジェノタイプ3であった。HEV感染の原因が市中感染か院内感染かは分からなかった。慢性HEV感染患者において、RNAが検出されてからIgM及びIgGが検出されるようになるまでに期間があるので、高いALT値を示す臓器移植患者におけるHEV感染症の診断はRNAの検出によって確認されるべきである。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
臓器移植患者1200人に対してHEV RNA調査を行ったところ、12人のHEV感染が判明、そのうち11人は慢性HEV感染症であることが分かったとの報告である。 HEVは脂質膜のないRNAウイルスである。本剤の製造工程にはコーン分画及び液状加熱の2つのウイルス除去・不活化工程が含まれている。最近ある遺伝子型のHEVは耐熱性であるとの成績が発表され、液状加熱の有効性に一部疑念を生じている。しかし、血漿分画製剤で最も長い歴史を持つアルブミンにはHEVの侵淫度が遥かに高い過去から現在に至るまで世界的にHEV感染例がないとの疫学的事実があること、最終製品についてHEV-NAT陰性を確認していることから、本剤の安全性は確保されていると考える。	日本赤十字社では、輸血による肝炎ウイルス感染防止のため、血液中のALT高値の献血血液を排除している。また、厚生労働科学研究「経口感染によるウイルス性肝炎(A型及びE型)の感染防止、病態解明、遺伝的多様性及び治療に関する研究」班と共同して、献血者におけるHEV感染の疫学調査を行っている。今後もHEV感染の実態に関する情報の収集及び安全対策に努める。



Hepatitis E Virus Infection among Solid Organ Transplant Recipients, the Netherlands

Suzan D. Pas, Rob A. de Man, Claudia Mulders, Aggie H.M.M. Balk, Peter T.W. van Hal, Willem Weimar, Marion P.G. Koopmans, Albert D.M.E. Osterhaus, and Annemiek A. van der Eijk

We screened 1,200 living heart, lung, liver, and kidney transplant recipients for hepatitis E virus infection by reverse transcription PCR. In 12 (1%) patients, hepatitis E virus infection was identified; in 11 patients, chronic infection developed. This immunocompromised population is at risk for hepatitis E virus infection.

Hepatitis E virus (HEV) can cause acute or chronic infection in humans. Four genotypes have been identified in humans. HEV genotype 3 predominantly infects pigs and deer, but is also recognized as a zoonotic agent. As awareness increases, more reports of HEV infection among humans, especially immunocompromised persons, have been published (*1*,*2*).

Analysis of exposure histories of persons with HEV genotype 3 infections has demonstrated its underdiagnosis, and a source was not identified for most cases (*3*). Because HEV has been reported as a cause of liver disease in solid organ transplant (SOT) recipients (*4*), we screened all living recipients of SOTs during 2000–2011 at Erasmus Medical Center, the largest SOT center in the Netherlands, for HEV RNA. This study was designed to identify SOT recipients with acute or chronic HEV infection.

The Study

A cross-sectional study was performed of all living adult SOT recipients for whom serum or EDTA-plasma samples were available in the Erasmus Medical Center biobank (stored at –20°C and –80°C, respectively, and collected during previous routine visits to the outpatient clinic; complete methods are described in detail in the online Technical Appendix, wwwnc.cdc.gov/EID/pdfs/11-1712-Techapp.pdf). Some recipients eventually had been referred to peripheral hospitals. A Laboratory Information Management System database search was performed for availability of the most recent follow-up sample. Thirty-nine HEV RNA–positive samples in the center's biobank from non-SOT patients were genotyped and used as reference for phylogenetic analysis. Samples were screened for HEV RNA by using real-time reverse transcription PCR (RT-PCR) (*5*) with primers detecting all 4 genotypes and validated according to International Standards Organization guidelines 9001 and 15189 (www.iso.org/iso/search.htm). HEV IgM and IgG were detected by using the PE2 HEV-IgM and IgG ELISA (Wantai Biological Pharmacy Enterprise Co., Ltd., Beijing, People's Republic of China). A case of HEV infection was defined by the following criteria: an HEV RNA–positive sample, confirmed either by presence of HEV IgM or IgG or HEV RNA in sequential samples. Chronic infection was diagnosed by retrospective testing of stored samples and defined as HEV RNA positive for >6 months. We retrospectively tested samples from HEV RNA–positive patients so the antibody kinetics and viremia levels could be studied. For calculating phylogenetic relationships, HEV open reading frame (ORF) 1 sequences were generated with primer set MJ-C (*6*). All viral sequences were deposited into GenBank (accession nos. JQ015399–JQ015448).

The 1,200 SOT recipients consisted of 259 heart transplant (HTX), 53 lung transplant (lungTX), 300 liver transplant (LTX), 574 kidney transplant (NTX), and 14 multiple SOT recipients (4 HTX–NTX, 1 lungTX–NTX, and 9 LTX–NTX). Twelve HEV-infected patients were identified: 5 HTX, 1 lungTX, 3 LTX, and 1 NTX recipients and 2 multiple SOT-recipients (1 HTX–NTX and 1 LTX–NTX). For 11 patients, HEV infection was chronic (Table 1). The median age of the HEV-infected patients was 56.9 years (range 19.9–63.5 years); 9 (75%) were men. In 10 HEV patients, immunosuppression was achieved by using prednisolone and tacrolimus, combined with mycophenolate mofetil (n = 3) or everolimus (n = 2). Two patients received regimens of cyclosporine and prednisolone or mycophenolate mofetil and prednisolone.

Table 1. Overview of HEV infections among SOT recipients, the Netherlands, 2000–2011*

SOT group	No. recipients	HEV infections, no. (%)	
		Confirmed	Chronic
HTX	259	5 (1.9)	5 (1.9)
LungTX	53	1 (1.9)	1 (1.9)
LTX	300	3 (1.0)	3 (1.0)
NTX	574	1 (0.2)	1 (0.2)
Multiple SOT†	14	2 (14.3)	1 (7.1)
Total	1,200	12 (1.0)	11 (0.9)

*HEV, hepatitis E virus; SOT, solid organ transplant; HTX, heart transplant; lungTX, lung transplant; LTX, liver transplant; NTX, kidney transplant.
†9 NTX–LTX, 4 NTX–HTX, and 1 NTX–lungTx.

Author affiliation: Erasmus Medical Center, Rotterdam, the Netherlands

DOI: http://dx.doi.org/10.3201/eid1805.111712

All patients who had chronic HEV infection had elevated liver enzyme levels; bilirubin levels were elevated in 45.5% of the patients (Table 2). Although it proved difficult to identify abnormal liver functions uniquely related to the HEV infection, HEV RNA detection always coincided with or was followed by an increase in alanine aminotransferase. Apparently no overt clinical symptoms were associated with infection; however, such symptoms are difficult to recognize in immunosuppressed SOT recipients. Inflammation compatible with viral hepatitis was shown in 8 of 9 patients with chronic infection for whom liver biopsy specimens were available. Other findings were F0–F2 fibrosis, steatosis 1–2 (Brunt classification), cholestasis, and Councilman bodies.

Samples from all 12 HEV patients were tested for HEV RNA and HEV IgM and IgG. One infection was traced to 2003 (lungTX), 1 to 2008 (NTX), 1 to 2009 (multiple SOT recipient, NTX–HTX), 7 to 2010 (5 HTX, 1 LTX and 1 multiple SOT recipient, NTX–LTX) and 3 to 2011 (all LTX). Among the patients, 1 LTX recipient had an acute HEV infection and cleared the virus within 6 days. Because HEV IgM and IgG were detected 4 years before HEV RNA detection, both reactivation and reinfection should be considered. The median span of HEV RNA-positive time period of chronic HEV cases was 16 months (range 6–55) with a median peak cycle threshold value of 20.0 (range 16.7–26.6). HEV RNA was detected during viremia (median cycle threshold value 19.9, range 15.5–28.3) in feces from 8 patients with chronic illness.

To assess the value of diagnostic techniques for detection of HEV infection in SOT recipients, we studied antibody kinetics (HEV IgM and IgG) and viremia. The median time from RNA positivity to IgM detection was 32 days (range 0–826 days). Five patients had detectable HEV IgM at the time of HEV RNA positivity. In 1 case, no HEV IgM was detected. HEV IgG titers were detectable an average of 124 days later than HEV RNA (range 0–826 days). HEV IgG was absent in 2 samples, and in 4 samples, HEV IgG was detectable when HEV RNA was detected. The median time between transplantation and first HEV RNA-positive result was –0.3 to 20.0 years (median 1.99 years).

Viruses isolated from samples from 11 HEV-infected patients were all within the genotype 3 group. Because no ORF1b sequences from the Netherlands were available in GenBank, ORF1b sequences were determined from samples from non-SOT HEV-infected patients in the Netherlands (Figure). No indications for a common or nosocomial source of HEV transmission were found.

Conclusions

Recent HEV infections in SOT recipients (*4,7–9*) prompted us to perform a survey among SOT recipients admitted to the largest transplantation center in the Netherlands. Our findings showed that they are at risk for HEV infection. Nine of 12 case-patients were treated postoperatively with a tacrolimus-based regimen, which has been associated with increased risk for HEV infection (*9*).

The cross-sectional RT-PCR screening detected 12 HEV infections but could not provide information about previously acquired and cleared HEV infections. Real-time RT-PCR screening was performed for 2 reasons. First, because a patient received immunosuppressive drugs, specific antibodies against HEV might be absent. Second, ELISAs have been developed to detect antibodies to genotypes 1 (Myanmar) and 2 (Mexico) and might not be sensitive enough to detect antibodies to genotype 3 or 4 (*10*). Information about results of serologic assays to validate HEV genotype 3 is limited, and seroprevalence measured can vary with the assays used (*11–13*). Furthermore, independent studies found that sensitivity and specificity of HEV RNA assays from laboratories in the Netherlands (S.D. Pas and B. Hogema, unpub. data) and other European countries (*14*) differ greatly. Therefore, international standardization should be encouraged.

Although the observed 1% of HEV-infected SOT recipients may seem low, HEV infection may be life threatening in immunocompromised patients. Misdiagnosis of HEV infection as drug-induced liver injury or autoimmune hepatitis has been reported (*15*); empirical treatment of these misdiagnoses by raising immune suppression would exacerbate the condition. Temporary reduction of immunosuppression resulted in immune-mediated control and clearance of HEV in 30% of cases (*9*).

Table 2. Parameters in chronic HEV infections among SOT recipients, the Netherlands, 2000–2011*

Parameter	Median	Range	ULN (F/M)
Peak alanine aminotransferase, U/L	301	81–909	30/40
Peak aspartate aminotransferase, U/L	172	66–1016	30/36
Peak gamma-glutamil transferase, U/L	299	72–1740	34/49
Peak bilirubin, μmol/L	16	5–100	16/16
Peak HEV RNA, cycle threshold values	20.0	16.7–26.6	NA
Period of HEV RNA positivity, mo	16	6–55	NA
Time between SOT and first HEV RNA–positive result, mo	2.0	–0.3 to 20.1	NA
Time of HEV RNA positivity before HEV IgM positive, d	32	0–826	NA
Time of HEV RNA positivity before HEV IgG positive, d	124	0–826	NA

*HEV, hepatitis E virus; SOT, solid organ transplant; ULN (F/M), upper limit of normal (female/male); NA, not applicable.

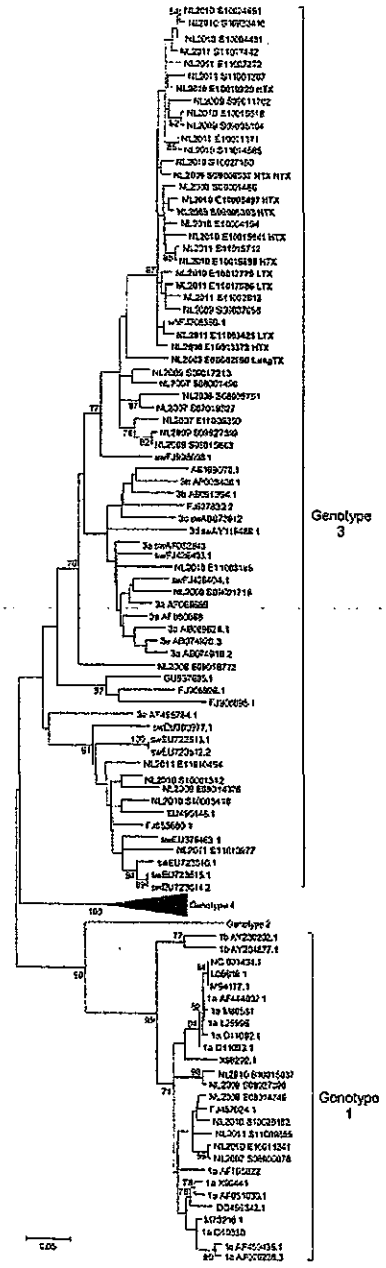


Figure. Phylogenetic tree of hepatitis E virus (HEV) open reading frame (ORF) 1 sequences, including HEV infections, the Netherlands, 2000–2011. Phylogenetic relation of a 306-bp ORF1 region was calculated by using maximum-likelihood, Kimura 2-parameter analysis with bootstrapping (n = 1,000). HEV sequences originating in the Netherlands are indicated as NL with year of isolation and isolate number (GenBank accession nos. JQ015399–JQ015448). **Boldface** indicates virus strains of chronic HEV-infected solid organ transplant recipients identified in this study. Scale bar indicates number of nucleotide substitutions per site. HTX, heart transplant; NTX, kidney transplant; LTX, liver transplant; lungTX, lung transplant.

This study also found that in patients with chronic HEV infection, HEV RNA was detected an average of 32–124 days before HEV IgM and IgG, respectively. Therefore, in SOT recipients with elevated liver enzymes (alanine aminotransferase), the diagnosis of HEV infection should be considered and verified by detection of HEV RNA.

This systematic survey of HEV infections among SOT recipients in a major transplant center shows that this population is at risk for HEV infection. Given the consequences of HEV infection, SOT recipients with liver function impairment of unknown etiology should be tested for HEV RNA.

Acknowledgements

We thank Roel Streefkerk, Mark Pronk, Mark Verbeek, Manon Briede, Hans Kruining, and Sevgi Deniz for technical assistance.

This study was approved by our medical ethical committee (MEC-2011-277) and supported by the Virgo consortium, funded by the government of the Netherlands (FES0908) and by the European Community Seventh Framework Programme (FP7/2007-2013) under project EMPERIE (grant agreement no. 223498).

Ms Pas is a scientific researcher heading a molecular diagnostic team at the Department of Virology, Erasmus Medical Center, Rotterdam, the Netherlands. Her research interests include drug-induced resistance of viral hepatitis, and development and evaluations of molecular diagnostic assays used in the clinical laboratory setting.

References

1. Tavitian S, Peron JM, Huynh A, Mansuy JM, Ysebaert L, Huguet F, et al. Hepatitis E virus excretion can be prolonged in patients with hematological malignancies. J Clin Virol. 2010;49:141–4. http://dx.doi.org/10.1016/j.jcv.2010.06.016
2. Sellier P, Mazeron MC, Tesse S, Badsi E, Evans J, Magnier JD, et al. Hepatitis E virus infection in HIV-infected patients with elevated serum transaminases levels. Virol J. 2011;8:171. http://dx.doi.org/10.1186/1743-422X-8-171
3. Borgen K, Herremans T, Duizer E, Vennema H, Rutjes S, Bosman A, et al. Non-travel related hepatitis E virus genotype 3 infections in the Netherlands; a case series 2004–2006. BMC Infect Dis. 2008;8:61. http://dx.doi.org/10.1186/1471-2334-8-61
4. Schlosser B, Stein A, Neuhaus R, Pahl S, Ramez B, Kruger DH, et al. Liver transplant from a donor with occult HEV infection induced chronic hepatitis and cirrhosis in the recipient. J Hepatol. 2012;56:500–2. Epub 2011 Jul 26. http://dx.doi.org/10.1016/j.jhep.2011.06.021
5. Zhao C, Li Z, Yan B, Harrison TJ, Guo X, Zhang F, et al. Comparison of real-time fluorescent RT-PCR and conventional RT-PCR for the detection of hepatitis E virus genotypes prevalent in China. J Med Virol. 2007;79:1966–73. http://dx.doi.org/10.1002/jmv.21040
6. Zhai L, Dai X, Meng J. Hepatitis E virus genotyping based on full-length genome and partial genomic regions. Virus Res. 2006;120:57–69. http://dx.doi.org/10.1016/j.virusres.2006.01.013

7. Haagsma EB, Niesters HG, van den Berg AP, Riezebos-Brilman A, Porte RJ, Vennema H, et al. Prevalence of hepatitis E virus infection in liver transplant recipients. Liver Transpl. 2009;15:1225–8. http://dx.doi.org/10.1002/lt.21819
8. Buti M, Cabrera C, Jardi R, Castells L, Esteban R. Are recipients of solid organ transplantation a high-risk population for hepatitis E virus infection? Liver Transpl. 2010;16:106–7, author reply 8. http://dx.doi.org/10.1002/lt.21925
9. Kamar N, Garrouste C, Haagsma EB, Garrigue V, Pischke S, Chauvet C, et al. Factors associated with chronic hepatitis in patients with hepatitis E virus infection who have received solid organ transplants. Gastroenterology. 2011;140:1481–9. http://dx.doi.org/10.1053/j.gastro.2011.02.050
10. Herremans M, Bakker J, Duizer E, Vennema H, Koopmans MP. Use of serological assays for diagnosis of hepatitis E virus genotype 1 and 3 infections in a setting of low endemicity. Clin Vaccine Immunol. 2007;14:562–8. http://dx.doi.org/10.1128/CVI.00231-06
11. Bendall R, Ellis V, Ijaz S, Ali R, Dalton H. A comparison of two commercially available anti-HEV IgG kits and a re-evaluation of anti-HEV IgG seroprevalence data in developed countries. J Med Virol. 2010;82:799–805. http://dx.doi.org/10.1002/jmv.21656
12. Bouwknegt M, Engel B, Herremans MM, Widdowson MA, Worm HC, Koopmans MP, et al. Bayesian estimation of hepatitis E virus seroprevalence for populations with different exposure levels to swine in the Netherlands. Epidemiol Infect. 2008;136:567–76. http://dx.doi.org/10.1017/S0950268807008941
13. Mansuy JM, Bendall R, Legrand-Abravanel F, Saune K, Miedouge M, Ellis V, et al. Hepatitis E virus antibodies in blood donors, France. Emerg Infect Dis. 2011;17:2309–12. http://dx.doi.org/10.3201/eid1712.110371
14. Baylis SA, Hanschmann KM, Blumel J, Nubling CM. Standardization of hepatitis E virus (HEV) nucleic acid amplification technique-based assays: an initial study to evaluate a panel of HEV strains and investigate laboratory performance. J Clin Microbiol. 2011;49:1234–9. http://dx.doi.org/10.1128/JCM.02578-10
15. Davern TJ, Chalasani N, Fontana RJ, Hayashi PH, Protiva P, Kleiner DE, et al. Acute hepatitis E infection accounts for some cases of suspected drug-induced liver injury. Gastroenterology. 2011;141:1665–72. http://dx.doi.org/10.1053/j.gastro.2011.07.051

Address for correspondence: Annemiek van der Eijk, ErasmusMC, Dept of Virology, room L355, 's Gravendijkwal 230 3015 CE Rotterdam, the Netherlands; email: a.vandereijk@erasmusmc.nl

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数		報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
			2012. 7. 18	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Baylis SA, Gärtner T, Nick S, Ovemyr J, Blümel J. Vox Sang. 2012 Jul;103(1):89-90. doi: 10.1111/j.1423-0410.2011.01583.x. Epub 2012 Jan 6.	公表国
販売名（企業名）	赤十字アルブミン20（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25（日本赤十字社） 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL（日本赤十字社）			ドイツ

研究報告の概要

○スウェーデン、ドイツ及び米国からの血漿供血におけるE型肝炎ウイルスRNAの陽性率

ドイツ、スウェーデン及び米国からの165,010血漿供血において、96供血までのミニプール血漿中のE型肝炎ウイルス（HEV）RNAの存在をRT-PCRアッセイを用いて調査した。スウェーデンから95,835本、ドイツから18,100本の供血がスクリーニングされ、それらのうちスウェーデンからの12本、ドイツからの4本がHEV RNA陽性であった。実際のミニプールを考慮すると、HEV陽性供血の割合はスウェーデンの供血において1:7986、ドイツの供血において1:4525であった。対照的に、米国からの51,075供血においてHEV陽性供血は検出されなかった。HEV RNA陽性血液は製剤原料から除外された。サンプルのうち12本は分子学的及び血清学的分析により特徴づけられた。HEV株は全てジェノタイプ3であり、BLAST検索では、イノシシからのHEV株とドイツ人供血者から得られたサンプル6、7の間で、密接なRNA配列一致があった。ウイルス量は3.2-5.7 log10IU/mL HEV RNA間で変動し、日本人献血者での報告と同様の範囲であった。大部分のサンプルはウィンドウ期供血であり、異なるバッチのキットを使用した繰り返し検査により、1人のウイルス血症サンプルのみIgM陽性、もう1人はIgG陽性であることが確定した。3供血においては、最初は陽性であったが、繰り返し検査により陰性となった。このような曖昧な結果は、HEV血清学的分析の標準化に関する問題点となる。検査された12本のウイルス血症供血のうち3本のみ、ALTレベルの上昇がわずかに見られた（80－110 IU/L）。これはALTによる血液/血漿スクリーニングが、HEVウイルス血症供血者の除外の方法として信頼できないことを示している。

ヨーロッパでの多数のHEV陽性供血は多くの無症候性感染を示唆し、血液のHEV汚染の結果は更なる調査を必要とする。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
スウェーデン、ドイツ及び米国からの血漿供血165,010本においてHEV RNAの存在を検査したところ、スウェーデンとドイツの供血においてそれぞれ1:7986、1:4525の割合でHEV RNA陽性であり、米国の供血は全て陰性であることが分かったとの報告である。 HEVは脂質膜のないRNAウイルスである。本剤の製造工程にはコーン分画及び液状加熱の2つのウイルス除去・不活化工程が含まれている。最近ある遺伝子型のHEVは耐熱性であるとの成績が発表され、液状加熱の有効性に一部疑念を生じている。しかし、血漿分画製剤で最も長い歴史を持つアルブミンにはHEVの侵淫度が遥かに高い過去から現在に至るまで世界的にHEV感染例がないとの疫学的事実があること、最終製品についてHEV-NAT陰性を確認していることから、本剤の安全性は確保されていると考える。	日本赤十字社では、厚生労働科学研究「経口感染によるウイルス性肝炎（A型及びE型）の感染防止、病態解明、遺伝的多様性及び治療に関する研究」班と共同して、献血者におけるHEV感染の疫学調査を行っている。今後もHEV感染の実態に関する情報の収集及び安全対策に努める。

JRC2012T-020

VoxSanguinis

The International Journal of Transfusion Medicine

ISBT International Society of Blood Transfusion

Vox Sanguinis (2012) 103, 89–90

LETTER

DOI: 10.1111/j.1423-0410.2011.01583.x

Vox Sanguinis

Occurrence of hepatitis E virus RNA in plasma donations from Sweden, Germany and the United States

S. A. Baylis[1], T. Gärtner[2], S. Nick[1], J. Ovemyr[3] & J. Blümel[1]

[1]*Paul-Ehrlich-Institut, Langen, Germany*

[2]*Octapharma, Frankfurt am Main, Germany*

[3]*Octapharma, Stockholm, Sweden*

Dear Editor,

We have investigated 165 010 plasma donations from Germany, Sweden and the United States for the presence of hepatitis E virus (HEV) RNA in plasma mini-pools of up to 96 donations using a proprietary internally controlled real-time RT-PCR assay; the 95% cut-off of the assay is ~250 IU/ml as determined by dilution of the WHO International Standard for HEV RNA [1]. From Europe, 95 835 Swedish and 18 100 German donations were screened, of these, 12 Swedish and four German donations were positive for HEV RNA. Allowing for actual mini-pool size, the rate of HEV-positive donations was 1:7986 and 1:4525 for the Swedish and German donors, respectively. In contrast, no HEV-positive donations were identified in 51 075 donations from the United States. Whenever mini-pools were positive for HEV RNA, individual positive donations were resolved and excluded from pharmaceutical production; 12 of the samples were characterized by molecular and serological analysis (Table 1). Analysis of the HEV strains revealed genotype 3 in all cases. Genotyping was performed by amplification of the ORF2/3 region of the HEV genome using the OneStep RT-PCR kit (Qiagen GmbH, Hilden, Germany) and the forward primer 5′-GGGTGGAATGAATAA CATGT and reverse primer 5′-AGGGGTTGGTTGGATGAA or 5′-GGGGCGCTGGGMCTGGTCACGCCAAG. Amplification products were sequenced directly; all sequenced strains were distinct from each other (accession numbers JN995562-JN995573). The closest RNA sequence matches from BLAST searches were between an HEV strain from a wild boar (accession number FJ705359) and samples 6 and 7 obtained from German donors. Viral loads varied between ~3·2–5·7 $\log_{10}$ IU/ml HEV RNA and are in a similar range reported for Japanese blood donors [2]. Anti-HEV IgM and anti-HEV IgG in the individual donations were determined using EIAs from Wantai (Wantai, Beijing, China). The majority of samples were window-period donations. Only one viraemic sample was positive for IgM, another for IgG (confirmed by repeat testing using different kit lots). Three samples were initially reactive; however, repeat testing using different kit batches gave negative results. Such

Table 1 Summary of characterization of HEV RNA-positive plasma donations

Sample code	IgM[a]	IgG[a]	ALT[b]	Viral load ($\log_{10}$ IU/ml)[c]	Country of origin
1	+/−	−	Neg.	3·22	Sweden
2	+	+/−	Neg.	3·26	Germany
3	−	−	Neg.	5·35	Germany
4	−	−	Neg.	4·39	Sweden
5	−	+	Neg.	4·95	Sweden
6	+/−	−	Elevated	4·54	Germany
7	−	−	Neg.	4·19	Germany
8	−	−	Neg.	4·76	Sweden
9	−	−	Neg.	3·86	Sweden
10	−	−	Elevated	4·64	Sweden
11	−	−	Elevated	3·20	Sweden
12	−	−	Neg.	5·68	Sweden

ALT, alanine transaminase.

[a]Positive samples (+) defined as S/Co ≥1 (according to the kit specifications); equivocal samples (+/−) gave an S/Co ≥1 on initial round of testing and S/Co < 1 on repeat testing using alternative batches of kit. Negative samples (−). Positive control for IgG was performed using the WHO International Reference Reagent for anti-HEV IgG (95/584).

[b]> 80 IU/l.

[c]RNA titres determined by real-time RT-PCR in comparison to the WHO International Standard for HEV RNA – code number 6329/10 [1].

equivocal results highlight some of the problems with standardization of HEV serological assays. Alanine transaminase (ALT) levels were slightly elevated (80–110 IU/l) in only 3 of 12 viraemic donations tested. This indicates that screening of blood/plasma by ALT is not a reliable measure for exclusion of HEV viraemic donors.

Our results are in accordance with a recent investigation from the UK detecting 6 of 880 mini-pools (with mini-pool comprising 48 donors) positive for HEV RNA [3]. Considering a ratio of 1:4525 viraemic donations in Germany, the limited viraemic titre of some donations, and a size of ~3500 donations per plasma fractionation pool, this could explain why we found ~10% of large plasma pools for fractionation from Germany positive for HEV RNA [4]. We agree with Ijaz *et al.* [3] that such high numbers of HEV-positive blood donations in Europe suggest many subclinical infections [5], and the consequences of HEV contamination of blood and plasma warrants further investigation.

Acknowledgements

We thank Maike Schönborn, Christiane Beckort, Roswitha Kleiber and Yvonne Buckendahl for excellent technical assistance and Ulrich Mohn for invaluable help and advice.

References

1 Baylis SA, Mizusawa S, Okada Y, *et al.*: Collaborative study to establish as World Health Organization international standard for hepatitis E virus RNA for nucleic acid amplification technology (NAT)-based assays. 2011; WHO/BS/2011.2175

2 Sakata H, Matsubayashi K, Takeda H, *et al.*: A nationwide survey for hepatitis E virus prevalence in Japanese blood donors with elevated alanine aminotransferase. *Transfusion* 2008; 48:2568–2576

3 Ijaz S, Szypulska R, Tettmar KI, *et al.*: Detection of hepatitis E virus RNA in plasma mini-pools from blood donors in England. *Vox Sang* 2011; 102: pp. 272

4 Baylis SA, Koc O, Nick S, *et al.*: Widespread distribution of hepatitis E virus in plasma fractionation pools. *Vox Sang* 2011; 102:182–183

5 Renou C, Pariente A, Cadranel JF, *et al.*: Clinically silent forms may partly explain the rarity of acute autocthonous genotype 3c hepatitis E infection in France. *J Clin Virol* 2011; 51:139–141

Received: 25 October 2011,
accepted 28 October 2011,
published online 6 January 2012

Sally A. Baylis
Viral Safety Section
Paul-Ehrlich-Institut
Paul-Ehrlich-Strasse 51-59
D-63225 Langen
Germany
E-mail: sally.baylis@pei.de

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 4. 21	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Lavoie M, Sharp CP, Pépin J, Pennington C, Foupouapouognigni Y, Pybus OG, Njouom R, Simmonds P. Emerg Infect Dis. 2012 Apr;18(4):680-3. doi: 10.3201/eid1804.110628.	公表国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			カナダ

研究報告の概要

○ヒトパルボウイルス4感染、カメルーン
2009年にHCV調査のために採取されたカメルーン人の血清サンプルを用いてヒトパルボウイルス4(PARV4)抗体陽性率の調査を行った(60－102歳;中央値70歳、n=451)。その結果、79人(17.5%)がPARV4抗体を有していた。PARV4抗体陽性はマラリア予防薬の静脈注射、結核の非経口治療、避妊薬の筋肉注射に関連があった。また、高齢者よりも60－64歳の初老の人に陽性者が多かった。これはウイルス暴露の経年的変化や、PARV4抗体価が次第に弱まっていき、最終的に偽陰性となることなどが考えられる。また左腕のワクチン接種跡(天然痘ワクチン)が欠如している人は接種跡がある人よりも陽性者が多かった。天然痘ワクチン接種後に跡が残らなかった事は、PARV4感染への感受性と関連した免疫特性を反映している可能性がある。抗体陽性率は性別、HCV抗体、HBc抗体、トレポネーマ抗体の存在と相関しなかった。
今回の調査はある程度のPARV4非経口感染を示唆する。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
カメルーンの60歳以上の人を対象にヒトパルボウイルス4(PARV4)抗体陽性率についての調査を行ったところ、PARV4抗体陽性者は抗マラリア薬の静脈注射や結核の非経口治療、避妊薬の筋肉注射を受けた人などに見られ、ある程度のPARV4非経口感染が示唆されたとの報告である。 パルボウイルス4は脂質膜を持たない小型のDNAウイルスである。PARV4のヒトにおける病原性の有無は未だ明らかではないが、仮に原料血漿にPARV4ウイルスが含まれていたとしても、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿った類縁モデルウイルスによるプロセスバリデーションで除去・不活化されることが検証されており、本製剤の安全性は確保されていると考える。	本剤の安全性は確保されていると考えるが、念のため今後も情報収集に努め、今後とも輸血用血液及び血漿分画製剤の安全性向上のために努力する。

Human Parvovirus 4 Infection, Cameroon

Myriam Lavoie, Colin P. Sharp, Jacques Pépin, Christopher Pennington, Yacouba Foupouapouognigni, Oliver G. Pybus, Richard Njouom, and Peter Simmonds

In a post hoc analysis of samples collected in 2009, we determined seroprevalence of parvovirus 4 (PARV4) among elderly Cameroonians. PARV4 seropositivity was associated with receipt of intravenous antimalarial drugs, intramuscular streptomycin, or an intramuscular contraceptive, but not hepatitis C virus seropositivity. Findings suggest parenteral acquisition of some PARV4 infections.

Human parvovirus 4 (PARV4), also known as partetravirus, was identified in 2005 from the plasma of an intravenous drug user (IDU) (*1*). In separate studies that used PCR, PARV4 was subsequently documented in autopsy tissues from IDUs and persons with hemophilia; in bone marrow aspirates from patients with AIDS; and in the blood of transplant recipients, hemodialysis patients, and infants in Ghana (*2–5*).

In 2007, 199 (32.4%) of 626 adults tested in Burkina Faso, Democratic Republic of the Congo, and Cameroon were seropositive by first-generation serologic assay for PARV4 (*6*). In South Africa, prevalence was 36% among HIV-infected blood donors but only 4% among their HIV-seronegative counterparts (*6*). Although PARV4 presence in IDUs and hemophilia patients suggests parenteral transmission (*7,8*), this route has not yet been studied and other modes of transmission have not been ruled out. The pathogenicity of PARV4 remains unclear, but PARV4 DNA recently was found in the cerebrospinal fluid of 2 children from India who had unexplained encephalitis (*9*).

During 2010, to investigate the epidemiology of PARV4 in Africa, we tested for PARV4 antibodies in serum samples collected during a 2009 study of a defined population of elderly Cameroonians among whom prevalence of hepatitis C virus (HCV) infection was high. Previous exposures to parenteral and sexual risk factors had been documented for this population (*10–12*), indicating that this population had been excessively exposed to improperly sterilized syringes and needles and that the main risk factor for HCV was the administration of intravenous antimalarial drugs, mostly before 1960.

The Study

The ethics committees of the Cameroonian Ministry of Health and the Centre Hospitalier Universitaire de Sherbrooke (Sherbrooke, Quebec, Canada) approved the 2009 study and 2010 follow-up specimen testing. The study was conducted in Ebolowa, southern Cameroon (*10*). Inclusion criteria were age ≥60 years and consent. Exclusion criteria were dementia or inability to communicate. With cooperation from community leaders, we visited a convenience sample of houses to identify participants. We obtained venous samples from participants and gathered sociodemographic data and information about past intravenous treatment for any disease, past parenteral treatment for infectious diseases, transfusions, scarifications, and circumcision. Vaccine scars were documented.

We performed PARV4 IgG detection on each sample in replicate by indirect ELISA by using baculovirus-expressed viral protein 2 and control antigens (*8*); arbitrary unit (AU) values were calculated relative to a control sample. Because of a high background reactivity observed for this cohort, we additionally stipulated that for positive samples, the optical density ratio (ODR) of viral protein 2 to control must be >1.2; ODRs below this threshold were considered negative.

Serologic assays for HCV and treponemal antibodies were described in the original study by Pepin et al. (*10*). We detected antibodies against hepatitis B core antigen (HBcAg) by using AxSYM (Abbott, Montreal, Quebec, Canada) and analyzed data by using Stata 10.0 (StataCorp LP, College Station, TX, USA). Proportions were compared by using either the χ^2 or Fisher exact test. Variables associated with PARV4 seropositivity in univariate analysis were tested in logistic regression models through nonautomated forward selection, continuing until no other variable reached significance. Each variable was then eliminated to assess its effect by using likelihood ratio tests. We retained in the final model variables that enhanced the fit at the $p<0.05$ level.

The study comprised 451 persons 60–102 years of age (median 70 years); 56% were HCV seropositive, 74% had antibodies against *Treponema* (10), and 95% were anti-HBcAg seropositive. Seventy-nine (17.5%) persons carried PARV4 antibodies.

PARV4 antibodies were more prevalent among persons 60–64 years of age than among older persons (Table 1). Prevalence did not vary by sex or by presence of anti-HCV, anti-HBcAg, or treponemal antibodies. The prevalence of anti-PARV4 increased, but not significantly, with

Author affiliations: Université de Sherbrooke, Sherbrooke, Quebec, Canada (M. Lavoie, J. Pépin); University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland, UK (C.P. Sharp, C. Pennington, P. Simmonds); Centre Pasteur du Cameroun, Yaoundé, Cameroon (Y. Foupouapouognigni, R. Njouom); and University of Oxford, Oxford, UK (O. Pybus)

DOI: http://dx.doi.org/10.3201/eid1804.110628

Table 1. Prevalence of human parvovirus 4 by patient characteristics, Cameroon, 2009*

Characteristic	No. virus positive/ no. tested (%)	p value
Age, y		0.04
60–64	32/125 (26)	
65–69	13/96 (14)	
70–74	17/103 (17)	
≥75	17/127 (13)	
Sex		0.15
M	25/178 (14)	
F	54/273 (20)	
HCV serologic results		0.61
Negative	29/178 (16)	
Positive	47/252 (19)	
Anti-HBcAg		1.00
Negative	3/21 (14)	
Positive	76/430 (18)	
Treponemal antibodies		0.06
Absent	28/119 (24)	
Present	51/332 (15)	
Intravenous treatment for malaria		0.04
No	29/216 (13)	
Yes	50/235 (21)	
Intravenous treatment for other diseases		0.93
No	42/239 (18)	
Yes	37/212 (17)	
No. past intravenous treatments		0.38
0	12/88 (14)	
1–3	33/206 (16)	
≥4	25/116 (22)	
Unknown	9/41 (22)	
Tuberculosis		0.04
No	72/433 (17)	
Yes, treated with oral drugs only	4/12 (33)	
Yes, treatment included streptomycin	3/6 (50)	
Transfusion		0.09
No	76/408 (19)	
Yes	3/43 (7)	
Depo-Provera injections†		0.006
No	50/268 (19)	
Yes	4/5 (80)	
Scarifications		0.88
No	30/165 (18)	
Yes	49/286 (17)	
Vaccine scar, left arm		0.005
Absent	17/53 (32)	
Present	61/397 (15)	
Vaccine scar, right arm		0.76
Absent	27/165 (16)	
Present	51/284 (18)	
Circumcision (males only)		0.74
Medical	9/73 (12)	
Traditional	16/105 (15)	

*HCV, hepatitis C virus, HBcAg, hepatitis B core antigen.
†Pharmacia & Upjohn Company, New York, NY, USA.

exposure to intravenous treatments in general. Receipt of intravenous antimalarial drugs was associated with PARV4 seropositivity, which was also more frequent among persons treated for tuberculosis and among the few women who had received injections of the contraceptive Depo-Provera (Pharmacia & Upjohn Company, New York, NY, USA). PARV4 seropositivity was not associated with treatments delivered by injection against yaws, syphilis, leprosy, or trypanosomiasis (data not shown) or with sexually transmitted infections. PARV4 seropositivity was less common among persons who had a vaccine scar on the left arm.

In multivariate analysis (Table 2), PARV4 seropositivity was associated with younger age, intravenous receipt of antimalarial drugs, and parenteral receipt of antituberculosis treatment (the latter was of borderline significance) and was less common among persons with a left-sided vaccine scar. In that model, Depo-Provera injections were associated with PARV-4 seropositivity among women (adjusted odds ratio 17.27, 95% CI 1.57–189.78; p = 0.02).

To confirm that associations were not biased by assay sensitivity, we conducted a secondary analysis that excluded 81 borderline PARV4-negative persons (AU >0.5 and ODR <1.2) and 35 borderline PARV4-positive persons (AU 0.5–2.0, ODR >1.2) (Table 2). The same factors as in the main analysis were associated with PARV4 seropositivity; receipt of intravenous antimalarial drugs was not significant in the smaller sample.

Conclusions

We retrospectively analyzed samples obtained during a study of elderly Cameroonians from an area where HCV infection was hyperendemic and in which we had collected much information about potential parenteral modes of transmission of blood-borne viruses but less information about other routes (*10*). Because this was a cross-sectional study, the time sequence of exposure routes and PARV4 infection could not be determined. Thus, our results should be considered exploratory.

The sensitivity, specificity, and ability of our assay to identify seroconversions are comparable to those of PCR-based methods for determining active infections and past exposure (*7–9,13*). Exclusion of samples showing low antibody levels that might represent nonspecific reactivity had little effect on the analysis of risk factors.

The results provide some evidence for parenteral transmission of PARV4 in the study community. As was HCV infection (*10*), PARV4 infection was associated with receipt of intravenous antimalarial therapy. This risk factor was found for half of the population we studied, whereas intramuscular Depo-Provera and streptomycin were administered to few patients. In univariate analysis, PARV4 seropositivity was also more common in patients treated with oral antituberculosis drugs. Although the seroprevalence of PARV4 increased with past exposure to intravenous treatments in general, this finding was not statistically significant because antibodies against PARV4 were common among persons who reported no such treatments. This finding, and the lack of association between PARV4 and HCV seropositivity, suggests that other, nonparenteral modes of transmission existed.

Table 2. Correlates of study participants and human parvovirus 4 infection in multivariate analysis, Cameroon, 2009

Participant characteristic	All participants		After exclusions*	
	Adjusted odds ratio (95% CI)	p value	Adjusted odds ratio (95% CI)	p value
Age group, y				
60–64	2.21 (1.13–4.31)	0.02	2.88 (1.16–7.17)	0.02
65–69	1.01 (0.46–2.24)	0.98	1.20 (0.39–3.70)	0.76
70–74	1.16 (0.54–2.46)	0.71	1.51 (0.55–4.16)	0.42
≥75	1.00		1.00	
Tuberculosis				
No	1.00		1.00	
Yes, treated with oral drugs only	2.09 (0.58–7.54)	0.26	2.91 (0.63–13.51)	0.17
Yes, treatment included streptomycin	5.21 (0.99–27.37)	0.05	20.96 (1.67–262.99)	0.02
Vaccine scar, left arm				
Absent	1.00		1.00	
Present	0.37 (0.19–0.71)	0.003	0.32 (0.13–0.78)	0.01
Intravenous treatment for malaria				0.06
No	1.00		1.00	
Yes	1.92 (1.13–3.24)	0.015	1.98 (0.97–4.03)	0.06

*After exclusion of 81 participants with borderline negative results and 35 with borderline positive results.

PARV4 seropositivity was more common in persons 60–64 years of age than in older persons. This finding has 3 potential explanations. First, exposure to the virus might have fluctuated over time. Second, titers of antibodies against PARV4 might progressively wane, eventually leading to false negative results. Third, PARV4 infection might increase long-term risk for death, although this explanation seems unlikely.

Absence of a vaccine scar on the left arm was associated with PARV4 seropositivity. Historical and epidemiologic data suggest that in Cameroon, the left side was used for smallpox vaccine and the right side for *Mycobacterium bovis* BCG (*14*,*15*). Failure of scar development after smallpox vaccination might reflect immunologic characteristics associated with greater susceptibility to PARV4 infection.

Our findings suggest that some parenteral transmission of PARV4 occurred among elderly Cameroonians, but parenteral transmission might not have been the main route of infection. The association with past tuberculosis, although perhaps coincidental, is intriguing and deserves further study.

Initial data collection was funded by the Canadian Institutes for Health Research. The current work was supported solely by funding from The Roslin Institute, University of Edinburgh, Scotland, UK.

Dr Lavoie is a senior resident in infectious diseases and medical microbiology at the Université de Sherbrooke. Her principal research interest is the epidemiology of bloodborne viruses in Cameroon.

References

1. Jones MS, Kapoor A, Lukashov VV, Simmonds P, Hecht F, Delwart E. DNA viruses identified in patients with acute viral infection syndrome. J Virol. 2005;79:8230–6. http://dx.doi.org/10.1128/JVI.79.13.8230-8236.2005
2. Longhi E, Bestetti G, Acquaviva V, Foschi A, Piolini R, Meroni L, et al. Human parvovirus 4 in the bone marrow of Italian patients with AIDS. AIDS. 2007;21:1481–3. http://dx.doi.org/10.1097/QAD.0b013e3281e38558
3. Vallerini D, Barozzi P, Quadrelli C, Bosco F, Potenza L, Riva G, et al. Parvoviruses in blood donors and transplant patients, Italy. Emerg Infect Dis. 2008;14:185–6. http://dx.doi.org/10.3201/eid1401.070610
4. Touinssi M, Reynaud-Gaubert M, Gomez C, Thomas P, Dussol B, Berland Y, et al. Parvovirus 4 in French in-patients: a study of hemodialysis and lung transplant cohorts. J Med Virol. 2011;83:717–20. http://dx.doi.org/10.1002/jmv.22003
5. Panning M, Kobbe R, Vollbach S, Drexler JF, Adjei S, Adjei O, et al. Novel human parvovirus 4 genotype 3 in infants, Ghana. Emerg Infect Dis. 2010;16:1143–6. http://dx.doi.org/10.3201/eid1607.100025
6. Sharp CP, Vermeulen M, Nébié Y, Djoko CF, LeBreton M, Tamoufe U, et al. Epidemiology of human parvovirus 4 infection in sub-Saharan Africa. Emerg Infect Dis. 2010;16:1605–7.
7. Simmonds P, Manning A, Kenneil R, Carnie FW, Bell JE. Parenteral transmission of the novel human parvovirus PARV4. Emerg Infect Dis. 2007;13:1386–8.
8. Sharp CP, Lail A, Donfield S, Simmons R, Leen C, Klenerman P, et al. High frequencies of exposure to the novel human parvovirus, PARV4 in haemophiliacs and injecting drug users detected by a serological assay for PARV4 antibodies. J Infect Dis. 2009;200:1119–25. http://dx.doi.org/10.1086/605646
9. Benjamin LA, Lewthwaite P, Vasanthapuram R, Zhao G, Sharp C, Simmonds P, et al. Human parvovirus 4 (PARV4) as potential cause of encephalitis in children, India. Emerg Infect Dis. 2011;17:1484–7.
10. Pépin J, Lavoie M, Pybus OG, Pouillot R, Foupouapouognigni Y, Rousset D, et al. HCV transmission during medical interventions and traditional practices in colonial Cameroon: potential implications for the emergence of HIV-1. Clin Infect Dis. 2010;51:768–76.
11. Njouom R, Nerrienet E, Dubois M, Lachenal G, Rousset D, Vessière A, et al. The hepatitis C virus epidemic in Cameroon: genetic evidence for rapid transmission between 1920 and 1960. Infect Genet Evol. 2007;7:361–7. http://dx.doi.org/10.1016/j.meegid.2006.10.003
12. Pépin J, Labbé AC. Noble goals, unforeseen consequences: the control of tropical diseases in colonial central Africa and the iatrogenic transmission of blood-borne viruses. Trop Med Int Health. 2008;13:744–53. http://dx.doi.org/10.1111/j.1365-3156.2008.02060.x

13. Lahtinen A, Kivela P, Hedman L, Kumar A, Kantele A, Lappalainen M, et al. Serodiagnosis of primary infections with human parvovirus 4, Finland. Emerg Infect Dis. 2011;17:79–82. http://dx.doi.org/10.3201/eid1701.100750
14. Blanchard M. Précis d'épidémiologie. Médecine préventive et hygiène coloniales. Paris: Vigot Frères; 1938.
15. Brunel M. La tuberculose pulmonaire au Cameroun en 1958, endémie tuberculeuse, formes cliniques, traitement, prophylaxie. Bull Soc Pathol Exot. 1958;51:920–35.

Address for correspondence: Jacques Pépin, CHUS, 3001, 12ème Ave Nord, Sherbrooke, Québec J1H 5N4, Canada; email: jacques.pepin@usherbrooke.ca

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 7. 18	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Sharp CP, Lail A, Donfield S, Gomperts ED, Simmonds P. Transfusion. 2012 Jul;52(7):1482-9. doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03420.x. Epub 2011 Nov 2.	公表国 英国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			

研究報告の概要

○血友病の被験者におけるヒトパルボウイルス4の一次感染についてのウイルス学的、臨床的な特徴:ウイルス不活化凝固因子製剤による高頻度な伝播

背景:ヒトパルボウイルス4(PARV4)は、静注薬物常習者及び非ウイルス不活化凝固因子製剤に曝露した血友病患者を含む非経口曝露歴を持つ人々において、新たに発見されたパルボウイルスである。血漿由来ウイルス不活化凝固因子製剤の治療を受けている血友病患者に対するPARV4の潜在的伝播を調査するため、血友病患者の大規模集団(194人、7～16歳)におけるPARV4抗体の陽転化について、5年以上の期間、スクリーニングを行った。

研究計画及び方法:Hemophilia Growth and Development Studyコホートに登録の血友病患者194人に、ウイルス不活化凝固因子製剤のみの治療の開始時及び5年間の調査終了時に、PARV4抗体スクリーニング検査を実施した。研究期間中に抗体陽転化している被験者から、中間時点でのサンプルが採取され、抗体陽転化の時期の絞り込み及びIgM応答、急性ウイルス血症の持続期間、臨床症状を調査するためにスクリーニングが行われた。

結果:研究開始時のPARV4抗体陽性率は44%であった。観察期間中、9人の被験者(そのうち7人はHIV陽性)においてPARV4抗体が陽転化した(発生率、1.7%/年)。感染した被験者は比較的長期のウイルス血症期間(平均7カ月)及び感染急性期に弱い一過性のIgM応答を示した。有機溶媒/界面活性剤や液状加熱、乾燥加熱により不活化された凝固因子製剤は感染性があった。最も共通する臨床症状は発疹及び肝障害であった。

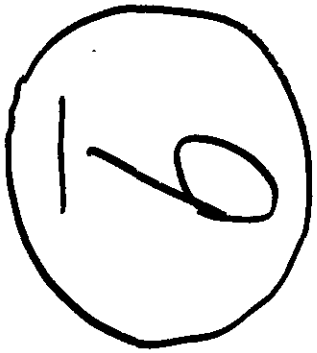
結論:この研究によって、PARV4はウイルス不活化処理に耐性を持つ輸血感染性病原体であることが確認された。血漿由来血液製剤を使用する人々において、今もなお定期的に感染が発生する可能性が懸念される。治療を受けている個人におけるPARV4の発生率及びPARV4感染に関連する疾患についての早急な評価が必要とされる。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
血友病患者における大規模調査によって、ウイルス不活化処理済みの血漿由来凝固因子製剤におけるパルボウイルス4(PARV4)の感染性が示され、PARV4はウイルス不活化に耐性を持つ輸血感染性病原体であることが確認されたとの報告である。 パルボウイルス4は脂質膜を持たない小型DNAウイルスのため、ナノフィルトレーション工程のない凝固因子製剤ではウイルス除去は困難と考えられるが、本製剤では仮に原料にPARV4様ウイルスが含まれているとしても、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿った類縁モデルウイルスによるプロセスバリデーションで除去・不活化されることが検証されており、本製剤の安全性は確保されていると考える。	本剤の安全性は確保されていると考えるが、念のため今後も情報収集に努め、今後とも輸血用血液及び血漿分画製剤の安全性向上のために努力する。



Virologic and clinical features of primary infection with human parvovirus 4 in subjects with hemophilia: frequent transmission by virally inactivated clotting factor concentrates

Colin P. Sharp, Alice Lail, Sharyne Donfield, Edward D. Gomperts, and Peter Simmonds

BACKGROUND: Human parvovirus 4 (PARV4) is a newly discovered parvovirus prevalent in injecting drug users and other groups with histories of parenteral exposure including persons with hemophilia exposed to non–virally inactivated clotting factor concentrates. To investigate its potential ongoing transmission to persons with hemophilia treated with plasma-derived, virally inactivated clotting factors, we screened a large cohort of persons with hemophilia for antibody seroconversion to PARV4 over a 5-year observation period.

STUDY DESIGN AND METHODS: Samples from 195 persons with hemophilia enrolled in the Hemophilia Growth and Development Study cohort were screened for PARV4 antibodies at the start and end of a 5-year period of treatment with exclusively virally inactivated clotting factor concentrates. Samples collected at intermediate time points from subjects seroconverting over the study period were screened to narrow down the seroconversion time and investigate immunoglobulin (Ig)M responses, duration of acute viremia, and clinical presentations.

RESULTS: PARV4 seroprevalence at the outset of the study was 44%. Over the observation period, nine subjects (seven human immunodeficiency virus positive) seroconverted for anti-PARV4 (incidence, 1.7%/year). Infected subjects showed relatively prolonged durations of viremia (mean, 7 months) and weak, transient IgM responses during acute infections. Clotting factors inactivated by solvent/detergent or by wet or dry heat were infectious. The most common clinical presentations were rashes and exacerbation of hepatitis.

CONCLUSION: This study identifies PARV4 as a transfusion-transmissible agent that is resistant to viral inactivation. Of concern, infections may still regularly occur in those exposed to plasma-derived blood products. Urgent evaluation of the incidence of PARV4 in treated individuals and disease associations of PARV4 infections is required.

A new parvovirus was recently identified by molecular virus discovery methods from plasma from a human immunodeficiency virus (HIV)-infected injecting drug user (IDU).[1] Genetically, the virus termed human parvovirus 4 (PARV4) was found to be distinct from existing genera within the family *Parvoviridae*, although viruses showing 61% to 63% sequence similarity to PARV4 have since been described in pigs and cows.[2] It has recently been proposed to assign all of these viruses as members of a new parvovirus genus, *Partetravirus*. PARV4 is now one of four parvoviruses known to infect humans. Others include the erythrovirus, B19V, transmitted by respiratory routes, highly prevalent, and generally associated with mild disease on acute infection. Adenoassociated viruses, which are acquired frequently during childhood, persist lifelong but are thought

ABBREVIATIONS: HGDS = Hemophilia Growth and Development Study; IDU(s) = injecting drug user(s); PARV4 = human parvovirus 4.

From The Roslin Institute and Royal (Dick) School of Veterinary Studies, University of Edinburgh, Easter Bush, Midlothian, UK; the Department of Biostatistics, Rho, Inc., Chapel Hill, North Carolina; the Department of Haematology, Childrens' Hospital Los Angeles, Los Angeles, California; and the Centre for Immunology, Infection and Evolution, University of Edinburgh, Edinburgh, UK.

Address reprint requests to: Peter Simmonds, Centre for Immunology, Infection and Evolution, University of Edinburgh, Ashworth Laboratories, Kings Buildings, West Mains Road, Edinburgh, EH9 3JT, UK; e-mail: Peter.Simmonds@ed.ac.uk.

Supported by an unrestricted investigator-initiated grant from Baxter Healthcare and National Institutes of Health, National Institute of Child Health and Human Development Project Grant R01 HD41224.

Received for publication August 11, 2011; revision received September 5, 2011, and accepted September 13, 2011.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03420.x

TRANSFUSION 2012;52:1482-1489.

to be entirely nonpathogenic. Human bocavirus Type 1 has been implicated in severe respiratory disease in children (reviewed in Allander et al.[3]), while the genetically distinct Types 2 through 4 are more typically recovered from fecal samples and may be an additional cause of enteric disease in children and adults.[4,5]

Several investigations, subsequent to the discovery of PARV4, have established that infections with PARV4 are likely acute resolving without long-term viremia. However, as also described for B19V and adenoassociated viruses,[6-8] viral DNA sequences can be detected in tissues likely lifelong after exposure.[9-11] The epidemiology and transmission of PARV4 differs strikingly from other parvoviruses. Through the use of autopsy tissue to record past infection, high rates of PARV4 exposure were identified among IDUs in the United Kingdom and Italy.[9,11,12] Infection frequencies were higher in those who are HIV seropositive but almost absent in low-risk, hepatitis C virus (HCV)-negative/HIV-negative control populations.

To facilitate further investigations of PARV4 exposure, we developed a serologic assay for PARV4 antibodies, using baculovirus-expressed VP2 proteins as antigen in an indirect enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA).[13] Larger-scale screening confirmed associations between PARV4 infection and parenteral routes of exposure (IDUs) in the United Kingdom and United States, lower infection frequencies in HIV-infected gay men, and a complete absence in the general, low-risk population. This study also presented the first evidence for PARV4 infection through the use of clotting factor concentrates; 15 from 35 persons with hemophilia exposed to non–virally inactivated Factor VIII/IX concentrates were PARV4 seropositive, in contrast to only 1 from 35 sibling controls occupying the same household.

Although the epidemiology of PARV4 in Western countries is relatively well established, PARV4 infections are much more common and likely transmitted by different routes in sub-Saharan Africa. A high rate of PARV4 viremia likely associated with primary infection was recorded among children aged between 1 and 2 years in rural Ghana.[14] Using the VP2 serology assay, we recorded seroprevalences of 25% to 37% in the Cameroon, Burkina Faso, and Democratic Republic of the Congo.[15] A more recent study described a 10% anti-PARV4 seroprevalence among children with a mean age of 4.5 years in Southern India; acute infections of two individuals in the latter study were associated with severe encephalitis, representing an important although likely rare potential disease association of PARV4.[16]

Given the evidence for a predominantly parenteral route of PARV4 infection in Western countries, we have quantified the risk of infection through treatment of persons with hemophilia with plasma-derived blood products previously shown to be the source of widespread infection with HIV-1 and HCV in this patient group. Samples collected at the start and end of a 5-year observation period were assayed for anti-PARV4 to identify individuals infected during treatment with virally inactivated clotting factor concentrates. The cohort design provided samples at 6-month intervals enabling dates of infection to be narrowed down in seroconverting over the study period. The virologic and clinical analysis of the infection events, along with analysis of the types of clotting factor administered provided a detailed characterization of the infection risk of PARV4 in this vulnerable patient group and its clinical outcomes.

MATERIALS AND METHODS

Study subjects

Samples from 194 persons with hemophilia were obtained from the Hemophilia Growth and Development Study (HGDS) cohort.[17] Members of the group with hemophilia were born between 1972 and 1982, were between 7 and 16 years of age at study entry, and were between 10 and 21 years at the time study samples were taken. All HGDS study subjects with hemophilia had used non–virally inactivated clotting factor concentrate at some time before enrolment. Nine or more infusions over that period, or 100+ U/kg body weight of factor per year over the 2 years were required for eligibility. Paired samples from each subject, one each from the time of enrollment and one from the end of the study 5 years later, were used for the initial screening and samples from intermediate time points of approximately 6-month intervals were obtained from subjects showing evidence of PARV4 immunoglobulin (Ig)G seroconversion. Follow-up history was collected and a physical exam conducted at 6-month intervals. These were focused on physical growth and development, immunologic, neurologic, and neuropsychological functioning. Blood samples were collected at each of these visits, portions of which were placed in a central repository for subsequent testing. The human subjects committees of collaborating institutions approved the HGDS, informed consent was obtained from parents or legal guardians, and informed consent or assent was obtained from all participants, in compliance with the human experimentation guidelines of the US Department of Health and Human Services and in accordance with the Declaration of Helsinki.

PARV4 ELISA

Samples were tested using the previously described ELISA protocol and analysis variables[13] based on recombinant PARV4 capsid protein produced in a baculovirus expression system. Anti-PARV4 IgM was measured using a modification of the previously described protocol in which the anti-human IgG:horseradish peroxidase (HRP) conjugate

was replaced with a goat anti-human IgM:HRP conjugate (AbD Serotec, Oxford, UK). The IgM assay cutoff was calculated as for the IgG assay[13] (optical density [OD] of the mean plus 2 standard deviations of negative controls [IgG-negative, low-risk group]).

TABLE 1. PARV4 serologic status at start and end of study period*

Subjects	PARV4 status†		
	Positive/positive	Negative/positive	Negative/negative
Total	84 (43)	9 (5)	101 (52)
HIV-positive	61 (46)	7 (5)	65 (49)
HIV-negative	23 (38)	2 (3)	36 (59)

* Data are reported as number (%).
† PARV4 serologic status at start/end of study period.

Detection of PARV4 DNA by polymerase chain reaction

DNA was extracted from 200 µL of serum using a DNA blood mini kit (QIAamp, Qiagen, West Sussex, UK) according to manufacturer's instructions. Samples were screened using a nested polymerase chain reaction (PCR) for PARV4 DNA and other members of the *Partetravirus* genus, including all currently identified PARV4 genotypes to single copy sensitivity. First-round reactions were performed with 5 µL of extracted DNA using reagents (GoTaq, Promega, Southampton, UK) according to manufacturer's instructions with the outer primer pair (PARV4_OS TGA AYC AGA CCT TGA RCG SCC and PARV4_OAS CCM CCH AWC CAY TGA GCT TTW ACT TT). Second-round reactions were performed using 1 µL of first-round product as template and the inner primer pair (PARV4_IS TAY AAT TAT GTT GGT CCT GGT AAT CC and PARV4_IAS GGT AAR ACC TGY GAW ADT TGA ACA TC). Semiquantitation of viral DNA load was performed using 10-fold dilutions of extracted serum DNA in 0.05 µg/µL salmon testes carrier DNA (Sigma, Gillingham, UK) as template for the nested PCR. Endpoint titers of 50% positivity in replicate reactions were calculated using the Reed-Muench formula.[18]

Direct sequencing of PCR products and sequence analysis

Positive second-round PCR amplicons were sequenced in both directions using the inner sense and inner antisense primers used in the second round of amplification. Sequencing was carried out using a cycle sequencing kit (BigDye Terminator v3.1, Applied Biosystems, Paisley, UK) according to manufacturer's instructions. Sequences were read at The Gene Pool facility (University of Edinburgh, Edinburgh, UK) and analyzed using computer software (SSE v1.0, P. Simmonds, Edinburgh, UK).

RESULTS

HGDS cohort

A total of 194 subjects with hemophilia were sampled at 6-month intervals over a 5-year period between 1989 and 1994. Subjects were 7 to 16 years on entry, and all had received non–virally inactivated clotting factor concentrate before enrollment. A total of 133 (69%) were seropositive for HIV-1, and all but four were seropositive for HCV at enrollment. To estimate exposure of the group to PARV4, samples collected at enrollment were screened for anti-PARV4 VP2 IgG ELISA (Table 1). A total of 84 from 194 subjects (43%) were anti-PARV4 positive. PARV4 exposure was not significantly associated with HIV infection, 61 from 133 (46%) HIV-positive subjects were anti-PARV4 positive compared to 23 from 61 (38%) of HIV-negative subjects ($p = 0.35$ by Fisher's exact test; not significant).

Infection with PARV4 during study period

Samples collected at the end of the 5-year study period, during which time all subjects received only virally inactivated clotting factor concentrates, were similarly screened for PARV4 antibodies to identify further PARV4 infections. All subjects considered seropositive for PARV4 at the start of the study remained seropositive. However, of the initially anti-PARV4–negative group, nine subjects became anti-PARV4 positive (Table 1). Of these, seven were HIV positive and two were HIV negative (7/72 compared to 2/38; $p = 0.5$). Four further subjects showed small sustained increases in serologic reactivity during the study period to levels ranging from 0.5 to 2 units. As other tests were negative, these four subjects have been considered to be uninfected for the purpose of analysis. No seroconversions for HIV-1 occurred over the study period.

From the nine subjects showing evidence of primary infection, further samples taken at approximately 6-month intervals were tested by ELISA (Table 2) and used to narrow the time window of primary infection. Seroconversion occurred between 1989 and 1991 in the seven HIV-positive subjects and between 1992 and 1993 in the HIV-negative subjects (Fig. 1). Samples from or immediately preceding the time of seroconversion were analyzed for anti-PARV4 VP2 IgM. Two of the HIV-positive subjects (subjects "B" and "E") showed a clear IgM reactivity concurrent with the first IgG-positive sample. The short-lived nature of the IgM response was confirmed by testing samples collected at subsequent time points from the positive individuals, all of which were found to show no reactivity.

Direct detection of PARV4 viral DNA by PCR

To estimate the duration of PARV4 viremia during acute infection, DNA extracted from the serum of seroconvert-

TABLE 2. Time course for anti-PARV4 seroconversion and other markers of acute infection during study period

Subject	Exam date	PARV4 IgG arbitrary units (cutoff 0.5)	PARV4 IgM OD ratio (cutoff 1.3)	PARV4 PCR	Viral titer (DNA copies/mL)
A	July 1989	0.03	NT	NT	
	March 1990	0.00	NT	–	
	October 1990	0.00	0.99	+	10^4
	March 1991	48.55	1.03	–	
	July 1991	32.66	NT	NT	
B	May 1989	0.00	NT	NT	
	October 1989	0.20	NT	NT	
	May 1990	0.00	1.00	–	
	November 1990	30.87	1.44	+	10^3
	May 1991	100.00	0.99	–	
C	June 1989	0.00	1.12	–	
	January 1990	64.28	1.22	+	10^4
	November 1990	100.00	NT	–	
	August 1991	100.00	NT	NT	
D	July 1989	0.15	NT	NT	
	May 1990	0.00	NT	NT	
	September 1990	0.00	NT	–	
	March 1991	0.00	1.10	+	10^{10}
	October 1991	100.00	1.01	–	
E	March 1990	0.18	NT	NT	
	August 1990	0.00	1.03	–	
	April 1991	29.47	1.67	+	$<10^3$
	October 1991	24.42	0.92	–	
	April 1992	27.30	NT	NT	
F	May 1989	0.00	NT	–	
	December 1989	0.12	1.06	–	
	June 1990	18.22	1.18	+	$<10^3$
	October 1990	5.16	NT	–	
	June 1991	3.14	NT	NT	
G	July 1992	0.24	NT	–	
	December 1992	0.00	1.00	+	$<10^3$
	August 1993	100.00	1.05	+	$<10^3$
	June 1994	95.10	NT	–	
H	September 1992	0.00	1.16	–	
	March 1993	27.77	1.14	+	10^9
	September 1993	28.55	NT	–	
	September 1994	18.76	NT	NT	
I	January 1990	0.12	NT	NT	
	June 1990	0.22	1.21	–	
	February 1991	48.99	1.01	+	10^3
	June 1991	78.69	NT	–	
	December 1991	76.79	NT	NT	

NT = not tested.

ing subjects was screened by nested PCR. As with IgM screening, samples from and immediately preceding seroconversion were screened. Viral DNA could be found in all of the seroconverters. In six of the nine PCR-positive subjects, the sample from the time of seroconversion was positive; in two of the nine, the sample immediately before the conversion sample was positive; and in the remaining subject there was a sustained detection at both the time point before and at seroconversion for antibody. The predicted resolution of viremia was confirmed by testing of further samples from time points before and after positive results and demonstrating that these further samples were all negative.

Amplicons from PCR-positive subject samples were sequenced using both second-round primers. All samples were confirmed to be PARV4 and identified as Genotype 1 (Subjects E, G, and H) and Genotype 2 (Subjects A-E and I). Viral titers were assessed by semiquantitative PCR using 10-fold dilutions of serum DNA template in quadruplicate. As the PCR used has been shown to be sensitive to a single copy, the limiting dilution results were used to calculate semiquantitative plasma viral titers (Table 2). Despite the relatively wide sampling intervals in the study, intense viremia was detected in two of the seroconverting subjects (Subject D, 10^{10} DNA copies/mL; Subject H, 10^9 DNA copies/mL).

Clinical presentations concurrent with PARV4 infections

Treatment histories, blood chemistry, and clinical data from physical examinations during sampling visits were available from each seroconverting subject (Table 3). A wide range of different manufactured clotting factor concentrates administered in the 6 months before seroconversion were associated with PARV4 infection, including both solvent/detergent (S/D)- and heat-treated materials. The absence of HIV-1 seroconversions over this period is consistent with a greater resistance of PARV4 to the virus inactivation methods used in this period.

Persons with hemophilia presented with a range of symptoms and signs during the period of anti-PARV4 seroconversion. For the HIV-positive subjects, many of these likely relate directly to comorbidities associated with HIV-1 infection (for example, the lymphadenopathy of Subjects B and F was also noted in previous examinations) and hemophilia (such as joint problems, etc.). Disregarding these, the only repeatedly observed clinical presentations were rashes (Subjects D, F, and I) and unexplained hepatitis in the two HIV-negative subjects, Subjects G and H, although these were not associated with significant elevation in alanine aminotransferase or aspartate aminotransferase levels during the period of acute PARV4 infection (alanine aminotransferase values of 18, 26, 16, and 17 international units [IUs]/mL for the four test samples listed in Table 2 from Subject G and 58, 98, 85, and 34 IU/mL for the four listed samples from Subject H). No clinically presenting cases of meningitis or encephalitis or neurologic abnormalities (other than associated with hemophilia complications) were found in the cohort. No measured variables on clinical chemistry (liver enzymes, biochemistry) or hematologic (cell counts, hemoglobin) testing showed consistent associations with acute infection with PARV4 (data provided at http://www.virus-evolution.org/Downloads/Trans-2011-0496/).

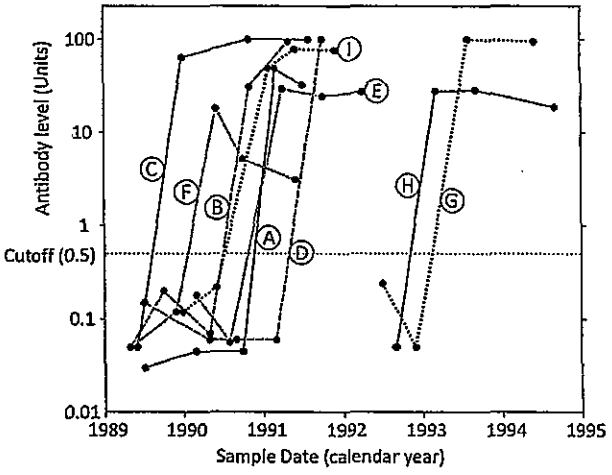


Fig. 1. Antibody levels in sequential samples. PARV4 anti-VP2 levels in sequential samples from the nine seroconverting subjects. Subjects A through F and I were HIV infected; the later seroconversions (H, G) were HIV uninfected.

DISCUSSION

This study documents, for the first time, the occurrence and virologic features of acute infection in persons with hemophilia with PARV4 during a period when treatment was restricted to virally inactivated clotting factor concentrates. Both the initial seroprevalence (43%) and the measured incidence of infection over this period (nine infections among 110 initially PARV4-uninfected individuals) is consistent with previous reports for much higher rates of PARV4 infection in this group than the background population and sibling controls[13] that can best be explained by their parenteral exposure to plasma-derived blood products.

The association of viremia with IgG seroconversion furthermore provides convincing evidence of the sensitivity and specificity of the anti-PARV4 ELISA. As discussed previously,[13] the use of baculovirus-derived VP2 antigens from PARV4 along with control antigens from mock-infected *Spodoptera frugiperda* 9 cells creates a resilient serologic assay with low levels of nonspecificity, as dem-

TABLE 3. Clinical background and presentations at primary infection

Subject	Blood product type*	Inactivation†	HIV	Presentation‡
A	M1	DH	Positive	Sore throat, fever
B	M2 and M3	SD/WH	Positive	Enlarged LNs (also pre)
C	M4	WH	Positive	Enlarged LNs
D	NR-AI	SD or WH	Positive	Rash, shingles
E	NR-heat treated	WH or DH	Positive	None
F	M5-AI	SD	Positive	Rash, enlarged LNs (also pre)
I	M4	WH	Positive	Rash (also pre), pneumonia
G	M1 and M3	WH	Negative	Hepatitis exacerbation
H	M6-AI and M1	SD/WH	Negative	Hepatitis exacerbation

* Manufacturer code (M1-M6; NR = not recorded) and type of clotting factor concentrate administered in the 6 months before seroconversion for PARV4. AI = monoclonal antibody affinity isolated preparations.
† Inactivation method used: DH = dry heat (typically 80°C); WH = wet heat (pasteurization; typically 60°C); SD = S/D inactivation.
‡ Clinical presentation in examination at first time point after seroconversion for PARV4. LNs = lymph nodes.

onstrated by the complete absence of serologic reactivity in control populations in Edinburgh and France without histories of parenteral exposure. The sensitivity of the assay is demonstrated by the uniformly high and rapid rises in serologic reactivity in acutely infected individuals (Fig. 1); PARV4 antibody levels in the initial positive samples ranged from 18 to more than 100 antibody units, where the cutoff for the assay (based on variance of negative controls) was set at 0.5. Using an assay format similar to the one in the current study, Lahtinen and coworkers[19] have similarly documented high and rising optical densities, codetection of IgM, and viremia over at least a 4-week period in two HIV-positive individuals likely exposed to PARV4 through needle-sharing injecting drug use. As for B19V,[20] the performance of VP2-based assays is likely enhanced by the spontaneous folding of expressed protein into virus-like particles that reproduces both linear and conformational epitopes exposed during PARV4 infection.

The association of seroconversion with intense PARV4 viremia recapitulates what occurs during primary infections with the erythrovirus B19V. For the latter, virus levels peak over a period of a week during primary infection, then decline to low levels that may persist for several weeks or months after primary infection at levels of approximately 10^2 to 10^3 IUs/mL. Although the relatively wide spacing of study samples precluded detailed analysis of the virologic events during acute PARV4 infections, the observation of two individuals with high-level viremia (10^9-10^{10} DNA copies/mL) and several more with lower levels ($<10^3$-10^4 copies/mL) is consistent with the pattern of intense viremia and relatively slow resolution observed in B19V.

As well as documenting the natural history of PARV4 infection, the study provides clear evidence for the infectivity of clotting factor concentrates that had been virally inactivated using methods effective for the enveloped viruses, HIV-1, HCV, and hepatitis B virus.[21] The nine infections that occurred during the study period originated from treatment with a variety of different clotting factors that reflects the diversity of manufacturers' blood products at that time. While it might be anticipated that PARV4, along with B19V and hepatitis A virus, might be resistant to S/D-based inactivation methods, PARV4 was additionally resistant to pasteurization and other heat treatments. Without knowing the viral loads of PARV4 in the source plasma used to make the various blood products, it is difficult to conclude whether these viral inactivation steps reduced PARV4 infectivity. An incidence of nine infections in 110 exposed individuals in 5 years is lower than the incidence of PARV4 infection before study enrolment, where 84 from 194 persons with hemophilia became infected. With a mean age at enrolment of 11.5 years, this amounts to an annualized incidence of 3.7%, over twice that observed in the study period (1.6%). However, contributing to the lower incidence in the study period may have been reductions in the numbers of PARV4-viremic donors, coinciding with the introduction of screening for HIV-1 screening and latterly for HCV, both associated with IDU risk behaviors shared with PARV4. Viral inactivation steps have therefore led to, at best, a modest reduction in the infection risk of plasma-derived clotting factors for PARV4.

The inactivation resistance of PARV4 resembles that of B19V, where treatment-associated infections have continued throughout the period of use of virally inactivated clotting factors. Both B19V and canine parvovirus used a model virus in previous virus inactivation experiments that has been previously shown to be resistant to S/D inactivation methods and moderately resistant to heat inactivation.[22,23] For B19V, the only effective step to prevent transmission is screening source plasma units for B19V DNA, thereby preventing high-titer donations from contamination plasma pools used subsequently for manufacturing, restricted in Europe to 10^4 IUs/mL.[24]

The ongoing risk of transmission of PARV4 to recipients of blood and blood products requires as yet undetermined information on its incidence and viremia frequency in blood and plasma donors, the effectiveness of predonation exclusion of individuals with identifiable risk factors for PARV4 infection (such as current injecting drug use), its cooccurrence with HCV and HIV-1 infections that would lead to donation exclusion, its partitioning into plasma components, the presence and titer of neutralizing antibody from other plasma units, and finally, its resistance to currently used viral inactivation procedures (that are more effective than those used during the study period). Although much of the information required for this risk assessment is currently undetermined (particularly donor incidence and viral loads), detection frequencies of PARV4 DNA in recently collected commercial source plasma pools from several sources have been found to be relatively low (4%; 14 from 351[25]) and generally with low viral loads (<200 DNA copies/mL). PARV4 DNA similarly contrasts with B19V in being infrequently detectable in clotting factor concentrates; in recent studies, 0% to 9% of recently manufactured solvent- or heat-inactivated concentrates were a PARV4 DNA positive.[25-27]

On the other hand, increased infectivity may originate from a likely much lower frequency of comanufactured PARV4 antibody–positive plasma units. In the case of B19V, virus neutralization has been considered an important factor in restricting the infectivity of both pooled plasma and blood products to those with relatively high viral loads ($>10^7$ IUs/mL[28]). This protective effect may not extend to a plasma-donating population with a low seroprevalence of anti-PARV4.

The final factor in the evaluation of PARV4 as a potential threat to blood product safety is its capability for causing disease in acutely or chronically infected individuals. Acute infections have been particularly problem-

atic to investigate; those few that have been identified to date were usually HIV coinfected with a series of comorbidities that complicate clinical assessments.[1,19] It is difficult to draw analogies with other parvoviruses because their clinical presentations vary considerably; B19V causes mild disease and rash, but can cause fetal damage as well as aplastic anemia in those with existing hematologic disease. In contrast, the recently discovered human bocaviruses have been associated with respiratory disease in young children, and for HBoV Type 2, gastroenteritis. Disease presentations in animal parvoviruses are similarly diverse.

A recent study describes acute PARV4 infections in association with severe encephalitis in two children in Southern India,[16] although its exact causative role remains to be firmly established. Certainly, despite close and lifelong clinical monitoring, no similar occurrences of neurologic presentations have been recorded in persons with hemophilia who have been exposed to PARV4, although as described, coinfection with HIV-1 may complicate clinical assessments. Given the extremely high incidence of PARV4 infection in young children in sub-Saharan Africa and likely Southern and Southeast Asia, severe neurologic disease of the severity described by Benjamin and coworkers[16] must be rare. Among the nine infected persons with hemophilia in the current study, seven were HIV coinfected and their clinical presentations of lymphadenopathy and possibly rash were potentially HIV related. It was, however, intriguing to note the occurrence of acute hepatitis in the two HIV-negative subjects at the time of primary infection. While PARV4 DNA sequences have been detected in liver and the virus may be hepatotropic,[10] it is possible that hepatitis symptoms originated from an exacerbation of chronic HCV infection rather than a de novo infection.

In summary, PARV4 is a transfusion-transmissible agent that is resistant to viral inactivation. PARV4 may still be regularly transmitted by plasma-derived blood products; determining the frequency with which this occurs and disease associations of PARV4 during primary and long-term infection both require urgent evaluation.

ACKNOWLEDGMENTS

For the Hemophilia Growth and Development Study Group, we are indebted to the children, adolescents, and parents who volunteered to participate in the HGDS and to the members of the Hemophilia Treatment Centers. The following individuals are the Center Directors, Study Coordinators or Committee Chairs of the study: Childrens Hospital Los Angeles—E. Gomperts, W.Y. Wong, F. Kaufman, M. Nelson, S. Pearson; The New York Hospital-Cornell Medical Center—M. Hilgartner, S. Cunningham-Rundles, I. Goldberg; University of Texas Medical School, Houston—W.K. Hoots, K. Loveland, M. Cantini; The National Institutes of Health, National Institute of Child Health and Human Development—A. Willoughby, R. Nugent; Rho, Inc.—S. Donfield, A. Lail; Baylor College of Medicine—C. Contant; University of Iowa Hospitals and Clinics—C.T. Kisker, J. Stehbens, S. O'Conner; Tulane University—P. Sirois; Children's Hospital of Oklahoma—C. Sexauer, H. Huszti, F. Kiplinger, S. Hawk; Mount Sinai Medical Center—S. Arkin, A. Forster; University of Nebraska Medical Center—S. Swindells, S. Richard; University of Texas Health Science Center, San Antonio—J. Mangos, R. Davis; Children's Hospital of Michigan—J. Lusher, I. Warrier, K. Baird-Cox; Milton S. Hershey Medical Center—M.E. Eyster, D. Ungar, S. Neagley; Indiana Hemophilia and Thrombosis Center—A. Shapiro, J. Morris; University of California-San Diego Medical Center—G. Davignon, P. Mollen; Kansas City School of Medicine, Children's Mercy Hospital—B. Wicklund, A. Mehrhof.

CONFLICT OF INTEREST

None.

REFERENCES

1. Jones MS, Kapoor A, Lukashov VV, Simmonds P, Hecht F, Delwart E. New DNA viruses identified in patients with acute viral infection syndrome. J Virol 2005;79:8230-6.
2. Lau SK, Woo PC, Tse H, Fu CT, Au WK, Chen XC, Tsoi HW, Tsang TH, Chan JS, Tsang DN, Li KS, Tse CW, Ng TK, Tsang OT, Zheng BJ, Tam S, Chan KH, Zhou B, Yuen KY. Identification of novel porcine and bovine parvoviruses closely related to human parvovirus 4. J Gen Virol 2008;89:1840-8.
3. Allander T, Jartti T, Gupta S, Niesters HG, Lehtinen P, Osterback R, Vuorinen T, Waris M, Bjerkner A, Tiveljung-Lindell A, van den Hoogen BG, Hyypiä T, Ruuskanen O. Human bocavirus and acute wheezing in children. Clin Infect Dis 2007;44:904-10.
4. Kapoor A, Simmonds P, Slikas E, Li L, Bodhidatta L, Sethabutr O, Triki H, Bahri O, Oderinde BS, Baba MM, Bukbuk DN, Besser J, Bartkus J, Delwart E. Human bocaviruses are highly diverse, dispersed, recombination prone, and prevalent in enteric infections. J Infect Dis 2010;201:1633-43.
5. Arthur JL, Higgins GD, Davidson GP, Givney RC, Ratcliff RM. A novel bocavirus associated with acute gastroenteritis in Australian children. PLoS Pathog 2009;5:e1000391.
6. Soderlund-Venermo M, Hokynar K, Nieminen J, Rautakorpi H, Hedman K. Persistence of human parvovirus B19 in human tissues. Pathol Biol (Paris) 2002;50:307-16.
7. Norja P, Hokynar K, Aaltonen LM, Chen R, Ranki A, Partio EK, Kiviluoto O, Davidkin I, Leivo T, Eis-Hübinger AM, Schneider B, Fischer HP, Tolba R, Vapalahti O, Vaheri A, Söderlund-Venermo M, Hedman K. Bioportfolio: lifelong persistence of variant and prototypic erythrovirus DNA genomes in human tissue. Proc Natl Acad Sci U S A 2006;103:7450-3.
8. Isa A, Kasprowicz V, Norbeck O, Loughry A, Jeffery K, Broliden K, Klenerman P, Tolfvenstam T, Bowness P. Pro-

longed activation of virus-specific CD8+T cells after acute B19 infection. PLoS Med 2005;2:e343.
9. Longhi E, Bestetti G, Acquaviva V, Foschi A, Piolini R, Meroni L, Magni C, Antinori S, Parravicini C, Corbellino M. Human parvovirus 4 in the bone marrow of Italian patients with AIDS. AIDS 2007;21:1481-3.
10. Schneider B, Fryer JF, Reber U, Fischer HP, Tolba RH, Baylis SA, Eis-Hübinger AM. Persistence of novel human parvovirus PARV4 in liver tissue of adults. J Med Virol 2008; 80:345-51.
11. Manning A, Willey SJ, Bell JE, Simmonds P. Comparison of tissue distribution, persistence, and molecular epidemiology of parvovirus B19 and novel human parvoviruses PARV4 and human bocavirus. J Infect Dis 2007;195:1345-552.
12. Simmonds P, Manning A, Kenneil R, Carnie FW, Bell JE. Parenteral transmission of the novel human parvovirus, PARV4. Emerg Infect Dis 2007;13:1386-8.
13. Sharp CP, Lail A, Donfield S, Simmons R, Leen C, Klenerman P, Delwart E, Gomperts ED, Simmonds P. High frequencies of exposure to the novel human parvovirus, PARV4 in haemophiliacs and injecting drug users detected by a serological assay for PARV4 antibodies. J Infect Dis 2009;200:1119-25.
14. Panning M, Kobbe R, Vollbach S, Drexler JF, Adjei S, Adjei O, Drosten C, May J, Eis-Hubinger AM. Frequent detection of novel human parvovirus 4 genotype 3 in infants, Ghana. Emerg Infect Dis 2010;16:1143-6.
15. Sharp CP, Vermeulen M, Nebie Y, Djoko CF, LeBreton M, Tamoufe U, Rimoin AW, Kayembe PK, Carr JK, Servant-Delmas A, Laperche S, Harrison GL, Pybus OG, Delwart E, Wolfe ND, Saville A, Lefrère JJ, Simmonds P. Changing epidemiology of human parvovirus 4 infection in sub-Saharan Africa. Emerg Infect Dis 2010;16:1605-7.
16. Benjamin L, Lewthwaite P, Vasanthapuram R, Zhao G, Sharp CP, Simmonds P, Wang D, Solomon T. Human parvovirus 4 (PARV4) causes encephalitis in children in Southern India. Emerg Infect Dis 2011;17:1484-7.
17. Hilgartner MW, Donfield SM, Willoughby A, Contant CF Jr, Evatt BL, Gomperts ED, Hoots WK, Jason J, Loveland KA, McKinlay SM, Stehbens JA. Hemophilia growth and development study. Design, methods, and entry data. Am J Pediatr Hematol Oncol 1993;15:208-18.
18. Reed LJ, Muench HA. Simple method of estimating fifty per cent endpoints. Am J Hyg 1938;27:493-7.
19. Lahtinen A, Kivela P, Hedman L, Kumar A, Kantele A, Lappalainen M, Liitsola K, Ristola M, Delwart E, Sharp C, Simmonds P, Söderlund-Venermo M, Hedman K. Serodiagnosis of primary infections with human parvovirus 4, Finland. Emerg Infect Dis 2011;17:79-82.
20. Soderlund M, Brown CS, Spaan WJ, Hedman L, Hedman K. Epitope type-specific IgG responses to capsid proteins VP1 and VP2 of human parvovirus B19. J Infect Dis 1995;172: 1431-6.
21. Scharrer I, Becker T. Products used to treat hemophilia: evolution of treatment for hemophilia A and B. In: Lee CA, Berntorp E, Hoots WK, editors. Textbook of hemophilia. Oxford: Blackwell Publishing Ltd; 2005. p. 131-5.
22. Blumel J, Schmidt I, Effenberger W, Seitz H, Willkommen H, Brackmann HH, Löwer J, Eis-Hübinger AM. Parvovirus B19 transmission by heat-treated clotting factor concentrates. Transfusion 2002;42:1473-81.
23. Schwarz TF, Serke S, von Brunn A, Hottenträger B, Huhn D, Deinhardt F, Roggendorf M. Heat stability of parvovirus B19: kinetics of inactivation. Zentralbl Bakteriol 1992;277: 219-23.
24. Tabor E, Epstein JS. NAT screening of blood and plasma donations: evolution of technology and regulatory policy. Transfusion 2002;42:1230-7.
25. Schneider B, Fryer JF, Oldenburg J, Brackmann HH, Baylis SA, Eis-Hubinger AM. Frequency of contamination of coagulation factor concentrates with novel human parvovirus PARV4. Haemophilia 2008;14:978-86.
26. Fryer JF, Hubbard AR, Baylis SA. Human parvovirus PARV4 in clotting factor VIII concentrates. Vox Sang 2007;93:341-7.
27. Modrow S, Wenzel JJ, Schimanski S, Schwarzbeck J, Rothe U, Oldenburg J, Jilg W, Eis-Hübinger AM. Prevalence of nucleic acid sequences specific for human parvoviruses, hepatitis A and hepatitis E viruses in coagulation factor concentrates. Vox Sang 2011;100:351-8.
28. Doyle S, Corcoran A. The immune response to parvovirus B19 exposure in previously seronegative and seropositive individuals. J Infect Dis 2006;194:154-8.

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012年9月3日	新医薬品等の区分 該当なし。	総合機構処理欄
一般的名称	別紙のとおり。		研究報告の公表状況	Flu News & Spotlights, 2012; August 31	公表国 米国	
販売名（企業名）	別紙のとおり。					

研究報告の概要

問題点：CDCは新たに12例の人に対するH3N2vインフルエンザ感染とともに、オハイオ州から報告のあった初めての死亡例について発表した。

CDCは新たに12例のH3N2vインフルエンザ感染とともに、オハイオ州から報告のあった初めての死亡例について発表した。患者は、複数の基礎疾患を持つ高齢者で、祭りに出品されていたブタに直接暴露していた。
このウイルスのヒト-ヒト感染は限られており、散発的に発生しているが、集団における持続的な伝播は認められていない。
今年の夏、当局は重大なインフルエンザ合併症に対するリスクが高い人に、ブタあるいはブタの囲い場を避けるよう勧めている。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

記載なし。

報告企業の意見	今後の対応
別紙のとおり。	今後とも関連情報の収集に努め，本剤の安全性の確保を図っていきたい。

別紙

一般的名称	①人血清アルブミン、②人血清アルブミン、③人血清アルブミン*、④人免役グロブリン、⑤人免役グロブリン、⑥乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑦乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑧乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑨乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑩乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑪乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑫乾燥スルホ化人免疫グロブリン*、⑬乾燥濃縮人活性化プロテインC、⑭乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑮乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑯乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑰乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑱乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑲乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑳乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉑乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉒乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉓乾燥抗破傷風人免疫グロブリン、㉔抗HBs人免疫グロブリン、㉕トロンビン、㉖フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉗フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉘乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ、㉙ヒスタミン加人免疫グロブリン製剤、㉚人血清アルブミン*、㉛人血清アルブミン*、㉜乾燥ペプシン処理人免役グロブリン*、㉝乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ
販売名（企業名）	①献血アルブミン20“化血研”、②献血アルブミン25“化血研”、③人血清アルブミン“化血研”*、④ガンマーグロブリン筋注450mg/3mL「化血研」、⑤ガンマーグロブリン筋注1500mg/10mL「化血研」、⑥献血静注グロブリン“化血研”、⑦献血グロブリン注射用2500mg「化血研」、⑧献血ベニロンーⅠ静注用500mg、⑨献血ベニロンーⅠ静注用1000mg、⑩献血ベニロンーⅠ静注用2500mg、⑪献血ベニロンーⅠ静注用5000mg、⑫ベニロン*、⑬注射用アナクトC2,500単位、⑭コンファクトF注射用250、⑮コンファクトF注射用500、⑯コンファクトF注射用1000、⑰ノバクトM注射用250、⑱ノバクトM注射用500、⑲ノバクトM注射用1000、⑳ノバクトM静注用400単位、㉑ノバクトM静注用800単位、㉒ノバクトM静注用1600単位、㉓テタノセーラ筋注用250単位、㉔ヘパトセーラ筋注200単位/mL、㉕トロンビン“化血研”、㉖ボルヒール、㉗ボルヒール組織接着用、㉘アンスロビンP500注射用、㉙ヒスタグロビン皮下注用、㉚アルブミン20%化血研*、㉛アルブミン5%化血研*、㉜静注グロブリン*、㉝アンスロビンP1500注射用
報告企業の意見	インフルエンザウイルスは70～120nmの球形または多形性で、核酸は8本の分節状マイナス一本鎖RNA、エンベロープを有し、エンベロープの表面に存在する赤血球凝集素(HA)とノイラミダーゼ(NA)の抗原性により16種類のHA亜型および9種類のNA亜型に分類される。 今回の報告は、インフルエンザA(H1N1)09pdm由来のM遺伝子を有するブタインフルエンザA（H3N2）の変異株（H3N2v）への感染者における初めての死亡例報告であるが、患者は複数の基礎疾患を有しており、農業見本市で直接ブタと接触していた。また、同変異株の人での集団伝播は認められていない。 上記製剤の製造工程には、冷アルコール分画工程、ウイルス除去膜ろ過工程、加熱工程等の原理の異なるウイルスクリアランス工程が導入されており、各工程のウイルスクリアランス効果は「血漿分画製剤のウイルスに対する安全性確保に関するガイドライン（医薬発第1047号、平成11年8月30日）」に基づく、モデルウイルスを用いたウイルスプロセスバリデーションにより確認されている。今回報告したブタインフルエンザA（H3N2v）ウイルスのモデルウイルスには、エンベロープの有無、核酸の種類等から、ウシウイルス性下痢ウイルス（BVDV）が該当すると考えられるが、上記工程のBVDVクリアランス効果については上記バリデーションにより確認されている。また、これまでに上記製剤によるブタインフルエンザA（H3N2v）への感染報告例は無い。 以上の点から、上記製剤はインフルエンザに対する安全性を確保していると考える。

*：現在製造を行っていない

INF2012-001

Centers for Disease Control and Prevention
CDC 24/7: Saving Lives. Protecting People.™

CDC Reports More Cases, Hospitalizations and Nation's First H3N2v-Associated Death

The information contained in this web update reflects the situation at the time of posting. It may not reflect the current situation. Please see Influenza A (H3N2) Variant Virus Outbreaks (/flu/swineflu/h3n2v-outbreak.htm) for the most recent information related to H3N2v.

Today, CDC is reporting 12 additional cases of H3N2 variant virus (H3N2v) infection, as well as the first H3N2v-associated death, which was reported by the state of Ohio. The death occurred in an older adult with multiple underlying health conditions (/flu/about/disease/high_risk.htm) who reportedly had direct exposure to pigs in a fair setting. While limited person-to-person spread of this virus has been detected and likely continues to occur sporadically, no sustained community transmission has been found. CDC is monitoring this situation and working with states to respond to these evolving outbreaks. The agency continues to urge people at high risk from serious flu complications to stay away from pigs and pig arenas at fairs this summer.

"We're saddened to hear about the death of one person in Ohio associated with the current H3N2v outbreaks," says CDC's Dr. Lyn Finelli. "Like with seasonal flu, we have been – and continue to be – particularly concerned about people with factors that put them at high risk of serious complications if they get the flu. These people should absolutely not have contact with pigs or visit pig arenas at fairs this summer." Dr. Finelli is Lead for the Surveillance and Outbreak Response Team in CDC's Influenza Division.

High risk factors for serious flu complications include: being younger than 5 years (especially children younger than 2 years), or 65 and older, pregnancy, and certain chronic medical conditions like asthma, diabetes, heart disease, weakened immune systems, and neurological or neurodevelopmental conditions. A full list of high risk conditions (/flu/about/disease/high_risk.htm) is available on the CDC seasonal flu website.

"Anyone with a high risk factor should not only avoid pigs and pig arenas at fairs, but they should also seek prompt medical attention if they get flu-like symptoms, especially if they have pig exposure, but even in the absence of pig exposure," Finelli says.

CDC has issued information for clinicians on H3N2v (/flu/swineflu/h3n2v-clinician.htm); guidance which underscores the importance of rapid antiviral treatment of influenza, including H3N2v virus infection, in high risk patients. The H3N2v virus is susceptible to the influenza antiviral drugs oseltamivir (Tamiflu ®) and zanamivir (Relenza ®).

For seasonal flu, CDC recommends (/flu/takingcare.htm) that it is best that people with high risk conditions who develop flu-like symptoms contact their doctor, tell them about their symptoms, and remind them about their high risk status. For the current H3N2v outbreaks, if high risk people have exposure to pigs, it's especially important that they tell their doctor about this exposure.

"Like with seasonal flu," Finelli says, "prompt antiviral treatment in a high risk person can mean the difference between having a milder illness versus a very serious illness that could result in a hospital stay or even death," says Finelli. "This message is critical not only for people who are at high risk, but for America's doctors who are treating these patients. We want their suspicion for H3N2v to be high right now. Ask patients with influenza-like-

illness if they have pig exposure, but regardless of whether they do, if they have a high risk factor, treat them empirically with antivirals for influenza without waiting for testing results."

The 12 new cases reported this week are from the states of Minnesota (1), Ohio (3), Pennsylvania (1), and Wisconsin (7). Cumulative totals for 2011 and 2012 by state are available in the H3N2v case count table (/flu/swineflu/h3n2v-case-count.htm).

Symptoms of H3N2v have been consistent with seasonal influenza and can include some or all of the following: fever, cough, sore throat, runny or stuffy nose, muscle or body aches, headaches and fatigue. Like with seasonal flu, it's possible that not everyone will have a fever. This may be particularly true in elderly people or people with weakened immune systems, whose bodies may not mount as effective an immune response to the virus infection.

Found in U.S. pigs in 2010 and humans in July 2011, this H3N2v virus appears to spread more easily from pigs to people than other variant influenza viruses. Most reported cases to date have occurred in people who are exhibiting or helping to exhibit pigs at fairs this season after close and prolonged contact with pigs. "So far more than 90 percent of cases have occurred in people who are exhibiting or helping to exhibit pigs, or who are family members of these people. That is why our message is so targeted," says Finelli. CDC has developed recommendations and materials for people attending fairs this summer and is working with states as well as organizations like 4-H National Headquarters and the International Association of Fairs and Expositions to disseminate these messages and materials (/flu/swineflu/h3n2v-audiences.htm).

CDC also has developed supplemental H3N2v guidance for schools (/flu/swineflu/h3n2v-schools.htm). Last year, there was at least one outbreak of H3N2v in a day care setting in the fall and CDC believes it possible that localized outbreaks of H3N2v, particularly in schools or day cares, may occur as the weather turns colder and schools across the country are underway. "The guidance document is a heads up for schools to be aware of, and on the look-out for, illness with this virus," Finelli explains.

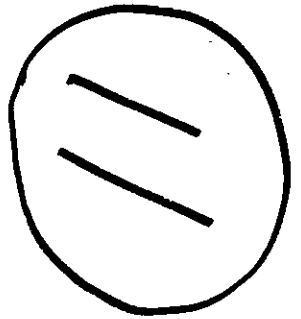
"It's important to remember that this is an evolving situation that could change quickly." Finelli concludes, "We're constantly looking at our data and re-evaluating."

Page last reviewed: August 31, 2012
Page last updated: August 31, 2012
Content source: Centers for Disease Control and Prevention, National Center for Immunization and Respiratory Diseases (NCIRD)

Centers for Disease Control and Prevention 1600 Clifton Rd. Atlanta, GA 30333, USA
800-CDC-INFO (800-232-4636) TTY: (888) 232-6348 - cdcinfo@cdc.gov

医薬品　研究報告　調査報告書

<table>
<tr><td colspan="2">識別番号・報告回数</td><td></td><td>報告日</td><td>第一報入手日
2012年9月14日</td><td colspan="2">新医薬品等の区分
該当なし。</td><td rowspan="3">総合機構処理欄</td></tr>
<tr><td colspan="2">一　般　的　名　称</td><td>別紙のとおり。</td><td rowspan="2">研究報告の
公表状況</td><td rowspan="2">MMWR.2012;61:741-746</td><td rowspan="2">公表国
メキシコ</td></tr>
<tr><td colspan="2">販売名（企業名）</td><td>別紙のとおり。</td></tr>
<tr><td>研究報告の概要</td><td colspan="5">問題点：高病原性インフルエンザA（H7N3）の大規模な家禽感染が続くメキシコにおいて、家禽飼育場の勤務者が同ウイルスに感染した。

メキシコでは高病原性インフルエンザA（H7N3）の大規模な家禽感染が続いているが、家禽飼育場の勤務者から同ウイルスの感染事例が報告された。1例は、インフルエンザA（H7N3）が検出された家禽飼育場に勤務する32歳の女性で2012年7月7日に結膜炎と診断され、患者の目から得られた検体による核酸増幅検査の結果、インフルエンザA（H7）陽性であった。もう1例は、同じ飼育場に勤務する上記患者の親類であり、2012年7月10日に結膜炎を発症し、患者の目から得られた検体による核酸増幅検査の結果、インフルエンザA（H7）感染が判明した。両症例とも特に重大な症状に至ることなく回復している。</td><td>使用上の注意記載状況・
その他参考事項等
記載なし。</td></tr>
<tr><td colspan="3">報告企業の意見</td><td colspan="4">今後の対応</td><td rowspan="2">  </td></tr>
<tr><td colspan="3">別紙のとおり。</td><td colspan="4">今後とも関連情報の収集に努め、本剤の安全性の確保を図っていきたい。</td></tr>
</table>

別紙

一般的名称	①人血清アルブミン、②人血清アルブミン、③人血清アルブミン*、④人免役グロブリン、⑤人免役グロブリン、⑥乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑦乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑧乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑨乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑩乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑪乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑫乾燥スルホ化人免疫グロブリン*、⑬乾燥濃縮人活性化プロテインC、⑭乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑮乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑯乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑰乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑱乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑲乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑳乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉑乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉒乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉓乾燥抗破傷風人免疫グロブリン、㉔抗HBs人免疫グロブリン、㉕トロンビン、㉖フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉗フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉘乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ、㉙ヒスタミン加人免疫グロブリン製剤、㉚人血清アルブミン*、㉛人血清アルブミン*、㉜乾燥ペプシン処理人免役グロブリン*、㉝乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ
販売名（企業名）	①献血アルブミン20“化血研”、②献血アルブミン25“化血研”、③人血清アルブミン“化血研”*、④ガンマーグロブリン筋注450mg/3mL「化血研」、⑤ガンマーグロブリン筋注 1500mg/10mL「化血研」、⑥献血静注グロブリン“化血研”、⑦献血グロブリン注射用 2500mg「化血研」、⑧献血ベニロンーⅠ静注用500mg、⑨献血ベニロンーⅠ静注用1000mg、⑩献血ベニロンーⅠ静注用2500mg、⑪献血ベニロンーⅠ静注用5000mg、⑫ベニロン*、⑬注射用アナクトC2,500単位、⑭コンファクトF注射用250、⑮コンファクトF注射用500、⑯コンファクトF注射用1000、⑰ノバクトM注射用250、⑱ノバクトM注射用500、⑲ノバクトM注射用1000、⑳ノバクトM静注用400単位、㉑ノバクトM静注用800単位、㉒ノバクトM静注用1600単位、㉓テタノセーラ筋注用250単位、㉔ヘパトセーラ筋注200単位/mL、㉕トロンビン“化血研”、㉖ボルヒール、㉗ボルヒール組織接着用、㉘アンスロビンP500注射用、㉙ヒスタグロビン皮下注用、㉚アルブミン20%化血研*、㉛アルブミン5%化血研*、㉜静注グロブリン*、㉝アンスロビンP1500注射用
報告企業の意見	インフルエンザウイルスは70～120nmの球形または多形性で、核酸は8本の分節状マイナス一本鎖RNA、エンベロープを有し、エンベロープの表面に存在する赤血球凝集素(HA)とノイラミダーゼ(NA)の抗原性により16種類のHA亜型および9種類のNA亜型に分類される。 今回の報告は高病原性インフルエンザA（H7N3）の大規模な家禽感染が続くメキシコにおいて、家禽飼育場の2名の勤務者が同ウイルスへの感染により結膜炎を発症したとの報告であるが、重大な症状に至ることなく回復している。 上記製剤の製造工程には、冷アルコール分画工程、ウイルス除去膜ろ過工程、加熱工程等の原理の異なるウイルスクリアランス工程が導入されており、各工程のウイルスクリアランス効果は「血漿分画製剤のウイルスに対する安全性確保に関するガイドライン（医薬発第1047号、平成11年8月30日）」に基づく、モデルウイルスを用いたウイルスプロセスバリデーションにより確認されている。今回報告したブタインフルエンザA（H7N3）ウイルスのモデルウイルスには、エンベロープの有無、核酸の種類等から、ウシウイルス性下痢ウイルス（BVDV）が該当すると考えられるが、上記工程のBVDVクリアランス効果については上記バリデーションにより確認されている。また、これまでに上記製剤によるブタインフルエンザA（H7N3）への感染報告例は無い。 以上の点から、上記製剤はインフルエンザに対する安全性を確保していると考える。

*：現在製造を行っていない

INF2012-002

Centers for Disease Control and Prevention
CDC 24/7: Saving Lives. Protecting People.™

Morbidity and Mortality Weekly Report (*MMWR*)

Notes from the Field: Highly Pathogenic Avian Influenza A (H7N3) Virus Infection in Two Poultry Workers — Jalisco, Mexico, July 2012

Weekly
September 14, 2012 / 61(36);726-727

During June–August 2012, Mexico's National Service for Health, Safety, and Food Quality reported outbreaks of highly pathogenic avian influenza (HPAI) A (H7N3) virus in poultry on farms throughout the state of Jalisco (*1,2*). This report describes two cases of conjunctivitis without fever or respiratory symptoms caused by HPAI A (H7N3) virus infection in humans associated with exposure to infected poultry.

Patient 1. On July 7, a poultry worker aged 32 years complaining of pruritus in her left eye was examined at a clinic in Jalisco. Physical findings included redness, swelling, and tearing. Conjunctivitis was diagnosed; the patient was treated symptomatically and recovered fully. Because the patient had collected eggs in a farm where HPAI A (H7N3) virus was detected, the Institute for Epidemiological Diagnosis and Reference, Mexico, tested ocular swabs from both of her eyes for influenza A (H7) by real-time reverse transcription–polymerase chain reaction (rRT-PCR), and embryonated chicken eggs were inoculated for viral isolation. The swab material was positive for influenza A (H7) virus by rRT-PCR and virus was isolated from each eye. These findings were reported to the World Health Organization on July 19, and full genome sequences (CY125725–32) were uploaded to GenBank. The virus was closely related by nucleotide sequence to previously reported HPAI A (H7N3) viruses collected during poultry outbreaks in Jalisco with sequences available in GenBank (JX397993, JX317626).

Patient 2. A man aged 52 years, who was a relative of patient 1 and worked on the same farm, developed symptoms consistent with conjunctivitis on July 10 and sought care at a local clinic on July 13. He was treated symptomatically and recovered without sequelae. When public health authorities became aware of this patient, they obtained eye swabs, which were tested by rRT-PCR, revealing influenza A (H7).

Mexico has continued its efforts to contain poultry outbreaks in affected areas in Jalisco. Those efforts include quarantining affected farms, culling infected birds, vaccinating uninfected birds, and disinfecting contaminated areas. Government agencies also have provided personal protective equipment to farm personnel and are conducting active surveillance for influenza-like illness (ILI) and severe acute respiratory illness at two sentinel sites near the outbreak.

Avian influenza A viruses are designated as HPAI or low pathogenicity avian influenza (LPAI) based on molecular characteristics of the virus and the ability of the virus to cause disease and mortality in birds (*3*). To date, only influenza A (H5) and (H7) subtypes have been described as HPAI. Influenza A (H7) subtype viruses have been detected in wild birds in many parts of the world and can cause outbreaks in poultry. Influenza A (H7) infection in humans is uncommon, but can occur after direct contact with infected birds, especially

during outbreaks of influenza A (H7) virus among poultry (*4*). Illness can include conjunctivitis without fever, upper respiratory tract symptoms, or both (*4,5*), and severity can range from mild to fatal (*4*). In the United States, avian influenza outbreaks in poultry are rare, but they are detected and reported sporadically. In the United States, only two cases of illness with LPAI A (H7) virus infection are known to have occurred in humans, both of whom recovered (*6,7*).

The conjunctivitis cases in Jalisco most likely represent HPAI A (H7N3) virus transmission from infected poultry to humans through direct contact. United States agricultural, public health, and clinical personnel should be aware of these poultry outbreaks with transmission to humans in a neighboring country. Persons working with poultry known or suspected to be infected with influenza A viruses should use appropriate personal protective equipment, including face masks, gloves and eye protection (e.g., goggles). Clinicians and epidemiologists should consider avian influenza A virus infection in patients who have conjunctivitis or ILI and have contact with poultry in areas with known avian influenza outbreaks. Clinicians who suspect avian influenza A virus infections in humans should obtain a conjunctival or respiratory specimen, or both, depending on signs and symptoms, and submit samples to a national, regional, or state public health laboratory to enable specific influenza testing. Clinicians also should consider early empiric antiviral treatment of suspected cases with a neuraminidase inhibitor (*8,9*). Public health officials should survey family members and contacts of infected persons to find cases of human-to-human transmission.

Reported by

Gisela Barrera-Badillo, MSc, Ernesto Ramirez-Gonzalez, PhD, Rodrigo Aparicio-Antonio, Tatiana Nuñez-Garcia, Dayanira Arellano-Suarez, Patricia Alcantara-Perez, MSc, Abril Rodriguez-Maldonado, Brisia Rodriguez-Reyes, Claudia Wong-Arambula, Elizabeth Gonzalez-Duran, MSc, Joanna Ortiz-Alcantara, MSc, Alberto Diaz-Quiñonez, PhD, Irma Lopez-Martinez, MSc, Instituto de Diagnóstico y Referencia Epidemiológicos; Gustavo Reyes-Teran, MPH, Joel Vazquez-Perez, PhD, Santiago Avila-Rios, PhD, Instituto Nacional de Enfermedades Respiratorias; Guadalupe Castañeda-Lopez, MD, Armando Robles-Cruz, MD, Hector Montoya-Fuentes, PhD, Victor Borja-Aburto, PhD, Instituto Mexicano del Seguro Social; Cuitlahuac Ruiz-Matus, MD, Jesus Felipe Gonzalez-Roldan, MD, Dirección General de Epidemiología; Pablo Kuri-Morales, MD, Subsecretaría de Prevención y Promoción de la Salud, Mexico. Todd Davis, PhD, Julie Villanueva, PhD, Vic Veguilla, MPH, Marc-Alain Widdowson, DVM, Joseph Bresee, MD, Eduardo Azziz-Baumgartner, MD, Jerome Tokars, MD, Timothy Uyeki, MD, Alexander Klimov, PhD, Stephen Lindstrom, PhD, Bo Shu, MD, Nancy Cox, PhD, Influenza Div, National Center for Immunization and Respiratory Diseases, CDC. ***Corresponding contributor:*** *Alberto Díaz-Quiñonez, alberto.diaz@salud.gob.mx, 555-341-1101 (Mexico).*

References

1. Food and Agriculture Organization. Highly pathogenic avian influenza in Mexico (H7N3)—a significant threat to poultry production not to be underestimated. Empress Watch 2012;26:1–9.
2. World Organization for Animal Health. Update on highly pathogenic avian influenza in animals (type H5 and H7). Paris, France: World Organization for Animal Health; 2012. Available at http://www.oie.int/animal-health-in-the-world/update-on-avian-influenza/2012 . Accessed September 4, 2012.
3. Infection with viruses of notifiable avian influenza. [Chapter 10.4]. In: Terrestrial Animal Health Code. Paris, France: World Organization for Animal Health; 2012. Available at http://www.oie.int/fileadmin/home/eng/health_standards/tahc/2010/en_chapitre_ . Accessed September 11, 2012

4. Koopmans M, Wilbrink B, Conyn M, et al. Transmission of H7N7 avian influenza A virus to human beings during a large outbreak in commercial poultry farms in the Netherlands. Lancet 2004;363:587–93.
5. Skowronski D, Tweed S, Petric M, Booth T, Li Y, Tam T. Human illness and isolation of low-pathogenicity avian influenza virus of the H7N3 subtype in British Columbia, Canada. J Infect Dis 2006;193:899–900.
6. Ostrowsky B, Huang A, Terry W, et al. Low pathogenic avian influenza A (H7N2) virus infection in an immunocompromised adult, New York, USA, 2003. Emerg Infect Dis 2012;18:1128–31.
7. Edwards LE, Terebuh P, Adija A, et al. Serological diagnosis of human infection with avian influenza A (H7N2) virus [Abstract 60, Session 44]. Presented at the International Conference on Emerging Infectious Diseases 2004, Atlanta, Georgia, February 22–March 3, 2004.
8. CDC. Antiviral agents for the treatment and chemoprophylaxis of influenza: recommendations of the Advisory Committee on immunization Practices (ACIP). MMWR 2011;60(No. RR-1).
9. World Health Organization. WHO guidelines for pharmacological management of pandemic influenza A(H1N1) 2009 and other influenza viruses. Part I: recommendations. Geneva, Switzerland: World Health Organization; 2010. Available at http://www.who.int/csr/resources/publications/swineflu/h1n1_guidelines_pharmace . Accessed September 11, 2012.

Page last reviewed: September 14, 2012
Page last updated: September 14, 2012
Content source: Centers for Disease Control and Prevention

Centers for Disease Control and Prevention 1600 Clifton Rd. Atlanta, GA 30333, USA
800-CDC-INFO (800-232-4636) TTY: (888) 232-6348 - cdcinfo@cdc.gov

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 8 月 20 日	新医薬品等の区分 該当なし	厚生労働省処理欄

一般的名称	①② 乾燥抗 HBs 人免疫グロブリン ③ ポリエチレングリコール処理抗 HBs 人免疫グロブリン	研究報告の公表状況	cdc.gov/ncidod/dvbid/westnile/index.htm/2012/08/17	公表国 アメリカ
販売名 （企業名）	① ヘブスブリン筋注用 200 単位　（日本血液製剤機構） ② ヘブスブリン筋注用 1000 単位　（日本血液製剤機構） ③ ヘブスブリン IH 静注 1000 単位　（日本血液製剤機構）			

研究報告の概要

2012 年、これまでに 43 州でヒト、トリ、蚊におけるウエストナイルウイルス感染が報告されている。26 人の死亡を含むヒトにおけるウエストナイルウイルス疾患合計:693 症例が米 CDC へ報告されている。その内、406 症例(59%)が神経侵襲性疾患（例えば、髄膜炎や脳炎など）、287 症例(41%)が非神経侵襲性疾患である。
2012 年、これまでに報告された 693 症例は、ウエストナイルウイルスが 1999 年に米国において初めて検出されて以降、2012 年 8 月第 2 週を通じて CDC へ報告されたウエストナイルウイルス疾患症例の数が最多である。80%を超える症例が 6 州(テキサス州、ミシシッピ州、ルイジアナ州、オクラホマ州、サウスダコタ州とカリフォルニア州)からの報告で、全症例の約半数がテキサス州から報告されている。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

代表としてヘブスブリン IH 静注 1000 単位の記載を示す。
2. 重要な基本的注意
(1)本剤の原材料となる血液については、HBs 抗原、抗 HCV 抗体、抗 HIV-1 抗体、抗 HIV-2 抗体陰性であることを確認している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV 及び HCV について核酸増幅検査(NAT)を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該 NAT の検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した高力価の抗 HBs 抗体を含有する血漿を原料として、 Cohn の低温エタノール分画で得た画分からポリエチレングリコール 4000 処理、DEAE セファデックス処理等により抗 HBs 人免疫グロブリンを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において 60℃、10 時間の液状加熱処理及びウイルス除去膜によるろ過処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

報告企業の意見	今後の対応
ウエストナイルウイルス（West Nile virus：WNV）は、フラビウイルス科フラビウイルス属に属し、大きさは 40～60nm のエンベロープを有する RNA ウイルスである。血清学的には日本脳炎ウイルス群に含まれ、蚊によって媒介される。 FDAは、2005年6月の業界向けガイダンス改訂版において、「FDAは全ての血漿分画製剤について現在行われているウイルス低減工程を再調査した。現在行われている方法は、WNVと分類上関連しているフラビウイルスを不活化することがバリデートされている。」と評価し、CPMPもまたポジションステートメントにおいて、血漿分画製剤の製造工程でWNVは不活化・除去されると評価している。万一、原料血漿にWNVが混入しても、BVDをモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、本剤の製造工程において不活化・除去されると考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

West Nile Virus Basics

·Fact Sheet

·Q & A

Specific Topics

·Maps & Human Cases

·Clinical Guidance

·Lab Guidance

·Workplace Safety

·Background

·Ecology/Virology

·Education/Training

Resources

·In the News

·Publications

·Conferences

·Related Links

·State & Local Government Sites

·Guidelines for Surveillance, Prevention, & Control PDF [77 - pages]

Fight the Bite!

Since 1999, more than 30,000 people in the United States have been reported as getting sick with West Nile virus. Infected mosquitoes spread West Nile virus (WNV) that can cause serious, life altering disease.

- Updated Fact Sheet
- Use Mosquito Repellent
- Eliminate standing water where mosquitoes can lay eggs
- Install or Repair Window and Door Screens
- Support Community-Based Mosquito Control Programs

Helpful Tips

Gardening can be a bal against pests! Don稚 g that war without prope armor □ your handy in repellent can help keep bugs off of you!

2012 West Nile virus update: as of August 14

Thus far in 2012, 43 states have reported West Nile virus infections in people, birds, mosquitoes. A total of 693 cases of West Nile virus disease in people, including 26 deaths, have been reported to CDC. Of these, 406 (59%) were classified as neuroinvasive disease (such as meningitis or encephalitis) and 287 (41%) were class as non-neuroinvasive disease.

The 693 cases reported thus far in 2012 is the highest number of West Nile virus dise cases reported to CDC through the second week in August since West Nile virus was detected in the United States in 1999. Over 80 percent of the cases have been report from six states (Texas, Mississippi, Louisiana, Oklahoma, South Dakota, and Californi and almost half of all cases have been reported from Texas.

West Nile virus Data and Maps 2012

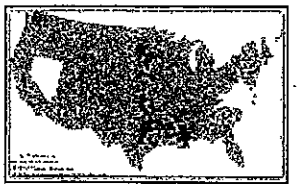


Table of WNV human infections	**WNV neuroinvasive disease incidence reported to ArboNET, state**
WNV activity reported to ArboNET, by state	**WNV neuroinvasive disease incidence reported to ArboNET, county**

WNV activity reported to ArboNET, by county	National & state maps provided USGS (including county-level da

1999-2(
Archive

▲ Top of Page CDC Home | Search CDC | Health Topics A-Z

Date last modified: August 16, 2012

Content source: Centers for Disease Control and Prevention
National Center for Emerging and Zoonotic Infectious Diseases (NCEZID)
Division of Vector-Borne Diseases (DVBD)

Privacy Policy | Accessibility

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 17	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Stramer SL, Linnen JM, Carrick JM, Foster GA, Krysztof DE, Zou S, Dodd RY, Tirado-Marrero LM, Hunsperger E, Santiago GA, Muñoz-Jordan JL, Tomashek KM. Transfusion. 2012 Aug;52(8):1657-66. doi: 10.1111/j.1537-2995.2012.03566.x. Epub 2012 Feb 17.	公表国 米国
販売名（企業名）	新鮮凍結血漿-LR「日赤」（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480（日本赤十字社）			

研究報告の概要

○2007年、プエルトリコでのデング熱アウトブレイクの期間中、RNAの確認された供血者におけるデングウイルス血症とデング熱輸血感染の検出

背景：2007年、プエルトリコにおいて合計10,508件のデング熱疑い症例が報告された。供血はデングウイルス（DENV）RNAについて検査され、RNA陽性供血の受血者は輸血感染の評価のために追跡された。

研究デザイン及び方法：2007年の供血サンプルは保管され、DENV RNAについてTMA法により個別に検査された；サブセットはエンハンスTMA（eTMA）分析によってさらに検査された。TMA（eTMAを含む）が繰り返し反応（RR）した場合に、TMA反応性が立証できたと見なされた。TMA-RRサンプルは全て定量的DENVタイプ特異的RT-PCRと、ELISAによるDENV IgM抗体検査が行われた。RT-PCRで陽性となったサンプルは、蚊の細胞培養により感染性がさらに検査された。TMA-RR供血由来製剤の受血者は追跡された。

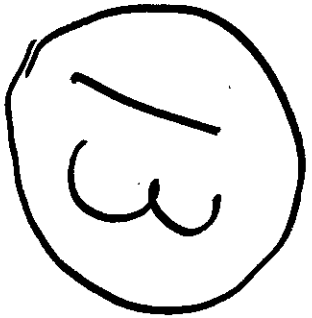
結果：検査された15,350サンプルのうち29件がTMA-RRであり、529件当たり1件の割合であった（0.19%）。蚊での培養により感染性を示した12サンプルにおいて、RT-PCRによりウイルス力価10^5～10^9copies/mLでDENV 1型、2型及び3型が検出された。6件のTMA-RRサンプルはIgM陽性であった。TMA-RR供血の受血者29人のうち3人が検査された。10^8copies/mLのDENV-2を含む赤血球を輸血されたプエルトリコの受血者1人が輸血3日後に発熱し、デング出血熱に進行した。受血者はRT-PCRでDENV-2陽性であった；供血者と受血者の両方が同一のエンベロープ配列を有していた。

結論：初めて記録された重篤なデング熱の輸血感染に加え、プエルトリコの供血者に高い割合でウイルス血症が検出されたことは、介入に関する更なる調査が必要である。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク



報告企業の意見	今後の対応
2007年のプエルトリコでのデング熱アウトブレイクの期間中、供血者にデングウイルス血症が高い割合で検出され、ウイルス血症供血者由来の血液を輸血された受血者にデング出血熱が発生したとの報告である。	日本赤十字社では、輸血感染症対策として受付時に海外滞在歴の有無を確認し、帰国（入国）後4週間は献血不適としている。また、発熱などの体調不良者を献血不適としている。今後も引き続き、新興・再興感染症の発生状況等に関する情報の収集に努める。

Dengue viremia in blood donors identified by RNA and detection of dengue transfusion transmission during the 2007 dengue outbreak in Puerto Rico

Susan L. Stramer, Jeffrey M. Linnen, James M. Carrick, Gregory A. Foster, David E. Krysztof, Shimian Zou, Roger Y. Dodd, Lourdes M. Tirado-Marrero, Elizabeth Hunsperger, Gilberto A. Santiago, Jorge L. Muñoz-Jordan, and Kay M. Tomashek

BACKGROUND: In 2007, a total of 10,508 suspected dengue cases were reported in Puerto Rico. Blood donations were tested for dengue virus (DENV) RNA and recipients of RNA-positive donations traced to assess transfusion transmission.

STUDY DESIGN AND METHODS: Blood donation samples from 2007 were maintained in a repository and tested individually for DENV RNA by transcription-mediated amplification (TMA); a subset was further tested by an enhanced TMA (eTMA) assay. TMA-reactive samples were considered confirmed if TMA (including eTMA) was repeat reactive (RR). All TMA-RR samples were tested by quantitative, DENV type–specific reverse transcriptase–polymerase chain reaction (RT-PCR) and for anti-DENV immunoglobulin (Ig)M by enzyme-linked immunosorbent assay. Samples positive by RT-PCR were further tested for infectivity in mosquito cell culture. Patients receiving components from TMA-RR donations were followed.

RESULTS: Of 15,350 donation samples tested, 29 were TMA-RR for a prevalence of 1 per 529 (0.19%). DENV Types 1, 2, and 3 with viral titers of 10^5 to 10^9 copies/mL were detected by RT-PCR in 12 samples of which all were infectious in mosquito culture. Six TMA-RR samples were IgM positive. Three of the 29 recipients receiving TMA-RR donations were tested. One recipient in Puerto Rico transfused with red blood cells containing 10^9 copies/mL DENV-2 became febrile 3 days posttransfusion and developed dengue hemorrhagic fever. The recipient was DENV-2 RNA positive by RT-PCR; both the donor and the recipient viruses had identical envelope sequences.

CONCLUSIONS: High rates of viremia were detected in blood donors in Puerto Rico coupled with the first documented transfusion transmission of severe dengue disease, suggesting that further research on interventions is needed.

Dengue is a disease caused by four related RNA viruses of the genus *Flavivirus*, dengue virus (DENV)-1, -2, -3, and -4.[1] However, not all DENV infections result in clinically apparent disease. Approximately 75% of all DENV infections are asymptomatic, including those among adults.[2-6] Each DENV type is capable of causing the full spectrum of disease from nonspecific, acute febrile illness to severe disease including dengue hemorrhagic fever (DHF) and dengue shock syndrome. Approximately 5% of patients with dengue develop severe disease, which is thought to occur more commonly among those with second or subsequent infections.[7] Infection with one DENV-type produces lifelong immunity against that DENV-type and short-term (≤2 months) cross-protection against

ABBREVIATIONS: ARC = American Red Cross; DENV(s) = dengue virus(-es); DHF = dengue hemorrhagic fever; ED = emergency department; eTMA = enhanced transcription-mediated amplification; IR = initially reactive; MAC-ELISA = immunoglobulin M–capture enzyme-linked immunosorbent assay; PDSS = passive dengue surveillance system; RR = repeat reactive; S/CO = signal to cutoff; TMA = transcription-mediated amplification.

From the Scientific Support Office, American Red Cross, Gaithersburg, Maryland; Gen-Probe, Inc., San Diego, California; Holland Laboratory, American Red Cross, Rockville, Maryland; and VA Caribbean Healthcare System and the Centers for Disease Control (CDC), San Juan, Puerto Rico.

Address reprint requests to: Susan L. Stramer, PhD, Scientific Support Office, American Red Cross Biomedical Services, 9315 Gaither Road, Gaithersburg, MD 20877; e-mail: stramers@usa.redcross.org.

Received for publication November 7, 2011; revision received December 12, 2011, and accepted December 17, 2011.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2012.03566.x

TRANSFUSION 2012;52:1657-1666.

infection with the other three DENVs.[1,3,7] Therefore, an individual may have up to four DENV infections in their lifetime.

DENVs are primarily transmitted from person to person through the bite of an infected *Aedes aegypti* or *Aedes albopictus* mosquito.[8] DENV replicates in humans for 3 to 14 days before symptom onset. Infected persons can transmit DENV to mosquitoes as early as 1 to 2 days before symptoms develop and throughout the approximately 7-day viremic period.[9] Because of this, and the fact that viremia can be high titer (in excess of 10^7 viral RNA copies/mL) even among those who remain asymptomatic, DENV may be transfusion transmitted.[10-12] Cases of dengue after receipt of blood products or donor organs or tissue and after occupational exposure in a health care setting have been reported.[13-17] However, the true incidence of transfusion-transmitted dengue is unknown because many infections are asymptomatic or result in mild, nonspecific febrile illness that may not be recognized as transfusion acquired, and if a case is suspected, transfusion transmission (vs. vector-borne transmission) is difficult to prove in recipients in dengue-endemic countries. Moreover, there is no surveillance for such events, and diagnostic services to investigate infections and their sources are often not widely available in many endemic countries.[18]

Dengue is a major public health problem in the tropics; an estimated 50 million cases occur annually and 40% of the world's population lives in areas with DENV transmission.[19-22] Dengue is not endemic in the continental United States, Hawaii, or Alaska;[23-25] however, several dengue outbreaks with local transmission have occurred in Texas,[26,27] Hawaii,[28,29] and Florida[30,31] in the past decade. Dengue is endemic in the US territories of Puerto Rico, the Virgin Islands, and American Samoa, and millions of US travelers are at risk as dengue is the leading cause of febrile illness among travelers returning from the Caribbean, Latin America, and South Central/Southeast Asia.[32,33]

In 2007, there was a large, islandwide dengue outbreak in Puerto Rico with 10,508 reported cases.[34] It was the largest outbreak in Puerto Rico in nearly a decade and only the second outbreak to involve the simultaneous transmission of all four DENVs (although DENV-3 predominated followed by DENV-2). The 2007 outbreak was notable for the reappearance of DENV-1 and DENV-4 after nearly a decade of absence and an increase in disease severity compared with the 1994 to 1995 and 1998 outbreaks. It was in this context that we tested blood donations for DENV RNA to determine the rate of donors presenting with DENV RNA positivity and viremia as assessed by infection in mosquito cells; we also evaluated recipients of RNA-positive units to determine if transfusion transmission could be documented.

MATERIALS AND METHODS

General approach

Over 28,000 EDTA plasma samples collected in plasma preparation tubes (PPT, Becton Dickinson, Franklin Lakes, NJ) from blood donations to the Puerto Rico region of the American Red Cross (ARC) during the dengue outbreak in 2007 (June-December) were retained frozen in a repository. After the dengue season, and the number of available samples by week were assessed relative to the epidemic, selected samples (focusing on the peak weeks of the epidemic) were batch tested for DENV RNA using transcription-mediated amplification (TMA; Gen-Probe, San Diego, CA). Samples were TMA tested individually with initially reactive (IR) samples retested by TMA in duplicate. TMA repeat-reactive (RR) samples were considered positive.[10] TMA-RR samples were diluted 1 to 16 in plasma screened negative for all infectious disease markers including DENV RNA, and the dilutions were retested using the same TMA assay in singlet. All DENV RNA testing was performed during 2008 at Gen-Probe. Virologic, infectivity, and serologic testing performed on all TMA-RR samples at the Dengue Branch of the Centers for Disease Control and Prevention (CDC) in Puerto Rico included qualitative and quantitative DENV type-specific real-time, reverse transcriptase–polymerase chain reaction (RT-PCR), mosquito (*A. albopictus*) cell culture (C6/36 cells), and anti-DENV immunoglobulin (Ig)M-capture enzyme-linked immunosorbent assay (MAC-ELISA).[35-37] Hospitals receiving components from TMA-RR donations were contacted for recipient follow-up including elicitation of a history of illness, administration of a risk factor questionnaire, and submission of a serum sample to the Dengue Branch, CDC, for diagnostic testing for evidence of DENV infection including RT-PCR, MAC-ELISA, and anti-DENV IgG ELISA. Due to the retrospective nature of the study, recipient contact only occurred at 1 year or more after transfusion. The institutional review board of the ARC approved the study.

DENV TMA assay

The DENV TMA assay used for this study is based on the same technology as blood screening assays (PROCLEIX, Novartis Vaccines and Diagnostics, Emeryville, CA) for the RNA components of the human immunodeficiency virus (HIV) and hepatitis C virus (HCV) TMA assay (Ultrio assay, Gen-Probe, San Diego, CA; and Novartis Vaccine and Diagnostics) and that of the West Nile virus (WNV) assay (Gen-Probe/Novartis), both of which have been licensed by the US Food and Drug Administration. The DENV TMA assay is a research qualitative nucleic acid test for the detection of DENV RNA, which includes target capture and TMA,

followed by chemiluminescent detection of DENV RNA. The assay design most closely resembles the PROCLEIX WNV assay including the same base reagent formulations (with dengue-specific oligonucleotides) and processed on the automated system (TIGRIS, Novartis) utilizing software that performed all cutoff calculations and validity criteria using the same interpretative algorithms as the WNV assay. In a comparative study of DENV TMA and RT-PCR, TMA was 10 to 100 times more sensitive than RT-PCR and could detect RNA in up to 80% of clinical cases that were RT-PCR negative.[38] The DENV TMA assay can detect all four DENV types to below 20 copies/mL.[11,39] A subset of donations that tested TMA nonreactive (n = 8684) was retested by an enhanced TMA (eTMA). Based on internal Gen-Probe results, the eTMA assay is more sensitive than the routine TMA used in this study. The eTMA assay showed 95% detection at 14.9, 18.3, 13.0, and 16.4 copies/mL DENV-1 (95% confidence interval [CI], 11.7-20.4), DENV-2 (95% CI, 14.4-24.7), DENV-3 (95% CI, 10.3-17.6), and DENV-4 (13.0-22.2), respectively.

Recipient tracing

After hospital or transfusion service notification of the distribution of potentially infectious DENV RNA–containing components, recipients of TMA-RR donations were traced, consented, and tested for evidence of DENV infection after transfusion. Evidence of current or past DENV infection required the presence of DENV RNA and/or IgM and IgG antibodies in follow-up samples from the recipient with signs and symptoms consistent with dengue infection from the recipient's chart review. Consenting recipients also completed the questionnaire regarding DENV clinical history and risk factors. Serum samples from RNA-positive recipients and their respective donations were inoculated into cultured C6/36 cells and the presence of virus was confirmed by RT-PCR and indirect immunofluorescence. Isolates were further propagated and viral RNA was extracted from culture supernatant using the Universal BioRobot 16 System (Qiagen, Valencia, CA). The BioRobot Universal System automates and integrates all the instrumentation, software, purification and enzyme-related steps required for high-throughput molecular applications including RNA purification from blood. The envelope glycoprotein (E) gene was amplified and sequenced; sequence data were restricted to the E gene open reading frame (1485 bp). GenBank accession numbers were obtained. Evolutionary distances were computed and several E gene sequences from GenBank were included in the phylogenetic tree to support tree topology. Multiple sequence alignment was performed using ClustalW. Evolutionary distances were inferred using neighbor-joining trees.

RESULTS

2007 dengue outbreak in Puerto Rico

During the 2007 dengue season in Puerto Rico, 10,508 suspected cases of dengue, or 2.9 cases per 1000 population, were reported to the passive dengue surveillance system (PDSS). The PDSS is collaboratively operated by the Puerto Rico Department of Health and the CDC, Dengue Branch. By law, dengue fever, DHF, and/or dengue shock syndrome are reportable conditions in Puerto Rico and suspected cases are reported via PDSS along with submission of a serum sample for free dengue diagnostic testing. All four DENV types were in circulation in 2007 with a total of 3293 (33%) processed samples confirmed positive for DENV. DENV-3 and DENV-2 were detected most often (62 and 31%, respectively). More than 50% (52.5%) of reported cases were hospitalized, one-third (31.8%) had hemorrhage, 2.2% had DHF, and there were 44 reported deaths.[34] A repository of 28,277 samples from blood donations collected in Puerto Rico from June 1 to December 31, 2007, was created during this outbreak.

DENV TMA repeat reactivity and overall prevalence of DENV RNA among blood donations

Of 15,350 samples randomly selected from Peak Weeks 32 to 49 for DENV RNA testing by TMA, 28 were TMA-IR and 25 were TMA-RR for a positive rate of 1 per 614 (0.16%; Fig. 1). The 25 TMA-RR samples included DENV-1, -2, and

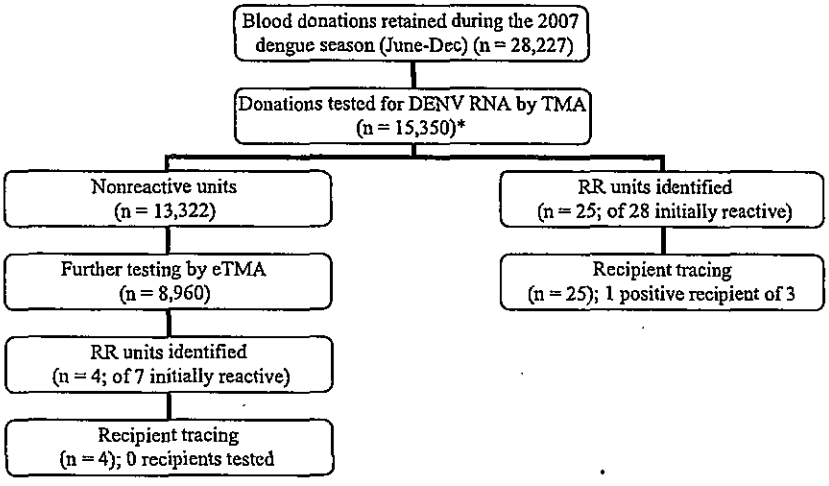


Fig. 1. DENV blood donation screening algorithm and TMA screening results including the 29 TMA RR blood donations. *TMA specificity based on IR samples that did not repeat as reactive = 15,315/15,321 = 99.96% (95% CI: 99.93-99-99).

TABLE 1. DENV TMA-RR blood donations collected in Puerto Rico in 2007

	S/CO by TMA*			S/CO by eTMA			CDC testing			
Unit	Initial	Retest	1:16	Initial	Retest	1:16	Serotype†	Viral load (copies/mL)	C6/36‡	Anti-DENV IgM
1	27.75	38.99	38.91	87.16	88.52		DENV-2	1.12×10^9	Pos	Neg
2	32.34	33.30	31.14				DENV-2	5.08×10^8	Pos	Pos
3§	33.30	37.38	35.39	91.10	83.09		DENV-2	1.35×10^8	Pos	Neg
4	37.66	39.16	40.26	87.13	89.32		DENV-3	7.25×10^7	Pos	Neg
5	40.29	27.03	36.10	82.29	92.04		DENV-3	1.37×10^7	Pos	Neg
6	32.73	35.03	34.99				DENV-3	1.18×10^7	Pos	Neg
7	33.91	32.87	33.89				DENV-3	7.67×10^6	Pos	Neg
8	31.97	30.59	0.17				DENV-1	4.49×10^6	Pos	Neg
9	19.14	13.94	0.21				DENV-2	2.82×10^5	Pos	Pos
10	33.10	38.68	40.31	87.86	89.91		DENV-3	6.39×10^5	Pos	Neg
11	31.25	33.56	27.75				DENV-3	3.50×10^5	Pos	Neg
12	5.68	20.55	1.16	29.48	21.59		DENV-3	1.00×10^5	Pos	Neg
13	34.81	37.21	32.97	76.16	32.72			$<10^3$	Neg	Neg
14	23.38	31.07	13.29	31.25	31.18			$<10^3$	Neg	Neg
15	14.23	23.26	7.32	28.59	3.28			$<10^3$	Neg	Pos
16	13.14	25.77	0.07	29.26	12.51			$<10^3$	Neg	Neg
17	11.51	5.63	0.04					$<10^3$	Neg	Neg
18	8.17	16.58	0.03					$<10^3$	Neg	Neg
19	6.64	8.91	0.20					$<10^3$	Neg	Pos
20	5.06	4.12	1.37	29.96	8.61			$<10^3$	Neg	Neg
21	3.37	4.95	0.83					$<10^3$	Neg	Pos
22	2.95	25.28	0.03					$<10^3$	Neg	Pos
23	8.20	1.40	0.13					$<10^3$	Neg	Neg
24	4.46	0.01	0.21	24.80	0.06			$<10^3$	Neg	Neg
25	1.02	2.29	0.13	28.01	0.01			$<10^3$	Neg	Neg
26‖	0.45			26.38	27.55	0.02		$<10^3$	Neg	Neg
27‖	0.17			26.18	30.99	0.02		$<10^3$	Neg	Neg
28‖	0.30			25.31	29.11	0.03		$<10^3$	Neg	Neg
29‖	0.50			24.34	17.85	0.05		$<10^3$	Neg	Neg

* TMA reactive when the S/CO ratio is 1.00 or greater.
† Serotype-specific, real-time RT-PCR.
‡ C6/36 = the mosquito cell line used for infectivity studies.
§ Unit 3 was involved in a transfusion transmission.
‖ Four TMA nonreactive samples were eTMA reactive.
Bold text indicates positive values.

-3 detected by DENV type–specific RT-PCR. Of the 25 TMA-RR units, 14 (56%) were reactive at a 1-to-16 dilution and 12 (48%) had RNA titers of 10^5 to 10^9 copies/mL (Table 1). All 12 samples with quantifiable RNA infected mosquito cell cultures of which nine (75%) were detectable at a 1-to-16 dilution. Six of 25 TMA-RR units were IgM positive of which only two of the six had quantifiable virus and infected mosquito cells in culture.

Seven of 8684 TMA-nonreactive donations were eTMA IR and four were eTMA RR (Fig. 1 and Table 1). In addition, 13 of 25 TMA-RR donations with sufficient volume were retested by eTMA and all were reactive (Table 1) with high signal-to-cutoff (S/CO) ratios. Of the four additional eTMA-RR donations that tested nonreactive by TMA, none was confirmed by PCR, all were eTMA nonreactive at a 1-to-16 dilution, none infected mosquito cells in culture, and none contained IgM; however, all of the confirmatory methods have lesser sensitivity than TMA.[39] Thus, the four eTMA-RR donations were combined with the 25 TMA-RR donations for a total study yield of 29 RNA-reactive donations (further referred to as TMA-RR) of which nearly 80% lacked IgM.

Combined, 35 IRs and 29 RRs were identified from 15,350 tested samples, resulting in a DENV RNA prevalence during the 2007 outbreak season of 1 per 529 (0.19% or 18.9 per 10,000) and an overall TMA specificity based on IR samples that did not repeat of 99.96% (15,315/15,321; 95% CI, 99.93-99.99; Fig. 1). TMA-RR (including eTMA-RR) donors were detected between July and November, which encompassed the majority of the outbreak period (Fig. 2). Figure 2 also provides the number of cases reported by week of illness onset to the PDSS and the laboratory diagnoses of these cases.

Recipient tracing

Information on all 29 recipients of TMA-RR donations was obtained but serum samples for diagnostic testing were available from only three recipients (Fig. 1 and Table 2); pretransfusion samples were not available from any recipient. Two recipients consented to be tested and both had testing done nearly 2 years posttransfusion. MAC-ELISA was negative for anti-DENV IgM and anti-DENV IgG ELISA was also negative. These two additional recipients had received red blood cells (RBCs) prepared from a

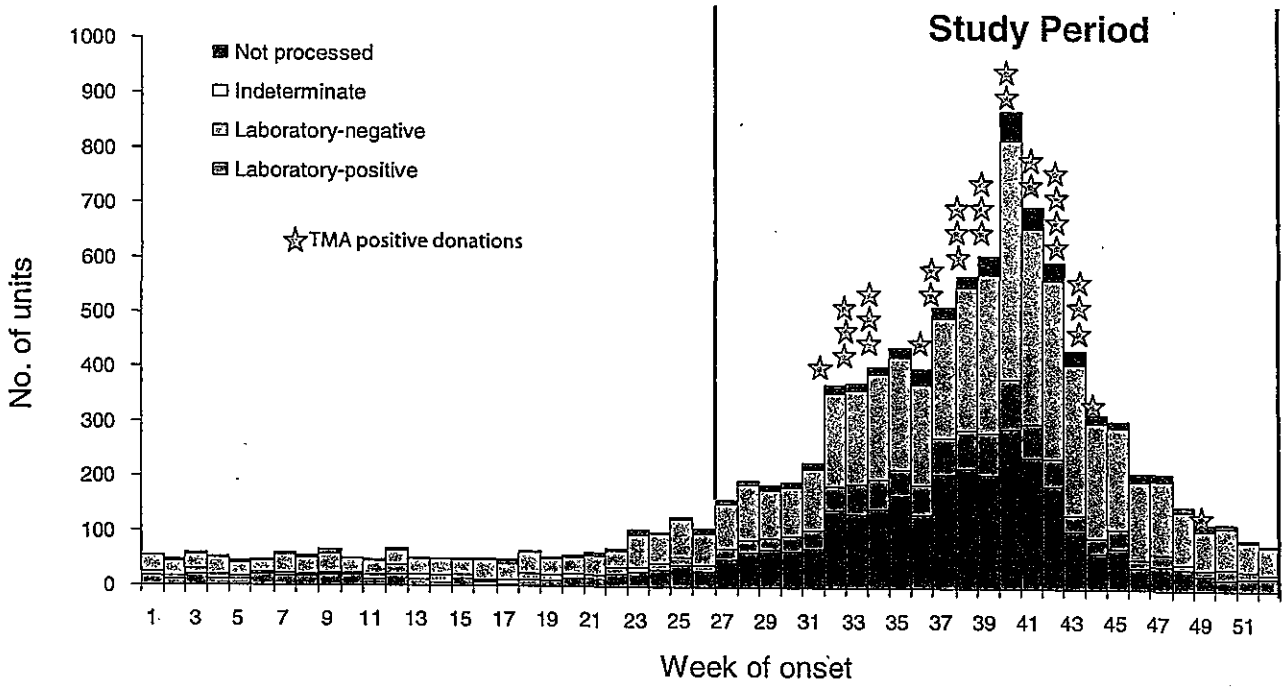


Fig. 2. Number of suspected dengue cases by laboratory outcome reported weekly during 2007 and the week in which TMA-RR blood donors were identified; the study period is indicated as that between the vertical lines.

TABLE 2. *Recipient tracing results for 29 recipients who received DENV TMA-RR donations*

Unit	Serotype	Viral load (copies/mL)	Component type	Recipient information
1	DENV-2	1.12×10^9	PP	Unit discarded
2	DENV-2	5.08×10^8	RBCs	Died within 3 weeks after transfusion, unrelated to dengue
3*	DENV-2	1.35×10^8	RBCs	DHF 3 days after transfusion; donor-recipient sequencing confirmed
4	DENV-3	7.25×10^7	RBCs	None
5	DENV-3	1.37×10^7	RBCs	Followed for 6 weeks; no s/s suggestive of dengue
6	DENV-3	1.18×10^7	RBCs	Died same day as transfusion
7	DENV-3	7.67×10^6	RBCs	None
8	DENV-1	4.49×10^6	RBCs	None
9	DENV-2	2.82×10^6	RBCs	None
10	DENV-3	6.39×10^5	RBCs	None
11	DENV-3	3.50×10^5	RBCs	Died within 7 months after transfusion, unrelated to dengue
12	DENV-3	1.00×10^5	RBCs	Followed for 2 months; no s/s suggestive of dengue
13		$<10^3$	RBCs	None
14		$<10^3$	RBCs	Died without s/s suggestive of dengue
15		$<10^3$	RBCs	None
16		$<10^3$	RBCs	None
17		$<10^3$	RBCs	Died 1 day after transfusion; no s/s suggestive of dengue
18†		$<10^3$	RBCs	Antibody (IgM/IgG) negative on follow-up 26 months after transfusion
19†		$<10^3$	RBCs	Antibody (IgM/IgG) negative on follow-up 23 months after transfusion
20		$<10^3$	RBCs	Unit discarded
21		$<10^3$	RBCs	None
22		$<10^3$	RBCs	Died within 3 weeks after transfusion, unrelated to dengue
23		$<10^3$	RBCs	None
24		$<10^3$	RBCs	Unit discarded
25		$<10^3$	RBCs	Discharged 6 days posttransfusion; no s/s suggestive of dengue
26‡		$<10^3$	RBCs	None
27‡		$<10^3$	RBCs	None
28‡		$<10^3$	RBCs	None
29‡		$<10^3$	RBCs	None

* Unit 3 was involved in a transfusion transmission.
† Units 18 and 19 went to recipients who were subsequently tested for DENV antibody (IgG/IgM).
‡ Donations detected as RR by eTMA.
PP = plateletpheresis unit; s/s = signs/symptoms.

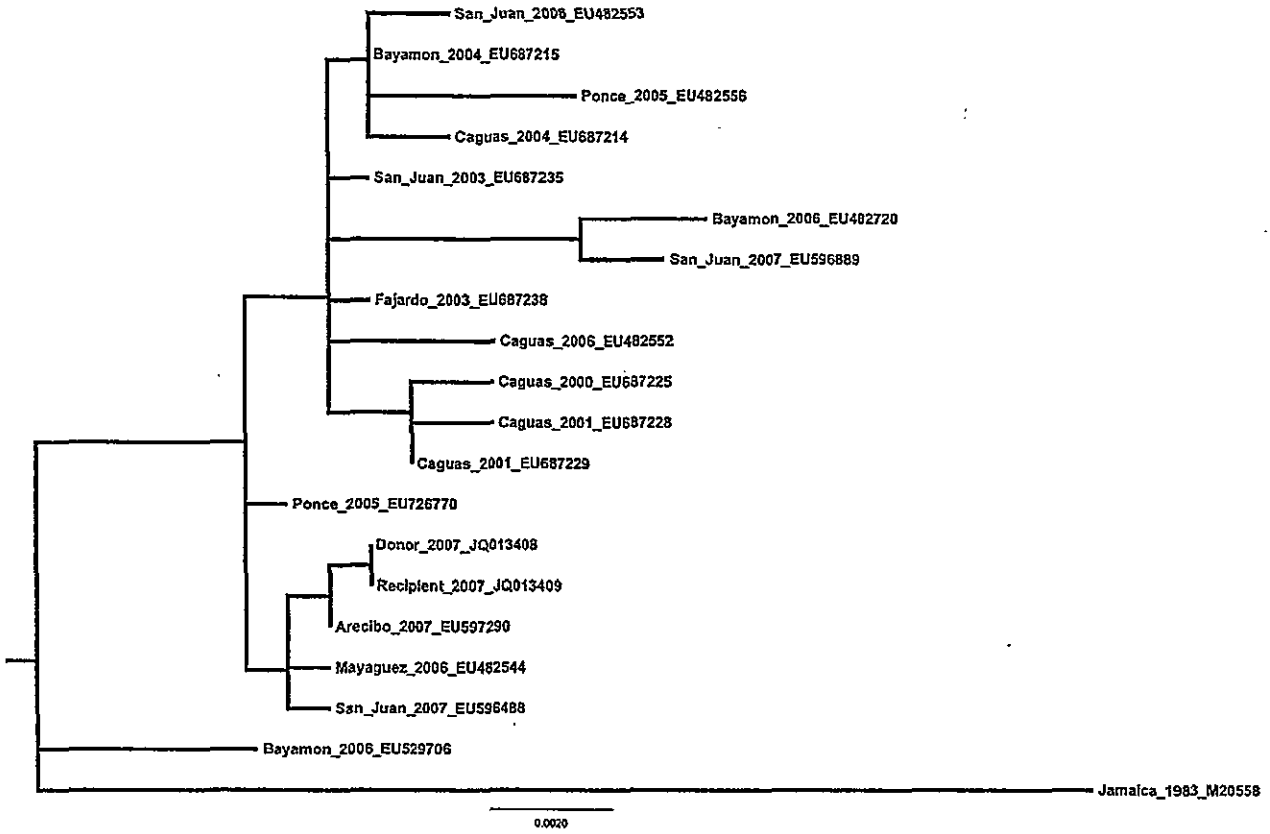


Fig. 3. Maximum likelihood phylogeny of complete E gene sequences (1485 bp) obtained from 19 endemic clinical isolates obtained between 2000 and 2007. Taxa label indicates the geographical region, collection date, and GenBank accession number. Caguas is the region where the city of Cidra is located, which is where the recipient resided. Isolates marked in red represent the sequences obtained from the blood donor and recipient. Pairwise distance shows a 100% similarity between these two sequences and less than 99% from the other sequences represented in the tree. The ML tree was rooted using the Jamaica 1983 E gene sequence.

blood unit in which the plasma contained fewer than 1000 DENV RNA copies/mL, one of which was from an IgM-positive donor (Tables 1 and 2; Donor Samples 18 and 19). In addition, neither recipient developed signs or symptoms consistent with DENV infection after transfusion. A third recipient in Puerto Rico who was transfused with RBCs from a unit containing 10^8 copies of DENV-2/mL of plasma became febrile 3 days posttransfusion and developed DHF (see Case report). The attending physician suspected dengue in the recipient and sent a serum sample for diagnostic testing on Day 5 after onset of illness that was positive for DENV-2 by RT-PCR. No other transmissions were detected.

The implicated donor unit was from a 31-year-old female who did not report any dengue-related symptoms before or after donation and was healthy on the day of donation. She had donated once previously in 2002 without event. Her unit was collected on September 13, 2007; testing showed that her plasma contained 1.35×10^8 copies/mL of DENV-2 and was IgM negative (Tables 1 and 2). RBCs prepared from the unit were transfused into a recipient who subsequently tested DENV-2 positive by RT-PCR (see Case report).

Frozen aliquots of the donation and recipient samples were available for further study. The sequence of 1485 bp corresponding to the DENV-2 envelope gene confirmed DENV-2 in both the donor and the recipient viruses and showed 100% sequence identity between the two viruses. Figure 3 shows the maximum likelihood analysis of the donor-recipient pair along with other DENV-2 isolates from various geographic areas representing different dengue outbreaks. Sequencing of viral isolates focused on the Caguas region of Puerto Rico including Cidra where the recipient resided. The sequencing results demonstrate that the virus from the donor and the recipient were identical and differed from other viruses found in the region where the recipient resided.

Case report

On September 26, 2007, an 80-year-old man with bronchial asthma, chronic hypertension, chronic obstructive

pulmonary disease, moderate tricuspid regurgitation, and myelodysplastic syndrome characterized by refractory anemia with ringed sideroblasts was admitted for symptomatic anemia. He was given 2 units of RBCs early in the morning of September 27, 2007. During the second transfusion, the patient became confused and pulled the line out of his arm, contaminating the floor and resulting in loss of half of the unit (i.e., he received 160 of 291 mL of the DENV-2 TMA-RR unit). The transfusions were otherwise uncomplicated; there were no transfusion-associated reactions and the patient's vital signs and electrocardiogram remained stable throughout. The patient was discharged to his home in central Puerto Rico that same evening.

On September 30, 2007, the recipient returned to the hospital's emergency department (ED) with complaints of general malaise and "not feeling good" since hospital discharge. The patient reported having chills, polyarthralgia, dry cough, headache, and fever since that morning (approx. 72 hr after transfusion). His hematocrit (Hct) was 35.5% and it had been stable since discharge but his creatinine and blood urea nitrogen were slightly elevated from baseline at 1.8 and 25.5 mg/dL. In the ED triage, the recipient had a temperature of 37.8°C, heart rate of 83 bpm, respiratory rate of 20 bpm, a blood pressure of 117/56 mmHg, and SaO_2 of 88% on room air. He appeared to be acutely ill but was alert, active, oriented, and not in any acute respiratory distress. The physical exam was unremarkable except for dry mucous membranes, minimal coarse rhonchi over the right lung field and bibasilar crackles, and a 2/6 systolic ejection murmur at the left sternal border. The recipient was given 0.9% normal saline intravenously, 3 L of oxygen by nasal canula, and respiratory treatments with ipratropium bromide and a β2-adrenergic agonist. He was readmitted with a presumptive diagnosis of health care–associated pneumonia for which he was given vancomycin and cefepime for 7 days. Blood and urine cultures collected in the ED and the initial chest radiograph were negative. A repeat chest radiograph on October 2 showed a right upper lung infiltrate.

Despite treatment with antibiotics, the recipient continued to have fever until the early morning of October 3, during which time his platelet (PLT) count and white blood cell count progressively declined from 183,000 and 4600 cells/mm^3 respectively, at admission to 40,000 and 1800 cells/mm^3. As a result, the diagnosis of dengue was considered and a serum sample was sent to the CDC's Dengue Branch for diagnostic testing where it tested DENV-2 positive by RT-PCR. In response to his low absolute neutrophil count, filgastrim, a granulocyte–colony-stimulating factor, was added to his treatment regimen. In the 48 hours after defervescence, the patient was noted to have episodes of hypotension (i.e., systolic blood pressure <90 mmHg) even though he had not had any antihypertensive medications since admission. In response, the patient was given intravenous volume replacement with 0.9% normal saline. At the same time, his serum albumin declined from 4.1 to 3.0 g/dL, and he developed large hematomas at injection sites. Even though the patient had no clinically significant bleeding detected, he met the criteria for DHF, namely, he had a fever for 5 days, thrombocytopenia, hemorrhagic manifestations, and plasma leakage as evidenced by development of hypotension and hypoalbuminemia after defervescence. The recipient received 1 unit of pheresis PLTs for a PLT count of 10,000 cells/mm^3 on October 6 and 1 unit of RBCs for a Hct of 24.6%. The remainder of the hospital course was uneventful and he fully recovered from DHF. He received 1 unit of RBCs before being discharged to home on October 11, 2007.

DISCUSSION

This study demonstrates a high frequency of blood donations with plasma DENV TMA-RR (1:529) during the 2007 dengue season in Puerto Rico. Of the 29 TMA-RR units, nearly 80% lacked IgM; nearly half had high viral loads and were capable of infecting mosquito cells in culture, proving that these donations were viremic and could pose a risk to recipient safety. However, fewer than half of the TMA-RR units could be detected in a 1-to-16 dilution, the common pool size used for TMA for other viruses (HIV, HCV, HBV, and WNV); predictably, those detected at a 1-to-16 dilution also had high viral loads. Since the infectious dose of DENV by transfusion is not known, and underlying susceptibility of recipients will vary, all RNA-positive units should be considered potentially infectious. Transfusion transmission was documented in this study, which was the first to document transfusion-transmitted DENV resulting in significant clinical illness.

Studies in Brazil, Honduras, and Puerto Rico have demonstrated the presence of DENV RNA and viremia among blood donations using TMA to detect viral RNA.[10,11] In one study, 9 of 2994 (0.37%) plasma specimens from Honduras in 2004 to 2005 and three of 4858 (0.06%) archived plasma specimens from Brazil in 2003 tested positive although none of 5879 archived plasma specimens collected by the Australian Red Cross Blood Services in 2005 was positive.[11] In a prior study in Puerto Rico, 12 of 16,521 (0.07%) archived unlinked plasma specimens collected by the ARC between September 20 and December 4, 2005, were TMA-RR in a year where 6039 cases of dengue-related disease were reported versus 10,508 reported cases in 2007.[10] In that study, as in our study, fewer than half of the TMA-RR samples confirmed by type-specific RT-PCR or were viremic as demonstrated by mosquito culture. However, both RT-PCR and mosquito cell culture are less sensitive than TMA.[39]

Modeling studies estimating the DENV transfusion transmission risk in the absence of testing have been per-

formed in various geographic areas. These include an estimated average risk during a dengue outbreak in 2004 in Cairns, Queensland, Australia, of 0.5 per 10,000;[40] a range of risk of 1.6 to 6 per 10,000 during 2005 in Singapore;[41] and, most recently in Puerto Rico, an average estimated risk of viremic donations of 7.0 per 10,000 over a 16-year period from 1995 to 2010.[42] Of note, the modeled estimated risk of viremic donations in Puerto Rico in 2007 was identical to the 29 TMA-RR donations observed in this study, with a 95% tolerance interval for the modeled estimate of 29 of 11 to 52. The modeled finding may be an overestimate based on the fact that not all RNA-positive donors will be viremic and infectious.[42]

There have been reports of DENV transmission through transfusion or transplantation.[12-14] The first published case of transfusion-transmitted dengue occurred in Hong Kong in 2002. The donor became symptomatic 1 day after donation and one recipient of RBCs developed dengue-related illness 3 days after transfusion; the patient subsequently seroconverted. Both the donor and the recipient had DENV-1 RNA identified in their blood by RT-PCR.[13] More recently, a second cluster of DENV transfusion transmission was identified in Singapore in which the donor became symptomatic 1 day after donation and two recipients (one of RBCs and the other of fresh-frozen plasma) developed dengue-related illness and seroconverted; the third recipient (of PLTs) was asymptomatic but developed IgM and IgG antibodies. The donor and the two symptomatic recipients were positive for DENV-2 RNA.[14] In addition, DHF was reported 5 days after receipt of a kidney transplant from an infected donor in Singapore[43] and dengue was reported in a bone marrow recipient in Puerto Rico in which DENV-4 was isolated from blood and tissues 4 days after transplant.[44] Moreover, seven instances of nosocomial transmission of dengue have been reported: six through needle stick injuries[45-49] and one through contact of infectious blood with the mucous membranes of a laboratory worker.[50]

Based on the results from this and the earlier studies,[10,11] it is clear that DENV RNA–containing donations occur and interventions should be considered. One intervention that the ARC implemented for collections during the 2009 dengue season in Puerto Rico included the use of a predonation question regarding dengue-related symptoms coupled with the use of an enhanced postdonation information sheet encouraging donors to call back if dengue-like symptoms developed (persistent fever and any of the following: headache, eye pain, muscle aches, joint or bone pain, new rash, bleeding from the nose or gums, or bruising easily). However, these measures would be predicted to be ineffective due to the fact that 53% to 87% of DENV infections are asymptomatic;[51,52] in fact, during the time of use, only one donor reported postdonation symptoms. Due to the fact that TMA has not been available for blood donation screening, serologic testing for DENV using a commercial NS1 antigen ELISA (Bio-Rad, Paris, France)[53] was implemented in March 2010; however, the clinical sensitivity of the NS1 antigen assay has been demonstrated to be 3- to 10-fold less sensitive than TMA by testing blood donations from the same DENV outbreak year.[54,55] For screening of donated blood, assays targeting DENV RNA are the preferred approach.

There may be several reasons why only a very limited number of dengue transfusion transmissions have been reported including: 1) recipient immunity from homotypic serotypes or recent heterotypic serotype immunity; 2) the infectious dose required for transfusion transmission may be higher than expected; and 3) clinical illness after transfusion may not be recognized as dengue, or if recognized, it may be incorrectly assumed to be mosquito acquired.[42] In any event, in an endemic area, the focus of public health is mosquito control versus the investigation of potential DENV transfusion transmission. Undoubtedly there are more DENV transfusion transmissions than have been documented, our case only being the third cluster reported. It seems likely that more infections resulted from the TMA-RR units identified by this study because not all recipients of such units were tested. Further, not all donations were tested during the 2007 dengue season in Puerto Rico. Therefore, the transmission of DENV-2 to one recipient through transfusion that was confirmed through this study represents the minimum level of transfusion transmission that occurred during the 2007 season in this dengue-endemic area. Based on the results of infecting mosquito cells in culture, in which a viral load of 10^5/mL was able to cause infection, 12 of 29 TMA-RR units contained infectious virions and hence were a risk to recipients. Since these 12 units were identified from 15,350 donations screened, this translates to a transfusion transmission risk of 1 per 1279 or approximately 0.1% of donations during the epidemic season in a dengue-endemic area. Results from this study indicate the need for additional research into the best strategies for preventing dengue transmission via blood transfusion in endemic areas and determining how such strategies should be implemented in nonendemic areas where dengue has recently been introduced.

CONFLICT OF INTEREST

None of the authors had a conflict of interest.

REFERENCES

1. Stramer SL, Hollinger FB, Katz LM, Kleinman S, Metzel PS, Gregory KR, Dodd RY. Emerging infectious disease agents and their potential threat to transfusion safety. Transfusion 2009;49(Suppl 2):1S-29S. Dengue virus fact sheet; updated Dec 2010. [cited 2011 Oct 16]. Available from: URL: http://www.aabb.org/resources/bct/eid/Pages/default.aspx

2. Porter KR, Beckett CG, Kosasih H, Tan RI, Alisjahbana B, Rudiman PI, Widjaja S, Listiyaningsih E, Ma'Roef CN, McArdle JL, Parwati I, Sudjana P, Jusuf H, Yuwono D, Wuryadi S. Epidemiology of dengue and dengue hemorrhagic fever in a cohort of adults living in Bandung, West Java, Indonesia. Am J Trop Med Hyg 2005;72:60-6.
3. Rothman A, editor. Dengue virus. Current topics in microbiology and immunology. Vol. 338. Berlin Heidelberg: Springer-Verlag; 2010.
4. Tan PC, Rajasingam G, Devi S, Omar SZ. Dengue infection in pregnancy: prevalence, vertical transmission, and pregnancy outcome. Obstet Gynecol 2008;111:1111-7.
5. Waterman SH, Novak RJ, Sather GE, Bailey RE, Rios I, Gubler DJ. Dengue transmission in two Puerto Rican communities in 1982. Am J Trop Med Hyg 1985;34:625-32.
6. Guzman MG, Kouri G, Valdes L, Bravo J, Alvarez M, Vazques S, Delgado I, Halstead SB. Epidemiologic studies on dengue in Santiago de Cuba, 1997. Am J Epidemiol 2000;152:793-9.
7. Halstead SB. Antibodies determine virulence in dengue. Ann N Y Acad Sci 2009;1171(Suppl 1):E48-56.
8. Halstead SB. Dengue virus-mosquito interactions. Annual Rev Entomol 2008;53:273-91.
9. Nishiura H, Halstead SB. Natural history of dengue virus DENV-1 and DENV-4 infections: reanalysis of classic studies. J Infect Dis 2007;195:1007-13.
10. Mohammed H, Linnen JM, Muñoz-Jordán JL, Tomashek K, Foster G, Broulik AS, Petersen L, Stramer SL. Dengue virus in blood donations, Puerto Rico, 2005. Transfusion 2008;48: 1348-54.
11. Linnen JM, Vinelli E, Sabino EC, Tobler LH, Hyland C, Lee TH, Kolk DP, Broulik AS, Collins CS, Lanciotti RS, Busch MP. Dengue viremia in blood donors from Honduras, Brazil, and Australia. Transfusion 2008;48:1355-62.
12. Wilder-Smith A, Schwartz E. Dengue in travelers. N Engl J Med 2005;353:924-32.
13. Chuang VW, Wong TY, Leung YH, Ma ES, Law YL, Tsang OT, Chan KM, Tsang IH, Que TL, Yung RW, Liu SH. Review of dengue fever cases in Hong Kong during 1998 to 2005. Hong Kong Med J 2008;14:170-7.
14. Tambyah PA, Koay ES, Poon ML, Lin RV, Ong BK. Dengue hemorrhagic fever transmitted by blood transfusion. N Engl J Med 2008;359:1526-7.
15. Petersen LR, Busch MP. Transfusion-transmitted arboviruses. Vox Sang 2010;98:495-503.
16. Tomashek KM, Margolis HS. Dengue: a potential transfusion-transmitted disease. Transfusion 2011;51:1654-60.
17. Rodríguez Rodríguez D, Garza Rodríguez M, Chavarria AM, Ramos-Jiménez J, Rivera MA, Taméz RC, Farfan-Ale J, Rivas-Estilla AM. Dengue virus antibodies in blood donors from an endemic area. Transfus Med 2009;19:125-31.
18. Teo D, Ng LC, Lam S. Is dengue a threat to the blood supply? Transfus Med 2009;19:66-77.
19. Thomas SJ, Strickman D, Vaughn DW. Dengue epidemiology: virus epidemiology, ecology, and emergence. Adv Virus Res 2003;61:235-89.
20. WHO. Dengue and dengue haemorrhagic fever. Geneva: World Health Organization; 2008.
21. DengueNet. WHO's internet-based system for the global surveillance of dengue fever and dengue haemorrhagic fever (dengue/DHF). [cited 2011 Oct 16]. Available from: URL: http://www.who.int/denguenet Dengue/DHF–global public health burden. Wkly Epidemiol Rec 2002;77:300-4.
22. World Health Organization. Impact of dengue. [cited 2011 Oct 16]. Available from: URL: http://www.who.int/csr/disease/dengue/impact/en/index.html
23. Morens DM, Fauci AS. Dengue and hemorrhagic fever: a potential threat to public health in the United States. JAMA 2008;299:214-6.
24. Ehrenkranz NJ, Ventura AK, Cuadrado RR, Pond WL, Porter JE. Pandemic dengue in Caribbean countries and the southern United States—past, present and potential problems. N Engl J Med 1971;285:1460-9.
25. Centers for Disease Control and Prevention (CDC). Dengue fever at the U.S.-Mexico border, 1995-1996. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 1996;45:841-4.
26. Ramos MM, Mohammed H, Zielinski-Gutierrez E, Hayden MH, Lopez JL, Fournier M, Trujillo AR, Burton R, Brunkard JM, Anaya-Lopez L, Banicki AA, Morales PK, Smith B, Muñoz JL, Waterman SH. Epidemic dengue and dengue hemorrhagic fever at the Texas-Mexico border: results of a household-based seroepidemiologic survey, December 2005. Am J Trop Med Hyg 2008;78:364-9.
27. Brunkard JM, Loez JL, Ramirez J, Cifuentes E, Rothenberg SJ, Hunsperger EA, Moore CG, Brussolo RM, Villarreal NA, Haddad BM. Dengue fever seroprevalence and risk factors, Texas-Mexico border, 2004. Emerg Infect Dis 2007;10:1477-83.
28. Effler PV, Pang L, Kitsutani P, Vorndam V, Nakata M, Ayers T, Elm J, Tom T, Reiter P, Rigau-Perez JG, Hayes JM, Mills K, Napier M, Clark GG, Gubler DJ. Dengue fever, Hawaii, 2001-2002. Emerg Infect Dis 2005;11:742-9.
29. Fujimori L. Dengue fever hits Pearl City. Star Advertiser 2011. March 25, 2011; Sect. 7.
30. Florida Department of Health. Florida arbovirus surveillance. [cited. 2011 Oct 16]. Available from: URL: http://www.doh.state.fl.us/environment/medicine/arboviral/index.html
31. Trout ABG, Rodriguez M, Barber J, Leal A, Radke E, Weis K, Stanek D, Stark L, Blackmore C, Gallagher G, Hunsperger E, Tomashek K, Gregory G, Sauber-Schatz E. Locally acquired dengue—Key West, Florida, 2009-2010. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 2010;59:577-81.
32. Freedman DO, Weld LH, Kozarsky PE, Fisk T, Robins R, von Sonnenburg F, Keystone JS, Pandey P, Cetron MS. GeoSentinel Surveillance Network. Spectrum of disease and relation to place of exposure among ill returned travelers. N Engl J Med 2006;354:119-30.
33. Mohammed HP, Ramos MM, Rivera A, Johansson M,

Muñoz-Jordan JL, Sun W, Tomashek KM. Travel-associated dengue infections in the United States, 1996 to 2005. J Travel Med 2010;17:8-14.
34. Tomashek KM, Rivera A, Muñoz-Jordan JL, Hunsperger E, Santiago L, Padro O, Garcia E, Sun W. Description of a large island-wide outbreak of dengue in Puerto Rico, 2007. Am J Trop Med Hyg 2009;81:467-74.
35. Johnson BW, Russell BJ, Lanciotti RS. Serotype-specific detection of dengue viruses in a fourplex real-time reverse transcriptase PCR assay. J Clin Microbiol 2005;43:4977-83.
36. Martin DA, Muth DA, Brown T, Johnson AJ, Karabatsos N, Roehrig JT. Standardization of immunoglobulin M capture enzyme-linked immunosorbent assays for routine diagnosis of arboviral infections. J Clin Microbiol 2000;38: 1823-6.
37. Rosen L, Gubler D. The use of mosquitoes to detect and propagate dengue viruses. Am J Trop Med Hyg 1974;23: 1153-60.
38. Muñoz-Jordan JL, Collins CS, Vergne E, Santiago GA, Petersen L, Sun W, Linnen JL. Highly sensitive detection of dengue virus nucleic acid in samples from clinically ill patients. J Clin Microbiol 2009;47:927-31.
39. Carrick JM, Knight J, Lontoc-Bugay C, Motta C, Wellbaum JB, Fleischer C, Muñoz JL, Stramer SL, Linnen JM. Highly sensitive and equivalent detection of dengue virus serotypes 1, 2, 3, and 4 with an enhanced transcription-mediated amplification assay. Transfusion 2009;49:29A.
40. Seed CR, Kiely P, Hyland CA, Keller AJ. The risk of dengue transmission by blood during a 2004 outbreak in Cairns, Australia. Transfusion 2009;49:1482-7.
41. Wilder-Smith A, Chen LH, Massad E, Wilson ME. Threat of dengue to blood safety in dengue-endemic countries. Emerg Infect Dis 2009;15:8-11.
42. Petersen LR, Tomashek K, Biggerstaff BJ. Estimated prevalence of dengue viremic blood donors in Puerto Rico, 1995-2010. Transfusion 2012;52:1647-51.
43. Tan FL, Loh DL, Prabhakaran K, Tambyah PA, Yap HK. Dengue haemorrhagic fever after living donor renal transplantation. Nephrol Dial Transplant 2005;20:447-8.
44. Rigau-Perez JG, Vorndam AV, Clark GG. The dengue and dengue hemorrhagic fever epidemic in Puerto Rico, 1994-1995. Am J Trop Med Hyg 2001;64:67-74.
45. De Wazieres B, Gil H, Vuitton DA, Dupond JL. Nosocomial transmission of dengue from a needle stick injury. Lancet 1998;351:498.
46. Wagner D, De With K, Huzly D, Hufert F, Weidmann M, Breisinger S, Eppinger S, Kern WV, Bauer TM. Nosocomial acquisition of dengue. Emerg Infect Dis 2004;10: 1872-3.
47. Hirsch JF, Deschamps C, Lhuillier M. Metropolitan transmission of dengue by accidental inoculation at a hospital. Ann Intern Med 1990;141:629.
48. Langgartner J, Audebert F, Schölmerich J, Glück T. Dengue virus infection transmitted by needle stick injury. J Infect 2002;44:269-70.
49. Nemes Z, Kiss G, Madarassi EP, Peterfi Z, Ferenczi E, Bakonyi T, Ternak G. Nosocomial transmission of dengue. Emerg Infect Dis 2004;10:1880-1.
50. Chen LH, Wilson ME. Transmission of dengue virus without a mosquito vector: nosocomial mucocutaneous transmission and other routes of transmission. Clin Infect Dis 2004;39:e56-e60.
51. Rodriguez-Figueroa L, Rigau-Perez JG, Suarez EL, Reiter P. Risk factors for dengue infection during an outbreak in Yanes, Puerto Rico in 1991. Am J Trop Med Hyg 1995;52: 496-502.
52. Burke DS, Nisalak A, Johnson DE, Scott RM. A prospective study of dengue infections in Bangkok. Am J Trop Med Hyg 1988;38:172-80.
53. Bessoff K, Phoutrides E, Delorey M, Acosta LN, Hunsperger E. Utility of a commercial nonstructural protein 1 antigen capture kit as a dengue virus diagnostic tool. Clin Vacc Immunol 2010;17:949-53.
54. Stramer SL, Linnen J, Carrick JM, Bentsen C, Krysztof DE, Hunsperger E, Muñoz-Jordan J, Dodd RY. Dengue donor viremia determined by RNA and NS1 antigen and detection of dengue transfusion transmission during the 2007 dengue outbreak in Puerto Rico. 2010. Vox Sang 2009; 99(Suppl 1):32. (JE-S1-02).
55. Stramer SL, Foster GA, Boucher C, Miller D, Dickson S, Lenes B, Carrick JM, Linnen J, Lanteri MC, Bentsen C. Comparing the yield of dengue viremic blood donations using NS1 antigen (Ag) and NAT. Transfusion 2011; 51(Suppl S2-101A):4A.

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 4. 21	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Al-Otaibi LM, Moles DR, Porter SR, Teo CG. J Med Virol. 2012 May;84(5):792-7. doi: 10.1002/jmv.23245.	公表国 サウジアラビア
販売名（企業名）	赤十字アルブミン20（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25（日本赤十字社） 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL（日本赤十字社）			

研究報告の概要

○血液透析患者の口腔及び血液中のヒトヘルペスウイルス8

サウジアラビアでは、移植関連のカポジ肉腫（KS）罹患率が高く、腎疾患患者と健康な者の間でヒトヘルペスウイルス8（HHV-8）感染の割合に差がある。血液透析治療を受けている患者間でのHHV-8経口感染が腎疾患患者における高いKS罹患率の原因であると仮定された。血液透析患者72人の血漿中の抗HHV-8 IgG抗体及びCD45（+）末梢血液細胞におけるHHV-8 DNA感染率が、供血者178人、妊婦60人と比較された。血液透析患者と健康な被験者間での抗HHV-8 IgG抗体検出率は16.7%対0.4%（P<0.001）、HHV-8 DNA検出率は4.2%対0.4%（P<0.05）だった。HHV-8 DNAは血液透析中患者の口腔内サンプルを用いて、またHHV-8ウイルス量は患者の唾液を用いて測定された。HHV-8 DNAが口腔内から検出された患者5人の唾液中のウイルス量は、8,600ゲノム当量/mlから119,562,500ゲノム当量/ml（平均24,009,360）にまで分布した。最終的にHHV-8サブゲノムシークエンスが実施され、口腔内のHHV-8は、4人がジェノタイプC2、1人はジェノタイプA1及びC2に属していたことが示された。血液透析患者の口腔内のHHV-8は高ウイルス量で、多様性があるようだ。従って、血液とともに唾液はHHV-8感染を媒介し、おそらく血液透析患者における高いHHV-8感染リスクとなり、腎移植後の免疫抑制に続くKSの原因となると考えられる。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
血液透析患者の口腔内から高濃度のヒトヘルペスウイルス8（HHV-8）が検出され、唾液がHHV-8を媒介し、腎移植後のカポジ肉腫の原因となることが示唆されたとの報告である。 ヘルペスウイルスは、脂質膜を持つ直径120-200nmの大型DNAウイルスである。これまで、本製剤によるヘルペスウイルス感染の報告はない。本製剤の製造工程には、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿ったウイルス・プロセスバリデーションによって検証された2つの異なるウイルス除去・不活化工程が含まれていることから、本製剤の安全性は確保されていると考える。	日本赤十字社では献血者保護の観点から問診時に腎臓病の有無を尋ね、治癒後1年以内は献血延期としている。この対応により血液透析患者の献血はないと考える。今後も情報の収集に努める。

Journal of Medical Virology 84:792–797 (2012)

Human Herpesvirus 8 Shedding in the Mouth and Blood of Hemodialysis Patients

Lubna M. Al-Otaibi,[1,2]* David R. Moles,[3,4] Stephen R. Porter,[2] and Chong-Gee Teo[5]

[1]*Department of Dentistry, Riyadh Military Hospital, Riyadh, Kingdom of Saudi Arabia*
[2]*Oral Medicine, UCL Eastman Dental Institute, London, United Kingdom*
[3]*Health Services Research, UCL Eastman Dental Institute, London, United Kingdom*
[4]*Oral Health Services Research, Peninsula Dental School, University of Plymouth, Plymouth, United Kingdom*
[5]*Virus Reference Division, Centre for Infections, Health Protection Agency, London, United Kingdom*

In Saudi Arabia, the prevalence of transplantation-associated Kaposi's sarcoma (KS) is high, and there is disparity in the prevalence rates of human herpesvirus 8 (HHV-8) infection between patients with renal disease and the general population. It was hypothesized that oral HHV-8 transmission among patients undergoing hemodialysis treatment contributes to the high prevalence of infection in renal disease patients. The detection rates of anti-HHV8-IgG in plasma and HHV-8-DNA in CD45(+)-peripheral blood cells of 72 hemodialysis patients were compared first with those of 178 blood donors and 60 pregnant women. Between the hemodialysis patients and the apparently healthy people sampled, the detection rate of anti-HHV-8-IgG was 16.7% versus 0.4% ($P < 0.001$) and that of HHV-8-DNA was 4.2% versus 0.4%, ($P < 0.05$). HHV-8 DNA was determined in oral samples and the HHV-8 viral load measured in saliva of patients undergoing hemodialysis. The amount of virus shed into saliva ranged between 8,600 and 119,562,500 (mean: 24,009,360) genome-equivalents/ml among the five patients in whom oral HHV-8 DNA was detected. Finally, HHV-8-subgenomic sequencing was conducted which showed that orally shed HHV-8 in four patients belonged to genotype C2, and in one patient to genotypes A1 and C2. HHV-8 shed in the mouth of hemodialysis patients may be extensive and diverse. Oral fluid in addition to blood is thus a likely vehicle for transmission of HHV-8, possibly contributing to the high risk of HHV-8 infection in patients undergoing hemodialysis and to KS following immunosuppression after renal transplantation. ***J. Med. Virol. 84:792–797, 2012.*** © 2012 Wiley Periodicals, Inc.

KEY WORDS: Kaposi's sarcoma; human herpesvirus 8; hemodialysis; saliva; nosocomial transmission

INTRODUCTION

Post-transplantation Kaposi's sarcoma (KS) is prevalent in Saudi Arabia, and accounts for over 70% of all neoplasms observed in renal-allograft recipients [Qunibi et al., 1988; al Sulaiman and al Khader, 1994]. KS is associated causally with infection by KS-associated human herpesvirus, also known as human herpesvirus 8 (HHV-8). HHV-8 is transmissible by oral fluid as well as blood [Teo, 2006; Al Otaibi et al., 2007]. HHV-8 infection does not seem to be highly endemic in the Saudi Arabian general population, since the seroprevalence of anti-HHV-8 in apparently healthy people has been reported to range between 1.7% and 7%, contrasting with 7–29% in patients with chronic renal failure [Qunibi et al., 1988; Almuneef et al., 2001; Alzahrani et al., 2005]. Studies of HHV-8 shedding in body fluids of hemodialysis patients, especially those from the Middle East, have not, to date, been reported. The present study investigated the prevalence of HHV-8 infection in such patients, and determined the extent of HHV-8 shedding in the oral fluid in addition to blood. Shedding from specific sites of the oral mucosa and in the oral adnexae was examined. Qualitative and quantitative methods were applied, as well as sequence-diversity determinations of the HHV-8 genome.

Grant sponsor: Saudi Arabian Armed Forces Medical Services (to L.M.A.).

Nucleotide sequence accession numbers: Sequences determined in this study have been deposited in EMBL Nucleotide Sequence Database (accession numbers FN908823 to FN908844).

*Correspondence to: Lubna M. Al-Otaibi, Department of Dentistry, Riyadh Military Hospital, P.O. Box 7897, Riyadh 11159, Kingdom of Saudi Arabia. E-mail: lalotaibi@gmail.com

Accepted 11 January 2012

DOI 10.1002/jmv.23245
Published online in Wiley Online Library (wileyonlinelibrary.com).

PATIENTS, MATERIALS, AND METHODS

Study samples were collected from 72 patients with chronic renal failure undergoing hemodialysis at the Riyadh Military Hospital, Saudi Arabia, during the months of March, April, and May 2004. No oral or cutaneous KS was evident in any of the patients with chronic renal failure. For comparison with a sample of apparently healthy people, 178 blood donors and 60 pregnant women attending the hospital were sampled. Approval for the investigation was secured from the Ethical Committee of the Riyadh Military Hospital and informed consent by participants was obtained. All participants for whom the demographic features are listed in Table I were of Saudi nationality and were seronegative for IgG antibody to the human immunodeficiency viruses. Clinical data for the participants were obtained from computer-based and standard medical records and then documented onto standardized forms, which were linked to patient samples by numerical code. Data entry and analysis were performed using the SPSS for Windows (Statistical Package of Social Science) software, version 12.0. Frequency distributions and cross-tabulation tables were constructed to analyze the relationship between HHV-8 infection and the patients' demographic and clinical characteristics, using, where appropriate, logistical regression, Chi-squared, or Fisher's exact test.

Matched oral and blood samples were obtained from all the patients with chronic renal failure; blood samples only were obtained from the blood donors and pregnant women. An enzyme immunosorbent assay (Advanced Biotechnologies, Inc., Columbia, MD) was utilized for the detection of plasma anti-HHV-8 IgG. This uses, as antigen, a whole viral extract from the KS-1 cell line which was derived from an EBV/HIV-uninfected patient with primary effusion lymphoma (PEL). The test detects antibody to the majority of HHV-8 structural proteins [Said et al., 1996; Chatlynne et al., 1998]. The CD45(+) (pan-leukocyte)-subset of peripheral blood, whole-mouth saliva (supernatant fraction), parotid saliva, buccal mucosa exfoliates and palatal exfoliates were collected, and processed for HHV-8-DNA amplification as described previously [Beyari et al., 2003; Al Otaibi et al., 2007; Al Otaibi et al., 2009]. A 211-bp segment from the KS330 region of open-reading frame (ORF) 26 of the HHV-8 genome, and a 247-bp segment from ORF K1 that encompasses the highly variable V1 region (called the K1/V1 segment) were amplified by nested PCR [Al Otaibi et al., 2007]. Extracts were considered positive for HHV-8 DNA only when PCR yielded products from both KS330 and K1/V1 segments. A quantitative, fluorescence-based, real-time PCR assay [Stamey et al., 2001] targeting ORF 25 was applied to extracts of HHV-8-DNA-positive whole-mouth saliva specimens. In HHV-8-DNA-positive oral and blood samples, consensus K1/V1 nucleotide sequencing was conducted initially. To search for and characterize minority HHV-8 strains, the samples were then subjected to nested PCR for K1/V1 using the EXPAND High-Fidelity PCR System (Roche Diagnostics, Indianapolis, IN), after which clones from each amplificate were generated and the sequences of K1/V1 inserts in 16 clones, picked at random, were determined, as described previously [Al Otaibi et al., 2007].

RESULTS

Table I summarizes the basic demographics, the plasma anti-HHV-8-IgG detection rates and HHV-8-DNA detection rates in CD45(+)-cells and in oral samples among the three study groups. Anti-HHV-8-IgG was detected in the plasma of 12 patients with chronic renal failure (designated CRFs 3, 10, 11, 15, 23, 24 33, 46, 48, 56, 57, and 64), 1 blood donor (designated BD 16) and none of the pregnant women; the anti-HHV-8-IgG detection rate was significantly higher in patients with chronic renal failure (17%) than in the blood donor and pregnant women groups combined (0.4%) ($P < 0.001$). HHV-8 DNA was amplified from CD45(+)-cells of three patients with chronic renal failure (designated CRFs 23, 24, and 57), all of whom were anti-HHV-8-seropositive. HHV-8 DNA was found in CD45(+)-cells of the one seropositive blood donor (designated BD 16), and none of the pregnant women. The HHV-8 DNA detection rate in CD45(+)-cells was significantly higher among patients with chronic renal failure (4.2%) than in the blood donor and pregnant women groups combined (0.4%) ($P < 0.05$).

Among CRFs 23, 24, and 57, HHV-8 DNA was amplified from both blood and oral compartments: for CRF 23 and CRF 57, in CD45(+)-cells and whole-mouth saliva; and for CRF 24, in CD45(+)-cells, whole-mouth saliva, buccal mucosa exfoliates, and

TABLE I. Demographic Features, Anti-HHV-8-IgG, and HHV-8-DNA Detection Rates Among Patients With Chronic Renal Failure Receiving Hemodialysis, Blood Donors, and Pregnant Women Sampled in Study

		Gender		Age					
Group	No.	Male	Female	Mean (year)	SD	Range (year)	No. with anti-HHV-8 IgG in plasma (%, 95% CI)	No. with HHV-8 DNA in CD45(+) blood cells (%, 95% CI)	No. with HHV-8 DNA in any oral sample (%, 95% CI)
CRF	72	43	29	57	14	23–83	12 (16.7, 8.9 to 27.3)	3 (4.2, 0.1 to 11.7)	5 (6.9, 2.2 to 15.5)
BD	178	176	2	30	7	18–51	1 (0.6, 0 to 3.1)	1 (0.6, 0 to 3.1)	—
PW	60	0	60	27	7	17–43	0	0	—

CRF, patients with chronic renal failure; BD, blood donors; PW, pregnant women; SD, standard deviation; 95% CI, exact 95% confidence interval; —, not determined.

palatal exfoliates. In two other patients with chronic renal failure (designated CRFs 10 and 56), HHV-8 DNA was amplified from whole-mouth saliva but not from CD45(+)-cells or other oral samples (Table II). These two patients were also anti-HHV-8-seropositive. The HHV-8 viral load in whole-mouth saliva of CRFs 10, 23, 24, 56, and 57 ranged between 8,600 and 119,562,500 (mean: 24,009,360) genome-copies/ml (Table II). The viral load in whole-mouth saliva obtained from CRF24, in whom HHV-8 DNA was found in both buccal mucosa exfoliates and palatal exfoliates, was notably high.

For BD 16, the K1/V1 sequence in CD45(+)-cells could be assigned to A1. The K1/V1 sequences in whole-mouth saliva of CRFs 10, 23, 56, and 57, and those in CD45(+)-cells of CRFs 23, 24, and 57 could be assigned to genotype C2. For CRF 24, the whole-mouth saliva and palatal exfoliate samples carried K1/V1 sequences that belonged to C2; however, in the buccal exfoliate sample, the majority sequences belonged to C2 whereas the minority sequences (estimated to comprise 13% of the total population) belonged to A1 (Table II). No identical K1/V1 sequences were observed between any two HHV-8 infected patients with chronic renal failure.

The proportion of males included in the blood donor and pregnant women groups combined (176/238; 74%) was significantly higher ($P = 0.026$, Fisher's exact test) than the proportion of males in the chronic renal failure group (43/72; 60%). The mean age of the chronic renal failure group was higher than that of the blood donor and pregnant women groups combined ($P < 0.001$, t-test). However, no statistically significant differences in anti-HHV-8-IgG or HHV-8 DNA detection rates in blood or oral samples according to sex, age, status of infection with hepatitis B or C viruses, duration of hemodialysis, or whether or not previous renal transplantation had been conducted were found. Anti-HHV-8-IgG and HHV-8 DNA were not detected in the patients receiving prednisolone or mycophenolate mofetil (Table III).

DISCUSSION

Previous studies of HHV-8 infection in hemodialysis patients were confined exclusively to determining the prevalence of anti-HHV-8 antibodies [Almuneef et al., 2001; Andreoni et al., 2001; Hsu et al., 2002; Di Stefano et al., 2006; Bergallo et al., 2007]. In the present study, conducted among Saudi Arabian patients with chronic renal failure receiving hemodialysis, the extent and diversity of oral HHV-8 shed in saliva and oral cells were investigated, in addition to anti-HHV-8 seroprevalence determination. Higher detection rates of HHV-8 DNA and plasma anti-HHV-8-IgG were found in the hemodialysis patients compared to a sample of apparently healthy people (blood donors and pregnant women, which for purposes of analysis were combined as a single group). This result supports previous data showing the comparatively high prevalence of plasma anti-HHV-8 in patients with chronic renal failure when compared to controls from the same country [Qunibi et al., 1998; Regamey et al., 1998; Hsu et al., 2002; Bergallo et al., 2007; Caterino-de-Araujo et al., 2007; Lonard et al., 2007; Jalilvand et al., 2011].

Logistic regression was undertaken to control for the possible influence of differing age profiles between the two groups which confirmed that the relationship of interest was not materially modified by the observed differences in age. Moreover, the antibody detection rate in the hemodialysis group was much higher (>40-fold) relative to the blood donor and pregnant women groups combined; it would seem unlikely that such a substantial difference could be attributed solely to patient age. The effect of chronic renal disease and uremic immunodeficiency, exacerbated by the protracted rounds of dialysis [Haag-Weber and Horl, 1993; Descamps-Latscha and Chatenoud, 1996], are other possible contributory factors, although these were not evaluated specifically in the current study.

Earlier studies conducted by our group have found evidence of HHV-8 shedding from the oral mucosa of

TABLE II. Distribution of HHV-8 Genotypes in Peripheral Blood and Oral Samples of Patients With Chronic Renal Failure and Blood Donors

Patient	Sample	Amount HHV-8 shed (genome-equivalents/ml)	HHV-8 genotype carried
CRF 10	WMS	151,500	C2[a]
CRF 23	CD45(+) blood cells	—	C2[a]
	WMS	8,600	C2[a]
CRF 24	CD45(+) blood cells	—	C2[a]
	WMS	119,562,500	C2[a]
	Buccal exfoliate	—	C2[a] and A1[b]
	Palatal exfoliate	—	C2[a]
CRF 56	WMS	241,000	C2[a]
CRF 57	CD45(+) blood cells	—	C2[a]
	WMS	83,200	C2[a]
BD 16	CD45(+) blood cells	—	A1[a]

CRF, chronic renal failure; BD, blood donor; WMS, whole-mouth saliva; —, not determined.
[a]All or majority K1V1 sequences.
[b]Minority K1/V1 sequences.

TABLE III. Plasma Anti-HHV-8 Antibody and HHV-8 DNA Status of Patients With Chronic Renal Failure According to Demographic and Clinical Characteristics

Characteristic	No.	Positive plasma anti-HHV-8, no. (%)	Positive HHV-8-DNA,[a] no. (%)
Gender			
Female	29	7 (24.1)	3 (10.3)
Male	43	5 (11.6)	2 (4.7)
P-value for difference		0.204	0.386
Age (years)			
21–30	2	0	0
31–40	9	0	0
41–50	11	0	0
51–60	18	4 (22.2)	1 (5.6)
61–70	21	5 (23.8)	3 (14.3)
71–80	9	3 (33.3)	1 (11.1)
81–90	2	0	0
P-value for difference		0.255	0.955
Duration of dialysis			
≤5 years	36	4 (11.1)	2 (5.6)
>5 years	36	8 (22.2)	3 (8.3)
P-value for difference		0.343	1.000
Previous renal transplant(s)			
Yes	8	0	0
No	64	12 (18.8)	5 (7.8)
P-value for difference		0.337	1.000
Hepatitis B[b]			
Positive	4	0	0
Negative	68	12 (17.6)	5 (7.4)
P-value for difference		1.000	1.000
Hepatitis C[c]			
Positive	11	1 (9.1)	0
Negative	61	11 (18)	5 (8.2)
P-value for difference		0.677	1.000
Prednisolone			
Not administered	68	12 (17.6)	5 (7.4)
Administered	4	0	0
P-value for difference		1.000	1.000
Mycophenolate Mofetil			
Not administered	71	12 (16.9)	5 (7)
Administered	1	0	0
P-value for difference		1.000	1.000
Total	72	12/72 (16.7)	5/72 (7)

[a]HHV-8 DNA positivity in blood, oral, or both samples.
[b]According to seropositivity for hepatitis B surface antigen.
[c]According to seropositivity for anti-hepatitis C virus IgG.

KS patients [Cook et al., 2002a,b; Beyari et al., 2003; Al Otaibi et al., 2007], while others have found evidence of HHV-8 infection in the oral mucosa of immunocompetent individuals [Duus et al., 2004]. Prompted by these findings, an investigation into whether hemodialysis patients might also be shedding the virus orally, thereby possibly contributing to horizontal HHV-8 infection in the hemodialysis milieu, was conducted. Sampling of buccal and palatal exfoliates as well as whole-mouth saliva showed that whole-mouth saliva samples yielded higher PCR amplification rates than buccal or palatal exfoliates, thus likely reflecting virus shed from locations distant from the sampling sites or from oral sites other than the buccal mucosa or hard palate. Of 12 patients identified to be seropositive for anti-HHV-8, 3 were determined to carry HHV-8 DNA in blood, while 5 patients (including the 3 in whom HHV-8 DNA was detected in blood) were found to carry HHV-8 DNA in their oral samples (Table I). To detect possible intra-unit HHV-8 transmission in patients with chronic renal failure, the hypervariable region (K1/V1) was analyzed and compared between patients undergoing hemodialysis. Previous studies have documented intra-unit hepatitis C virus transmission in hemodialysis units, with phylogenetic analysis revealing clustering between patients who were dialyzed during the same shift and in the same area [Hmaied et al., 2007]. In the current study, however, phylogenetic analysis revealed that none of the HHV-8-infected patients with chronic renal failure carried identical K1/V1 sequences.

The findings of the present study indicate that oral HHV-8 shedding in the hemodialysis patients occurred more frequently than systemic shedding. Furthermore, by applying quantitative methods, it was determined that during a given episode, oral HHV-8 shedding can be extensive (Table II). The viral load in whole-mouth saliva of four of the five patients who were oral HHV-8 shedders was determined to exceed 10^5 genome-copies/ml. Previously, similar results were found among renal-allograft recipients with a history of KS [Al Otaibi et al., 2007], and a renal-allograft recipient who had been given immunosuppressants [Al Otaibi et al., 2009]. The single patient with chronic renal failure (CRF 24) in whom HHV-8 DNA was detected in both buccal and palatal exfoliates showed the highest whole-mouth saliva viral load DNA (approaching 1.2×10^7 genome-copies/ml). The marked diversity of HHV-8 variants in his oral compartment is consistent with this patient having acquired the strains from previous, multiple transmission events [Beyari et al., 2003].

The findings of the present study show that oral fluid may also be a vehicle of HHV-8 transmission. In an environment where multiple patients receive dialysis concurrently, repeated opportunities exist for person-to-person transmission of infectious agents shed from the mouth, directly or indirectly via contaminated devices, equipment, supplies, environmental surfaces, or hands of personnel. Any item taken to a patient's dialysis station could become contaminated with blood and other body fluids thereby serving as a vehicle of transmission to other patients [CDC, 2001]. Contact transmission is the most important route by which pathogens are transmitted in health-care settings such as hemodialysis units. Contact transmission occurs most commonly when microorganisms from a patient are transferred to the hands of a health-care worker and then to another patient. Less commonly, environmental surfaces (e.g., bed rails, countertops) can become contaminated and serve as fomites; transmission can occur when a worker touches the surface who then touches a patient or when a patient touches a contaminated surface. Contact transmission can be prevented by hand hygiene, glove use, and frequent disinfection of environmental surfaces [CDC, 2001].

In hemodialysis units, policies and practices should be periodically reviewed and monitored to ensure that infection control practices are implemented and followed rigorously [Sehulster and Chinn, 2003; Rebmann and Barnes, 2011]. Training and educating staff members and patients regarding infection control practices, including personal and hand hygiene, should be implemented regularly [CDC, 2001]. Maintaining and regularly updating these infection control practices routinely for all patients in the hemodialysis setting will reduce opportunities for direct and indirect patient to patient transmission of infectious agents, including HHV-8 infection, which if acquired may, in turn, potentiate the development of KS should the patients subsequently undergo kidney transplantation and then receive immunosuppressive drugs.

Prospective studies evaluating the incidence of HHV-8 infection, together with phylogenetic analysis, in patients with chronic renal failure given hemodialysis treatment would determine the risk of intra-unit blood and oral transmission of HHV-8 infection in hemodialysis units more definitively. Further studies would then be needed to clarify the specific factors responsible for transmission of HHV-8 among hemodialysis patients and to evaluate the effect of the current recommendations on prevention and control of infections in this setting. Particularly in the Middle East, implementation of additional measures preventing HHV-8 transmission from oral fluid as well as blood might be required to control HHV-8 infection and reduce the incidence of post-renal-transplantation KS.

ACKNOWLEDGMENTS

We are grateful to the Departments of Nephrology, Haematology and Research at the Riyadh Military Hospital for facilitating the collection of samples, and to S. Dollard, Centres for Disease Control and Prevention, Atlanta, GA, USA, for assistance with viral load determination. Ethical approval for this research was obtained from the Ethical Committee of the Riyadh Military Hospital.

REFERENCES

Al Otaibi LM, Ngui SL, Scully CM, Porter SR, Teo CG. 2007. Salivary human herpesvirus 8 shedding in renal allograft recipients with Kaposi's sarcoma. J Med Virol 79:1357–1365.

Al Otaibi LM, al Sulaiman MH, Teo CG, Porter SR. 2009. Extensive oral shedding of human herpesvirus 8 in a renal allograft recipient. Oral Microbiol Immunol 24:109–115.

al Sulaiman MH, al Khader AA. 1994. Kaposi's sarcoma in renal transplant recipients. Transplant Sci 4:46–60.

Almuneef M, Nimjee S, Khoshnood K, Miller G, Rigsby MO. 2001. Prevalence of antibodies to human herpesvirus 8 (HHV-8) in Saudi Arabian patients with and without renal failure. Transplantation 71:1120–1124.

Alzahrani AJ, El Harith el-HA, Milzer J, Obeid OE, Stuhrmann M, Al Dayel A, Mohamed EA, Al Egail S, Daoud M, Chowdhury A, Guella A, Aloraifi I, Schulz TF. 2005. Increased seroprevalence of human herpes virus-8 in renal transplant recipients in Saudi Arabia. Nephrol Dial Transplant 20:2532–2536.

Andreoni M, Goletti D, Pezzotti P, Pozzetto A, Monini P, Sarmati L, Farchi F, Tisone G, Piazza A, Pisani F, Angelico M, Leone P, Citterio F, Ensoli B, Rezza G. 2001. Prevalence, incidence and correlates of HHV-8/KSHV infection and Kaposi's sarcoma in renal and liver transplant recipients. J Infect 43:195–199.

Bergallo M, Costa C, Margio S, Sidoti F, Re D, Segoloni GP, Cavallo R. 2007. Human herpes virus 8 infection in kidney transplant patients from an area of northwestern Italy (Piemonte region). Nephrol Dial Transplant 22:1757–1761.

Beyari MM, Hodgson TA, Cook RD, Kondowe W, Molyneux EM, Scully CM, Teo CG, Porter SR. 2003. Multiple human herpesvirus-8 infection. J Infect Dis 188:678–689.

Caterino-de-Araujo A, Magri MC, Santos-Fortuna E, Souza JF, Sens YA, Jabur P. 2007. Human herpesvirus-8 infection in hemodialysis patients from Sao Paulo, Brazil: Preliminary results. Transplant Proc 39:3044–3046.

CDC. 2001. Recommendations for Preventing Transmission of Infections Among Chronic Hemodialysis Patients. MMWR 50, 1–43. Ref Type: Generic.

Chatlynne LG, Lapps W, Handy M, Huang YQ, Masood R, Hamilton AS, Said JW, Koeffler HP, Kaplan MH, Friedman-Kien A, Gill PS, Whitman JE, Ablashi DV. 1998. Detection and titration of human herpesvirus-8-specific antibodies in sera from blood donors, acquired immunodeficiency syndrome patients, and Kaposi's sarcoma patients using a whole virus enzyme-linked immunosorbent assay. Blood 92:53–58.

Cook RD, Hodgson TA, Molyneux EM, Borgstein E, Porter SR, Teo CG. 2002a. Tracking familial transmission of Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus using restriction fragment length polymorphism analysis of latent nuclear antigen. J Virol Methods 105:297–303.

Cook RD, Hodgson TA, Waugh AC, Molyneux EM, Borgstein E, Sherry A, Teo CG, Porter SR. 2002b. Mixed patterns of transmission of human herpesvirus-8 (Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus) in Malawian families. J Gen Virol 83:1613–1619.

Descamps-Latscha B, Chatenoud L. 1996. T cells and B cells in chronic renal failure. Semin Nephrol 16:183–191.

Di Stefano M, Fiore JR, Pepe V, Cantatore S, Ingrassia F, Stallone G, Di Mauro L, Dentico P, Greco P, Gesualdo L. 2006. A search for antibodies to HHV-8 in hemodialysis patients from South-Eastern Italy argues against HHV-8 spread in hemodialysis units. J Clin Virol 37:75–76.

Duus KM, Lentchitsky V, Wagenaar T, Grose C, Webster-Cyriaque J. 2004. Wild-type Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus isolated from the oropharynx of immune-competent individuals has tropism for cultured oral epithelial cells. J Virol 78:4074–4084.

Haag-Weber M, Horl WH. 1993. Uremia and infection: Mechanisms of impaired cellular host defense. Nephron 63:125–131.

Hmaied F, Mamou MB, Dubois M, Pasquier C, Sandres-Saune K, Rostaing L, Slim A, Arrouji Z, Redjeb SB, Izopet J. 2007. Determining the source of nosocomial transmission in hemodialysis units in Tunisia by sequencing NS5B and E2 sequences of HCV. J Med Virol 79:1089–1094.

Hsu YH, Lin DY, Liou HH. 2002. Human herpesvirus-8 infection in hemodialysis patients from eastern Taiwan–Hualien. Kaohsiung J Med Sci 18:393–396.

Jalilvand S, Shoja Z, Mokhtari-Azad T, Nategh R, Gharehbaghian A. 2011. Seroprevalence of human herpesvirus 8 (HHV-8) and incidence of Kaposi's sarcoma in Iran. Infect Agent Cancer 6:5.

Lonard BM, Sester M, Sester U, Pees HW, Mueller-Lantzsch N, Kohler H, Gartner BC. 2007. Estimation of human herpesvirus 8 prevalence in high-risk patients by analysis of humoral and cellular immunity. Transplantation 84:40–45.

Qunibi W, Akhtar M, Sheth K, Ginn HE, Al Furayh O, DeVol EB, Taher S. 1988. Kaposi's sarcoma: The most common tumor after renal transplantation in Saudi Arabia. Am J Med 84:225–232.

Qunibi W, Al Furayh O, Almeshari K, Lin SF, Sun R, Heston L, Ross D, Rigsby M, Miller G. 1998. Serologic association of human herpesvirus eight with posttransplant Kaposi's sarcoma in Saudi Arabia. Transplantation 65:583–585.

Rebmann T, Barnes SA. 2011. Association for professionals in infection control and epidemiology. Preventing infections in hemodialysis: An executive summary of the APIC Elimination Guide. Am J Infect Control 39:72–75.

Regamey N, Tamm M, Wernli M, Witschi A, Thiel G, Cathomas G, Erb P. 1998. Transmission of human herpesvirus 8 infection

from renal-transplant donors to recipients. N Engl J Med 339: 1358–1363.

Said W, Chien K, Takeuchi S, Tasaka T, Asou H, Cho SK, de Vos S, Cesarman E, Knowles DM, Koeffler HP. 1996. Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus (KSHV or HHV8) in primary effusion lymphoma: Ultrastructural demonstration of herpesvirus in lymphoma cells. Blood 87:4937–4943.

Sehulster L, Chinn RY. 2003. Guidelines for environmental infection control in health-care facilities. Recommendations of CDC and the Healthcare Infection Control Practices Advisory Committee (HICPAC). MMWR Recomm Rep 52:1–42.

Stamey FR, Patel MM, Holloway BP, Pellett PE. 2001. Quantitative, fluorogenic probe PCR assay for detection of human herpesvirus 8 DNA in clinical specimens. J Clin Microbiol 39:3537–3540.

Teo CG. 2006. Conceptual emergence of human herpesvirus 8 (Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus) as an oral herpesvirus. Adv Dent Res 19:85–90.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 5. 8	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Cruz CD, Forshey BM, Vallejo E, Agudo R, Vargas J, Blazes DL, Guevara C, Laguna-Torres VA, Halsey ES, Kochel TJ. Emerg Infect Dis. 2012 May;18(5):750-7. doi: 10.3201/eid1805.111111.	公表国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			ペルー

研究報告の概要

○ヒトでの致死的な感染症と関連するアンデスウイルスの新しい株、ボリビア中央部
南アメリカでヒト疾患と関連しているハンタウイルスの遺伝的多様性を調べるため、2008年～2009年にボリビア中央部のチャパレで発熱患者の血液サンプルを検査した。ハンタウイルス属RNAは死亡した1人を含む3人の患者に認められた。3人の患者からのS及びMセグメントの部分的RNA配列はアンデスウイルス系統に最も密接に関連していたが、既報告株とは異なっていた(90%以下のヌクレオチド一致)。チャパレ住民間での抗ハンタウイルスIgG抗体調査は人口の12.2%が過去に1つ以上のハンタウイルスへ曝露していたことを示し、農業従事者間で最も罹患率が高かった。ハンタウイルス株へ曝露する人が多いことと、結果的に生じる疾病が重大であることから、この新しいハンタウイルスの宿主、浸淫地域、及び公衆衛生への影響を決定するための更なる研究が必要とされる。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
ボリビア中央部のチャパレで死亡した1人を含む3人から、以前報告されていたアンデスウイルスとは異なる、ハンタウイルスの新しい株が検出されたとの報告である。 ハンタウイルスは脂肪膜を有するRNAウイルスである。これまで、本製剤によるハンタウイルス感染の報告はない。本製剤の製造工程には、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿ったウイルス・プロセスバリデーションによって検証された2つの異なるウイルス除去・不活化工程が含まれていることから、本製剤の安全性は確保されていると考える。	日本赤十字社では、輸血感染症対策として問診時に海外滞在歴の有無を確認し、帰国(入国)後4週間は献血不適としている。また、発熱などの体調不良者を献血不適としている。今後も引き続き、新興・再興感染症の発生状況等に関する情報の収集に努める。

RESEARCH

Novel Strain of Andes Virus Associated with Fatal Human Infection, Central Bolivia

Cristhopher D. Cruz, Brett M. Forshey, Efrain Vallejo, Roberto Agudo, Jorge Vargas, David L. Blazes, Carolina Guevara, V. Alberto Laguna-Torres, Eric S. Halsey, and Tadeusz J. Kochel

To better describe the genetic diversity of hantaviruses associated with human illness in South America, we screened blood samples from febrile patients in Chapare Province in central Bolivia during 2008–2009 for recent hantavirus infection. Hantavirus RNA was detected in 3 patients, including 1 who died. Partial RNA sequences of small and medium segments from the 3 patients were most closely related to Andes virus lineages but distinct (<90% nt identity) from reported strains. A survey for IgG against hantaviruses among residents of Chapare Province indicated that 12.2% of the population had past exposure to ≥1 hantaviruses; the highest prevalence was among agricultural workers. Because of the high level of human exposure to hantavirus strains and the severity of resulting disease, additional studies are warranted to determine the reservoirs, ecologic range, and public health effect of this novel strain of hantavirus.

Hantaviruses (family *Bunyaviridae*, genus *Hantavirus*) are trisegmented negative-strand RNA viruses in which the small (S), medium (M), and large (L) genomic segments encode for the nucleocapsid protein (N), 2 envelope glycoproteins (Gn and Gc), and the viral polymerase, respectively. Hantaviruses are maintained in rodent reservoirs, and human exposure typically results from inhalation of aerosols from infectious urine or feces, although human-to-human transmission of Andes virus (ANDV) has also been described (*1*). Human hantavirus infection in South America is often associated with rapid onset of severe disease manifestations, such as respiratory failure and cardiac dysfunction referred to as hantavirus pulmonary syndrome (HPS) and case-fatality rates ≥50% (*2,3*). Despite the public health effects, in most cases of human infection, the precise etiologic agent is not identified. Thus, the extent of genetic diversity and geographic distribution of distinct hantavirus strains is not well understood.

Since the first identification of HPS in 1993, many new hantaviruses have been described throughout North, Central, and South America. Studies of rodent reservoirs in South America have identified an increasingly complex picture of hantavirus diversity and ecology (*2,4*). Unique strains of hantavirus have been identified in rodents in Venezuela (*5,6*), Peru (*7*), Brazil (*8–10*), Argentina (*11–13*), Paraguay (*14,15*), and Chile (*11,16*), many of which have also been associated with human illness. In Bolivia, the first hantavirus identified was Río Mamoré virus (RIOMV), which was isolated from a pygmy rice rat (*Oligoryzomys microtis*) (*17*) but has not been associated with human disease. In 1997, a Laguna Negra virus (LNV) variant was identified in an HPS patient in Chile who had traveled extensively in Bolivia (*18,19*). An ecologic assessment of reservoir hosts identified the large vesper mouse (*Calomys callosus*) as reservoir host of LNV in Bolivia (*20*). The association of ANDV (Nort lineage) and Bermejo virus (BMJV) with 2 HPS cases in southern Bolivia in 2000 documented the first human infection by BMJV (*21*).

To further describe the diversity of hantavirus strains associated with human disease in Bolivia, we screened febrile patients reporting to 2 health centers in Chapare Province for serologic and molecular evidence of hantavirus infection. We describe the clinical signs and symptoms and

Author affiliations: US Naval Medical Research Unit 6, Lima, Peru (C.D. Cruz, B.M. Forshey, D.L. Blazes, C. Guevara, V.A. Laguna-Torres, E.S. Halsey); Servicio Departamental de Salud, Cochabamba, Bolivia (E. Vallejo, R. Agudo); Centro Nacional de Enfermedades Tropicales, Santa Cruz, Bolivia (J. Vargas); and US Naval Medical Research Center, Silver Spring, Maryland, USA (T.J. Kochel)

DOI: http://dx.doi.org/10.3201/eid1805.111111

genetic characterization (partial S and M segment) of a novel strain of hantavirus in 3 patients, including 1 who died. In addition, we report results of a survey to determine the prevalence of previous hantavirus exposure in the region.

Materials and Methods

Study Site and Human Participant Issues

Patients were recruited when they reported acute febrile illness (≤7 days) at the Hospital San Francisco de Asis or Centro de Salud Eterezama (16°55′S, 65°22′W; 265 m above sea level), located in the Chapare Province of the Department of Cochabamba in central Bolivia (*22*) (Figure 1). Chapare is a rural province with tropical rainforests surrounding the Chapare River, the main waterway of the region. The health centers are located in the towns of Villa Tunari and Eterezama, which had 2,632 and 2,001 inhabitants, respectively, at the time of the 2001 census (*23*).

Study protocols were approved by Servicio Departamental de Salud Santa Cruz, and Colegio Medico de Santa Cruz. Study protocols (NMRCD.2000.0008 and NMRCD.2005.0002) were also approved by the US Naval Medical Research Unit Institutional Review Board in compliance with all US Federal regulations governing the protection of human subjects. Written consent was obtained from patients ≥18 years of age. For patients <18 years of age, written consent was obtained from a parent or legal guardian. Written assent was also obtained from patients 8–17 years of age.

A survey for prior exposure to arenaviruses and hantaviruses was conducted in Chapare Province during April 25–May 2, 2005, after a reported outbreak of febrile illness and hemorrhagic fever in the region (*24*). Adults (≥18 years of age) were invited to participate in the study. Blood samples (10 mL) were collected by venipuncture for screening of antibodies against hantaviruses, and demographic data were collected for risk factor analysis in assorted villages in Chapare Province (Figure 1). Data included age, occupation, self-reported exposure to rodents, house construction materials, and recent health history.

Serologic Analyses

Serum samples from febrile patients were screened for IgM against ANDV or LNV antigens by ELISA. In brief, 96-well plates were coated with anti-human IgM, human serum samples (1:100 dilution) were added, and plates were incubated for 1 h at 37°C. Wells were subsequently incubated with ANDV or LNV antigen for 1 h at 37°C. Viral antigens were recognized by the addition of hyperimmune mouse ascitic fluid for 1 h at 37°C and incubation with horseradish peroxidase–conjugated anti-mouse IgG for 1 h. Finally, substrate (2,2′-azino-bis-[3-ethylbenzthiazoline-6-sulfonic acid]; Kirkegaard and Perry, Inc., Gaithersburg, MD, USA) was added, and optical density at a wavelength of 405 nm was measured by using a spectrophotometer. Patient serum specimens were also screened for IgM against a panel of arboviral pathogens, including dengue viruses, yellow fever virus, and Venezuelan equine encephalitis virus. Virus culture and identification was attempted in African green monkey Vero cell cultures by indirect immunofluorescence assay and Sin Nombre virus (SNV) polyclonal antibodies, as described for arboviruses (*22*).

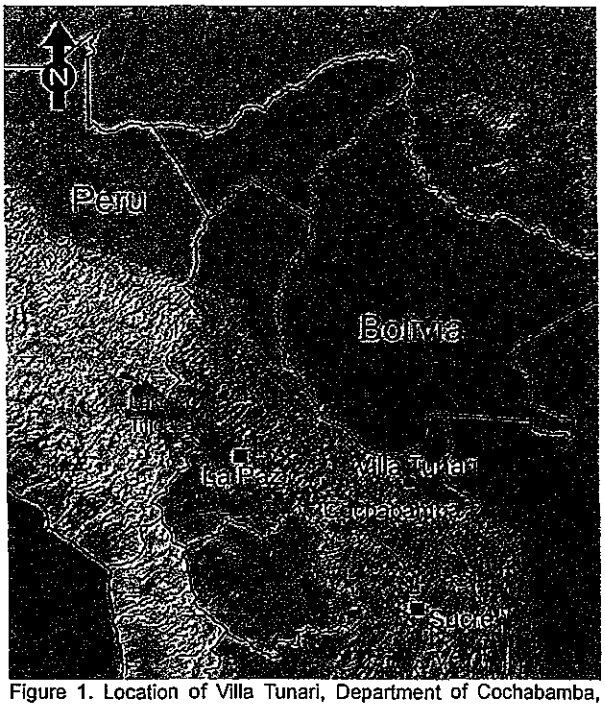


Figure 1. Location of Villa Tunari, Department of Cochabamba, Bolivia, the area where patients with hantavirus infection were recruited. The constitutional (Sucre) and administrative (La Paz) capitals of Bolivia are shown for reference.

For the seroprevalence study, serum samples from healthy participants were screened by indirect ELISA for IgG against SNV antigen (Centers for Disease Control and Prevention, Atlanta, GA, USA). Serum samples were diluted 1:100 and incubated in SNV recombinant antigen–coated wells and then with horseradish peroxidase–conjugated mouse anti-human IgG (1:8,000 dilution). Finally, substrate (2,2′-azino-bis-[3-ethylbenzthiazoline-6-sulfonic acid]) was added, and absorbance was measured at 405 nm with a Dynex ELISA MRX Revelation absorbance reader (Dynex Technologies, Chantilly, VA, USA). Samples with optical densities greater than the mean of 5 negative controls plus 5 SD at a 1:100 dilution were considered positive.

Molecular Analyses

After serologic screening, RNA was extracted from whole blood and serum samples of patients positive for hantavirus IgM by using the QIAamp Viral RNA Mini Kit (QIAGEN, Valencia, CA, USA). A 1-step reverse transcription PCR (RT-PCR) was performed by using the Access RT-PCR system (Promega, Madison, WI, USA). Nested PCRs were performed by using the FastStart PCR Master (Roche, Indianapolis, IN, USA). Initial screening was performed by using primers specific for the S segment as described (*20*). Additional primers were designed on the basis of preliminary sequences to generate additional S segment coding region sequence (forward: HANSF3 5′-TGGATGTTAATTCCATCGA-3′ and reverse: HANSR4 5′-GATAATGTTTCGTGCTTTCA-3′; forward: HANF0001 TAGTAGTAGACTCCTTGAGAAGCTACT and reverse: HANTASR2 TAGTATGCTCCTTGAR AAGC). A 1,287-bp region of the S segment was generated, which included positions 43–1329 of the full-length S segment of ANDV strain Chile R123 (*25*).

For the M segment, RT-PCR and nested PCR were performed by using specific primers (*18*), which generated a 1,330-bp sequence of the M segment that included positions 1678–3007 of the full-length M segment of ANDV strain Chile R123. RT-PCR amplicons were purified by agarose gel electrophoresis and sequenced directly by using the Big Dye Terminator v3.1 Cycle Sequencing Kit on a 3100 Avant-Genetic Analyzer (Applied Biosystems, Foster City, CA, USA).

Phylogenetic Analysis

S segment and M segment sequences (submitted to GenBank under accession nos. JF750417–JF750422) were compared with sequences from other members of the genus *Hantavirus*, including Puumula virus strain Umea (Genbank accession nos. S segment: AY526219, M segment: AY526218), RIOMV strain HTN-007 (S: FJ532244, M: FJ608550), SNV strain NMH10 (S: L25784, M: L24783), El Moro Canyon virus strain RM97 (S: U11427, M: U26828), Choclo virus (S: DQ285046, M: DQ285047), Caño Delgadito virus (S: DQ285566; M: DQ284451), Pergamino virus (PRGV; S: AF482717, M: AF028028), ANDV strain AH-1 (S: AF324902, M: AF324901), ANDV strain CHI7913 (S: AY228237, M: AY228238), ANDV strain Chile-9717869 (S: AF291702, M: AF291703), Maciel virus strain 13796 (MACV; S: AF482716, M: AF028027), Catacamas virus (CATV; S: DQ256126, M: DQ177347), Paranoa virus (S: EF576661), Oran virus (S: AF482715, M: AF028024), LNV (S: AF005727, M; AF005728), BMJV (S: AF482713, M: AF028025), Lechiguanas virus strain 22819 (S: AF482714, M: AF028022), ANDV strain Hu39694 (S: AF482711, M: AF028023), Playa de Oro virus (S: EF534079, M: EF534082), Neembucu virus (S: DQ345763), Alta Paraguay virus (S: DQ345762), Itapua virus (S: DQ345765), Araraquara virus (ARAV; S: AF307325, M: AF307327), Araucaria virus strain HPR/03–99 (S: AY740630), Jabora virus strain Akp8048 (S: JN232080), Juquitiba virus strain Olfo_777 (S: GU213198), and Castelo dos Sonhos virus (CASV; S: AF307324, M: AF307326).

Sequences were aligned by using ClustalW (www.clustal.org) with manual adjustments, and pairwise genetic distances were calculated by using MEGA4.0 (*26*). For phylogenetic analysis, maximum-likelihood (ML) and Bayesian approaches were used. ML phylogenetic trees were estimated by using PhyML (*27,28*) and 100 bootstrap replications to place confidence intervals at nodes. Phylogenetic reconstructions were also conducted in MrBayes version 3.1 (*29,30*) under the general time reversible + Γ + proportion invariant model of evolution, with 1 million Markov Chain Monte Carlo generations, and sampling every 100 generations with a burn-in of 25,000. Puumula virus S and M segments were included as outgroups in the phylogenetic reconstructions.

Results

Patient Identification

During January 2008–June 2009, serum samples from 372 febrile patients reporting to clinics in Chapare Province, Bolivia (Figure 1) were tested for serologic evidence of recent infection by ≥1 hantaviruses. Of these 372 patients, 199 (53.5%) were male patients with a median age of 31 years (range 7–95 years). IgM against ANDV (n = 8) or LNV (n = 1) antigen was identified in acute-phase or convalescent-phase samples from 9 (2.4%) patients. No evidence of recent arbovirus infection was detected in these samples. Of the 9 patients with IgM against hantaviruses, 7 (77.8%) were male patients with a median age of 32 years (range 15–49 years). Three of the 9 patients were positive for hantavirus RNA.

Patient 1 (FVB0554) was an 18-year-old man (student) from the town of Pedro Domingo Murillo, Bolivia, who came to Hospital San Francisco de Asis in January 2008 He reported 7 days of fevers, chills, and malaise. Other symptoms included oliguria, arthralgias, myalgias, bone pain, headache, and retroocular pain. Gastrointestinal (abdominal pain, diarrhea, nausea, emesis, and icterus) and respiratory (cough, dyspnea, and cyanosis) manifestations were also prominent. The patient died the next day. IgM against LNV antigen (reciprocal titer 1,600) was detected in a serum sample collected before his death.

Patient 2 (FVB0640) was a 27-year-old man (agricultural worker) from Samuzabety, Bolivia, who came to Hospital San Francisco de Asis in March 2008. The patient had a temperature of 39.9°C and reported 8 days of

fever, chills, and malaise. Other symptoms included cough, arthralgias, myalgias, bone pain, headache, and retroocular pain. On examination, multiple cutaneous manifestations were noted, including petechiae, purpura, a maculopapular rash, and a diffuse erythematous rash. The patient was hospitalized for 4 days and recovered. IgM against ANDV was detected in an acute-phase serum sample (reciprocal titer 6,400); no convalescent-phase sample was obtained.

Patient 3 (FVB0799) was a 49-year-old man (farmer) from Flor de San Pedro, Bolivia, who came to Hospital San Francisco de Asis in June 2009. He reported 4 days of fever, chills, and malaise. Other symptoms included arthralgias, myalgias, bone pain, abdominal pain, headache, cough and dyspnea. The patient survived. IgM against ANDV was detected in an acute-phase serum sample (reciprocal titer 6,400); no convalescent-phase sample was available for additional analysis.

Molecular Analyses

Viral sequences generated from samples from the 3 patients were highly conserved over the gene regions analyzed; >99.6% pairwise nucleotide identity in the S segment (3–5-nt differences) and >99.2% pairwise nucleotide identity in the M segment (1–10-nt differences). Nucleotide sequences were compared with those of hantavirus strains available in GenBank (Table 1). In pairwise comparisons of S segment gene sequences, we observed the highest identity with CASV (*31*), which showed 89.3% identity at the nucleotide level and 98.6% identity at the amino acid level, although only limited sequence (643 nt) was available for comparison. In comparison with other Western Hemisphere hantaviruses for which more extensive sequences were available (1,287 nt) 75.8%–84.1% nucleotide sequence identity and 85.3%–97.7% amino acid identity were observed, and the highest similarity was with members of the species *Andes virus* (Table 1).

In pairwise comparisons of M segment gene sequences, the highest nucleotide identity (83.3%) was observed in comparison with CASV. Similar amino acid identities were observed with CASV (95.1%), Oran virus (95.3%), Lechiguanas virus (95.0%), and ANDV Hu39694 (95.3%) (Table 1). Viral sequences amplified from patient samples were more distantly related to LNV, Caño Delgadito virus, and Maporal virus; all showed <80% pairwise identity at the nucleotide level and <90% pairwise identity at the amino acid level (Table 1).

Table 1. Percent pairwise nucleotide and amino acid identity between select Western Hemisphere hantaviruses and virus sequences amplified from patients from central Bolivia*

		S segment (1,287 bp)		M segment (1,330 bp)	
Virus strain	Country	Nucleotide	Amino acid	Nucleotide	Amino acid
PRGV	Argentina	81.4	94.6	80.8	93.0
ANDV AH1	Argentina	83.5	96.0	81.7	93.9
ANDV Hu39694	Argentina	82.0	97.4	81.7	95.3
MACV	Argentina	81.7	94.2	80.2	91.4
BMJV	Argentina	83.7	97.7	80.2	93.9
LECV	Argentina	84.1	97.4	81.1	95.0
ORNV	Argentina	83.5	97.4	80.3	95.3
CASV†‡	Brazil	89.3	98.6	83.3	95.1
PARV	Brazil	82.9	95.3	NA	NA
ARAV§	Brazil	84.0	94.9	79.5	93.2
JABV	Brazil	77.3	88.6	NA	NA
ARCV	Brazil	82.2	95.8	NA	NA
ANDV 9717869	Chile	83.5	96.0	80.7	93.7
ANDV CHI7913	Chile	82.7	95.6	81.1	92.8
CATV	Honduras	76.9	88.1	76.0	86.2
PDOV	Mexico	77.4	87.4	75.8	85.4
CHOV	Panama	78.9	89.3	77.8	88.0
NEMV	Paraguay	84.9	97.0	NA	NA
ALPV	Paraguay	80.3	89.3	NA	NA
ITAPV	Paraguay	81.7	95.8	NA	NA
JUQV‡	Paraguay	82.5	95.5	NA	NA
LNV	Paraguay	79.4	90.2	79.2	90.5
RIOMV	Peru	80.1	90.0	80.6	91.4
SNV NMH10	USA	76.5	87.2	76.0	86.2
ELMCV RM97	USA	76.8	83.9	73.8	82.8
MAPV	Venezuela	79.6	91.1	77.8	89.8
CADV	Venezuela	75.8	85.3	74.3	83.1

*S, small; M, medium; PRGV, Pergamino virus; ANDV, Andes virus; MACV, Maciel virus; BMJV, Bermejo virus; LECV, Lechiguanas virus; ORNV, Oran virus; CASV, Castelo dos Sonhos virus; PARV, Paranoa virus; ; NA, sufficient sequence not available for comparison; ARAV, Araraquara virus; JABV, Jabora virus; ARCV, Araucaria virus; CATV, Catacamas virus; PDOV, El Moro Canyon virus; CHOV, Choclo virus; NEMV, Neembucu virus; ALPV, Alta Paraguay virus; ITAPV, Itaporanga virus; JUQV, Juquitiba virus; LNV, Laguna Negra virus; RIOMV, Rio Mamoré virus; SNV, Sin Nombre virus; ELMCV, El Moro Canyon virus; MAPV, Maporal virus; CADV, Caño Delgadito virus.
†S segment sequence comparison was limited to the homologous 999 bp (JUQV) or 643 bp (CASV) available from GenBank.
‡M segment sequence comparison was limited to the homologous 1,246 bp available from GenBank.

To further explore genetic relationships between the novel viral sequences and previously described hantaviruses, we conducted ML and Bayesian analyses on the basis of S segment and M segment nucleotide sequences. Similar results were obtained for ML and Bayesian approaches (Figure 2). Viral sequences derived from patient samples grouped with other strains of ANDV (www.ncbi.nlm.nih.gov/ICTVdb/index.htm); formed a clade with ARAV, MACV, PRGV, and other ANDV strains; and formed a subclade with CASV (Figure 2). Similar tree topologies for other strains of ANDV were obtained on the basis of analysis of S segment and M segment sequences. Genetic differences between CASV and the novel sequences were well supported by posterior probabilities (Figure 2) and ML bootstrap values.

Prevalence of IgG against Hantaviruses among Humans in the Chapare Region

To determine the extent of human exposure to hantaviruses in the region, we screened serum samples from residents of villages in Chapare Province for IgG against SNV antigen. A total of 500 participants >18 years of age residing in villages in the region were enrolled during April 25–May 2, 2005 (Table 2). Participants had a median age of 31 years (range 18–99 years); 54.9% were women (Table 2).

Sixty-one (12.2%; 95% CI 9.3%–15.1%) had IgG against SNV antigen (Table 2), and the highest prevalences were in the towns of Samuzabety (18.6%) and San Gabriel (17.2%). No differences were observed between sexes or among different age groups (Table 2). The highest prevalence of IgG against SNV was among agricultural workers (15.0%) and housewives (13.5%) (Table 2). No differences in seropositivity were observed for participants with differing house construction materials or quality.

Discussion

We demonstrated the association of a novel genotype of ANDV with fatal human infection in central Bolivia and extended the known genetic diversity of hantaviruses circulating in South America. One fatal case occurred among the 3 patients described, which was consistent with high mortality rates observed with infections with ANDV lineages in neighboring Brazil and Argentina (*3*). The International Committee on Taxonomy of Viruses has provided guidelines for the demarcation of hantaviruses (www.ictvdb.org/Ictv/index.htm), which include a ≥7% difference in amino acid identity in comparison with previously identified complete S segment and M segment gene sequences, a ≥4-fold difference in results of 2-way cross-neutralization tests, and occupation of a unique ecologic niche, such as a different primary rodent reservoir. As with other hantavirus strains, attempts to isolate virus in

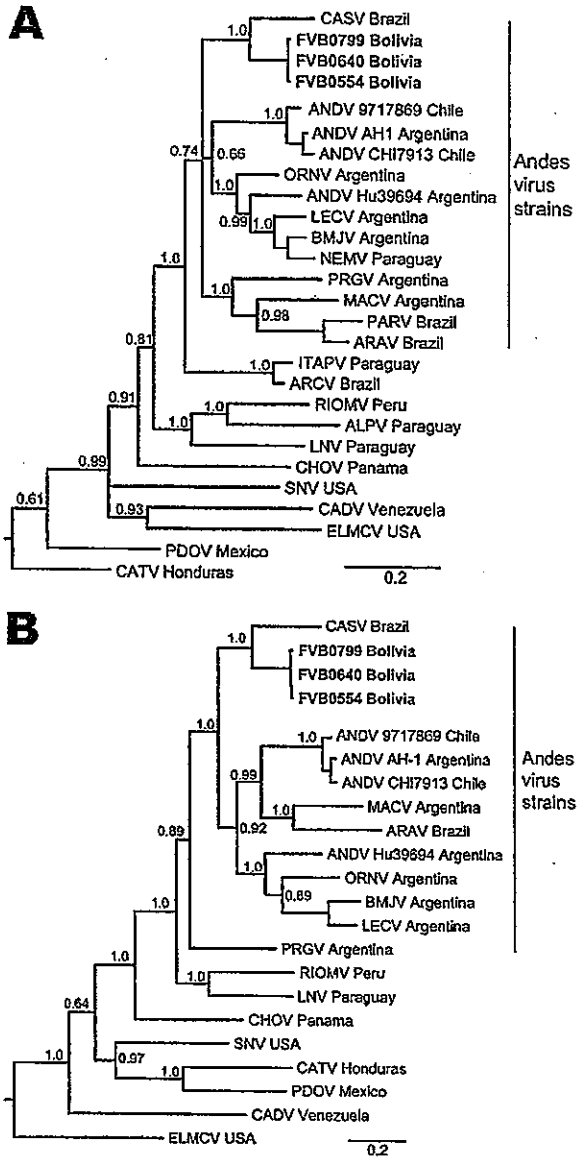


Figure 2. Phylogenetic analysis of hantaviruses from the Western Hemisphere on the basis of partial A) small and B) medium segments. Novel strains described in this study are indicated in **boldface**. Depicted phylogenetic reconstructions are based on Bayesian inference conducted in MrBayes (*29,30*). Posterior probabilities are indicated at relevant nodes. Scale bars indicate nucleotide sequence divergence. CASV, Castelo dos Sonhos virus; ANDV, Andes virus; ORNV, Oran virus; BMJV, Bermejo virus; LECV, Lechiguanas virus; BMJC, Bermejo virus; NEMV, Neembucu virus; PRGV, Pergamino virus; MACV, Maciel virus; PARV, Paranoa virus; ARAV, Araraquara virus; ITAPV, Itaporanga virus; ARCV, Araucaria virus; RIOMV, Río Mamoré virus; ALPV, Alta Paraguay virus; LNV, Laguna Negra virus; CHOV, Choclo virus; SNV, Sin Nombre virus; CADV, Caño Delgadito virus; ELMCV, El Moro Canyon virus; PDOV, El Moro Canyon virus; CATV, Catacamas virus.

Table 2. Characteristics of patients tested for IgG against Sin Nombre virus, central Bolivia*

Characteristic	No. positive/no. tested (%)
Sex	
M	28/224 (12.5)
F	32/273 (11.7)
Age, y	
18–30	28/244 (11.5)
31–50	28/207 (13.5)
≥50	4/43 (9.3)
Occupation	
Agricultural worker	25/167 (15.0)
Housewife	26/193 (13.5)
Student/teacher	3/57 (5.3)
Health professional	0/20 (0)
Other/unknown	7/62 (11.3)
Village	
Eterazama	13/116 (11.2)
Isinuta	6/71 (8.5)
Primero de Mayo	1/ 20 (5.0)
Samuzabety	13/70 (18.6)
San Gabriel	5/ 29 (17.2)
San Julian	2/24 (8.3)
Urkupina	2/22 (9.1)
Other	19/148 (12.8)
Total	61/500 (12.2)

*Complete demographic data were not available for all participants.

tissue culture were unsuccessful; thus, cross-neutralization studies could not be conducted. Genetic criteria, amino acid and nucleotide comparisons, and phylogenetic analysis clearly support inclusion of this strain in the species *Andes virus*.

No guidelines have been proposed for demarcation of viruses below the species level, and there does not appear to be consensus on the designation of novel genotypes. We observed the highest identity with CASV, which has been associated with human illness near the border of the Mato Grosso and Pará States of Brazil (*31,32*), ≈1,500 km from the Chapare study sites. We observed ≈11% and 17% divergence at the nucleotide level for the S segment and M segment, respectively, in comparison with CASV. However, the true difference between the strains might be underestimated because higher nucleotide and amino acid conservation was observed among ANDV strains overall in the limited S region available for comparison (14%), relative to other genome regions (16%). No other hantavirus was found to be <15% divergent at the nucleotide level in the S segment or <18% divergent in the M segment. If one considers that the strains identified in our study segregate with other strains of ANDV but are genetically distinct, we provisionally propose to name this novel genotype Tunari virus (TUNV), after the town of Villa Tunari, where all 3 patients sought medical attention.

On the basis of data in this report, we found that human hantavirus exposure is common in the Chapare Province. Including the 3 TUNV cases, in 2008 and 2009, >2% of febrile cases analyzed had evidence of recent hantavirus infection, which is consistent with the 4% of febrile cases reported for the region in 2005 and 2006 (*33*). In addition, the 2005 serosurvey of healthy persons indicated that a high percentage (≈12%) of adults had evidence of exposure to ≥1 hantaviruses at some time in their lives.

The extent of exposure we found is similar to that reported in neighboring Brazil, which was 13.3% in Maranhao State in northeastern Brazil (*34*) and 14.6% in southern Brazil (*35*), and in northern Argentina, which was 6.5%–17.1%, depending on the population studied (*13,36*). Occupational exposure appears to be a risk factor because the highest antibody prevalence and 2 of 3 TUNV cases were identified among agricultural workers. We did not observe an age-dependent increase in antibody prevalence among adults sampled, a finding also reported in southern Brazil (*35*). There are several possible explanations for this observation, including relatively recent emergence of hantaviruses in the region, high mortality rates among infected persons, and preponderance of risk for exposure during early adulthood.

Broad antigenic cross-reactivity that prevents discrimination among diverse hantavirus groups is 1 of the major limitations of ELISA-based serologic studies, whether used in screening febrile patients for IgM against hantaviruses or healthy persons for IgG against hantaviruses. Co-circulation of heterologous hantaviruses has been described in Bolivia in rodent reservoirs and in ill persons. RIOMV has been identified in the pigmy rice rat (*Oligoryzomys microtis*) in Bolivia (*17*). In 2000, HPS cases associated with BMJV and ANDV strain Nort were identified along the southern border of Bolivia with Argentina (*21*). LNV had been amplified from an HPS patient in Chile with recent travel history to Bolivia (*19*). In addition to these cases are many additional suspected cases of HPS in Bolivia for which no specific virus was identified. Of the 246 reported cases from 2007 through 2010, a total of 74 occurred in the Department of Cochabamba (*37*). Future studies with more specific serologic assays are necessary to determine the true extent of TUNV circulation in this population.

In this study, we made no effort to incriminate the reservoir host for TUNV. The only hantavirus reservoir identified in South America is rodents of the subfamily *Sigmodontinae*. *Oligoryzomys* spp. rodents appear to be the principal reservoirs for most ANDV variants, including CASV (*32,38*). In addition to *Oligoryzomys* spp. rodents, ANDV variants have been identified in *Akodon* spp. (PRGV), *Necromys* spp. (MACV and ARAV), and *Bolomys* spp. (MACV) rodents. Potential reservoir species are abundant in Bolivia, including *Oligoryzomys* spp., *Akodon* spp., and *Calomys* spp. (LNV) rodents. Increased rodent population density has been associated with the emergence of hantavirus infection in humans (*4*). Therefore identifying the TUNV reservoir host and understanding its

ecology could lead to interventions for reducing human exposure.

This study was supported by the US Department of Defense Global Emerging Infections Systems Research Program, Work Unit No. 847705.82000.25GB.B0016.

Dr Cruz is a medical research technologist at the US Naval Medical Research Center in Lima, Peru. His research interests include identification and characterization of vector-borne and zoonotic diseases.

References

1. Ferrés M, Vial P, Marco C, Yanez L, Godoy P, Castillo C, et al. Prospective evaluation of household contacts of persons with hantavirus cardiopulmonary syndrome in Chile. J Infect Dis. 2007;195:1563–71. http://dx.doi.org/10.1086/516786
2. Khaiboullina SF, Morzunov SP, St Jeor SC. Hantaviruses: molecular biology, evolution and pathogenesis. Curr Mol Med. 2005;5:773–90. http://dx.doi.org/10.2174/156652405774962317
3. Jonsson CB, Figueiredo L, Vapalahti O. A global perspective on hantavirus ecology, epidemiology, and disease. Clin Microbiol Rev. 2010;23:412–41. http://dx.doi.org/10.1128/CMR.00062-09
4. Klein SL, Calisher CH. Emergence and persistence of hantaviruses. Curr Top Microbiol Immunol. 2007;315:217–52. http://dx.doi.org/10.1007/978-3-540-70962-6_10
5. Milazzo ML, Duno G, Utrera A, Richter MH, Duno F, de Manzione N, et al. Natural host relationships of hantaviruses native to western Venezuela. Vector Borne Zoonotic Dis. 2010;10:605–11. http://dx.doi.org/10.1089/vbz.2009.0118
6. Fulhorst CF, Cajimat MN, Utrera A, Milazzo ML, Duno GM. Maporal virus, a hantavirus associated with the fulvous pygmy rice rat (*Oligoryzomys fulvescens*) in western Venezuela. Virus Res. 2004;104:139–44. http://dx.doi.org/10.1016/j.virusres.2004.03.009
7. Powers AM, Mercer DR, Watts DM, Guzman H, Fulhorst CF, Popov VL, et al. Isolation and genetic characterization of a hantavirus (Bunyaviridae: Hantavirus) from a rodent, *Oligoryzomys microtis* (Muridae), collected in northeastern Peru. Am J Trop Med Hyg. 1999;61:92–8.
8. Suzuki A, Bisordi I, Levis S, Garcia J, Pereira LE, Souza RP, et al. Identifying rodent hantavirus reservoirs, Brazil. Emerg Infect Dis. 2004;10:2127–34.
9. Rosa ES, Mills JN, Padula PJ, Elkhoury MR, Ksiazek TG, Mendes WS, et al. Newly recognized hantaviruses associated with hantavirus pulmonary syndrome in northern Brazil: partial genetic characterization of viruses and serologic implication of likely reservoirs. Vector Borne Zoonotic Dis. 2005;5:11–9. http://dx.doi.org/10.1089/vbz.2005.5.11
10. Raboni SM, Probst CM, Bordignon J, Zeferino A, dos Santos CN. Hantaviruses in central South America: phylogenetic analysis of the S segment from HPS cases in Paraná, Brazil. J Med Virol. 2005;76:553–62. http://dx.doi.org/10.1002/jmv.20398
11. Bohlman MC, Morzunov SP, Meissner J, Taylor MB, Ishibashi K, Rowe J, et al. Analysis of hantavirus genetic diversity in Argentina: S segment–derived phylogeny. J Virol. 2002;76:3765–73. http://dx.doi.org/10.1128/JVI.76.8.3765-3773.2002
12. Padula PJ, Colavecchia SB, Martínez VP, Gonzalez Della Valle MO, Edelstein A, Miguel SD, et al. Genetic diversity, distribution, and serological features of hantavirus infection in five countries in South America. J Clin Microbiol. 2000;38:3029–35.
13. Pini N, Levis S, Calderón G, Ramirez J, Bravo D, Lozano E, et al. Hantavirus infection in humans and rodents, northwestern Argentina. Emerg Infect Dis. 2003;9:1070–6.
14. Chu YK, Milligan B, Owen RD, Goodin DG, Jonsson CB. Phylogenetic and geographical relationships of hantavirus strains in eastern and western Paraguay. Am J Trop Med Hyg. 2006;75:1127–34.
15. Padula P, Martinez VP, Bellomo C, Maidana S, San Juan J, Tagliaferri P, et al. Pathogenic hantaviruses, northeastern Argentina and eastern Paraguay. Emerg Infect Dis. 2007;13:1211–4.
16. Medina RA, Torres-Perez F, Galeno H, Navarrete M, Vial PA, Palma RE, et al. Ecology, genetic diversity, and phylogeographic structure of Andes virus in humans and rodents in Chile. J Virol. 2009;83:2446–59. http://dx.doi.org/10.1128/JVI.01057-08
17. Bharadwaj M, Botten J, Torrez-Martinez N, Hjelle B. Rio Mamore virus: genetic characterization of a newly recognized hantavirus of the pygmy rice rat, *Oligoryzomys microtis*, from Bolivia. Am J Trop Med Hyg. 1997;57:368–74.
18. Johnson AM, Bowen MD, Ksiazek TG, Williams RJ, Bryan RT, Mills JN, et al. Laguna Negra virus associated with HPS in western Paraguay and Bolivia. Virology. 1997;238:115–27. http://dx.doi.org/10.1006/viro.1997.8840
19. Espinoza R, Vial P, Noriega LM, Johnson A, Nichol ST, Rollin PE, et al. Hantavirus pulmonary syndrome in a Chilean patient with recent travel in Bolivia. Emerg Infect Dis. 1998;4:93–5. http://dx.doi.org/10.3201/eid0401.980112
20. Carroll DS, Mills JN, Montgomery JM, Bausch DG, Blair PJ, Burans JP, et al. Hantavirus pulmonary syndrome in central Bolivia: relationships between reservoir hosts, habitats, and viral genotypes. Am J Trop Med Hyg. 2005;72:42–6.
21. Padula P, Della Valle MG, Alai MG, Cortada P, Villagra M, Gianella A. Andes virus and first case report of Bermejo virus causing fatal pulmonary syndrome. Emerg Infect Dis. 2002;8:437–9. http://dx.doi.org/10.3201/eid0804.010300
22. Forshey BM, Guevara C, Laguna-Torres VA, Cespedes M, Vargas J, Gianella A, et al. Arboviral etiologies of acute febrile illnesses in western South America, 2000–2007. PLoS Negl Trop Dis. 2010;4:e787. http://dx.doi.org/10.1371/journal.pntd.0000787
23. Instituto Nacional De Estadistica. Censo de poblacion y vivienda, 2001. 2002 [cited 2012 Feb 4]. http://www.ine.gob.bo/comunitaria/comunitariaVer.aspx?Depto=03&Prov=10&Seccion=03
24. Delgado S, Erickson BR, Agudo R, Blair PJ, Vallejo E, Albarino CG, et al. Chapare virus, a newly discovered arenavirus isolated from a fatal hemorrhagic fever case in Bolivia. PLoS Pathog. 2008;4:e1000047. http://dx.doi.org/10.1371/journal.ppat.1000047
25. Meissner JD, Rowe JE, Borucki MK, St Jeor SC. Complete nucleotide sequence of a Chilean hantavirus. Virus Res. 2002;89:131–43. http://dx.doi.org/10.1016/S0168-1702(02)00129-6
26. Tamura K, Dudley J, Nei M, Kumar S. MEGA4: Molecular Evolutionary Genetics Analysis (MEGA) software version 4.0. Mol Biol Evol. 2007;24:1596–9. http://dx.doi.org/10.1093/molbev/msm092
27. Guindon S, Lethiec F, Duroux P, Gascuel O. PHYML Online: a web server for fast maximum likelihood-based phylogenetic inference. Nucleic Acids Res. 2005;33:W557–9. http://dx.doi.org/10.1093/nar/gki352
28. Guindon S, Delsuc F, Dufayard J-F, Gascuel O. Estimating maximum likelihood phylogenies with PhyML. Methods Mol Biol. 2009;537:113–37. http://dx.doi.org/10.1007/978-1-59745-251-9_6
29. Ronquist F, Huelsenbeck JP. MrBayes 3: Bayesian phylogenetic inference under mixed models. Bioinformatics. 2003;19:1572–4. http://dx.doi.org/10.1093/bioinformatics/btg180
30. Huelsenbeck JP, Ronquist F. MRBAYES: Bayesian inference of phylogenetic trees. Bioinformatics. 2001;17:754–5. http://dx.doi.org/10.1093/bioinformatics/17.8.754

31. Johnson AM, de Souza LT, Ferreira IB, Pereira LE, Ksiazek TG, Rollin PE, et al. Genetic investigation of novel hantaviruses causing fatal HPS in Brazil. J Med Virol. 1999;59:527–35. http://dx.doi.org/10.1002/(SICI)1096-9071(199912)59:4<527::AID-JMV17>3.0.CO;2-Y
32. Medeiros DB, Travassos da Rosa ES, Aparecido AM, Simith DB, Carneiro AR, Chiang JO, et al. Circulation of hantaviruses in the influence area of the Cuiabá-Santarém Highway. Mem Inst Oswaldo Cruz. 2010;105:665–71. http://dx.doi.org/10.1590/S0074-02762010000500011
33. Loayza R, Revollo J, Vargas J. Hantavirus en el Chapare Boliviano. Revista Enfermedades Infecciosas Tropicales. 2009;1:21–3.
34. Mendes WS, da Silva AA, Aragão LF, Aragão NJ, Raposo MD, Elkhoury MR, et al. Hantavirus infection in Anajatuba, Maranhao, Brazil. Emerg Infect Dis. 2004;10:1496–8.
35. Campos GM, Moro De Sousa RL, Badra SJ, Pane C, Gomes UA, Figueiredo LT. Serological survey of hantavirus in Jardinopolis County, Brazil. J Med Virol. 2003;71:417–22. http://dx.doi.org/10.1002/jmv.10489
36. Ferrer JF, Jonsson CB, Esteban E, Galligan D, Basombrio MA, Peralta-Ramos M, et al. High prevalence of hantavirus infection in Indian communities of the Paraguayan and Argentinean Gran Chaco. Am J Trop Med Hyg. 1998;59:438–44.
37. Sistema Nacional de Información en Salud y Vigilancia Epidemiológica. Vigilancia epidemiologica. 2011 [cited 2011 Feb 27]. http://sns.gov.bo/snis
38. Travassos da Rosa ES, Medeiros DB, Nunes MR, Simith DB, de Souza Pereira A, Elkhoury MR, et al. Pygmy rice rat as potential host of Castelo dos Sonhos hantavirus. Emerg Infect Dis. 2011;17:1527–30.

Address for correspondence: Brett M. Forshey, US Naval Medical Research Center Detachment, 3230 Lima Pl, Washington, DC 20521-3230, USA; email: brett.forshey@gmail.com

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 6. 22	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Boone I, Wagner-Wiening C, Reil D, Jacob J, Rosenfeld U, Ulrich R, Lohr D, Pfaff G. Euro Surveill. 2012 May 24;17(21). pii: 20180.	公表国
販売名(企業名)	赤十字アルブミン20(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25(日本赤十字社) 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL(日本赤十字社) 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL(日本赤十字社)			ドイツ

研究報告の概要

○ドイツのバーデン－ヴュルテンベルク州における2011年10月からのヒトハンタウイルス感染症報告数の増加

2011年10月から2012年8月、852件のヒトハンタウイルス(プーマラウイルス)感染症がドイツで報告され、そのうち580件(68%)がバーデン－ヴュルテンベルク州で発生した。症例数は2007年及び2010年のアウトブレイクの時よりも早く増加し始め、例年の10月－4月期における報告数の中で最多であった。

プーマラウイルスは保有宿主であるハタネズミの排泄物への曝露によりヒトに伝播し、2～4週間の潜伏期後に流行性腎症を引き起こす。ドイツでの2001年～2011年のハンタウイルス感染年間届出数は72～447件(中央値235件;2007年と2010年のアウトブレイクを除く)であった。2012年第17週の最新報告数は87件であり、歴史的な最多報告数である2007年第22週の96件にほぼ到達している。

症例数急増の原因は不明であるが、気候要因と、恐らく2011年のブナの繁茂によるハタネズミの増加に関連すると推定されている。2012年夏季期間にさらなる症例数増加が見込まれるため、予防対策のためのさらなる情報が必要とされる。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
ドイツで例年の同時期に比べヒトハンタウイルス(プーマラウイルス)感染症が急増しており、その大部分がバーデン－ヴュルテンブルク州からの症例であるとの報告である。 ハンタウイルスは脂質膜を有するRNAウイルスである。これまで、本製剤によるハンタウイルス感染の報告はない。本製剤の製造工程には、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿ったウイルス・プロセスバリデーションによって検証された2つの異なるウイルス除去・不活化工程が含まれていることから、本製剤の安全性は確保されていると考える。	日本赤十字社では、輸血感染症対策として問診時に海外滞在歴の有無を確認し、帰国(入国)後4週間は献血不適としている。また、発熱などの体調不良者を献血不適としている。今後も引き続き、新興・再興感染症の発生状況等に関する情報の収集に努める。

RAPID COMMUNICATIONS

Rise in the number of notified human hantavirus infections since October 2011 in Baden-Württemberg, Germany

I Boone (ides.boone@rps.bwl.de)[1,2], C Wagner-Wiening[1], D Reil[3], J Jacob[3], U M Rosenfeld[4], R G Ulrich[4], D Lohr[1], G Pfaff[1]
1. Baden-Württemberg State Health Office, Epidemiology and Health Reporting, Stuttgart, Germany
2. European Programme for Intervention Epidemiology Training (EPIET), European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC), Stockholm, Sweden
3. Julius Kühn-Institute, Federal Research Centre for Cultivated Plants, Institute for Plant Protection in Horticulture and Forestry, Münster, Germany
4. Friedrich-Loeffler-Institute, Federal Research Institute for Animal Health, Institute for Novel and Emerging Infectious Diseases, Greifswald - Insel Riems, Germany

Citation style for this article:
Boone I, Wagner-Wiening C, Reil D, Jacob J, Rosenfeld UM, Ulrich RG, Lohr D, Pfaff G. Rise in the number of notified human hantavirus infections since October 2011 in Baden-Württemberg, Germany. Euro Surveill. 2012;17(21):pii=20180. Available online: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=20180

Article submitted on 21 May 2012 / published on 24 May 2012

From October 2011 to April 2012, 852 human hantavirus infections were notified in Germany, of which 580 (68%) were in Baden-Württemberg. Case numbers started to rise earlier than they did before the previous outbreaks in 2007 and 2010, and are the largest ever reported in this state during October to April of any year. The early rise could be due to a beech mast year in 2011, followed by an early and massive reproduction of the reservoir bank vole populations during winter 2011 and spring 2012.

Outbreak description

From October 2011 to April 2012 (reporting weeks 40 2011 to week 17 2012, ending 27 April 2012), 852 cases of hantavirus infections meeting the national case definition [1,2] were notified in Germany (cumulative incidence: 1.04 per 100,000 population) [3]. Of these, 580 cases (68%) originated in the southern federal state of Baden-Württemberg (cumulative incidence: 5.4 per 100,000 population) (Table). This count exceeds the number of cases observed during the months October to April that preceded the outbreaks in 2007 (172 cases) and in 2010 (327 cases) in the same state (Table). We report on this ongoing outbreak in Baden-Württemberg, taking into consideration cases notified from October 2011 to April 2012.

Background

Puumala virus is the predominant human pathogenic hantavirus species in western, central and northern Europe [4]. It is transmitted to humans by exposure to excreta of its rodent reservoir, bank voles *(Myodes glareolus)* [5]. After an incubation period of usually two to four weeks [6], typical clinical manifestations include a sudden onset with fever, headache, back pain and gastrointestinal symptoms. Renal involvement is prominent and manifests initially as oliguria and later as marked polyuria (nephropathia epidemica) [7]. Only 30% of Puumala virus infections occur with typical clinical signs, resulting in high under-reporting [8]. There is currently no specific antiviral treatment [4]. Recommended prevention measures focus on the avoidance of exposure and inhalation of potentially contaminated dust [9].

In Germany, laboratory-confirmed cases of hantavirus infections have been notifiable since 2001 [1,10]. Between 2001 and 2011, the number of annual notifications ranged from 72 to 447, with a median of 235, except for two outbreaks in 2007 (1,688 cases) and 2010 (2,107 cases) [11]. From November 2011 to February 2012, the Robert Koch Institute observed an increase in the number of cases notified in Germany compared with the mean in the same period in the five preceding years, from 2006/2007 to 2010/2011. Some 64% of these cases were reported from Baden-Württemberg [11].

Figure 1 represents the temporal distribution of cases in Baden-Württemberg from reporting week 40 in 2011 until reporting week 17 in April 2012, in comparison with the outbreak periods of 2006–2007 and 2009–2010. The current outbreak period 2011–2012 is characterised by an early increase of cases, which started already in October 2011. In the last reported week in 2012 (week 17), the number of cases (n=87) has almost reached the historical weekly maximum of the 2007 outbreak year (96 cases in week 22).

Figure 2 shows the geographical distribution of cases in Baden-Württemberg. Some 45% of all cases (n=580) were reported from five of the 44 counties of Baden-Württemberg. These counties are in the central part of the state, comprising the city of Stuttgart (n=65; incidence: 10.7 per 100,000 population), Tübingen (n=34; incidence: 15.4 per 100,000 population),

TABLE

Number and incidence of notified cases of hantavirus infection in each federal state, Germany, 2001–2012

State	2001–2006		2007		2008	2009	2010		2011		2012	
	Median annual number of cases (range)	Median annual incidence (range)	Number of cases (incidence per 100,000 population)									
			Winter[a]	Annual	Annual	Annual	Winter[a]	Annual	Winter[a]	Annual	Winter[a]	2012 until week 17[b]
Baden-Württemberg	87.5 (22–164)	1.02 (0.55–1.54)	172 (1.6)	1,090 (10.14)	74 (0.69)	83 (0.77)	327 (3.04)	998 (9.28)	61 (0.57)	128 (1.19)	580 (5.39)	501 (4.66)
Bavaria	23.5 (12–61)	0.24 (0.14–0.49)	38 (0.31)	296 (2.36)	41 (0.33)	21 (0.17)	86 (0.68)	437 (3.49)	45 (0.36)	46 (0.37)	65 (0.52)	43 (0.34)
Berlin	1 (0–2)	0.03 (0–0.06)	1 (0.03)	1 (0.03)	3 (0.09)	0 (0)	0 (0)	3 (0.09)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
Brandenburg	0 (0–3)	0 (0–0.12)	1 (0.04)	4 (0.16)	3 (0.12)	0 (0)	0 (0)	2 (0.08)	2 (0.08)	6 (0.24)	4 (0.16)	0 (0)
Bremen	0 (0–1)	0 (0–0.15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.15)	1 (0.15)	0 (0)	1 (0.15)	1 (0.15)
Hamburg	0 (0–1)	0 (0–0.06)	0 (0)	3 (0.17)	1 (0.06)	2 (0.11)	1 (0.06)	0 (0)	1 (0.06)	1 (0.06)	0 (0)	0 (0)
Hesse	10.5 (4–34)	0.21 (0.08–0.56)	3 (0.05)	27 (0.44)	12 (0.2)	4 (0.07)	31 (0.52)	174 (2.87)	10 (0.16)	13 (0.21)	23 (0.38)	19 (0.31)
Mecklenburg-Vorpommern	4 (1–8)	0.23 (0.23–0.46)	2 (0.12)	11 (0.65)	11 (0.66)	12 (0.73)	8 (0.48)	11 (0.67)	5 (0.3)	5 (0.3)	5 (0.3)	1 (0.06)
Lower Saxony	8 (3–75)	0.13 (0.04–0.94)	12 (0.16)	93 (1.17)	18 (0.23)	16 (0.2)	34 (0.43)	123 (1.55)	18 (0.23)	23 (0.29)	48 (0.6)	36 (0.45)
North Rhine-Westphalia	29.5 (18–143)	0.17 (0.11–0.79)	22 (0.12)	124 (0.69)	61 (0.34)	32 (0.18)	57 (0.32)	156 (0.87)	24 (0.13)	62 (0.35)	86 (0.49)	60 (0.34)
Rhineland-Palatinate	2.5 (2–10)	0.07 (0.05–0.25)	1 (0.02)	11 (0.27)	4 (0.1)	1 (0.02)	2 (0.05)	28 (0.7)	4 (0.09)	7 (0.17)	11 (0.27)	9 (0.22)
Saarland	0 (0–1)	0 (0–0.09)	0 (0)	2 (0.19)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)	1 (0.1)
Saxony	1 (0–2)	0.02 (0–0.05)	0 (0)	5 (0.12)	1 (0.02)	0 (0)	2 (0.05)	3 (0.07)	1 (0.02)	3 (0.07)	7 (0.16)	6 (0.14)
Saxony-Anhalt	1.5 (0–3)	0.08 (0.04–0.12)	0 (0)	3 (0.12)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)	6 (0.26)	1 (0.04)	1 (0.04)	4 (0.17)	4 (0.17)
Schleswig-Holstein	1.5 (0–7)	0.04 (0–0.25)	3 (0.11)	10 (0.35)	6 (0.21)	9 (0.32)	6 (0.22)	11 (0.39)	7 (0.25)	6 (0.21)	3 (0.11)	1 (0.04)
Thuringia	2 (0–14)	0.12 (0.04–0.6)	1 (0.04)	8 (0.35)	7 (0.31)	0 (0)	4 (0.18)	63 (2.82)	4 (0.17)	4 (0.18)	14 (0.62)	11 (0.49)
Total	**205 (72–447)**	**0.28 (0.17–0.54)**	**256 (0.31)**	**1,688 (2.05)**	**243 (0.3)**	**181 (0.22)**	**559 (0.68)**	**2,017 (2.47)**	**184 (0.23)**	**305 (0.37)**	**852 (1.04)**	**693 (0.85)**

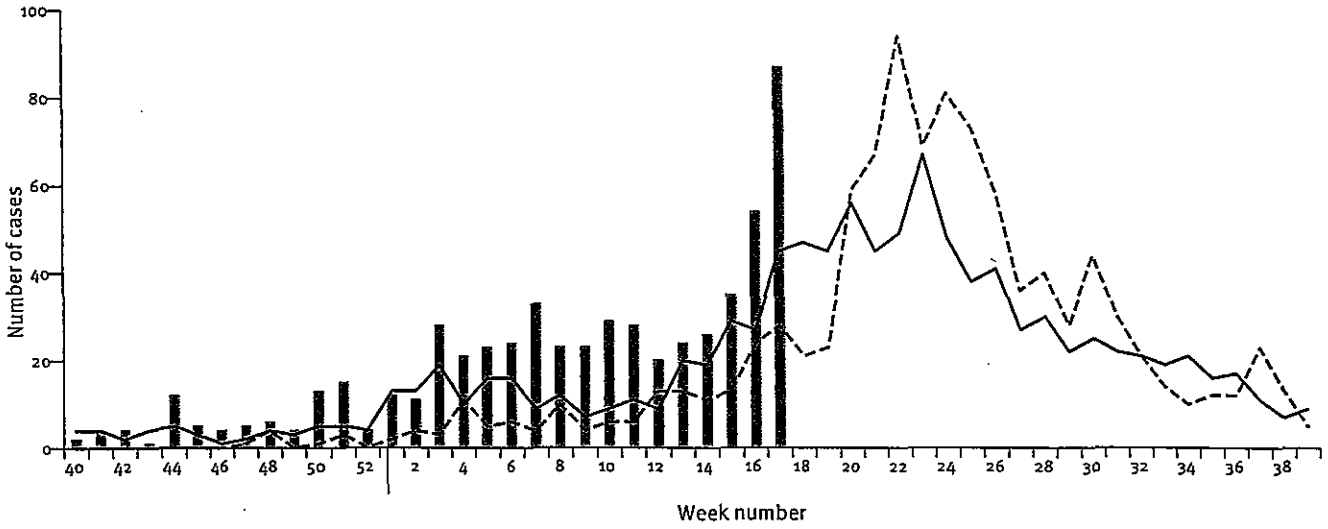
[a] Winter is used to describe the period from week 40 of the preceding year to week 17, a period that coincides with the annual influenza season in Germany.

[b] Ending 27 April 2012.

Source: Robert Koch Institute [2], as of 16 May 2012.

FIGURE 1

Cases of hantavirus infection by week of reporting, Baden-Württemberg, Germany, October (week 40) 2011–April (week 17) 2012 and weeks 1–39 for outbreak years 2007 and 2010, and from week 40 in 2006 and 2009 (years preceding outbreaks)

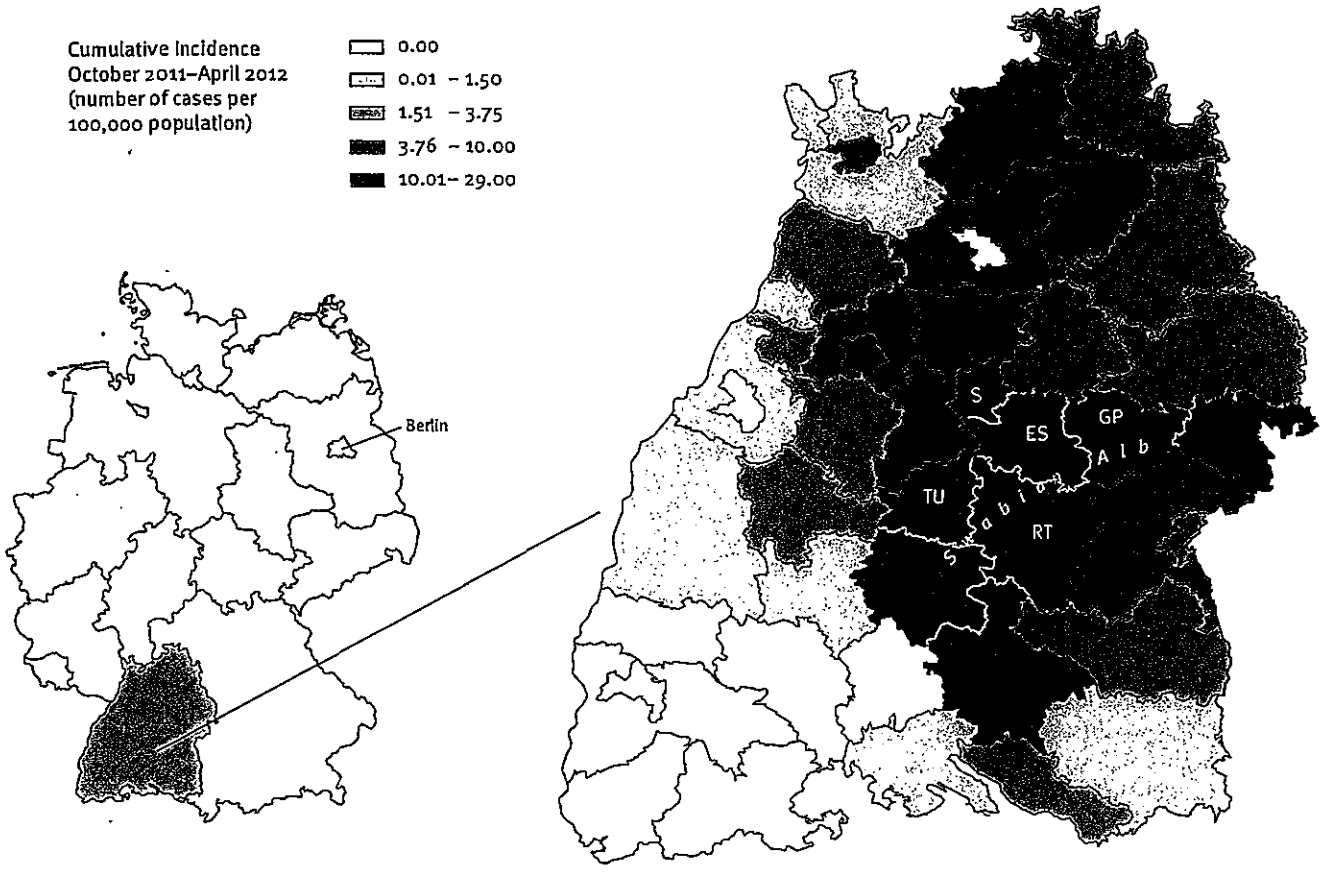


The bars show the number of cases reported during 3 October 2011 to 27 April 2012 (n=580). The broken line shows the number of cases from week 40 2006 to week 39 2007. The continuous line shows the number of cases from week 40 2009 to week 39 2010.

Source: Robert Koch Institute [2], as of 16 May 2012.

FIGURE 2

Geographical distribution of cases of hantavirus infection, by county and cumulative incidence, Baden-Württemberg, Germany, 3 October (reporting week 40) 2011–27 April (week 17) 2012 (n=580)



ES: Esslingen; GP: Göppingen; RT: Reutlingen; S: Stuttgart; TU: Tübingen.

Source: Robert Koch Institute [2], as of 16 May 2012.

Esslingen (n=53; incidence: 10.3 per 100,000 population), Reutlingen (n=62; incidence: 22.1 per 100,000 population) and Göppingen (n=71; incidence: 28.1 per 100,000 population). The last four counties are located in a hantavirus-endemic area lining the Swabian Alb, a low limestone mountain range covered by small forests and fields. Within all five counties, the cases were clustered in several municipalities (data not shown).

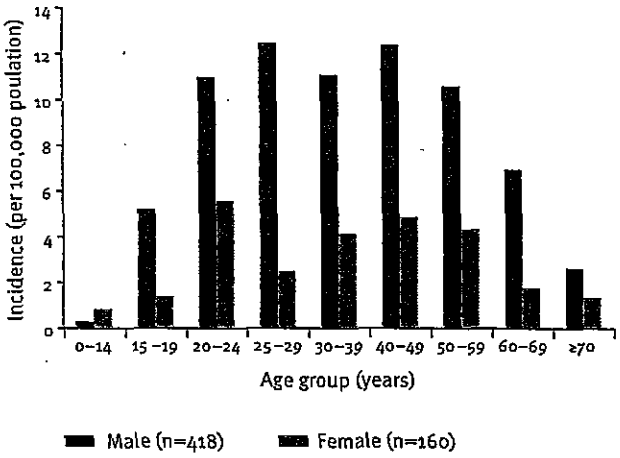
Of all the cases notified in Baden-Württemberg, 72% were male (418 of 578 cases with information on sex reported). The highest incidences were observed among persons between 20 and 59 years (Figure 3).

On the basis of preliminary data, the most common symptoms reported were fever (86%), renal impairment (75%), headache (51%) and back pain (23%). Some 69% of all cases were hospitalised. Where indicated (in 52% of the hospitalised cases), the median length of stay in hospital was five days (range: 1–20). No deaths were reported.

Information related to potential exposure was available for 39% of the cases. Most frequently mentioned were cutting and piling wood, spending time in a forest for leisure (hiking, hunting) or forestry work, contact with rodents or rodent excreta, especially during cleaning in barns, sheds, attics, cellars, garden houses, garages, etc.

FIGURE 3

Cumulative incidence of cases of hantavirus infection by age group and sex, Baden-Württemberg, Germany, 3 October (reporting week 40) 2011–27 April (week 17) 2012 (n=578)[a]



[a] Cases with information on sex reported.
Source: Robert Koch Institute [2], as of 16 May 2012.

Discussion

Previous outbreaks of hantavirus infection in Baden-Württemberg in 2007 and in 2010 started in the first months of the year and peaked from May to June [11]. The early and intense increase in case numbers since October 2011 is without precedence. Early in 2012, the public was informed of the outbreak and recommended prevention measures [12,13] via media releases published state-wide on 13 January and 9 March 2012. Updated releases were also disseminated to local community-based media and physicians. However, data on the public's knowledge and the effectiveness of preventive measures against Puumala virus infections are lacking and are the subject of a separate study.

The causes for the early increase of case numbers remain unclear. Current hypotheses relate the rising incidence of Puumala virus infections to changes in the population density of bank voles, due to climatic factors [12] and possibly to the beech mast in 2011. During mast years, deciduous trees produce exceptionally high quantities of seeds, an important food source for bank voles [14]. Mast years and hantavirus outbreaks appear to be associated [15,16]. In Baden-Württemberg, the beech mast years of 2006 and 2009 were followed by outbreaks of human hantavirus infections in 2007 and 2010. Last year (2011) was again an exceptional mast year [17], followed by a remarkably mild winter [18]. This may have promoted winter survival and reproduction of bank vole populations.

Since spring 2010, the Julius Kühn-Institute (Federal Research Centre for Cultivated Plants) and Friedrich-Loeffler-Institute (Federal Research Institute for Animal Health) have been conducting monitoring studies in an area of Böblingen County, Baden-Württemberg, an endemic region for hantavirus. Trapping results showed a peak mean bank vole population density of 63±46 individuals per hectare (N±standard error/ha) in October 2011. In April 2012, the mean bank vole population density had increased to 76±23/ha (D. Reil, unpublished data). This study indicated considerable recruitment of bank voles, either through winter reproduction or migration. Serological and molecular studies in bank voles from this monitoring site demonstrated a continuous presence of Puumala virus during 2010 and 2011 and an increased Puumala virus seroprevalence in spring 2012 (U.M. Rosenfeld, unpublished data).

We anticipate a further increase in cases numbers during summer 2012. This necessitates additional public service information on prevention measures. Further studies have been initiated to correlate habitat factors of the bank vole reservoir with human exposure and behavioural data, to better understand the reasons for this early increase in case numbers. They will also examine possibilities for preventive measures that can be more efficiently communicated – and are at the same time effective and acceptable – to the population at risk.

Acknowledgments

The authors kindly thank Marion Muehlen (European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC)), Pawel Stefanoff (ECDC), Christina Frank and Klaus Stark (Robert Koch Institute, Berlin) for their constructive comments in reviewing the manuscript.

References

1. Robert Koch Institute (RKI). Falldefinitionen des Robert Koch-Instituts zur Übermittlung von Erkrankungs- oder Todesfällen und Nachweisen von Krankheitserregern. [Case definitions for the surveillance of notifiable infectious diseases in Germany]. Berlin: RKI; 2007. [Accessed 13 May 2012]. German. Available from: http://www.rki.de/DE/Content/Infekt/IfSG/Falldefinition/falldefinition_node.html#doc2374714bodyText
2. Winter CH, Brockmann SO, Piechotowski I, Alpers K, an der Heiden M, Koch J, et al. Survey and case-control study during epidemics of Puumala virus infection. Epidemiol Infect. 2009;137(10):1479-85.
3. Robert Koch Institute (RKI). SurvStat@RKI. Berlin: RKI. [Accessed 16 May 2012]. German. Available from: http://www3.rki.de/SurvStat
4. Vaheri A, Henttonen H, Voutilainen L, Mustonen J, Sironen T, Vapalahti K. Hantavirus infections in Europe and their impact on public health. Rev Med Virol. 2012. Forthcoming.
5. Schönrich G, Rang A, Lutteke N, Raftery MJ, Charbonnel N, Ulrich RG. Hantavirus-induced immunity in rodent reservoirs and humans. Immunol Rev. 2008;225:163-89.
6. Heymann DL, editor. Control of communicable diseases manual. 19th ed. Washington, DC: American Public Health Association; 2008.
7. Settergren B. Clinical aspects of nephropathia epidemica (Puumala virus infection) in Europe: a review. Scand J Infect Dis. 2000;32(2):125-32.
8. Brummer-Korvenkontio M, Vapalahti O, Henttonen H, Koskela P, Kuusisto P, Vaheri A. Epidemiological study of nephropathia epidemica in Finland 1989-96. Scand J Infect Dis. 1999;31(5):427-35.
9. Faber MS, Ulrich RG, Frank C, Brockmann SO, Pfaff GM, Jacob J, et al. Steep rise in notified hantavirus infections in Germany, April 2010. Euro Surveill. 2010;15(20):pii=19574. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19574
10. Faensen D, Claus H, Benzler J, Ammon A, Pfoch T, Breuer T, et al. SurvNet@RKI--a multistate electronic reporting system for communicable diseases. Euro Surveill. 2006;11(4):pii=614. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=614
11. Robert Koch Institute. Abteilung für Infektionsepidemiologie. Hantavirus-Erkrankungen: Hinweise auf Anstieg der Fallzahlen in 2012. [Hantavirus diseases: evidence for a rise of case numbers in 2012]. Epidemiologisches Bulletin. 2012;(10):79-81. German. Available from: http://www.rki.de/DE/Content/Infekt/EpidBull/Archiv/2012/Ausgaben/10_12.pdf;jsessionid=16803D46D070418B4013497FCA4DB8CA.2_cid238?__blob=publicationFile
12. Jacob J, Reil D, Imholt C, Rosenfeld UM, Schmidt S, Ulrich RG, et al. Hantaviren 2012. Anstieg der Infektionen möglich. [Hantaviruses 2012: a rise in the number of infections is possible]. AFZ-Der Wald. 2012;1:36-37. German. Available from: http://www.zoonosen.net/DesktopModules/Bring2mind/DMX/Download.aspx?Method=attachment&Command=Core_Download&EntryId=14816&PortalId=24
13. Robert Koch Institute (RKI) /Charité Universitätsmedizin Berlin /Friedrich-Loeffler-Institute (FLI) /Julius Kühn-Institute (JKI). Informationen zur Vermeidung von Hantavirus-Infektionen. [Information for the prevention of hantavirus infections]. Berlin: RKI; 2010. German. Available from: http://www.charite.de/virologie/hantapraev.pdf
14. Schwarz AC, Ranft U, Piechotowski I, Childs JE, Brockmann SO. Risk factors for human infection with Puumala virus, southwestern Germany. Emerg Infect Dis. 2009;15(7):1032-9.
15. Tersago K, Verhagen R, Servais A, Heyman P, Ducoffre G, Leirs H. Hantavirus disease (nephropathia epidemica) in Belgium: effects of tree seed production and climate. Epidemiol Infect. 2009;137(2):250-6.
16. Clement J, Vercauteren J, Verstraeten WW, Ducoffre G, Barrios JM, Vandamme AM, et al. Relating increasing hantavirus incidences to the changing climate: the mast connection. Int J Health Geogr. 2009;8(1):1.
17. Meining S, v. Wilpert K, Augustin N, Kramer P. Waldzustandsbericht 2011 für Baden-Württemberg. [Forest status report 2011 for Baden-Württemberg]. Freiburg: Forstliche Versuchs- und Forschungsanstalt Baden-Württemberg (FVA); 2011. German. Available from: http://www.wald-und-forst.de/waldzustandsberichte2011/wzb_2011_bw.pdf
18. Deutscher Wetterdienst. The weather in Germany in the winter 2011/12. A wet and relatively mild winter – in spite of an exceptionally cold period at the start of February. Press release. Date of issue 08/03/2012. Available from: http://www.dwd.de/bvbw/generator/DWDWWW/Content/Presse/Pressemitteilungen/2012/20120308__DeutschlandwetterWinter2011bis2012__e,templateId=raw,property=publicationFile.pdf/20120308_DeutschlandwetterWinter2011bis2012_e.pdf

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 7. 6	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況		公表国
販売名（企業名）	赤十字アルブミン20（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25（日本赤十字社） 赤十字アルブミン5％静注12.5g/250mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20％静注4g/20mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20％静注10g/50mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25％静注12.5g/50mL（日本赤十字社）		Promed 20120713.1200936	WHO

研究報告の概要

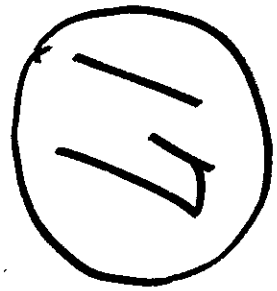
○幼児における原因不明の致死性疾患ーカンボジア：WHOの声明
カンボジアで多くの幼児に影響を及ぼした疾患及び死亡の調査によると、保健省に報告された大部分の症例の原因は、手足口病（HFMD）の重症型であるという結論に至った。合計31人の患者サンプルが、カンボジアのパスツール研究所において検査された。これらのサンプルの多くがHFMDの原因であるエンテロウイルス71（EV-71）陽性であった。いくつかのサンプルは、ヘモフィルスインフルエンザB型及びブタレンサ球菌を含む他の病原体の陽性反応も示した。適切なサンプルを採取する前に一部の患者は亡くなったため、全患者の検査を行う事は不可能であった。
調査では合計78症例が確認された。これらのうち基準を満たした61症例（そのうち54人は死亡）に焦点を当てて調査を行った。これによると、大部分の患者は3歳以下で、異なる14州から報告があり、数人の患者は慢性状態であることが分かった。症例のうちの多くは、発症中のある時期にステロイド治療が行われた。ステロイド治療はEV-71患者の症状を悪化させるようであった。WHOや関連機関の援助を受け、保健省は2012年4月以降の入院患児の疾患数や死亡数の調査を継続するとともに、保健センターに全てのHFMD患者を報告するよう指示し、EV-71によるHFMD患者に見られる神経・呼吸器症候群のサーベイランスを強化した。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5％静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20％静注4g/20mL
赤十字アルブミン20％静注10g/50mL
赤十字アルブミン25％静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
カンボジアで多くの幼児に影響を及ぼした致死性疾患の原因は、エンテロウイルス71（EV-71）による手足口病の重症型であるという結論に至った。 EV-71は、脂質膜のないRNAウイルスである。これまで、本剤によるEV-71感染の報告はない。本剤の製造工程には、平成11年8月30日付医薬発第1047号に沿ったウイルス・プロセスバリデーションによって検証された2つ以上の異なるウイルス除去・不活化工程が含まれていることから、本剤の安全性は確保されていると考えられる。	日本赤十字社では、発熱などの体調不良者を献血不適としている。また、手足口病の場合は完全に治癒して一定期間が経過するまで採血不可としている。 本剤の安全性は確保されていると考えるが、念のため今後も情報収集に努める。



Published Date: 2012-07-13 16:15:03
Subject: PRO/EDR> Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (07): WHO statement
Archive Number: 20120713.1200936

UNDIAGNOSED ILLNESS, FATAL, CHILD - CAMBODIA (07): WORLD HEALTH ORGANISATION STATEMENT
****

A ProMED-mail post
http://www.promedmail.org
ProMED-mail is a program of the
International Society for Infectious Diseases
http://www.isid.org

Date: Fri 13 Jul 2012

urce: World Health Organisation (WHO), CSR, Disease Outbreak News [edited]

http://www.who.int/csr/don/2012_07_13/en/index.html

Severe complications of HFMD caused by EV-71 in Cambodia

The investigation into the illnesses and deaths in Cambodia, which mainly affected very young children, concluded that a severe form of hand, foot and mouth disease (HFMD) was the cause in the majority of cases reported to the Ministry of Health.

Samples from a total of 31 patients were obtained and tested for a number of pathogens by Institut Pasteur du ambodge. Most of these samples tested positive for enterovirus 71 (EV-71) which causes HFMD. A small proportion of mples also tested positive for other pathogens including _Haemophilus influenzae_ type B and _Streptococcus suis_. It was not possible to test all the patients as some of them died before appropriate samples could be taken.

The investigation included:

- a thorough review of the hospital records of the patients from Kantha Bhopa hospital as well as from other hospitals;

- laboratory tests;

- active follow-up with the affected families by the local Rapid Response Teams (RRT); and

- evaluation of the data from the national surveillance system.

A total of 78 cases were identified. These included the initial 62 cases reported by Kantha Bopha hospital, and cases reported from other hospitals. Of these, the investigation focused on 61 cases that fitted a specific criteria (the case definition), and of which 54 had died. The investigation revealed that most of the cases were under 3 years of age, from 14 different provinces, with some suffering from chronic conditions. A significant number of cases had been treated with steroids at some point during their illness. Steroid use has been shown to worsen the condition of patients with EV-71.

The Ministry of Health, with support from WHO and partners, which included Institut Pasteur du Cambodge and the US

Centers for Disease Control and Prevention, conducted the investigation following reports from Kantha Bopha Children's hospital of unusual numbers of illness and deaths among children hospitalised since April 2012.

In response to this event, health centers have been instructed by the Ministry of Health to report all patients with HFMD. In addition, the Ministry of Health, assisted by the WHO, has begun enhanced surveillance for neuro-respiratory syndrome, a key syndrome observed among patients with severe HFMD caused by EV-71. It is expected that the enhanced surveillance will identify occasional new cases of the severe form of the disease in the coming months.

In addition, the Ministry of Health is developing guidelines and training courses for staff to manage patients with mild and severe forms of HFMD. A campaign to raise awareness on the prevention, identification and care of children with HFMD is underway.

--

Communicated by:

ProMED-mail Rapporteur Marianne Hopp

[This statement from the WHO now acknowledges that human enterovirus 71 infection has been associated with a neuro-respiratory syndrome observed among a proportion of young children hospitalised with with severe HFMD. The investigation revealed that most of the cases were under 3 years of age and had been referred from 14 different provinces. Inappropriate treatment with steroids many have contributed to the deaths of some of the children.

In the absence of an appropriate vaccine, or specific medication, attention must now shift to treatment options and general improvements in child care and social conditions. It seems likely that this situation is not confined to Cambodia, but is a common problem wherever enterovirus 71 is prevalent (e.g., see: Hand, foot & mouth disease - Viet Nam (11), ProMED-mail archive number 20120712.1199237).

The HealthMap interactive map of Cambodia can be accessed at: http://healthmap.org/r/2g4s. - Mod.CP]

See Also

Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (06): pathogen mix 20120711.1198162
Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (05): EV71 treatment options 20120711.1197882
Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (04): EV71, WHO 20120709.1195264
Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (03): EV71 20120708.1193960
Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia (02) 20120707.1193413
Undiagnosed illness, fatal, child - Cambodia: RFI 20120704.1190037
Hand, foot & mouth disease - China 20120707.1193364
Hand, foot & mouth disease - Worldwide 20120701.1186614]
.....cp/ejp/lm

別紙様式第 2-1
番号 7

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 7 月 10 日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄
一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン		研究報告の公表状況	WHO/2012/07/09	公表国 カンボジア	
販売名 （企業名）	①献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL　(ベネシス) ②献血ヴェノグロブリン IH5%静注 1g/20mL　(ベネシス) ③献血ヴェノグロブリン IH5%静注 2.5g/50mL　(ベネシス) ④献血ヴェノグロブリン IH5%静注 5g/100mL　(ベネシス) ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　(ベネシス) ⑥グロブリン筋注 450mg/3mL「ベネシス」　(ベネシス) ⑦グロブリン筋注 1500mg/10mL「ベネシス」　(ベネシス)					

研究報告の概要

カンボジアにける診断未確定の病気－最新情報

2012 年 7 月 9 日ー診断未確定の病気の継続調査の一環として、カンボジア王国の保健省は全ての疑わしい入院症例の見直しを終えた。この最終報告は 2012 年 4 月から 7 月 5 日までの間に、更に 2 症例を加え、影響を受けた子供の総数は 59 人になり、52 人が死亡した。症例の年齢は 3 箇月から 11 歳までの範囲で、大多数が 3 歳未満であった。全体の男女比は、1.3:1 であった。
多くの症例は適切なサンプルを採取する前に死亡したため、入手できなかった。最新の検査結果によれば、サンプルの多くは、手足口病(HFMD)を引き起こすエンテロウイルス 71(EV-71)に対して陽性反応を示した。
EV-71 ウイルスは一般に一部の患者の中で重症合併症を引き起こすことが知られていた。その上、デング熱とブタ連鎖球菌を含む幾つかの他の病原体は、幾つかの検体で確認された。検体は H5N1 と他のインフルエンザウイルス、SARS 並びにニパに対して陰性であることが分かった。臨床、検査室及び疫学的情報に一致する更なる調査は進行中で、数日以内に結論を出す見込みである。
WHO とカンボジアのパスツール研究所及び米国疾病管理予防センターを含む パートナーは、この事象で保健省を援助している。政府は市民に良い衛生実践の認識（頻繁な手洗いを含む）も強化している。

手足口病に関する若干の事実：

（ 略 ）

現在、HFMD に利用できる特別な治療はない。患者は沢山の水や他の体を飲むべきで、症状の治療を必要としてもよい。医療提供者は症状に従って患者を治療し、ステロイドの使用を差し控えるよう忠告される。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

代表として献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL の記載を示す。
2. 重要な基本的注意
(1)本剤の原材料となる献血者の血液については、HBs 抗原、抗 HCV 抗体、抗 HIV-1 抗体、抗 HIV-2 抗体及び抗 HTLV-I 抗体陰性で、かつ ALT (GPT) 値でスクリーニングを実施している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV 及び HCV について核酸増幅検査 (NAT) を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該 NAT の検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した血漿を原料として、Cohn の低温エタノール分画で得た画分からポリエチレングリコール 4000 処理、DEAE セファデックス処理等により人免疫グロブリンを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において 60℃、10 時間の液状加熱処理、ウイルス除去膜によるろ過処理及び pH3.9～4.4 の条件下での液状インキュベーション処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

報告企業の意見	今後の対応
本報告の後、7 月 13 日付で WHO は「エンテロウイルス 71（EV-71）が原因の手足口病の重度の合併症」と結論付けた。 エンテロウイルス（enterovirus：EV）はピコルナウイルス科のエンベロープのない一本鎖 RNA ウイルスである（大きさは 18～25nm と 27～30nm）。腸管内で増殖するウイルスの総称のため、腸管ウイルスともいい、経口或いは糞口感染する。万一、EV が原料血漿に混入したとしても、EMC をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、本剤の製造工程において不活化・除去されると考えている。 デングウイルス（dengue virus）は、フラビウイルス科フラビウイルス属に属する直径 40～50nm のエンベロープを有する球形の RNA ウイルスで、血清型の違いから D1、D2、D3、D4 の 4 種類があり、主としてネッタイシマカによって媒介される。万一、原料血漿にデングウイルスが混入したとしても、BVD をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、本剤の製造工程において不活化・除去されると考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

World Health Organization

Global Alert and Response (GAR)

Undiagnosed illness in Cambodia - update

9 JULY 2012 - As part of the continuing investigations into the undiagnosed illness, the Ministry of Health of the Kingdom of Cambodia is finalizing the review of all suspected hospitalised cases. This final review added an additional two cases between April to 5 July 2012, making the total number of children affected to be 59. Of these, 52 have died.

The age of the cases range from three months to 11 years old, with the majority being under three years old. The overall male: female ratio is 1.3:1.

Laboratory samples were not available for the majority of the cases as they died before appropriate samples could be taken.

Based on the latest laboratory results, a significant proportion of the samples tested positive for enterovirus 71 (EV-71), which causes hand foot and mouth disease (HFMD). The EV-71 virus has been known to generally cause severe complications amongst some patients.

Additionally, a number of other pathogens, including dengue and *streptococcus suis* were identified in some of the samples. The samples were found to be negative for H5N1 and other influenza viruses, SARS and Nipah.

Further investigations into matching the clinical, laboratory and epidemiological information are ongoing, and are likely to be concluded in a few days.

WHO and partners, which include Institut Pasteur du Cambodge and US Centers for Disease Control and Prevention, are assisting the Ministry of Health with this event.

The Government is also reinforcing awareness of good hygiene practices to the public, which includes frequent washing of hands.

Some facts on hand foot and mouth disease:

Hand foot and mouth disease (HFMD) is a common infectious disease of infants and children. The symptoms commonly observed include fever, painful sores in the mouth, and a rash with blisters on hands, feet and also buttocks.

HFMD is most commonly caused by coxsackievirus A16, which usually results in a mild self-limiting disease with a few complications. HFMD is also caused by enteroviruses, including enterovirus 71 (EV71) which has been associated with serious complications in certain groups, and may cause deaths.

Related links

A Guide to clinical management and public health response for hand, foot and mouth disease (HFMD)

Hand, foot and mouth disease information sheet

HFMD mainly occurs amongst children under 10 years old. The usual period from infection to onset of symptoms is 3-7 days.

The disease usually begins with fever, poor appetite, malaise, and frequently with a sore throat. One or two days after fever onset, painful sores develop in the mouth. They begin as small red spots that blister and then often become ulcers. They are usually located on the tongue, gums and inside of the cheeks. A non-itchy skin rash develops over 1-2 days with flat or raised red spots, some with blisters. The rash is usually located on the palms of the hands and soles of the feet, and may also appear on the buttocks and/or genitalia. A person with HFMD may not have symptoms, or may have only the rash or only mouth ulcers. In a small number of cases, children may experience a brief febrile illness, present with mixed neurological and respiratory symptoms and succumb rapidly from the disease.

HFMD virus is contagious and infection is spread from person to person by direct contact with nose or throat discharges, saliva, fluid from blisters, or the stool of infected persons. Infected persons are most contagious during the first week of the illness but the period of communicability can last for several weeks. HFMD is not transmitted from pets or other animals. HFMD should not be confused with the different disease in animals called foot-and-mouth disease.

Presently, there is no specific treatment available for HFMD. Patients should drink plenty of water or other liquids and may require treatment of the symptoms.

Health care providers are advised to treat patients according to their symptoms and to refrain from using steroids.

別紙様式第2-1
番号9

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012年7月23日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄

一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン	研究報告の公表状況	Chinese Journal of Zoonoses 2012; 28(5): 442-448	公表国 中国
販売名 (企業名)	①献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL　(ベネシス) ②献血ヴェノグロブリン IH5%静注 1g/20mL　(ベネシス) ③献血ヴェノグロブリン IH5%静注 2.5g/50mL　(ベネシス) ④献血ヴェノグロブリン IH5%静注 5g/100mL　(ベネシス) ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　(ベネシス) ⑥グロブリン筋注 450mg/3mL「ベネシス」　(ベネシス) ⑦グロブリン筋注 1500mg/10mL「ベネシス」　(ベネシス)			

研究報告の概要

ヒツジ痘はヒツジ痘ウイルス及びヤギ痘ウイルスによって起こる、小型反芻動物のウイルス性伝染病である。分類学的には、ヒツジ痘ウイルス(sheeppox virus:SPPV)、ヤギ痘ウイルス(Goatpox virus:GTPV)及びランピースキン病ウイルス(Lump skin disease virus:LSDV)は何れもポックスウイルス科カプリポックスウイルス属に属する。ヒツジ痘ウイルス及びヤギ痘ウイルスは小型反芻動物の家畜に感染する疾病であるが、通常はヒトには感染しない。ヒトが罹患動物との接触によりヒツジ痘ウイルスに感染することは極めて稀であり、臨床徴候診断に基づくヒトのヒツジ痘症例報告はあるが、これらの症例は病原学的な確定診断の根拠が乏しいため、結論には慎重を期さなければならない。
2010年8月、重慶市彭水県で一連のヒツジ痘ウイルスのヒトへの感染発生が報告され、この伝染病発生の診断を明確にするため、調査担当者は一部患者及び罹患ヒツジの検体を採取し、ヒツジ痘ウイルスに対する一連の検査測定を行い、このウイルスの感染によるものであることの実証を試みた。その結果をここに以下の通り報告する。

1. 材料及び方法

(略)

2. 結　　果
2.1　感染発生の概況
重慶市彭水県は2010年8月、一連のヒツジ痘のヒト集団感染が疑われる状況が発生し、その原因はヒツジ痘に罹患したヤギに直接接触したためである疑いがあることを報告した。調査による実証：2010年7月、彭水県石柳郷が四川省より黒ヤギ640頭を購入したところ、間もなく繁殖農家が一部のヤギの眼部、頭部及び腹部に疱疹が出現していることを発見し、更に死亡が相次いだ。累計発生率は罹患ヤギ548頭(86%)、死亡172頭(27%)で、ヤギの病死率は31%となった。畜産局の職員は調査の過程で、繁殖農家の中に、罹患ヤギとの接触後に皮疹が出現した人が複数いることを発見し、直ちに衛生部門に対し関連状況を通知した。衛生部門の調査によると、本事例では計34人が発症し、うち男性23人、女性11人、年齢は最低が1歳、最高が52歳で平均年齢は27歳、農民20人、学生・生徒12人、未就園児2人だった。症例のうち31例は3つの行政村の14戸の繁殖農家に分布しており、3例のみ、繁殖農家2戸の近隣住民だった。11戸では2例以上の症例が発生していた。繁殖農家17戸のうち16戸で罹患ヤギ、或いは死亡ヤギが発生し、14戸でヒトのヒツジ痘症例が発生していた。全ての症例で罹患ヤギとの接触歴があり、未接触者の発症はなかった。症例の発症期間は7月15日～9月1日の間だった。彭水県ではそれまでにヒツジ痘のヒトへの感染症例の報告はなかった。
2.2　ウイルスの分離
検体接種細胞9試料のうち、罹患ヤギ2から採取した1検体のみ細胞病変が出現し、この検体を細胞に接種した後、培養第1代の4

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

代表として献血ヴェノグロブリン IH5%静注0.5g/10mLの記載を示す。
2. 重要な基本的注意
(1)本剤の原材料となる献血者の血液については、HBs抗原、抗HCV抗体、抗HIV-1抗体、抗HIV-2抗体及び抗HTLV-I抗体陰性で、かつALT(GPT)値でスクリーニングを実施している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV及びHCVについて核酸増幅検査(NAT)を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該NATの検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した血漿を原料として、Cohnの低温エタノール分画で得た画分からポリエチレングリコール4000処理、DEAEセファデックス処理等により人免疫グロブリンを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において60℃、10時間の液状加熱処理、ウイルス除去膜によるろ過処理及びpH3.9～4.4の条件下での液状インキュベーション処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

日目に細胞集簇が形成され、4 日目に細胞融合が出現し、細胞質は粗くなり、光透過性が低下した。第 2 代接種培養では 2 日目に細胞集簇が形成され、その後明らかな細胞融合が出現した。ヒツジ痘ウイルス特異的プライマーA95/B7 を用いて PCR 増幅検査及び配列測定を行い、ヤギ痘ウイルス分離陽性を実証した。

2.3　ウイルス核酸検査

ヒツジ痘のヒト感染疑い症例の水疱液検体 5 検体及び罹患ヤギ 4 検体に対し、ヒツジ痘ウイルス A29L 遺伝子の特異的プライマーCPVS/CPVA を用いて PCR 検査を行ったところ、9 検体で何れも 413bp の特異的バンドが検出され、結果は何れも陽性だった。ヒツジ痘ウイルス P32 遺伝子に対応する特異的プライマーA95/B7 を用いてヒトの 5 検体を検査したところ、症例 4 の検体は陰性、他の 4 症例の検体は陽性だった。また、ヒトのグリセルアルデヒドリン酸デヒドロゲナーゼ遺伝子に対応する GAPDH1 及び GAPDH2 プライマーを内部対照として使用することで、ヒトの 5 検体で何れも特異的な 226bp の DNA 断片増幅に成功し、これにより抽出した核酸がヒト組織由来のものであり、核酸検査結果が有効であることを実証した。

2.4　配列測定

増幅強度の比較的高い症例 2、症例 3 及び罹患ヤギ 2 の Vero E6 細胞ウイルス陽性分離物に対し、プライマーA95/B7 を用いてヒツジ痘ウイルスの P32 遺伝子の増幅を行うとともに配列決定を行い、その結果を BLAST により解析したところ、2 症例の水疱液検体及びヤギの Vero E6 細胞ウイルス分離物の増幅ウイルス核酸配列と、ヤギ痘ウイルスの G20-LKV ウイルス株の間には 99%の相同性が見られたため、今回のヒトのヒツジ痘感染はヤギ痘ウイルスによるものであると判定した。配列決定によって得られたヒト症例の 2 本の P32 遺伝子配列と、罹患ヤギのウイルス分離物の遺伝子配列との相同性は 100%であり、このことで今回発生したヤギとヒトのヤギ痘の病因は同一のウイルスであることが明らかとなった。

2.5　ヤギ痘ウイルスの P32 遺伝子核酸配列の進化系統解析

GenBank からカプリポックスウイルス属メンバーの P32 遺伝子 842bpDNA 相同性配列を収集し、ソフトウェアの BioEdit を使用して配列の編集を行い、MEGA により ClustalW を使用して多重配列比較を行い、進化系統樹ファイルを作成するとともに、Neighbor-Joining 法により進化系統樹を作成した。進化系統樹により、重慶市彭水県で得られたヤギ痘ウイルスは、中国広西チワン族自治区柳州市柳江県で 2003 年に流行したウイルス株及び、ベトナムで 2005 年に流行したウイルス株と進化距離が比較的近く、2009 年に重慶市及び甘粛省で確認されたウイルス株との進化距離も比較的近いことが分かり、更にカザフスタンを起源とする G20-LKV ウイルス株と同属の、進化上で独立したヤギ痘ウイルスの分枝上に位置することがわかった。

3. 考　　察

近年、ヒツジ痘は中国でたびたび発生し、養羊業にとって大きな危害となっている。この疾病は国際獣疫事務局が報告を義務付けている疾病の一つであり、中国ではⅠ類動物疾病に指定されている。中華人民共和国農業部獣医公報によると、2000 年～2009 年上半期の間で地理上の分布を見ると、先ず中国の北西部地域、次に華中地域、華南地域がヒツジ痘発生の集中した地域となっている。2000 年～2009 年の政府資料及び公開発表された文献によると、中国では北京市、重慶市、遼寧省、山東省、河南省、チベット自治区においてはこの期間中にヒツジ痘発生の報告はなかったが、その他の省・自治区では全て発生が報告されていた。北西部地域の甘粛省、青海省、寧夏回族自治区及び湖南省、南西部地域の雲南省、華中地域の湖南省、華東地域の福建省は発生の報告が比較的多かった。華北地域で発生の報告が比較的多かったのは内モンゴル自治区、山西省、河北省だった。発生の報告が最も多い地域はそれぞれ、甘粛省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区となった。ヒツジ間でヒツジ痘が広く発生している状況により、ヒツジ痘ウイルスのヒトへの感染リスクは増大している。

ヒツジ痘のヒトへの感染症例の報告は稀であり、報告された症例も病原学的な診断根拠が乏しい。中国の吉林省、雲南省、天津市、陝西省、山東省、貴州省等ではこれまでにヒツジ痘のヒト感染症例が報告されているが、それらの症例は何れも臨床診断、或いは病理学的診断によるものであり、特異的な病原学的診断根拠はなかった。今回重慶市彭水県で発生した感染では、疫学調査を合わせて実施し、ヒツジ間での感染発生とヒト間での感染発生の時期及びヒトのヒツジ痘症例と罹患ヒツジのウイルスの核酸配列比較結果に

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

	基づくことで、今回発生したヒツジ痘の集団感染が、外部の省から購入した黒ヤギによって持ち込まれたヤギ痘ウイルスによるものであり、ヒトが直接ヤギと接触することによりヤギ痘ウイルスに感染し、続いて集団感染を引き起こしたものと確定した。疫学調査の結果により、全ての症例で罹患ヤギとの接触歴があり、未接触者に発症者はいないこと、曝露集団が罹患ヤギと接触した際に何れも個人防護を行っていなかったこと、また何れも毎回有効な手洗いを行っていなかったことが分かった。このため、直接罹患ヤギと接触したことが、ヤギ痘ウイルス感染の主な原因であると言える。	

報告企業の意見	今後の対応
ヒツジ痘ウイルスはポックスウイルス科コルドポックスウイルス亜科カプリポックスウイルス属に属する線状の２本鎖 DNA をゲノムとして持つ DNA ウイルスで、そのビリオンは 220～450nm×140～260nm×140～260ｎｍの煉瓦状ないし卵形で、エンベロープを有する。ヤギ痘ウイルスと極めて近縁もしくは同一で、核内及び細胞質内両方に封入体を形成する。万一、本剤の原料血漿中にヒツジ痘ウイルス又はヤギ痘ウイルスが混入したとしても、BHV をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、本剤の製造工程において不活化・除去されると考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

文章编号:1002-2694(2012)05-0442-03

一起人感染羊痘病毒疫情的实验室诊断

凌 华[1],李 勤[1],金连梅[2],彭克发[3],赵春芳[1],陈 熙[1],王豫林[1],冯连贵[1],赵 华[1],陈应琼[1],李稀龄[3],叶 盛[1]

摘 要:目的 对2010年重庆彭水县一起人感染羊痘病毒疑似病例进行病原学检测,以明确诊断。方法 对患者进行流行病学调查,采用羊痘病毒特异性引物对5例患者的5份疱疹液标本和来自3只病羊的眼分泌物、痘疱液、痘痂块共4份标本进行PCR检测,并采用VeroE6细胞进行病毒分离;对扩增出的DNA片断进行测序,经BLAST进行序列比对分析。结果 报告的34个病例均与病羊有接触史。1份病羊痘疱液标本山羊痘病毒分离阳性。9份标本的羊痘病毒A29L基因的413bp片段扩增结果均为阳性。使用A95/B7扩增羊痘病毒P32基因,5份人的疱疹液标本中,4份为PCR扩增阳性。2份病例标本及1份病羊的病毒分离物P32基因扩增产物的DNA片段序列同具有100%的同源性,3条序列与山羊痘病毒G20-LKV病毒株具有99%的同源性。系统进化树显示:重庆市彭水县获得的山羊痘病毒与我国广西柳江2003年流行的病毒和越南2005年流行的毒株进化距离较近,与2009年重庆及甘肃的病毒株也有较近的进化距离。结论 重庆市彭水县人感染羊痘病疫情系由人直接接触病羊而感染山羊痘病毒所致。

关键词:疫情;山羊痘病毒;病毒分离;核酸扩增

中图分类号:R373 文献标识码:A

Laboratory diagnosis on an outbreak of human cases infected with Goatpox Virus in Chongqing

LING Hua[1], LI Qin[1], JIN Lian-mei[2], PENG Ke-fa[3], ZHAO Chun-fang[1], CHEN Xi[1], WANG Yu-lin[1], FENG Lian-gui[1], ZHAO Hua[1], CHEN Ying-qiong[1], LI Xi-lin[3], YE Sheng[1]

(1. *Chongqing Center for Disease Control and Prevention, Chongqing* 400042, *China*;
2. *Chinese Center for Disease Control and Prevention, Beijing* 100052, *China*;
3. *Pengshui Center for Disease Control and Prevention, Pengshui*409600, *China*)

ABSTRACT: In 2010, an outbreak of 34 suspected cases of human infected with capripox uineswas reported in Pengshui County, Chongqing, China. Nine specimens, including vesicle fluid, eye discharge and scab, were collected from 5 human cases and 3 capripox infected goats, respectively. Viral DNA was detected by PCR with capripox virus specific primers, while virus isolation was performed for all specimens on VeroE6 cells. PCR amplification revealed that all specimens were positive for A29L gene. Additionally, one virus was isolated from eye discharge of an infected goat. For the P32 gene, 4 of 5 human cases were positive. Sequence analysis of three P32 amplicons from 2 patients and 1 goat showed 100% similarity. Phylogenetic analysis also showed that all three sequences clustered within goatpox virus, with close relationship with a goatpox virus isolating from Liujiang of Guangxi, China in 2003 and a Vietnam-originated goatpox virus in 2005. In conclusion, an outbreak of human cases infected with goatpox virus was confirmed by several approaches in our laboratory. This investigation suggested that close contact with infected goats imported from Sichuan had caused these clustered human infections, that routine quarantine on imported livestock should be implemented immediately, and that relevant health education is required for those farmers.

KEY WORDS: outbreak; goatpox virus; virus isolation; nucleic acid amplification

羊痘病是由绵羊痘病毒和山羊痘病毒引起的小型反刍动物的病毒性传染病。在分类学上,绵羊痘病毒(*sheeppox virus*,SPPV)和山羊痘病毒(*Goatpox virus*,GTPV),以及牛皱皮病病毒(*Lump skin disease virus*,LSDV)同属于痘病毒科羊痘病毒属。绵羊痘病毒和山羊痘病毒感染致家养小型反刍动物疫病,但通常不会感染人类。人因接触患病动物而感染羊痘病毒的情况极为罕见,虽然有基于临床体

通讯作者:李勤,Email:ergin@vip.sina.com
作者单位:1.重庆市疾病预防控制中心,重庆 400042;
2.中国疾病预防控制中心,北京 100052;
3.彭水县疾病预防控制中心,彭水 409600

征诊断的人羊痘病例报告，但由于这些病例缺乏病原学的确诊依据，结论需谨慎对待。2010年8月，重庆市彭水县报告1起人感染羊痘病疫情，为明确该起疫情的诊断，调查人员采集了部分患者及病羊标本，进行了针对羊痘病毒的一系列检测，证实系由该病毒感染所致，现将结果报告如下。

1　材料与方法

1.1　标本来源及病例情况　共采集5例疑似人感染羊痘病例的疱疹液标本5份，见表1。来自3只病羊的标本有：病羊1，眼分泌物1份；病羊2，痘疱液1份；病羊3，痘疱液1份，痘痂块1份；共4份标本。所有标本由彭水县疾病预防控制中心采集送检。

表1　5例疑似人感染羊痘病例患者样本

Tab.1　Specimens information of 5 suspected cases of human unfectedwoth capripoxuins capripox

病例	性别	年龄	职业	类型	接触羊的时间	出疹部位	出疹日期	采样日期
1 蒋某	女	48	农民	丘疹、水疱疹	2010-7-15	手指、手背、手掌、前臂、上臂、大腿内侧、大腿外侧、大腿前侧、小腿	2010-8-3	2010-9-2
2 赵某	男	28	农民	丘疹、水疱疹	2010-7-15	大腿内侧、大腿外侧、大腿前侧、小腿	2010-8-1	2010-9-2
3 罗某	男	38	农民	丘疹、水疱疹	2010-7-15	手指、前臂、上臂、大腿内侧、大腿外侧、大腿前侧、小腿、胸腹	2010-8-3	2010-9-2
4 周某	男	1	散居儿童	丘疹、水疱疹	2010-7-15	前臂、上臂、面部臀部	2010-8-1	2010-9-2
5 鱼某	女	39	农民	水疱疹	2010-7-15	手指、手背、前臂、大腿内侧、大腿外侧、大腿前侧、胸腹、背	2010-7-20	2010-9-2

1.2　仪器和试剂　PCR扩增仪(2700型PCR仪)为美国ABI公司产品，病毒RNA/DNA提取试剂盒(TaKaRa Mini Best Viral RNA/DNA Extraction Kit Ver4.0)购自大连宝生物工程有限公司，PCR试剂(GoTaq Hot Start Green Master Mix，M512B)购自美国Promega公司。VeroE6细胞由中国疾病预防控制中心病毒病预防控制所提供。

1.3　病毒分离　取痘疱液标本和眼分泌物标本，分别加入双抗和庆大霉素(终浓度为2 000单位/mL和1 000单位/mL)，痘痂块样本按体积比1∶5加入RPMI1640培养液后匀浆，5 000 r/min离心15 min，取上清加入双抗和庆大霉素(终浓度为2 000单位/mL和1 000单位/mL)，4 ℃冰箱过夜。取处理后的样本液各100 μL同时加入200 μL细胞维持液，接种到已长成单层的VeroE6细胞管中，37 ℃吸附2 h，弃去样本液，加入1 mL维持液培养，连续观察记录细胞病变，盲传2代，每代7～10 d。对出现病变的细胞，采用PCR检测羊痘病毒核酸，然后测序鉴定。

1.4　病毒核酸扩增　使用的PCR扩增羊痘特异性引物和人GAPDH对照引物见表2。

表2　核酸扩增使用的引物

Tab.2　Primers used for PCR amplification

引物名称	引物序列	扩增产物长度(bp)	扩增区域	文献
羊痘特异性引物				
CPVS	5′-AACTGCCGTCAATGAAGAATGG-3′	413	A29L	1
CPVA	5′-TTTCAAAGCTTGTTTTTAACGTRGG-3′			
A95	5′-CACGGATCCATG GCAGAT ATC CCA TTA-3′	1 024	P32	2
B7	5′-AAC AAG CTT ACT CTC ATT GGT GTT CGG-3′			
对照引物				
GAPDH1	5′-GAA GGT GAA GGT CGG AGT-3′	226		
GAPDH2	5′-GAA GAT GGT GAT GGG ATT TC-3′			

扩增条件：PCR反应体系总体积为50 μL，其中包括2×PCR Master Mix buffer 25 μL，上、下游引物(CPVS和CPVA，A95和B7，GAPDH1和GAPDH2，浓度为10 μmol/L)各3 μL，样本DNA模板10 μL，dH_2O 9 μL。反应条件：95 ℃ 2 min；95 ℃ 30 s，55 ℃ 60 s，72 ℃ 60 s，35个循环；72 ℃ 5 min。

1.5　DNA序列测定及分析　选取PCR扩增后，经凝胶电泳检测，条带清晰且反应强度较高的样本DNA产物2份和病毒培养物PCR产物1份，回收特异性片段，用扩增引物进行双向测序。测序结果用DNAStar软件及BLAST服务器

进行序列比对分析,并进行进化树分析。

2 结 果

2.1 疫情概况 2010年8月,重庆市彭水县报告一起聚集性人感染羊痘病疑似疫情,疫情疑为人直接接触患羊痘病的山羊所致。调查证实:2010年7月,彭水县石柳乡从四川省购入黑山羊640只,养殖户很快发现部分羊的眼、头及腹部出现泡疹,并相继出现死亡;累计发生病羊548只(86%),死亡172只(27%),羊病死率为31%。畜牧局人员在调查过程中发现养殖户家中有多人在接触病羊后出现皮疹,即将有关情况通知卫生部门。经卫生部门调查发现,本次事件共发病34人,其中男性23人,女性11人;年龄最小1岁,最大52岁,平均27岁;农民20人,学生12人,散居儿童2人。31例病例分布在3个行政村的14户养殖户中,另有3例为2户养殖户的邻居;11户中有2例以上病例发生。17户养殖户中16户有病羊及死羊发生,14户发生人羊痘病例。所有病例均与病羊有接触史,未接触者中无发病,病例的发病时间在7月15日—9月1日期间。彭水县当地既往无人感染羊痘病例报告。

2.2 病毒分离 共9份标本接种细胞,仅有采自病羊2的1份标本出现细胞病变,该标本接种细胞后,在培养第1代的第4 d出现细胞聚集成簇,第4 d出现细胞融合,胞浆变粗透光性降低。第2代接种培养的第2 d开始出现细胞聚集成簇,之后开始出现明显的细胞融合。经用羊痘病毒特异性引物A95/B7进行PCR扩增检测和序列测定,证实为山羊痘病毒分离阳性。

2.3 病毒核酸检测 5份疑似人羊痘病例的疱疹液标本和4份病羊标本经使用针对羊痘病毒A29L基因的特异性引物CPVS/CPVA进行PCR检测,9份标本均检测到413 bp的特异性条带,结果均为阳性。使用针对羊痘病毒P32基因的特异性引物A95/B7检测5份人的标本,病例4的标本为阴性,其余4份人病例样本为阳性。同时,使用针对人磷酸甘油醛脱氢酶基因的GAPDH1和GAPDH2引物做为内对照,5份人的样本均成功扩增出特异性226 bp DNA片段,证实提取的核酸来自人体组织样本,核酸检测结果有效。

2.4 序列测定 对扩增强度较高的病例2、病例3,以及病羊2的VeroE6细胞病毒阳性分离物,使用引物A95/B7扩增羊痘病毒P32基因并进行测序,测序结果经BLAST分析表明:2个病例疱疹液标本以及羊的VeroE6细胞病毒分离物中扩增的病毒核酸序列与山羊痘病毒G20-LKV病毒株具有99%的同源性,判定本次人感染羊痘病由山羊痘病毒所致。测序获得的2条人病例的P32基因序列与病羊的病毒分离物的基因序列同源性为100%,说明此次引起羊和人山羊痘病的病原为同一病毒。

2.5 山羊痘病毒部分P32基因核酸序列系统进化分析 由GenBank中收集羊痘病毒属成员P32基因842 bp DNA同源序列,经BioEdit软件进行序列编辑,由MEGA软件采用ClustalW方法进行多重序列比对,生成系统进化树文件,并用Neighbor-Joining法生成进化树(图1)。系统进化树显示,重庆市彭水县获得的山羊痘病毒与我国广西柳江2003年流行的病毒、越南2005年流行的毒株进化距离较近,与2009年重庆及甘肃的病毒株也有较近的进化距离,并与来源于哈萨克斯坦的G20-LKV毒株同属在进化上独立的山羊痘病毒分支。

图1 重庆市羊痘病毒P32基因部分核酸序列系统进化树分析

Fig.1 Phylogenetic tree based on partial P32 DNA sequences of capripox virus

3 讨 论

近年来,羊痘疫情在我国时有发生,对养羊业危害严重。该病被世界动物卫生组织列为法定必须报告的疾病,我国将其列为Ⅰ类动物疾病。根据中华人民共和国农业部兽医公报显示,2000—2009年上半年从地理分布来看中国的西北地区,其次是华中地区,华南地区是羊痘疫情集中地区。2000—2009年的官方资料和公开发表的文献显示中国除北京、重庆、辽宁、山东、河南、西藏在这期间没有羊痘疫情报道,中国其他省区都有羊痘疫情报道。西北的甘肃、青海、宁夏和湖南,西南的云南,华中的湖南,华东的福建是报告疫情较多的省份;华北地区报道疫情较多的是内蒙古、山西、河北。报告疫情最多的地区分别为甘肃、青海、宁夏和新疆维吾尔族自治区[3]。羊间羊痘疫情的广泛存在增加了人感染羊痘病毒的风险。

(下转第448页)

参考文献:

[1]Wu Y, Zhou J, Zhang X, et al. Optimized sample preparation for two-dimensional gel electrophoresis of soluble proteins from chicken bursa of Fabricius [J]. Proteome science, 2009, 7:38.

[2]宋敏,赖国旗,邱宗荫,等. HeLa 细胞蛋白质组双向电泳技术的建立[J]. 重庆医科大学学报,2007,32(2): 117-120.

[3]辛普森,理查德 J. 蛋白质与蛋白质组学实验指南[M]. 北京:化学工业出版社, 2006:131-145.

[4]Rocchetti MT, Centra M, Papale M, et al. Urine protein profile of IgA nephropathy patients may predict the response to ACE-inhibitor therapy [J]. Proteomics, 2008, 8(1):206-216.

[5]Kageyama S, Isono T, Iwaki H, et al. Identification by proteomic analysis of calreticulin as a marker for bladder cancer and evaluation of the diagnostic accuracy of its detection in urine [J]. Clinical chemistry, 2004, 50(5):857-866.

[6]Denny P, Hagen FK, Hardt M, et al. The proteomes of human parotid and submandibular/sublingual gland salivas collected as the ductal secretions [J]. Journal of proteome research, 2008, 7(5):1994-2006.

[7]杜鹏,冯伟华,郭俊生. 蛋白质组双向电泳技术研究进展[J]. 卫生研究 2005,34(2):237-240.

[8]Oh P, Li Y, Yu J, et al. Subtractive proteomic mapping of the endothelial surface in lung and solid tumours for tissue-specific therapy [J]. Nature, 2004, 429(6992):629-635.

[9]Rui Z, Jian-Guo J, Yuan-Peng T, et al. Use of serological proteomic methods to find biomarkers associated with breast cancer [J]. Proteomics, 2003, 3(4):433-439.

[10]Ye B, Cramer DW, Skates SJ, et al. Haptoglobin-alpha subunit as potential serum biomarker in ovarian cancer: identification and characterization using proteomic profiling and mass spectrometry [J]. Clinical cancer research: an official journal of the American Association for Cancer Research, 2003, 9(8): 2904-2911.

[11]贾仁勇,程安春,汪铭书,等,不同条件对鸭瘟病毒感染细胞蛋白质组二维电泳分析结果的影响[J]. 中国兽医学报,2009,29(3) :272-276.

收稿日期:2012-01-11;修回日期:2012-02-26

(上接第 444 页)

人感染羊痘病例罕有报道,且报告病例缺乏病原学诊断依据。在我国的吉林、云南、天津、陕西、山东、贵州等省虽曾有人感染羊痘病例报道,但报道的病例均为临床诊断或病理学诊断,无特异性病原学诊断依据[4-10]。此次重庆市彭水县发生的疫情,结合流行病学调查,根据羊间疫情和人间疫情的发生时间,以及人羊痘病例和病羊的病毒核酸序列比对结果,确定本次发生的羊痘病聚集性疫情是由于当地从外省引进黑山羊,黑山羊携带山羊痘病毒,发生羊痘病,人在直接接触羊后,发生山羊痘病毒感染,继而引起聚集性人羊痘病疫情。流行病学调查结果显示:所有病例均与病羊有接触史,未接触者中无人员发病;暴露人群与病羊接触时均未进行个体防护,均未能做到每次有效洗手。因此,直接与病羊接触是发生人山羊痘病毒感染的主要原因。

参考文献:

[1]Zheng M, Liu Q, Jin N, et al. A duplex PCR assay for simultaneous detection and differentiation of Capripoxvirus and Orf virus [J]. Mol Cell Probes, 2007,21:276-281.

[2]Heine HG, Stevens MP, Foord AJ, et al. A capripoxvirus detection PCR and antibody ELISA based on the major antigen P32, the homolog of the vaccinia virus H3L gene[J]. J Immunol Methods,1999, 227: 187-196.

[3]颜新敏,吴国华,李健,等. 张强羊痘在中国的流行现状分析[J]. 中国农学通报,2010,26(24):6-9.

[4]朱新凤,朱春玉,崔健. 羊痘 1 例[J]. 中国医学创新,2010,7(25): 183-183.

[5]张金松,张信江,袁伟,等. 羊痘 1 例[J]. 临床皮肤科杂志,2008, 37(12):784-784.

[6]洪艳,谢忠文,施恒豫. 人感染山羊痘五例[J]. 中华传染病杂志, 2005,23(2):143-143.

[7]关杨,肖尹,纪华安,等. 羊痘 3 例[J]. 临床皮肤科杂志,2005,34(4):249-249.

[8]王宏光. 1 例羊痘伴高热病人的护理[J]. 护理研究,2002,16(4): 240-240.

[9]但翠娟,陈永艳,袁伟,等. 羊痘 1 例[J]. 中国皮肤性病学杂志. 2009,23(6):370-371.

[10]张端阳,周永安,王俊民. 羊痘一家 4 例报告[J]. 中国皮肤性病学杂志,2003,17(3):196-197.

收稿日期:2011-11-08;修回日期:2012-02-16

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 5 月 7 日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄

一般的名称	①②③④人血清アルブミン ⑤⑥乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ ⑦人ハプトグロビン ⑧乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子	研究報告の公表状況	Archives of Virology (Arch. Virol.) 2012; 157(3): 521-524	公表国 中国
販売名 (企業名)	①献血アルブミン 25%静注 5g/20mL「ベネシス」　(ベネシス) ②献血アルブミン 25%静注 12.5g/50mL「ベネシス」　(ベネシス) ③献血アルブミン 5%静注 5g/100mL「ベネシス」　(ベネシス) ④献血アルブミン 5%静注 12.5g/250mL「ベネシス」　(ベネシス) ⑤ノイアート静注用 500 単位　(ベネシス) ⑥ノイアート静注用 1500 単位　(ベネシス) ⑦ハプトグロビン静注 2000 単位「ベネシス」　(ベネシス) ⑧コンコエイトーHT　(ベネシス)			

研究報告の概要

緒　　言

ブタ・サイトメガロウイルス（PCMV）は、ヘルペスウイルス科に属するβヘルペスウイルスである。PCMVは封入体鼻炎、体重増加不良及び生まれたばかりの子豚の死亡を引き起こす。群において、感染の主要部位は鼻甲介と残りの上気道である傾向がある、そして生後3週齢未満のブタは肺炎、或いは全身感染を患う可能性がある。PCMV感染はヒトの同種移植において重要な問題でもある。ヒト・サイトメガロウイルスは全ての人々で普遍し、全ての新生児の最高1%を感染させる。ブタ・サポウイルス（SaVs）は、ヒトと動物で急性胃腸炎を引き起こすことができる重要な腸内病原体である。SaVsは実験的な条件下においてブタで下痢を引き起こすことができる。更に、SaVsはヒトにも感染することができ、ヒトSaVsの有病率は世界的に0.3%～9.3%にわたる。SaVsは高齢者や他の年齢層におけるウイルス性胃腸炎同様に、乳幼児における急性胃腸炎の重要な原因である。中国の小児におけるウイルス性胃腸炎の約19%はSaVsに起因すると推定された。

過去10年で、湖南省は大きな社会経済発展を遂げ、生活水準と生活様式の変化において大幅な増加をもたらした。これはますますブタが集中的に増加する結果となった。その上、PCMVとSaVsは広範な分布を持ち、ブタの群れでのそれらの有病率は過小評価されるかもしれない（全体的に経済的損失と同様に重大な健康問題をもたらすことがある）。より重要なことに、SaVsはヒトにも感染することができ、世界的に急性胃腸炎を引き起こしている重要な腸内病原体と考えられる。従って、ブタでのPCMVとSaVs感染の調査は、湖南省のヒトと動物における両ウイルスの予防と管理のための重要な意味を持っている。しかし、ブタでのPCMVとSaVsに対する抗体は限定された国、或いは地域のみで報告されている、そして中国のブタでのPCMVとSaVsの抗体陽性率の調査は報告されていない。

本調査の目的は、湖南省の集約農場からブタでのPCMVとSaVsの抗体陽性率を調べることであった。結果は、この省のブタでのPCMVとSaVs感染の改善された管理のための基盤を提供しなければならない。

材料と方法

（ 略 ）

使用上の注意記載状況・
その他参考事項等

代表としてノイアート静注用 500 単位の記載を示す。
2. 重要な基本的注意
(1)本剤の原材料となる献血者の血液については、HBs 抗原、抗 HCV 抗体、抗 HIV-1 抗体、抗 HIV-2 抗体、抗 HTLV-I 抗体陰性で、かつ ALT(GPT)値でスクリーニングを実施している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV 及び HCV について核酸増幅検査（NAT）を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該 NAT の検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した血漿を原料として、Cohn の低温エタノール分画で得た画分から人アンチトロンビンⅢを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において 60℃、10 時間の液状加熱処理及びウイルス除去膜によるろ過処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

血清検体の収集と準備

合計：500の血液検体は、湖南省における10の代表的な行政地域に分布する集約農場のブタから、2005年5月から2010年10月の間に採取された。各農場で育てられるブタの数は約1000～5000の範囲であった。サンプリング前に、ブタはそれらの健康状態を判定するために診察を受けた。それぞれのブタに関する情報（例えば年齢、病歴、成長ホルモンと体重）が集められた。全てのブタは十分な配合飼料（高エネルギーと高たん白質）を与えられ、配合飼料の量は体重によって決められた。何れのブタもサイトメガロウイルス、或いはサポウイルスに対して予防接種を受けていなかった。各年齢層から健康なブタがランダムに選ばれ、血液検体が各々のブタから採取された。全ての血液検体は個々にラベルをつけられ、湖南農業大学獣医学部（湖南省長沙市）の検査室に輸送される間冷やされた。それから、血液検体は10分間、1,000Gで遠心分離され、血清が集められ、凍結され、そして使用まで-20℃で保存された。

血清学的検査

検査結果は、450nm波長の光学濃度（OD）値として表わされた。陽性コントロール（PCX）と陰性コントロール（NCX）の平均値は、2つの別々のウェルの平均値を計算することによって得られた。S/P値に基づき、各検体の分類は以下の通りだった：S/P＜0.3、PCVM陰性(-)；S/P＞0.4、PCVM陽性(+)；0.3＜S/P＜0.4、PCVM疑い（±）、そしてS/P<2.0、SaVs陰性（-）；S/P>2.1、SaVs陽性(+)；2.0＜S/P＜2.1、SaVs疑い（±）。

（ 略 ）

結果と考察

PCMVとSaVに対する抗体は、それぞれ間接gB-ELISA及びVP1-ELISAによって検査されたブタの96.40%(482/500)と63.40%(317/500)で検出された。ブタでのPCMV及びSaV感染の抗体陽性率は、それぞれ56.36%～72.50%、94.74%～98.48%の範囲であった。異なる地理的場所からのブタの抗体陽性率の間で有意差はなかった。湖南省の10の代表的な行政地域の全てにおけるブタでのPCMVの抗体陽性率は90%以上で、最高抗体陽性率（98.48%）は郴州であった。湖南省の10の代表的な行政地域の内の7箇所におけるブタでのSaV抗体陽性率は60%以上で、最高抗体陽性率（72.50%）は長沙であった。

我々の本調査の前に中国におけるブタでのPCMV及びSaV感染の抗体陽性率に関する報告はなかった；ブタでの症例報告と予備調査だけが記録されていた。これはおそらく必要とした疫学調査を行うために必要な検出試薬の不足によるものである。本研究で分かった全体的な抗体陽性率はPCMVの96.40%とSaVsの63.40%で、それは中国におけるPCMVとSaVsの頻繁な循環を示し、PCR手法を用いての以前の結果と一致している。PCMVの全体的な抗体陽性率はカナダで報告されたものと類似していたが、日本のそれより低かった。これは異なる動物の権利保護と農業慣習に起因している可能性がある。SaVsの全体的な抗体陽性率はベネズエラで報告されたものと類似していた。

本研究において、これらの違いは統計的に有意でなかったにも拘わらず、繁殖雌ブタが最高PCMV抗体陽性率（96.67%）で、続いて授乳ブタ（95.0%）、肥育ブタ（91.67%）、そして離乳ブタ（85.0%）であった。繁殖雌ブタでのSaVsの最高抗体陽性率は83.33%で、続いて離乳ブタ（68.75%）であった。我々の調査は、離乳ブタがSaVs感染のより高い抗体陽性率（68.75%）であることを示した。この結果は、VLP ELISA手法を用いた以前の研究（10週齢と12週齢のブタから採取した検体で報告されたゼロ陽性）と一致していなかった。

雌ブタでのPCMVの抗体陽性率は、雌ブタからその子供達へのPCMVの垂直感染による感染の指標であると仮定される。現在の調査において、雌ブタでのPCMVの抗体陽性率は96.67%で、この仮説を支持する。PCMVの感染はミルクを通して、子宮内感染を通して、そして周産期間の感染を通して起こり得るが、ウイルスが体液を通して排出されるので、感染の最も一般的な経路は口腔咽頭と生

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

	殖管を経由している。本調査において、PCMVの抗体陽性率はブタの他のカテゴリーにも広く分配され、PCMVの感染の最も一般的な経路が水平感染であることを確認した。非常に限られたデータはSaVsの感染に関して利用できる、そして最近の知見において、SaVsの感染の主要経路が糞口であると結論をだした、しかし嘔吐と汚染食品も感染性かどうかはまだ分かっていない。 結論として、現在の調査の結果はPCMV及びSaV感染の両方が湖南省のブタで非常に流行していることを示しているが、このひどい状況は過去に殆ど注意を払われていなかった。従って、中国のこの省と他の地域におけるブタでのPCMV及びSaV感染を予防管理のために、総合的な管理戦略と措置を適用することが避けられない。

報告企業の意見	今後の対応
ブタ・サイトメガロウイルス（porcine cytomegalovirus:PCMV）は、ブタ・ヘルペスウイルス 2 型（suid herpesvirus 2：SuHV-2）とも呼ばれ、DNA ウイルスのヘルペスウイルス科のβヘルペスウイルス亜科に属し、エンベロープを有する大きさは 150～200nm の球状粒子である。万一、ヘパリンの原料であるブタ小腸粘膜に PCMV が混入したとしても、PRV をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、ヘパリンの製造工程において不活化・除去されると考えている。 サポウイルス（sapovirus:SaV）は感染性胃腸炎の原因ウイルスの一つで、ノロウイルス（Norovirus）と同じ RNA ウイルスのカリシウイルス科（Caliciviridae）に属し、エンベロープを有しない大きさは約 38nm の球状粒子である。万一、ヘパリンの原料であるブタ小腸粘膜に SaV が混入したとしても、HPV1 及び PPV をモデルウイルスとしたウイルスクリアランス試験成績から、ヘパリンの製造工程において不活化・除去されると考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

Arch Virol (2012) 157:521–524
DOI 10.1007/s00705-011-1189-3

Seroprevalence of porcine cytomegalovirus and sapovirus infection in pigs in Hunan province, China

Guo-Hua Liu · Run-Cheng Li · Jing Li · Ze-Bin Huang · Chao-Ting Xiao · Wei Luo · Meng Ge · Da-Liang Jiang · Xing-Long Yu

Received: 20 September 2011 / Accepted: 30 November 2011 / Published online: 14 December 2011

Abstract The seroprevalence of porcine cytomegalovirus (PCMV) and sapovirus (SaV) infections in pigs was investigated in Hunan province, China, between May 2005 and October 2010. A total of 500 pig serum samples collected from 10 representative administrative regions in Hunan province were evaluated for antibodies against PCMV and SaV using enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA). The overall seroprevalence of porcine cytomegalovirus and sapovirus in pigs was 96.40% (482/500) and 63.40% (317/500), and the seropositivity of 10 herds we surveyed varied, ranging from 94.74% to 98.48% and 56.36% to 72.50%, respectively. The highest prevalence was found in breeding sows (96.67% for PCMV and 83.33% for SaVs). The results of the present survey indicated that infections with porcine cytomegalovirus and sapovirus are highly prevalent in pigs in Hunan province, China.

Introduction

Porcine cytomegalovirus (PCMV) is a betaherpesvirus belonging to the family *Herpesviridae*. PCMV causes inclusion body rhinitis, poor weight gain and death of newborn piglets [11, 14]. In herds, a major site of infection tends to be the turbinates and the rest of the upper respiratory tract, and pigs under three weeks of age may suffer from pneumonia or generalized infection [8]. PCMV infection is also an important problem for human allotransplantation [7]. Human cytomegalovirus is ubiquitous in all populations, and infect up to 1% of all newborns [23, 26]. Porcine sapoviruses (SaVs) are important enteric pathogens that can cause acute gastroenteritis in humans and animals. SaVs can cause diarrhea in pigs under experimental conditions [1]. Moreover, SaVs are also transmissible to humans, and the prevalence of human SaVs ranges from 0.3% to 9.3% worldwide [22]. SaVs are an important cause of acute gastroenteritis in infants and young children, as well as viral gastroenteritis in the elderly or other age groups [9, 15, 21]. It is estimated that approximately 19% of viral gastroenteritis in children in China is caused by SaVs [25].

In the past decade, Hunan province has undergone major socio-economic development, and this has resulted in a huge increase in living standards and lifestyle changes. This has led to more and more pigs being raised intensively. In addition, PCMV and SaVs have global distribution, and their prevalence in pig herds might be underestimated, which can result in significant health problems as well as economic losses globally [4, 5]. More importantly, SaVs can also infect humans and is considered a significant enteropathogen causing acute gastroenteritis worldwide [9, 15, 21, 28]. Therefore, investigation of PCMV and SaV infection in pigs has important implications for the prevention and control of both viruses in humans and animals in Hunan province. However, antibodies against PCMV and SaVs in pigs have been reported in only a limited number of countries or regions [1, 3, 24, 27], and no survey of the seroprevalence of PCMV and SaVs in pigs in China has been reported.

G.-H. Liu · R.-C. Li · J. Li · Z.-B. Huang · C.-T. Xiao · W. Luo · M. Ge · D.-L. Jiang · X.-L. Yu (✉)
College of Veterinary Medicine, Hunan Agricultural University, Changsha 410128, Hunan Province, People's Republic of China
e-mail: xlyu999@yahoo.com.cn

J. Li
Animal Husbandry and Aquaculture Bureau of Taojiang, Yiyang 410128, Hunan Province, People's Republic of China

The objective of the present investigation was to examine the seroprevalence of PCMV and SaVs in pigs from intensive farms in Hunan province. The results should provide a foundation for the improved control of PCMV and SaVs infection in pigs in this province.

Materials and methods

The study province

Hunan province is situated in the central eastern part of mainland China, between the northern latitudes of 25° to 30° and eastern longitudes of 109° to 114°. The climate is humid subtropical monsoon with an average annual temperature of 16-18°C. The average annual rainfall ranges from 1200 to 1700 mm. Hunan province is divided in to 14 administrative regions (cities), with the city of Changsha as its capital.

Collection and preparation of serum samples

A total of 500 blood samples were collected between May 2005 and October 2010 from pigs in intensive farms that are distributed in 10 representative administrative regions in Hunan province (Table 1). The numbers of pigs reared on each farm ranged from 1000 to 5000, approximately. Before sampling, pigs were subjected to clinical examination to determine their health status. Information about each pig, such as age, medical history, growth hormones, and weight were collected. All pigs were provided with sufficient concentrate mixture (high energy and high protein). The quantity of concentrate mixture was determined by body weight. None of the pigs were vaccinated against cytomegalovirus or sapovirus. Healthy animals from each age group were selected randomly, and one blood sample was collected from each animal. All of the blood samples were labelled individually and cooled during transport to the laboratory at the College of Veterinary Medicine, Hunan Agricultural University (Changsha, Hunan Province). Blood samples were then centrifuged at 1,000 *g* for 10 min, and serum was collected, frozen, and stored at −20°C until use.

Table 1 Seroprevalence of porcine cytomegalovirus and sapoviruses in pigs in Hunan province as determined by ELISA

Source of serum	No. examined	No. positive PCMV/SaVs	Prevalence (%) PCMV/SaVs
Yueyang	50	48/34	96.00/68.00
Yiyang	40	39/26	97.50/65.00
Shaoyang	55	53/31	96.36/56.36
Henyang	64	62/39	96.88/60.94
Yongzhou	60	58/36	96.67/60.00
Changsha	40	38/29	95.00/72.50
Xiangtan	38	36/26	94.74/68.42
Loudi	42	40/27	95.23/64.29
Huaihua	45	43/31	95.56/68.89
Chenzhou	66	65/38	98.48/57.58
Total	500	482/317	96.40/63.40

Serological examination

Antibodies against PCMV and SaV were detected by indirect gB-ELISA and VP1-ELISA methods, respectively [17, 18]. Briefly, a 96-well ELISA plate was coated with PCMV- or SaV-specific antigen, and 100-μl diluted serum samples were then added to the test wells. Positive control sera were collected from piglets that were experimentally infected with PCMV or SaV. Negative control sera were collected from newborn piglets born to sows that were not infected.

The results of the test were expressed as the optical density (OD) value at a wavelength of 450 nm. The mean values for the positive control (PCX) and the negative control (NCX) were obtained by calculating the average value for two separate wells. Based on the S/P value, classification of each sample was as follows: S/P< 0.3, negative (−); S/P>0.4, positive (+); 0.3< S/P<0.4, suspicious (−/+) for PCVM, and S/P<2.0, negative (−); S/P>2.1, positive (+); 2.0< S/P<2.1, suspicious (−/+) for SaVs.

Statistical analysis

Differences in the PCMV and SaV seropositivity in pigs from different geographical localities were analyzed using the chi square test in SPSS for Windows (Release 17.0, standard version, SPSS Inc., Chicago, IL, USA).

Results and discussion

Antibodies to PCMV and SaV were detected in 96.40% (482/500) and 63.40% (317/500) of the pigs examined by indirect gB-ELISA and VP1-ELISA, respectively. The seroprevalence of PCMV and SaV infection in pigs ranged from 56.36% to 72.50% and 94.74% to 98.48%, respectively (Table 1). There was no significant difference between the seroprevalence in pigs from different geographical locations ($p>0.05$, data not shown). The seroprevalence of PCMV in pigs in all of the 10 representative administrative regions in Hunan province was more than 90%, and the highest seroprevalence (98.48%) was in Chenzhou (Table 1). The SaV seroprevalence in pigs in

Table 2 Seroprevalence of porcine cytomegalovirus in pigs of different categories in Hunan province as determined by ELISA

Category	Approximate age	Weight (kg)	No. examined	No. positive	Prevalence (%)
Breeding sows	Adult females	120-150	60	58	96.67
Suckling pigs	1-3 weeks	7-9	60	57	95.0
Weanling pigs	4-10 weeks	12-17	60	51	85.0
Fattening pigs	12-18 weeks	55-70	60	55	91.67
Total			240	221	92.08

Table 3 Seroprevalence of porcine sapovirus in pigs of different categories in Hunan province as determined by ELISA

Category	Approximate age	Weight (kg)	No. examined	No. positive	Prevalence (%)
Breeding sows	Adult females	120-150	42	35	83.33
Weanling pigs	1-3 weeks	12-17	96	66	68.75
Total			153	96	66.01

seven of the 10 representative administrative regions in Hunan province was more than 60%, and the highest seroprevalence (72.50%) was in Changsha (Table 1).

There were no reports on the seroprevalence of PCMV and SaV infection in pigs in China prior to our present investigation; only case reports and preliminary research in pigs have been documented [13, 16, 19, 25]. This is likely due to the scarcity of the detection reagents required to undertake the needed epidemiological surveys. The overall seroprevalence found in this study was 96.40% for PCMV and 63.40% for SaVs, which is consistent with previous results using a PCR approach [13, 14, 19, 25], indicating the frequent circulation of PCMV and SaVs in China. The overall seroprevalence of PCMV was similar to that reported in Canada [3] but lower than that in Japan [27]. This may be attributed to different animal-welfare and husbandry practices. The overall seroprevalence of SaVs was similar to that reported in Venezuela [1].

In the present study, breeding sows had the highest PCMV seroprevalence (96.67%), followed by suckling pigs (95.0%), fattening pigs (91.67%), and weanling pigs (85.0%) (Table 2), although these differences were not statistically significant ($P>0.05$). The highest seroprevalence of SaVs in breeding sows was 83.33%, followed by weaning pigs (68.75%) (Table 3). Our investigation indicated that weanling pigs had a higher seroprevalence of SaVs infection (68.75%). This result was not consistent with that of a previous study using a VLP ELISA approach [10], in which zero positivity was reported in the samples collected from pigs 10 and 12 weeks of age.

It is hypothesized that the seroprevalence of PCMV in sows is an indicator of infection because of vertical transmission of PCMV from sows to their offspring. In the present investigation, the seroprevalence of PCMV in sows was 96.67%, which supports this hypothesis. Although transmission of PCMV can occur through milk, through intrauterine transmission, and through transmission during the perinatal period [5, 6, 12], the most common routes of transmission are via the oropharyngeal and genital tracts, because the virus is excreted through body fluids [20]. In the present investigation, the seroprevalence of PCMV was also widely distributed among other categories of pigs, confirming that the most common route of transmission of PCMV is horizontal transmission. Very limited data are available regarding the transmission of SaVs, and in a recent review, it was concluded that the major route of transmission of SaVs is fecal-oral [2], but it is not yet known whether vomit and contaminated food are also infectious.

In conclusion, the results of the present survey indicate that both PCMV and SaV infections are highly prevalent in pigs in Hunan province, but this severe situation has received little attention in the past. Therefore6, it is imperative to apply integrated control strategies and measures to prevent and control PCMV and SaV infections in pigs in this province and elsewhere in China.

Acknowledgements This work was supported by the National Natural Science Foundation of China (grant no. 30571390) and the Science and Technology Foundation of Hunan Province (grant no. 2007FJ1003).

References

1. Alcalá AC, Rodríguez-Díaz J, de Rolo M, Vizzi E, Buesa J, Liprandi F, Ludert JE (2010) Seroepidemiology of porcine enteric sapovirus in pig farms in Venezuela. Vet Immunol Immunopathol 137:269–274
2. Anderson EJ (2010) Prevention and treatment of viral diarrhea in pediatrics. Expert Rev Anti Infect Ther 8:205–217
3. Assaf R, Boulillant AMP, Franco ED (1982) Enzyme linked immunosorbent assay for the detection of antibodies to porcine cytomegalovirus. Can Com Med 46:183–185

4. Collett MG, Roberts DC (2002) Cytomegalovirus infection in a pig in South Africa. J S Afr Vet Assoc 73:44–46
5. Cunha JB, de Mendonça MC, Miagostovich MP, Leite JP (2010) Genetic diversity of porcine enteric caliciviruses in pigs raised in Rio de Janeiro State, Brazil. Arch Virol 155:1301–1305
6. Edington N, Watt RG, Plowright W (1977) Experimental transplacental transmission of porcine cytomegalovirus. J Hyg (Lond) 78:243–251
7. Fishman JA, Rubin RH (1998) Infection in organ transplant recipients. N Engl J Med 338:1741–1751
8. Goltz M, Widen F, Banks M, Belak S, Ehlers B (2000) Characterization of the DNA Polymerase Loci of Porcine Cytomegaloviruses from Diverse Geographic Origins. Virus Genes 21: 249–255
9. Guo M, Hayes J, Cho KO, Parwani AV, Lucas LM, Saif LJ (2001) Comparative pathogenesis of tissue culture-adapted and wild-type Cowden porcine enteric calicivirus (PEC) in gnotobiotic pigs and induction of diarrhea by intravenous inoculation of wild-type PEC. J Virol 75:9239–9251
10. Guo M, Qian Y, Chang KO, Saif LJ (2001) Expression and self-assembly in baculovirus of porcine enteric calicivirus capsids into virus-like particles and their use in an enzyme-linked immunosorbent assay for antibody detection in swine. J Clin Microbiol 39:1487–1493
11. Hamel AL, Lin L, Sachvie C, Grudeski E, Nayar GP (1999) PCR assay for detecting porcine cytomegalovirus. J Clin Microbiol 37:3767–3768
12. Hamprecht K, Goelz R, Maschmann J (2005) Breast milk and cytomegalovirus infection in preterm infants. Early Hum Dev 81(12):989–996 Epub 2005 Nov 7
13. Jin M, Yu JM, Li HY, Zang Q, Cui SX (2010) Genetic diversity of porcine sapoviruses from Lulong County in China. Chin J Virol 26:255–259 (in Chinese)
14. Lee CS, Moon HJ, Yang JS, Park SJ, Song DS, Kang BK, Park BK (2007) Multiplex PCR for the simultaneous detection of pseudorabies virus, porcine cytomegalovirus, and porcine circovirus in pigs. J Virol Methods 139:39–43
15. L'Homme Y, Brassard J, Ouardani M, Gagné MJ (2010) Characterization of novel porcine sapoviruses. Arch Virol 155: 839–846
16. Li J, Yu XL, Li RC, Luo W, Xiang WJ, Li W, Wang Y, Ge M (2009) PCR detection and sequence analysis of gB gene of porcine cytomegalovirus. J Hunan Agri Univ (Nat Sci) 35:521–525 (in Chinese)
17. Li J, Yu XL, Li RC, Huang ZB, Ge M, Xiang WJ, Li W, Wang Y (2010) Expression and antigenic analysis of the immunodominant region of porcine cytomegalovirus gB protein. Chin J Prev Vet Med 2:126–130 (in Chinese)
18. Li RC, Liu GH, Huang ZB, Ding J, Wang ZN, Xiao CT, Yu XL (2011) Expression of VP1 gene and ELISA for detection of antibodies against porcine sapoviruses. Chin Vet Sci (in press) (in Chinese)
19. Liu XC, Yin YB, Zhang Y, Xiu SZ, Hai LM, Wang X (2009) Development of PCR assay for porcine cytomegalovirus detection. Chin J Vet Med 45:34–35 (in Chinese)
20. Lopo S, Vinagre E, Palminha P, Paixao MT, Nogueira P, Freitas MG (2011) Seroprevalence to cytomegalovirus in the Portuguese population, 2002–2003. Euro Surveill 16(25) (pii:19896)
21. Mijovski JZ, Poljsak-Prijatelj M, Steyer A, Barlic-Maganja D, Koren S (2010) Detection and molecular characterisation of noroviruses and sapoviruses in asymptomatic swine and cattle in Slovenian farms. Infect Genet Evol 10:413–420
22. Phan TG, Trinh QD, Yagyu F, Okitsu S, Ushijima H (2007) Emergence of rare sapovirus genotype among infants and children with acute gastroenteritis in Japan. Eur J Clin Microbiol Infect Dis 26:21–27
23. Prichard MN, Kern ER (2011) The search for new therapies for human cytomegalovirus infections. Virus Res 157:212–221
24. Rondhuis PR, De JMF, Sdhep J (1980) Indirect fluorescence antibody studies of porcine cytomegalo virus infections in the Netherlands. Tjidschr Diergeneeskd 105:46–58
25. Shen Q, Zhang W, Yang S, Chen Y, Ning H, Shan T, Liu J, Yang Z, Cui L, Zhu J, Hua X (2009) Molecular detection and prevalence of porcine caliciviruses in eastern China from 2008 to 2009. Arch Virol 154:1625–1630
26. Sung H, Schleiss MR (2010) Update on the current status of cytomegalovirus vaccines. Expert Rev Vaccines 9:1303–1314
27. Tajima T, Hironao T, Kajikawa T, Kawamura H (1993) Application of enzyme-link immunosorbent assay for the seroepizootiological survey of antibodies against porcine cytomegalovirus. J Vet Med Sci 55:421–424
28. Yang S, Zhang W, Shen Q, Huang F, Wang Y, Zhu J, Cui L, Yang Z, Hua X (2009) Molecular characterization and phylogenetic analysis of the complete genome of a porcine sapovirus from Chinese swine. Virol J 6:216

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 3	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Satoh K, Iwata-Takakura A, Osada N, Yoshikawa A, Hoshi Y, Miyakawa K, Gotanda Y, Satake M, Tadokoro K, Mizoguchi H. Hepatol Res. 2011 Oct;41(10):971-81. doi: 10.1111/j.1872-034X.2011.00848.x. Epub 2011 Jul 1.	公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)			日本

研究報告の概要

○高いトランスアミナーゼレベルの献血者から分離された新規DNA配列
目的: 日本では、急性肝炎の10－20%の原因は不明である。この研究は、非A-E型肝炎の原因となっている病原体を確かめるために行われた。
方法: ALT値が上昇した500人の献血者からの血清サンプルが、RNAヘリカーゼの保存領域から設計されたプライマーを用いてPCRによりスクリーニングされた。得られた配列のウイルス特性について調査された。
結果: 4つの血液サンプルに9496 bpの新しいDNA配列が含有されていることが分かった。これをKIs-Vと称する。KIs-Vは制限酵素*Sal*I及び*Bst*XIに反応した。ローリングサークル増幅法でKIs-V DNAが大量に増幅された。ショ糖密度勾配遠心法において、KIs-Vは1.158 g/cm3の密度であった。有機溶媒処理はKIs-Vの密度を上昇させた。KIs-Vはヒト白血球DNAから検出されなかった。連続濾過により、KIs-Vは30-50nmの粒子であることが示唆された。*in silico*分析より、KIs-Vは13のORFを含むことが分かり、既報告のいかなるウイルスタンパク質とも相同性を示さなかった。1つの遺伝子は、DNAポリメラーゼ領域に類似性を示した。転写開始及びCpGアイランドの強いシグナルが確認された。KIs-Vのヌクレオチド構成は複製開始点と終点を含む環状DNAゲノムの特徴を示した。予備研究で、KIs-Vは高いALT値を示すE型肝炎ウイルス抗体陽性者において度々検出された。
結論: 新しい配列のKIs-Vは、高いALT値を示す献血者から分離された。KIs-Vはエンベロープを有する新しい分類の二本鎖環状DNAゲノムであることが示された。

報告企業の意見	今後の対応
ALT値が高い献血者から、新しい分類のウイルスに属すると思われるKIs-Vが分離されたとの報告である。	今後も情報の収集に努める。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

12/

Hepatology Research

Hepatology Research 2011; 41: 971–981 doi: 10.1111/j.1872-034X.2011.00848.x

Original Article

Novel DNA sequence isolated from blood donors with high transaminase levels

Koei Satoh,[1] Akiko Iwata-Takakura,[1] Naoki Osada,[2] Akira Yoshikawa,[3] Yuji Hoshi,[1] Keiko Miyakawa,[1] Yuko Gotanda,[1] Masahiro Satake,[1] Kenji Tadokoro[1] and Hideaki Mizoguchi[3]

[1]*Central Blood Institute, Japanese Red Cross, Tokyo,* [2]*Department of Population Genetics, National Institute of Genetics, Mishima, and* [3]*Saitama Blood Center, Japanese Red Cross, Saitama, Japan*

Aim: In Japan, the etiology of 10–20% of cases of acute hepatitis remains unclarified. This study was conducted to verify the agent causing non-A–E hepatitis.

Methods: Serum samples from 500 blood donors with elevated alanine aminotransferase (ALT) levels were screened by polymerase chain reaction using primers constructed from conserved areas of RNA virus helicase. The sequence obtained was investigated for viral properties.

Results: Four blood samples were found to contain a novel DNA sequence of 9496 bp, which was designated KIs-V. KIs-V was sensitive to the restriction enzyme *SalI* and *BstXI*. Rolling-circle amplification produced an excessive amount of KIs-V DNA. In sucrose density gradient ultracentrifugation, KIs-V banded at a 1.158-g/cm^3 density. Detergent treatment increased the density of KIs-V. There was no KIs-V DNA amplification from human leukocyte DNA. Serial filtration suggested that KIs-V was included in a 30–50-nm size particle. *In silico* analysis revealed that KIs-V contained 13 potential genes, none of which showed homology to any viral proteins reported. One gene showed similarity to a DNA polymerase domain. Strong signals for transcription initiation and a CpG island were identified. The nucleotide composition of KIs-V showed a characteristic feature of circular DNA genomes that contain a replication origin and a terminus. In a preliminary study, KIs-V was frequently identified among hepatitis E virus antibody positive individuals with elevated ALT levels.

Conclusion: A new sequence KIs-V was isolated from blood donors with elevated ALT levels. It was suggested that KIs-V is a double-stranded circular DNA genome derived from a novel category of enveloped viruses.

Key words: alanine aminotransferase, hepatitis virus, non-A–E hepatitis, RNA helicase

INTRODUCTION

VIRAL HEPATITIS CONSTITUTES a disease category of vital importance not only because of its high morbidity and mortality but also because of its high prevalence and transmissibility. To date, a causal relationship between viruses and hepatitis has been established for hepatitis A, B, C, D and E. A number of serological and/or genetic methods have been proposed for the detection of these viruses in the sera obtained from patients with hepatic dysfunction. Some of them have been successfully implemented for clinical diagnosis and blood screening. In 10–20% of patients, however, the etiology of acute hepatitis remains unclarified despite the technological advances in molecular biology.[1,2] Representational difference analysis[3] was used to detect the GB virus[4] and the TT virus.[5] Non-specific polymerase chain reaction (PCR) analysis was also used to detect novel single-stranded DNA fragments.[6] In contrast to these sophisticated but laborious methods, we attempted to directly detect a new sequence using primers constructed from a conserved portion of RNA virus helicase.[7–9] Applying this method to blood samples from volunteer blood donors with high transaminase levels, we successfully detected a novel sequence that was deemed to be a part of an enveloped DNA virus. In this article, we describe the characteristics of the novel sequence obtained and its homology with those of known organisms.

Correspondence: Dr Masahiro Satake, Tokyo West Blood Center, Japanese Red Cross, 3256 Midori-cho, Tachikawa, Tokyo 190-0014, Japan. Email: ma-satake@tokyo.bc.jrc.or.jp
Received 5 March 2011; revision 27 May 2011; accepted 27 May 2011.

METHODS

Blood samples and testing for hepatitis virus

BLOOD SAMPLES WERE obtained from the blood donors who were negative for hepatitis B virus (HBV)-DNA and hepatitis C virus (HCV)-RNA but were disqualified because of high alanine aminotransferase (ALT) levels (>60 IU/L). The method for nucleic acid amplification tests for HBV and HCV has been described elsewhere.[10] Anti-hepatitis E virus antibody (HEVAb) was measured by IgG/IgM anti-HEV EIA (Institute of Immunology, Tokyo, Japan). HEV-RNA was detected by reverse transcription (RT)–PCR following the method of Mizuo *et al.*[11] The whole study program on the identification of novel viruses among blood donors was approved by the Japanese Red Cross ethics committee.

Screening for and determination of nucleotides with novel sequences

Nucleic acids were extracted from 0.1 mL of plasma samples using an extraction kit (Smitest ExR&D; Genome Science, Fukushima, Japan) and were reverse transcribed (50°C, 30 min; 94°C, 15 min) using a reverse transcriptase (SuperScript III; Invitrogen, Tokyo, Japan). PCR was performed for 35 cycles (94°C, 30 s; 55°C, 30 s; 72°C, 2 min) using primers IA-3 and IV-3 (Table 1) that were constructed according to the amino acid (a.a.) sequence of the consensus domain of helicase of positive-stranded RNA viruses.[7–9] Five hundred blood samples were thus screened, and a novel sequence obtained was designated KIs. It was first determined that the KIs sequence had a DNA nature (see below). Employing the primer walking technique, unknown portions of the KIs sequence were amplified by PCR without RT using primers constructed from a portion of the KIs sequence and the kit primers (DNA Walking SpeedUp Premix Kit-II; Seegene, Seoul, South Korea). The extension and determination of the sequence was repeated, and the sequence thus obtained was designated KIs-V.

In the screening or experiments that required the confirmation of KIs-V, nested PCR was performed using primers that were constructed on the basis of the KIs-V sequence: 101-C and N101-B for the first-round PCR

Table 1 Primers used in this study

Target sequence	Names	Polarity	Sequences	Positions (nt)
KIs	IA-3	Sense	5′-CCIACIGGIAGIGGIAARAGCAC-3′	
	IV-3	Antisense	5′-CTICCMGTGCGICCICGSCGYTG-3′	
KIs-V	101-C	Sense	5′-CAACACCGCAATCACAAAGT-3′	3007–3026
	N101-B	Antisense	5′-AACATTGAAACGTCATGTCC-3′	3445–3464
	KS-2	Sense	5′-CTCGTCTCGTCGTCATCGTA-3′	3082–3101
	N101-D	Antisense	5′-CATTTGCTCCCGCTGGAGATG-3′	3365–3385
	KIV-13	Sense	5′-CAATGAGATTGGATGGACGA-3′	9195–9214
	101-TT	Antisense	5′-CCGTGAAGGTGTTGGCAAAG-3′	321–340
	KIV-14	Sense	5′-CGTGTACTAACTATACTGAC-3′	9255–9274
	KIV-2	Antisense	5′-CACTCGTCCATTATACCGCT-3′	121–140
	KIV-5	Sense	5′-AGAACGGTGACGAGATAAAC-3′	457–476
	101-Su	Sense	5′-ATGGGCTATTCTCAATCACC-3′	5715–5734
	101–29	Sense	5′-ACCTGCGCCTGAGGCTACGA-3′	6888–6907
	101–45	Sense	5′-TGGGTAAAGTATGCAGAGTTGT-3′	8863–8884
	101-T	Antisense	5′-TCGATCCGCTTTCGGTACGT-3′	1383–1402
	101-6R	Antisense	5′-CACGCGATTCCCATATCCCT-3′	8789–8808
	X-7	Antisense	5′-TGGGAGTATGGAGTCGACAT-3′	5331–5350
	X-3	Antisense	5′-GTTGGGAAGAGGTTGATTGT-3′	4091–4110
	101–22	Sense	5′-GCTCAACGAACTCGCCTCGA-3′	4888–4907
HBV		Sense	5′-TCGTGTTACAGGCGGGGTTT-3′	192–211
		Antisense	5′-CGAACCACTGAACAAATGGC-3′	685–704
HCV		Antisense	5′-AACACTACTCGGCTAGCAGT-3′	246–265
		Sense	5′-CTGTGAGGAACTACTGTCTT-3′	45–64
B19V	425	Sense	5′-CAGTATCAGCAGCAGTGGTGGTG-3′	1956–1978
	426	Antisense	5′-GGGATTAGAAGCTCCCACATGGC-3′	2360–2382

(34 cycles); KS-2 and N101-D for the second-round PCR (25 cycles) (Table 1) (94°C, 30 s; 55°C, 30 s; 72°C, 2 min). The KIs-V nucleotide positions were numbered in this paper according to the sequence index that was registered in GenBank (see below) in which the beginning of the index was arbitrarily assigned.

Characterization of KIs-V

Nucleic acids were extracted from a KIs-V-positive plasma and divided into three tubes. The first aliquot (0.1 mL) was digested with 4 units of deoxyribonuclease I (DNase I; Takara Shuzo, Shiga, Japan) at 37°C for 1 h and then heated at 95°C for 10 min to inactivate the enzyme. The second aliquot was digested with RNase (Nacalai Tesque, Kyoto, Japan) at 37°C for 1 h and heat-inactivated. The third aliquot was not treated with any of these enzymes. From each of the three samples above, nucleic acid was extracted and subjected to nested RT–PCR. The RT–PCR products were separated and visualized by electrophoresis.

Inverted PCR was performed to examine whether KIs-V was a circular DNA using two primer combinations that were constructed for the sequences near both ends of the extended sequence: KIV-13 and 101-TT; KIV-14 and KIV-2 (Table 1). The circular structure of KIs-V was further confirmed employing rolling-circle amplification (RCA) using an Illustra TempliPhi DNA Amplification kit (GE Healthcare Science, Piscataway, NJ, USA). In brief, DNA extracted from KIs-V-positive plasma was amplified overnight at 30°C using a bacteriophage Phi29 DNA polymerase and random hexamer primers. The amplification product was subjected to nested PCR using the primers for KIs-V. The same RCA experiment was conducted using two sets of primers, each of which consisted of five primers constructed from the KIs-V sequence (sense primers 101-C, KIV-5, 101-Su, 101–29, 101–45; antisense primers N101-B, KIV-2, 101-T, 101-6R, X-7; Table 1).

Enzyme digestion experiments were performed using two restriction enzymes specific for double-stranded DNA, *Sal*I and *Bst*XI. The *Sal*I consensus cleavage site was identified within the sequence, and primers were constructed for both sides of the cleavage site. DNA extracted from plasma containing 10^7 copies/mL KIs-V was treated with varying concentrations of *Sal*I (Takara Shuzo) at 37°C for 90 min and then heat-inactivated. DNA was extracted from the *Sal*I-treated and non-*Sal*I-treated samples and subjected to PCR using the primer pairs constructed. For the digestion with *Bst*XI, a diluted sample containing 10^5 copies/mL KIs-V was used. A plasma sample containing 10^4 copies/mL human parvovirus B19 (B19V), a single-stranded DNA virus, was included as a control. Extracted DNA was digested with *Bst*XI (Takara Shuzo) at 45°C for 1 h. The primers used for PCR were constructed so that they cross over the *Bst*XI cleavage site in the KIs-V sequence and authentic B19V sequence (GenBank accession no. M13178-1a).

To elucidate the approximate size of the putative particle containing the KIs-V sequence, a filter passage experiment was carried out. The pore sizes of the filters used were 0.2, 0.1, 0.05 and 0.03 μm (Nuclepore Track-Etch Membrane; Whatman Japan, Tokyo, Japan). KIs-V-positive plasma diluted at a concentration of approximately 10^3 copies/mL was loaded onto the filter with a 0.2-μm pore size. After removing an aliquot for PCR, the effluent from this filter was loaded onto the filter with the second larger pore size, namely, a filter with a 0.1-μm pore size. This sequential loading was repeated until effluent was obtained from the filter with a 0.03-μm pore size. As a reference, HBV-containing plasma was also subjected to the same sequential filtration. Tenfold titration series were prepared from each effluent, from which DNA was extracted and subjected to PCR using KIs-V-specific or HBV-specific primers (Table 1). The end titration value with positive PCR was evaluated as the viral concentration in the effluent.

Ultracentrifugation in sucrose density gradient

A plasma cocktail (0.4 mL) containing KIs-V, HBV and HCV was layered onto a stepwise density gradient consisting of 1.0 mL of 60% (w/v) sucrose and 0.4 mL each of 50%, 40%, 30% and 20% sucrose in Tris-HCl buffer (50 mM, pH 8.0, TE buffer) containing 1 mM ethylenediamine tetraacetic acid in a 4.4-mL tube. The tube was overlaid with 1.4 mL of TE buffer and centrifuged at 256 760 *g* for 16.5 h at 10°C in a Beckman SW60Ti rotor (Beckman, Palo Alto, CA, USA). The tube was pierced at the bottom, and 200-μL fractions were collected, for which PCR analysis of KIs-V-DNA, HBV-DNA and HCV-RNA was performed. The primers used for determining HBV or HCV are shown in Table 1.

To explore whether KIs-V is lipid-enveloped, KIs-V-positive samples were either treated or not treated with 0.1% Nonidet P-40 in TE buffer for 5 min. The samples were then ultracentrifuged, and the distribution pattern of KIs-V was determined as described above.

Sequence analysis

The protein coding regions and transcription promoter sites were predicted using the MolQuest web interface programs FGENESV0 and TSSG, respectively (www.

molquest.com). Protein coding regions were predicted assuming the eukaryote genome genetic code. The transmembrane regions of the predicted proteins were inferred using the TMHMM web server ver. 2.0 (www.cbs.dtu.dk/services/TMHMM/). Homology search (BLAST) and conserved domain search (CD-search) were conducted through the NCBI web server (www.ncbi.nlm.nih.gov/).

The GC skew plot was generated using an in-house Perl script. The cumulative values of (#G − #C) / (#G + #C) were plotted with a window size of 2 kb and 100-bp intervals, where #G and #C represent the numbers of G and C nucleotides, respectively, in the window on the sense strand.

RESULTS

Detection of KIs and KIs-V from donors with high ALT levels

PLASMA SAMPLES FROM 12 out of 500 donors with more than 60 IU/L ALT were found to be RT–PCR-positive using the primers IA-3 and IV-3. Eight of the 12 samples were either positive for the GB virus or contaminated with bacteria and were excluded. The remaining four samples, three from male donors and one from a female donor, were subjected to further analysis. The ages of the four donors ranged 30–49 years. Their ALT levels were between 61 and 82 IU/L. The DNA sequences of the amplification products from the four donors were identical and were designated KIs. The length of KIs was unexpectedly short (210 bp: nt 3170–3379) (Fig. 1) and, to our surprise, KIs did not show homology with the consensus sequence of RNA virus helicase even though it was obtained using primers constructed from RNA virus helicase.

During the initial screening, it was noticed that there was little difference in PCR yield with or without prior RT, suggesting a DNA nature of the sequence. To confirm this, nucleic acids extracted from a KIs-positive sample was treated either with DNase or RNase and then subjected to RT–PCR. Nucleic acids treated with RNase, not DNase, were amplified by RT–PCR, indicating that the novel sequence obtained was a DNA (data not shown).

After several cycles of extension of the KIs sequence using the primer walking method, inverted PCR was carried out using two primer combinations that were constructed near both ends of the extended sequence. PCR produced sequences connecting both ends with concordant sequences (Fig. 2). The total length of the sequence was determined to be 9496 nucleotides from this experiment. The sequence was designated KIs-V and registered in GenBank with the accession number AB550431. Using the primer sets for the nested PCR for KIs-V (101-C and N101-B, KS-2 and N101-D), screening was repeated for the 500 blood samples, which resulted in the identification of 16 samples, including the four samples described above, to be KIs-V-positive.

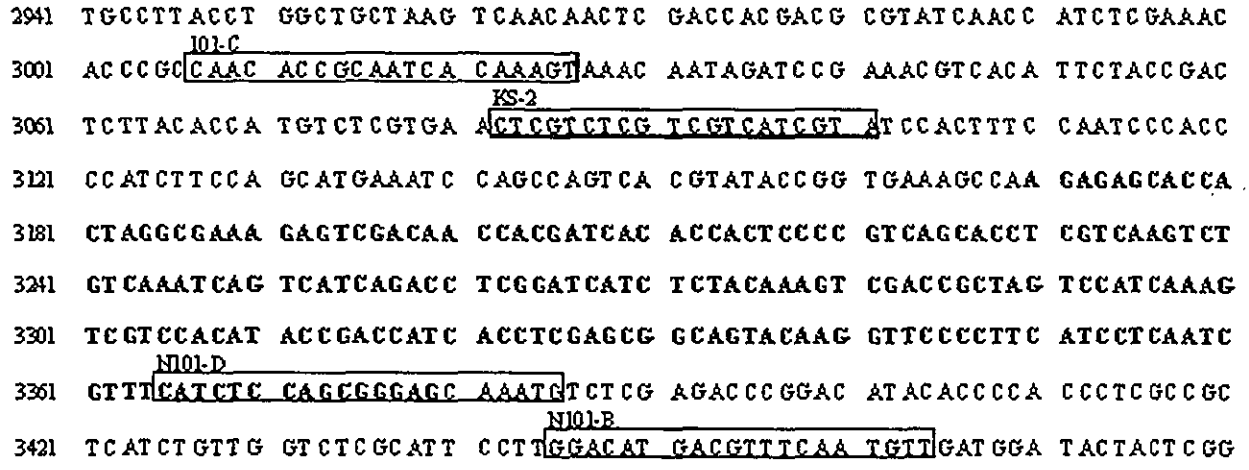


Figure 1 Nucleotide sequences of KIs and primers used to detect KIs-V. Bold characters indicate the KIs sequence that was first detected using the primers constructed from the consensus domain of helicase of positive-stranded RNA viruses. Primers used to detect KIs-V are shown in boxes: first-round polymerase chain reaction (PCR) primers, 101-C and N101-B; second-round PCR primers, KS-2 and N101-D.

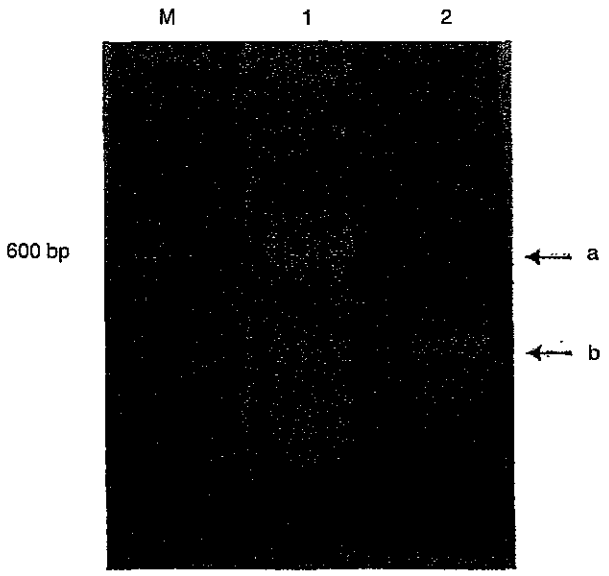


Figure 2 Electrophoresis of products of inverted polymerase chain reaction (PCR) using primers constructed near both terminals of KIs-V. The primers used are KIV-13 (nt 9195–9214) and 101-TT (nt 321–340) for lane 1 and KIV-14 (nt 9255–9274) and KIV-2 (nt 121–140) for lane 2. Bands indicated by arrow a in lane 1 and arrow b in lane 2 show the polynucleotides that connect both ends of the extended sequence. The bands were excised from the gel and subjected to PCR and sequencing, which revealed that they had a concordant sequence. The nucleotide lengths of band a and band b were assumed to be 641 bp and 381 bp, respectively, on the basis of the whole sequence of KIs-V. Lane M shows the DNA ladder marker by every 100 bp with the bold line indicating 600 bp.

Along with the whole KIs-V sequence from one of the four samples, primer pairs were serially constructed, targeting overlapping sequences of approximately 500 bp length each. PCR with the primer pairs was carried out for the other three KIs-positive samples. It was revealed that the whole sequence obtained from each of the three samples was identical to that of the first sample: the four blood donors possessed KIs-V with completely identical sequences. The concentration of KIs-V in the four donor samples was between 10^6 and 10^8 copies/mL, as verified by limiting dilution assay.

To confirm that KIs-V is not a DNA derived from human host genomes, PCR was performed for genomic DNA from leukocytes obtained from two KIs-V-negative individuals. Using the nested primers described above, no amplification was achieved in any of them, indicating KIs-V being of non-host origin (data not shown).

Properties of KIs-V

The overnight amplification of a KIs-V-positive plasma sample with RCA using random hexamer primers produced a large amount of DNA that was confirmed to be derived from KIs-V by PCR analysis (data not shown). The same results were obtained in the two series of RCA that employed KIs-V sequence-based primers. These findings together with those from inverted PCR indicate that KIs-V forms a circular DNA in the sample.

Nine cleavage sites for the restriction enzyme *Sal*I were identified in the KIs-V sequence: nt 688, 1349, 3193, 3279, 5333, 6496, 8013, 8135 and 8748. PCR was performed targeting restriction sites nt 3193 and 3279 using primer pairs KS-2 (nt 3082–3101)/X-3 (nt 4091–4110) and 101-C (nt 3007–3026)/N101-B (nt 3445–3464). The amplification product was not obtained from a sample treated with 10 U/μL *Sal*I solution (Fig. 3a).

Four cleavage sites for *Bst*XI were identified in the KIs-V sequences: nt 423, 2052, 4991 and 7550. Primers that crossed the cleavage site nt 4991 were prepared: 101–22 (nt 4888–4907) and X-7 (nt 5331–5350). The pretreatment of KIs-V DNA with 10 U/μL *Bst*XI abrogated the production of polynucleotides by PCR using the above primers (Fig. 3b left). In the B19V sequence, two cleavage sites for *Bst*XI were identified: nt 2033 and nt 4730. Targeting nt 2033, primers were constructed: 425 (nt 1956–1978) and 426 (nt 2360–2382) (Table 1). The pretreatment of B19V-DNA with *Bst*XI did not change the density of the bands of PCR products (Fig. 3b right). Overall, these findings indicate that KIs-V forms a double-stranded DNA structure.

Regarding the effect of DNase treatment on PCR, the DNase treatment (4U DNase I at 37°C for 1 h) of KIs-V-positive plasma not before but after DNA extraction using a proteinase-containing reagent abrogated the amplification of KIs-V, indicating that KIs-V DNA present in plasma is encapsulated by a proteinase-sensitive substance (data not shown).

We next carried out the serial passage of KIs-V-containing plasma through filters of various pore sizes. Because of the blocking of the filter, we were often unable to recover the full volume loaded in the effluent. It is nevertheless evident that the 0.05-μm filter passed the KIs-V sequence freely, whereas the 0.03-μm filter trapped it completely, as no KIs-V amplification was obtained using neat effluent from the 0.03-μm filter (Table 2). These findings indicate that the size of the putative particle containing the KIs-V sequence is between 30 and 50 nm. As a reference, the same experi-

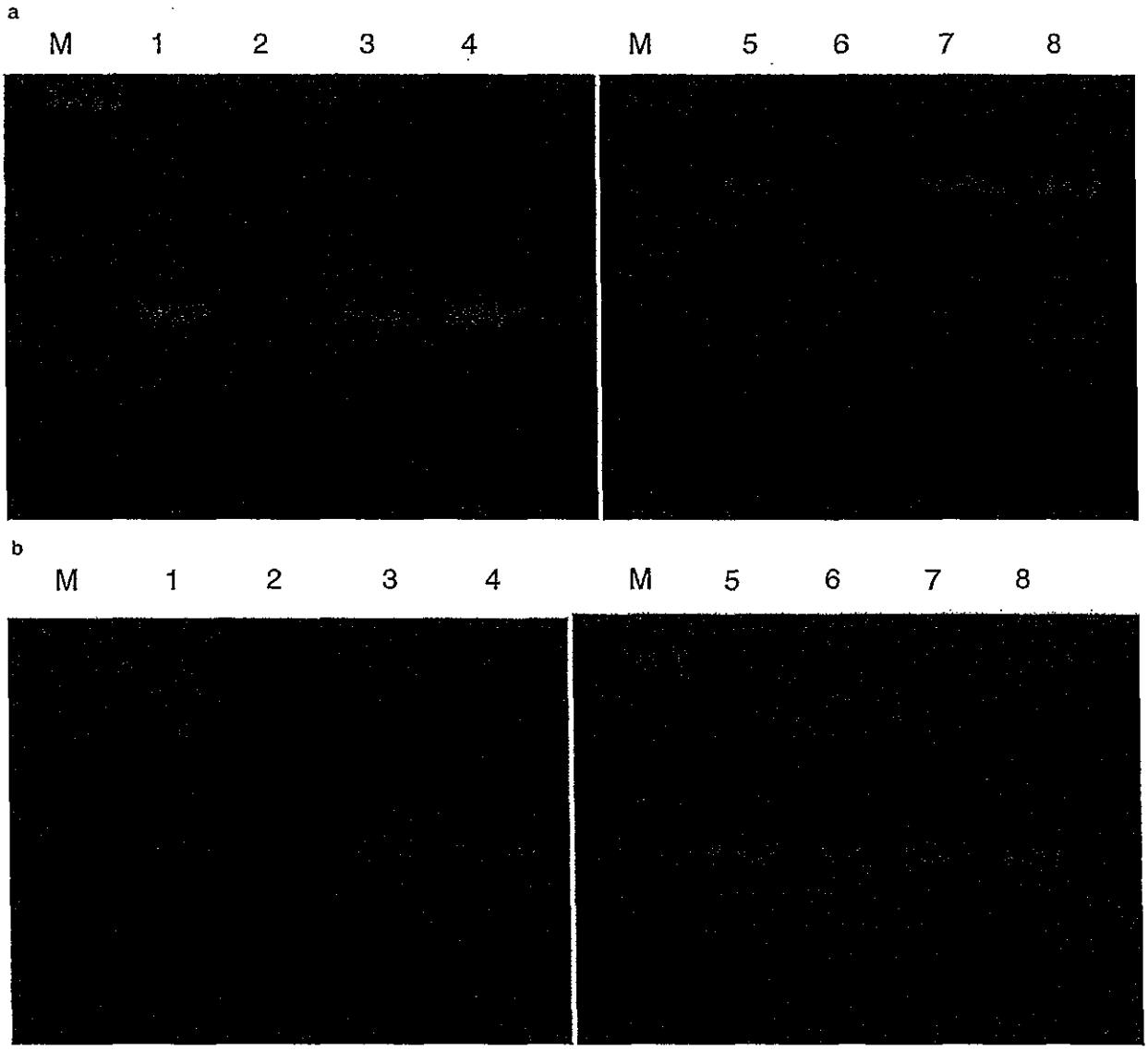


Figure 3 Digestion of DNA with restriction enzymes *SalI* (a) and *Bst*XI (b) that are specific for double-stranded DNA. (a) DNA extracted from plasma containing 10^7 copies/mL KIs-V was digested with *SalI* and amplified using primers 101C and N101B (left) or KS-2 and X-3 (right). There are two *SalI*-cleavage sites between the sense primer and the antisense primer in both primer combinations. The concentrations of *SalI* were 10 U/μL for lanes 2 and 6, 1 U/μL for lanes 3 and 7, and 0.25 U/μL for lanes 4 and 8. Lanes 1 and 5 show the control without the enzyme. (b) DNA extracted from a sample containing 10^5 copies/mL KIs-V (left) and DNA from plasma containing 10^4 copies/mL human parvovirus B19 (B19V) (right) were digested with *Bst*XI and electrophoresed after polymerase chain reaction (PCR). Primers used for PCR are X-7 and 101–22 for KIs-V and 425 and 426 for B19V. There is one *Bst*XI-cleavage site between the primers in both the KIs-V and B19V sequence. The concentrations of *Bst*XI were 10 U/μL for lanes 2 and 6, 1 U/μL for lanes 3 and 7, and 0.25 U/μL for lanes 4 and 8. Lanes 1 and 5 show the control without the enzyme. Lane M shows DNA ladder marker by every 100 bp with the bold line indicating 600 bp.

Table 2 Filter passage performance of KIs-V-positive plasma

Pore size of filters (μm)	0.2	0.1	0.05	0.03
KIs-V				
Loaded volume (mL)	5	4	2.3	1.7
Effluent volume (mL)	4	2.3	1.7	0.8
End titer†	1000	1000	1000	0‡
HBV				
Loaded volume (mL)	5	4	2.5	2
Effluent volume (mL)	4	2.5	2	1
End titer	1000	1000	1000	0

Plasma containing either KIs-V or hepatitis B virus (HBV), the concentration of which was adjusted to approximately 10^3 copies/mL, was loaded onto the filter with 0.2-μm pores and the effluent of this filter was loaded onto the filter with the second larger pore size.
†Maximum plasma dilution that yielded positive polymerase chain reaction (PCR) result.
‡Neat effluent of the filter did not yield positive PCR result.

ment was performed using HBV-containing plasma. It was revealed that the 0.03-μm filter, not the 0.05-μm filter, trapped HBV, which is in agreement with the Dane particle being 42 nm in diameter, confirming the filter performance.

A plasma cocktail containing KIs-V, HBV and HCV was fractionated by ultracentrifugation in a sucrose density gradient. KIs-V appeared in the fractions with a peak at 1.158 g/cm³ as revealed by PCR, while HBV and HCV appeared in those with peaks at 1.23 and 1.024 g/cm³, respectively (Fig. 4). When KIs-V-positive samples were treated with detergent and subjected to gradient ultracentrifugation, the peak density of the fractions containing the KIs-V sequence shifted from 1.158 g/cm³ for the non-treated sample to 1.210 g/cm³ for the treated sample, indicating that KIs-V is lipid-enveloped (Fig. 5).

In silico analysis of KIs-V sequence

Potential protein coding regions in the KIs-V sequence were searched for using a computer program, which predicted 13 potential genes. The hypothetical genes were numbered from genes 1 to 13 according to the sequence index (Table 3). Ten and three genes were encoded in the sense and complementary strands, respectively. Among them, the longest open reading frame (ORF) potentially encoded an 860-a.a.-long protein (gene 13) and the second longest ORF potentially encoded an 815-a.a.-long protein (gene 6). Detailed annotations are summarized in Table 3.

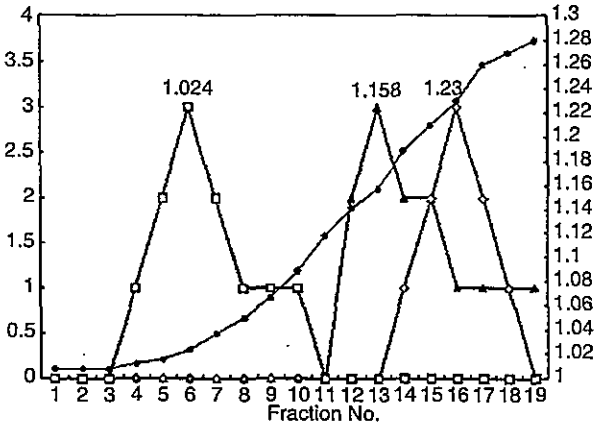


Figure 4 Sucrose density gradient analysis of KIs-V. A cocktail of plasma sample containing KIs-V, hepatitis B virus (HBV) and hepatitis C virus (HCV) was subjected to sucrose density gradient ultracentrifugation, and 19 fractions were collected. The relative amounts of the polymerase chain reaction (PCR) products for each virus are shown in a composite figure. The left axis shows the intensity of the gel band of PCR products for HBV (◇), HCV (□) and KIs-V (▲). The right axis shows sucrose density (g/mL, ●).

Although no viral proteins showed homology to the predicted genes, 10 predicted proteins showed low to high homologies to proteins encoded in bacteria or fungi. In particular, genes 10 and 13 showed high

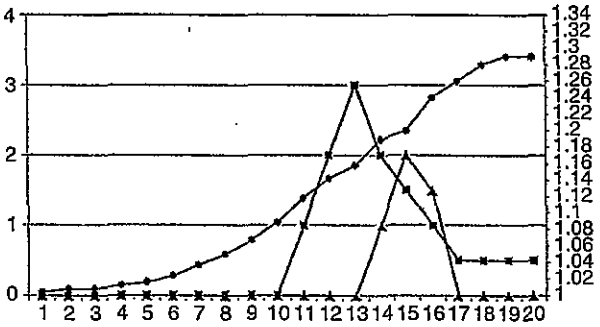


Figure 5 Sucrose density gradient analysis of detergent-treated and non-detergent-treated KIs-V. A detergent (NP-40)-treated and non-detergent-treated KIs-V sample were subjected to sucrose density gradient ultracentrifugation, and 20 fractions were collected. The relative amounts of the polymerase chain reaction (PCR) products of each sample are shown in a composite figure. The left axis shows the intensity of the gel band of PCR products for non-detergent-treated KIs-V (■) and that for detergent-treated KIs-V (▲). The right axis shows sucrose density (g/mL, ●).

Table 3 *In silico* analysis of KIs-V sequence

Gene ID	Strand	Start	End	Length (aa)	PI†	MW‡ (kD)	Best BLAST hit, Identity (%), E-value	CD-search§	TMHMM¶
1	+	76	450	124	4.76	13.4441	YP_003797582, 33%, 3.1	No hit	No hit
2	−	594	1361	255	10.57	29.2631	XP_659885, 39%, 0.42	No hit	No hit
3	+	1592	1870	92	7.81	9.1172	YP_288237, 34%, 0.28	No hit	68–88
4	+	3070	3669	199	9.92	21.2769	ZP_04094369, 26%, 0.97	No hit	No hit
5	+	3826	4293	155	10.44	18.0216	No hit	No hit	No hit
6	+	3831	6278	815	6.63	86.5631	No hit	PRK14971	No hit
7	+	5233	6054	273	11.45	32.3655	ZP_07063563, 23%, 6.0	No hit	106–124
8	+	6224	6484	86	10.93	10.3484	No hit	No hit	No hit
9	+	6611	6880	89	12.81	10.3323	XP_001527475, 30%, 7.4	No hit	No hit
10	+	6877	7872	331	9.51	36.6633	XP_567444, 40%, 6e-37	No hit	No hit
11	+	7888	8610	240	10.33	25.9111	ADV24399, 28%, 0.004	No hit	No hit
12	−	8476	8784	102	10.28	11.9779	XP_741105, 40%, 9.8	No hit	No hit
13	−	9455	2541	860	10.20	92.5745	ADV24464, 33%, 3e-67	cl02694	No hit

†Predicted isoelectric point.
‡Predicted molecular weight.
§Conserved domain search result.
¶Prediction of transmembrane domains.

homologies to hypothetical proteins encoded in *Cryptococcus*. We also searched for putative functional domains using the CD-search program.[12] Gene 6 and gene 13 showed similarities to a DNA polymerase domain (GenBank accession no. PRK14971) and the LCCL domain (GenBank accession no. cl02694), respectively. The TMHMM program predicted that two hypothetical proteins encoded by gene 3 and gene 7 harbored short transmembrane regions.[13]

We next investigated the pattern of nucleotide composition skew in the KIs-V sequence. In many circular bacterial and viral genomes, the bias of nucleotide G relative to C is observed around the origin and terminus of replication, which is possibly due to a strand-specific mutation rate. Previous studies have shown that in the GC skew plot, a plot of cumulative values of the bias, a valley and a peak would correspond to the replication origin and terminus of a circular genome, respectively.[14] In contrast, a single valley would be observed in a linear genome. In the KIs-V sequence, a distinct valley and a peak were found around nt 7000 and nt 2000, respectively (Fig. 6), indicating that the replication origin and the replication terminus were located around nt 7000 and nt 2000, respectively.

Using the TSSG program trained for predicting mammalian promoter sites,[15] we found that a region around the TATA box on the sense strand starting from nt 5438 had strong signals for transcription initiation. In addition, the adjacent region on the complementary strand showed weak signals for transcription initiation. This region also contained a CpG island spanning from nt 4717 to nt 5194, which contains more than 50% GC composition and more than 0.6 observed/expected CpG numbers. Another large CpG island was found in the region between nt 455 and nt 2008 with the same criteria.

KIs-V prevalence among blood donors

All four KIs-V-positive samples were found to be positive also for HEVAb by enzyme-linked immunosorbent assay although they were negative for HEV-RNA by

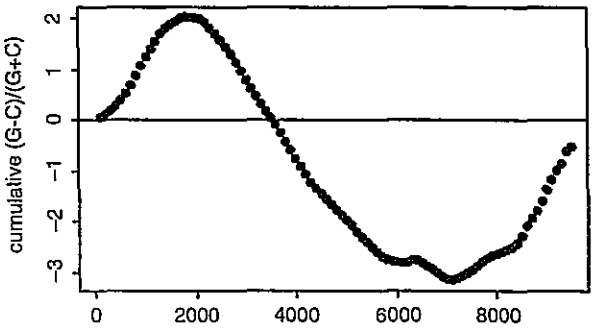


Figure 6 GC skew plot of KIs-V sequence. The cumulative scores of (G − C) / (G + C) in the 2000-bp-long window were calculated at 100-bp intervals. The center of the windows was plotted on the abscissa.

Table 4 Relationship between KIs-V, HEVAb, and ALT level

	ALT ≤60		ALT >60	
HEVAb	Negative	Positive†	Negative	Positive†
Number of samples investigated	120	196	100	100‡
Number of samples positive for KIs-V	1	0	1	36§

†All of the hepatitis E virus antibody (HEVAb)-positive samples were negative for HEV-RNA.
‡Male, 84; female, 16.
§Male, 30; female, 6.
ALT, alanine aminotransferase.

RT–PCR. Twelve other KIs-V-positive samples detected among the 500 samples using nested PCR were also HEVAb-positive. These findings prompted us to investigate the relationship between HEV and KIs-V. Five hundred and sixteen blood samples were newly obtained from blood donors and categorized into four groups by ALT level (either ≤60 or >60) and the presence or absence of HEVAb. Each of the four groups consisted of 100 or more blood samples. None of the 296 HEVAb-positive samples contained HEV-RNA. It was revealed that 36 out of 38 KIs-V-positive samples were found in the group with a high ALT level as well as positive for HEVAb (Table 4). The ALT level in the KIs-V-positive samples ranged 61–226 with the mean value being 88.3. There was no difference in male-to-female ratio between KIs-V-positive and KIs-V-negative samples.

DISCUSSION

A NOVEL DNA sequence designated KIs was detected in blood donors with ALT levels of more than 60 IU/L using primers constructed from conserved areas of RNA virus helicase. Because the consensus domain of helicase is widely shared by viruses including HCV and the GB virus,[9] we examined whether it was shared by unknown viruses associated with liver diseases, and screening by RT-PCR was carried out using primers constructed on the basis of the a.a. sequence of the helicase. The sequence obtained was 210-bp long and showed no homology with the consensus sequence of the helicase, suggesting that the sequence of the constructed primers was not inherent in the helicase. Possibly, the primer sequences with multiple positions permissive of alternative nucleotides decreased their hybridizing specificity, resulting in the coincidental acquisition of matching to a novel sequence.

Although there was seemingly no implication of RNA helicase in KIs, we concentrated on exploring its viral property. Using the primer walking method, we extended KIs to produce a sequence of 9496 nucleotides designated KIs-V. The experiments examining the effect of RT and the digestion with either DNase or RNase on the PCR yield confirmed that KIs-V is a DNA. Treatment with the restriction enzyme *Sal*I or *Bst*XI revealed that KIs-V is a double-stranded DNA. The RCA experiment[16] using either random hexamer primers or KIs-V-sequence-based primers yielded an excessive amount of DNA having the KIs-V sequence. Inverted PCR using the primers constructed near both terminals of the sequence produced the connecting sequence. These results indicate that KIs-V has a circular form.

It may be argued that a plasmid has similar characteristics to those described above. Direct treatment, however, of the KIs-V-positive sample with DNase did not affect the PCR yield, whereas the pretreatment with proteinase-containing extraction reagent followed by DNase digestion abrogated the PCR amplification of KIs-V. This indicates that KIs-V is present in plasma not as a nucleic acid per se but as an organism encapsulated by a protein. Moreover, the filter passage experiment indicates that KIs-V is integrated in a particle-like organism having a 30–50 nm size. It is inconceivable that a plasmid with bp of less than 10 000 has the filtration property presented here, namely, non-passage through a 0.03-μm pore filter.

The density of KIs-V was determined as 1.158 g/cm^3, indicating that KIs-V is derived from a microorganism with its inherent density. Detergent treatment of the sample increased the peak density of KIs-V, indicating that KIs-V is lipid-enveloped. As no amplification was achieved with any of the leukocyte DNA samples, KIs-V was considered not to be a sequence ubiquitously present in human hosts. All of the findings presented above indicate that KIs-V is a sequence derived from an organism, most likely a virus, having a double-stranded circular DNA as its genome in a lipid-enveloped structure.

There was no difference in the KIs-V nucleotide sequence between the four samples investigated. This may indicate that KIs-V is an agent with a very low sequence variation. KIs-V seems to be a genome belonging to a new category as there were no sequence homologies between KIs-V and any other viral genomes registered in the public databases. Our sequence analysis, however, supported the idea that KIs-V is likely a viral genome having humans as a host. First, the GC skew plot showed that KIs-V is indeed a circular DNA that has a replication origin and a terminus. Second, the human promoter prediction program found strong signatures of the mammalian promoter in the KIs-V sequence. Third, a CpG island was found near the promoter region, which is a typical feature of mammalian genomes, suggesting that KIs-V is a circular DNA using mammalian transcription machineries.

Although we identified a putative microorganism with a novel sequence from blood donor samples with high ALT levels, the ALT levels recorded among them were relatively moderate with values between 61 and 82 IU/L, which might raise a question about its relevance to hepatotoxicity. In the second screening study, however, KIs-V was identified almost exclusively among the HEVAb-positive individuals with moderately elevated ALT levels. It may be that KIs-V has a common mode of entry into humans with HEV. For example, HEV infection in developed countries is associated with the intake of underdone meat.[17,18] KIs-V may, in that sense, share the contamination spectrum in foods with HEV. On the other hand, the finding that KIs-V is frequently found among people with elevated ALT levels suggests that KIs-V has a hepatopathological nature indeed, causing liver dysfunction directly or indirectly. Because KIs-V was found among otherwise healthy blood donors, it may be either that it usually causes asymptomatic acute hepatic cell injury with a moderately elevated ALT level or that it has an etiological association with chronic asymptomatic hepatic cell dysfunction.

We have presented data that indicate the viral property of KIs-V: (i) it has a protein capsule; (ii) it is lipid-enveloped; (iii) it has a diameter between 30 and 50 nm; (iv) it has an inherent density of 1.158 g/cm^3; and (v) it has a replication origin and a terminus in the sequence with a putative mammalian transcription machineries. Despite all of these findings, it is yet to be determined whether KIs-V is indeed a viral genome. To unequivocally clarify this issue, it will be necessary to carry out infection experiments using appropriate animal models. It also has to be determined whether KIs-V causes acute hepatitis or whether KIs-V carriage leads to chronic hepatic dysfunction with a moderately elevated ALT level. It is also possible that the moderate hepatic dysfunction observed among KIs-V-positive individuals is a secondary finding during the clinical course of a KIs-V-associated illness that mainly targets organ(s) other than the liver. Studies are now in progress to collect clinical data from patients from varied clinical categories with hepatic dysfunction.

ACKNOWLEDGMENT

WE THANK T. Tanaka of Tokyo Women's Medical University for helpful suggestions and comments.

REFERENCES

1 Chu CM, Lin SM, Hsieh SY *et al.* Etiology of sporadic acute viral hepatitis in Taiwan: the role of hepatitis C virus, hepatitis E virus and GB virus-C/hepatitis G virus in an endemic area of hepatitis A and B. *J Med Virol* 1999; 58: 154–9.
2 Yano K, Tamada Y, Yatsuhashi H *et al.* Dynamic epidemiology of acute viral hepatitis in Japan. *Intervirology* 2010; 53: 70–5.
3 Lisitsyn N, Lisitsyn N, Wigler M. Cloning the differences between two complex genomes. *Science* 1993; 259: 946–51.
4 Simons JN, Pilot-Matias TJ, Leary TP *et al.* Identification of two flavivirus-like genomes in the GB hepatitis agent. *Proc Natl Acad Sci USA* 1995; 92: 3401–5.
5 Nishizawa T, Okamoto H, Konishi K, Yoshizawa H, Miyakawa Y, Mayumi M. A novel DNA virus (TTV) associated with elevated transaminase levels in posttransfusion hepatitis of unknown etiology. *Biochem Biophys Res Commun* 1997; 241: 92–7.
6 Yeh CT, Tsao ML, Lin YC, Tseng IC. Identification of a novel single-stranded DNA fragment associated with human hepatitis. *J Infect Dis* 2006; 193: 1089–97.
7 Kim DW, Kim J, Gwack Y, Han JH, Choe J. Mutational analysis of the hepatitis C virus RNA virus helicase. *J Virol* 1997; 71: 9400–9.
8 Muerhoff AS, Leary TP, Simons JN *et al.* Genomic organization of GB virus A and B: two new members of the *flaviviridae* associated with GB agent hepatitis. *J Virol* 1995; 69: 5621–30.
9 Ohba K, Mizokami M, Lau JYN, Orito E, Ikeo K, Gojobori T. Evolutionary relationship of hepatitis C, pesti-, flavi-, plantviruses, and newly discovered GB hepatitis agents. *FEBS Lett* 1996; 378: 232–4.
10 Mine H, Emura H, Miyamoto M *et al.* High throughput screening of 16 million serologically negative blood donors for hepatitis B virus, hepatitis C virus and human immunodeficiency virus type-1 by nucleic acid amplifica-

tion testing with specific and sensitive multiplex reagent in Japan. *J Virol Methods* 2003; 112: 145–51.
11 Mizuo H, Suzuki K, Takikawa Y *et al.* Polyphyletic Strains of Hepatitis E Virus Are Responsible for Sporadic Cases of Acute Hepatitis in Japan. *J Clin Microbiol* 2002; 40: 3209–18.
12 Marchler-Bauer A, Bryant SH. CD-Search: protein domain annotations on the fly. *Nucleic Acids Res* 2004; 32 (Suppl 2): W327–31.
13 Krogh A, Larsson B, von Heijne G, Sonnhammer EL. Predicting transmembrane protein topology with a hidden markov model: application to complete genomes. *J Mol Biology* 2001; 305: 567–80.
14 Grigoriev A. Analyzing genomes with cumulative skew diagrams. *Nucleic Acids Res* 1998; 26: 2286–90.
15 Solovyev V. Statistical approaches in eukaryotic gene prediction. In: Balding DJ, Bishop M, Cannings C, eds. *Handbook of Statistical Genetics, 2001*. New York: John Wiley & Sons, 2001; 83–127.
16 Lizardi PM, Huang X, Zhu Z, Bray-Ward P, Thomas DC, Ward DC. Mutation detection and single-molecule counting using isothermal rolling-circle amplification. *Nat Genet* 1998; 19: 225–32.
17 Tei S, Kitajima N, Ohara S *et al.* Consumption of uncooked deer meat as a risk factor for hepatitis E virus infection: an age- and sex-matched case-control study. *J Med Virol* 2004; 74: 67–70.
18 Colson P, Borentain P, Queyriaux B *et al.* Pig liver sausage as a source of hepatitis E virus transmission to humans. *J Infect Dis* 2010; 202: 825–34.

医薬部外品　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数		回	報告日 年　月　日	第一報入手日 2012 年 8 月 27 日	新医薬品等の区分 該当なし	総合機構処理欄
一般的名称			研究報告の公表状況	-Euro Surveill. 2011;16(3):pii=19935 -http://www.promedmail.org/direct.php?=20120821.125556	公表国 ドイツ	
販売名（企業名）						

研究報告の概要

ウスツウイルスはFlaviviridaeファミリー、Flavivirus属のウイルスで、日本脳炎血清型属に属する。アフリカ由来の蚊媒介性ウイルスで、鳥類と蚊の間で感染の自然サイクルがあると考えられている。同属のウエストナイルウイルスと同様に、ヨーロッパにおける常在ウイルスになる可能性が危惧されている。アフリカ地区以外では、2001 年にウィーンで最初に感染症例が発見され、2009 年にイタリアの免疫不全患者に感染が報告されている。

2012 年 8 月 20 日、Bernard Nocht Institute (BNI) の熱帯医学研究部門のウイルス研究者が、ドイツにおいて最初のウスツウイルス感染者が検出されたことを発表した。4200 件の血液試料に対して抗体検出を行った結果、1 例の陽性が検出された。感染が確認された男性は、何ら症状はないと述べている。

2011 年の夏期に、南ドイツにおいてウフツウイルス感染により多数のクロウタドリが死亡した。2012 年の夏期も、既に、多数の鳥が死亡している。BNI によると、献血者の血液はこれらの疾患発生地帯から今年の 1 月に採取された。症例は比較的最近に感染したと考えられている。BNI の科学者は、感染は発生したが、4200 検体からわずか 1 例が検出されたに過ぎず、今回の報告を過大評価しないように警告している。

ウスツウイルス感染の症状は、発熱、頭痛、発疹などである。高齢者や衰弱している人においては、最悪の場合、脳炎を引き起こす可能性がある。疾患は蚊の刺傷により媒介され、死亡した鳥に単に触れただけでは感染しない。

2012 年の夏期に、南西ドイツにおいて既に多量の鳥が死亡している。すでにクロウタドリが認められない地域がある。この劇的な状況は、この夏の気温が蚊の繁殖に最適であることが原因であると報告されている。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

BYL-2012-0412
Euro Surveill.2011;16(3):pii=19935

BYL-2012-0413
http://www.promedmail.org/direct.php?=20120821.125556

報告企業の意見	今後の対応
アフリカ地域でのみ認められていたウスツウイルスがヨーロッパにおいても常在化する危険性が示唆された。ウスツウイルスは、健常者に対しては重度な症状を引き起こさないが、高齢者や衰弱している人に対しては神経症状を惹起すると報告されている。 コージネイトFSおよびコージネイトFSバイオセットの製造工程における病原体除去・不活化処理は，脂質エンベロープをもつウイルス，および，エンベロープを持たないウイルスに対しても有効であることが報告されている。従ってウスツウイルスが本剤に混入する可能性は極めて低いと考えられる。	現時点で新たな安全対策上の措置を講じる必要はないと考える。 今後も，新規人畜共通感染症や新たなウイルス感染症に関する情報収集に努める。

Usutu virus – potential risk of human disease in Europe

A Vázquez[1], M A Jiménez-Clavero[2], L Franco[1,3], O Donoso-Mantke[3,4], V Sambri[3,5], M Niedrig[3,4], H Zeller[6], A Tenorio (atenorio@isciii.es)[1,3]

1. National Microbiology Centre, Instituto de Salud Carlos III, Madrid, Spain
2. Instituto Nacional de Investigación y Tecnología Agraria y Alimentaria (INIA, National Institute of Research and Agricultural Technology and Food), Madrid, Spain
3. European Network for Diagnostics of Imported Viral Diseases - Collaborative Laboratory Response Network (ENIVD-CLRN)
4. Robert Koch Institute, Berlin, Germany
5. Regional Reference Centre for Microbiological Emergencies (CRREM), Unit of Clinical Microbiology, St Orsola University Hospital, University of Bologna, Bologna, Italy
6. European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC), Stockholm, Sweden

Citation style for this article:
Vázquez A, Jiménez-Clavero MA, Franco L, Donoso-Mantke O, Sambri V, Niedrig M, Zeller H, Tenorio A. Usutu virus – potential risk of human disease in Europe. Euro Surveill. 2011;16(31):pii=19935. Available online: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19935

Article published on 4 August 2011

Usutu virus (USUV) is an African mosquito-borne flavivirus, member of the Japanese encephalitis antigenic group. This avian virus is transmitted by arthropod vectors (mainly mosquitoes of the *Culex pipiens* complex). It is well known that free-living birds, including migratory species, have the potential to disperse certain pathogenic microorganisms. Usutu virus has recently been introduced to Europe and is spreading through Austria, Hungary, Italy, Spain and Switzerland, causing disease in birds and humans. Like West Nile virus, USUV may become a resident pathogen in Europe and the consequences for public health should be considered. Many different biotic and abiotic factors affect the survival of the virus in a new environment and influence the efficiency of its geographical dispersal. In this article, we consider the possibility of including USUV infections among the vector-borne diseases to be monitored in Europe.

Background

Usutu virus (USUV) is an African mosquito-borne virus of the family *Flaviviridae*, genus *Flavivirus*, belonging to the Japanese encephalitis serocomplex [1]. From an ancestral *flavivirus* with a bird/mosquito natural cycle evolved the different flaviviral species present today, such as USUV and West Nile virus (WNV) in Africa, Asia and Europe, Japanese encephalitis virus (JEV) in Asia, Murray Valley encephalitis virus in Australia and Saint Louis encephalitis virus in the American continent. USUV was originally isolated from a mosquito (*Culex neavei*) in 1959 in South Africa. Further USUV strains were detected from different bird and mosquito species in Africa in subsequent years, but human disease (rash and fever) has only been reported once, in the Central African Republic [2,3]. In the past, USUV was not considered as a potential threat for humans because the virus had never been associated with severe or fatal diseases in animals or humans, and it had never before been observed outside tropical and subtropical Africa.

Avian, horse and vector surveillance

In the summer of 2001, USUV emerged in Austria, causing deaths in several species of resident birds, especially among birds of the order *Passeriformes* [4-6]. In the following years, the virus has been detected in dead birds and/or mosquitoes in several countries, including Hungary (2005) [7], Italy (2009) [8], Spain (2006 and 2009) [9,10] and Switzerland (2006) [11]. USUV infection has also been demonstrated serologically in wild bird hosts in the Czech Republic (2005) [12], England (2001–2002) [13], Germany (2007) [14], Italy (2007) [15], Poland (2006) [16], Spain (2003–2006) [17] and Switzerland (2006) [18] (Figure). The recurrence of the virus over several years in Austria (2001–2006) [19], Hungary (2003–2006) [7], Italy (2006–2008) [8] and Spain (2006, 2009) [9,10] suggests either frequent reintroduction of the virus or, more likely, persistence of the transmission in the affected areas, possibly through overwintering mosquitoes. Comparisons of pathologic alterations revealed similar lesions in birds infected in the Austrian, Hungarian, Italian and Swiss USUV outbreaks, and these findings were supported by partial nucleotide sequence analysis with >99% identity between the viruses which emerged in Vienna in 2001, in Budapest in 2005, and in Zurich and Milan in 2006. A one-time introduction of USUV from Africa to Europe (Vienna) is therefore highly likely, and this particular strain has since been spreading in Central Europe [11]. However, a two-year study carried out in 2008 to 2009 in Italy to monitor the USUV circulation within the West Nile Disease (WND) national surveillance plan suggests a different scenario [20]. In that work, sentinel horses and chickens, wild birds and mosquitoes were sampled and tested for serological and virological evidence of USUV. Seroconversion in sentinel animals proved that the virus had circulated in Italy in these two years. In addition, the study demonstrated USUV infection in horses for first time in Europe. Sequence comparison of USUV detected from different species in different counties showed that two different strains of USUV are likely to have circulated in Italy between 2008 and

2009, and these strains have adapted to new hosts and vectors to become established in new areas.

Recent human cases and clinical characteristics

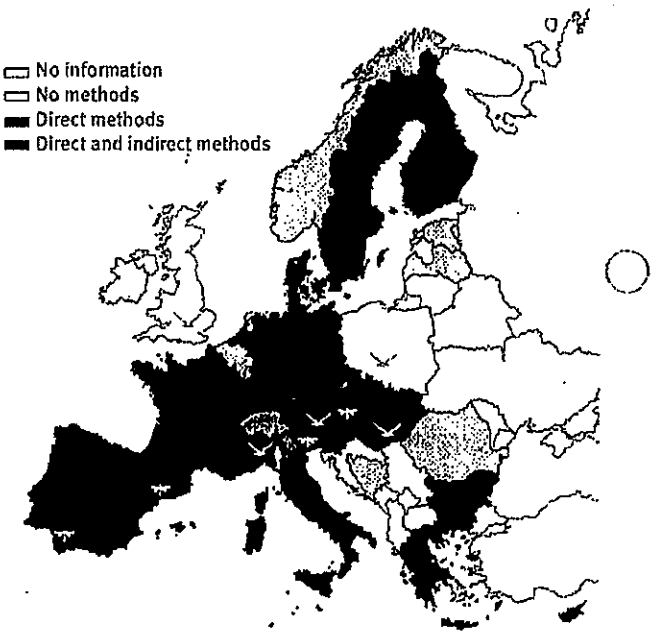
In the end of the summer 2009, the virus was associated with neurological disorders in two immunocompromised patients (both had received blood transfusions) in Italy [21,22]. In addition, USUV was isolated from the blood obtained from one of these subjects during the acute stage of disease. The patients were detected concurrently with the active surveillance programme of blood and organ donations that the public health authority of the Emilia Romagna region had initiated in August 2008, based on several veterinary and entomological reports of WNV circulation in north-eastern Italy [23]. The two infections could be consistent with local transmission, either directly through a mosquito bite or indirectly through an infected donor. Both patients had in common that they were immunosuppressed and had received blood transfusions in the same period of time (August 2009). As transmission for WNV through blood products and transplantation has been documented [24,25], screening for WNV was performed of blood samples and organ donations from 15 June to 31 October, with negative results. The two patients were the first human cases of USUV neuroinvasive illness described worldwide. The common clinical symptoms were persistent fever of 39.5 °C, headache and neurological disease (impaired neurological functions). One patient developed a fulminant hepatitis, a pathology that had been described previously in rare cases of WNV infection [26,27]. In both patients, the clinical picture was similar, with a clear involvement of the central nervous system, resembling the related WNV neuroinvasive disease. Whether this new tropism was associated with new characteristics of the infecting viruses, with a possible inoculation route through transfusion, and/or to the underlying diseases of the patients still remains unclear, but these findings reinforce the need for further investigations. The partial sequences obtained from cerebrospinal fluid (CSF) and plasma samples of these patients were more than 98% identical with the viruses that had emerged in Vienna and Budapest (in 2001 and 2005, respectively) [21,22]. In a recent phylogenetic study of sequences of USUV strains obtained in Italy in 2009 from mosquitoes, birds and humans, the sequences obtained from human hosts clustered with the sequences obtained from birds, which would indicate an endemic distribution of USUV in Europe [20].

Diagnostics

Clinical suspicion of USUV infection requires laboratory confirmation. Within laboratory methods, we can distinguish between direct methods (detecting the virus by cell culture or genomic amplification) and indirect methods (detect the antibody response to the infection). Serological diagnosis of USUV infections in humans will require an approach similar to the one used for WNV. Although there is a lack of experience about USUV infection in humans, it is assumed that its incubation period will be two to 14 days, that USUV will be detectable in CSF and serum in the acute stage of the disease, and that IgM antibodies will appear five days after onset of fever, in analogy to the current knowledge about the pathogenesis of WNV-related illness in humans. Antibodies may persist in serum for many months after infection [28]. Diagnosis of USUV will not be easy, particularly in areas where circulation along with others cross-reacting *flaviviruses* occur. That is the case for WNV and tick-borne encephalitis virus in several European countries [29]. Until more specific diagnostic methods are developed and made available for diagnostic laboratories, antibody detection could be carried out using cross-reacting ELISA methods designed for WNV diagnosis. It is also expected that cross-reactivity will be higher for IgG than for IgM detection; consequently, development of tests for USUV-specific IgM is needed more urgently. As an already available alternative, acute and convalescent sera should be tested for seroconversion of IgG antibodies using in-house or commercial ELISA tests based on WNV antigens. Cross-reactions can be resolved by parallel titrations against various *flaviviruses* in assays for neutralising antibodies, which are more specific

FIGURE

Diagnostic capacities for Usutu virus in European countries in the ENIVD network and detection of the virus in mosquitoes, birds, horses and/or humans



ENIVD: European Network for Diagnostics of Imported Viral Diseases.

Colour code indicates diagnostic capacities: direct methods detect the virus by cell culture or genomic amplification, indirect methods detect the antibody response to the infection.

Animal symbols indicate detection of Usutu virus in these species: geographical distribution is indicated either by virus detection (species in white) or by evidence of neutralising antibodies (dark grey).

than ELISAs but can be performed only in specialised laboratories that can handle hazardous viruses [30].

The possibility of USUV to infect and cause severe neurological syndromes in humans makes it necessary to develop new affordable and rapid molecular methods for its detection. Recently, a specific real-time RT-PCR assay has been developed to identify USUV in human plasma, serum and CSF samples. This technique has allowed the detection of USUV in three CSF specimens that were collected in the summers of 2008 and 2009 from 44 patients with suspected meningoencephalitis and were negative for WNV [31]. However, serological testing is still needed and important to identify infection after the viraemic stage. In Europe, most of the countries are prepared for detecting USUV genome in human or bird samples (Figure), generally using cross-reactive or generic methods for detecting *flaviviruses*. More specific techniques are required, especially for those countries with direct evidence for WNV and/or USUV circulation (Austria, Belarus, Bulgaria, Czech Republic, France, Hungary, Italy, Moldova, Portugal, Romania, Russia, Slovakia, Spain and Ukraine) [32], and new methods are being designed to identify and distinguish USUV from other arboviruses, particularly from members of the JEV group that have been circulating in Europe [31,33]. In fact, a false-positive result of a WNV RT-PCR was reported in Italy in 2009 in a patient with viraemia caused by USUV [23].

Surveillance and control

The number of recent notifications of mosquito-borne diseases in the European Union in 2010 is a reason for concern. These events involved different types of pathogens like WNV, USUV, dengue virus, chikungunya virus and *Plasmodium* sp, some of which are considered typical for tropical areas. This current situation triggered a request from the European Commission for a risk assessment [34]. The overall objective of this consultation was to acquire a comprehensive understanding of the transmission potential for mosquito-borne diseases in Europe in order to propose recommendations for preparedness actions. The final conclusion was to develop a tool for decision making in WNV infection preparedness and control, which would guide countries through the complexities of responding to any alerts or outbreaks of this disease.

In Europe, WNV re-emerged in Romania, where it was first associated to neurological disease [35]. Since then, the virus has been detected with increasing activity in several European countries [36], including Italy, where it was circulating at least in 2008 and 2009, with eight and 16 human cases, respectively, of West Nile neuroinvasive disease [37]. Because of WNV circulation in Italy with neuroinvasive cases in humans and horses [38,39], a regional surveillance plan was implemented starting from 2008 [40]. Thanks to, these WNV surveillance activities antibodies against WNV and USUV were detected in Italy in 2009 in sentinel animals (horses and chickens), wild birds and provided evidence of cocirculation of WNV and USUV in mosquitoes and birds in the same area [20,41,42].

That five human USUV infections have recently been detected in areas where an effective surveillance for WNV exists, suggest that this disease may also be under-recognised in some other areas where the surveillance for WNV is lacking or poorly implemented. Both viruses seem to be able to cause neurological disease in humans under certain circumstances. The emergence of USUV in Europe, even if not presently considered a major threat warrants the enhancement of surveillance plans for neuroinvasive illness during the summer season, corresponding to the peak of activity of potential vectors. The extension of surveillance to *flaviviruses* other than WNV will require new diagnostic procedures and the development of more specific serological tests that can be used in the field [42]. As WNV and USUV viruses share many eco-epidemiological and virological characteristics, WNV surveillance programmes could be easily adapted to survey also USUV in birds, horses, mosquitoes and human samples. This approach should be based on the development of adequate and standardised differential laboratory diagnosis using validated methods (serological and molecular) enabling the differential detection of WNV and USUV infections, especially in those countries with demonstrated co-circulation of both viruses (at least Austria, Hungary, Italy, and Spain). A specific real-time RT-PCR assay to identify USUV in human plasma, serum, and CSF that has been developed [31] is very helpful for donor screening and diagnostics. Some of the molecular techniques designed to detect WNV can also amplify the signal for USUV due to false positive results by lack of specificity in the technique.

A surveillance programme for USUV in Europe could be very similar to national surveillance systems for WNV that are already implemented in some countries in Europe. In fact, in those European countries which have implemented a national WNV surveillance plan, this could be used in parallel for USUV surveillance. These programmes consist of human, veterinary and entomological surveillance. The objective of passive and active human surveillance systems would be the early detection of infection in humans. This activity should be performed by serology and/or detection of the viral genome in blood and cerebrospinal fluid from all suspected cases suffering from acute meningoencephalitis. In this regard, it would be important to raise the awareness of clinicians for this emerging disease, which may improve the sensitivity of the surveillance system. Since the diagnosis of encephalitis is of general importance, the inclusion of USUV diagnostics for differential diagnosis in cases of unknown origin should be considered for extended screening of aetiologies. Key requirements for a possible future surveillance study at European level have already been suggested [30]. Animal surveillance should be performed on the basis of passive and active surveillance of horses and non-migratory wild birds. Entomological

surveillance should be based on the weekly to monthly (frequency depending on local resources) collection of mosquitoes in fixed stations and at sites where USUV activity has been demonstrated ascertained in birds, humans or horses.

As suggested by Chvala et al. [5], mosquito monitoring and screening of wild birds are suitable to detect USUV circulation and could replace surveillance of dead birds when bird mortality drops because of herd immunity. Although virological surveillance (with molecular techniques) may be preferable over serological monitoring because it avoids cross-reactions with other flaviviruses, they are impeded by short-lived viraemia, when serology is still possible due to long-lasting serum antibodies. Sera reacting to both WNV and USUV were detected in other studies using tests with low specificity such as haemagglutination inhibition [19] or ELISA [15]. Plaque reduction neutralisation has to be performed to confirm positive sera, but this test is complex, costly, time-consuming and not accessible for laboratories lacking high biocontainment facilities.

As for WNV, surveillance of wild birds and vectors will be used in the coming years to forecast the spread of USUV. The information gathered will be used to develop actions to prevent virus transmission, such as vector monitoring and control, information campaigns to improve personal protection, and screening tests for donor blood, tissue and organs.

Conclusions

In Europe the risk exists that potential emerging infectious diseases, such as those caused by WNV or USUV, will not be recognised in time by existing surveillance infrastructures of the various European countries [43]. As treatments for USUV and WNV are not available, there is a need to strengthen surveillance. Circulation of USUV in Austria, Hungary, Italy and Spain during consecutive years and seroconversions reported recently in sentinel animals and detection of virus in wild birds in Italy, show that these territories are suitable to support USUV circulation between vectors and vertebrate hosts, as well as overwintering, enabling the establishment of endemic cycles. This indicates a need to organise standard surveillance measures and early warning systems to detect WNV and USUV activity, and to assess the risk for public health. Establishing a European surveillance system by grouping the existing resources and introducing a standardised reporting and diagnostic system is essential for future preparedness and response. This surveillance system should be sensitive and able to detect USUV and WNV circulation at an early stage. A multidisciplinary approach should be considered when evaluating the risk of USUV and WNV transmission, and the contribution of the different components (mosquitoes, birds, horses, humans) should be carefully assessed.

Acknowledgements

The ENIVD is part of the ECDC "Outbreak Assistance Laboratory Network" and received funding as the ENIVD Collaborative Laboratory Response Network (ENIVD-CLRN) under the contract no. ECDC/2008/011. We are indebted for the participation of the ENIVD-CLRN members: Aberle S, Austria; Alves MJ, Portugal; Avšič T, Slovenia; Barzon L, Italy; Ceianu C, Romania; Charrel R, France; Christova I, Bulgaria; Ciufolini MG, Italy; Connell J, Ireland; Detlev S, Switzerland; Di Caro A, Italy; Dobler G, Germany; Doornum G, Netherlands; Dudman S, Norway; Emőke F, Hungary; Eßbauer S, Germany; Grandadam M, France; Griskevicius A, Italy; Heyman P, Belgium; Hukic M, Bosnia and Herzegovina; Klempa B, Slovakia; Kolupajeva T, Latvia; Leparc-Goffart I, France; Kostrikis LG, Cyprus; Lundkvist A, Sweden; Monaco F, Italy; Opp M, Luxembourg; Papa A, Greece; Pfeffer M, Germany; Sánchez-Seco MP, Spain; Schutten M, Netherlands; Van Esbroeck M, Belgium; Vapalahti O, Finland; Zelená H, Czech Republic.

References

1. Kuno G, Chang GJ, Tsuchiya KR, Karabatsos N, Cropp CB. Phylogeny of the genus Flavivirus. J Virol. 1998;72(1):73-83.
2. Williams MC, Simpson DI, Haddow AJ, Knight EM. The isolation of West Nile Virus from man and of Usutu virus from the bird-biting mosquito Mansonia aurites (Theobald) in the Entebbe area of Uganda. Ann Trop Med Parasitol. 1964;58:367-74.
3. Adam F, Digoutte JP. Virus d'Afrique (base de données). [Viruses of Africa (database)]. Dakar: World Health Organization Collaborating Reference and Research Centre for arboviruses and haemorrhagic fever viruses (CRORA), Institut Pasteur de Dakar; jul 2005. Available from http://www.pasteur.fr/recherche/banques/CRORA
4. Weissenböck H, Kolodziejek J, Fragner K, Kuhn R, Pfeffer M, Nowotny N. Usutu virus activity in Austria, 2001–2002. Microbes Infect. 2003;5(12):1132–6.
5. Chvala S, Bakonyi T, Bukovsky C, Meister T, Brugger K, Rubel F, et al. Monitoring of Usutu virus activity and spread by using dead bird surveillance in Austria, 2003-2005. Vet Microbiol. 2007;122(3-4):237-45.
6. Weissenböck H, Kolodziejek J, Url A, Lussy H, Rebel-Bauder B, Nowotny N. Emergence of Usutu virus, an African mosquitoborne flavivirus of the Japanese encephalitis virus group, central Europe. Emerging Infect Dis. 2002;8(7):652-6.
7. Bakonyi T, Erdélyi K, Ursu K, Ferenczi E, Csörgo T, Lussy H, et al. Emergence of Usutu Virus in Hungary. J Clin Microbiol. 2007;45(12):3870-4.
8. Manarolla G, Bakonyi T, Gallazzi D, Crosta L, Weissenböck H, Dorrestein GM, et al. Usutu virus in wild birds in northern Italy. Vet Microbiol. 2010;141(1-2):159-63.
9. Busquets N, Alba A, Allepuz A, Aranda C, Núñez JI. Usutu Virus Sequences in Culex pipiens (Diptera: Culicidae), Spain. Emer Infect Dis. 2008;14(5):861-3.
10. Vázquez A, Ruiz S, Herrero L, Moreno J, Molero F, Magallanes A, et al. West Nile and Usutu viruses in mosquitoes in Spain, 2008-2009. Am J Trop Med Hyg. 2011;85(1):178-81.
11. Steinmetz HW, Bakonyi T, Weissenböck H, Hatt JM, Eulenberger U, Robert N, et al. Emergence and establishment of Usutu virus infection in wild and captive avian species in and around Zurich, Switzerland-genomic and pathologic comparison to other central European outbreaks. Vet Microbiol. 2011;148(2-4):207-12.
12. Hubálek Z, Halouzka J, Juricová Z, Sikutová S, Rudolf I, Honza M, et al. Serologic survey of birds for West Nile flavivirus in southern Moravia (Czech Republic). Vector Borne Zoonotic Dis. 2008;8(5):659-66.
13. Buckley A, Dawson A, Gould EA. Detection of seroconversion to West Nile virus, Usutu virus and Sindbis virus in UK sentinel chickens. Virol J. 2006;3:71.
14. Linke S, Niedrig M, Kaiser A, Ellerbrok H, Müller K, Müller T, et al. Serologic evidence of West Nile virus infections in wild birds captured in Germany. Am J Trop Med Hyg. 2007;77(2):358-64.
15. Leill R, Savini G, Teodori L, Filipponi G, Di Gennaro A, Leone A, et al. Serological evidence of USUTU virus occurrence in north-eastern Italy. Zoonoses Public Health. 2008;55(7):361-7.

16. Hubálek Z, Wegner E, Halouzka J, Tryjanowski P, Jerzak L, Sikutová S, et al. Serologic survey of potential vertebrate hosts for West Nile virus in Poland. Viral Immunol. 2008;21(2):247-53.
17. Figuerola J, Soriguer R, Rojo G, Gómez Tejedor C, Jimenez-Clavero MA. Seroconversion in wild birds and local circulation of West Nile virus, Spain. Emerg Infect Dis. 2007;13(12):1915-7.
18. Steinmetz HW, Bakonyi T, Chvala S, Weissenböck H, Eulenberger U, Hatt JM, et al. Emergence of Usutu virus in Switzerland. Proceedings 43rd international symposium on diseases of zoo and wild animals; 16-20 May 2007; Edinburgh. P. 129-31.
19. Meister T, Lussy H, Bakonyi T, Sikutová S, Rudolf I, Vogl W, et al. Serological evidence of continuing high Usutu virus (Flaviviridae) activity and establishment of herd immunity in wild birds in Austria. Vet Microbiol. 2008;127(3-4):237-48.
20. Savini G, Monaco F, Terregino C, Di Gennaro A, Bano L, Pinoni C, et al. Usutu virus in Italy: An emergence or a silent infection? Vet Microbiol. 2011;151(3-4):264-74.
21. Cavrini F, Gaibani P, Longo G, Pierro AM, Rossini G, Bonilauri P, et al. Usutu virus infection in a patient who underwent orthotropic liver transplantation, Italy, August-September 2009. Euro Surveill. 2009;14(50):pii: 19448. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19448
22. Pecorari M, Longo G, Gennari W, Grottola A, Sabbatini A, Tagliazucchi S, et al. First human case of Usutu virus neuroinvasive infection, Italy, August-September 2009. Euro Surveill. 2009;14(14):pii: 19446. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19446
23. Gaibani P, Pierro AM, Cavrini F, Rossini G, Landini MP, Sambri V. False-positive transcription-mediated amplification assay detection of West Nile virus in blood from a patient with viremia caused by an Usutu virus infection. J Clin Microbiol. 2010;48(9):3338-9.
24. Iwamoto M, Jernigan DB, Guasch A, Trepka MJ, Blackmore CG, Hellinger WC, et al. Transmission of West Nile virus from an organ donor to four transplant recipients. N Engl J Med. 2003;348(22):2196-203.
25. Pealer LN, Marfin AA, Petersen LR, Lanciotti RS, Page PL, Stramer SL, et al. Transmission of West Nile virus through blood transfusion in the United States in 2002. N Engl J Med. 2003;349(13):1236-45.
26. Campbell GL, Marfin AA, Lanciotti RS, Gubler DJ. West Nile virus. Lancet Infect Dis. 2002;2(9):519-29.
27. Georges AJ, Lesbordes JL, Georges-Courbot MC, Meunier DM, Gonzalez JP. Fatal hepatitis from West Nile virus. Ann Inst Pasteur Virol. 1987;138:237-44.
28. Solomón T. Flavivirus encephalitis. N Engl J Med. 2004;351:370-8.
29. Süss J. Tick-borne encephalitis in Europe and beyond-the epidemiological situation as of 2007. Euro Surveill. 2008 13(26):pii: 18916. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=18916
30. Donoso Mantke O, Vaheri A, Ambrose H, Koopmans M, de Ory F, Zeller H, et al. Analysis of the surveillance situation for viral encephalitis and meningitis in Europe. Euro Surveill. 2008;13(3):pii: 8017. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=8017
31. Cavrini F, Della Pepa ME, Gaibani P, Pierro AM, Rossini G, Landini MP, et al. A rapid and specific real-time RT-PCR assay to identify Usutu virus in human plasma, serum, and cerebrospinal fluid. J Clin Virol. 2011;50(3):221-3.
32. Hubálek Z. Mosquito-borne viruses in Europe. Parasitol Res. 2008;103 (Suppl 1):S29-43.
33. Johnson N, Wakeley PR, Mansfield KL, McCracken F, Haxton B, Phipps LP, et al. Assessment of a novel real-time pan-flavivirus RT-polymerase chain reaction. Vector Borne Zoonotic Dis. 2010;10(7):665-71.
34. European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC). Expert consultation on West Nile virus infection, Stockholm, 21–22 April 2009. Meeting report. Stockholm: ECDC; 2009. Available from: http://www.ecdc.europa.eu/en/publications/Publications/0909_MER_Expert_consultation_on_WNV.pdf
35. Cernescu C, Ruţă SM, Tărdei G, Grancea C, Moldoveanu L, Spulbăr E, et al. A high number of severe neurologic clinical forms during an epidemic of West Nile virus infection. Rom J Virol. 1997;48(1-4):13-25.
36. Calistri P, Giovannini A, Hubalek Z, Ionescu A, Monaco F, Savini G, et al. Epidemiology of West Nile in Europe and in the Mediterranean basin. Open Virol J. 2010;4:29-37.
37. Rizzo C, Vescio F, Declich S, Finarelli AC, Macini P, Mattivi A, et al. West Nile virus transmission with human cases in Italy, August - September 2009. Euro Surveill. 2009;14(41):pii: 19353. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19353
38. Macini P, Squintani G, Finarelli AC, Angelini P, Martini E, Tamba M, et al. Detection of West Nile virus infection in horses, Italy, September 2008. Euro Surveill. 2008;13(39):pii: 18990. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=18990
39. Rossini G, Cavrini F, Pierro A, Macini P, Finarelli AC, Po C, et al. First human case of West Nile virus neuroinvasive infection in Italy, September 2008 – case report. Euro Surveill. 2008;13(41): pii: 19002. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19002
40. Angelini P, Tamba M, Finarelli AC, Bellini R, Albieri A, Bonilauri P, et al. West Nile virus circulation in Emilia-Romagna, Italy: the integrated surveillance system 2009. Euro Surveill. 2010;15(16):pii: 19547. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19547
41. Calzolari M, Bonilauri P, Bellini R, Albieri A, Defilippo F, Maioli G, et al. Evidence of simultaneous circulation of west nile and usutu viruses in mosquitoes sampled in emilia-romagna region (Italy) in 2009. PLoS One. 2010;5(12):e14324.
42. Tamba M, Bonilauri P, Bellini R, Calzolari M, Albieri A, Sambri V, et al. Detection of Usutu Virus Within a West Nile Virus Surveillance Program in Northern Italy. Vector Borne Zoonotic Dis. 2011;11(5):551-7.
43. Ahmed J, Bouloy M, Ergonul O, Fooks A, Paweska J, Chevalier V, et al. International network for capacity building for the control of emerging viral vector-borne zoonotic diseases: ARBO-ZOONET. Euro Surveill. 2009;14(12):pii: 19160. Available from: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19160

医薬部外品　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数		回	報告日 年　月　日	第一報入手日 2012 年 8 月 27 日	新医薬品等の区分 該当なし	総合機構処理欄
一般的名称			研究報告の公表状況	-Euro Surveill. 2011;16(3):pii=19935 -http://www.promedmail.org/direct.php?=20120821.125556	公表国 ドイツ	
販売名（企業名）						

研究報告の概要

ウスツウイルスはFlaviviridaeファミリー、Flavivirus属のウイルスで、日本脳炎血清型属に属する。アフリカ由来の蚊媒介性ウイルスで、鳥類と蚊の間で感染の自然サイクルがあると考えられている。同属のウエストナイルウイルスと同様に、ヨーロッパにおける常在ウイルスになる可能性が危惧されている。アフリカ地区以外では、2001 年にウィーンで最初に感染症例が発見され、2009 年にイタリアの免疫不全患者に感染が報告されている。

2012 年 8 月 20 日、Bernard Nocht Institute (BNI) の熱帯医学研究部門のウイルス研究者が、ドイツにおいて最初のウスツウイルス感染者が検出されたことを発表した。4200 件の血液試料に対して抗体検出を行った結果、1 例の陽性が検出された。感染が確認された男性は、何ら症状はないと述べている。

2011 年の夏期に、南ドイツにおいてウフツウイルス感染により多数のクロウタドリが死亡した。2012 年の夏期も、既に、多数の鳥が死亡している。BNI によると、献血者の血液はこれらの疾患発生地帯から今年の 1 月に採取された。症例は比較的最近に感染したと考えられている。BNI の科学者は、感染は発生したが、4200 検体からわずか 1 例が検出されたに過ぎず、今回の報告を過大評価しないように警告している。

ウスツウイルス感染の症状は、発熱、頭痛、発疹などである。高齢者や衰弱している人においては、最悪の場合、脳炎を引き起こす可能性がある。疾患は蚊の刺傷により媒介され、死亡した鳥に単に触れただけでは感染しない。

2012 年の夏期に、南西ドイツにおいて既に多量の鳥が死亡している。すでにクロウタドリが認められない地域がある。この劇的な状況は、この夏の気温が蚊の繁殖に最適であることが原因であると報告されている。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

BYL-2012-0412
Euro Surveill.2011;16(3):pii=19935

BYL-2012-0413
http://www.promedmail.org/direct.php?=20120821.125556

報告企業の意見	今後の対応
アフリカ地域でのみ認められていたウスツウイルスがヨーロッパにおいても常在化する危険性が示唆された。ウスツウイルスは、健常者に対しては重度な症状を引き起こさないが、高齢者や衰弱している人に対しては神経症状を惹起すると報告されている。 コージネイトFSおよびコージネイトFSバイオセットの製造工程における病原体除去・不活化処理は，脂質エンベロープをもつウイルス，および，エンベロープを持たないウイルスに対しても有効であることが報告されている。従ってウスツウイルスが本剤に混入する可能性は極めて低いと考えられる。	現時点で新たな安全対策上の措置を講じる必要はないと考える。 今後も，新規人畜共通感染症や新たなウイルス感染症に関する情報収集に努める。

23

MedDRA バージョン 15.0

BYL-2012-0413

Published Date: 2012-08-21 21:51:47
Subject: PRO/AH/EDR> Usutu virus - Germany (03) 1st case
Archive Number: 20120821.1255556

USUTU VIRUS - GERMANY (03) FIRST CASE
****

A ProMED-mail post
http://www.promedmail.org
ProMED-mail is a program of the
International Society for Infectious Diseases
http://www.isid.org

Date: Sat 4 Aug 2012
Source: Online Focus [in German, transl. Sabine Zentis, edited]
http://www.focus.de/panorama/welt/tropischer-vogel-virus-in-deutschland-usutu-virus-infiziert-ersten-deutschen_aid_803136.html

For the 1st time human infection with the tropical Usutu virus has been detected in Germany. It was confirmed in donor blood, when a total of 4200 blood samples were analyzed for antibodies.

The information was released by Jonas Schmidt-Chanasit, a virologist with the Bernhard Nocht Institute (BNI) for Tropical Medicine in Hamburg on Monday [20 Aug 2012].

The affected man from Gross-Gerau (Hesse) claims to have experienced no symptoms of illness.

Originating from Africa last summer [2011], Usutu virus has been the cause of a mass die off of blackbirds in southwest Germany. Again this summer dozens of birds have died. Usutu virus was found in mosquitoes (_Culex pipiens_) in Germany and can be transmitted to humans.

According to the BNI the donor blood was collected in January this year [2012] from the outbreak region between Frankfurt and Freiburg. According to experts, the infection of the man at that time was rather recent. Schmidt Chanasit warned against overestimating the finding: "Yes, there has been an infection, but it is not dramatic; after all it is only one of 4200 blood tests- just do not panic," he said.

The infection can be associated with fever, headache and rash, according to the virologists. In elderly or debilitated people, the virus could, as a worst case, cause inflammation of the brain. The disease can only be transmitted through a mosquito bite, the mere touch of a diseased bird does not cause infection. Schmidt Chanasit urged the doctors to send in samples if patients show suspicious symptoms.

Outside Africa, the virus had appeared the 1st time in 2001 in the Vienna area; in 2009 2 immunocompromised patients in Italy became infected.

During this summer [2012] thousands of birds have died already in Southwest Germany, "Fight against mosquitoes plague (Kabs) in the Palatine Forest Lake," the Scientific Director of the Municipal Action Group Norbert Becker, said. "Dead birds are reported by the hour."

The region around Neustadt an der Weinstrasse and Landau and the Rhine-Neckar region to the Kraichgau in Baden-Wurttemberg is affected by the mass mortality.

"It's even worse than last year," said Becker. There are areas where no more blackbird are be seen. The affected area this year is much larger than in 2011. The situation is so dramatic because the mosquitoes, with current temperatures, find ideal breeding conditions. Becker and his team and have already collected nearly 300 dead blackbirds, Becker said.

The Usutu virus was found already in the summer 2011 in the border region of Rhineland-Palatinate, Hesse and Baden-Wurttemberg where it infected and killed hundreds of thousands of blackbirds. The virologist Chanasit Schmidt is convinced: "The virus will keep us busy for the next few years."

-- Communicated by: Sabine Zentis Castleview English Longhorns Gut Laach D-52385 Nideggen Germany

[With the repeat of blackbird mortality seen last year (2011), and now, human infection, there is additional evidence that Usutu virus has become endemic in Germany. As Mod.AS noted in the ProMED-mail post of 16 Sep 2011, "USUV 1st detection outside Africa took place in Vienna, Austria, in 2001, causing deaths in blackbirds (_Turdus merula_) and great gray owls (_Strix nebulosa_). In 2002, USUV was still circulating in Austria, demonstrating that USUV has managed to overwinter in a local bird-mosquito cycle in central Europe. More recently, USUV-specific RNA or antigen was also detected in birds or mosquitoes in Hungary, Switzerland, Italy and Spain. In the summer of 2009, USUV-related illness were reported in 2 immunocompromised patients in Italy. Antibodies were detected in UK in wild birds in 2002."

Usutu is a member of the mosquito transmitted flaviviruses belonging to the Japanese encephalitis virus group.

ProMED thanks Sabine Zentis for sending in the above report and its translation. Roland Hubner of the Belgian Superior Health Council also sent in this report, along with the following reference that assesses human risk of Usutu virus infection.

Reference

Vazquez A, Jimenez-Clavero MA, Franco L, Donoso-Mantke O, Sambri V, Niedrig M, Zeller H, Tenorio A. Usutu virus - potential risk of human disease in Europe. Euro Surveill. 2011;16(31):pii=19935. Available online: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=19935

A HealthMap/ProMED-mail map of the area indicated in Germany can be accessed at http://healthmap.org/r/2Pgp. - Mod.TY]

See Also

Usutu virus - Germany (02): blackbirds 20120726.1215627
Usutu virus - Germany: mosquito isolate 20120425.1114006
2011

Usutu virus - Germany (02): birds, conf. 20110916.2827
Usutu virus - Germany: mosquito isolate, birds susp. 20110913.2792]
.....ml/ty/ejp/ml

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012年9月25日	新医薬品等の区分 該当なし。	総合機構処理欄
一般的名称	別紙のとおり。		研究報告の公表状況	WHO Global Alert and Response 2012; SEPTEMBER 23	公表国 イギリス	
販売名（企業名）	別紙のとおり。					

研究報告の概要

問題点：イギリスで、サウジアラビアへの旅行後に急性の呼吸器症候群を発症し、イギリスへ搬送されたカタール人が新種のコロナウイルスに感染していたことが判明した。

49歳のカタール国籍の男性が、サウジアラビアへ旅行した後、急性の呼吸器症候群を発症した。2012年9月7日にカタールのICUへ入院した後、イギリスへ搬送され、イギリスでの検査の結果、新種のコロナウイルスに感染していることが判明した。遺伝子配列を比較した結果、今年始めに致死的な症状に陥った60歳のサウジアラビア国籍の患者の肺組織から得られたウイルスの遺伝子配列と99.5%の相同性が示された。

コロナウイルスはSARSを生じるウイルスを含む科であることから、WHOは上記2症例に関し、更なる情報収集を行っている。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

記載なし。

報告企業の意見	今後の対応
別紙のとおり。	今後とも関連情報の収集に努め、本剤の安全性の確保を図っていきたい。

別紙

一般的名称	①人血清アルブミン、②人血清アルブミン、③人血清アルブミン*、④人免役グロブリン、⑤人免役グロブリン、⑥乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑦乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑧乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑨乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑩乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑪乾燥スルホ化人免疫グロブリン、⑫乾燥スルホ化人免疫グロブリン*、⑬乾燥濃縮人活性化プロテインC、⑭乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑮乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑯乾燥濃縮人血液凝固第Ⅷ因子、⑰乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑱乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑲乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、⑳乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉑乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉒乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子、㉓乾燥抗破傷風人免疫グロブリン、㉔抗HBs人免疫グロブリン、㉕トロンビン、㉖フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉗フィブリノゲン加第ⅩⅢ因子、㉘乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ、㉙ヒスタミン加人免疫グロブリン製剤、㉚人血清アルブミン*、㉛人血清アルブミン*、㉜乾燥ペプシン処理人免役グロブリン*、㉝乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ
販売名（企業名）	①献血アルブミン20“化血研”、②献血アルブミン25“化血研”、③人血清アルブミン“化血研”*、④ガンマーグロブリン筋注450mg/3mL「化血研」、⑤ガンマーグロブリン筋注1500mg/10mL「化血研」、⑥献血静注グロブリン“化血研”、⑦献血グロブリン注射用2500mg「化血研」、⑧献血ベニロンーⅠ静注用500mg、⑨献血ベニロンーⅠ静注用1000mg、⑩献血ベニロンーⅠ静注用2500mg、⑪献血ベニロンーⅠ静注用5000mg、⑫ベニロン*、⑬注射用アナクトC2,500単位、⑭コンファクトF注射用250、⑮コンファクトF注射用500、⑯コンファクトF注射用1000、⑰ノバクトM注射用250、⑱ノバクトM注射用500、⑲ノバクトM注射用1000、⑳ノバクトM静注用400単位、㉑ノバクトM静注用800単位、㉒ノバクトM静注用1600単位、㉓テタノセーラ筋注用250単位、㉔ヘパトセーラ筋注200単位/mL、㉕トロンビン“化血研”、㉖ボルヒール、㉗ボルヒール組織接着用、㉘アンスロビンP500注射用、㉙ヒスタグロビン皮下注用、㉚アルブミン20%化血研*、㉛アルブミン5%化血研*、㉜静注グロブリン*、㉝アンスロビンP1500注射用
報告企業の意見	コロナウイルスは80～160nmの球形または楕円形で、核酸は一本鎖RNA、エンベロープを有し、感染しても軽度の風邪症状程度と考えられていたが、2003年に発生した重症急性呼吸器症候群（SARS: severe acute respiratory syndrome）の原因ウイルスがコロナウイルス科のウイルスであったことが判明している。 今回の報告は、急性の呼吸器症候群を発症した患者から新種のコロナウイルスが同定されたとの報告であるが、現時点で当該患者の具体的な症状等は不明である。 上記製剤の製造工程には、冷アルコール分画工程、ウイルス除去膜ろ過工程、加熱工程等の原理の異なるウイルスクリアランス工程が導入されており、各工程のウイルスクリアランス効果は「血漿分画製剤のウイルスに対する安全性確保に関するガイドライン（医薬発第1047号、平成11年8月30日）」に基づく、モデルウイルスを用いたウイルスプロセスバリデーションにより確認されている。今回報告した新種のコロナウイルスのモデルウイルスには、エンベロープの有無、核酸の種類等から、ウシウイルス性下痢ウイルス（BVDV）が該当すると考えられるが、上記工程のBVDVクリアランス効果については上記バリデーションにより確認されている。また、これまでに上記製剤による新種のコロナウイルスへの感染報告例は無い。 以上の点から、上記製剤はコロナウイルス感染に対する安全性を確保していると考える。

*：現在製造を行っていない

INF2012-003

World Health Organization

Global Alert and Response (GAR)

Novel coronavirus infection in the United Kingdom

Share Print

23 SEPTEMBER 2012 - On 22 September 2012, the United Kingdom (UK) informed WHO of a case of acute respiratory syndrome with renal failure with travel history to Saudi Arabia and Qatar.

The case is a previously healthy, 49 year-old male Qatari national that presented with symptoms on 3 September 2012 with travel history to Saudi Arabia prior to onset of illness. On 7 September he was admitted to an intensive care unit (ICU) in Doha, Qatar. On 11 September, he was transferred to the UK by air ambulance from Qatar. The Health Protection Agency of the UK (HPA) conducted laboratory testing and has confirmed the presence of a novel coronavirus .

The HPA has compared the sequencing of the virus isolate from the 49 year-old Qatari national with that of a virus sequenced previously by the Erasmus University Medical Centre, Netherlands. This latter isolate was obtained from lung tissue of a fatal case earlier this year in a 60 year-old Saudi national. This comparison indicated 99.5% identity, with one nucleotide mismatch over the regions compared.

Coronaviruses are a large family of viruses which includes viruses that cause the common cold and SARS. Given that this is a novel coronavirus, WHO is currently in the process of obtaining further information to determine the public health implications of these two confirmed cases.

With respect to these findings, WHO does not recommend any travel restrictions.

Related links

Information regarding requirements and recommendations for the Hajj season in 201

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 17	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況		公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)		Pastila S, Lönnroth M, Heikkilä R, Heikkilä H, Carlson P. Vox Sang. 2012 Aug;103(2):93-8. doi: 10.1111/j.1423-0410.2012.01591.x. Epub 2012 Feb 20.	フィンランド

研究報告の概要

○血液成分の皮膚細菌叢と汚染:我々は適切に供血を延期するか?
背景: 汚染された血液に関連する細菌感染症は現在、最も大きな輸血感染症リスクである。細菌は通常、供血者の皮膚に由来するため、皮膚疾患をもつ供血者の延期は一般的である。血液の細菌感染防止のための現行の供血延期ガイドラインの有効性については評価されていない。
対象と方法: 供血を延期された皮膚疾患の供血者55人を募り、各症例に3つのコントロールを対応させた。供血者はアンケートを記入し、静脈穿刺前腕部の皮膚から細菌培養サンプルを採取された。
結果: コロニーを形成した皮膚細菌の全数の中央値は、コントロール群に比べ(105 CFUs/サンプル)、症例群(224 CFUs/サンプル)で有意に高かった。黄色ブドウ球菌は、コントロール群(7%)と比較して症例群(49%)で有意により多く存在した。他の細菌属に関しては症例群とコントロール群の間に違いは見られなかった。
結論: この研究は、皮膚疾患を有する供血者の現行供血延期ガイドラインが、皮膚に細菌を多く有する者や黄色ブドウ球菌保有者を効果的に識別することを示している。しかしながら、皮膚疾患による供血延期は他の対策と比べると、血液製剤汚染に対する効果は小さい。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
輸血用血液製剤の細菌汚染予防としての皮膚疾患を有する供血者に対する現行の供血延期ガイドラインの効果を評価したところ、皮膚に多くの細菌を有する者や黄色ブドウ球菌保有者を効果的に識別することが示されたとの報告である。	日本赤十字社では輸血による細菌感染予防対策として、すべての輸血用血液製剤を対象に、保存前白血球除去及び初流血除去を導入している。さらに、輸血情報リーフレット等により、細菌感染やウイルス感染について医療機関へ情報提供し注意喚起しているほか、細菌感染が疑われる場合の対応を周知している。細菌やウイルスの検出や不活化する方策について検討している。

VoxSanguinis
The International Journal of Transfusion Medicine
ISBT International Society of Blood Transfusion
Vox Sanguinis (2012) 103, 93–98

ORIGINAL PAPER

DOI: 10.1111/j.1423-0410.2012.01591.x

Bacterial skin flora and contamination of blood components: do we defer blood donors wisely?

S. Pastila,[1] M. Lönnroth,[1] R. Heikkilä,[1] H. Heikkilä[2] & P. Carlson[1]
[1]Finnish Red Cross Blood Service, Helsinki, Finland
[2]Helsinki University Hospital, Department of Dermatology, Helsinki, Finland

Vox Sanguinis

Background and objectives Bacterial infection through contaminated blood is currently the greatest infection risk in relation to a transfusion. Deferral of prospective blood donors with a skin disorder is a common practise, because bacteria usually originate from the donor's skin. The effectiveness of current deferral guidelines to prevent the bacterial contamination of blood has not been assessed.

Materials and methods We recruited 55 blood donors with a skin disorder that prevented donation, and matched three controls for each case. The donors filled out a questionnaire and one bacterial culture sample was taken from venepuncture forearm skin.

Results The median total number of colony forming skin bacteria was significantly higher in the cases (224 CFUs per sample) than controls (105 CFU per sample). *Staphylococcus aureus* was significantly more often present on the skin in cases (49%) as compared to controls (7%). Regarding other bacterial genera, no difference between cases and controls was found.

Conclusions This study shows that our current guidelines for deferral of blood donors with skin disorders effectively identifies individuals with a high number of bacteria on their skin, as well as *S. aureus* carriers. However, deferral due to skin disorders had only a minor impact on blood product contamination when compared to other actions.

Received 22 July 2011,
revised 18 January 2012,
accepted 24 January 2012,
published online 20 February 2012

Key words: bacterial contamination, blood collection, donors, quality management, transfusion-transmissible infections.

Introduction

While the risk of transfusion-transmitted viral diseases has diminished during the last 10 years due to new testing and processing methodologies, the risk of bacterial infection through a contaminated blood component has more or less remained the same [1]. In the USA, two to eight deaths per year are attributable to blood component contamination and sepsis [2]. The United Kingdom Serious Hazards of Transfusion (SHOT) reported six confirmed sepsis cases in 2008 and two in 2009 due to a contaminated blood component; five of the eight patients survived the infection [3]. In Finland, we have calculated that approximately one death every 5 years is due to a contaminated blood component (unpublished data).

As a platelet concentrate is the blood component most susceptible to bacterial propagation, a bacterial culture of all platelet components has been introduced in many blood establishments in order to control the risk to patients. The introduction of a routine bacterial culture of platelet components has reduced but not eliminated the risk of contamination [4].

Between 0·6% and 3·9% of donated whole blood is contaminated with bacteria [5, 6]. Approximately 0·3% of red cell units is contaminated with bacteria [1]. Of platelet components, up to 0·65% are confirmed positive in bacterial culture, but it is, however, rare for the contamination to cause clinical infection in the recipient [7].

Correspondence: Satu Pastila, Finnish Red Cross Blood Service, Kivihaantie 7, 00310 Helsinki, Finland
E-mail: satu.pastila@bts.redcross.fi

Bacteria that contaminate blood derive from the donor's skin or are present in blood if the donation takes place during bacteraemia. As bacteraemia is nowadays highly improbable in a healthy individual, the most significant source of bacteria is the donor's skin. Bacteria are introduced into whole blood mainly within a skin plug which enters the collection system via a needle, with the first blood. The diversion of the first blood into a sample pouch has been shown to reduce the bacterial contamination risk by 47–72% [6, 8]. Improved skin disinfection and first blood diversion has been shown to reduce bacterial contamination by 77% [9].

Skin bacteria, such as *Staphylococcus* sp., are major causes of life-threatening bacteraemia. *Staphylococcus aureus*, in particular, is notorious, resulting in a 24% case fatality rate on average and even higher mortality when methicillin resistant [10]. In Finland, *S. aureus* is the third prevalent cause of sepsis adding up to 12% of all bacteraemic infections in adults [11].

Human skin is constantly populated with micro-organisms, reflecting the habits, hobbies, profession and environment of an individual. Microbes colonize the human body during birth and shortly thereafter. The body of a newborn will be colonized by a wide array of microbes, many of which are commensal or symbiotic to humans [12].

In adults, the normal resident flora of skin is composed of a fairly stable set of genera, mostly aerobes. These organisms survive and multiply on skin and may also inhabit deep epidermal layers. The normal flora of skin usually consists of *Staphylococcus* species, including in some cases low levels of *S. aureus*, *Micrococcus* species, *Corynebacterium* species, *Propionibacterium* species, non-pathogenic *Neisseria* species, alpha-haemolytic and non-haemolytic streptococci and some Gram-negative bacteria and yeasts [13].

Transient flora usually inhabits skin or mucous membranes for hours or days. These organisms can be readily transmitted unless they are removed. If normal flora is disturbed, transient micro-organisms may colonize skin, proliferate and produce disease or infection. Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA) may also be part of transient skin flora.

The numbers and proportions of different microbes can vary due to forces from both inside and outside the body. Elevated temperature and humidity increase the total number of bacterial population. As a rule, Gram-negative bacteria are numerous only on areas where humidity of the skin is high [14].

The bacteria of normal flora function as a physiological and mechanical protection from harmful materials and substances. The resident normal flora of the skin represents bacteria of low virulence and it therefore rarely causes significant infections [15].

Abnormalities in skin flora due to skin infections, the use of antimicrobial agents, and skin disorders such as atopic skin, are well known and documented [16, 17]. Hospital admission is also known to affect skin flora by direct skin colonization with particular hospital-related species [18]. Work place, pets and hobbies are also known to affect skin flora [9, 16, 19, 20].

There are no statistical data on the quantity and quality of skin flora in mild skin conditions, which do not require hospital outpatient care or admission, or which are stabilized or healed. Furthermore, distinction between normal and abnormal skin is vague, and bacterial flora of healthy skin of an atopic person resembles that of a normal, non-atopic skin [21, 22].

We currently use the following skin disorder-related criteria for blood donor deferral: active rash or a skin disorder with a size greater than the blood donor's own palm, or any kind of current skin infection, anywhere on the donor's skin. The puncture site must be free of any rash or skin disease.

We conducted the study in order to evaluate the appropriateness of our skin disorder-related deferral criteria and to obtain information on mild skin diseases' contribution to bacterial skin flora.

Materials and methods

Cases and controls

The 55 cases were blood donors identified at blood donation sessions as they were deferred from blood donation, according to our current criteria, due to skin condition. We recruited three controls for each case, a total of 165 controls. The controls were blood donors of the same gender and from the same geographical area as the case. The control's age was within 5 years of the case's age.

Both cases and controls filled out a form with questions on demographic characteristics, data on skin condition, and use of antimicrobial agents. Only controls donated blood.

Skin sampling

Samples were collected from July 2007 until April 2008. Microbiological sampling took place through the year in order to cover possible climate-related variations in skin flora.

As only one person conducted all the microbiological sampling, and while study participants resided in different geographical areas, the sampling of cases took place within1 week of their identification and recruitment. Controls were sampled on average within 2·3 days after the case was identified and sampled.

Skin flora samples were collected using Columbia blood agar contact plates 55 mm in diameter (Heipha, Heidelberg,

Germany). Before skin disinfection, the agar surface of the contact plate was applied directly onto the venepuncture site on the donors forearm and even pressure was applied for 10 s. After contact plate sampling, the same area was swabbed with an Amies Charcoal transport swab (Technical Service, Heywood, UK). In controls, blood was collected from the other arm.

Culture systems

Within 24 h of collection, the contact plates were placed in incubation at 35 ± 2°C for 2 days. The number of colonies on the contact plate was counted or estimated if too numerous to count. Visually different types of colonies were subcultured on sheep blood agar (Heipha, Heidelberg, Germany). The swab samples on blood agar were incubated as described above. The swab plates were only used for singling out colonies when the contact plates were overgrown. The typing of colonies to a genus or species level was performed by conventional microbiological methods [15]. The level of identification was chosen in accordance to the estimated clinical significance. Additionally, all *S. aureus* strains were tested for methicillin resistance. One strain was additionally tested for the mec-A gene (GenoType® MRSA, BioProducts, Austria).

We cultured the residual whole blood from the sample pouches of 165 controls. The sample pouch volume allowed only 10 ml of residual blood for culture, after sampling for blood donor screening. The cultured volume was 10 ml of blood in all controls, except for four samples, in which the volumes were 8 ml, 7 ml, 5 ml, and 3 ml. The reason for smaller volume was that sample pouches had not been maximally filled. The sample was cultured by an automated microbial detection system (BacT/ALERT 3D, bioMérieux, Durham, NC, USA) using aerobic culture bottles.

Sample size and data analysis

Power calculation was performed to define the number of cases and controls. Because atopic skin disorder is prevalent also in Finland [23, 24], power calculation was based on the published over 10-fold difference in carriage rate of *S. aureus* in atopic persons compared to healthy individuals [25]. The power calculation was based on a two-sample *t*-test, where the type I error probability (significance level) was set at 0·05, type II error probability (power) was set at 0·90, and a moderate effect (0·5) was assumed. The power calculation indicated that a minimum of 46 cases and 138 matched controls would be needed to show a significant difference between the two groups [26].

The survey information gathered was recorded in the database built for this purpose. We tested the hypothesis that the deferred blood donors (cases) have considerable more bacteria on their skin than healthy donors using Chi-Square test and Wilcoxon's rank-sum test. All statistical tests were two-tailed and considered significant at $P < 0{\cdot}05$. The analyses were done using R language and environment for statistical computing, version 2.10.0 [27].

Results

Cases and controls

The study comprised of 220 blood donors. We recruited 55 cases and for each case 3 controls, a total of 165 controls. Of the cases, 24 were male and 31 female. The age distribution of cases differed significantly from the age of blood donors in general. The cases' mean age was 29 years (SD 12·7 years) as the mean age of our active blood donor panel is 46 years (SD 13·4 years, data from Finnish Red Cross Blood Service Donor Register).

Bacterial counts

The bacterial count on plates ranged from 1 CFU (colony forming units) to an estimated 1000 or more CFUs per plate. For the cases and the controls, the median CFU counts were 224 (median absolute deviation, MAD = 186·8) and 105 (MAD = 132·0) per plate, respectively. The total number of colony forming units (CFU) of bacteria per plate was significantly higher in cases compared to controls (Wilcoxon's test, $P = 0{\cdot}0096$) (Fig. 1).

Microbes identified

The bacteria in samples represented the normal bacterial skin flora. There were on average 3·6 and 3·1 different

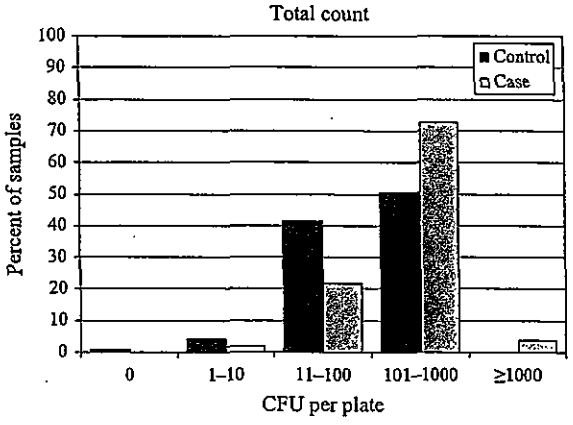


Fig. 1 Total number of colony forming units (CFU) per plate, log10 transformed, cases and controls.

bacterial genera or species identified in cases' and controls' samples, respectively. The difference was not significant. Coagulase-negative *Staphylococcus* species and *Micrococcus* species predominated, and other gram-positive bacteria such as diphteroids and *Bacillus* species were also commonly detected. No methicillin-resistant *S. aureus* strains (MRSA) were identified. The Gram-negative organisms present were primarily *Pseudomonas* and *Acinetobacter* species or related genera. No *Pseudomonas aeruginosa* was found. There were few cases of yeasts detected, but no *Candida albicans* strains were confirmed (Table 1).

Twenty-seven of the cases (49%) harboured *S. aureus* on their skin, in contrast to only 12 (7%) of the controls. The difference was significant. Two out of the twelve *S. aureus* positive controls were atopics. When analysing the difference in the number of *S. aureus* CFU in cases and controls, CFU count was classified into three categories: 1–10, 11–100 and over 101 CFUs, due to statistical reasons. The number of *S. aureus* CFU was significantly higher in cases compared to controls ($P = 0{\cdot}0007$, Pearson's chi-squared test) (Fig. 2).

Regarding the CFU counts of other bacterial genera, no difference between the cases and controls was found.

Only one of the control sample pouch cultures was positive, and a *Diphteroid* sp. was identified.

Table 1 Microbial strains isolated and identified on the contact plate samples from the donors forearm

Organism	Control, n = 165	Case, n = 55	All, n = 220
Gram-positive bacteria	153	45	198
Micrococcus species	148	49	197
Coagulase-negative staphylococci	87	26	113
Non-spore forming Gram-positive rod	34	16	50
Bacillus species	12	27*	39
Staphylococcus aureus	26	11	37
Streptococcus species	13	3	16
Bacillus cerus	1	1	2
Group G beta-haemolytic streptococcus	0	2	2
Streptococcus agalactiae	0	1	1
Gram-negative bacteria			
Pseudomonas and related genera	49	12	61
Acinetobacter and related genera	13	9	22
Apathogenic Neisseria species	3	2	5
Pantoea and related genera	2	1	3
Enterobacter amnigenus	1	0	1
Enterobacter sakazakii	0	1	1
Fungi			
Yeast	11	5	16
Filamentous fungi	1	1	2
Miscellaneous, no further identified	12	3	15

*$P < 0.0001$ corrected Chi-square test.

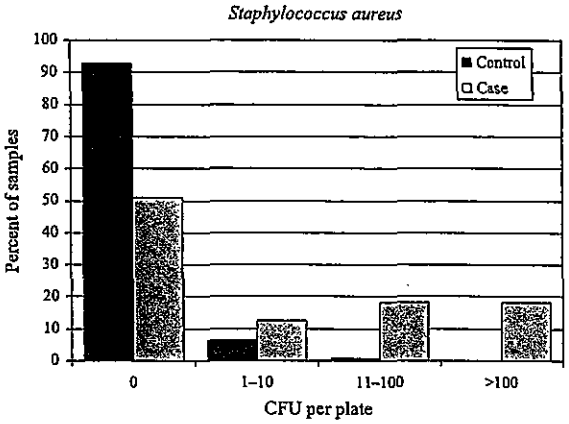


Fig. 2 CFU of *Staphylococcus aureus* per plate, log10 transformed, cases and controls.

Discussion

Skin disorders may pose an increased risk for bacterial contamination of blood components, either due to colonization with pathogenic species or due to a high number of bacteria on skin [16, 22, 25, 28].

The clinical impact of contaminated blood may be devastating, as blood components are often given to immunocompromised patients. According to the SHOT data from 1996 to 2009, 40 incidents of blood component contamination and 11 deaths were reported in the UK. In the report, additional 28 cases with major morbidity were probably or definitely attributed to a transfusion reaction [3]. In the USA during 2005–2010, 35 transfusion-related fatalities due to microbes were reported to the Food and Drug Administration (FDA): seven fatalities (20%) were caused by *S. aureus*, and four by other skin-related *Staphylococcal* species. Altogether 31% of all transfusion-related deaths were related to blood component contamination with bacterial skin flora [29].

Contamination of blood products with bacteria is a well known risk, and has been targeted with different approaches: prospective routine culture of all platelet products, shortening of shelf life to three days, and pathogen reduction techniques. According to an international blood banking forum, all participants had introduced at least one step into their processes to enhance bacterial safety [30, 31].

The bacterial species detected in this study were similar to the findings we have in our quality control cultures of outdated platelet concentrates. The spectrum of bacterial species also resembled results reported elsewhere [1, 3–5, 29].

Approximately 0·2% of registered blood donors are deferred due to a skin disorder at the Finnish Red Cross Blood Service. The prevalence of all skin disorders in blood donors is thus lower than the prevalence of atopic eczema

alone in the general population [32, 33]. Generally, a skin disease causes a temporary deferral and the donor is later able to return and give blood.

As 71% of the cases in this study were atopics, it was likely that we would detect *S. aureus* in their samples. The skewed age distribution of cases was also anticipated, as more experienced blood donors would not show up at a session while suffering from an acute skin disorder. Furthermore, atopic skin disorder tends to heal by time, and it is less prevalent in older age groups.

There were six cases and two controls with psoriasis. This probably reflects a low prevalence of psoriasis in the Finnish population, as reported elsewhere [34]. The density of microbial flora is known to be higher on the psoriatic plaques than on uninvolved skin. Furthermore, the frequency of *S. aureus* in psoriatic plaques is higher than on uninvolved skin [28, 35]. None of our psoriatic blood donors did harbour *S. aureus* in their samples, which is a conflicting finding.

Atopic dermatitis is a pruritic chronic inflammatory skin disorder. The symptoms include itching and dryness of the skin. The skin of the majority of atopic persons is colonized by *S. aureus*, in contrast to normal skin which seldom is colonized with this bacterium [25]. The prevalence of atopic eczema in young Finnish men is reported to be 1·2% [32]. In an interview study of children and adolescents in Finland, the prevalence of atopic eczema was 1·7% [33]. The lifetime prevalence of atopic skin symptoms in elderly German persons (mean age 63 years) was found to be 4·3% [36]. As certain pathogenic and resistant bacterial strains are spreading in the community, an atopic or even a healthy person may harbour pathogenic species as part of transient flora [37].

In 2004, the Finnish Red Cross Blood Service introduced diversion of the first blood and enhanced skin disinfection. During the same year, the current, stricter deferral guideline for donor skin conditions was introduced. With these steps, the contamination rate of outdated platelet concentrates fell drastically from 0·60% to 0·15%. When we compared the results with data published elsewhere [9], and deducted the expected 77% decrease, we could calculate that the stricter deferral guidelines for skin disorders only resulted in 0·03% decrease in the contamination rate. Acknowledging the minor clinical importance of this ever so small increment, we feel that continuing with the current deferral guidelines on skin conditions is justified.

Our results show that the deferral criteria used are quite accurate in finding *S. aureus* carriers. Only few other clinically relevant bacterial species were detected in samples, but there was no difference between cases and controls. Additionally, the cases harboured significantly higher number of total CFU on their forearm skin compared to controls. Further studies are needed to define what impact a subsequent deferral of potential *S. aureus* carriers and persons with a high bacterial CFU would have on the contamination of blood components.

Acknowledgements

The study group wishes to acknowledge The Finnish Red Cross Blood Service's Infection Control Nurse, Mrs Helena Tiihonen for carrying out the recruitment of cases and controls, data collection, and sampling during this study. She also performed a great deal of the work at our microbiology laboratory, and assisted in the completion of the study in a timely manner. We would also like to thank Mr Lauri Nikkinen and Mr Jarno Tuimala our statisticians, for their indispensable help during the study, and Ms Niina Woolley for reviewing the manuscript. The study was carried out in the Finnish Red Cross Blood Service, and there was no financial support from outside the institution.

References

1 Brecher ME, Hay SN: Bacterial contamination of blood components. *Clin Microbiol Rev* 2005; 18:195–204

2 U.S. Food and Drug Administration: Fatalities Reported to FDA Following Blood Collection and Transfusion: Annual Summary for Fiscal Year 2010. Available at http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/SafetyAvailability/ReportaProblem/TransfusionDonationFatalities/ucm254802.htm.

3 Taylor C, Cohen H, Mold D, *et al.*: The 2009 Annual SHOT Report (2010). Available at http://www.shotuk.org/wp-content/uploads/2010/07/SHOT2009.pdf.

4 Blajchman MA, Goldman M, Baeza F: Improving the bacteriological safety of platelet transfusions. *Transfus Med Rev* 2004; 18:11–24

5 Soeterboek AM, Welle FH, Marcelis JH, *et al.*: Prevalence of bacterial contamination in whole blood after donation. *Vox Sang* 1995; 69:149

6 Bruneau C, Perez P, Chassaigne M, *et al.*: Efficacy of a new collection procedure for preventing bacterial contamination of whole-blood donations. *Transfusion* 2001; 41:74–81

7 Te Boekhorst PAW, Beckers EAM, Vos MC, *et al.*: Clinical significance of bacteriologic screening in platelet concentrates. *Transfusion* 2005; 45:514–519

8 De Korte D, Marcelis JH, Verhoeven AJ, *et al.*: Diversion of first blood volume results in a reduction of bacterial contamination for whole-blood collections. *Vox Sang* 2002; 83:13–16

9 McDonald CP, Roy A, Mahajan P, *et al.*: Relative values of the interventions of diversion and improved donor-arm disinfection to reduce the bacterial risk from blood transfusion. *Vox Sang* 2004; 86:178–182

10 Laupland KB, Ross T, Gregson DB: *Staphylococcus aureus* bloodstream infections: risk factors, outcomes, and the influence of methicillin resistance in Calgary, Canada, 2000–2006. *J Infect Dis* 2008; 198:336–343

11 Hulkko T, Lyytikäinen O, Kuusi M, *et al.*: Infectious diseases in Finland 1995–2009. National Institute for Health and Welfare, 2010. Available at http://www.thl.fi/thl-client/pdfs/d6d63c66-9690-4f4d-9ee1-319bb5648eaf.

12 Fredricks DN: Microbial ecology of human skin in health and disease. *J Investig Dermatol Symp Proc* 2001; 6:167–169

13 Roth RR, James WD: Microbial ecology of the skin. *Annu Rev Microbiol* 1988; 42:441–464

14 McBride ME, Duncan WC, Knox JM: The environment and the microbial ecology of human skin. *Appl Environ Microbiol* 1977; 33:603–608

15 Baron EJ, Murray PR: Manual of Clinical Microbiology (2 Volume Set), 9th edn. ASM Press, 2007.

16 Ogawa T, Katsuoka K, Kawano K, *et al.*: Comparative study of Staphylococcal flora on the skin surface of atopic dermatitis patients and healthy subjects. *J Dermatol* 1994; 21:453–460

17 Kaplowitz LG, Comstock JA, Landwehr DM, *et al.*: Prospective study of microbial colonization of the nose and skin and infection of the vascular access site in hemodialysis patients. *J Clin Microbiol* 1988; 26:1257–1262

18 Larson EL, Cronquist AB, Whittier S, *et al.*: Differences in skin flora between inpatients and chronically ill outpatients. *Heart Lung* 2000; 29:298–305

19 Vitale CB, Gross TL, Weese JS: Methicillin-resistant Staphylococcus aureus in cat and owner. *Emerg Infect Dis* 2006; 12:1998–2000

20 Brook I, Coolbaugh JC, Williscroft RG: Effect of diving and diving hoods on the bacterial flora of the external ear canal and skin. *J Clin Microbiol* 1982; 15:855–859

21 Nilsson EJ, Henning CG, Magnusson J: Topical corticosteroids and *Staphylococcus aureus* in atopic dermatitis. *J Am Acad Dermatol* 1992; 27:29–34

22 Guzik TJ, Bzowska M, Kasprowicz A, *et al.*: Persistent skin colonization with *Staphylococcus aureus* in atopic dermatitis: relationship to clinical and immunological parameters. *Clin Exp Allergy* 2005; 35:448–455

23 Vartiainen E, Petays T, Haahtela T, *et al.*: Allergic diseases, skin prick test responses, and IgE levels in North Karelia, Finland, and the Republic of Karelia, Russia. *J Allergy Clin Immunol* 2002; 109:643–648

24 von Hertzen L, Makela MJ, Petays T, *et al.*: Growing disparities in atopy between the Finns and the Russians: a comparison of 2 generations. *J Allergy Clin Immunol* 2006; 117:151–157

25 Leyden JJ, Marples RR, Kligman AM: *Staphylococcus aureus* in the lesions of atopic dermatitis. *Br J Dermatol* 1974; 90:525–525

26 Cohen J: Statistical Analysis for the Behavioral Sciences, 2nd edn. New York, Routledge Academic, 1988.

27 R Development Core Team (2011): R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, 2010. Available at: http://www.R-project.org/.

28 Singh G, Rao DJ: Bacteriology of psoriatic plaques. *Dermatologica* 1978; 157:21–27

29 U.S. Food and Drug Administration: Fatalities Reported to FDA Following Blood Collection and Transfusion: Annual Summary for Fiscal Year 2010. 2010:12 pp

30 Pietersz RN, Engelfriet CP, Reesink HW, *et al.*: Detection of bacterial contamination of platelet concentrates. *Vox Sang* 2007; 93:260–277

31 Schmidt M: Comparison of different methods of bacterial detection in blood components. *ISBT Science Series* 2009; 4:80–86

32 Latvala J, von Hertzen L, Lindholm H, *et al.*: Trends in prevalence of asthma and allergy in Finnish young men: nationwide study, 1966–2003. *BMJ* 2005; 330:1186–1187

33 Pöysä L, Korppi M, Pietikäinen M, *et al.*: Asthma, allergic rhinitis and atopic eczema in Finnish children and adolescents. *Allergy* 1991; 46:161–165

34 Gelfand JM, Weinstein R, Porter SB, *et al.*: Prevalence and treatment of psoriasis in the United Kingdom: a population-based study. *Arch Dermatol* 2005; 141:1537–1541

35 Aly R, Maibach HE, Mandel A: Bacterial flora in psoriasis. *Br J Dermatol* 1976; 95:603–606

36 Wolkewitz M, Rothenbacher D, Low M, *et al.*: Lifetime prevalence of self-reported atopic diseases in a population-based sample of elderly subjects: results of the ESTHER study. *Br J Dermatol* 2007; 156:693–697

37 Edelstein M, Kearns A, Cordery R: Panton-Valentine Leukocidin associated *Staphylococcus aureus* infections in London, England: clinical and sociodemographic characterisation, management, burden of disease and associated costs. *J Infect Public Health* 2011; 4:145–153

別紙様式第2　　医薬品　　別紙3

医薬部外品　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数		回	報告日 年　月　日	第一報入手日 2012 年 6 月 5 日	新医薬品等の区分 該当なし	総合機構処理欄
一般的名称			研究報告の公表状況	Euro Surveill. 2012;17(22):pii=20186	公表国 イギリス	
販売名（企業名）						

研究報告の概要

2012年2月、イギリスのテイサイドの健康保護チームは肺炎患者5症例の報告を受けた。肺炎が認められたのは、親戚を含む拡大家族4症例と医療従事者1症例であった。この医療従事者（症例B）は最初に感染症に罹患した症例(症例A)の世話をしていた。これら5症例のうち、4症例には重度症状が認められ、2例は集中治療室への入院を必要とした。4症例に対して補体結合反応を行ったところ、*Chlamydophila* 種の感染が示唆された。この段階では、感染源の種類の推定は不可能であったが、感染症例発現の時間範囲が1～22日間であったことから、人から人への感染が示唆された。従って、*Chlamydophila pneumoniae* 感染発生の可能性があると考えられた。微生物が同定されるまでの間、この根拠に基づいて感染症発生に対する対応が施行された。2月中旬までに、*Chlamydophila psittaci* がPCR法によって確認された。

拡大家族における3例の感染例（症例A,B,C）は、ある持続的感染源に次々に曝露したと説明できるが（たとえば、一時的な感染源ではなく、ある地域の感染源）、医療従事者(症例D)の感染については説明不可能である。症例Dが空間的・時間的に接触したのは症例Aのみであり、その接触とは症例Dが勤務している病棟に症例Aが入院したことである。症例Dの職業は、患者のケアであり、侵襲的処置の実施ではない。症例Dは集中的な医療支援と検査を必要とした症例Aのケアの間に曝露を受けていた可能性がある。症例Aと症例Dの直接的接触の可能性については不明である。

今回の発生を人以外の共通感染源に対する曝露によって説明することは困難である。最終的な結論は出せないが、人から人への感染に一致する特徴が証明されている。オウム病は、一般に、人から人への感染は起きないと考えられているが、偏見にとらわれるべきではない。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

BYL-2012-0411

Euro Surveill.
2012;17(22):pii=20186

報告企業の意見	今後の対応
オウム病は、動物(主に鳥類)から人への感染症と考えられており、一般に、人から人への感染は起きないとされている。本報告は、稀ではあるかもしれないが、オウム病が人から人に感染することを報告している。 コージネイトFSおよびコージネイトFSバイオセットの製造工程における病原体除去・不活化処理は，細菌，および，ウイルスに対して有効であることが報告されている。従ってクラミジアが本剤に混入する可能性は極めて低いと考えられる。	現時点で新たな安全対策上の措置を講じる必要はないと考える。 今後も，新規人畜共通感染症や新たなウイルス感染症に関する情報収集に努める。

27

MedDRAバージョン 15.0

RAPID COMMUNICATIONS

Psittacosis outbreak in Tayside, Scotland, December 2011 to February 2012

C C McGuigan (chris.mcguigan@nhs.net)[1], P G McIntyre[2], K Templeton[3]
1. Directorate of Public Health, NHS Tayside, Kings Cross Hospital, Dundee, United Kingdom
2. Medical Microbiology, Ninewells Hospital and Medical School, Dundee, United Kingdom
3. East of Scotland Specialist Virology Centre, Royal Infirmary of Edinburgh, Edinburgh, United Kingdom

Citation style for this article:
McGuigan CC, McIntyre PG, Templeton K. Psittacosis outbreak in Tayside, Scotland, December 2011 to February 2012 . Euro Surveill. 2012;17(22):pii=20186.
Available online: http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=20186

Article submitted on 14 May 2012 / published on 31 May 2012

A Tayside outbreak of psittacosis December 2011–February 2012 involved three confirmed and one probable cases. Confirmed cases were indistinguishable by sequencing of polymerase chain reaction (PCR) products. The epidemiological pattern suggested person-to-person spread as illness onset dates were consistent with the incubation period and no single common exposure could explain the infections. In particular the only common exposure for a healthcare worker case is overlap in place and time with the symptomatic index case.

Outbreak description

During February 2012, Tayside's Health Protection Team was notified of five cases of pneumonia. These illnesses affected four family members and one healthcare worker (HCW) who had tended the index case. Four of these developed severe symptoms, two requiring intensive care unit (ICU) admission. These four had complement fixation tests (CFT) suggesting infection with a *Chlamydophila* species. Although speciation was not possible at this stage, the time interval of one to 22 days between the symptom onset of consecutive cases, suggested person-to-person spread. An outbreak of *Chlamydophila pneumoniae* infection therefore seemed likely. Pending identification, the outbreak response proceeded on this basis. By mid-February *C. psittaci* was confirmed by polymerase chain reaction (PCR).

Background

Psittacosis is a systemic infectious disease caused by *Chlamydophila psittaci*. Usual features include fever, malaise, unproductive cough, headache and atypical pneumonia. The incubation period is one to four weeks [1]. Since its first description in 1879 [2], epidemics occurred during the next century. Where identified, the source of such outbreaks and infections was zoonotic, and predominantly avian but not necessarily psittacine. For example, large outbreaks occurred among poultry workers [3]. Subsequently, these have become rare, as avicultural hygiene has intensified. In Scotland, up to 10 sporadic cases per year were notified (no outbreaks) in the past 10 years (Table) [4]. We have found no case described in the literature where person-to-person spread has accounted for cases of psittacosis, although person-to-person transmission has evidently been suggested but not proven [5].

Outbreak investigation and results

During a series of outbreak management team (OMT) meetings, results were assessed and further investigation directed. Awareness raising among Tayside medical practitioners aimed to increase case ascertainment. The investigation progressed on three fronts: epidemiological, microbiological and environmental.

TABLE

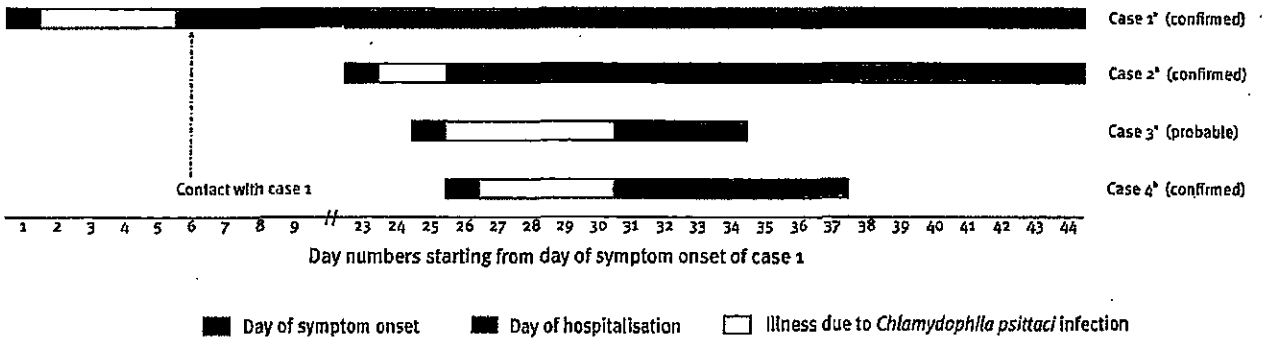
Total number of cases of *Chlamydophila psittaci* infections notified annually, Scotland, 2001–2011 (n=27)

Year	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
Number of cases	2	10	1	4	0	0	1	1	2	5	1

Source: Health Protection Scotland (HPS) (Lynda Browning, personal communication, 23 May 2012) [4].

FIGURE

Time of symptom onset and clinical course of probable and confirmed cases, psittacosis outbreak in Tayside, Scotland, December 2011–February 2012 (n=4)



[a] Cases 1, 2 and 3 were part of an extended family and had extensive and frequent contact with eachother.
[b] Case 4, a healthcare worker, had contact with case 1 on the sixth day of case 1's illness, as indicated by an arrow.

Epidemiological investigation

A modified Centers for Disease Control and Prevention (CDC) case definition [6] was agreed. To be considered, cases must have compatible clinical illness. All notified cases were interviewed about their illness, contacts and relevant possible exposures. Confirmed cases had either *Chlamydophila* species detected in respiratory secretions (by culture or PCR) or a fourfold or greater increase in antibody (IgG or IgM) to *Chlamydophila* species (to a reciprocal titre of 32 between paired acute- and convalescent-phase serum specimens taken at least two weeks apart) by CFT. Cases which were epidemiologically linked to a confirmed case were considered probable, given an antibody (IgG or IgM) titre of 256 or greater, and possible given one of 32 to 128 (all by CFT in a serum specimen taken after symptom onset).

Applying this, by 22 February 2012, the outbreak involved three confirmed, one probable and two possible cases, with the index case having had onset of illness in late December 2011. The figure describes the time of onset and clinical course for confirmed and probable cases. These comprised three female and one male with an age range of 41 to 65 years.
A further two possible cases were identified: a family member with mild respiratory illness and an unrelated patient from the same ICU as the index case.

Microbiological investigation

Initial investigations used CFT performed according to standard methods using antigen obtained from Launch Diagnostics, Longfield, Kent, United Kingdom (UK) [7]. The CFT antigen is a chlamydia group specific antigen. The test detects total complement fixing antibody: both IgG and IgM.

Real-time PCR was performed using in house assay on respiratory samples which were initially used for investigations for respiratory viruses. The screen for *Chlamydophila* species was an assay targeted to 16S ribosomal sequences. Any positive sample was further investigated by specific real-time PCR to *C. psittaci* or *C. pneumoniae* targeting a different region of the 16S ribosomal sequence. This enabled determination of which *Chlamydophila* species was involved in a case.

Of the confirmed cases, two showed a rising CFT titre, one a static raised titre. All were PCR positive. Sequence analysis of the outer membrane protein A (ompA) gene showed 100% similarity between these *C. psittaci* strains. The probable case had a static CFT titre above 256 and was PCR negative. Possible cases had static titres of 64 to128 and were PCR negative.

Environmental investigation

Extensive cartographical and field searches were made for possible avian sources of infection. These were directed by information gleaned from interviews with cases. Workplaces and residences of cases were plotted on an Ordnance Survey map. Cases 2 and 3 lived together a kilometre from case 1. Case 4 resided a further ten kilometres west. Although not within any of the cases' respective place of residence, two pigeon coops and a cage of small birds were found in the neighbourhood of where cases 1, 2 and 3 lived. None were within 500 m of case 1, but as these could be considered a plausible source, faecal samples were taken for PCR analysis.

The index case's pet dog was reported to have rolled in the remains of a dead bird in December. Also, this

case's workplace was reported to be affected by a large number of gulls. Searches in both areas revealed insufficient sample material. On veterinary recommendation (included in the OMT), a PCR analysis of a pooled canine faecal sample was done, using an unpublished method, developed at the UK Animal Health and Veterinary Laboratories Agency, Weybridge. This PCR detects the presence of *C. psittaci* and *C. abortus* and was negative.

No environmental source of any *Chlamydophila* species was revealed by environmental investigations. This is not unusual [8].

Control measures

Since the source of the infection was thought to be a pathogen which was not readily transmissible from person-to-person, standard infection control measures were recommended for those HCWs and other people in contact with cases.

Discussion and conclusion

The main issue in this outbreak is the picture of person-to-person spread. The authors can find no description of this in psittacosis. Incubation ranging from one to four weeks implies up to 21 days between shortest and longest. The longest gap between onset of confirmed cases was 25 days. While the cases amongst the extended family might be explained by a putative persistent source to which family members were sequentially exposed (e.g. a geographical, not temporal, point source), case 4 (the HCW) cannot.

Since cases 1 to 3 were members of an extended family and had extensive and frequent contact with each other (especially over the winter holiday season) it was not possible to retrospectively identify particularly significant 'mutual exposure events'. However, shared exposures between case 4 and the others were sought. The only spatial-temporal overlap was with case 1 and occurred during the admission of case 1 to the ward where case 4 worked. Case 4's duties included personal care (not invasive procedures). Conceivably, case 4 may have been exposed while caring for case 1 who required intensive medical support and investigation. Since it was not possible to explore direct contact between the two cases, it is uncertain what such exposure might be.

It is difficult to explain all cases in this outbreak by exposure to a common non-human source. While inconclusive, features consistent with person-person spread are demonstrated. In our view, clinicians and public health specialists should therefore keep an open mind to the possibility of person to person spread of psittacosis despite the received opinion that this generally does not occur.

References

1. Heymann DL, editor. Control of communicable diseases manual. 19th ed. Washington DC: American Public Health Association; 2008.
2. Vanrompay D, Ducatelle R, Haesebrouck F. Chlamydia psittaci infections: a review with emphasis on avian chlamydiosis. Vet Microbiol. 1995;45(2-3):93-119.
3. Gaede W, Reckling KF, Dresenkamp B, Kenklies S, Schubert E, Noack U, et al. *Chlamydophila* psittaci infections in humans during an outbreak of psittacosis from poultry in Germany. Zoonoses Public Health. 2008;55(4):184-8.
4. Health Protection Scotland (HPS). Chlamydia psittaci, Scotland, Annual Total as at 28 June 2011. Glasgow: HPS. [Accessed 24 May 2012]. Available from: http://www.documents.hps.scot.nhs.uk/giz/10-year-tables/psittaci.pdf
5. Centers for Disease Control and Prevention. Compendium of measures to control Chlamydia psittaci infection among humans (psittacosis) and pet birds (avian chlamydiosis), 2000 and Compendium of animal rabies prevention and control, 2000. National Association of State Public Health Veterinarians, Inc. MMWR Recomm Rep. 2000;49(RR-8):3-17.
6. Centers for Disease Control and Prevention. Compendium of measures to control Chlamydia psittaci infection among humans (psittacosis) and pet birds (avian chlamydiosis), 2000 and Compendium of animal rabies prevention and control, 2000. National Association of State Public Health Veterinarians, Inc. MMWR Recomm Rep. 2000;49(No. RR-8):5.
7. Grist NR, Ross CA, Bell EJ. Diagnostic Methods in Clinical Virology. Second edition. Blackwell Scientific Publications: Oxford; 1974.
8. Mulder MM, Heddema ER, Pannekoek Y, Faridpooya K, Oud ME, Schilder-Tol E, et al. No evidence for an association of ocular adnexal lymphoma with Chlamydia psittaci in a cohort of patients from the Netherlands. Leuk Res. 2006;30(10):1305-7.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 6. 22	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況		公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)		Okame M, Adachi E, Sato H, Shimizu S, Kikuchi T, Miyazaki N, Koga M, Nakamura H, Suzuki M, Oyaizu N, Fujii T, Iwamoto A, Koibuchi T. Jpn J Infect Dis. 2012 May;65(3):277-8.	日本

研究報告の概要

○男性と性交渉のある男性(MSM)間での*Shigella sonnei*アウトブレイク、東京

赤痢菌種は汚染食物や水を通じた糞口経路またはヒトーヒト間接触によって感染する。1970年代、サンフランシスコでMSM間の性感染症として初めて細菌性赤痢が報告された。それ以来、数カ国でMSM間でのアウトブレイクが報告されている。しかし日本におけるMSM間の赤痢菌感染はまだ報告されていない。2011年9月から11月に5人の細菌性赤痢患者が東大医科学研究所に入院した。患者は全てHIVに感染したMSMであり、CD4 T細胞数は168－415 cell/μLで、3人は既にART治療を受けていた。患者は腹痛、水様下痢、発熱などを呈した。全員の糞便培養から*Shigella sonnei*が検出され、レボフロキサシンによる治療を受けた。患者の平均発症期間は10日と、通常(2－3日)より少し長かった。問診では5人の患者間における直接性的接触のような密接な関係は認められなかった。全患者の分離株にパルスフィールドゲル電気泳動を行った結果、類似のパターンが明らかとなり、単一の*S.sonnei*株がMSM間に広まったことが示唆された。赤痢菌には4種類あるが、日本における細菌性赤痢の約60－80%は*S.sonnei*が原因であり、海外渡航と関連している。今回の患者には、発症前の半年間に海外渡航した者はいなかった。患者のうち1人は数カ月以内の男性との性交渉を否定したが、4人は発症前に同性間接触があった。

日本でのMSMにおける初めての赤痢菌アウトブレイクの報告は、MSMに対して赤痢菌を含む性感染性病原体に対する予防行為の重要性をより強調するものとなる。

報告企業の意見	今後の対応
日本で初めての男性と性交渉のある男性(MSM)間における赤痢菌アウトブレイクの報告である。	日本赤十字社では細菌感染、ウイルス感染防止の観点から、1カ月以内に発熱を伴う下痢症状のあった人を献血不適としている。また、6カ月以内に男性間性的接触があった人の献血を不適としている。今後も情報の収集に努める。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

17

Jpn. J. Infect. Dis., 65, 277-278, 2012

Laboratory and Epidemiology Communications

Shigella sonnei Outbreak among Men Who Have Sex with Men in Tokyo

Michio Okame[1], Eisuke Adachi[1], Hidenori Sato[1], Shoichi Shimizu[1], Tadashi Kikuchi[1], Naoko Miyazaki[1,3], Michiko Koga[2], Hitomi Nakamura[3], Masato Suzuki[4], Naoki Oyaizu[4], Takeshi Fujii[1], Aikichi Iwamoto[1,2], and Tomohiko Koibuchi[1]*

[1]*Department of Infectious Diseases and Applied Immunology, and*
[4]*Department of Laboratory Medicine, Research Hospital of The Institute of Medical Science, The University of Tokyo, Tokyo 108-8639; and*
[2]*Division of Infectious Diseases, Advanced Clinical Research Center, and*
[3]*International Research Center for Infectious Diseases, The Institute of Medical Science, The University of Tokyo, Tokyo 108-8639, Japan*

Communicated by Makoto Ohnishi

(Accepted April 28, 2012)

Shigella spp. are transmitted by the fecal-oral route via contaminated food and water or by person-to-person contact. Shigellosis was first reported as a sexually transmitted disease among men who have sex with men (MSM) in San Francisco in the mid-1970s (1). Since then, outbreaks among MSM have been reported in several countries (2,3). However, until recently, *Shigella* infection among MSM had never been reported in Japan.

Five patients with shigellosis were admitted in The Institute of Medical Science, University of Tokyo (IMSUT) Hospital within a short period between September and November 2011. All these patients were HIV-infected MSM, who had a low to mid-range CD4 T-cell count of between 168 and 415 cells/μl. Three had already received antiretroviral therapy (ART). All 5 patients had abdominal pain and watery diarrhea (5–30 times/day), 3 had bloody stools, 4 had fever, and 1 had vomiting (Table 1). *Shigella sonnei* was identified from the stool cultures of all patients. The patterns of susceptibility to antibiotics were identical in all cases. All isolates were susceptible to levofloxacin (LVFX). After receiving a 5-day treatment of LVFX 500 mg/day, 4 patients recovered from diarrhea within several days. Only 1 patient (Patient No. 3) continued to experience diarrhea following the 5-day treatment with LVFX, and received LVFX 500 mg/day for a further 5 days. The mean duration of their symptoms was 10 days (range, 5 to 14 days). This is a little longer than the usual pattern of shigellosis, which usually resolves in a few days with appropriate treatment. Trophozoites of *Entamoeba histolytica* were identified from the stools of one of the patients (Patient No. 2), and metronidazole was added to the treatment. On the basis of our interview, we did not establish any close relationships, such as direct sexual contact, among the 5 patients. Pulsed-field gel electrophoresis (PFGE) of all strains performed subsequently revealed a similar pattern, suggesting a single strain of *S. sonnei* had spread among these MSM.

There are 4 species of *Shigella* (*S. dysenteriae, S.*

Table 1. Characterization of 5 MSM patients with *Shigella sonnei*

Patient no.	1	2	3	4	5
Sex	Male	Male	Male	Male	Male
Age (y)	44	47	34	38	35
CD4 T-cell count (cell/μl)	252	392	207	415	168
Antiretroviral therapy	+	+	+	−	−
Self-reported homosexual contact	+	+	−	+	+
Onset	2011/8/31	2011/9/2	2011/10/5	2011/10/12	2011/11/6
Total duration of diarrhea (day)	9	14	11	10	5
Fever	−	+	+	+	+
Abdominal pain	+	+	+	+	+
Bloody stool	+	+	−	+	−
Vomiting	−	−	+	−	−
Treatment	LVFX (500) 5 days	LVFX (500) 5 days	LVFX (500) 10 days	LVFX (500) 5 days	LVFX (500) 5 days

*Corresponding author: Mailing address: Department of Infectious Diseases and Applied Immunology, Research Hospital of The Institute of Medical Science, The University of Tokyo, 4-6-1 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8639, Japan. Tel: +81-3-5449-5338, Fax: +81-3-5449-5427, E-mail: tkoibuch@ims.u-tokyo.ac.jp

flexneri, S. boydii, and *S. sonnei*) and approximately 60–80% of shigellosis in Japan is due to *S. sonnei*, which is associated with foreign travel (4). Among our patients, none had traveled abroad during the 6 months prior to their illness. Although 1 patient denied having sex with men for several recent months, the other 4 patients had a homosexual contact before the onset of symptoms. In order to prevent an outbreak of *Shigella* spp., practitioners and MSM need to be made aware of the risk of sexual transmission of orally transmitted agents. From 1999 to 2000, we experienced outbreaks of hepatitis A virus (HAV) among HIV-infected MSM (5). HAV was not recognized as a sexually transmitted agent at that time in Japan. The outbreaks of HAV and *S. sonnei* among MSM reported here prompted us to expand the concept of sexually transmitted diseases. We report the first outbreak of shigellosis among MSM in Japan and believe that our findings reinforce the importance of preventative behavior for MSM against sexually transmitted agents, including *Shigella* spp.

Conflict of interest None to declare.

REFERENCES

1. Dritz, S.K. and Back, A.F. (1974): Shigella enteritis venereally transmitted. N. Engl. J. Med., 291, 1194.
2. Marcus, U., Zucs, P., Bremer, V., et al. (2004): Shigellosis—a re-emerging sexually transmitted infection: outbreak in men having sex with men in Berlin. Int. J. STD. AIDS., 15, 533–537.
3. Morgan, O., Crook, P., Cheasty, T., et al. (2006): *Shigella sonnei* outbreak among homosexual men, London. Emerg. Infect. Dis., 12, 1458–1460.
4. National Institute of Infectious Diseases and Tuberculosis and Infectious Diseases Control Division, Ministry of Health, Labour and Welfare (2009): Shigellosis, Japan, 2006–2009. Infect. Agents Surveillance Rep., 30, 311'–312'.
5. Koibuchi, M., Ishida, T., Nakamura, T., et al. (1999): Genetic analysis of outbreak of hepatitis A virus infection among HIV-1 seropositive men. Jpn. J. Infect. Dis., 52, 249–250.

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 7 月 9 日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄

一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン	研究報告の公表状況	www.fda.gov/Biologics Blood Vaccines/2012/07/06	公表国 アメリカ
販売名 (企業名)	①献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL　(ベネシス) ②献血ヴェノグロブリン IH5%静注 1g/20mL　(ベネシス) ③献血ヴェノグロブリン IH5%静注 2.5g/50mL　(ベネシス) ④献血ヴェノグロブリン IH5%静注 5g/100mL　(ベネシス) ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　(ベネシス) ⑥グロブリン筋注 450mg/3mL「ベネシス」　(ベネシス) ⑦グロブリン筋注 1500mg/10mL「ベネシス」　(ベネシス)			

研究報告の概要

これはドラフトであり、実施するためのものではない

業界のためのガイダンス
輸血によって伝播されるマラリアの危険性を低減することを目的とした、
ドナーへの質問、不適格判定、再適格化、及び製品管理のための勧告事項

Ⅰ. 緒　　言

（ 略 ）

このガイダンスは 2000 年 6 月 8 日付の 65 FR 36452(2000 年 6 月 8 日)「業界へのガイダンス：マラリアに暴露された可能性についてドナーに質問することについての勧告事項」(以下、2000 年 6 月ドラフトガイダンス と呼ぶ)というタイトルのドラフトガイダンスと置き換わるものである。今後、正式なものとなった場合には、FDA が全ての登録血液採取・取扱施設にあてた 1994 年 7 月 26 日付のメモランダム「マラリア危険性を理由としたドナーの不適格判定についての勧告事項」(以下、1994 年 7 月 26 日メモランダム と呼ぶ)よりも優先する。

（ 略 ）

Ⅱ. 背　　景

（ 略 ）

Ⅲ.定　　義

（ 略 ）

Ⅳ. 勧告事項

A. ドナーの過去の状況に関する質問書

1. FDA は血液採取・取扱施設がドナーの過去の状況を尋ねる質問書を更新して、このガイダンスで提示している勧告事項を組み入れることを勧告する。
2. FDA はその更新したドナーへの質問書に次のエレメントを含むようにし、ドナー候補者のマラリア危険性を評価することを勧告する。

b. マラリア風土病化の見られる国に居住していたことがあるか；及び

使用上の注意記載状況・
その他参考事項等

代表として献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL の記載を示す。

2. 重要な基本的注意

(1)本剤の原材料となる献血者の血液については、HBs 抗原、抗 HCV 抗体、抗 HIV-1 抗体、抗 HIV-2 抗体及び抗 HTLV-I 抗体陰性で、かつ ALT (GPT) 値でスクリーニングを実施している。更に、プールした試験血漿については、HIV-1、HBV 及び HCV について核酸増幅検査 (NAT) を実施し、適合した血漿を本剤の製造に使用しているが、当該 NAT の検出限界以下のウイルスが混入している可能性が常に存在する。本剤は、以上の検査に適合した血漿を原料として、Cohn の低温エタノール分画で得た画分からポリエチレングリコール 4000 処理、DEAE セファデックス処理等により人免疫グロブリンを濃縮・精製した製剤であり、ウイルス不活化・除去を目的として、製造工程において 60℃、10 時間の液状加熱処理、ウイルス除去膜によるろ過処理及び pH3.9～4.4 の条件下での液状インキュベーション処理を施しているが、投与に際しては、次の点に十分注意すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

c. マラリア風土病化の見られる国へ旅行したことがあるか。

B．ドナーの不適格判定と再適格化

1. マラリアの罹患歴

a. FDA は血液採取・取扱施設が、マラリアの罹患歴があり、且つマラリアが風土病化していない国において抗マラリア剤での治療を受けて成功を収めた、との記録がない場合には、当該ドナーを無期限で不適格とすることを勧告する。

b. FDA は、マラリアが風土病化していない国において、確立された治療プロトコールに従って投与された抗マラリア剤での治療が成功を収めたとするドナー候補者についての記録を、血液採取・取扱施設の医療責任者がレビューすることを勧告する。施設の医療責任者がその記録を満足すべきものと判定した場合には、当該ドナー候補者はドネーション適格となる。但し、そのドナー候補者はマラリア以外のドナー適格性判定基準の全てについて適合していなければならない。

2. マラリア風土病化の見られる国での居住

FDA は、マラリア風土病化の見られる国での居住(第Ⅲ節で定義している)後 3 年間はドネーション不適格とすることを勧告する。その 3 年間の不適格期間後は、当該ドナーはその期間中マラリアとは無関係であり、且つマラリア以外の点でドナー適格性判定基準の全てに合致しているならば、ドネーションすることができる。

3. マラリア風土病化地域への旅行

a. 下記の第Ⅳ.B.3.b.節に記載の場合を除き、あるドナーが風土病化していない国の住人であり、且つマラリア風土病化地域へ旅行した、若しくは通過したことがある場合、そのドナーがマラリアの予防を受けていたか否かに関わらず、血液採取・取扱施設がそのドナーをマラリア風土病化地域から最後に離れてから 1 年間、ドナーとして不適格とすることを勧告する。その 1 年間の不適格期間後は、当該ドナーはその期間中マラリアとは無関係であり、且つマラリア以外の点でドナー適格性判定基準の全てに合致しているならば、ドネーションすることができる。

b. 血液採取・取扱施設は、マラリアが風土病化していない国の住人で、且つメキシコの Quintana Roo 州、若しくは Jalisco 州へ旅行したことがある人を、ある期間不適格とすることなく、ドナーとして受け入れることができる。しかし、FDA はマラリアが風土病化していない国の住人で、且つメキシコの Quintana Roo 州及び Jalisco 州以外のメキシコのマラリア風土病化地域の何処かに旅行した、若しくは通過していた場合、血液採取・取扱施設がそのドナーをマラリア風土病化地域から最後に離れてから 1 年間、ドナーとして不適格とすることを勧告する。その 1 年間の不適格期間後は、当該ドナーはその期間中マラリアとは無関係であり、且つマラリア以外の点でドナー適格性判定基準の全てに合致しているならば、ドネーションすることができる。

c. FDA は、あるドナーがマラリア風土病化地域に以前に住んでおり、過去 3 年間連続してマラリアが風土病化していない国の住人であった場合に、血液採取・取扱施設がそのドナーをマラリア風土病化地域を訪れた後 1 年間、不適格とすることを勧告する。その 1 年間の不適格期間後は、当該ドナーはその期間中マラリアとは無関係であり、且つマラリア以外の点でドナー適格性判定基準の全てに合致しているならば、ドネーションすることができる。

d. FDA は、マラリアが風土病化していない国に以前居住していた人が、マラリアが風土病化していない国に連続で 3 年未満居住した後にマラリアが風土病化している国に戻った場合、血液採取・取扱施設がそのドナーをマラリアが風土病していない国から戻った時点から 3 年間、不適格とすることを勧告する。その 3 年間の不適格期間後は、当該ドナーは、その期間中マラリアとは無関係であり、かつマラリア以外の点でドナー適格性判定基準の全てに合致しているならば、ドネーションすることができる。

C．製品の回収と隔離、及び血液と血液成分の荷受者への通知

FDA は、血液採取・取扱施設が第Ⅳ.B 節に記載の勧告事項に従って、不適格とすべきであったがそうしなかったドナーから血液、若しくは血液成分を採取したことが判明した場合には、次のアクションを取ることを勧告する。

1. 上述の勧告事項に従って不適格とすべきであったがそうしなかったドナーから血液若しくは血液成分(細胞性のもの、及び/また

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

は非細胞性のものの何れかも)を輸注を意図して採取した場合、または血液若しくは血液成分を更に製造工程を経て製造する目的で採取した場合には、FDA は、血液採取・取扱施設が当該ドナーから採取した未出荷の血液若しくは血液成分を隔離することを勧告する。

2. もしも血液採取・取扱施設が、第IV.B.1 節に記載の勧告事項に従って、不適格とすべきであったが、そうしなかったマラリアの発病歴を有するドナーから採取した輸注用の血液若しくは血液成分(細胞性のもの、及び/または非細胞性のものの何れも)、または更に製造工程を経て製造するための血液若しくは細胞性の血液成分を流通させていた場合には、FDA は血液採取・取扱施設が荷受人に通知して当該ドナーから採取された血液及び血液成分を回収し隔離することを勧告する。

更に、このような場合であって、血液若しくは血液成分(細胞性のもの、及び/または非細胞性のものの何れも)が既に輸注されていた場合には、血液採取・取扱施設は荷受人からその輸注レシピエントの担当医に対して、輸注後 3 ヶ月間、レシピエントがマラリアの感染を示さないかモニターする必要があると通知するよう促すべきである。

3. もしも血液採取・取扱施設が、第IV.B.2 または 3 節に記載の勧告事項に従って、不適格とすべきであったが、そうしなかったドナーから採取した輸注用の血液若しくは血液成分(細胞性のもの及び非細胞性のものの何れも)を流通させていた場合には、FDA は血液採取・取扱施設が荷受人に通知して当該ドナーから採取された血液および血液成分を回収し隔離することを勧告する。

D．製品の処置と表示

1. FDA は、第IV.B 節に記載の勧告事項に従って、不適格とすべきであったがそうしなかったドナーから採取された血液及び細胞性血液成分を、血液採取・取扱施設が廃棄若しくは表示を変えることを勧告する。血液採取・取扱施設が当該血液及び細胞性血液成分の表示を変えた場合には、それらの製品は研究目的、または注射用以外の製品若しくは in vitro 診断試薬の製造目的には、下記の第 IV.D.3.節に記載のとおり、出荷することができる。

2. 第 IV.B 節に記載の勧告事項に従って不適格とすべきであったが、そうしなかったドナーから過失(不注意)によって採取された血液及び非細胞性血液成分は、輸注用としては不適当ではあるが、研究用として、または注射用製品(即ち、血漿分画製剤)若しくは非注射用製品への製造用として、または in vitro 診断用試薬としては、出荷することができる。

3. 血液採取・取扱施設は、当該血液及び血液成分の表示を変える際には下記の表示を用いるべきである：

a.「輸注用ではない：マラリア原虫に感染した危険性があるとされたドナーから採取したものである」
及び

B.「注意：実験室での研究用としてのみ用いること」、
若しくは「注意：in vitro 診断試薬製造用(他に代替しうる原料がない場合)」、
若しくは「注意：非注射用製品の製造用としてのみ用いること」、
若しくは「注意：製造用としてのみ用いること(注射用製品へと、更に製造工程を経て製造することを意図した非細胞性製品用として用いる)」

血液採取・取扱施設は、FDA が特にそうすることを承認しない限りは、それらの製品の表示に米国のライセンス番号を付すべきではない。ライセンスを有さない製品を、それが適切と考えられるのであれば、ライセンスを受けなければならない製品の製造者にのみ、短期の供給契約の元に出荷しても良い(21 CFR 601.22)。

E．生物学的製剤の製造逸脱報告(BPD)

第IV.B 節に記載の勧告事項に従ってマラリアの危険性があるとしたドナーから採取された輸注を意図した血液若しくは血液成分(細胞性のもの、及び非細胞性のものの何れも)、更に製造工程を経て製造することを意図した血液若しくは細胞性血液成分を血液採取・取扱施設が流通させた場合には、血液採取・取扱施設は直ちに BPD を報告すべきであるが、血液採取・取扱施設は報告すべきイベントの発生を示唆すると考えられる情報を血液採取・取扱施設が入手した日から 45 日間以内に報告しなければならない。

血液採取・取扱施設は、更に製造工程を経て製剤を製造することを意図して、マラリアに感染している危険性のあるドナーから採取した非細胞性血液成分を流通させた場合、BPD の報告は必要としない。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

V.更に考慮すべき事項

（　略　）

報告企業の意見	今後の対応
マラリア原虫（plasmodium）は、アピコンプレックス門・胞子虫綱・コクシジウム亜綱・真コクシジウム目・住血胞子虫亜目に属する一群の単細胞動物（原生動物）で、大きさは2-3μmの卵型である。万一、原料血漿にマラリア原虫が混入したとしても、除菌ろ過等の製造工程にて除去されるものと考えている。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。

Guidance for Industry

Recommendations for Donor Questioning, Deferral, Reentry and Product Management to Reduce the Risk of Transfusion-Transmitted Malaria

DRAFT GUIDANCE

This guidance document is for comment purposes only.

Submit one set of either electronic or written comments on this draft guidance by the date provided in the *Federal Register* notice announcing the availability of the draft guidance. Submit electronic comments to http://www.regulations.gov. Submit written comments to the Division of Dockets Management (HFA-305), Food and Drug Administration, 5630 Fishers Lane, Rm. 1061, Rockville, MD 20852. You should identify all comments with the docket number listed in the notice of availability that publishes in the *Federal Register*.

Additional copies of this guidance are available from the Office of Communication, Outreach and Development (OCOD) (HFM-40), 1401 Rockville Pike, Suite 200N, Rockville, MD 20852-1448, or by calling 1-800-835-4709 or 301-827-1800, or e-mail ocod@fda.hhs.gov, or from the Internet at http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/default.htm

For questions on the content of this guidance, contact OCOD at the phone numbers or e-mail address listed above.

U.S. Department of Health and Human Services
Food and Drug Administration
Center for Biologics Evaluation and Research
June 2012

Contains Nonbinding Recommendations

Draft – Not for Implementation

Table of Contents

Contains Nonbinding Recommendations

Draft – Not for Implementation

Guidance for Industry

Recommendations for Donor Questioning, Deferral, Reentry and Product Management to Reduce the Risk of Transfusion-Transmitted Malaria

This draft guidance, when finalized, will represent the Food and Drug Administration's (FDA's) current thinking on this topic. It does not create or confer any rights for or on any person and does not operate to bind FDA or the public. You can use an alternative approach if the approach satisfies the requirements of the applicable statutes and regulations. If you want to discuss an alternative approach, contact the appropriate FDA staff. If you cannot identify the appropriate FDA staff, call the appropriate number listed on the title page of this guidance.

I. INTRODUCTION

This draft guidance document provides you, blood establishments that collect blood and blood components, with our, FDA's, recommendations for questioning and deferring donors of blood and blood components, allowing their reentry, and product management to reduce the risk of transfusion-transmitted malaria. The recommendations contained in this guidance apply to the collection of Whole Blood and all blood components with the exception of Source Plasma. Donors of Source Plasma are excluded from deferral due to malaria risk under Title 21 Code of Federal Regulations, 640.63(c)(9) (21 CFR 640.63(c)(9)).

This guidance replaces the draft guidance entitled "Guidance for Industry: Recommendations for Donor Questioning Regarding Possible Exposure to Malaria" dated June 2000, 65 FR 36452 (June 8, 2000), (June 2000 draft guidance) (Ref. 1). When finalized, this guidance will supersede the FDA memorandum to all registered blood establishments entitled "Recommendations for Deferral of Donors for Malaria Risk" dated July 26, 1994 (July 26, 1994 memorandum) (Ref. 2).

FDA's guidance documents, including this guidance, do not establish legally enforceable responsibilities. Instead, guidances describe the Agency's current thinking on a topic and should be viewed only as recommendations, unless specific regulatory or statutory requirements are cited. The use of the word *should* in Agency guidance means that something is suggested or recommended, but not required.

II. BACKGROUND

Transfusion-transmitted malaria occurs rarely, but is a serious concern in transfusion medicine (Refs. 3-4). It has been shown to be caused by any of the following four *Plasmodium* species:

P. falciparum; P. malariae; P. ovale; or *P. vivax*. In the absence of a licensed test for donor screening, the measure used to reduce transfusion-transmitted malaria in the United States (U.S.) has been the deferral of donors who have had a malaria infection or had a possible exposure risk to malaria. Accurate identification of donors with the potential to transmit malaria depends on the donor exposure history obtained during the donor interview, which may be facilitated through use of a donor questionnaire (Refs. 4-7).

The July 26, 1994 memorandum had the following recommendations:

- Permanent residents of non-endemic countries who travel to an area considered endemic for malaria should not be accepted as donors of Whole Blood and blood components prior to one year after departure from the endemic area. After one year after departure, such otherwise suitable prospective donors may be accepted provided that they have been free of unexplained symptoms suggestive of malaria.
- Prospective donors who have had malaria should be deferred for three years after becoming asymptomatic.
- Citizens, residents, immigrants or refugees of endemic countries should not be accepted as donors of Whole Blood and blood components prior to three years after departure from the area. After the 3-year period, otherwise suitable prospective donors may be accepted if they have remained free of unexplained symptoms suggestive of malaria.

Public comments to the July 26, 1994 memorandum and the June 2000 draft guidance on screening of donors for malaria risk raised several concerns about the need to standardize definitions used in the recommendations, and the scientific basis for the recommended deferral periods. These concerns prompted public discussions, including a meeting of the FDA Blood Products Advisory Committee (BPAC or Committee) on September 16, 1999. At that meeting, BPAC reviewed the current status of transfusion-transmitted malaria and its impact on blood safety in the U.S. BPAC also reviewed the usefulness of the available laboratory test methods to detect current malaria infection or to provide evidence of past exposure to malaria parasites.

On July 12, 2006, FDA convened a scientific workshop entitled "Testing for Malarial Infections in Blood Donors" to seek public discussion of scientific developments that might support donor testing for malaria infections as part of pre-donation testing, or as follow-up testing to permit a reduced deferral period for donors deferred for malaria risk. There are no FDA-licensed tests to screen blood donors for malaria. Nucleic acid-based tests were deemed unsuitable for donor screening due to the limitation of the small sample size used in nucleic acid extraction; however, several speakers and panel members emphasized the value of antibody testing to reenter deferred malaria-risk donors who tested negative for malarial antibodies (Refs. 8-9). The outcome of the workshop was summarized at the BPAC meeting held on July 13, 2006 (Ref. 10).

At the BPAC meeting on September 11, 2008, the Committee discussed donor testing for malarial antibodies as an indicator of possible exposure to malaria parasites (Ref. 11). At the meeting, FDA presented risk assessment data for three possible scenarios in which antibody testing could be of value: (1) testing all donors (universal testing); (2) reentry testing of all at-risk donors with a history of potential exposure to malaria anywhere in the world; and (3) reentry

testing of only those donors who had traveled to malaria-endemic areas in Mexico. The risk assessment model assumed that donors would be deferred for four months after returning from endemic areas of Mexico or other parts of the world before antibody testing would be performed on the donor. At the meeting, two blood organizations (the American Red Cross and America's Blood Centers) also presented data from surveys showing that approximately 41% of all blood donors deferred for risk of malaria exposure had been deferred because they had traveled to malaria-endemic areas in Mexico (Ref. 12). The Committee considered all three risk assessment scenarios and the possible role that antibody testing could play in identifying or reentering malaria-risk donors, especially those donors who had traveled to endemic areas in Mexico. In the end, the Committee felt that additional risk analysis would be needed, and that the analysis should account for malaria risk globally and in Mexico, with and without antibody testing.

On November 16, 2009, FDA again sought advice from BPAC on an alternative strategy to minimize donor loss associated with deferrals for malaria risk. Specifically, FDA asked the Committee to consider a new risk assessment model which was focused on travel to malaria-endemic states in Mexico, and asked whether it was acceptable to allow blood collections without any deferral from individuals who have traveled to certain Mexican states that have a low malaria transmission rate. At that meeting, FDA presented data which showed that while travel to Mexico was a major contributor to donor deferrals due to malaria risk (about 41%), from 2006-2009 malaria transmission in Mexico was shown to be very low (average 2400 malaria cases annually) and limited only to certain Mexican states (Ref. 13). The malaria transmission rate was shown to be particularly low in Quintana Roo, a Mexican state that includes Cancun and Cozumel and is known to receive a high volume of U.S. travelers. Estimates also suggested that there was a great disparity in the contribution of different Mexican states to the number of donor deferrals among U.S. travelers. Data collected by the American Red Cross and Blood Systems Research Institute suggested that in 2006, among the 10 malaria-endemic states, Quintana Roo alone contributed approximately 70% of all malaria-risk-associated donor deferrals for travel to Mexico (Refs. 13-14). While donors deferred because of travel to Quintana Roo were a significant percentage of deferrals, FDA's risk assessment found that the calculated overall risk to the blood supply would be expected to increase by 1.1% (an absolute increase of 0.0166 infected blood unit per year, or one in 60 years) if prospective blood donors who visited Quintana Roo and another state, Jalisco that includes the cities of Puerto Vallarta and Guadalajara, were allowed to donate blood without any deferral for malaria risk. However, the donor pool would increase by approximately 45,000 donors (79,000 blood units) each year (Ref. 14). FDA also found that the actual donor gain might be significantly higher if the agency took into account the total donor loss due to self-deferrals and the non-return of donors deferred under the current policy (Ref. 8). After these presentations and discussion, the Committee voted 17-1 in favor of allowing blood collection, without any deferral, from U.S. residents who have visited Quintana Roo. The Committee also discussed extending the proposed policy to other malaria-endemic states of Mexico that have a low malaria transmission rate.

III. DEFINITIONS

Malaria - An infectious disease caused by a parasitic protozoan of the genus *Plasmodium*. Malaria diagnosis in a prospective donor is based on a positive laboratory test indicating *Plasmodium* infection, or a determination of a history of malaria made by the blood establishment's Medical Director. For additional information regarding malaria and its associated symptoms, visit the Centers for Disease Control and Prevention (CDC) website (Ref. 15).

Malaria-endemic area - Any area designated in "Areas with Malaria" in the CDC's Travelers' Health Yellow Book (Ref. 15). This information is also available on the CDC's Malaria Map Application (Ref. 16). A determination of a malaria-endemic area is based on the information on the CDC website (Refs. 15-16) at the time the donor is screened. An area with any level of malaria transmission (described as high, moderate, low, residual or any other terminology used by the CDC) should be considered a malaria-endemic area.

Malaria-endemic country - Any country having an area or areas designated in "Areas with Malaria" in the CDC's Travelers' Health Yellow Book (Ref. 15). This information is also available on the CDC's Malaria Map Application (Ref. 16). A determination of a malaria-endemic country is based on the information on the CDC website (Refs. 15-16) at the time the donor is screened. A country that has an area with any level of malaria transmission (described as high, moderate, low, residual or any other terminology used by the CDC) should be considered a malaria-endemic country.

Residence in a malaria-endemic country - For purposes of this guidance, residence is defined as a continuous stay of longer than one year in a country or countries having any malaria-endemic area or areas, as identified by CDC. In determining residence, a country that has any malaria-endemic area should be considered to be malaria-endemic in its entirety since the geographic distribution of malaria-endemic areas may change during the period of residence, or the resident may have traveled from a non-endemic area to an endemic area in the country during his or her stay.

Residence in a non-endemic country - For purposes of this guidance, residence in a non-endemic country is defined as a continuous stay for at least three years within countries having no malaria-endemic area, as identified by CDC.

Travel to a malaria-endemic area - Any travel to or through a malaria-endemic area or areas, as identified by CDC (see definition above). The duration of travel to a malaria-endemic area may be as short as a few hours, or as long as one year. Note that brief passage through a malaria-endemic area while on route to a malaria-free area is considered a sufficient possible exposure to trigger donor deferral. Common examples of such possible exposure include passage through a malaria-endemic area to visit a tourist resort in a malaria-free area, or passage through a malaria-endemic area to board a cruise ship, or on-shore excursions into a malaria-endemic area when traveling on a ship. Travel to or through a malaria-free area within a malaria-endemic country does not constitute malaria exposure.

IV. RECOMMENDATIONS

A. Donor History Questionnaire

1. We recommend that you update your donor history questionnaire to incorporate the recommendations provided in this guidance.

2. We recommend that the updated donor history questionnaire include the following elements to assess prospective donors for malaria risk:

   a. A history of malaria;
   b. A history of prior residence in a malaria-endemic country; and
   c. A history of travel to a malaria-endemic country.

B. Donor Deferral and Reentry[1]

1. History of Malaria

   a. We recommend that you defer indefinitely a donor who has a history of malaria and does not have documentation of successful treatment with anti-malarial drugs administered in a non-endemic country.

   b. We recommend that the Medical Director of your establishment review the documentation of successful treatment with anti-malarial drugs administered according to established treatment protocols in a non-endemic country. If your Medical Director finds the documentation satisfactory, the donor may be eligible to donate, provided the donor meets all other donor eligibility criteria.

2. Residence in a Malaria-endemic Country

   We recommend that you defer a donor for three years following residence (as defined in section III) in a malaria-endemic country. After the 3-year deferral period, the donor may be eligible to donate provided the donor has been free from malaria during this period and meets all other donor eligibility criteria.

3. Travel to a Malaria-endemic Area

   a. Except as described in section IV.B.3.b. below, we recommend that you defer for one year after the last departure from a malaria-endemic area a donor who is a resident of a non-endemic country and who has traveled to or through any malaria-endemic area, whether or not the donor has received malaria

[1] See Appendix for detailed scientific rationale for the recommendations.

prophylaxis. After the 1-year deferral period, the donor may be eligible to donate provided the donor has been free from malaria during this period and meets all other donor eligibility criteria.

b. You may accept a donor who is a resident of a non-endemic country and who has traveled to the Mexican states of Quintana Roo or Jalisco without any deferral for malaria risk. However, we recommend that you defer for one year after the last departure from a malaria-endemic area a donor who is a resident of a non-endemic country and who has traveled to or through any of the malaria-endemic areas in Mexico other than the states of Quintana Roo and Jalisco. After the 1-year deferral period, the donor may be eligible to donate provided the donor has been free from malaria during this period and meets all other donor eligibility criteria.

c. We recommend that you defer for one year after a visit to a malaria-endemic area a donor who is a prior resident of a malaria-endemic country and who has been a resident of a non-endemic country for the past three consecutive years. After the 1-year deferral period, the donor may be eligible to donate provided the donor has been free from malaria during this period and meets all other donor eligibility criteria.

d. We recommend that if a prior resident of a malaria-endemic country returns to a malaria-endemic country after residence for less than three years consecutively in non-endemic countries, that you defer that donor for three years from the time that they return to the non-endemic country. After the 3-year deferral period, the donor may be eligible to donate provided the donor has been free from malaria during this period and meets all other donor eligibility criteria.

C. Product Retrieval and Quarantine, and Notification of Consignees of Blood and Blood Components

We recommend that you take the following actions if you determine that blood or blood components have been collected from a donor who should have been deferred according to the recommendations in section IV.B.

1. If you collected blood or blood components (both cellular and/or non-cellular) intended for transfusion or blood or cellular blood components for further manufacturing from a donor who should have been deferred according to the recommendations above, we recommend that you quarantine any undistributed blood or blood components collected from that donor.

2. If you distributed blood or blood components (both cellular and/or non-cellular) intended for transfusion or blood or cellular blood components for further manufacturing collected from a donor with a clinical history of malaria who should

have been deferred according to the recommendation in section IV.B.1., we recommend that you notify consignees to retrieve and quarantine the blood and blood components collected from that donor.

Additionally, in this situation, if blood or blood components (both cellular and non-cellular) have been transfused, you should encourage consignees to notify the transfusion recipient's physician of record regarding the need for monitoring of the recipient for a possible malaria infection for a period of three months post-transfusion.

3. If you distributed blood or blood components (both cellular and non-cellular) intended for transfusion collected from a donor who should have been deferred according to recommendations in sections IV.B.2 or 3, we recommend that you notify consignees to retrieve and quarantine the blood and blood components collected from that donor.

D. Product Disposition and Labeling

1. We recommend that you destroy or re-label blood and cellular blood components that were collected from a donor who should have been deferred according to the recommendations in section IV.B. If you re-label the blood and cellular blood components, they may be released for research, or for manufacture into noninjectable products or in vitro diagnostic reagents as described in section IV.D.3. below.

2. Although not suitable for transfusion, blood and non-cellular blood components inadvertently collected from a donor who should have been deferred according to the recommendations in section IV.B. may be released for research, or for further manufacture into injectable (i.e., plasma derivative) or non-injectable products, or in vitro diagnostic reagents, if labeled appropriately as described below.

3. You should use the following statements to prominently re-label the blood and blood components:

    a. "NOT FOR TRANSFUSION: Collected From A Donor Determined To Be At Risk For Infection With Malaria Parasites"

    and

    b. "Caution: For Laboratory Research Only"

    or

    "Caution: For Further Manufacturing into *In Vitro* Diagnostic Reagents For Which There Are No Alternative Sources"

or

"Caution: For Use in Manufacturing Noninjectable Products Only"

or

"Caution: "For Manufacturing Use Only" (used for non-cellular products intended for further manufacture into injectable products).

You should not label these products with a U.S. license number unless FDA specifically approves you to do so. If appropriate, unlicensed products may be shipped solely to a manufacturer of a product subject to licensure, under a short supply agreement (21 CFR 601.22).

E. Reporting a Biological Product Deviation (BPD)

If you have distributed any blood or blood components (both cellular and non-cellular) intended for transfusion, or blood or cellular blood components intended for further manufacturing, collected from a donor at risk for malaria according to section IV.B. you should report a BPD as soon as possible, but you must report within 45 calendar days from the date you acquire the information reasonably suggesting that a reportable event has occurred (21 CFR 606.171).

You are not required to report a BPD if you have distributed a non-cellular blood component intended for further manufacturing from a donor at risk for malaria.

V. ADDITIONAL CONSIDERATIONS

Whole Blood and blood components intended for transfusion should not be collected from a possible malaria risk donor with the intent of converting or relabeling those products for further manufacturing use (e.g. relabeling of Fresh Frozen Plasma as recovered plasma).

FDA will continue to monitor the situation of malaria transmission in Mexico and elsewhere and consider additional revisions when warranted.

VI. REFERENCES

1. Food and Drug Administration, "Guidance for Industry: Recommendations for Donor Questioning Regarding Possible Exposure to Malaria" (June, 2000) http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/Blood/ucm077061.htm

2. Food and Drug Administration, Memorandum. Recommendations for Deferral of Donors for Malaria Risk. July 26, 1994. http://www.fda.gov/downloads/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/OtherRecommendationsforManufacturers/MemorandumtoBloodEstablishments/UCM062799.pdf

3. Westphal, R. Transfusion-transmitted malarial infections. *In* Smith, D. and Dodd, R. (eds). *Transfusion Transmitted Infections.* ASCP Press, Chicago 1991;167-180.

4. Mungai, M., Tegtmeier, G., Chamberland, M., Parise, M. Transfusion-transmitted malaria in the United States from 1963 through 1999. *New England Journal of Medicine* 2001; 344:1973-1978.

5. Guerrero, I.C., Weniger, B.C., Schultz, M.G. Transfusion malaria in the United States, 1972-1981. *Annals of Internal Medicine* 1983; 99:221-226.

6. Nahlen, B.L., Lobel, H.O., Cannon, S.E., Campbell, C.C. Reassessment of blood donor selection criteria for United States travelers to malarious areas. *Transfusion* 1991; 31:798-804.

7. Sazama, K. Prevention of transfusion-transmitted malaria: Is it time to revisit the standards? *Transfusion* 1991; 31:786-788.

8. FDA Workshop "Testing for malarial infections in blood donors," July 12, 2006. http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/NewsEvents/WorkshopsMeetingsConferences/ucm090641.htm.

9. Seed, C. R., Cheng, A., Davis, T. M. E., Bolton, W. V., Keller, A. J., Kitchen, A., Cobain, T. J. The efficacy of a malarial antibody enzyme immunoassay for establishing the reinstatement status of blood donors potentially exposed to malaria. *Vox Sang* 2005; 88:98–106.

10. FDA Blood Products Advisory Committee "Workshop summary FDA Workshop on testing for malarial infections in blood donors," July 13, 2006. http://www.fda.gov/ohrms/dockets/ac/cber06.html#BloodProducts.

11. FDA Blood Products Advisory Committee "Options for blood donor screening and reentry for malaria." September 11, 2008. http://www.fda.gov/ohrms/dockets/ac/cber08.html#BloodProducts.

12. Spencer, B., Steele, W., Custer, B., Kleinman, S., Cable, R., Wilkinson, S., Wright, D. Risk for malaria in United States donors deferred for travel to malaria-endemic areas. *Transfusion* 2009; 49(11):2335-45.

13. FDA Blood Products Advisory Committee "Blood Donor Deferral for Malaria Risk Associated with Travel to Mexico." November 16, 2009. http://www.fda.gov/AdvisoryCommittees/CommitteesMeetingMaterials/BloodVaccinesandOtherBiologics/BloodProductsAdvisoryCommittee/ucm189553.htm.

14. FDA Blood Product Advisory Committee "Benefit: Risk Analysis for Malaria Exposure in Blood Donors from Mexico and Its Effect on Blood Safety and Availability," Mark Walderhaug, November 16, 2009. http://www.fda.gov/AdvisoryCommittees/CommitteesMeetingMaterials/BloodVaccinesandOtherBiologics/BloodProductsAdvisoryCommittee/ucm189553.htm.

15. Travelers' Health: Yellow Book, CDC. http://wwwnc.cdc.gov/travel/page/yellowbook-2012-home.htm

16. Malaria Map Application, CDC. http://www.cdc.gov/malaria/map/

17. Vinetz, J.M., Li, J., McCutchan, T.F., Kaslow, D.C. *Plasmodium malariae* infection in an asymptomatic 74-year-old Greek woman with splenomegaly. *The New England Journal of Medicine* 1998; 338:367-371.

18. Kitchen, A., Mijovic, A., Hewitt, P. Transfusion-transmitted malaria: current donor selection guidelines are not sufficient. *Vox Sang* 2005; 88:200-201

19. Griffith, K. S., Lewis, L.S., Mali, S., Parise, M.E. Treatment of malaria in the United States: a systematic review. *JAMA* 2007; 297:2264-2277.

20. Mali, S., Steele, S., Slutsker, L., Arguin, P.M. Centers for Disease Control and Prevention (CDC). Malaria surveillance - United States, 2008. *MMWR Surveill Summ.* 2010 Jun 25; 59(7):1-15.

21. Mali, S., Tan, K.R., Arguin, P. M. Centers for Disease Control and Prevention (CDC). Malaria surveillance - United States, 2009 *MMWR Surveill Summ.* 2011 Apr 22; 60(3):1-15.

22. Mali, S., Kachur, S.P., Arguin, P.M. Centers for Disease Control and Prevention (CDC). Malaria surveillance - United States, 2010. *MMWR Surveill Summ.* 2012 Mar 2; 61(2):1-17.

23. Liljander, A., Chandramohan, D., Kweku, M., Olsson, D., Montgomery, S.M., Greenwood, B., Farnert, A. Influences of intermittent preventive treatment and persistent multiclonal *Plasmodium falciparum* infections on clinical malaria risk. *PLoS One* 2010, 5(10):e13649.

24. Doolan, D.L., Dobano, C. Baird, J.K. Acquired immunity to malaria. *Clin. Microbiol. Reviews*, 2009, 22(1):13-36.

APPENDIX

SCIENTIFIC RATIONALE FOR THE RECOMMENDATIONS

The scientific basis for the recommendations in section IV is as follows:

- The recommendation for an indefinite deferral of a donor who had a history of clinical malaria but had not undergone a successful anti-malarial treatment is based on the reports that in the absence of complete treatment, infections with some *Plasmodium* species may establish a chronic and prolonged asymptomatic infection (Refs. 17-18). For example, *P. malariae* has been reported to persist for up to 40 years in the absence of a new exposure (Ref. 17). Recommendation B.1.a. of documentation of anti-malaria drug treatment before a donor with a history of clinical malaria is allowed to donate is based on findings that anti-malaria treatment, when administered using the appropriate guidelines (see Ref. 19), is highly effective in the eradication of malaria parasites in infected individuals. The recommendation that the anti-malarial treatment be administered in a non-malaria endemic country is to avoid the possibility of a new exposure after the completion of drug treatment but prior to departure from the endemic area.

- The recommendation for a 3-year deferral of a donor following residence in a malaria-endemic country (recommendations B.2. and B.3.d.) is based on the possible presence of low-grade parasitemia in individuals with clinical immunity to malaria, or with a chronic malaria infection who have not received definitive treatment after departure from the malaria-endemic region. Although it is not known how long parasitemia can last in such persons, it is believed that most (though not all) will either develop clinical malaria or else resolve their infection over time. This is because anti-malarial immunity is thought to wane in the absence of repeated infections. Data reported by CDC showed that out of 4,229 reported cases of malaria in foreign-born residents, only 7 cases (0.2%) had an episode of clinical malaria more than three years after the patient had left a malaria-endemic country (Ref. 4). These data suggest that a deferral period of three years would be adequate for resolution of parasitemia in most cases. This recommendation will be reconsidered periodically based on new scientific data.

- Recommendation B.3.a of a 1-year deferral period for a donor who is a resident of a non-endemic country and who traveled to or through a malaria-endemic area whether or not the donor received malaria prophylaxis, is based on the malaria surveillance reports by CDC showing that out of 2167 imported malaria cases reported between 2008-2010 for which the date of arrival and the onset of illness was known, only 2 (0.09%) experienced clinical malaria more than one year after their return to the U.S. (Refs. 20-22). The 1-year deferral for residents of non-endemic countries applies to the last departure from the endemic area.

- The scientific rationale for recommendation B.3.b. that a resident of a non-endemic country (such as the U.S.) who had traveled to the Mexican states of Quintana Roo or

Jalisco, where malaria is transmitted at a very low level, be allowed to donate blood without any deferral for malaria risk is as follows:

a. During 2006-2009, malaria transmission in Mexico remained very low and is relatively stable (average 2400 malaria cases annually) (Ref. 13).
b. During the same period, malaria transmission was particularly low in Quintana Roo and Jalisco (combined average 20 cases annually, or 0.75% of all malaria cases in Mexico) (Ref. 13-14).
c. Quintana Roo (which includes the resorts of Cancun and Cozumel) and Jalisco (which includes the cities of Puerto Vallarta and Guadalajara) are highly popular states among U.S. tourists.
d. Approximately 70% of donor deferrals among U.S. travelers to Mexico were because they had visited Quintana Roo and/or Jalisco (Refs. 13-14).
e. An FDA risk assessment model has suggested a very small increase in malaria risk to blood safety by allowing for donation from donors who had traveled to malaria-endemic areas in Quintana Roo (0.0163 infected blood unit per year in Quintana Roo vs. 0.088 infected blood unit per year for all of Mexico) (Refs. 13-14). The suggested increase in risk by exempting Jalisco, another low-malaria transmission state, is even smaller (0.000245 infected blood unit per year for travel to Jalisco) [Mark Walderhaug et al., CBER, FDA, unpublished data]. The calculated cumulative risk to the blood supply according to the risk assessment model would be expected to increase by 1.1% (an absolute increase of 0.0166 infected blood unit per year, or one per 60 years) if prospective blood donors who visited Quintana Roo and Jalisco are allowed to donate blood without any deferral for malaria risk.
f. The recommendation for a 1-year deferral of a donor who is a resident of a non-endemic country and who traveled to or through a malaria-endemic area in Mexico that is outside the states of Quintana Roo and Jalisco (recommendation B.3.b.) is consistent with a 1-year deferral for travel to a malaria-endemic area in any other part of the world (see recommendation B.3.a.).

- The recommendation for deferral of a donor who is a prior resident of a malaria-endemic country and has not traveled to a malaria-endemic area for the past three continuous years for one year after a subsequent visit to a malaria-endemic area (recommendation B.3.c.) is based on information indicating that continued exposure to malaria parasites is necessary to maintain clinical immunity (Refs. 23-24). Consequently, we believe it is a reasonable safeguard to assume that after three or more continuous years of residence in a non-endemic country the majority of prior residents of malaria-endemic areas will not maintain their clinical immunity. Thus, after three years of continued residence in a non-endemic country, a prior resident of a malaria-endemic country may be treated as a resident of a non-endemic country. Such individuals should be deferred for only one year after each return from travel to a malaria-endemic area consistent with the deferral for travelers from non-endemic countries.

- The recommendation that consignee notification include instructions for notification of the transfusion recipient or the transfusion recipient's physician of record regarding the need for monitoring of the recipient for a possible malaria infection for a period of three months post-transfusion (recommendation C.2.) is based on the analysis of incubation periods in 57 cases of transfusion-transmitted malaria in the U.S. in which the maximum period observed between transfusion and onset of clinical symptoms was 90 days (range 8 to 90 days) (Ref. 4). This recommendation is limited to the highest risk circumstance of unintentional release of a unit from a donor at risk of malaria, namely a unit from a donor who had clinical history of malaria who may not have been treated or who failed to be deferred for at least three years.

- The recommendation to allow for use of non-cellular blood components inadvertently collected from a donor who was later determined to be at risk for malaria to make injectable products is based on the knowledge that licensed plasma derivatives do not transmit malaria. For this same reason, reporting of a BPD is not required if you have distributed a non-cellular blood component intended for further manufacturing from a donor at risk for malaria. BPD reporting is only required when the deviation may affect the safety, purity or potency of the product.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 7. 18	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況		公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)		Johnson ST, Cable RG, Leiby DA. Transfusion. 2012 Jul;52(7):1509-16. doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03345.x. Epub 2011 Sep 12.	米国

研究報告の概要

○*Babesia microti*抗体陽性供血者の遡及調査:バベシア流行地域の7年間の経験

米国におけるヒトバベシア症は、主に赤血球内部に寄生する原虫*Babesia microti*の感染が原因である。輸血感染バベシア(TTB)は血液安全性に対する懸念となっており、1980年以降、米国で約100症例が報告されている。それに応じて、バベシア陽性供血者由来の血球成分を含む輸血用血液の回収(MW)や遡及調査(LB)が提唱された。

研究デザイン及び方法:1999年から2005年まで、コネチカット州の供血者において免疫蛍光アッセイ(IFA)及び選択的PCRが行われた。IFAやPCRが陽性の供血者由来の血球成分を含む輸血用血液に対して、確立された手順に従いMW/LBが開始された。関連製剤の受血者は、*B.microti*の検査を勧められた。

結果:MW/LB対象の474供血、656製剤から、合計208人の抗体陽性供血者が同定された。63人の受血者が*B.microti*検査を受け、8人(12.7%)がIFAやPCRで陽性だった。2001年(3/48人、6.3%)の抗体陽性供血者の延期実施後に比べて、1999年から2000年(5/15人、33.3%)における*B.microti*陽性受血者の割合が有意に高いことがLBによって判明した。有意差は、IFA陽性の当該供血(受血者の50%が陽性)と前回の供血(受血者の7.3%が陽性)、及び寄生虫血症供血者(受血者の33.3%が陽性)と非寄生虫血症供血者(受血者の2.9%が陽性)からの製剤受血者の陽性率を比較した時にも見られた。

結論:受血者への*B.microti*感染は、最大の感染リスクをもたらしている寄生虫血症供血者からの当該供血の輸血により発生した。継続中のTTB症例に加えてLBを通して*B.microti*感染が検出されたこの報告は、米国の血液受血者における*B.microti*感染を減少させるための介入が必要であることを示している。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
バベシア症流行地域(コネチカット州)において、バベシア陽性供血者由来の血球成分を含む輸血用血液の回収や遡及調査について7年間調査を行ったところ、対象となったのは474供血、656製剤で、合計208人がバベシア抗体陽性供血者であり、検査を受けた当該製剤受血者63人のうち8人(12.7%)が当該血液によって感染したとの報告である。	日本赤十字社では問診時にバベシア症の既往を確認し、該当する場合は献血不適としている。今後も引き続き、新興・再興感染症の発生状況等に関する情報の収集に努める。

Lookback investigations of *Babesia microti*–seropositive blood donors: seven-year experience in a *Babesia*-endemic area

Stephanie T. Johnson, Richard G. Cable, and David A. Leiby

BACKGROUND: Human babesiosis in the United States is primarily attributable to infection with the intraerythrocytic protozoan parasite, *Babesia microti*. Transfusion-transmitted *Babesia* (TTB) is a mounting blood safety concern; approximately 100 US cases of TTB have been reported since 1980. In response, market withdrawal (MW) and/or lookback (LB) has been advocated for cellular components derived from *Babesia*-positive blood donors.

STUDY DESIGN AND METHODS: Immunofluorescence assay (IFA) and selective polymerase chain reaction (PCR) testing of Connecticut donors was conducted from 1999 through 2005. MW/LB was initiated following established procedures on cellular components derived from IFA and/or PCR-positive donors. Recipients of these associated components were offered IFA and PCR testing for *B. microti*.

RESULTS: A total of 208 seropositive donors were identified, with 474 donations and 656 cellular components subject to MW/LB. Sixty-three recipients were tested for *B. microti*; eight (12.7%) were IFA and/or PCR positive. A significantly higher proportion of *B. microti*–positive recipients were identified by LB in 1999 to 2000 (5 of 15, 33.3%) than after implementation of seropositive donor deferral in 2001 (3 of 48, 6.3%). Significant differences in positive LBs were also found when comparing index (50% positive) to previous donations (7.3% positive), and when comparing demonstrably parasitemic to nonparasitemic donors, 33.3 and 2.9%, respectively.

CONCLUSIONS: Recipients of components from *B. microti*–positive donors were infected via transfusion, with index donations from parasitemic donors posing the greatest transmission risk. This report of *B. microti* transmission detected through LB, coupled with ongoing TTB cases, indicates that interventions are needed to reduce transmission of *B. microti* to US blood recipients.

Human babesiosis in the United States is primarily caused by the intraerythrocytic protozoan parasite *Babesia microti*. The parasite is usually transmitted to humans by the bite of an infected black-legged or deer tick (*Ixodes scapularis*). While the geographic distribution of *B. microti* continues to expand in the United States, its primary area of endemicity remains the Northeast and Upper Midwest. The first documented human infection attributable to *B. microti* occurred on Nantucket Island, Massachusetts, in 1969.[1] Since its initial description, hundreds of human babesiosis cases have been reported in the United States. The resulting infection is often asymptomatic in healthy individuals. When signs and symptoms do occur, 1 to 6 weeks after the bite of a *Babesia*-infected tick, they may include fever, chills, sweating, myalgia, fatigue, hepatosplenomegaly, and hemolytic anemia.[2] The symptoms can be severe, with mortality rates up to 5%.[3]

Humans are generally considered to be an incidental or dead-end host for *B. microti*; however, circumstances

ABBREVIATIONS: ARC = American Red Cross; IFA = immunofluorescence assay; LB = lookback; MW = market withdrawal; NHS = natural history study; TI(s) = time interval(s); TTB = transfusion-transmitted Babesia; UCHC = University of Connecticut Health Center.

From the Transmissible Diseases Department, American Red Cross Holland Laboratory, Farmington, Connecticut; the Biomedical Services Research Department, New England Division, American Red Cross, Farmington, Connecticut; and the Transmissible Diseases Department, American Red Cross Holland Laboratory, Rockville, Maryland.

Address reprint requests to: Stephanie T. Johnson, MT (ASCP), MPH, Research Department, American Red Cross, 209 Farmington Avenue, Farmington, CT 06032; e-mail: johnsonst@usa.redcross.org.

Supported by the American Red Cross, Biomedical Services.

Received for publication May 11, 2011; revision received July 28, 2011, and accepted July 30, 2011.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03345.x

TRANSFUSION 2012;52:1509-1516.

may arise where asymptomatic blood donors unwittingly transmit the parasite to susceptible blood recipients.[4] *B. microti* is known to survive and remain viable under blood storage conditions (4°C) for up to 39 days in red blood cells (RBCs)[5] and indefinitely in cryopreserved RBCs,[6,7] thereby enhancing its potential for transfusion transmission. In addition, there are currently no viable mitigation strategies, nor is there a licensed blood screening test for *Babesia* spp. These circumstances have led to nearly 100 reported cases of transfusion-transmitted *Babesia* (TTB) attributed to *B. microti*, with 12 associated deaths.[4,8,9]

Because of ongoing TTB reports, market withdrawal (MW) and/or lookback (LB) investigations involving recipient identification and testing have been advocated for cellular components from blood donations identified as *Babesia*-positive, including the index donation and those from the previous 12 months.[10] In some instances MW/LB may also be appropriate for subsequent donations as well. Herein, we summarize a series of LB investigations, which were conducted on donors identified as *Babesia*-positive through a seroprevalence study conducted over a 7-year period in Connecticut.

MATERIALS AND METHODS

Initial donor testing

As part of an ongoing American Red Cross (ARC) study, consenting blood donors in *Babesia*-endemic areas of Connecticut were prospectively tested for *B. microti* antibodies from 1999 through 2005 to determine seroprevalence and to identify seropositive donors for enrollment in a separate follow-up natural history study (NHS).[11,12] Seropositive donors were identified by the indirect immunofluorescence assay (IFA) for immunoglobulin (Ig)G antibodies to *B. microti* performed on a serum sample routinely obtained at donation for additional testing. Testing was conducted as per the manufacturer's instructions (Focus Technologies, Inc., Cypress, CA) utilizing IFA slides coated with *B. microti*–infected hamster RBCs as the antigen source. Briefly, serum samples were diluted 1 in 64 in phosphate-buffered saline (PBS), and 20 µL was added to each slide well containing fixed *B. microti* antigen and incubated at 37°C for 30 minutes in a humid chamber. After being incubated, slides were washed for 10 minutes in PBS by agitation, rinsed in distilled water, and air-dried. Diluted fluorescein-labeled goat anti-human IgG conjugate (Focus Technologies) was added to each well and again incubated at 37°C for 30 minutes in a humid chamber. Slides were then washed for 10 minutes in PBS by agitation, rinsed in distilled water, and air-dried. Samples were examined by fluorescence microscopy at 400× magnification, considered positive at 1 in 64 or greater and titered to endpoint. Appropriate negative and positive controls were included in all IFA testing. The enrollment and testing of donors for *B. microti* antibodies and subsequent participation in a NHS were reviewed and approved by the ARC Institutional Review Board.

Select IFA-positive donors from 1999,[12] and all IFA-positive donors from 2000 through 2005, were offered follow-up polymerase chain reaction (PCR) testing through enrollment in a NHS. From each enrolled donor, two 7-mL ethylenediaminetetraacetate tubes of blood were collected and analyzed for parasitemia using a nested PCR protocol designed to amplify the 18S ribosomal RNA gene of *B. microti* as previously described,[12] slightly modified from the original procedure.[13] Total DNA was extracted from whole blood using the a DNA blood mini kit (QIAamp, Qiagen, Inc., Valencia, CA) as per the manufacturer's instructions. The final 155-bp product was visualized on a 2% agarose gel stained with ethidium bromide in 1×TAE buffer (Invitrogen Corp., Carlsbad, CA). Appropriate positive, negative, and extraction controls were included.

MW/LB procedures

For the purpose of this study, MW is defined as the process of notifying hospitals which received a component from a seropositive donation of the pertinent test results, thereby allowing the blood center to regain possession of the component or otherwise ensure it is discarded. LB is defined as a MW with the additional goal of determining if the component was transfused and, if so, evaluating if the patient was infected by follow-up with the transfusing physician, including recipient testing as appropriate. The data contained in this publication are based on review of operational MW/LB files.

MW/LB was conducted as part of the region's routine follow-up on donors with reported babesiosis or those implicated in TTB. Seropositivity in this investigation was interpreted as being potentially infective, thus triggering routine regional MW/LB for cellular components (RBCs, platelets [PLTs], and whole blood) associated with any IFA- and/or PCR-positive donations including index and/or subsequent donations, as well as donations during the previous 12 months. No subsequent donations were included in this analysis. When an implicated donor was identified, the index donation was defined as the seropositive donation. MW/LB was not conducted for plasma components; to date, they have not been implicated in a documented case of TTB and the parasite is killed by freezing when blood components are not cryopreserved.[4,14] Hospitals that received these potentially infective cellular components were provided an information packet that included a biologic MW letter. Separate letters were sent to the transfusion service director and through him or her to the patient's physician requesting cooperation with LB and completion of a product disposition record. In all instances, free *B. microti* testing was offered.

TABLE 1. Annual LB investigations: results for donor and recipient testing

Year	IFA positive/tested (%)	PCR positive/tested (%)	Number of associated donations*	Number of cellular components subject to LB†	Number positive/tested LB recipients (%)
1999	30/3,656 (0.8)	10/19 (52.6)	145	194	2/8 (25.0)
2000	28/2,682 (1.0)	10/18 (55.6)	81	103	3/7 (42.9)
2001	30/2,162 (1.4)	2/25 (8.0)	32	50	1/4 (25.0)
2002	18/2,230 (0.8)	2/14 (14.3)	38	58	2/8 (25.0)
2003	34/1,988 (1.7)	1/20 (5.0)	51	84	0/6 (0.0)
2004	43/2,864 (1.5)	1/33 (3.0)	83	113	0/17 (0.0)
2005	25/1,840 (1.4)	0/10 (0.0)	44	54	0/13 (0.0)
Totals	208/17,422 (1.2)	26/139 (18.7)	474	656	8/63 (12.7)

* Index donations (1999-2000 only), donations in the previous 12 months, and subsequent donations.
† Includes RBCs, whole blood–derived PLTs, and whole blood.

Once the transfusion service director and/or the patient's physician received the information packet these individuals could choose to notify the recipient and encourage them to go for testing. Less than 10%, 63 of 656, of the total number of LB components were associated with a tested recipient (Table 1).

When the seroprevalence study and related NHS were initiated in 1999, donors were only deferred upon receipt of a positive PCR test result after enrollment in the NHS. In late 2000, it was noted that among IFA-seropositive donors from 1999 and 2000, enrolled in the NHS, there were high numbers of parasitemic donors; 20 of 37 (54.1%) tested were PCR positive (Table 1).[12] Thus, beginning in November 2000, all components associated with IFA-positive donors were discarded and these donors were deferred from future blood donation regardless of PCR test results. Seropositive donors identified before November 27, 2000, were retroactively deferred and any associated components were subjected to MW/LB. Thus, MW/LB was conducted on index donations collected in 1999 and 2000, but not on index donations in the years following, since all later index donations were discarded.

Recipient testing

Free recipient testing was offered as part of LB. The majority of recipient samples (59/63, 94%) were sent to the University of Connecticut Health Center (UCHC) Molecular Laboratory. Four recipient samples were not tested by UCHC; three were tested by the clinical laboratory at the recipient's hospital and one by the ARC Holland Laboratory (Rockville, MD). Testing generally consisted of IFA (IgG and IgM), PCR, and thick and thin blood smears.

UCHC recipient testing was conducted utilizing IFA slides prepared in house from *B. microti*–infected hamster RBCs. Briefly, test sera were diluted 1:32 in PBS, and 20 µL was added to each slide well. Slides were incubated for 30 minutes at 37°C, washed three times with agitation in PBS, and allowed to air dry. Twenty microliters of fluorescein isothiocyanate–labeled goat anti-human IgG or IgM (Kirkegaard and Perry, Gaithersburg, MD) diluted in PBS and Evans blue (final concentration, 0.0005%) was added to each well, incubated at 37°C for 30 minutes, again washed three times with agitation in PBS, and air-dried. Slides were examined with fluorescence microscopy using a 100× water immersion objective. A positive serum sample was defined by UCHC as one reacting at 1:32 and was subsequently titered to endpoint. Appropriate positive and negative controls were used with each test run.[15]

PCR recipient testing performed by UCHC used similar procedures to those previously described herein with the exception of extraction procedures, primer sets, and detection of PCR product. UCHC used the a nucleic acid extraction kit (IsoQuick, ORCA Research, Inc., Bothell, WA) as per the manufacturer's instructions, dissolving the final pellet in 20 µL of RNase-free water. Amplification was initiated with 5 µL of DNA and employed a nonnested approach, using only primers Babl and Bab4.[13] For visualization of PCR product the amplicons were denatured, labeled with digoxigenin and hybridized to a biotin-labeled probe. The probe was immobilized on a streptavidin-coated microtiter plates and detected with peroxidase-conjugated digoxigenin antibody and colorimetric ABTS. Color reactions were read at OD 450 nm and 490 nm and compared to negative control values.

Five recipients were not tested for both IFA and PCR: In four instances PCR testing was not conducted (all were antibody negative), and in one situation, IFA testing was not done (recipient was PCR positive). Samples were considered IgG IFA positive at at least 1 in 32 when tested by UCHC, but positive at at least 1 in 64 when tested by the ARC or hospital laboratories. A recipient was considered *Babesia* LB positive when any of these test results were positive.

Statistical analysis

Fisher's exact test was used to compare proportions of positive recipients. The rank sum test was used to compare the length of various time intervals (TIs).

RESULTS

A total of 208 seropositive donors were identified during the 7-year reporting period. We found 474 associated donations subject to LB. From these 474 donations, 656 cellular components were produced. After LB notification 63 recipient samples, derived from 46 blood donors, were obtained and tested (Table 1). Eight (12.7%) of the tested recipients were found positive by serologic and/or PCR testing. Of the 46 total donors associated with recipient testing, four were linked with both a positive and a negative recipient (Fig. 1), but in three cases the transfused components were derived from different donations. In the first case, both recipients received PLTs collected approximately 6 months apart, with only the index PLT donated in July transmitting infection. In the second case, both recipients received RBCs approximately 3.5 months apart; only the index RBCs collected in August transmitted infection. In the third case, a RBC collected in December transmitted infection, while the subsequent index donations associated with a PLT collected in May did not transmit infection. In one instance, two recipients were transfused with blood components derived from a single August nonindex donation; the RBC recipient was positive for *B. microti*, while the PLT recipient was negative.

Of the eight positive recipients, seven (87.5%) received RBCs and one (12.5%) a whole blood–derived PLT unit (Table 2). The age of implicated RBCs ranged from 7 to 42 days old, while the only implicated PLT unit was 5 days old. Of note, six of the eight positive recipients tested

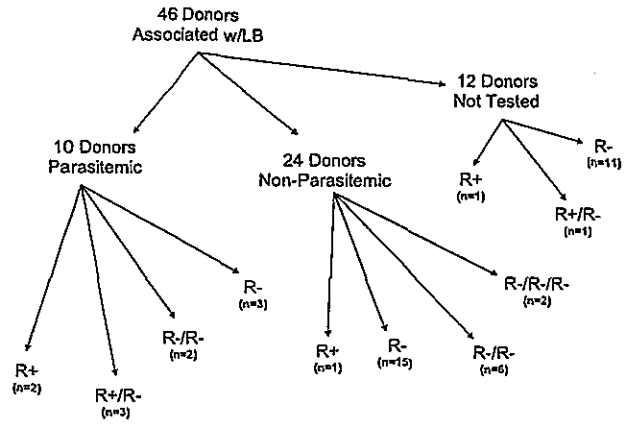


Fig. 1. Forty-six donors associated with LB investigations were tested for parasitemia by PCR in a separate research study.[12] Transfusion outcomes in 63 recipients (R) were noted as positive (R+) or negative (R–) for *Babesia*-infection based on IFA and/or PCR test results. In several cases, donors provided blood components to two or more recipients (e.g., R+/R–) that were derived from single or different donations. Eight recipients were positive; five received blood from a parasitemic donor and one from a nonparasitemic donor, while two received blood from donor not tested for parasitemia.

TABLE 2. Summary data for recipients infected with *B. microti* through blood transfusion

Recipient	Index donation date	Implicated donation	Implicated donation date	Implicated donor PCR test result at time of enrollment in NHS*	Implicated component	Transfusion date	Age of transfused component (days)	Age and sex of recipient	Recipient test results		
									IFA		
									IgG	IgM	PCR
1	Jul. 28, 1999	Index	Jul. 28, 1999	Positive	PLTs	Aug. 2, 1999	5	56 ♂	<1:64	NA	Positive
2	Aug. 28, 1999	Index	Aug. 28, 1999	Positive	RBCs	Oct. 9, 1999	42	NA† ♀ (non-neonate)‡	1:1024	1:256	Positive
3	*May 18, 2000*	*Previous #1§*	*Dec. 17, 1999*	*Positive*	*RBCs*	*Dec. 28, 1999*	*11*	*NA (non-neonate)*	*1:512*	*1:32*	*Positive*
4	Jul. 7, 2000	Index	Jul. 7, 2000	Positive	RBCs	Jul. 16, 2000	9	NA	NA	NA	Positivell
5	Jul. 21, 2000	Index	Jul. 21, 2000	Positive	RBCs	Aug. 13, 2000	23	Elderly ♀	1:1024	1:32	Positive
6	Dec. 17, 2001	Previous #1	Aug. 28, 2001	Unknown	RBCs	Sep. 16, 2001	19	34 ♀	1:128	1:32	Negative
7	Aug. 26, 2002	Previous #1	Jul. 1, 2002	Negative	RBCs	Jul. 19, 2002	18	NA ♂ (non-neonate)	1:128	<1:32	Positive
8	Nov. 18, 2002	Previous #1	Aug. 8, 2002	Unknown	RBCs	Aug. 15, 2002	7	51 ♀	1:256	1:32	Negative

* NHS = natural history study.[18]
† NA = age and/or sex not available.
‡ Recipients designated as nonneonate based on their hospital service and/or attending physician specialty.
§ Donation immediately before index donation.
‖ Reported as TTB before LB notification occurred.

TABLE 3. Transfused component type for *Babesia* tested recipients

Transfused component	*Babesia*-positive recipients	*Babesia*-negative recipients
Index donation RBCs	3	3
Index donation PLTs	1	1
Previous donation RBCs	4*	36
Previous donation PLTs	0	15
Total	8	55

* All received components from donation immediately preceding the index donation.

positive by PCR, one of which was an apparent window period infection (IgG < 1:64, PCR positive). Partial data regarding age and sex of the eight positive recipients were available and are presented in Table 2.

We compared recipient test results for 1999 to 2000 when IFA-positive index donations were transfused versus 2001 to 2005, when they were discarded. There was a significant difference ($p < 0.05$) between the proportion of seropositive recipients identified, 5 of 15 (33.3%) for the former compared to 3/48 (6.3%) for the latter (Table 1). Similarly, the proportion of positive recipients in the first 2 years after the deferral of seropositive donors, 2001 to 2002, was 3 of 12 (25.0%), which was significantly greater ($p < 0.05$) than the next 3 years, 2003-2005: 0 of 36 (0.0%; Table 1). As seen in Table 3, of eight recipients transfused with index components, four (50.0%) were positive, while for the 55 recipients of components from previous donations only four (7.3%) were positive ($p < 0.05$). All of the positive recipients who received components from a previous donation were transfused with a RBC unit from the donation that immediately preceded the index donation.

The TI between when a recipient was transfused with a LB/MW associated component and when their blood sample was received for testing ranged from 44 to 628 days, with a median of 58 days (range, 44-227 days) for positive recipients and a median of 198.5 days (range, 60-628 days) for negative recipients ($p < 0.05$; Table 4). The median age of transfused RBCs provided to recipients testing positive was 18 days (range, 7-42 days) versus 15 days (range, 7-38 days) for recipients testing negative. Separately, the median age of transfused PLTs provided to positive recipients was 5 days, but there was only one associated PLT unit. For recipients testing negative, the median age of transfused PLTs was 4 days (Table 4). No significant differences were found for the age of transfused RBCs or PLTs. The median donation interval (DI) between index and LB-associated donation of RBCs for recipients testing positive was 107 days (range, 56-153 days), while the DI for negative recipients was 165 days (range, 56-365 days). We could not calculate the median DI for PLT recipients testing positive, because the only recipient sample was associated with an index donation. The median DI

TABLE 4. Summary of TI between recipient transfusion and sample collection, age of transfused LB components, and DI between index donation and LB associated donation

	TI between recipient transfusion and sample receipt*†		DI between index and LB associated donation‡				Age of transfused component§			
			RBC		PLT		RBC		PLT	
	Positive recipients (n = 7)	Negative recipients (n = 40)	Positive recipients (n = 4)	Negative recipients (n = 36)	Positive recipients (n = 0)	Negative recipients (n = 15)	Positive recipients (n = 7)	Negative recipients (n = 31)	Positive recipients (n = 1)	Negative recipients (n = 14)
Median (days)	58	198.5	107	165	NA	177	18	15	5	4
Range (days)	44 to 227	60 to 628	56 to 153	56 to 365	NA	66 to 365	7 to 42	7 to 38	NA	2 to 5

* $p < 0.05$.
† Excludes missing data (n = 16).
‡ Excludes LB associated index donations (n = 8).
§ Excludes missing data (n = 10).

for PLT recipients testing negative was 177 days (range, 66-365 days; Table 4). These differences were not significant.

From a separate research study,[16] PCR test results indicative of the presence or absence of parasitemia were available for 34 of the 46 donors associated with LB investigations; 12 donors were not tested for parasitemia (Fig. 1). The TI between the index donation and when the donor's follow-up sample was collected for PCR testing ranged from 10 to 81 days with a median of 38 days. Among the 34 donors tested for parasitemia, 10 (29.4%) were positive by PCR (i.e., parasitemic), while the remaining 24 were negative. Blood components from the 10 parasitemic donors were transfused to 15 recipients and 5 (33.3%) were identified as *Babesia* positive; however, of the 34 recipients who received blood from nonparasitemic donors only one (2.9%) was determined to be *Babesia* positive ($p < 0.05$).

DISCUSSION

LB investigations are commonly employed in transfusion medicine to allow medical follow-up of infected recipients and to prevent possible secondary transmission. However, data from LB can also be used to gauge the infectivity of previous donations from donors identified as positive for a transmissible agent and to determine the window period of infectiousness for said agent. Herein, we demonstrate that 12.7% of blood recipients receiving components from donors found seropositive for *B. microti* were infected via transfusion. While this transmission rate may appear low compared to rates for viral agents that often approach 100%,[17] 12.7% is higher than rates seen for other parasitic agents (e.g., *Trypanosoma cruzi*, 2 of 253 or 0.8%[18,19]). This finding confirms previous reports that donors testing positive for *B. microti* are potentially infectious[20] and also suggests that LB for *B. microti*–seropositive donors might be warranted. The latter conclusion is based on the assumption that identifying infected recipients arising from TTB cases, often after the 1 to 9 week incubation period for acute disease remains important to the recipient's or their contacts' health. While rare, *Babesia* has been transmitted perinatally or transplacentally on at least three occasions,[21-23] but perhaps more importantly, many blood recipients are immuncompromised and/or elderly, thus putting them at risk for chronic or serious babesiosis after they become infected. Knowledge of potential exposure to *B. microti* would allow physicians to provide appropriate antibiotic therapy to clear the infection and to monitor those patients at risk for severe disease (e.g., asplenic patients).

The 12.7% transmission rate reported herein for *B. microti* may in fact be a conservative estimate. We observed that the TI from when a recipient was transfused with a LB/MW associated component and when a blood sample was received for testing was significantly shorter ($p < 0.05$) for seropositive than for seronegative recipients, median of 58 days versus 198.5 days. This suggests that some seronegative recipients may have cleared the infection and seroreverted before their samples were collected for testing. Indeed, our studies of seropositive blood donors have shown a high rate of seroreversion over several months.[16] In this regard, LB for *B. microti* differs from that for HIV and other viral infections, where seroreversion is extremely rare. Another limitation of our study is that pretransfusion samples were not available for testing on any of the LB recipients; thus it is possible that positive recipients may have been infected naturally via a tick bite since they reside in *Babesia*-endemic areas of Connecticut. However, given the reported donor seroprevalence of approximately 1% in Connecticut,[11] it is relatively unlikely that these recipient infections represent acquisition of *B. microti* from an infected tick.

During this 7-year study period, we observed a significant decrease in the frequency of *B. microti*–positive recipients, from 33.3% in 1999 through 2000, to 6.3% in 2001 through 2005. Our finding of decreased infectivity is in direct contrast to increased reports of TTB in our neighboring states.[24,25] This suggests that our observed decrease in apparent transfusion infectivity is likely due to two primary factors. First, the exclusion of index and subsequent *B. microti*–positive donations (beginning in 2001) resulted in fewer infectious units being transfused. Second, the continued decrease in the *B. microti*–positive recipients from 25% in the first 2 years after seropositive deferral (2001 through 2002), to 0% in the following 3 years (2003 through 2005), suggests that our ongoing research testing and deferral of seropositive donors has removed not only acutely infected donors, but also chronically infected donors from the donor population, who may transmit infections to blood recipients. We hypothesize that this donor culling effect has also reduced the rate of TTB associated with the tested donor population in Connecticut. Additionally, ecologic and climatic factors greatly influence the life cycle of *Babesia* and may have affected infection and transmission patterns during the study period. Taken together, the observed decrease for the transmission rate in Connecticut recipients suggests a possible indirect effect of limited donor testing for *B. microti* antibody.

Similar to published reports of TTB,[4] seven of eight transmissions identified in this study implicated a RBC. Neither the age of transfused component nor the DI between the index and LB-associated donation influenced the transmission rates among LB recipients. The latter finding is in contrast to that observed in HIV LB investigations.[17] It is of interest to note that in one instance the age of the implicated RBC was 42 days, thereby extending the previously published viability of the parasite in RBCs from 39 to 42 days.[5] Thus, all in-date RBCs or

whole blood–derived PLTs should be considered at risk for transmitting *B. microti* to blood recipients.

Also enhancing the likelihood of transmission is whether or not the donor was parasitemic at the time of donation and the proximity of the implicated donation to a peak period of parasitemia, which is often intermittent in nature, and its periodicity varies considerably among infected donors. Indeed, a significant difference was found between recipients of index donations (50% positive) versus other donation (7.3% positive). In addition, significant differences in positive LBs were found when comparing LBs originating from donors that were demonstrably parasitemic (i.e., PCR positive at follow-up) compared to nonparasitemic donors, 5 of 15 (29.4%) and 1 of 34 (2.9%), respectively. These findings confirm that index donations from demonstrably parasitemic donors are at greatest risk of causing TTB. One limitation of the study is that donors were not tested by serology and PCR on samples collected on the same day (range, 10-81 days later; median, 38 days); therefore, it is possible that donors may not have been parasitemic at the time of the index donation. Additional limitations of the study include the use of separate laboratories for testing of donor and recipient samples arising due to the LB process, although previous studies show minimal differences in IFA results across laboratories.[26]

Data published from a 1991 to 1992 study in Connecticut calculated the risk of acquiring babesiosis from a transfused unit of blood cells as 1 in 601 or 0.17% (95% CI, 0.004%-0.9%) and 0 in 371 or 0% (95% CI, 0%-0.8%) for PLTs.[27] Later estimates from Connecticut suggest that the risk in RBCs may be lower; 1 case per 1800 to 1 case per 100,000 RBC units transfused.[20,29] To estimate the risk of acquiring TTB in Connecticut during the time period studied, we made the following assumptions; an annual collection of approximately 150,000 units in the ARC Connecticut region, observed seroprevalences from 1999 through 2005 of 1.2% (95% CI, 1.1%-1.4%) and 12.7% (95% CI, 5.7%-23.5%) positive LB recipients. Utilizing these numbers we derived a risk estimate of 229 potential *B. microti* transmissions per year in Connecticut.

The success of LB at identifying infected recipients reported here, coupled with ongoing TTB cases, indicates the need for implementation of appropriate interventions to reduce transmission of *B. microti* to blood recipients. Because there is currently no sound alternative, regional implementation of donor screening by antibody and/or nucleic acid test may be judicious. It has been suggested in recent publications that perhaps the most effective approach would be to apply an algorithm based on known endemic regions of the United States, specifically targeting the Upper Midwest and the Northeast.[4,11] Recently the Rhode Island Blood Center implemented selective *B. microti* testing of donors under investigational new drug for blood transfusions to at-risk recipients, specifically neonates.[10] While neonates certainly represent an important at-risk population, at least seven of the eight infected recipients identified in this study were not neonates. Similarly, other studies have reported relatively few infected neonates among larger series of infected blood recipients.[5,9,30] This suggests that a broader recipient population is at risk for acquiring TTB and needs to be considered in future interventions. Blood centers, residing in these regionally endemic areas, should consider implementation of appropriate interventions that protect all transfusion recipients at risk for TTB.

ACKNOWLEDGEMENTS

The authors thank Dr Raymond Ryan, Feliciano Dias, and the staff of the Molecular and Immunology Laboratory at the University of Connecticut for testing the recipient samples.

CONFLICT OF INTEREST

There are no conflicts of interest to report.

REFERENCES

1. Western KA, Benson GD, Gleason NN, Healy GR, Schultz MG. Babesiosis in a Massachusetts resident. N Engl J Med 1970;283:854-56.
2. Gorenflot A, Moubri K, Precigout E, Carcy B, Schetters TP. Human babesiosis. Ann Trop Med Parasitol 1998;92:489-501.
3. Meldrum SC, Birkhead GS, White DJ, Benach JL, Morse DL. Human babesiosis in New York State: an epidemiological description of 136 cases. Clin Infect Dis 1992;15:1019-23.
4. Leiby DA. Transfusion-transmitted *Babesia* spp.: Bull's-eye on *Babesia microti*. Clin Microbiol Rev 2011;24:14-28.
5. Linden JV, Olkowska D, Grima KM, Manning ML. A series of 23 transfusion-associated babesiosis cases. Transfusion 2010;50(Suppl):S90-030.
6. Grabowski EF, Giardina PJV, Goldberg D, Masur H, Read SE, Hirsch RL, Benach JL. Babesiosis transmitted by a transfusion of frozen-thawed blood. Ann Intern Med 1982; 96:466-67.
7. Zhao Y, Love KR, Hall SW, Beardell FV. A fatal case of transfusion-transmitted babesiosis in the State of Delaware. Transfusion 2009;49:2583-87.
8. Gubernot DM, Lucey CT, Lee KC, Conley GB, Holness LG, Wise RP. *Babesia* infection through blood transfusions: reports received by the US Food and Drug Administration, 1997-2007. Clin Infect Dis 2009;48:25-30.
9. Tonnetti L, Eder AF, Dy B, Kennedy J, Pisciotto P, Benjamin RJ, Leiby DA. Transfusion-transmitted *Babesia microti* identified through hemovigilance. Transfusion 2009;49: 2557-63.

10. Gubernot DM, Nakhasi HL, Mied PA, Asher DM, Epstein JS, Kumar S. Transfusion transmitted babesiosis in the United States: summary of a workshop. Transfusion 2009; 49:2759-71.
11. Johnson ST, Cable RG, Tonnetti L, Spencer B, Rios J, Leiby DA. Seroprevalence of *Babesia microti* in blood donors from *Babesia*-endemic areas of the northeastern United States: 2000 through 2007. Transfusion 2009;49: 2574-82.
12. Leiby DA, Chung APS, Gill JE, Houghton RL, Persing DH, Badon S, Cable R. Demonstrable parasitemia among Connecticut blood donors with antibodies to *Babesia microti*. Transfusion 2005;45:1804-10.
13. Persing DH, Mathiesen D, Marshall WF, Telford SR, Spielman A, Thomford JW, Contrad PA. Detection of *Babesia microti* by polymerase chain reaction. J Clin Microbiol 1992;30:2097-103.
14. Tonnetti L, Proctor MC, Reddy HL, Goodrich RP, Leiby DL. Evaluation of the Mirasol platelet reduction technology system against *Babesia microti* in apheresis platelets and plasma. Transfusion 2010;50:1019-27.
15. Krause PJ, Ryan R, Telford S III, Persing D, Spielman A. Efficacy of Immunoglobulin M serodiagnostic test for rapid diagnosis of acute Babesiosis. J Clin Microbiol 1996;34: 2014-16.
16. Tonnetti L, Johnson ST, Cable RG, Rios J, Spencer BR, Leiby DA. Natural history study (NHS) of *Babesia microti* in Connecticut blood donors. Transfusion 2009;49(Suppl):35A.
17. Petersen LR, Satten GA, Dodd R, Busch M, Kleinman S, Grindon A, Lenes B, The HIV Seroconversion Study Group. Duration of time from onset of human immunodeficiency virus type 1 infectiousness to development of detectable antibody. Transfusion 1994;34:283-89.
18. Kessler D, Grima KM, Hillyer CD. Chagas transmission identified through lookback. Transfusion 2010;50(Suppl): 31A-2A.
19. FDA. Blood products advisory committee meeting. August 2, 2011. Briefing materials. [cited 2011 Aug 30]. Available from: URL: http://www.fda.gov/downloads/AdvisoryCommittees/CommitteesMeetingMaterials/BloodVaccinesandOtherBiologics/BloodProductsAdvisoryCommittee/UCM265675.pdf
20. Gorlin JB, Jensen KA, Perry EH, Neitzel DF, Won KY, Slemenda SB, Ware DA, Pieniazak NJ, Herwaldt BL. Transmission of *Babesia microti* through multiple donations from the same blood donor. Transfusion 2000;40:42S.
21. Esernio-Jenssen D, Scimeca PG, Benach JL. Transplacental/perinatal babesiosis. J Pediatr 1987;110:570-72.
22. New DL, Quinn JB, Qureshi MZ, Sigler SJ. Vertically transmitted babesiosis. J Pediatr 1997;131:163-4.
23. Sethi S, Alcid D, Kesarwala H, Tolan RW Jr. Probable congenital babesiosis in Infant, New Jersey, USA. Emerg Infect Dis 2009;15:788-91.
24. Asad S, Sweeney J, Mermel LA. Transfusion-transmitted babesiosis in Rhode Island. Transfusion 2009;49:2564-73.
25. Frieden TR. New York City Department of Public Health and Mental Hygiene, Health Advisory #5: increase in transfusion-associated babesiosis in NYC. February 23, 2009. [cited 2011 Mar 15]. Available from: URL: http//www.nyc.gov/html/doh/downloads/pdf/cd/2009/09md05.pdf
26. Krause PJ, Telford SR III, Ryan R, Conrad PA, Wilson M, Thomford JW, Spielman A. Diagnosis of babesiosis: evaluation of a serologic test for the detection of *Babesia microti* antibody. J Infect Dis 1994;169:923-6.
27. Gerber MA, Shapiro ED, Krause PJ, Cable RG, Badon SJ, Ryan RW. The risk of acquiring Lyme disease or babesiosis from a blood transfusion. J Infect Dis 1994;170:231-4.
28. Badon S, Trouern-Trend J, Cable R. Eleven years of experience investigating suspected post transfusion babesiosis. Transfusion 2003;43(Suppl):78a.
29. Cable RG, Badon S, Trouern-Trend J. Evidence for transmission of *Babesia microti* from connecticut blood donors to recipients. Transfusion 2001;41(Suppl):S12-S13. S38-030G.
30. Herwaldt BL, Neitzel DF, Gorlin JB, Jensen KA, Perry EH, Peglow WR, Slemenda SB, Won KY, Nace EK, Pieniazek NJ, Wilson M. Transmission of Babesia microti in Minnesota through four blood donations from the same donor over a 6-month period. Transfusion 2002;42:1154-8.

医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 8. 3	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Emerging Infectious Disease Journal, Vol.18 No.3; Available from: http://wwwnc.cdc.gov/eid/article/18/8/11-0988_article.htm	公表国 米国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)			

研究報告の概要

○*Babesia microti*の垂直感染、米国

バベシア症は米国における新興感染症であり、主に*B.microti*に起因する。最も一般的な感染経路はダニ(*Ixodes scapularis*)に咬まれることであるが、感染した血液製剤の輸血によって伝播することもある。

採取した血液サンプル中の*Babesia*抗体により垂直感染が示唆され、胎盤組織における*Babesia* DNAの検出から確認された乳児におけるバベシア症例について報告する。

2002年9月16日に生後6週目の女児が、発熱、不穏、食欲不振から入院した。母親は妊娠中、出産後とも無症候であり、妊娠中にニューヨーク州の公園を訪れたがダニに咬まれた覚えはなかった。乳児のダニ曝露は確認されておらず、母子ともに輸血歴はなかった。

児の末梢血スメアは赤血球の4%に*B.microti*を示し、血液サンプルは*B.microti* DNAのPCR結果陽性であった。多価の二次抗体(IgG+IgA+IgM)を用いた間接免疫蛍光アッセイによる総*B.microti*抗体価は256倍以上であった。新生児スクリーニングの一部として生後3日目に採取した血液サンプルが検査され、PCRにより*B.microti* DNAは陰性であり、IgM抗体陰性であるが、総抗体は陽性(128倍以上)であることが分かった。

胎盤の検査で限局性基底脱落膜炎、軽度の絨毛血管増生、絨毛成熟異常が見られた。パラフィン包埋胎盤組織のリアルタイムPCR検査により*Babesia* DNAが検出された。児の罹患時、母親はPCRとスメアでは*Babesia*陰性であったが、総抗体価は陽性であった(256倍以上)。

バベシア症の垂直感染が報告されることは稀である。この症例は、母親の分娩前感染症が原因の先天性バベシア症であるという説得力のある証拠を提供した。先天性マラリアの経験に基づき、*Babesia*は妊娠中または出産時に胎盤を通過すると考えられる。患児の生後3日目の血液サンプルの分析で検出された*Babesia*抗体は、恐らく母親のIgG抗体が移行したことを意味する。

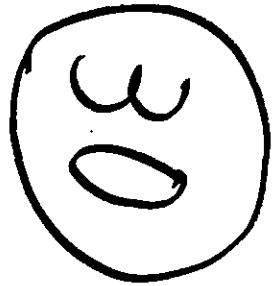
バベシア症の流行地域における乳児の発熱及び溶血性貧血の鑑別診断において、この診断は考慮されなくてはならない。

報告企業の意見	今後の対応
米国でバベシア症の垂直感染症例が報告された。	今後も引き続き、新興・再興感染症の発生状況等に関する情報の収集に努める。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク



Vertical Transmission of *Babesia microti*, United States

Julie T. Joseph, Kerry Purtill, Susan J. Wong, Jose Munoz, Allen Teal, Susan Madison-Antenucci, Harold W. Horowitz,[1] Maria E. Aguero-Rosenfeld,[1] Julie M. Moore, Carlos Abramowsky, and Gary P. Wormser

Babesiosis is usually acquired from a tick bite or through a blood transfusion. We report a case of babesiosis in an infant for whom vertical transmission was suggested by evidence of *Babesia* spp. antibodies in the heel-stick blood sample and confirmed by detection of *Babesia* spp. DNA in placenta tissue.

Babesiosis is an emerging infection in the United States, principally caused by *Babesia microti* (*1*). The most common route of infection is the bite of an *Ixodes scapularis* tick; transmission can also occur by transfusion of infected blood products, and vertical transmission in animals has been documented (*2*,*3*) and is a potential route of transmission for humans. We report a case of babesiosis in an infant for whom vertical transmission was suggested by *Babesia* spp. antibodies in a heel spot blood sample and confirmed by detection of *Babesia* DNA in placenta tissue.

The Case-Patient

A 6-week-old girl from Yorktown Heights, New York, was admitted to the hospital on September 16, 2002, with a 2-day history of fever, irritability, and decreased oral intake. The mother was asymptomatic during and after her pregnancy. The infant was delivered vaginally and full term at 3,430 g without complications. The infant's mother had visited parks in Westchester and Dutchess Counties in New York during the pregnancy but was unaware of any tick bites. The infant had no known tick exposure, and neither mother nor infant had a history of blood transfusion.

Author affiliations: New York Medical College, Valhalla, New York, USA (J.T. Joseph, K. Purtill, J. Munoz, H.W. Horowitz, M.E. Aguero-Rosenfeld, G.P. Wormser); New York State Department of Health, Albany, New York, USA (S.J. Wong, A. Teal, S. Madison-Antenucci); University of Georgia, Athens, Georgia, USA (J.M. Moore); and Emory University School of Medicine, Atlanta, Georgia, USA (C. Abramowsky)

DOI: http://dx.doi.org/10.3201/eid1808.110988

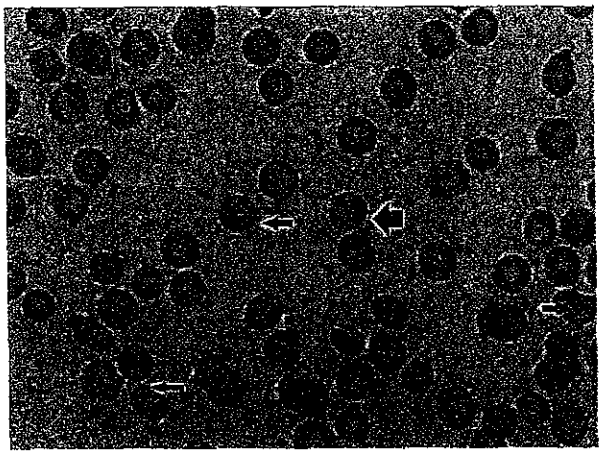


Figure. Peripheral blood smear of 6-week-old infant with suspected congenital babesiosis. Thin arrows indicate *Babesia* spp. parasites; thick arrow shows the classic tetrad formation or Maltese cross.

During examination, the infant was alert but irritable and pale. Axillary temperature was initially 36.8°C but increased to 38.1°C on the same day. Her conjunctivae were icteric, she had a palpable spleen tip, and her liver was palpable 3 cm below the costal margin. Initial laboratory findings included hemoglobin 7.1 g/dL, platelet count 100 × 10^3/μL, and leukocyte count 19.7 × 10^3 cells/μL with a differential of 4% segmented neutrophils, 80% lymphocytes, and 16% monocytes. Reticulocyte count was 5.5%. Total bilirubin concentration was 2 mg/dL with a direct fraction of 0.4 mg/dL; aspartate aminotransferase level was 66 U/L, alanine aminotransferase level was 50 U/L, and alkaline phosphatase level was 339 U/L. Cultures of blood, urine, and cerebrospinal fluid samples yielded negative results. Lyme disease serologic test result was negative.

Routine examination of a peripheral blood smear showed *B. microti* in 4% of erythrocytes (Figure); a blood sample from the infant was positive by PCR for *B. microti* DNA. Total *B. microti* antibody titer was >256 by indirect immunofluorescence assay, with a polyvalent secondary antibody (anti-IgG+IgA+IgM) (*4*) that was presumed to be principally IgG because test results for IgM were negative (online Technical Appendix, wwwnc.cdc.gov/EID/pdfs/11-0988-Techapp.pdf). The heel-stick blood sample obtained on the infant's third day of life as part of newborn screening was tested and found to be negative for *B. microti* by PCR (*5*) and for IgM but total antibody positive (>128) (online Technical Appendix).

Examination of the placenta showed focal basal decidual inflammation, mild chorangiosis, and villus dysmaturity. *Babesia* spp. piroplasms were not detected in

[1]Current affiliation: New York University School of Medicine, New York, New York, USA.

maternal or fetal blood by histologic examination of hematoxylin and eosin–stained sections of formalin-fixed, paraffin-embedded tissue of the placenta disk, amnion/chorion, and umbilical cord. *Babesia* DNA was detected by real-time PCR testing of paraffin-embedded placenta tissue (online Technical Appendix) (*6*). Cycle threshold values were relatively high (37.1–38.2), indicating that the amount of parasite DNA in the sample was close to the limit of detection; results were reproducible on duplicate testing of DNA samples extracted from separate paraffin blocks. The real-time PCR product was of the correct size, and the melting curve demonstrated melting temperatures within 1°C from the placenta, the positive control, and a positive sample from an unrelated patient , confirming that the correct product was amplified. At time of the illness in the infant, the mother was negative for *Babesia* spp. according to PCR and smear but positive for total antibodies (>256).

Table. Comparison of selected clinical and laboratory data from reported cases of congenital babesiosis in 5 infants*

Clinical data	Reference (7)	(8)	(9)	(10)	This study
Year of diagnosis/ location	Not given/Long Island, New York	Not given/Long Island, New York	Not given/New Jersey	Not given/Long Island, New York	2002/Westchester County, New York
Infant age at time of symptom onset, d	30	32	19	27	41
Clinical findings	Fever, irritability, pallor, hepatosplenomegaly	Fever, lethargy, poor feeding, pallor, scleral icterus, hepatomegaly	Fever, poor feeding, gagging, irritability, pallor, scleral icterus, hepato-splenomegaly	Fever, pallor	Fever, decreased oral intake, irritability, scleral icterus, pallor, hepatosplenomegaly
Initial babesia parasitemia level, %	5	4.4	15	2	4
Hospitalization, d	6	5	8	NA	5
Maternal tick bite	1 wk before delivery	7 wk before delivery	4 wk before delivery	None known	None known
Babesia spp. serologic and PCR results for infant	30 d after birth: IgM+/IgG+ (128/128) by IFA; 32 d after birth: IgM+/IgG+ (256/512) by IFA; PCR ND	At illness onset: IgG IFA 160; IgM/IgG immunoblot +; PCR ND	At illness onset: IgM+/IgG+ (40/256) by IFA; PCR ND	NA	Newborn screening (heel stick): IgM– (<16); total antibody + (>128) by IFA; PCR–; 6 wks after birth: IgM– (<16); total antibody + (>256) by IFA; PCR+
Babesia spp. evaluation results for mother	30 d after birth: IgM+/IgG+ (2,048/1,024); 32 d after birth: IgM+/ IgG+ (4,096/1,024); peripheral smear – at time of delivery and at 30 and 32 d after birth	7 wk before birth: IgG IFA <40; IgM/IgG immunoblot –; 2 mo after birth: IgG IFA 640; IgM/IgG immunoblot +; peripheral smear – at delivery and at infant illness onset	At infant illness onset: IgM+/IgG+ (80/>1,024) by IFA; peripheral smear negative at time of infant illness onset	At infant illness onset: PCR+	Birth: placenta PCR+; 6 wk after birth: IgM ND; total antibody + (>256) by IFA; PCR–; peripheral smear –
HGB, g/dL	9.3	10.8	8.8	NA; HCT 24.3%	7.1
Platelets, x 10^3/µL	38	87	34	101	100
Leukocytes/PMN leukocytes, cells/µL	6,500/1,170	NA	9,000/1,890	NA	19,700/788
LDH, U/L	894	NA	2535	NA	NA
Bilirubin indirect, mg/dL	3.6	9.7	5.9	NA	1.6
AST, U/L	90	NA	53	NA	66
ALT, U/L	90	NA	18	NA	50
Treatment	CLI and quinine for 10 d	CLI and quinine with AZT added on day 3; on day 5 changed to AZT plus quinine for additional 7 d	AZT and ATO for 10 d	AZT and ATO, duration not given	AZT and ATO for 9 d
Follow-up	Well at 6 mo posttreatment	Improved at 2 wk	Lost to follow-up	NA	22 mo
Blood transfusion for anemia	Yes, for HCT of 18%	Yes, for HGB of 7.3 g/dL	Yes, for HGB of 7.0 g/dL	Yes, for HCT of 17.3%	Yes, for HGB of 5.2 g/dL with HCT of 15.8%

*No mothers became ill. NA, not available; +, positive; IFA, indirect immunofluorescence assay; ND, not done; –, negative; HGB, hemoglobin; HCT, hematocrit; PMN, polymorphonuclear; LDH, lactate dehydrogenase level; AST, aspartate aminotransferase; ALT, alanine aminotransferase; CLI, clindamycin; AZT, azithromycin; ATO, atovaquone.

The infant was treated with a 9-day course of azithromycin plus atovaquone. A blood transfusion was administered when her hemoglobin concentration fell to 5.2 g/dL. The infant became afebrile by 72 hours and was discharged after a 5-day hospitalization. Repeat blood smears revealed a parasite load of 0.3% at discharge. On final evaluation at 22 months of age, physical examination revealed no abnormalities; hemoglobin level was 11.7 g/dL, *Babesia* PCR was negative, and total *Babesia* antibody level was positive at 128.

Conclusions

Congenital babesiosis has been rarely reported (Table) (*7–10*). This case provided convincing evidence for congenital babesiosis because of prepartum infection involving the placenta in the mother. On the basis of experience with congenital malaria, we assume that *Babesia* spp. parasites cross the placenta during pregnancy or at the time of delivery (*11,12*). In congenital malaria, increasing evidence suggests that the malaria parasites are most often acquired antenatally by transplacental transmission of infected erythrocytes (*12*).

Reported cases of congenital babesiosis share many similarities, including asymptomatic maternal infection and development of fever, hemolytic anemia, and thrombocytopenia in the infant detected between 19 and 41 days after birth. All of the infants responded to antimicrobial drug therapy; 3 were treated with azithromycin plus atovaquone (*9,10*), the preferred treatment regimen for mild babesiosis (*1*). All infants required a blood transfusion because of severe anemia. The clinical signs and symptoms for these cases of congenital babesiosis are similar to those of congenital malaria in non–disease endemic areas (*11,13*).

We found *Babesia* spp. antibodies on day 3 of life by analyzing the patient's heel-stick blood sample, which likely represented maternal transfer of IgG. Passive transfer of maternal antibodies is regarded as a protective factor against congenital malaria, and some newborns with malaria who are parasitemic at birth spontaneously clear the infection without ever becoming ill (*11,14*). The temporary presence of maternal IgG in infants has been suggested as an explanation for the typical 3–6 week incubation period of congenital malaria in non–disease endemic areas (*14*).

The real-time PCR used to find *B. microti* DNA in placenta tissue is ≈20× more sensitive than microscopic examination of Giemsa-stained blood smears (*6*). Assuming a blood sample with a parasitemia equivalent to that detected in the placental tissue, a blood smear would contain ≤10 infected cells per slide. Given the low level of *Babesia* DNA in the placenta tissue, it is not surprising that histologic examination did not reveal piroplasms. Nonetheless, limited evidence of placental abnormalities suggests a pathologic process.

In summary, babesiosis is an emerging infectious disease (*15*) that can rarely cause congenital infection. This diagnosis should be considered in the differential diagnosis of fever and hemolytic anemia in infants from disease-endemic areas.

Acknowledgments

The authors thank Steven Smith, Jennifer Calder, Lisa Giarratano, Lenise Banwarie, Ewa Bajor-Dattilo, and Karen Kulas for their assistance.

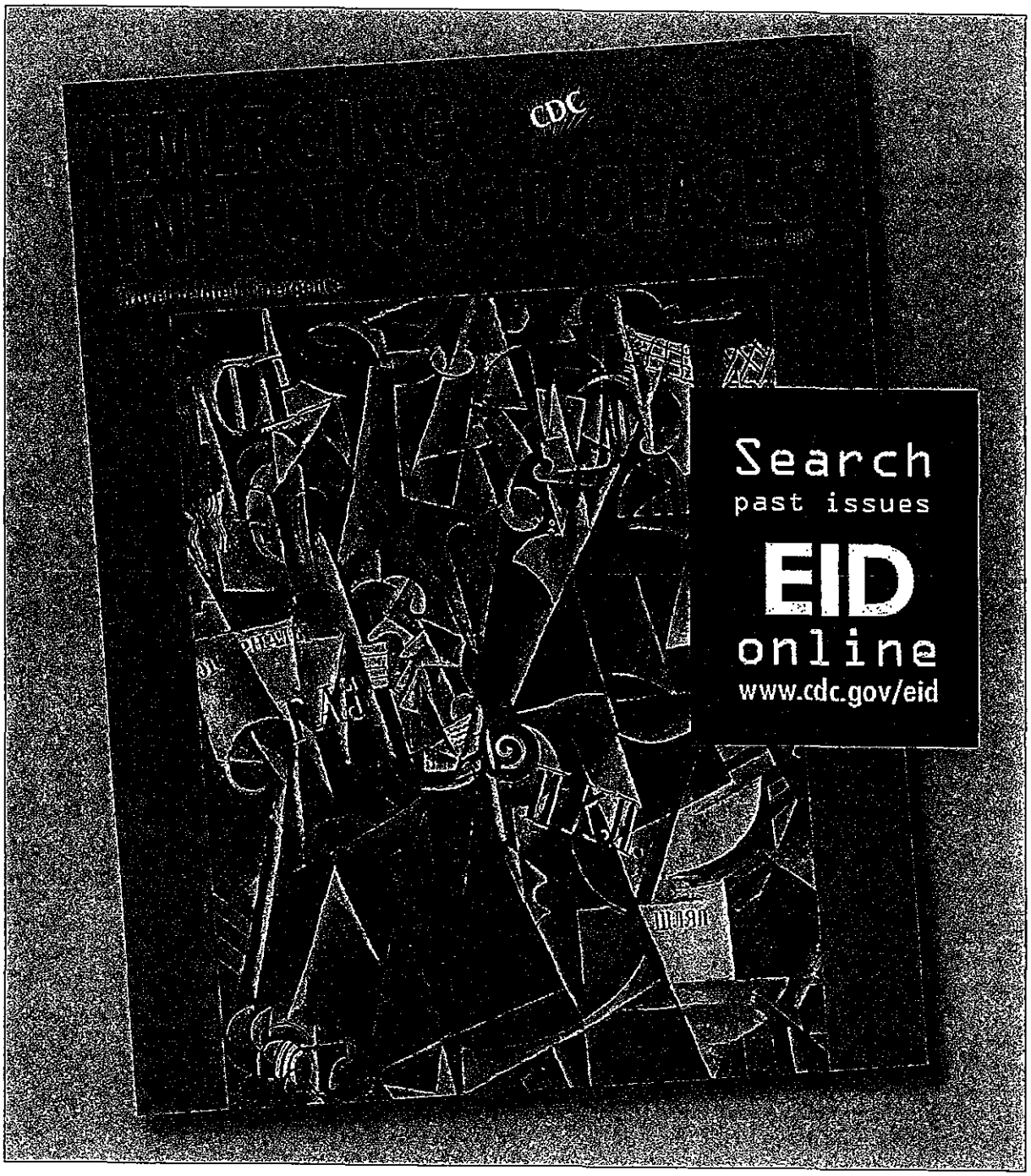
Dr Joseph is an assistant professor of medicine in the Division of Infectious Diseases at New York Medical College. Her research interests are tick-borne illnesses, particularly babesiosis.

References

1. Vannier E, Gewurz BE, Krause PJ. Human babesiosis. Infect Dis Clin North Am. 2008;22:469–88. http://dx.doi.org/10.1016/j.idc.2008.03.010
2. de Vos AJ, Imes GD, Cullen JSC. Cerebral babesiosis in a new-born calf. Onderstepoort J Vet Res. 1976;43:75–8.
3. Fukumoto S, Suzuki H, Igarashi I, Xuan X. Fatal experimental transplacental *Babesia gibsoni* infections in dogs. Int J Parasitol. 2005;35:1031–5. http://dx.doi.org/10.1016/j.ijpara.2005.03.018
4. Chisholm ES, Ruebush TK II, Sulzer AJ, Healy GR. *Babesia microti* infection in man: evaluation of an indirect immunofluorescent antibody test. Am J Trop Med Hyg. 1978;27:14–9.
5. Persing DH, Mathiesen D, Marshall WF, Telford SR, Spielman A, Thomfod JW, et al. Detection of *Babesia microti* by polymerase chain reaction. J Clin Microbiol. 1992;30:2097–103.
6. Teal AE, Habura A, Ennis J, Keithly J, Madison-Antenucci S. A new real-time PCR assay for improved detection of the parasite *Babesia microti*. J Clin Microbiol. 2012;50:903–8. http://dx.doi.org/10.1128/JCM.05848-11
7. Esernio-Jenssen D, Scimeca PG, Benach JL, Tenenbaum MJ. Transplacental/perinatal babesiosis. J Pediatr. 1987;110:570–2. http://dx.doi.org/10.1016/S0022-3476(87)80552-8
8. New DL, Quinn J, Qureshi MZ, Sigler S. Vertically transmitted babesiosis. J Pediatr. 1997;131:163–4. http://dx.doi.org/10.1016/S0022-3476(97)70143-4
9. Sethi S, Alcid D, Kesarwala H, Tolan RW Jr. Probable congenital babesiosis in infant, New Jersey, USA. Emerg Infect Dis. 2009;15:788–91. http://dx.doi.org/10.3201/eid1505.070808
10. Aderinboye O, Syed S. Congenital babesiosis in a four-week old female infant. Pediatr Infect Dis J. 2010;29:188. http://dx.doi.org/10.1097/INF.0b013e3181c3c971
11. Vottier G, Arsac M, Farnoux C, Mariani-Kurddjian P, Baud O, Aujard Y. Congenital malaria in neonates: two case reports and review of the literature. Acta Paediatr. 2008;97:505–8. http://dx.doi.org/10.1111/j.1651-2227.2008.00690.x
12. Malhotra I, Mungai P, Muchiri E, Kwiek JJ, Meshnick SR, King CL. Umbilical cord-blood infections with *Plasmodium falciparum* malaria are acquired antenatally in Kenya. J Infect Dis. 2006;194:176–83. http://dx.doi.org/10.1086/505150
13. Lesko CR, Arguin PM, Newman RD. Congenital malaria in the United States. A review of cases from 1966 to 2005. Arch Pediatr Adolesc Med. 2007;161:1062–7. http://dx.doi.org/10.1001/archpedi.161.11.1062

14. Hagmann S, Khanna K, Niazi M, Purswani M, Robins EB. Congenital malaria, an important differential diagnosis to consider when evaluating febrile infants of immigrant mothers. Pediatr Emerg Care. 2007;23:326–9. http://dx.doi.org/10.1097/01.pec.0000270164.78238.7d
15. Joseph JT, Roy SS, Shams N, Visintainer P, Nadelman RB, Hosur S, et al. Babesiosis in Lower Hudson Valley, New York, USA. Emerg Infect Dis. 2011;17:843–7.

Address for correspondence: Julie T. Joseph, New York Medical College, Division of Infectious Diseases, Munger Pavilion Room 245, Valhalla, NY 10595, USA; email: julie_joseph@nymc.edu



医薬品 研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 4. 21	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Cantey PT, Stramer SL, Townsend RL, Kamel H, Ofafa K, Todd CW, Currier M, Hand S, Varnado W, Dotson E, Hall C, Jett PL, Montgomery SP. Transfusion. 2012 Mar 8. doi: 10.1111/j.1537-、2995.2012.03581.x. [Epub ahead of print]	公表国
販売名(企業名)	新鮮凍結血漿-LR「日赤」(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240(日本赤十字社) 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480(日本赤十字社)			米国

研究報告の概要

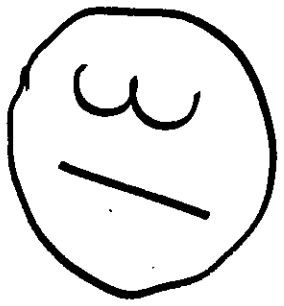
○米国の*Trypanosoma cruzi*感染研究:米国の供血者間のシャーガス病原因原虫の昆虫媒介性感染のためのエビデンス
背景: 米国の供血者を*Trypanosoma cruzi*(*T.cruzi*)感染についてスクリーニングし、土着性の慢性感染症と判断した。ミシシッピ州の供血者2人がスクリーニングで検出され、国内の媒介昆虫による感染の可能性があるとして調査された。米国内の昆虫媒介性感染負荷を評価し、推定されるリスク要因を明らかにするために米国の*T.cruzi*感染症に関する研究を行った。
研究案と方法: 酵素免疫測定法で繰り返し反応があり放射免疫沈降法が陽性で、感染経路の確認が不可能な供血者は、感染源を特定するための問診と、追加の血清及び血液培養検査により評価された。
結果: 2006年8月31日から2010年4月30日までに、約2900万供血のスクリーニングから1084人の供血者が*T.cruzi*陽性であると確認された。そのうち調査参加資格を満たす供血者は54人で、37人(69%)が研究に参加した。15人(41%)は血清学検査結果が4回もしくは5回陽性であり、*T.cruzi*感染陽性とみなされ、うち1人は血液培養検査陽性だった。15人中3人(20%)が流行国の農村地域を訪れたことがあったが、2週間以上滞在した者はいなかった。全員が*T.cruzi*媒介昆虫や感染したほ乳類の生息地であると確認された地域に居住した経験があり、13人(87%)が野外でレジャーや仕事をしたと報告し、11人(73%)が私有地で宿主動物を見たと報告した。
結論: 米国の媒介昆虫経由による慢性*T.cruzi*感染は、以前報告されていた7症例に、ミシシッピ調査からの1例を含む16例が追加で報告された。この研究に基づく土着性感染の推定割合は供血者354,000人につき1人である。米国での昆虫媒介性感染の発生源を特定することが、感染リスクのさらなる評価のために必要である。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
米国の媒介昆虫に起因する*T. cruzi*感染を調査するため、供血者間で*T. cruzi*のスクリーニングを行ったところ、米国での土着性感染であると以前報告されてい7例の他に、新しく追加症例16例が確認されたとの報告である。	日本赤十字社は、輸血感染症対策として献血時に海外滞在歴の有無を確認し、帰国(入国)後4週間は献血不適としている。また、シャーガス病の既往がある場合には献血不適としている。日本在住の中南米出身献血者については、厚生労働科学研究「血液製剤の安全性確保と安定供給のための新興・再興感染症の研究」班と共同して検討している。新たに中南米出身者(母親が出身を含む)、通算1カ月以上の中南米滞在歴を有する献血者からの血液は、血漿分画製剤の原料のみ使用する対策を実施することとした。今後も引き続き情報の収集に努める。



ORIGINAL ARTICLE

The United States *Trypanosoma cruzi* Infection Study: evidence for vector-borne transmission of the parasite that causes Chagas disease among United States blood donors

Paul T. Cantey, Susan L. Stramer, Rebecca L. Townsend, Hany Kamel, Karen Ofafa, Charles W. Todd, Mary Currier, Sheryl Hand, Wendy Varnado, Ellen Dotson, Chris Hall, Pamela L. Jett, and Susan P. Montgomery

BACKGROUND: Screening US blood donors for *Trypanosoma cruzi* infection is identifying autochthonous, chronic infections. Two donors in Mississippi were identified through screening and investigated as probable domestically acquired vector-borne infections, and the US *T. cruzi* Infection Study was conducted to evaluate the burden of and describe putative risk factors for vector-borne infection in the United States.

STUDY DESIGN AND METHODS: Blood donors who tested enzyme-linked immunosorbent assay repeat reactive and positive by radioimmunoprecipitation assay, and whose mode of infection could not be identified, were evaluated with a questionnaire to identify possible sources of infection and by additional serologic and hemoculture testing for *T. cruzi* infection.

RESULTS: Of 54 eligible donors, 37 (69%) enrolled in the study. Fifteen (41%) enrollees had four or more positive serologic tests and were considered positive for *T. cruzi* infection; one was hemoculture positive. Of the 15, three (20%) donors had visited a rural area of an endemic country, although none had stayed for 2 or more weeks. All had lived in a state with documented *T. cruzi* vector(s) or infected mammalian reservoir(s), 13 (87%) reported outdoor leisure or work activities, and 11 (73%) reported seeing wild reservoir animals on their property.

CONCLUSION: This report adds 16 cases, including one from the Mississippi investigation, of chronic *T. cruzi* infection presumably acquired via vector-borne transmission in the United States to the previously reported seven cases. The estimated prevalence of autochthonous infections based on this study is 1 in 354,000 donors. Determining US foci of vector-borne transmission is needed to better assess risk for infection.

Chagas disease is caused by the protozoan parasite *Trypanosoma cruzi*, which is usually transmitted by infected triatomine insects during their nocturnal feedings. Non–vector-borne routes of transmission include blood transfusion, organ or tissue transplantation, congenital, laboratory exposure, and ingestion of contaminated food or drink.[1,2] Cases involving all mechanisms of transmission except for the ingestion of contaminated food or drink have been

ABBREVIATIONS: ARC = American Red Cross; BSI = Blood Systems, Inc.; CG = concordant group; DG = discordant group; IFA = immunofluorescent antibody assay; RIPA = radioimmunoprecipitation assay; S/CO = signal-to-cutoff ratio; TESA IB = trypomastigote excreted or secreted antigen immunoblot; USTC = US *T. cruzi* Infection Study.

From the Epidemic Intelligence Service, Office of Surveillance, Epidemiology, and Laboratory Services, and the Division of Parasitic Diseases and Malaria, Center for Global Health, CDC, Atlanta, Georgia; the Scientific Support Office, American Red Cross, Gaithersburg, Maryland; Blood Systems, Inc., Scottsdale, Arizona; the Mississippi State Department of Health, Jackson, Mississippi; the Biology Department, Berry College, Mount Berry, Georgia; and Mississippi Blood Services, Flowood, Mississippi.

Address reprint requests to: Paul T. Cantey, MD, MPH, Division of Parasitic Diseases and Malaria, Center for Global Health, Centers for Disease Control and Prevention, 1600 Clifton Road, MS A-06, Atlanta, GA 30333; e-mail pcantey@cdc.gov.

The opinions expressed in this manuscript are those of the authors and do not represent the opinions of the Centers for Disease Control and Prevention, the American Red Cross, or Blood Systems, Inc.

Received for publication October 10, 2011; revision received December 21, 2011, and accepted January 7, 2012.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2012.03581.x

TRANSFUSION **;**:**–**.

documented in the United States including seven cases of autochthonous, likely vector-borne transmission.[3-9]

The acute phase of infection typically lasts 4 to 8 weeks. Most patients are asymptomatic though some may present with a mild febrile illness. Rarely the patient may develop Romaña's sign, acute myocarditis, or meningoencephalitis. If left untreated, most patients will progress from acute to the chronic phase of infection and will likely remain infected for life. Those who do not develop symptoms and who have a normal physical exam, 12-lead electrocardiogram, and radiologic exam of the chest, esophagus, and colon are considered to have the indeterminate form of chronic infection. Approximately 20% to 30% of patients with the indeterminate form of infection will eventually develop organ damage involving the heart or the gastrointestinal system. This pathologic process can result in a variety of problems including, but not limited to, cardiac arrhythmias, congestive heart failure, sudden cardiac death, achalasia, megaesophagus, prolonged constipation, megacolon, and bowel ischemia.[1] In Latin America, an estimated 12,500 people died in 2006 due to the complications arising from chronic, symptomatic Chagas disease.[2] Approximately two-thirds of these deaths were due to sudden cardiac death, 25% to 30% were due to refractory congestive heart failure, and 10% to 15% were due to thromboembolic events.[2] Bern and colleagues[1] recently reviewed the evaluation and treatment of Chagas disease as applicable to the United States.

Chagas disease diagnostic testing is complex. The World Health Organization criteria for the serologic diagnosis of Chagas disease recommend that an individual has two positive tests before considering the individual infected; however, a single test is acceptable for determining the suitability of a blood unit for transfusion.[10] Diagnosis of *T. cruzi* infection in chronically infected individuals in the United States is based on reactivity to two different serologic tests of different methods and/or target antigens, with due consideration given to the individual's epidemiologic risk for infection.[1,11] The CDC currently uses two tests for the diagnosis of Chagas disease. The immunofluorescent antibody assay (IFA) is a CDC in-house test based on fixed epimastigotes where reactivity at 1-in-32 or greater sample dilutions is defined as a reactive test. The Chagatest recombinant v3.0 enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA, Wiener, Rosario, Argentina) is based on six different recombinant antigens; it is Food and Drug Administration (FDA) cleared for diagnostic use in the United States. The assay cutoff was determined according to the product insert and in usual practice an optical density (OD) of greater than 0.33 is reactive. Additionally, the CDC uses the trypomastigote excreted or secreted antigen immunoblot (TESA IB), which uses a mix of trypomastigote exoantigens.[12] Reactivity to *T. cruzi*-specific transsialidase antigens at 150 to 160 kDa is considered a positive result.[13] In studies outside of the United States, the TESA IB has been shown to be useful for the diagnosis of chronic infection and for the confirmation of blood donors with otherwise inconclusive results.[13,14]

Currently two FDA-approved screening tests for blood donors are available for use in the United States. The *T. cruzi* EIA test system (Ortho-Clinical Diagnostics, Inc., Raritan, NJ) is based on a trypanosome epimastigote parasite lysate. The PRISM Chagas chemiluminescent immunoassay (Abbott, Abbott Park, IL) is based on four hybrid recombinant *T. cruzi* proteins. A repeat-reactive result for either test at a signal-to-cutoff ratio (S/CO) of 1.0 or greater is considered sufficient to discard the donation and to defer the donor from future donations. The radioimmunoprecipitation assay (RIPA), available through Quest Diagnostics (Madison, NJ), is also based on an epimastigote parasite lysate and is used by most blood centers to confirm repeat-reactive screening results.[15,16] Reactivity corresponding to envelope surface antigens at 72 and 90 kDa is considered a positive result confirming antibody reactivity.[17]

In January 2007, the American Red Cross (ARC) and Blood Systems, Inc. (BSI) implemented the Ortho EIA for screening of each blood donation for antibodies to *T. cruzi*. Universal blood donation screening in the United States has identified a prevalence of approximately one serologically confirmed-positive donor for every 28,000 donations screened.[18,19] In June 2007, two blood donors in rural Mississippi were identified by Mississippi Blood Services as *T. cruzi* antibody confirmed (meaning repeat reactive on Ortho EIA and confirmed by RIPA), but neither donor had identifiable risk factors typically associated with *T. cruzi* infection (i.e., birth in or travel to an endemic country or maternal risk). The CDC was invited by the Mississippi State Department of Health to assist with the investigation of these suspected autochthonous cases. Because of the results of the investigation of these two blood donors and the fact that vector-borne transmission has been previously reported in the United States, we further investigated the potential for autochthonous transmission in *T. cruzi* antibody–confirmed blood donors who had not lived outside the United States. The identification of such donors could be a means to increase the detection of chronic *T. cruzi* infection in the United States and to aid in the identification of risk factors for vector-borne transmission in this country. Therefore, the US *T. cruzi* Infection Study (USTC) was designed to evaluate the burden of, and putative risk factors for, vector-borne acquisition of infection in the United States.

MATERIALS AND METHODS

Donor selection and testing algorithms

All ARC and BSI blood donors presenting since January 29, 2007, were screened with the licensed Ortho *T. cruzi*

EIA as part of routine screening for blood-borne pathogens; prior use of the Ortho EIA occurred at the Los Angeles region of the ARC as part of a clinical trial (under an investigational new drug protocol, for test kit licensure). For each Ortho EIA repeat-reactive donor, the Ortho EIA and RIPA were repeated from a separately collected sample from the same donation to exclude sample contamination or other sources of error that may have occurred during the test-of-record testing. For the purposes of overall analysis of screening test efficacy, donors testing repeat reactive (test-of-record) were invited to participate in a donor follow-up study including those with RIPA confirmed–positive results, defined as cases for this separate donor follow-up study, and those with RIPA-negative or indeterminate results, defined as controls for this separate donor follow-up study (these results are not included in this report). Routine donor follow-up included collecting an additional sample for repeat Ortho EIA screening and RIPA performed on all samples; in addition, RIPA-positive donors had samples collected for molecular (polymerase chain reaction [PCR]) and infectivity (hemoculture) studies performed by in-house methods at the ARC (PCR data not included in this report).[20] After the FDA licensure of the Abbott PRISM Chagas chemiluminescent immunoassay, all index and follow-up samples from EIA-reactive donors were also tested retrospectively. Follow-up of all Ortho EIA-reactive donors also included responding to a questionnaire covering donor demographics and *T. cruzi* risk factors.

RIPA-positive donors for whom no risk factors for *T. cruzi* infection were identified from the initial follow-up questionnaire for the separate donor follow-up study were invited to participate in USTC. Participating donors were asked to complete a separate USTC questionnaire administered by the same study personnel who administered the original follow-up questionnaire and to undergo testing beyond that described as part of follow-up. Spanish only–speaking donors were excluded from the study since these individuals likely represented donors whose infection did not originate in the United States. The USTC questionnaire gathered information about outdoor activities, including time frames and geographic location, structures on property where triatomines could establish colonies, exposure to triatomines, exposure to wild and domesticated animals that have been found to serve as reservoirs of infection, and exposure to foods that have been associated with food-borne transmission of infection in endemic countries in Latin America. In addition to the testing already described and performed by the blood center testing laboratories, as part of USTC, the CDC performed its in-house IFA, the Wiener EIA, and its in-house TESA IB. Each donor was tested only once by the CDC.

Human subject approvals and statistical considerations

The protocol was approved by the CDC and ARC institutional review boards. The ARC institutional review board served as the institutional review board of record for BSI. Because the purpose of the study was to generate hypotheses, no sample size calculations were performed and investigators attempted to enroll any individual who qualified. Results for all testing and follow-up questionnaire data were collated by the CDC. Descriptive statistics were calculated in computer database software (Microsoft Excel, Microsoft Corp., Redmond, WA).

RESULTS

Mississippi case reports leading to the USTC study

The first of the two donors (Donor A) was 44 years old at the time of the relevant blood donation in 2007. He had had one episode of syncope in the past, although this temporally related to an acute myocardial infarction in 2004. He had received 2 units of red blood cells (RBCs) at the time of his quadruple coronary artery bypass, but both of his donors had nonreactive Ortho EIA test results. He had not received an organ or tissue transplant and he had never traveled to an endemic country. In fact, he had never traveled outside the United States. His mother had never lived in an endemic area. His electrocardiogram did not reveal any conduction abnormalities. Epidemiologic investigation revealed that he had lived in the rural South all of his life and may have lived in substandard housing during his youth. He had multiple outdoor activities that could bring him in contact with triatomine bugs at night, including hunting and working outside at night in a wooded area under a bright light. Additionally, he field dressed animals killed while hunting without using gloves. Moreover, he reported exposure on his property to multiple mammalian species that have been shown to be potential reservoirs of the *T. cruzi* parasite in the United States, including opossums, raccoons, skunks, and armadillos. Investigation of his property revealed a single adult *Triatoma sanguisuga*, a species of triatomine bug recognized to be a vector of *T. cruzi*.

Donor A's index and follow-up serum samples were repeat reactive by the Ortho EIA (S/CO, 4.5) and RIPA positive. Both blood samples were sent to the CDC and were IFA positive with titers of 64 for the first sample and 32 for the second sample. Both samples were also positive on the Wiener EIA with raw OD values of 0.709 and 0.350 (0.33 OD cutoff). All testing performed on his family members as well as his hunting dogs was negative. PCR performed on the *T. sanguisuga* was positive for *T. cruzi*.

The laboratory testing confirmed that Donor A was antibody positive and likely infected with *T. cruzi*. Based on his presentation he was in the indeterminate form of

chronic infection. Although an infected vector was found on his property and the donor was at risk for nocturnal exposure to the vector based on his reported activities, it is unclear exactly when and where he was infected. He was offered treatment but declined.

Donor B was 64 years old at the time of the relevant blood donation. He had no concerning cardiac or gastrointestinal symptoms. He had never received blood products, organs, or tissues. He had visited the border region of Mexico while working in Texas but had never spent the night outside the United States. His mother had never lived in an endemic country. Epidemiologic investigation revealed that he had grown up in rural Louisiana, possibly in substandard housing. He also reported activities that could result in exposure to the vector at night, including hunting and working in the barn on his property. Like Donor A, he reported exposure to multiple potential mammalian reservoir species including opossums, raccoons, and armadillos. He also thought he recognized the triatomine bug, and investigation of his property also revealed a single adult specimen of *T. sanguisuga*.

Donor B's index and follow-up serum samples were repeat reactive on Ortho EIA (S/CO, 1.5) and RIPA positive. Both samples were negative by the CDC IFA. The index sample was negative by the Wiener EIA but the second was borderline negative with an OD of 0.270. PCR performed on the *T. sanguisuga* was negative for *T. cruzi*.

The laboratory testing in this case was more difficult to interpret. Blood center testing confirmed antibody reactivity in Donor B; however, the CDC's testing was inconclusive, and thus the infection status for Donor B could not be determined, although like Donor A, he had risk factors that could suggest vector-borne transmission. He did not seek medical evaluation or treatment.

USTC

From August 31, 2006, to April 30, 2010, a total of 1084 donors were identified by ARC and BSI as *T. cruzi* antibody confirmed from screening approximately 29 million donations. This is a prevalence of 1 in 26,700 donations screened for these two organizations, which represent greater than 50% of collected blood in the United States. Of the 292 (26.9%) RIPA-positive donors who were participants in the donor follow-up study, 56 were eligible for the USTC; 39 (70%) agreed to participate. Two of the 39 enrolled donors were excluded after testing was complete because it was determined that they had mothers from endemic Latin American countries, leaving 37 donors in the study from a total of 54 eligible donors. The 37 donors were divided into two groups based on their USTC testing results. The concordant group (CG) consisted of *T. cruzi* antibody–confirmed donors with at least two positive CDC tests (IFA, Wiener EIA, and/or TESA IB), including one donor who had a borderline positive Wiener EIA. In contrast, the *T. cruzi* antibody–confirmed donors in the discordant group (DG) had no positive results when tested at the CDC. The CG included 15 (41%) donors, whereas 22 (59%) were classified in the DG. The median age of CG donors was 42 years (range, 21-65 years), and the median age of DG donors was 45 years (17-77 years). Other demographic information for both groups is shown in Table 1.

The mean Ortho EIA S/CO test-of-record result for each CG donor at index is shown in Table 2 in order of decreasing S/CO values. Table 2 also provides all subsequent testing data by combining individual results by assay for each donor's index test-of-record, repeat index (from an independent sample), and follow-up sample test result. Thus, a result of three of three indicates that all samples (index test-of-record, independent index, and follow-up) were all reactive; values of greater than three indicate multiple follow-up samples. All testing was performed in singlet with the exception of the Ortho and Abbott screening assays, which are reported as mean values of three results: initial reactive and duplicate retest values. It is important to note that all 15 CG donors had Ortho EIA repeat-reactive results on all subsequent testing. All donors except donor CG14 had a positive RIPA for each sample tested. Nine of the 15 CG donors had a positive titer by IFA; the donors with a negative IFA were donors CG9-11 and donors CG13-15. All 15 donors had a positive or borderline positive Wiener EIA and a positive or weakly positive TESA IB. The Abbott PRISM Chagas assay, which became available after the initiation of this study, was performed on 14 of the 15 CG donors. All tested donors were PRISM repeat reactive except Donor CG14. Only Donor CG4 had a positive hemoculture.

Similar to CG donors, the DG donors were tested on multiple occasions by the Ortho EIA and RIPA. Of note, although 21 of 22 donors had at least one repeat-reactive specimen on the Ortho EIA, only Donors DG2 and DG4 had consistently repeat-reactive results on all specimens tested (Table 3). Similarly, although all donors had a least one positive RIPA, only Donor DG4 was consistently RIPA positive on all specimens. Note that DG22 was initially identified as Abbott PRISM reactive (during a clinical trial) and was included as an eligible donor because of his RIPA positivity (albeit Ortho EIA nonreactive). All DG donors

TABLE 1. Basic demographic information by group*

Demographic	CG (n = 15)	DG (n = 22)
Female sex	9 (60)	7 (32)
Non-Hispanic white	10 (67)	19 (90)
Non-Hispanic black	0 (0)	2 (9)
Hispanic	5 (33)	1 (5)
Born in the United States or its territories	15 (100)	22 (100)
Mother born in endemic country	0 (0)	0 (0)

* Data are reported as number (%).

TABLE 2. USTC testing results for the CG donors*

ID	Index Ortho EIA mean S/CO	Number RR Ortho/number tested	Number positive RIPA/number tested	IFA titer	Wiener EIA raw OD	TESA IB	PRISM mean S/CO
CG1	6.2	4/4	2/2	128	3.5	Pos	11.2
CG2	5.1	3/3	2/2	64	3.4	Pos	10.5
CG3	4.7	4/4	2/2	256	3.1	Pos	5.2
CG4	4.5	4/4	4/4	32	2.8	Pos	6.8
CG5	4.3	5/5	4/4	32	2.4	Pos	7.3
CG6	3.4	2/2	2/2	128	2.3	Pos	6.5
CG7	3.4	3/3	3/3	32	2.4	Pos	7.5
CG8	3.4	3/3	3/3	32	3.5	Pos	3.7
CG9	2.9	3/3	3/3	≤16	0.55	Pos	3.1
CG10	2.8	3/3	3/3	≤16	0.87	Pos	NA
CG11	2.5	3/3	3/3	≤16	0.66	W. Pos	2.7
CG12	2.5	4/4	4/4	64	0.92	Pos	2
CG13	2.1	3/3	3/3	≤16	2.1	W. Pos	1.9
CG14	1.4	3/3	2/3	≤16	1.1	Pos	0.75†
CG15	1.1	3/3	3/3	≤16	0.33‡	W. Pos	1.2

* Ortho EIA is the Ortho *T. cruzi* ELISA test system, and a S/CO ≥ 1.0 is a reactive test; IFA is the CDC in-house IFA, reactivity at a sample dilution of ≥32 is a reactive test; Wiener EIA is the Chagatest ELISA recombinant v3.0, and a raw OD of >0.33 is a reactive test; PRISM is the Abbott PRISM Chagas chemiluminescent immunoassay, and a S/CO ≥1.0 is a reactive test.
† Nonreactive samples were not run in triplicate so this is a single not a mean value.
‡ This result is borderline positive.
NA = not available; Pos = positive; RR = repeat reactive; W. Pos = weakly positive.

TABLE 3. USTC testing results for the DG donors*

ID	Index Ortho EIA mean S/CO	Number RR Ortho/number tested	Number positive RIPA/number tested	IFA titer	Wiener EIA Raw OD	TESA IB	PRISM S/CO
DG1	3.4	3/4	1/3	≤16	≤0.33	Neg	0.21
DG2	2.8	4/4	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.06
DG3	2.5	4/5	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.15
DG4	1.9	5/5	5/5	≤16	≤0.33	Neg	0.42
DG5	1.8	3/4	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.17
DG6	1.8	1/5	2/5	≤16	≤0.33	Neg	0.06
DG7	1.7	2/4	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.10
DG8	1.4	3/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.11
DG9	1.3	2/5	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.13
DG10	1.3	3/4	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.15
DG11	1.3	1/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.07
DG12	1.3	1/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.15
DG13	1.2	4/5	1/5	≤16	≤0.33	Neg	0.07
DG14	1.2	3/5	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.17
DG15	1.2	2/5	1/5	≤16	≤0.33	Neg	0.48
DG16	1.2	2/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.10
DG17	1.2	3/4	1/3	≤16	≤0.33	Neg	NA
DG18	1.1	1/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.06
DG19	1.1	1/5	1/5	≤16	≤0.33	Neg	0.08
DG20	1.0	2/4	2/4	≤16	≤0.33	Neg	0.06
DG21	1.0	1/5	1/5	≤16	≤0.33	Neg	0.05
DG22	0.1	0/4	1/4	≤16	≤0.33	Neg	0.81

* Ortho EIA is the Ortho *T. cruzi* ELISA test system, and a S/CO ≥1.0 is a reactive test; IFA is the CDC in-house IFA, and reactivity at a sample dilution of ≥32 is a reactive test; Wiener EIA is the Chagatest ELISA recombinant v3.0, and a raw OD >0.33 is a reactive test; PRISM is the Abbott PRISM Chagas chemiluminescent immunoassay, and a S/CO ≥1.0 is a reactive test.
RR = repeat reactive; NEG = negative; NA = not available.

were IFA, Wiener EIA, and TESA IB negative; the Abbott PRISM Chagas assay was nonreactive for all 21 donors for whom the test was performed. All 22 DG donors had a negative hemoculture result.

The risk factors for acquisition of *T. cruzi* infection among CG donors are shown in Table 4. Of note, no donor had a mother from an endemic Latin American country and no one worked with the parasite in a laboratory. Two donors had received blood transfusions in the United States (CG1 and CG10). No donor received human tissue or organs in the United States or blood products, tissue, or organs in an endemic Latin American country. Eleven

TABLE 4. Risk factors for Chagas disease in the CG donors (n = 15)*

Mother born in endemic country	0 (0)
Received blood product in United States†	2 (13)
Received tissue or organ in United States	0 (0)
Received blood, tissue, or organ outside United States	0 (0)
Travel to endemic country	8 (53)
Mexico only	6 (40)
Guatemala, Belize	1 (7)
Costa Rica, Panama, Mexico	1 (7)
Travel >2 weeks in an endemic country	0 (0)
Travel to rural area in an endemic country	3 (20)
Lived abroad in endemic country	0 (0)
Worked in a laboratory with the parasite	0 (0)

* Data are reported as number (%).
† One donor received a transfusion in 1971 in California, and one donor received a transfusion in Florida in 1987.

TABLE 5. Potential risk factors for vector-borne *T. cruzi* infection in the United States in the CG donors (n = 15)*

Ever resided in a state with V/IR	15 (100)
In rural area within this state	11 (73)
Ever worked outdoors in state with V/IR	7 (47)
In the woods	5 (33)
At night	4 (27)
Outdoor leisure activity in state with V/IR	10 (67)
Hunted	3 (20)
Camped	6 (40)
Gardened	4 (27)
Outdoor leisure or work activity in state with V/IR	13 (87)

* Data are reported as number (%).
V/IR = *T. cruzi* vector or infected mammalian reservoir.

donors had traveled outside the United States, although only eight had traveled to an endemic Latin American country. Three donors (CG1, CG4, and CG13) had traveled to a rural area in an endemic Latin American country; however, no donor had stayed in the area for more than 2 weeks. It is important to note that donor CG4, who was hemoculture positive, had spent less than a week in an endemic Latin American country and although the donor reported spending time in rural areas, the donor did not spend the night in those areas.

Three (20%) of the 15 CG donors reported having seen a triatomine insect before, although only one (7%) reported having been bitten by a triatomine. Potential for a CG donor to have been exposed to the triatomine vector based on residence and outdoor activities is shown in Table 5. All CG donors had resided in a state in which the vector or an infected mammalian reservoir has been documented[21] (see Table 6 for list of these states), and 11 (73%) reported having lived in rural areas of such states. In addition to residence in these states, seven (47%) donors had worked outdoors; 10 (67%) donors had participated in outdoor leisure activities, such as hunting, camping, and gardening; and 13 (87%) donors had worked outdoors or participated in outdoor leisure activities in a state with

TABLE 6. US states with documented presence of the vector for *T. cruzi* or infected reservoir mammalian species[21]

State	Vector	Infected reservoir
Alabama	Yes	Yes
Arizona	Yes	Yes
Arkansas	Yes	
California	Yes	Yes
Colorado	Yes	
Florida	Yes	Yes
Georgia	Yes	Yes
Hawaii	Yes	
Illinois	Yes	
Indiana	Yes	
Kansas	Yes	
Kentucky	Yes	Yes
Louisiana	Yes	Yes
Maryland	Yes	Yes
Mississippi	Yes	Yes
Missouri	Yes	Yes
Nevada	Yes	
New Jersey	Yes	
New Mexico	Yes	Yes
North Carolina	Yes	Yes
Ohio	Yes	
Oklahoma	Yes	Yes
Pennsylvania	Yes	
South Carolina	Yes	Yes
Tennessee	Yes	Yes
Texas	Yes	Yes
Utah	Yes	
Virginia	Yes	Yes

documented vectors or infected reservoirs. Six (40%) donors reported a structure on the property that has the potential for colonization by triatomines; these included chicken coops, barns, stables, and woodpiles. Eleven (73%) donors reported seeing wild animals on their property that have been shown to serve as reservoirs of *T. cruzi* infection; these included house mice, squirrels, opossums, raccoons, bats, wood rats, skunks, armadillos, coyotes, and gray foxes.[21] All CG donors reported exposure to domestic animals on their property that have been shown to serve as reservoirs of *T. cruzi* infection; these included dogs, cats, cows, and guinea pigs.[21] Finally, two (13%) CG donors reported eating or drinking each of the following foods that have been associated with foodborne outbreaks in endemic countries outside of the United States: açaí berries, raw imported sugarcane juice, and fresh squeezed juice from an unregulated vendor.

DISCUSSION

The USTC study is the first to document the burden of vector-borne autochthonous *T. cruzi* infection in the United States. Before this study, only seven cases of vector-borne *T. cruzi* transmission were reported in the United States, even though the vectors capable of transmitting the parasite have been identified in 28 states and infected reservoir mammals have been identified in 17 states

(Table 6).[21] This report adds 16 additional autochthonous cases to the list of documented cases, including one case from a blood donor in Mississippi and 15 cases among the CG donors identified through blood donation screening at the ARC and BSI. It is important to note that most of the previously reported autochthonous cases were acute infections, whereas those cases that have been identified among blood donors represent apparently asymptomatic chronic infections. These cases would most likely have been transmitted by the vector. Putative risk factors for US vector-borne transmission of *T. cruzi* infection, which need further investigation, include a history of living in a rural area where the vector or infected mammalian reservoir is found and a history of outdoor activities, particularly nocturnal activities, in such an area.

Vector-borne transmission does not appear to be common in the United States. Extrapolating USTC data to the entire RIPA-positive donor population, one would predict that 82 donors (7.5% of RIPA-positive donors) would be classified as CG donors. This extrapolation results in an estimated prevalence of one US vector-borne case per 354,000 donations screened over the time period of study. This figure may underrepresent or overrepresent the true prevalence due to autochthonous vector-borne transmission, but this report is the first estimate of prevalence in asymptomatic individuals. Thus, these findings have both clinical and blood safety implications.

The donors in this study fell into two categories of testing results: concordant results and discordant results. Fourteen of 15 CG donors were consistently reactive on all tests except for the CDC IFA, which appears to have lower sensitivity than the other tests. We believe that the concordance between serologic assays indicates that all 15 donors within the CG group have specific *T. cruzi* antibody reactivity and represent either past or present infection. Data available for the Ortho EIA, RIPA, the CDC IFA, the Wiener EIA, and the TESA IB suggest the sensitivity for each test to be 99, 100, 94, 99, and 100%, respectively, and the specificity to be 99, 100, 95, 99, and 100%, respectively, as defined by published studies[22,23] or study results included in the product's package insert[24,25] or determined by the CDC.[26] These numbers need to be interpreted with caution, as the performance of each test varies depending on the population in which the test is used. Based on the low likelihood of simultaneous false positivity occurring in four to five of the serologic tests performed, it is highly probable that all 15 CG donors had been infected by *T. cruzi*.

The DG donors were uniformly negative on all CDC tests and the Abbott PRISM Chagas assay. Both Ortho EIA and RIPA assays were reactive for 21 of 22 donors. More than half of the Ortho S/CO ratios from the index and follow-up blood samples were 1.3 or less, and the Ortho EIA and the RIPA were not consistently positive on repeated testing. Although all donors were RIPA positive at least once, and some several times, the antibody reactivity is possibly not specific to *T. cruzi* infection and may instead be due to cross-reactivity from another infection or due to non–parasite-related antigens in the tests (biologic false positivity) or due to sample cross-contamination of the samples used for the index test-of-record testing. This report highlights the complexity of making a diagnosis of *T. cruzi* infection based solely on antibody testing in the absence of known risk factors. As there still is no gold standard serologic test for *T. cruzi* infection, including the latest FDA-licensed screening tests, an accurate diagnosis can only be made based on a testing algorithm that involves multiple tests (ideally using a combination of antigen sources) and risk information.

Defining what the DG group represents is challenging. Possibilities include that all DG donors had false-positive RIPA and Ortho EIA testing results, and no donor was ever infected or exposed. Other possible explanations for the discordant results include that some of the DG donors may have been exposed to *T. cruzi* but never infected or that some were infected but the antibody response to their infections was not detectable by CDC testing. This uncertainty hampers our ability to evaluate the diagnostic performance of the RIPA, as we cannot say with certainty that the DG donors were not infected, and it prevents us from using the DG donors as controls to evaluate risk factors for US vector-borne transmission in a quantitative manner.

Determining whether or not all the CG donors actually acquired their infections in the United States via an infected vector is almost impossible and the conclusion that autochthonous infection occurred can only be reached after eliminating other potential sources. There is the possibility that two CG donors contracted their infections from transfusions they received in the United States. However, there are only five documented US cases of transfusion-associated transmission and an additional two from Canada in the peer-reviewed literature,[27] although transfusion may result in asymptomatic infection that would likely remain undocumented. All seven recipients were immunosuppressed, making them more likely to become symptomatically infected. Six recipients received platelets (PLTs);[28] no implicated product was identified for one recipient. PLTs are believed to carry a higher risk of transmission than RBCs due to similar buoyant densities of PLTs and trypomastigotes, parasite survival during the storage conditions used for PLTs versus RBC units, and the underlying immunosuppression of recipients who receive PLTs.[24] Donor CG10 received RBCs in 1987. Donor CG1, who received a transfusion in 1971, could not recall what type of product was transfused. Although eight CG donors reported a history of travel to Chagas-endemic countries, there is no documented case of transmission in a traveler who had visited an endemic Latin American country for

less than 5 months.[25] It is unlikely that any of the donors would have acquired the infection during their visits, as only three donors visited rural areas and no donor had visited for longer than 2 weeks. It is important to note that Donor CG4, who was hemoculture positive, had spent less than a week in an endemic country and although the donor reported spending time in rural areas, the donor did not spend the night in those areas, which is when the vector feeds. Excluding the four blood donors who had traveled to rural endemic countries for less than 2 weeks, who had received blood products in the United States, or both would still leave 11 CG donors who became infected through vector-borne transmission domestically. Performing similar calculations as described earlier in the discussion suggests that 5.5% of RIPA-positive donors would be expected to have acquired the infection from the vector in the United States, which would represent one case per 485,000 donations.

Although vector-borne transmission of Chagas disease clearly occurs in the United States, with the first documentation of such transmission dating back to the 1950s, the extent to which such infections occur has not been established. Determining the extent of domestic transmission would be useful in the design of blood donor screening algorithms that rely on screening questions to minimize the need to test donors every time they donate and would assist the clinical evaluation of patients who present with nonischemic cardiomyopathy. This study was the first to report potential epidemiologic factors for vector-borne exposure risk in asymptomatic chronic carriers who present to donate blood; however, further detailed investigations are needed. As *T. cruzi* vectors in the United States live predominantly in a sylvatic cycle,[21] it was not surprising to find that all CG donors had lived in states with documented vectors or infected reservoirs with 73% living in rural areas and 87% participating in outdoor work or leisure activities in such states. The presence of mammalian reservoir species on the donor's property would suggest that these individuals lived in areas with the potential for the establishment of a sylvatic or peridomestic cycle. A limitation of this study is that when the donors became infected cannot be determined. The presence of a sylvatic cycle, a colonized structure, or even an infected vector on one's current property does not indicate that the donor was infected at that location.

Future studies are needed to determine the foci of vector-borne transmission in the United States. This will require the identification of infected vector, mammalian, and human populations. Once foci are identified, risk factors for infection can be studied. As risk of infection with *T. cruzi* likely increases with repeated exposure over long periods of time, retrospective quantification of lifetime involvement in potential risk activities will be difficult and will limit the ability to accurately assess risk. Our study indicates that attention should be given to habitual activities that occur outdoors and at night in these foci as well as investigating the housing history of each individual. It will also be important to determine the risk of infection from short-term travel to endemic areas in Latin America, particularly as this could influence how blood donors are screened for infection.

ACKNOWLEDGMENTS

The authors acknowledge Frank Steurer at the CDC for supporting the laboratory activities needed to complete this study and Megan Nguyen and Melanie Proctor at the ARC for performing the parasitemic blood donor testing as part of the donor follow-up study.

CONFLICT OF INTEREST

The authors declare that they have no conflicts of interest relevant to the manuscript submitted to TRANSFUSION.

REFERENCES

1. Bern C, Montgomery SP, Herwaldt BL, Rassi A Jr., Marin-Neto JA, Dantas RO, Maguire JH, Acquatella H, Morillo C, Kirchhoff LV, Gilman RH, Reyes PA, Salvatella R, Moore AC. Evaluation and treatment of Chagas disease in the United States: a systematic review. JAMA 2007;298:2171-81.
2. Rassi JA, Rassi A, Marin-Neto JA. Chagas disease. Lancet 2010;375:1388-402.
3. Woody NC, Woody HB. American trypanosomiasis (Chagas' disease): first indigenous case in the United States. J Am Med Assoc 1955;159:676-7.
4. Anonymous. Found: two cases of Chagas disease. Texas Health Bull 1956;9:11-3.
5. Schiffler RJ, Mansur GP, Navin TR, Limpakarnjanarat K. Indigenous Chagas' disease (American trypanosomiasis) in California. JAMA 1984;251:2983-4.
6. Ochs DE, Hnilica VS, Moser DR, Smith JH, Kirchhoff LV. Postmortem diagnosis of autochthonous acute chagasic myocarditis by polymerase chain reaction amplification of a species-specific DNA sequence of Trypanosoma cruzi. Am J Trop Med Hyg 1996;54:526-9.
7. Herwaldt BL, Grijalva MJ, Newsome AL, McGhee CR, Powell MR, Nemec DG, Steurer FJ, Eberhard ML. Use of polymerase chain reaction to diagnose the fifth reported US case of autochthonous transmission of Trypanosoma cruzi, in Tennessee, 1998. J Infect Dis 2000;181:395-9.
8. Dorn PL, Perniciaro L, Yabsley MJ, Roellig DM, Balsamo G, Diaz J, Wesson D. Autochthonous transmission of Trypanosoma cruzi, Louisiana. Emerg Infect Dis 2007;13:605-7.
9. Kjos SA, Snowden KF, Olson JK. Biogeography and Trypanosoma cruzi infection prevalence of Chagas disease vectors in Texas, USA. Vector Borne Zoonotic Dis 2009;9: 41-50.

10. WHO. WHO consultation on international biological reference preparations for Chagas disease. Geneva: WHO; 2007.
11. Bern C. Antitrypanosomal therapy for chronic Chagas' disease. NEJM 2011;364:2527-34.
12. Jazin EE, Luquetti AO, Rassi A, Frasch AC. Shift of excretory-secretory immunogens of Trypanosoma cruzi during human Chagas' disease. Infect Immun 1991;59: 2189-91.
13. Umezawa ES, Nascimento MS, Kesper N Jr., Coura JR, Borges-Pereira J, Junqueira AC, Camargo ME. Immunoblot assay using excreted-secreted antigens of Trypanosoma cruzi in serodiagnosis of congenital, acute, and chronic Chagas' disease. J Clin Microbiol 1996;34:2143-7.
14. Silveira-Lacerda EP, Silva AG, Junior SF, Souza MA, Kesper N, Botelho-Filho A, Umezawa ES. Chagas' disease: application of TESA-blot in inconclusive sera from a Brazilian blood bank. Vox Sang 2004;87:204-7.
15. Leiby DA, Wendel S, Takaoka DT, Fachini RM, Oliveira LC, Tibbals MA. Serologic testing for Trypanosoma cruzi: comparison of radioimmunoprecipitation assay with commercially available indirect immunofluorescence assay, indirect hemagglutination assay, and enzyme-linked immunosorbent assay kits. J Clin Microbiol 2000;38:639-42.
16. Winkler MA, Brashear RJ, Hall HJ, Schur JD, Pan AA. Detection of antibodies to Trypanosoma cruzi among blood donors in the southwestern and western United States. II. Evaluation of a supplemental enzyme immunoassay and radioimmunoprecipitation assay for confirmation of seroreactivity. Transfusion 1995;35:219-25.
17. Kirchhoff LV, Gam AA, Gusmao RA, Goldsmith RS, Rezende JM, Rassi A. Increased specificity of serodiagnosis of Chagas' disease by detection of antibody to the 72- and 90-kilodalton glycoproteins of Trypanosoma cruzi. J Infect Dis 1987;155:561-4.
18. Bern C, Montgomery SP, Katz L, Caglioti S, Stramer SL. Chagas disease and the US blood supply. Curr Opin Infect Dis 2008;21:476-82.
19. Stramer SL, Townsend RL, Foster A, Krystif E, Leiby DA, Brodsky P, Rouault C, Lenes A, Dodd Y. Experience with selective testing for antibody to Trypanosoma cruzi following validation using universal testing [abstract]. Vox Sang 2010;99:313-14.
20. Leiby DA, Herron RM Jr., Garratty G, Herwaldt BL. Trypanosoma cruzi parasitemia in US blood donors with serologic evidence of infection. J Infect Dis 2008;198: 609-13.
21. Bern C, Kjos S, Yabsley MJ, Montgomery SP. Trypanosoma cruzi and Chagas' disease in the United States. Clin Microbiol Rev 2011;24:655-81.
22. Otani MM, Vinelli E, Kirchhoff LV, del Pozo A, Sands A, Vercauteren G, Sabino EC. WHO comparative evaluation of serologic assays for Chagas disease. Transfusion 2009;49: 1076-82.
23. Umezawa ES, Luquetti AO, Levitus G, Ponce C, Ponce E, Henriquez D, Revollo S, Espinoza B, Sousa O, Khan B, da Silveira JF. Serodiagnosis of chronic and acute Chagas' disease with Trypanosoma cruzi recombinant proteins: results of a collaborative study in six Latin American countries. J Clin Microbiol 2004;42:449-52.
24. Ortho-Clinical Diagnostics, Inc. *Ortho* T. cruzi *ELISA test system*. Raritan, NJ: Ortho-Clinical Diagnostics, Inc.; 2006.
25. Wiener Laboratories. Chagatest ELISA recombinant v.3.0. Rosario, Argentina: Wiener Laboratories; 2000.
26. Cassandra D, Steurer F, Czaicki N, Todd C. Determination of the sensitivity and specificity of three serodiagnostic assays for Chagas disease by latent class analysis [abstract]. Am J Trop Med Hyg 2011;85:256.
27. Blood donor screening for chagas disease—United States, 2006-2007. MMWR Morb Mortal Wkly Rep 2007;56: 141-3.
28. Saez-Alquezar A, Otani MM, Sabino EC, Ribeiro-dos-Santos G, Salles N, Chamone DF. Evaluation of the performance of Brazilian blood banks in testing for Chagas' disease. Vox Sang 1998;74:228-31. ◘

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 7. 18	該当なし	

一般的名称	新鮮凍結人血漿	研究報告の公表状況	Stramer L, Notari EP, Townsend L, Custer B, Kamel H, Busch P, Dodd Y. 32nd International congress of the ISBT; Cancun, Mexico, July 7-12, 2012.	公表国
販売名（企業名）	新鮮凍結血漿-LR「日赤」（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」120（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」240（日本赤十字社） 新鮮凍結血漿-LR「日赤」480（日本赤十字社）			米国

研究報告の概要

○米国の供血者における*Trypanosoma cruzi*新規感染の証拠なし：4年間の研究

背景：2007年、米国赤十字社（ARC）及びブラッドシステムズ（BSI）は*T. cruzi*抗体の供血者全数検査を実施した。供血者の陽性率は1：25,000であった。しかし250人以上の受血者の追跡調査では、1人の陽性確定供血者からの血液の受血者2人のみが陽性であった。供血者の新規*T.cruzi*感染はないという予備データに基づき、ARCとBSIは、一度*T.cruzi*抗体検査が陰性であれば、将来の全ての供血を適格であるとする選択的抗体検査を許可するFDAの政策を検証した。

方法：全数検査が4つの地域（南部及び中部カルフォルニア、テキサス州、オクラホマ州、ミシシッピ州、及びルイジアナ州を含む、3つのARCと1つのBSI地域）で維持される一方で、残りのARCとBSIの地域は選択的検査に変更された。いずれも*T.cruzi*のハイリスクをかかえる地域である。現在の米国のHIVとHCVの残存リスクと同等のリスクであるというためには、5年間の献血者の観察期間の総合計500万人・年、最初と最後の供血の間隔の平均1.9年という条件において、わずか4人までの抗体陽転しか許されない。（95％信頼限界の上限は、研究サイトで2.4人/100万人・年、全ARC/BSIサイトで1人未満/200万人・年）。「陽転」は、研究期間において前回ELISA陰性、今回Ortho-ELISA繰り返し陽性、かつ放射性免疫沈降法（RIPA）陽性と定義した。

結果：4年間の研究において、422万人の複数回供血者が1.435年の平均供血間隔で606万人・年追跡され、抗体陽転した供血者はいなかった（95％限界の上限は0.061/100,000人年または1未満/100万人年の発生率）。4年の研究中、前回の供血がELISAで陰性であったRIPA陽性供血者が22件確認された；さらなるサンプリングにおける抗体陽性は断続的で、40日以上4年間の追跡調査中に完全に抗体陽転化することはなく、全てのELISAサンプル/カットオフ値は安定していた（1件の高値を除いて全て2.0未満）。PCRや培養により寄生虫血症となった供血者はいなかった。よってこれら22供血者は偽陽性または遠い過去での初感染であったと思われる。

結論：4年の研究と、観察された新規感染率がゼロであることに基づき、米国において、初回陰性結果に基づく選択的検査は、全数検査に匹敵する安全性を提供する。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

新鮮凍結血漿-LR「日赤」
新鮮凍結血漿-LR「日赤」成分採血
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480

血液を介するウイルス、細菌、原虫等の感染
vCJD等の伝播のリスク

報告企業の意見	今後の対応
供血者における*Trypanosoma cruzi*感染発生率の4年間の調査で、422万人の同種複数回供血者が1.435年の平均供血間隔で606万人年追跡されたが、*T.cruzi*抗体が陽転化した供血者はいなかった。FDAが承認しているsingle negative検査結果の選択的T.cruzi抗体検査は、米国においてユニバーサル検査に匹敵する安全性があることが分かったとの報告である。	日本赤十字社は、輸血感染症対策として献血時に海外滞在歴の有無を確認し、帰国（入国）後4週間は献血不適としている。また、シャーガス病の既往がある場合には献血不適としている。日本在住の中南米出身献血者については、厚生労働科学研究「血液製剤の安全性確保と安定供給のための新興・再興感染症の研究」班と共同して検討している。新たに中南米出身者（母親が出身を含む）、通算1カ月以上の中南米滞在歴を有する献血者からの血液は、血漿分画製剤の原料のみ使用する対策を実施することとした。今後も引き続き情報の収集に努める。

5D-S43-03

NO EVIDENCE OF *TRYPANOSOMA CRUZI* INCIDENCE IN UNITED STATES BLOOD DONORS: A 4-YEAR STUDY

Stramer L[1], Notari EP[2], Townsend L[1], Custer B[3], Kamel H[4], Busch P[3], Dodd Y[2]
[1]American Red Cross/Scientific Support Office, Gaithersburg, MD, United States of America [2]American Red Cross/Holland Laboratory, Rockville, MD, United States of America [3]Blood Systems Research institute, San Francisco, CA, United States of America [4]United Blood Services/Blood Systems, inc., Scottsdale, AZ, United States of America

Background: In 2007, the American Red Cross (ARC) and Blood Systems, inc. (BSI) implemented universal blood donation screening for *T. cruzi* antibodies. Donor prevalence was 1:25,000 but recipient tracing revealed only two positive recipients from one confirmed-positive donor in over 250 tested recipients reported nationally. Based on preliminary data on the absence of recent donor infection, the two organizations developed an incidence Protocol (IP) that was submitted to FDA for review and concurrence. The IP supported FDA policy allowing selective *T. cruzi* antibody testing in which a donor is qualified for all future donations by a single negative (1×) test result.
Methods: Universal testing of every donation from all presenting donors was maintained by four regions (three ARC + one BSI including Southern and Central California and the states of Texas, Oklahoma, Arkansas, Mississippi and Louisiana) for the IP, while the remaining ARC/BSI regions converted to selective 1× testing. Sites selected represented risk via donor travel to an endemic region or exposure in areas of the US that harbor the parasite's reservoirs and vectors. The IP sought target numbers of: (i) person-years (py) of observation for the sum of all donation intervals, and (ii) the mean duration between the first- and last-tested donation (total donation interval). The targets were based on a 5-year study including 5 million donor pys and a 1.9-year mean donation interval for new donor infections (seroconverters). No more than four seroconverting donors were allowed, with an upper 95% confidence limit of *T. cruzi* incidence of 2.4 per million pys for the study sites and <1/2 million pys for all ARC/BSI sites combined. This target rate is comparable to the current HIV and HCV residual risk in the US. A seroconverting donor was defined as repeat reactive by the Ortho ELISA, confirmed by a radioimmunoprecipitation assay (RIPA; Quest) and ELISA nonreactive in a prior donation during the study period.
Results: In 4 years of study, 4.22 million allogeneic repeat donors were followed over 6.06 million pys with a mean donation interval of 1.435 years and zero observed seroconverting donors, for an upper 95% limit for incidence of 0.061/100,000 pys (or <1/million). Two subsets of data provided longer donation intervals: 1.696 yrs each for allogeneic apheresis donors, and all allogeneic donors in Southern California (54-month total including the period of Ortho investigational testing). During the 4-year study, 22 RIPA-positive donors were identified with a prior ELISA-nonreactive donation; seropositivity on further sampling was intermittent and none fully seroconverted over 40-days to 4-years of follow-up; all ELISA sample/cutoff values remained stable (all <2.0 with the exception of 1 isolated elevated value); no donor was parasitemic by PCR or culture. All testing indicated that the 22 donors had either false positivity or remote prior infection.
Conclusions: Based on the 4-year study and zero observed incidence, selective testing by a single negative test result provides comparable safety to universal testing in the US.

別紙様式第 2-1
番号 5

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012 年 7 月 2 日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄

一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン	研究報告の公表状況	Transfusion 2012; 52(6): 1290-1295	公表国 フランス
販売名 (企業名)	①献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL　(ベネシス) ②献血ヴェノグロブリン IH5%静注 1g/20mL　(ベネシス) ③献血ヴェノグロブリン IH5%静注 2.5g/50mL　(ベネシス) ④献血ヴェノグロブリン IH5%静注 5g/100mL　(ベネシス) ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　(ベネシス) ⑥グロブリン筋注 450mg/3mL「ベネシス」　(ベネシス) ⑦グロブリン筋注 1500mg/10mL「ベネシス」　(ベネシス)			

研究報告の概要

変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)（牛海綿状脳症(BSE)物質によるヒト・伝達性海綿状脳症(TSE)）の最初の症例が 1996 年に英国で報告された。vCJD の出現は、輸血と血液由来製剤の安全性に関して懸念を高めた。輸血関連 vCJD の 4 症例は英国で診断された。一人の患者は無症状で、検死解剖によって確認された。クロイツフェルト・ヤコブ病の他のタイプ(孤発性、遺伝型、或いは医原性)の輸血関連感染の症例は報告されていない。これまで、輸血による孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(sCJD)伝播の観察研究は全て陰性結果をもたらしたが、最近のイタリアの症例対照研究は輸血と sCJD の間での関連を示唆した。

1996 年以降、輸血による vCJD 伝播のリスクを減らすことを目的とする措置は、英国と BSE 原因物質に暴露した他国で徐々に強化された。これらの措置は、凝固製剤の製造に使う血漿の厳格な供給、合成凝固因子の使用増加、白血球除去、並びに英国における vCJD 物質に暴露していない国からの血液製剤の輸入を含む。フランスにおいて、1980～1996 年の間、1 年以上英国に住んでいた人は献血から延期されている。血液中の異常プリオン蛋白質(PrP^{TSE})を検出することができる検査を開発するために相当な努力を行ない、プロトタイプ分析法が最近解説された。

sCJD は TSE のヒト症例の約 80%を占める。この疾患が正常プリオン蛋白質(PrP^{C})のミスフォールドした形態(PrP^{TSE})の脳の中に自然形成及び蓄積の結果として起こることが信じられていた。フランスで、1999～2008 年の間の sCJD からの平均年間死亡率は、百万人当たり約 1.8 人であった。臨床発症後の生存期間は約 6 箇月間だけであるため、死亡率と発病率は同様である。sCJD は 50 歳前は非常に稀で、その発病は 70～79 歳の年齢層においてピークになる。

年齢は別として、sCJD の唯一確立した危険因子は、コドン 129 のプリオン蛋白質遺伝子(PRNP)の多型である；同型接合体(コドン 129 のメチオニン-メチオニン、或いはバリン-バリン)が異型接合体(メチオニン-バリン)よりも sCJD のより高いリスクがある。この研究において、我々はどれくらい血液が臨床発症前に感染することができるかについての様々な仮定のもと、その結果 sCJD を発症するだろう献血者の年間数を推定した。CJD の遺伝性及び医原性の型を検討しなかったのは、それらの発生率において国の間で大きな変動がある。フランスで、医原性暴露の可能性歴のある、或いはプリオン病の家族歴のある個人が献血から延期された。

材料及び方法

（ 略 ）

・モデルの全般的デザイン

我々は、4 段階のモデルを用いることによって年齢層及び性別によって前臨床的 sCJD を持った予定年間の数の供血者を推計し、記載されるデータに基づいた。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

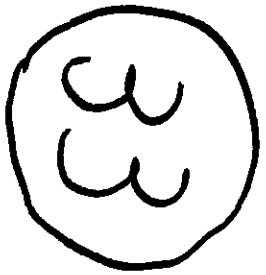
代表として献血ヴェノグロブリン IH5%静注 0.5g/10mL の記載を示す。

2. 重要な基本的注意

(1)略

1)略

2)現在までに本剤の投与により変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）等が伝播したとの報告はない。しかしながら、製造工程において異常プリオンを低減し得るとの報告があるものの、理論的な vCJD 等の伝播のリスクを完全には排除できないので、投与の際には患者への説明を十分行い、治療上の必要性を十分検討の上投与すること。



医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

結　　果

・sCJD の人口統計学的特性

国内登録に通知された TSE の疑わしい症例の中で、2000～2008 年まで、sCJD の 959 症例(556 は確定、403 は見込み)は、537 の女性患者(56%)と 422 の男性患者で診断された。死亡時の平均年齢は 69.8 年であった。sCJD 症例の年間平均数は 106 であった。

・献血者集団の人口統計学的特性

毎年、18～65 歳のフランスの人口の 4.1%を代表する約 155 万人が献血に協力している。献血者の割合は男女の中で類似したが、年齢とともに変わった； 献血者の割合は 18～29 歳の年齢層で最も高く(5.5%)、60～65 歳の年齢層で最も低い(2.4%)。

・前臨床 sCJD 献血者の年間推定患者数

我々のモデルに基づき、献血時点の sCJD 臨床発症は、1 年以内に年平均 1.1、5 年以内に 6.9、10 年以内に 18.0、15 年以内に 33.4 であった； 前臨床 sCJD 献血者の年間推定患者数は個々の潜伏期間の調査期間に亘り安定していた。1999～2008 年の期間、献血者あたりの平均献血回数は 1.64(1,550 万ドナーからの 2,540 万献血)であった。この値を用いて、前臨床 sCJD ドナーによってもたらされる献血のリスクは、sCJD 発症前の 1 年以内に行なわれた献血に対して 1/1,410,000、5 年以内に行なわれた献血に対して 1/225,000、10 年以内と 15 年以内に行われた献血に対して、それぞれ 1/86,000 と 1/46,500 と推定された。

議　　論

（ 略 ）

全ての国において、予防的措置の広い範囲が感染性病原体のリスクに対して血液供給を保護するために導入された。感染性物質の一連の血液スクリーニング； 感染性の疾患を後に発症した個人から得られた任意の血液成分、血漿製剤、並びに組織の使用中止と回収；そして感染したドナーからの血液製剤をレシピエントに知らせることは特定の危険因子を持った被験者の延期を含む。これらの措置の一部が、sCJD に関連している。血液スクリーニング検査は、前臨床 sCJD の検出にまだ利用可能ではない。神経や眼科の手術、組織や臓器の移植、プリオン病や痴呆の家族歴、或いはヒト成長ホルモンやゴナドトロピンによる過去の治療を持つドナーの延期は、輸血感染した医原性や遺伝的 CJD の潜在的リスクを削減するが、sCJD 潜伏ドナーから血液の採取を防げない可能性がある。研究は過去の手術、輸血感染した HIV 感染の流行との関係において、輸血を受けた被験者は献血を拒否された。第二に、sCJD が疑われる人が供血したと報告した時、彼/彼女の血液から調製した全ての血液製剤は回収される。大半の症例で、RBC と他の不安定な製剤は通知の時に既に使用され、血漿由来製品だけが依然として循環している。フランス国家倫理委員の推薦と一致して、レシピエントは輸血感染感染症のリスクが（vCJD に関して）確立した時だけ、そして（sCJD に関して）リスクが理論的でない時、通知された。従って、輸血感染感染症のリスクを減らすことを目指した措置の中で、輸血感染 sCJD 物質の理論的リスクを低減することは大変効率が悪い。

一方で、sCJD は新興疾患ではない。確かに、何十万人もの人は sCJD 潜伏ドナーから血液(主に、白血球除去していない)を受けていた。非常に長期間に亘る sCJD の流行増加が世界的に見られないことは安心させる、そして sCJD の血液感染力は、例えあるとしても、大変可能性が低いことを示した。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

報告企業の意見	今後の対応	
血漿分画製剤は理論的なvCJD伝播リスクを完全には排除できないため、投与の際には患者への説明が必要である旨を2003年5月から添付文書に記載している。2009年2月17日、英国健康保護庁(HPA)はvCJDに感染した供血者の血漿が含まれる原料から製造された第Ⅷ因子製剤の投与経験のある血友病患者一名から、vCJD異常プリオン蛋白が検出されたと発表したが、弊社の原料血漿採取国である日本及び米国では、欧州滞在歴のある献（供）血希望者を一定の基準で除外し、また国内でのBSEの発生数も少数であるため、原料血漿中に異常型プリオン蛋白が混入するリスクは1999年以前の英国に比べて極めて低いと考える。また、本剤の製造工程においてプリオンが低減される可能性を検討するための実験を継続して進めているところである。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。	

Preclinical sporadic Creutzfeldt-Jakob disease in French blood donors: an epidemiologic model-based study

Josiane Pillonel, Jean-Philippe Brandel, Lucie Léon, Dominique Salomon, Stéphane Haïk, Isabelle Capek, Véronique Vaillant, Joliette Coste, and Annick Alpérovitch

BACKGROUND: A recent case-control study showed that transfusion recipients were at an increased risk of developing sporadic Creutzfeldt-Jakob disease (sCJD), suggesting that blood donors with silent preclinical sCJD could transmit the sCJD agent. We therefore estimated the annual number of French blood donors expected to have preclinical sCJD at the time of donation.

STUDY DESIGN AND METHODS: We developed a mathematical model to estimate the number of blood donors who would subsequently develop sCJD, under various assumptions about how long their blood might be infective before clinical onset. The model used distributions by age group and sex for sCJD cases, blood donor population, French general population, and mortality in the general population.

RESULTS: Using 1999 to 2008 data, modeling showed that, each year, a mean of 1.1 (standard deviation [SD], 0.3) donors were within 1 year of sCJD onset at the time of blood donation, 6.9 (SD, 0.5) donors were within 5 years, 18.0 (SD, 0.6) were within 10 years, and 33.4 (SD, 1.1) were within 15 years.

CONCLUSION: Few donors are expected to be in the late preclinical stage of sCJD at the time of blood donation. This result and that of the worldwide absence of any epidemic increase in sCJD over the years indicate that this risk of transfusion-transmitted sCJD, if any, is likely to be very low.

The first cases of variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD), a human transmissible spongiform encephalopathy (TSE) due to the bovine spongiform encephalopathy (BSE) agent, were described in the United Kingdom in 1996.[1] The emergence of vCJD raised concerns as to the safety of blood transfusion and blood-derived products. Four cases of transfusion-related vCJD have been diagnosed in the United Kingdom. One patient was symptom-free and was identified by postmortem examination.[2-5] No cases of transfusion-related transmission of other types of Creutzfeldt-Jakob disease (sporadic, genetic, or iatrogenic) have been reported. Until recently, observational studies of sporadic CJD (sCJD) transmission by blood transfusion had all given negative results,[6-9] but a recent Italian case-control study suggested a link between blood transfusion and sCJD.[10]

Since 1996, measures aimed at reducing the risk of vCJD transmission by blood transfusion have been gradually reinforced, both in the United Kingdom and in other

ABBREVIATIONS: BSE = bovine spongiform encephalopathy; EuroCJD = European Union collaborative group on CJD; PrP = prion protein; sCJD = sporadic Creutzfeldt-Jakob disease; TSE = transmissible spongiform encephalopathy; vCJD = variant Creutzfeldt-Jakob disease.

From the Institut de Veille Sanitaire, Saint-Maurice, France; Inserm, UMR-S 975, CNRS, UMR 7225, Université Pierre et Marie Curie-Paris 06, UMR 7225, S-975 (CRICM), Equipe Maladie d'Alzheimer–Maladies à Prions; AP-HP, Cellule Nationale de Référence des Maladies de Creutzfeldt-Jakob, Groupe Hospitalier Pitié-Salpêtrière, and INSERM, U708-Neuroepidemiology, Paris, France; and Établissement Français du Sang Pyrénées–Méditerranée, Montpellier, France.

Address reprint requests to: Josiane Pillonel, Institut de Veille Sanitaire, Saint-Maurice, F-94415 Cedex, France; e-mail: j.pillonel@invs.sante.fr.

Received for publication July 6, 2011; revision received October 6, 2011, and accepted October 8, 2011.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2011.03459.x

TRANSFUSION 2012;52:1290-1295.

countries exposed to the BSE agent. These measures include strict sourcing of plasma used to manufacture clotting products, increased use of synthetic clotting factors, leukoreduction, and in the United Kingdom, importation of blood products from countries not exposed to the vCJD agent. In France, those who have lived in the United Kingdom for 1 year or more between 1980 and 1996 are deferred from blood donation. Significant efforts have been made to develop tests capable of detecting abnormal prion protein (PrP^{TSE}) in blood, and a prototype assay was recently described.[11]

sCJD accounts for approximately 80% of human cases of TSE. It is believed that the disease occurs as a result of spontaneous formation and accumulation in the brain of a misfolded form (PrP^{TSE}) of the normal prion protein (PrP^{C}). In France, mean annual mortality from sCJD between 1999 and 2008 was approximately 1.8 per million inhabitants (http://www.invs.sante.fr/). Because the survival time after clinical onset is only about 6 months, mortality and incidence rates are similar. sCJD is very rare before the age of 50 years and its incidence peaks in the 70- to 79-year age group.[12] Apart from age the only well-established risk factor for sCJD is polymorphism of the prion protein gene (*PRNP*) at Codon 129; homozygotes (methionine-methionine or valine-valine at Codon 129) are at a higher risk of sCJD than heterozygotes (methionine-valine).[13]

In this study, we estimated the expected annual number of blood donors who would subsequently develop sCJD, under various assumptions about how long blood might be infectious before clinical onset. Genetic and iatrogenic forms of CJD were not considered, because there are large between-country variations in their incidence. In France, individuals with a history of possible iatrogenic exposure, or with a family history of prion disease, are deferred from blood donation.

MATERIALS AND METHODS

The number of blood donors with subclinical sCJD at the time of donation was estimated by using the following data and assumptions.

Data

Annual mortality of sCJD

In France, all suspected cases of CJD must be notified to the national register of human prion diseases (Réseau national de surveillance des maladies de Creutzfeldt-Jakob et maladies apparentées). In 1993, the French register integrated the European Union collaborative group on CJD (EuroCJD). EuroCJD surveillance methods and classifications are described in detail elsewhere.[8,9] Data on all deaths from probable and definite sCJD recorded in France from January 2000 to December 2008 were extracted from the national register of human prion diseases, corresponding to a total of 959 cases. Sex, year of death, and age at death were available for all cases. Because survival after clinical onset of sCJD is very short, we used the dates of death rather than the dates of symptom onset, which tend to be less precise. The mean annual number of sCJD deaths by age and sex was estimated from 2000 to 2008 data.

Demographic and mortality data

Demographic data on blood donors were obtained from the French institute for public health surveillance (Institut de Veille Sanitaire), which centralizes each year the distribution of blood donors by sex and age group (18-29, 30-39, 40-49, 50-59, 60-65 years) from the 17 regional blood transfusion services. In France, over the study period from 1999 to 2008, subjects under 18 years and over 65 years of age were not allowed to give blood. Based on national population census data for 1999 and 2007, the distribution of the general population by age group and sex was estimated from data provided by the National Institute of Statistics and Economic studies, for each year from 1999 to 2008 (http://www.insee.fr).

We also used mortality data between 1999 and 2008 by age, sex, and year of death for the general population (http://www.ined.fr). Indeed, because sCJD usually occurs after age 60 years, we also considered the possibility that a person with preclinical sCJD could die from a competing cause before symptom onset.

Main assumptions

Uncertainty as to the duration of the preclinical phase of sCJD was a major issue. Experimental studies have provided data on the duration of silent pathologic process in animal models but are not necessarily relevant to the natural history of sCJD. We therefore studied scenarios in which the incubation period was 1, 5, 10, or 15 years. Note that the longer the incubation period, the larger the number of infected persons who might have the abnormal PrP in their blood and the higher the risk of death from competing causes before clinical onset. We also assumed that the distribution of the *PRNP* polymorphism in blood donors was similar to that of the general population and that persons incubating sCJD were as likely as members of the general population to donate blood, except during the year preceding sCJD onset. We therefore assumed that a patient who died from sCJD did not give blood during the year before death. Finally, we assumed that there was no temporal trend in the frequency or epidemiologic characteristics of sCJD, that is, that the annual mortality of sCJD by age and sex did not change over time. Consequently, mean annual mortality computed from 2000 to 2008 sCJD

data was used as the mortality estimate for years after 2008 when we postulated incubation times of 5, 10, and 15 years. In the same way, we assumed that there was no temporal trend in mortality rates in the general population and thus applied the 2008 rates to subsequent years.

General design of the model

We estimated the expected annual number of blood donors with preclinical sCJD by age group and sex by using a four-stage model, based on the data described.

Stage 1

For each sex j, the number, $n_{x,y,j}$ of persons of age x incubating sCJD during year y was obtained from the equation:

$$n_{x,y,j} = \sum_{k=1}^{IP} \frac{S_{x+k,y+k,j}}{\prod_{i=1}^{k}(1-\tau_{x+i,y+i,j})} \quad (1)$$

where IP is the incubation period (1, 5, 10, or 15 years); $S_{x+k,y+k,j}$ is the number of persons who died from sCJD, corresponding to age $x+k$, year $y+k$, and sex j; and $\tau_{x+i,y+i,j}$ is the mortality rate among persons who died at $x+i$ years, corresponding to year $y+i$ and sex j.

Stage 2

For a specific age group $[a, b]$, the number of persons incubating sCJD, $d_{[a,b],y,j}$, aged between a and b years at year y and who donated blood, was obtained from the following equation, by sex j:

$$d_{[a,b],y,j} = \sum_{x\in[a,b]} n_{x,y,j} \times \frac{B_{[a,b],y,j}}{P_{[a,b],y,j}} \quad (2)$$

where $B_{[a,b],y,j}$ is the number of blood donors aged between a and b years corresponding to year y and sex j; $P_{[a,b],y,j}$ is the population size between ages a and b corresponding to year y and sex j; and $n_{x,y,j}$ was obtained from Equation (1).

Stage 3

For each of the above-defined age groups $[a, b]$ (18-29, 30-39, 40-49, 50-59, 60-65 years), the expected number of blood donors with preclinical sCJD at the time of blood donation, $N_{[a,b],y}$, aged between a and b years at year y, was estimated as follows:

$$N_{[a,b],y} = \sum_{j=1}^{2} d_{[a,b],y,j}. \quad (3)$$

Stage 4

Finally, the total number of blood donors incubating sCJD was obtained by summing up the results for the five age groups computed at Stage 3 for each year y:

$$N_y = \sum_{[a,b]\in A} N_{[a,b],y}$$

where $A = \{[18, 29], [30, 39], [40, 49], [50, 59], [60, 65]\}$.

RESULTS

Demographic characteristics of sCJD

From 2000 to 2008, among the suspected cases of TSE notified to the national register, 959 cases of sCJD (556 definite and 403 probable) were diagnosed in 537 female patients (56%) and 422 male patients. Mean age at death was 69.8 years (standard deviation [SD], 9.2; median, 71 years; range, 33-91 years; Fig. 1). The annual mean number of sCJD cases was 106 (SD, 17).

Demographic characteristics of the blood donor population

Every year, approximately 1.55 million persons donate blood, representing 4.1% of the French population aged 18 to 65 years. The proportion of blood donors was similar among men and women but varied with age (Fig. 2): the

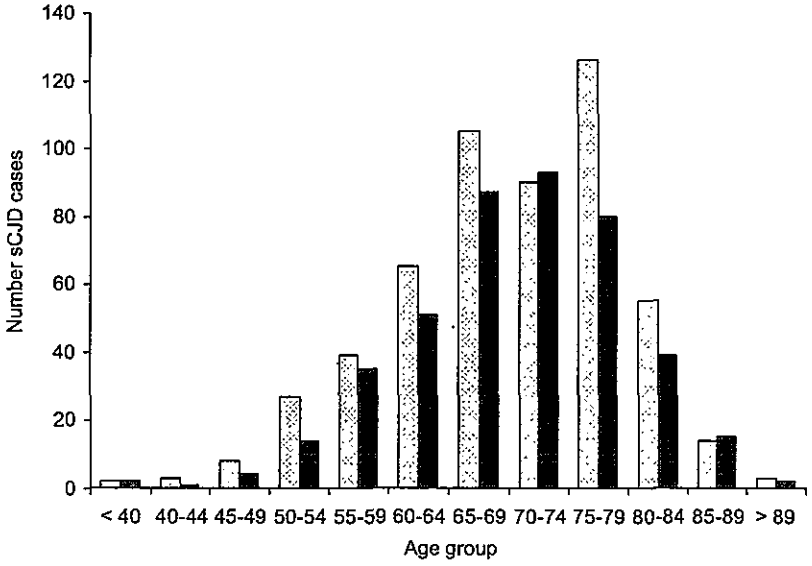


Fig. 1. Distribution of sCJD cases (definite and probable) by age at death, France, 2000 to 2008. (□) Female; (■) male.

proportion of blood donors was highest (5.5%) in the 18- to 29-year age group and lowest (2.4%) in the 60- to 65-year age group.

Expected annual number of blood donors with preclinical sCJD

Based on our model, each year a mean of 1.1 (SD, 0.3) infected donors were within 1 year of sCJD clinical onset at the time of blood donation, 6.9 (SD, 0.5) were within 5 years, 18.0 (SD, 0.6) were within 10 years, and 33.4 (SD, 1.1) were within 15 years: Figure 3 shows that the expected annual number of blood donors with preclinical sCJD was stable over the study period for each incubation period.

During the period 1999 to 2008, the mean number of donations per blood donor was 1.64 (25.4 million donations from 15.5 million donors). Using this value, the risk that a given blood donation would be provided by a donor with preclinical sCJD was estimated at 1 in 1,410,000 for donations made within 1 year before sCJD onset, 1 in 225,000 for donations made within 5 years, and, respectively, 1 in 86,000 and 1 in 46,500 for donations made within 10 and 15 years of sCJD onset.

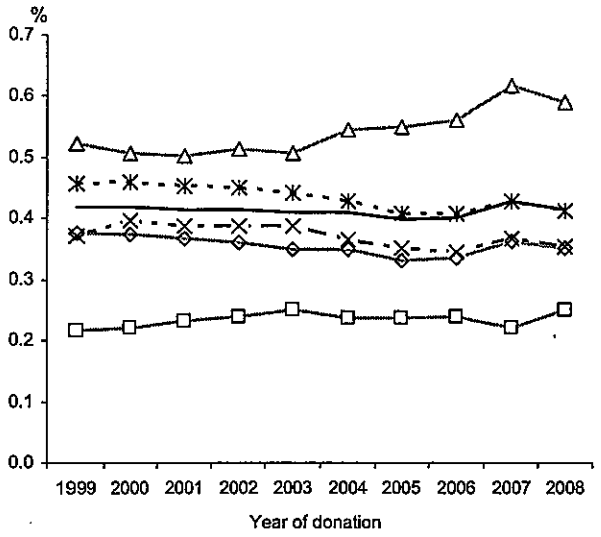


Fig. 2. Distribution of blood donors in the general population, by age group and year of donation, France, 1999 to 2008. (△) 18 to 29 years; (✳) 40 to 49 years; (×) 50 to 59 years; (◇) 30 to 39 years; (□) 60 to 65 years; (—) all.

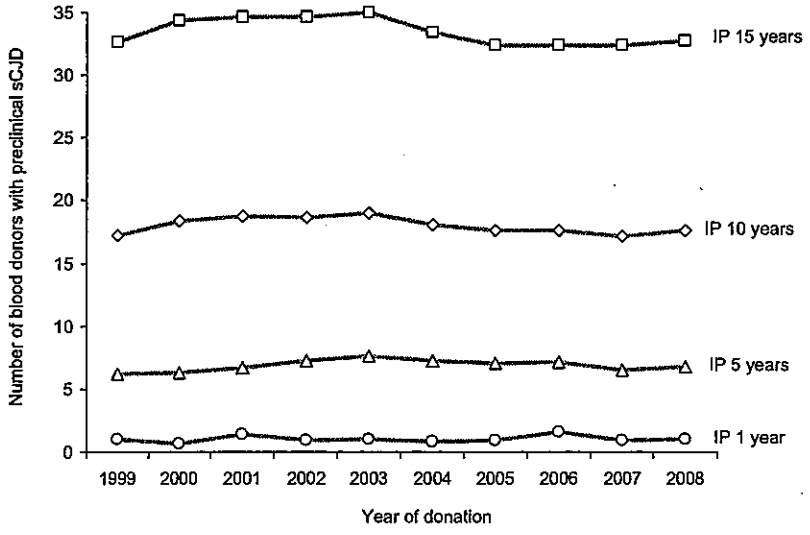


Fig. 3. Expected annual number of blood donors with preclinical sCJD for four incubation periods (IP), France, 1999 to 2008.

DISCUSSION

We estimated the annual number of blood donors expected to develop clinical sCJD in the years after blood donation. The annual number of potentially infectious donors in the preclinical phase of sCJD ranged from 1 to 33, depending on whether blood was assumed to be infectious only at the very end of the preclinical period (i.e., 1 year before symptom onset) or up to 15 years before clinical onset. Given the estimated numbers of donors who are expected to be in the late preclinical stage of sCJD (i.e., within 5 years before symptom onset) at the time of blood donation, the theoretical risk of infected blood donation varies between 1 per 1.41 million and 1 per 225,000 donations. This is the same as other transfusion-related risks, estimated to be 1 in 1.37 million donations for human immunodeficiency virus (HIV), 1 in 860,000 for hepatitis C virus (HCV), and 1 in 470,000 for hepatitis B virus in 1998 to 2000 in France, before the implementation of nucleic acid testing for HIV-1 and HCV.[14]

The upper limit of the age of French blood donors was recently increased from 65 to 70 years. However, the impact of this change on the number of donors with preclinical sCJD is expected to be negligible because, in 2010, less than 1% of blood donors were aged 66 to 70 years.

These estimates were based on data from the French national CJD register, which is considered to be a high-quality register in the EuroCJD collaboration and has been evaluated by the European Centre for Disease Control. We used a simple epidemiologic model, taking competing causes of death into account.

The model did not require unlikely assumptions. The main issue was the supposed duration of the incubation period.

Although experimental models are not fully relevant to human prion diseases, experimental findings must be considered. In a review concerning blood infectivity, Brown and colleagues[15,16] reported that blood infectivity had been experimentally established for scrapie, BSE, vCJD, and the Gerstmann-Straüssler-Scheinker syndrome, a human genetic form of TSE. Serial transmission experiments in guinea pigs showed that infectivity was present in the blood of sCJD-infected animals,[17] especially in white blood cells (WBCs). Infectivity observed in red blood cells (RBCs), platelets, and plasma may have been due in part to WBC contamination. It is noteworthy that the four UK-reported transfusion-transmitted cases of vCJD had received nonleukoreduced RBCs.

It is unclear for how long blood is infectious before TSE clinical onset. Based on a small number of experimental transmissions, blood infectivity was found early in the incubation period in approximately one-third of animals and in all animals late in the disease process.[15] In the reported cases of vCJD transmission by blood transfusion, the donors developed the first signs of vCJD within 3 years after the donation and the vCJD incubation period in the recipients ranged between 5 and 9 years.

A link has been observed between a history of surgery and the risk of sCJD in some case-control studies but not in all. Thus, in an Australian study comparing sCJD cases and community controls, a history of surgery was associated with a significantly higher risk of sCJD, and the risk increased with the number of surgical procedures.[18] However, this finding was not reproduced in a large European collaborative case-control study of similar design.[19] A recent study from the EUROSURGYCJD Research Group, using data from Danish and Swedish national registries, showed significant associations between various surgical procedures and the subsequent risk of developing sCJD.[20] All but one of the published studies investigating the possible relation between transfusion and sCJD gave negative results.[6-9] In a large case-control study in Italy, however, Puopolo and coworkers[10] observed a significant association between sCJD and blood transfusion 10 years or more before sCJD clinical onset in the recipient (adjusted odds ratio, 5.05 [1.37-18.63]).

In addition to classical biases that affect self-reported assessment of past exposure in all case-control studies, specific problems are encountered when collecting transfusion records of sCJD patients. Transfusions received during surgical procedures may be ignored or forgotten. Indeed, because most sCJD patients have severe cognitive disorders, this information is usually obtained from a relative. Another important issue is that approximately 50% of blood recipients die within 5 years.[21] The Italian case-control study concerning the association between sCJD and transfusion did not consider intervals of less than 10 years between transfusion and sCJD onset in the recipient.[10] Thus, case-control studies of the possible link between transfusion and sCJD have limited reliability, because the most appropriate approach would be to link CJD registers with those of transfusion recipients over a long period of time.

In all countries, a large range of precautionary measures have been introduced to safeguard the blood supply against the risk of infectious agents. These include deferral of subjects having particular risk factors; blood screening for a series of transmissible agents; withdrawal and recall of any blood components, plasma products, and tissues obtained from individuals who later developed a transmissible disease; and informing recipients of blood products from a possibly infected donor. Few of these measures are relevant for sCJD. No blood screening test is available yet for detecting preclinical sCJD. Deferral of donors having a past history of neuro- or ophthalmologic surgery or tissue or organ transplant, family history of prion disease or dementia, or past treatment with human growth hormone or gonadotrophin reduces the potential risk of transfusion-transmitted iatrogenic or genetic CJD, but may not prevent collection of blood from a donor incubating sCJD. Although studies have suggested that a past history of surgery might be a risk factor for sCJD,[18-20] it is unthinkable to consider deferring of all candidate donors with a past history of surgery. So, in France only two measures may contribute to reduce the theoretical risk of transfusion-related sCJD. First, since 1997, in relation with the epidemic of transfusion-transmitted HIV infection, subjects who have received a blood transfusion are rejected for blood donation. Second, when a person suspected of having sCJD reports having given blood, all blood products that have been prepared from his or her blood are withdrawn. In most cases, RBCs and other labile products have already been used at the time of the notification, and only plasma-derived products are still circulating. In agreement with the recommendation of the French National Ethical Committee (http://www.ccne-ethique.fr), recipients are informed only when the risk of transfusion-transmitted infection is established (as for vCJD) and not when the risk is theoretical (as for sCJD). So, among the measures aiming to reduce the risk of transfusion-transmitted infection, very few are efficient for reducing the theoretical risk of transfusion-transmitted sCJD agent.

On the other hand, sCJD is not an emerging disease. Certainly, hundreds of thousands of persons have received blood (mainly nonleukoreduced) from sCJD-incubating donors. The worldwide absence of any epidemic increase of sCJD over a very long period of time is reassuring and indicates that blood infectivity in sCJD, if any, is likely to be very low.

ACKNOWLEDGMENT

We thank Pascale Bernillon for her help with methodologic issues.

CONFLICT OF INTEREST

The authors declare that they have no conflicts of interest relevant to the manuscript submitted to TRANSFUSION.

REFERENCES

1. Will RG, Ironside JW, Zeidler M, Cousens SN, Estibeiro K, Alpérovitch A, Poser S, Pocchiari M, Hofman A, Smith PG. A new variant Creutzfeldt-Jakob disease in the UK. Lancet 1996;347:921-5.
2. Llewelyn CA, Hewitt PE, Knight RS, Amar K, Cousens S, Mackenzie J, Will RG. Possible transmission of variant Creutzfeldt-Jakob disease by blood transfusion. Lancet 2004;363:417-21.
3. Peden AH, Head MW, Ritchie DL, Bell JE, Ironside JW. Preclinical vCJD after blood transfusion in a PRNP codon 129 heterozygous patient. Lancet 2004;364:527-9.
4. Wroe SJ, Pal S, Siddique D, Hyare H, Macfarlane R, Joiner S, Lineham JM, Brandner S, Wadsworth JD, Hewitt P, Collinge J. Clinical presentation and pre-mortem diagnosis of variant Creutzfeldt-Jakob disease associated with blood transfusion: a case report. Lancet 2006;368: 2061-7.
5. Hewitt PE, Llewelyn CA, Mackenzie J, Will RG. Creutzfeldt-Jakob disease and blood transfusion: results of the UK transfusion medicine epidemiological review study. Vox Sang 2006;91:221-30.
6. Harries-Jones R, Knight R, Will RG, Cousens S, Smith PG, Matthews WB. Creutzfeldt-Jakob disease in England and Wales, 1980-84: a case-control study of potential risk factors. J Neurol Neurosurg Psychiatry 1988;51:1113-9.
7. Wientjens DP, Davanipour Z, Hofman A, Kondo K, Matthews WB, Will RG, van Duijn CM. Risk factors for Creuzfeldt-Jakob disease: a reanalysis of case-control studies. Neurology 1996;46:1287-91.
8. van Duijn CM, Delasnerie-Laupêtre N, Masullo C, Zerr I, de Silva R, Wientjens DP, Brandel JP, Weber T, Bonavita V, Zeidler M, Alperovitch A, Poser S, Granieri E, Hofman A, Will RG; for the European Union Collaborative Study Group of Creutzfeldt-Jakob disease. Case-control study of risk factors of Creutzfeldt-Jakob disease in Europe during 1993-1995. Lancet 1998;351:1081-5.
9. Zerr I, Brandel JP, Masullo C, Wientjens D, de Silva R, Zeidler M, Granieri E, Sampaolo S, van Duijn C, Delasnerie N, Will R, Poser S. European surveillance on Creutzfeldt-Jakob disease: a case-control study for medical risk factors. J Clin Epidemiol 2000;53:747-54.
10. Puopolo M, Ladogana A, Vetrugno V, Pocchiari M. Transmission of sporadic Creutzfeldt-Jakob disease by blood transfusion: risk factor and possible biases. Transfusion 2011;51:1556-66.
11. Edgeworth JA, Farmer M, Sicilia A, Tavares P, Beck J, Campbell T, Lowe J, Mead S, Rudge P, Collinge J, Jackson GS. Detection of prion infection in variant Creutzfeldt-Jakob disease: a blood-based bioassay. Lancet 2011;377: 487-93.
12. Alpérovitch A, Delasnerie-Laupêtre N, Brandel JP, Salomon D. La maladie de Creutzfeldt-Jakob en France, 1992–2002. Institut de Veille Sanitaire, Saint-Maurice, France 2004 ISBN: 2-11-094961-9. [cited 2011 Sep 26]. Available from: URL: http://www.invs.sante.fr/publications/2004/mcj_1992_2002/index.html
13. Alpérovitch A, Zerr I, Pocchiari M, Mitrova E, Cuesta J, Hegyi I, Collins S, Kretzschmar H, van Duijn C, Will RG. Codon 129 prion protein genotype and sporadic Creutzfeldt-Jakob disease. Lancet 1999;353:1673-4.
14. Pillonel J, Laperche S, Saura C, Desenclos JC, Couroucé AM; the Transfusion-Transmissible Agents Working Group of the French Society of Blood Transfusion. Trends in residual risk of transfusion transmitted viral infections in France between 1992 and 2000. Transfusion 2002;42:980-8.
15. Brown P. Creutzfeldt-Jakob disease: reflections on the risk from blood product therapy. Haemophilia 2007;13 Suppl 5: 33-40.
16. Brown P, Gibbs J, Rodgers-Johnson P, Asher DM, Sulima MP, Bacote A, Goldfarb LG, Gajdusek DC. Human spongiform encephalopathy: the National Institutes of Health series of 300 cases of experimentally transmitted disease. Ann Neurol 1994;35:513-29.
17. Manuelidis EE, Gorgacz EJ, Manuelidis L. Viremia in experimental Creutzfeldt-Jakob disease. Science 1978;200: 1069-71.
18. Collins S, Law MG, Fletcher A, Boyd A, Kaldor J, Masters CL. Surgical treatment and risk of sporadic Creutzfeldt-Jakob disease: a case-control study. Lancet 1999;353:693-7.
19. Ward HJ, Everington D, Croes EA, Alperovitch A, Delasnerie-Laupêtre N, Zerr I, Poser S, van Duijn CM. Sporadic Creutzfeldt-Jakob disease and surgery: a case-control study using community controls. Neurology 2002; 59:543-8.
20. de Pedro-Cuesta J, Mahillo-Fernández I, Rábano A, Calero M, Cruz M, Siden A, Laursen H, Falkenhorst G, Mølbak K; EUROSURGYCJD Research Group. Nosocomial transmission of sporadic Creutzfeldt-Jakob disease: results from a risk-based assessment of surgical interventions. J Neurol Neurosurg Psychiatry 2011;82:204-12.
21. Walllis JP, Wells AW, Matthews JN, Chapman CE. Long-term survival after blood transfusion: a population-based study in the North of England. Transfusion 2004;44:1025-32.

医薬品　研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
一般的名称	－		研究報告の公表状況	Emerging Infectious Diseases · www.cdc.gov/eid · Vol. 18, No. 6, June 2012	公表国 米国	
販売名(企業名)	－					

研究報告の概要	使用上の注意記載状況・その他参考事項等
医原性クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）の時代はほぼ終わったが、例外的に長い潜伏期間を伴う偶発症例が現在もみられている。その発生の主因は、診断未確定のCJD感染死体に由来する汚染された成長ホルモン（226例）と硬膜移植片（228例）であり、他の少数の症例は脳神経外科器具の汚染、角膜移植片、性腺刺激ホルモンや血液製剤の輸血による変異型クロイツフェルト・ヤコブ病への二次感染である。 医原性二次感染を防止する最良の方法は、明らかに、一次感染を防止することであるが、無症状の感染患者を特定する検査なしに、ヒト－ヒト間の組織移植に特有のリスクを完全に除くことはできない。 したがって、我々は ①CJD発症リスクが通常より高い人間の識別及び臓器提供延期 ②鋭利な器具の殺菌時や組織及び体液の処理にプリオン低減ステップを組み込む という既定の戦略をとらざるを得ない。 不顕性感染者の現実的なスクリーニング検査のヒトに対する有効性が認められるまでの間は、臓器提供の延期と、組織、体液、器具の感染性減少ステップ導入との組み合わせが、医原性疾患の原因を最小に抑えることにつながる。	重要な基本的注意 現在までに本剤の投与により変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）等が伝播したとの報告はない。しかしながら、製造工程において異常プリオンを低減し得るとの報告があるものの、理論的なvCJD等の伝播のリスクを完全には排除できないので、投与の際には患者への説明を十分行い、治療上の必要性を十分検討の上投与すること。

報告企業の意見	今後の対応
CDCの医原性CJDの最終評価の報告である。 現時点まで血友病以外で血漿分画製剤からvCJD伝播が疑われた報告はなく、血漿分画製剤の製造工程でプリオンが除去できるとの情報もある。	今後ともvCJDに関する安全性情報等に留意していく。

Iatrogenic Creutzfeldt-Jakob Disease, Final Assessment

Paul Brown, Jean-Philippe Brandel, Takeshi Sato, Yosikazu Nakamura, Jan MacKenzie, Robert G. Will, Anna Ladogana, Maurizio Pocchiari, Ellen W. Leschek, and Lawrence B. Schonberger

Medscape EDUCATION ACTIVITY

Medscape, LLC is pleased to provide online continuing medical education (CME) for this journal article, allowing clinicians the opportunity to earn CME credit.

This activity has been planned and implemented in accordance with the Essential Areas and policies of the Accreditation Council for Continuing Medical Education through the joint sponsorship of Medscape, LLC and Emerging Infectious Diseases. Medscape, LLC is accredited by the ACCME to provide continuing medical education for physicians.

Medscape, LLC designates this Journal-based CME activity for a maximum of 1 *AMA PRA Category 1 Credit(s)*™. Physicians should claim only the credit commensurate with the extent of their participation in the activity.

All other clinicians completing this activity will be issued a certificate of participation. To participate in this journal CME activity: (1) review the learning objectives and author disclosures; (2) study the education content; (3) take the post-test with a 70% minimum passing score and complete the evaluation at www.medscape.org/journal/eid; (4) view/print certificate.

Release date: May 16, 2012; Expiration date: May 16, 2013

Learning Objectives

Upon completion of this activity, participants will be able to:

- Distinguish the principal sources of iatrogenic CJD
- Identify countries with the highest rates of documented CJD
- Analyze the clinical presentation of iatrogenic CJD
- Assess new threats which might promote higher rates of CJD.

CME Editor

P. Lynne Stockton, Technical Writer/Editor, *Emerging Infectious Diseases. Disclosure: P. Lynne Stockton has disclosed no relevant financial relationships.*

CME Author

Charles P. Vega, MD, Health Sciences Clinical Professor; Residency Director, Department of Family Medicine, University of California, Irvine. *Disclosure: Charles P. Vega, MD, has disclosed no relevant financial relationships.*

Authors

Disclosures: Paul Brown; Jean-Philippe Brandel; Takeshi Sato, MD; Yosikazu Nakamura, MD, MPH, FFPH; Jan MacKenzie; Anna Ladogana; Ellen W. Leschek, MD; and Lawrence B. Schonberger, MD, MPH, have disclosed no relevant financial relationships. Robert G. Will, FRCP, has disclosed the following relevant financial relationships: served as an advisor or consultant for LFB, Farring. Maurizio Pocchiari, MD, has disclosed the following relevant financial relationships: served as an advisor or consultant for LFB, Farring.

The era of iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease (CJD) has nearly closed; only occasional cases with exceptionally long incubation periods are still appearing. The principal sources of these outbreaks are contaminated growth hormone (226 cases) and dura mater grafts (228 cases) derived from human cadavers with undiagnosed CJD infections; a small number of additional cases are caused by neurosurgical instrument contamination, corneal grafts, gonadotrophic hormone, and secondary infection with variant CJD transmitted by transfusion of blood products. No new sources of disease have been identified, and current practices, which combine improved recognition of potentially infected persons with new disinfection methods for fragile surgical instruments and biological products, should continue to minimize the risk for iatrogenic disease until a blood screening test for the detection of preclinical infection is validated for human use.

Author affiliations: Centre à l'Energie Atomique, Fontenay-aux-Roses, France (P. Brown); Institut National de la Santé et de la Recherche Médicale, Paris, France (J.-P. Brandel); Nanohana Clinic, Tokyo, Japan (T. Sato); Jichi Medical University, Yakushiji, Japan (Y. Nakamura); Western General Hospital, Edinburgh, Scotland, UK (J. MacKenzie, R.G. Will); Istituto Superiore de Sanità, Rome, Italy (A. Ladogana, M. Pocchiari); National Institutes of Health, Bethesda, Maryland, USA (E.W. Leschek); and Centers for Disease Control and Prevention, Atlanta, Georgia, USA (L.B. Schonberger)

DOI: http://dx.doi.org/10.3201/eid1806.120116

The first case of what would eventually become a major outbreak of iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease (CJD) was reported in 1974; the patient had received a corneal transplant from an infected cadaver (*1*). In the years that followed, other sources of infection were identified: stereotactic electroencephalogram electrodes, neurosurgical instruments, cadaveric dura mater and pituitary glands, and, most recently, secondary variant CJD (vCJD) blood products. The ensemble of iatrogenic cases, including a bibliography of primary references, was last reviewed in 2006 (*2*). Today, after nearly 40 years of surveillance, the chronology and essential characteristics of iatrogenic CJD have been finalized, and the purpose of this article is to present these data along with a few brief comments about factors that determined the risk for infection and how future risks might be foreseen and avoided.

By far the most common sources of iatrogenic disease were human cadavers from which pituitary hormones and dura mater grafts were obtained (Table 1; Figure); the other major variety of environmentally acquired disease is vCJD. The incidence curves of human growth hormone–associated and dura mater–associated CJD are almost superimposable; a broad peak occurred in the mid- to-late 1990s, just ahead of the sharper peak incidence of vCJD in the United Kingdom at the turn of the century. The incidence in other countries peaked a few years later, in 2004, as a result of the delayed appearance of bovine spongiform encephalopathy in those countries.

The long incubation periods—years to decades—of these low-dose infections pose a particularly difficult problem for public health officials, whose recommendations may diminish the number of new cases but are impotent when it comes to preventing cases in already-infected persons in the preclinical phase of disease. It is worth remembering that the early recognition of iatrogenic sources of CJD was entirely because of a few remarkably astute neurologists, neurosurgeons, and, astonishingly, a pediatric endocrinologist who pursued the unlikely (and unpopular) diagnosis of CJD in a growth hormone recipient (*3*). It is true that some of these connections had the benefit of comparatively short intervals between the infecting events and the onset of CJD. It is especially fortunate from the standpoint of early recognition of the dura mater association that the interval of 19 months between the operation and onset of symptoms in the first case-patient was among the shortest on record for this form of iatrogenic CJD (Table 2).

Human Growth Hormone

The current worldwide total of growth hormone–associated cases of CJD is 226. Most cases occurred in France (119 cases/1,880 recipients; attack rate 6.3%), the United Kingdom (65 cases/1,800 recipients; attack rate

Table 1. Global distribution of cases of iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease*

	Source of infection and no. cases						
	Surgical procedure				Medical procedure		
Country	Dura mater grafts	Surgical instruments	EEG needles	Corneal transplants†	Growth hormone‡	Gonadotropin	Packed red blood cells§
Argentina	1						
Australia	5					4	
Austria	3				1		
Brazil					2		
Canada	4						
Croatia	1						
France	13	1			119		
Germany	10			1			
Ireland					1		
Italy	9						
Japan	142						
Netherlands	5				2		
New Zealand	2				6		
South Korea	2						
Qatar					1		
South Africa	1						
Spain	14						
Switzerland	3		2				
Thailand	1						
United Kingdom	8	3			65		3
United States	4			1	29		
Total	228	4	2	2	226	4	3

*EEG, electroencephalogram.
†Additional possible single cases after corneal transplant or keratoplasty (not included in table) in Japan, United Kingdom, and United States.
‡Human growth hormone given in Brazil and New Zealand was prepared in the United States; that given in Qatar was prepared in France. Additional possible single cases with human growth hormone as source (not included in table) occurred in Sweden, Australia, and New Zealand.
§An additional asymptomatic but infected red-cell recipient died of an unrelated illness; another asymptomatic infected hemophilia patient who had been exposed to potentially contaminated factor VIII also died of an unrelated illness (neither is included in the table).

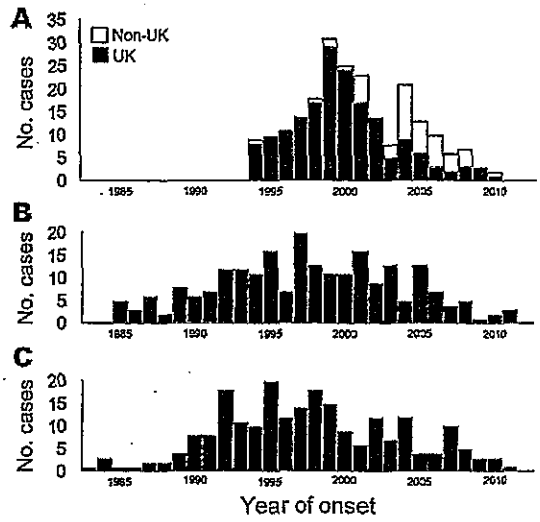


Figure. Annual incidence of variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD) caused by ingestion of meat products contaminated with bovine spongiform encephalopathy agent (A) and iatrogenic CJD caused by contaminated dura mater (B) and cadaveric human growth hormone (C), 1982–2011. White bars in panel A represent cases from outside the United Kingdom, which were delayed in parallel with the later appearance of bovine spongiform encephalopathy outside the United Kingdom (not a second wave resulting from codon 129 genotype differences). Two patients are excluded: 1 presymptomatic patient from the United States who received human growth hormone and died of an intercurrent illness and 1 dura mater recipient from the United Kingdom with disease onset in 1978.

3.6%), and the United States (29 cases/7,700 recipients; attack rate 0.4%).

In France, further epidemiologic observations have revealed that all 119 cases occurred within a 1,170-patient cohort receiving treatment during a 20-month period, from December 1983 through July 1985, when there seems to have been substantial contamination resulting from sourcing and processing deficiencies. According to these numbers, the attack rate for the at-risk cohort in France increases to 10.2%. No new case has been identified since 2008. In the United Kingdom, no cohort pattern is evident, and cases continue to occur at an average rate of about 2 per year (only 1 in 2011). In the United States, CJD has not occurred in any patient who started treatment after 1977, when a highly selective column chromatography step was introduced into the purification protocol. Since 2003, only 2 new cases have been identified (1 in 2007 and 1 in 2009). An estimated ≈2,700 patients received treatment before 1977, so the attack rate in the United States for this at-risk cohort increases to 1.1% (*4*). The revised attack rates therefore become 10.2% in France, 3.6% in the United Kingdom, and 1.1% in the United States.

The methionine (M)/valine polymorphism at codon 129 of the *PRNP* gene has been examined in populations with and without CJD in many countries; results have varied (Table 3). Overall, it is clear that the M allele bestows substantial susceptibility to the sporadic and the iatrogenic forms of CJD; in consequence, the proportion of persons with MM homozygous genotype is overrepresented in both categories of disease (the sole exception occurred in UK growth hormone recipients, which led to speculation that a different strain of the pathogenic agent might have been disseminated) (*10*). It is also clear that, as a group, persons with heterozygous genotype had longer incubation periods than did those with homozygous genotype, particularly in France. Notwithstanding this statistical conclusion, it is noteworthy that several persons with MM homozygous genotype had incubation periods >30 years, including a patient with recently diagnosed CJD, whose incubation period was 42 years, the current world record for any type of iatrogenic disease.

Incubation periods for the total case population (not just those examined for the codon 129 genotype) ranged from 5 to 42 years (mean 17 years), based on the interval between the midpoint date of what was almost always a multiyear period of treatment and the onset of CJD symptoms; the actual date of infection is impossible to determine. Mean incubation periods for cases in the United States and New Zealand (patients received hormone made in the United States) were 22 and 26 years; United Kingdom, 20 years; and France, 13 years. The shorter incubation periods in France could have resulted partly from the narrower limit for the date of infection in France and are in accord with the mean incubation period of 13.5 years in the 4 gonadotropin recipients from Australia, for whom there is an even more precise date of infection. However, a greater contribution probably came from different infectious doses received by patients in the different countries. Among all patients, the clinical features were distinctive in that, unlike sporadic CJD, signs and symptoms almost never included dementia, which, if it occurred at all, was typically a late component of the clinical course.

Dura Mater

The worldwide tally of dura mater–associated cases is 228, and new cases still continue to occur here and there, the most recent being individual cases in Austria, South Korea, and the Netherlands in 2011. If the pharmaceutical industry (in contrast to government-sponsored laboratories) comes away from the growth hormone story with an almost untainted record—only 1 case has been attributed to industrially prepared hormone (*11*)—the same cannot be said about the private sector producing dura mater grafts. The source of almost all infections was a manufacturer in Germany, B. Braun Melsungen AG, which has a worldwide

Table 2. Incubation periods and clinical presentations of iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease, according to source of infection*

Source of infection	No. cases	Mean incubation period, y (range)	Clinical signs†
Dura mater graft	228	12 (1.3–30)	Cerebellar, visual, dementia
Neurosurgical instruments	4	1.4 (1–2.3)	Visual, dementia, cerebellar
Stereotactic EEG needles	2	1.3, 1.7	Dementia, cerebellar
Corneal transplant	2	1.5, 27	Dementia, cerebellar
Growth hormone	226	17 (5–42)‡	Cerebellar
Gonadotropin	4	13.5 (12–16)	Cerebellar
Packed red blood cells§	3	6.5, 7.8, 8.3	Psychiatric, sensory, dementia, cerebellar

*EEG, electroencephalogram.
†In order of decreasing frequency.
‡Averages and ranges were 13 (5–24) y in France; 20 (7–39) y in the United Kingdom; and 22 (10–42) y in the United States.
§An additional asymptomatic but infected red-cell recipient died of an unrelated illness; another asymptomatic infected hemophilia patient who had been exposed to potentially contaminated factor VIII also died of an unrelated illness (neither is included in the table).

distribution network, and the incidence of CJD appears to have more or less paralleled the frequency with which this source of dura mater was used. In Japan, it is estimated that as many as 20,000 patches may have been used each year, and the 142 cases in that country constitute two thirds of the global total. Nevertheless, the overall attack rate in the at-risk patient population in Japan is <0.03%. For the entire (worldwide) group of dura mater–recipient patients, incubation periods ranged from 1.3 to 30 years (mean 12 years), and, except in Japan, the clinical and neuropathologic features were similar to those of sporadic CJD. In Japan, approximately one third of the cases had atypical features (slow progression, noncharacteristic electroencephalogram tracings, plaque deposition, and an atypical prion protein molecular signature on Western blots), which suggested the possibility of 2 different strains of infecting agent (*12,13*). One patient had florid plaques and a pulvinar sign on magnetic resonance imaging, mimicking vCJD (*5*).

Evaluation of the influence of the codon 129 genotype is complicated by the fact that the population in Japan, among whom most cases occurred, has a high frequency of the M allele (>90%), which dominated sporadic and dura mater–associated forms of CJD (Table 3) (*6–9,14,15*). Among the cases in persons not from Japan, the distribution of genotypes approximated that found among patients with sporadic CJD, and, as with growth hormone–associated cases, incubation periods were somewhat longer for persons with heterozygous than with homozygous genotypes.

Current Prevention Strategies

The best way to abolish secondary iatrogenic infections is, obviously, to prevent primary infections, but without a test to identify infected but asymptomatic persons, we cannot entirely eliminate the risk inherent in human-to-human tissue transfer. We are therefore obliged to rely on the default strategies of 1) identification and donor deferral of persons at higher than normal risk for CJD development and 2) inclusion of prion-reduction steps in the sterilization of penetrating instruments and the processing of therapeutic tissues and fluids.

Delineation of high-risk categories initially focused on precisely those groups of persons who were exposed to the known sources of iatrogenic disease: recipients of cadaveric dura mater grafts or pituitary-derived hormones. When vCJD started to occur, restrictions were also placed on donor time of residence in the most heavily infected regions—the United Kingdom and, to a lesser extent, continental Europe—and embargoes were placed on the importation of biological products from these regions. These deferral and import restrictions remain in place today and need some thoughtful reevaluation in view of the near extinction of all such sources of iatrogenic CJD. In the United States, there have been only 4 cases of dura mater–associated disease (the most recent in 2005) and no case of growth hormone–associated CJD for anyone who began treatment after 1977.

On the other hand, the possibility of iatrogenic infection resulting from transfer of tissues or fluids from persons who have contracted a prion disease from animals has not disappeared with the abating epidemics of bovine spongiform encephalopathy and vCJD. A few persons who may be experiencing a long incubation phase of vCJD still pose an obvious danger in the United Kingdom, but an underappreciated potential danger lies in 2 other animal diseases: scrapie and chronic wasting disease (CWD). Although scrapie-infected sheep tissues have been consumed for long enough (hundreds of years) to be considered harmless for humans, the same cannot be said about the atypical strains of scrapie that are beginning to displace the typical strains and with which we do not yet have enough experience to evaluate human pathogenicity. Similarly, we cannot declare with certainty that CWD poses no threat to humans, and CWD is continuing its unchecked spread across the United States and Canada with no guarantee that it will not become globally distributed in the years to come. One hunter has already put a group of unwitting persons at risk for infection by donating a deer, later found to have CWD, for consumption at a rural banquet in New York State (*16*); more such exposures are likely to occur as CWD continues its geographic expansion.

Table 3. Comparison of *PRNP* codon 129 genotype frequencies and incubation periods in growth hormone– and dura mater–associated cases of iatrogenic CJD*

Category	MM	VV	Homozygotes	Heterozygotes
Population				
Healthy Caucasian, %†	40	10	50	50
European, with sporadic CJD, %	67	17	84	16
Healthy Japanese, %	92	0	92	8
Japanese, with sporadic CJD, (%)	97	1	98	2
Infection source				
Growth hormone				
France (111)				
Genotype frequency, %	54	15	69	31
Incubation period, y	12	9	11	17
United Kingdom (28)				
Genotype frequency, %	4	50	54	46
Incubation period, y	21	18	20	23
United States (11)				
Genotype frequency, %	55	18	73	27
Incubation period, y	21	18	20	23
Combined total (150)				
Genotype frequency, %	45	22	67	33
Incubation period, y	13	12	13	17
Dura mater				
Japan (54)‡				
Genotype frequency, %	96	0	96	4
Incubation period, y	16	NA	16	13
Countries other than Japan (54)§				
Genotype frequency, %	65	15	80	20
Incubation period, y	12	12	12	16
Combined total (108)				
Genotype frequency, %	81	7	88	12
Incubation period, y	14	12	14	16

*CJD, Creutzfeldt-Jakob disease; M, methionine; V, valine; NA, not applicable. All values are rounded to the nearest whole number.
†Based on several large-scale population studies (*5–9*).
‡Personal communication from M. Yamama, Department of Neurology, Kanazawa University Hospital, Kanazawa, Japan.
§Cases from France (11), Spain (11), Germany (10), Italy (8), the Netherlands (5), and 1 or 2 cases from each of 6 other countries with Caucasian populations.

Future Prevention Strategies

The issue of reducing risk by taking steps to inactivate prions is always a work in progress as new therapeutic products come into production and new methods to inactivate prions are discovered. The tried-and-true laboratory method of prion sterilization (1-hour exposures to either undiluted bleach or 1 N sodium hydroxide followed by steam autoclaving at 3 atmospheres pressure for 20 minutes) is applicable only to nonfragile instruments and not at all to living tissues. The surprising resistance of dura mater to 0.1 N sodium hydroxide (*17*) and of growth hormone to 6 M urea (*18*) led to their incorporation into processing protocols before being replaced by nondural tissue or synthetic patches and recombinant hormone. To reduce infectivity, blood, blood products, and other fluids can be subjected to nanofiltration and prion-affinity ligands (*19–22*), which should also be applicable to other biological products, for example, vaccine and stem cell cultures, should they be susceptible to infection (*23*). Fragile instruments such as endoscopes and electrodes remain a challenge, but new and gentler methods— alkaline cleaning solutions, phenolics, and gaseous hydrogen peroxide—have proven harmless to instruments and give a high, if not always complete, degree of prion inactivation (*24–26*).

The ongoing refinement of a quaking-induced conversion detection of the misfolded prion protein holds the best prospect of evolving into a sensitive and practical tool, but it has yet to be validated in blind testing of plasma from symptomatic patients or in presymptomatic persons, even more rigorous but necessary (*27,28*). It may be necessary to use scrapie-infected animals for presymptomatic validation because only 1 group of humans could furnish appropriate samples—asymptomatic carriers of CJD-inducing mutations—and putting together and testing a reasonable number of such samples will take years to accomplish.

The total numbers of cases for the 2 major causes of iatrogenic CJD during the past 40 years (226 growth hormone cases and 228 dura mater cases) are amazingly close and are likely to remain so after the few additional long-incubating cases finally surface in the next few years. The combination of appropriate blood donor deferrals and the incorporation of tissue, fluid, and instrument infectivity–reduction steps should continue to hold the sources of potential iatrogenic disease to a minimum until such time as a practical screening test for inapparent infection is validated for human use.

Acknowledgments

Our profound thanks go to the physicians responsible for the earliest identification of iatrogenic CJD infections and to the multitude of unsung persons in many countries around the world who have worked diligently and continuously to keep track of its global incidence.

Dr Brown spent his career at the National Institutes of Health in the Laboratory of Central Nervous System Studies conducting research on the transmissible spongiform encephalopathies, especially with respect to epidemiology, iatrogenic CJD, disinfection, and blood infectivity. He currently chairs a scientific advisory committee for the Laboratoire Français du Fractionnement et des Biotechnologies in Les Ulis, France, and advises the Centre à l'Energie Atomique in Fontenay-aux-Roses, France.

References

1. Duffy P, Wolf J, Collins G, DeVoe AB, Streeten B, Cowen D. Letter: possible person-to-person transmission of Creutzfeldt-Jakob disease. N Engl J Med. 1974;290:692–3. http://dx.doi.org/10.1056/NEJM197403212901220
2. Brown P, Brandel J-P, Preece M, Sato T. Iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease: the waning of an era. Neurology. 2006;67:389–93. http://dx.doi.org/10.1212/01.wnl.0000231528.65069.3f
3. Brown P. Human growth hormone therapy and Creutzfeldt-Jakob disease: a drama in three acts. Pediatrics. 1988;81:85–92.
4. Abrams JY, Schonberger LB, Belay ED, Maddox RA, Leschek EW, Mills JL, et al. Lower risk of Creutzfeldt-Jakob disease in pituitary growth hormone recipients initiating treatment after 1977. J Clin Endocrinol Metab. 2011;96:E1666–9. http://dx.doi.org/10.1210/jc.2011-1357
5. Wakisaka Y, Santa N, Doh-ura K, Kitamoto T, Ibayashi S, Iida M, et al. Increased asymmetric pulvinar magnetic resonance imaging signals in Creutzfeldt-Jakob disease with florid plaques following a cadaveric dura mater graft. Neuropathology. 2006;26:82–8. http://dx.doi.org/10.1111/j.1440-1789.2006.00638.x
6. Soldevila M, Calafell F, Andrès AM, Yagüe J, Helgasòn A, Stefánsson K, et al. Prion susceptibility and protective alleles exhibit marked geographic differences. Hum Mutat. 2003;22:104–5. http://dx.doi.org/10.1002/humu.9157
7. Nurmi MH, Bishop M, Strain L, Brett F, McGuigan C, Hutchison M, et al. The normal population distribution of *PRNP* codon 129 polymorphism. Acta Neurol Scand. 2003;108:374–8. http://dx.doi.org/10.1034/j.1600-0404.2003.00199.x
8. Mercier G, Diéterlen F, Lucotte G. Population distribution of the methionine allele at the *PRNP* codon 129 polymorphism in Europe and the Middle East. Hum Biol. 2008;80:181–90. http://dx.doi.org/10.3378/1534-6617(2008)80[181:PDOTMA]2.0.CO;2
9. Doh-ura K, Kitamoto T, Sakaki Y, Taateishi J. CJD discrepancy. Nature. 1991;353:801–2. http://dx.doi.org/10.1038/353801b0
10. Brandel J-P, Preece M, Brown P, Croes E, Laplanche J-L, Agid Y, et al. Distribution of codon 129 genotype in human growth hormone–treated CJD patients in France and the UK. Lancet. 2003;362:128–30. http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736(03)13867-6
11. Furtner M, Gelpi E, Kiechl S, Knoflach M, Zangerl A, Gotwald T, et al. Iatrogenic Creutzfeldt-Jakob disease 22 years after human growth hormone therapy: clinical and radiological features. J Neurol Neurosurg Psychiatry. 2008;79:229–31. http://dx.doi.org/10.1136/jnnp.2007.122267
12. Noguchi-Shinohara M, Hamaguchi T, Kitamoto T, Sato T, Nakamura Y, Mizusawa H, et al. Clinical features and diagnosis of dura mater graft–associated Creutzfeldt-Jakob disease. Neurology. 2007;69:360–7. http://dx.doi.org/10.1212/01.wnl.0000266624.63387.4a
13. Yamada M, Noguchi-Shinohara M, Hamaguchi T, Nozaki I, Kitamoto T, Sato T, et al. Dura mater graft–associated Creutzfeldt-Jakob disease in Japan: clinicopathological and molecular characterization of the two distinct subtypes. Neuropathology. 2009;29:609–18. http://dx.doi.org/10.1111/j.1440-1789.2008.00987.x
14. Nozaki I, Hamaguchi T, Sanjo N, Noguchi-Shinohara M, Sakai K, Nakamura Y, et al. Prospective 10-year surveillance of human prion diseases in Japan. Brain. 2010;133:3043–57. http://dx.doi.org/10.1093/brain/awq216
15. Ladogana A, Puopolo M, Croes EA, Budka H, Jarius C, Collins S, et al. Mortality from Creutzfeldt-Jakob disease and related disorders in Europe, Australia, and Canada. Neurology. 2005;64:1586–91. http://dx.doi.org/10.1212/01.WNL.0000160117.56690.B2
16. Garruto RM, Reiber C, Alfonso MP, Gastrich H, Needham K, Sunderman S, et al. Risk behaviors in a rural community with a known point-source exposure to chronic wasting disease. Environ Health. 2008;7:31. http://dx.doi.org/10.1186/1476-069X-7-31
17. Diringer H, Braig HR. Infectivity of unconventional viruses in dura mater. Lancet. 1989;1:439–40. http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736(89)90035-4
18. Pocchiari M, Peano S, Conz A, Eshkol A, Maillard F, Brown P, et al. Combination ultrafiltration and 6 M urea treatment of human growth hormone effectively minimizes risk from potential Creutzfeldt-Jakob disease virus contamination. Horm Res. 1991;35:161–6. http://dx.doi.org/10.1159/000181894
19. Yunoki M, Tanaka H, Urayama T, Hattori S, Ohtani M, Ohkubo Y, et al. Prion removal by nanofiltraion under different experimental conditions. Biologicals. 2008;36:27–36. http://dx.doi.org/10.1016/j.biologicals.2007.04.005
20. Cardone F, Simoneau S, Arzel A, Puopolo M, Berardi VA, Abdel-Haq H, et al. Comparison of nanofiltration efficacy in reducing infectivity of centrifuged versus ultracentrifuged 263K scrapie-infected brain homogenates in "spiked" albumin solutions. Transfusion. 2011. Epub ahead of print. http://dx.doi.org/10.1111/j.1537-2995.2011.03425.x
21. Gregori L, Gurgel PV, Lathrop JT, Edwardson P, Lambert BC, Carbonell RG, et al. Reduction in infectivity of endogenous transmissible spongiform encephalopathies present in blood by adsorption to selective affinity resins. Lancet. 2006;368:2226–30. http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736(06)69897-8
22. Heger A, Bailey A, Neisser-Svae A, Ertl M, Römisch J, Svae TE. Removal of prion infectivity by affinity ligand chromatography during OctaplasLG manufacturing—results from animal bioassay studies. Vox Sang. 2011. Epub ahead of print. http://dx.doi.org/10.1111/j.1423-0410.2011.01563.x
23. Piccardo P, Cervenakova L, Vasilyeva I, Yakovleva O, Bacik I, Cervenak J, et al. Candidate cell substrates, vaccine production, and transmissible spongiform encephalopathies. Emerg Infect Dis. 2011;17:2262–9. http://dx.doi.org/10.3201/eid1712.110607
24. Fichet G, Comoy E, Duval C, Antioga K, Dehen C, Charbonnier A, et al. Novel methods for disinfection of prion-contaminated medical devices. Lancet. 2004;364:521–6. http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736(04)16810-4
25. Fichet G, Antioga K, Comoy E, Deslys JP, McDonnell G. Prion inactivation using a new gaseous hydrogen peroxide sterilization process. J Hosp Infect. 2007;67:278–86. http://dx.doi.org/10.1016/j.jhin.2007.08.020
26. Fichet G, Harrison J, McDonnell G. Reduction of risk of prion transmission on surgical devices with effective cleaning processes. Zentr Steril. 2007;15:418–37.

27. Orrú CD, Wilham JM, Raymond LD, Kuhn F, Schroeder B, Raeber AJ, et al. Prion disease blood test using immunoprecipitation and improved quaking-induced conversion. MBiol. 2011;3:e00078-11 [cited 2012 Mar 31]. http://mbio.asm.org/content/2/3/e00078-11.full
28. Orrú CD, Wilham JM, Vascellari S, Hughson AG, Caughey B. New generation QuIC assays for prion seeding activity. Prion. 2012;6. Epub ahead of print.

Address for correspondence: Paul Brown, 7815 Exeter Rd, Bethesda, MD 20814, USA: email: paulwbrown@comcast.net

医薬品　研究報告　調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
				2012. 5. 24	該当なし	

一般的名称	人血清アルブミン	研究報告の公表状況	Hong Yang, Luisa Gregori, David Asher, Pedro Piccardo, Steven Anderson. Prion 2012 May,2012, Amsterdam, The Netherlands.	公表国
販売名（企業名）	赤十字アルブミン20（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25（日本赤十字社） 赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注4g/20mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン20%静注10g/50mL（日本赤十字社） 赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL（日本赤十字社）			米国

研究報告の概要

○赤血球輸血経由vCJD感染のリスク評価モデルバリデーション

2011年11月現在、vCJD一次感染が全世界で222症例報告され、大部分が英国における感染である。今日までに英国では合計4件の白血球非除去赤血球によるvCJD感染と考えられる症例があった。赤血球輸血を通じた輸血感染vCJD（TTvCJD）の潜在的リスクを推定するため、リスク評価モデルを開発した。この方法は、英国とフランスの血液採取と輸血に関する国別のデータを用いた二つのモデルから予測を算出し、各国のTTvCJDの報告数と比較することによって検証された。入力値として人口間の潜在的vCJD有病率、供血者数と赤血球輸血数、疾病の感染性、受血者の感受性などの要因をモデルに集積した。英国人口におけるvCJDの有病率はモデルにおいて重要な入力値であり、フランスでのvCJD有病率を算出するために使用された。この入力値は非常に不確実であるため、モデルは疫学的モデリング（Garke and Ghani, 2010）研究から算出された無症候性vCJD感染症が英国人口100万人あたり1.7人（95%CI: 100万人あたり0.2－3.7症例）という低い推定値と、組織サーベイランス研究（Hilton et al. 2004、Bennet and Draktchiev 2011）によって算出された100万人あたり279人（95%CI: 100万人あたり72－485感染症）という高い推定値に層別化された。疾病潜伏期間及び輸血後生存率を調整することによって、臨床症例に進行する可能性のあるTTvCJD感染症数についても推定した。

最終的に、1980年から現在までの英国及びフランスにおけるTTvCJD臨床症例累積数の予想が、モデルの検証のためにこれら2カ国における観察症例数と比較された。TTvCJDリスク推定はモデルに使用された推定有病率に大きく依存していた。低い推定有病率を用いたモデルは、1980年以降英国のTTvCJD発生は数件、フランスで0件であると予想した。これらの予想は英国での3件とフランスでの0件という臨床TTvCJD報告数と一致する。高い推定有病率を用いて予測された感染数と症例数は非常に多かった。モデルは、推定無症候性感染数は推定臨床症例数よりも10倍以上多いと予測した。このことは感染した受血者の約90%が明確なvCJD兆候を示す前に他の要因で亡くなった可能性があることを意味する。

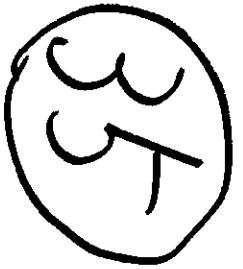
TTvCJDリスク推定の不確実さは、英国における真のvCJD有病率とのデータギャップを引き起こす。しかしモデルの検証は、低い推定有病率と報告症例の結果の間で一致した。将来、このモデルは米国におけるTTvCJDリスク及び現在の安全性介入の有効性の推定に適用されるであろう。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

赤十字アルブミン20
赤十字アルブミン25
赤十字アルブミン5%静注12.5g/250mL
赤十字アルブミン20%静注4g/20mL
赤十字アルブミン20%静注10g/50mL
赤十字アルブミン25%静注12.5g/50mL

血液を原料とすることに由来する感染症伝播等

報告企業の意見	今後の対応
英国及びフランスのデータを用いて潜在的な輸血感染性vCJD（TTvCJD）リスクを推定するためのリスク評価モデルを検証したところ、低有病率の仮定を用いたモデルは実際のTTvCJD臨床症例数と一致しており、このモデルは将来、米国のリスク推定に利用される可能性があるとの報告である。 プリオン病の原因とされる異常プリオンがコーン分画工程で効果的に除去されるとの成績と併せて、これまでの疫学研究ではいかなるプリオン病も、アルブミンを介して伝播したとの証拠は無い。また本製剤の使用は一時的かつ限定的であることから伝播のリスクは非常に低いものと考える。	輸血あるいは第Ⅷ因子製剤によりvCJDに感染する可能性が示唆されていることから、今後も引き続き情報の収集に努める。なお、日本赤十字社は、CJD、vCJDの血液を介する感染防止の目的から、献血時に過去の海外滞在歴（旅行及び居住）、CJDの既往歴（本人、血縁者）、hGH製剤投与の有無を確認し、該当するドナーを無期限に献血延期としている。



PO-249: Estimation of variant Creutzfeldt-Jakob disease infectivity titers in human blood

Luisa Gregori, Hong Yang, Steven Anderson

FDA; Rockville, MD USA

Blood of individuals with variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD) is infectious but the titer is unknown. Current estimates of possible vCJD infectivity titers in blood have largely relied on an assumption that the titers of vCJD agent in human blood are likely to be similar to those in blood of rodents infected with model transmissible spongiform encephalopathy (TSE) agents, assayed by intracerebral (i.c.) inoculations of rodents of the same species.

We analyzed published descriptions of experimental transfusion-transmitted (TT) bovine spongiform encephalopathy (BSE) and scrapie in sheep and reports of TTvCJD in humans, applying statistical approaches to estimate the probable number of intravenous infectious doses (IDiv) per unit of transfused blood (IDiv/unit).[1] The combined data for sheep with scrapie and BSE were stratified into 4 groups based on the elapsed fraction of the IP of the donor sheep at time of blood donation.[2] These observations suggest that not every blood unit drawn from an infected sheep transmitted infectivity when transfused. Analogously, data from transfusions in humans also suggest that not all recipients of NLR-RBCs from donors with vCJD became infected. For humans, IDiv/unit of non-leukoreduced red blood cells (NLR-RBCs) were estimated by two statistical models using data from UK Transfusion Medicine Epidemiology Review. Model 1 represents a snapshot of the current situation and does not include potential asymptomatic infections among the living recipients. Model 2 assumed that the 3 clinical TTvCJD cases reported in the Transfusion Medicine Epidemiological Review[3] study represent NLR-RBCs recipients who met 3 criteria: (1) they were infected; (2) they were of the MM genotype; (3) they had survived long enough to exceed the minimum incubation period of vCJD.

Sheep blood collected at or near onset of clinical illness contained a mean of 0.80 IDiv/unit. Estimates of infectivity in NLR-RBCs from donors incubating vCJD indicated a probable mean infectivity of 0.29 IDiv/unit (model 1) and 0.75 IDiv/unit (model 2). The analysis predicted a mean of 21 vCJD-infected recipients expected in a cohort of 27 transfused with vCJD-implicated NLR-RBCs in the United Kingdom (UK).

Our analysis suggested that, while less than one IDiv is likely to be present in a given unit of NLR-RBCs collected from a donor incubating vCJD, there is a high probability of TT infection among recipients of vCJD-implicated blood components. The analysis supports continuing measures currently recommended to reduce the risk of TTvCJD.

Disclaimer. The findings and conclusions in this presentation have not been formally disseminated by the Food and Drug Administration and should not be construed to represent any Agency determination or policy.

References

1. Gregori L, Yang H, Anderson S. Estimation of variant Creutzfeldt-Jakob disease infectivity titers in human blood. Transfusion 2011; 51:2596-602; PMID:21645006; http://dx.doi.org/10.1111/j.1537-2995.2011.03199.x.
2. Houston F, McCutcheon S, Goldmann W, Chong A, Foster J, Sisó S, et al. Prion diseases are efficiently transmitted by blood transfusion in sheep. Blood 2008; 112:4739-45; PMID:18647958; http://dx.doi.org/10.1182/blood-2008-04-152520.
3. Transfusion Medicine Epidemiology Review. http://www.cjd.ed.ac.uk/TMER/TMER.htm

PO-250: Degradation of abnormal prion protein by a hyper-stable protease

Kazufumi Takano,[1] Yuki Hori,[1] Azumi Hirata,[1] Yuichi Koga,[2] Akikazu Sakudo,[3] Kazuyoshi Ikuta,[2] Shigenori Kanaya[2]

[1]Kyoto Prefectural University; Kyoto, Japan; [2]Osaka University; Suita, Japan; [3]University of the Ryukyus; Okinawa, Japan

Background. The abnormal prion protein (PrP^{Sc}) which is a protease resistant isoform of normal prion protein (PrP^{C}), thought to be an infectious agent of transmissible spongiform encephalopathies (TSE). Decontamination of PrP^{Sc} from clinical equipment is important issue to avoid iatrogenic transmission of prion diseases. Several reagents or physical procedures are available to inactivate PrP^{Sc} but they cannot apply to some equipment such as endoscope. In this work, we focus hyper-stable protease, Tk-SP, which will have enzymatic activity under protein-denaturing conditions and degrade PrP^{Sc}.

Methods. Tk-SP isolated from the hyperthermophile *Thermococcus kodakarensis* was overproduced in *E. coli*. The enzymatic activity of Tk-SP with detergents and EDTA was measured. PrP^{Sc} (Chandler strain and Obihiro strain) accumulated in scrapie infected-mouse brain homogenate was degraded with Tk-SP, and detected by western-blot analysis.

Results and Conclusion. Tk-SP is able to maintain its proteolytic activity in the presence of detergents and EDTA. We optimized the condition which Tk-SP works efficiently. Furthermore, we revealed that the Tk-SP can degrade PrP^{Sc} to a level undetectable by western-blot analysis. The results mean that Tk-SP can be developed as a detergent additive to decrease the secondary infection risk of TSE.

PO-251: Validation of a risk assessment model of variant Creutzfeldt-Jakob disease (VCJD) transmission via red cell transfusion

Hong Yang, Luisa Gregori, David Asher, Pedro Piccardo, Steven Anderson

US Food and Drug Administration; Rockville, MD USA

As of November 2011, 222 primary vCJD cases have been reported worldwide. Most were acquired in the United Kingdom (UK). vCJD is transmissible by blood transfusion; to date, there have been a total of four probable vCJD transmissions

by non-leukoreduced red blood cells in the UK. We developed a risk assessment modeling approach to estimate the potential risk of transfusion-transmitted vCJD (TTvCJD) through red cell transfusion. The approach was validated by generating predictions from two separate models that used country-specific data on blood collection and transfusion for the UK and France and comparing them to the reported numbers of TTvCJD cases in each country.

The model integrated input values for factors such as potential vCJD prevalence among the populations, number of blood donations and of red blood cell transfusions, transmissibility of the disease, and susceptibility of recipients. vCJD prevalence in the UK population is a major input used in the model. It was used to derive the vCJD prevalence in France. Because this input is highly uncertain, the model was stratified by a low estimate of 1.7 asymptomatic vCJD infections per million UK population (95% CI: 0.2–3.7 cases per million) derived from a study of epidemiological modeling (Garke and Ghani, 2010) and a high estimate 279 vCJD infections per million population (95% CI: 72–485 infections per million) derived from tissue surveillance studies (Hilton et al. 2004, Bennet and Draktchiev 2011). The model also estimated the potential number of TTvCJD infections that might lead to clinical cases by including adjustments for disease incubation period and post-transfusion survival rate. Finally, the model predictions for numbers of cumulative TTvCJD clinical cases in the UK and France from 1980 to the current year were compared with the number of observed cases in these two countries for model validation.

Predictions of TTvCJD risk were highly dependent upon the prevalence assumptions used in the models. Using the lower prevalence assumption the model predicted only a few TTvCJD cases in the UK and zero cases in France since 1980. These predictions were consistent with the reports of clinical TTvCJD cases in the UK (3 cases) and France (zero cases). Using the higher prevalence assumption, the predicted number of infections and cases were much higher. The model also predicted the number of asymptomatic infections was more than 10 times higher than the predicted number clinical cases, which implied approximately 90% of infected recipients would have died of other causes before showing overt signs of vCJD.

True vCJD prevalence in the UK is the major data gap causing uncertainty in estimating TTvCJD risk. However, validation of the model suggested the greatest consistency between results from the lower prevalence estimate and reported cases. In the future, this model will be applied to estimating the risk of TTvCJD in the US and the effectiveness of current safety interventions.

PO-252: Comparative studies addressing the blood-related transmissibility of transmissible spongiform encephalopathies (TSE) in murine transgenic models

Oksana Yakovleva,[1] Karel Holada,[2] Paula Saa,[1] Carroll McKenzie,[1] Jorge De Castro,[1] Irina Vasilyeva,[1] Paul Brown,[3] Jean Manson,[4] Larisa Cervenakova[1]

[1]American Red Cross Holland Laboratory; Rockville, MD USA [2]First Faculty of Medicine, Charles University; Prague, Czech Republic; [3]CEA Institute of Emerging Diseases and Innovative Therapies; Fontenay-aux-Rose, France; [4]The Roslin Institute, University of Edinburgh and R(D)SVS; Easter Bush, Midlothian, Scotland, UK

Introduction. Iatrogenic infections of variant CJD (vCJD) and sporadic CJD (sCJD) through blood-related transmission are still under scrutiny. In our earlier studies we demonstrated infectivity in buffy coat and plasma of vCJD-infected conventional mice during the incubation period and at the clinical stage of the disease. Later, we reported on failure to transmit the disease after intracerebral (i.c.) injections of TgRM mice with plasma from clinically ill TgRM mice infected with vCJD. We aimed to investigate whether this failure to transmit vCJD could be attributed to the TSE strain or to an inability of the host, TgRM mouse, to propagate the agent outside of the central nervous system due to the absence of PrPC in blood. To address the first possibility, we inoculated TgRM mice with pooled plasma collected from sick sCJD-infected TgRM mice. To address the second possibility, we compared expression of PrPC in blood cells and plasma from TgRM mice and knock-in HuMM and HuVV mice.

Materials and Methods. TgRM mice expressing human PrP (PRNP M129, a brain PrPC level 4-fold higher than in wild-type mice) were injected i.c. with 30 µl of 1% and 0.1% sCJD (M129M, Type 1 and 2) brain homogenates (WHO sample RU99–009 supplied by the NIBSC, UK). Blood was collected into anticoagulant from uninoculated and sick mice (positive for PrPres in the brain) between 165–217 d after inoculation, and separated into plasma and cellular components and frozen. On the day of the experiment, thawed plasma was pooled and diluted 4-fold with sterile saline. Groups of TgRM mice were injected either i.c. with 30 µl or i.v. with 100 µl of sCJD-derived or control plasma. Animals are under surveillance with no clinical signs of TSE after 200 d following inoculation. The transgenic HuMM and HuVV mice were described elsewhere.[1] PrPC was examined in healthy TgRM, HuMM and HuVV mice on blood cells by FACS and/or by western blot and in plasma by sandwich ELISA.Results. The HuMM and HuVV mice expressed significantly higher levels of PrPC on lymphocytes and RBCs but not on platelets than TgRM mice and HuVV express higher levels than HuMM. The plasma levels of PrPC followed the same pattern. In addition to the ongoing transmission study in TgRM mice, studies are underway to establish whether vCJD and sCJD are transmissible by blood in HuMM and HuVV mice.

Conclusion. Comprehensive characterization of PrPC distribution in blood and lymphoreticular compartments of genetically manipulated mice may allow the generation of a better model to study iatrogenic transmission of TSEs by blood, and for studies of disease pathogenesis.

別紙様式第2-1
番号4

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日 2012年6月12日	新医薬品等の区分	厚生労働省処理欄
一般的名称	①②③④⑤ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン ⑥⑦人免疫グロブリン		研究報告の公表状況	www.fda.gov/Biologics BloodVaccines/2012/06/11	公表国 アメリカ	
販売名（企業名）	①献血ヴェノグロブリンIH5%静注0.5g/10mL　（ベネシス） ②献血ヴェノグロブリンIH5%静注1g/20mL　（ベネシス） ③献血ヴェノグロブリンIH5%静注2.5g/50mL　（ベネシス） ④献血ヴェノグロブリンIH5%静注5g/100mL　（ベネシス） ⑤献血ヴェノグロブリン-IH ヨシトミ　（ベネシス） ⑥グロブリン筋注450mg/3mL「ベネシス」　（ベネシス） ⑦グロブリン筋注1500mg/10mL「ベネシス」　（ベネシス）					

研究報告の概要

業界向け草案ガイダンス：「業界向けガイダンス：血液及び血液製剤によるクロイツフェルト・ヤコブ病と変異型クロイツフェルト・ヤコブ病の伝播の可能性があるリスクを低減するための改訂予防措置」への推奨

Ⅰ．緒　　言

この草案ガイダンスは、血液を介したvCJD伝播の現在の知見を反映するために、血漿由来製剤（アルブミンを含む）及び血漿由来アルブミン含有製剤の表示のための推奨を改訂しようとする2010年5月付の（2010 CJD/vCJDガイダンス、2010年5月27日）「業界向けガイダンス：血液及び血液製剤によるクロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）と変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）の伝播の可能性があるリスクを低減するための改訂予防措置」という標題のガイダンスを改めることを目的とした。確定時、我々は2010 CJD/vCJDガイダンスの中に改訂した表示推奨を取り込むことによって2010 CJD/vCJDガイダンスを更新するが、もしそうでなければ現在提供している2010 CJD/vCJDガイダンスにおける我々の推奨を継続する。

Ⅱ．背　　景

CJDとvCJDは、ヒトに影響を及ぼしている伝達性海綿状脳症（TSE）の二つの形である。生物学的製剤評価・研究センター（CBER）は、血液、或いは血漿によるvCJD伝播の報告より以前である、1999年11月にCJDリスクのための血液及び血液製剤の表示のためのガイダンスを初めて提供した。我々はCJDとvCJDに関係する疫学的知見と他の科学的データを監視し続けながら、この話題に関するガイドラインを出し続けた。その時以降、非白血球除去血液によると推定されたvCJD伝播の4症例が英国で起った。これらの全ては、後にvCJDを発症したドナーからの血液のレシピエントであった。2009年、異常プリオンたん白質はvCJD、或いは他の神経障害の症状でない血友病のヒトの脾臓組織で、死後見つかった。患者は70歳以上で、他の原因で死んだ。この人は輸血と英国血漿由来第Ⅷ因子の大量投与を受けていた。英国保健当局により行なわれたリスク・アセスメントは、異常プリオンたん白質の発見が無症候性vCJD感染のマーカーであると仮定すると、その様な感染の最も可能性のあるソースが食物暴露、内視鏡検査手順、或いは赤血球輸血よりも、血漿由来第Ⅷ因子であると結論した。

2010 CJD/vCJDガイダンスのⅦ.B項において、我々は潜在的なリスクとしてvCJDの伝播の可能性があるリスクに対処した輸血のための血液及び血液成分の表示改訂を推奨した。その時、将来の推奨において、我々もFDAは血漿由来製剤（血漿由来アルブミンを含む）及び血漿由来アルブミン含有製剤の更なる対処表示を目的とすることを言った。我々は、vCJDは血液により、そして多分血漿分画製剤により伝播したとする現在の知見を反映した、血漿分画製剤（アルブミンを含む）及び血漿由来アルブミン含有製剤のための表示の改訂を推奨する。

現在、血漿分画製剤は英国以外の如何なる国においてもvCJD伝播に関係していない。2010 CJD/vCJDガイダンスにおいて、我々は英国及びヨーロッパに滞在した時期に基づく、並びにウシ海綿状脳症、或いはvCJD暴露のその他のリスクのために、予防的血液ドナーの延期を推奨した。現在まで、米国で許可された血漿由来製剤は、vCJDを発症したことが知られたドナーから造られたものはない、そしてvCJDの

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

代表として献血ヴェノグロブリンIH5%静注0.5g/10mLの記載を示す。
2. 重要な基本的注意
(1)略
1)略
2)現在までに本剤の投与により変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）等が伝播したとの報告はない。しかしながら、製造工程において異常プリオンを低減し得るとの報告があるものの、理論的なvCJD等の伝播のリスクを完全には排除できないので、投与の際には患者への説明を十分行い、治療上の必要性を十分検討の上投与すること。

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

症例は米国で許可された血漿分画製剤の使用からの報告はない。その上、FDA へ提供された発表された研究及び情報は、その様な実験には固有の限界があるものの、ある特定の血漿分画製剤の製造工程は TSE 感染力を除去することができることを示している。しかしながら、FDA のリスク・アセスメント同様に、動物実験に基づき、米国で許可された血漿分画製剤による vCJD 伝播の可能性は極めて小さいが、完全に排除することはできない。これらの理由から、血漿分画製剤のための表示の推奨は、最初に vCJD についての言及、そしてその伝播の間の潜在的リスクを含むだろう。CJD について警告表示の推奨する要素は不変であった、そして CJD は血液によって伝播したとする確たる証拠がないことを考えると、理論的リスクとしてのその伝播の記述を継続する。

同様に、我々は血漿由来アルブミン及び血漿由来アルブミン含有製剤のための表示の改訂を推奨する。アルブミンは患者への直接輸注のための適応に加えて、他の生物学的製剤の製造に使われる可能性がある。例えば、それはある特定の許可されたワクチン、或いは特定組換え凝固因子製剤の安定剤として、或いは培養培地に使われる。許可されたアルブミンと他の許可された製剤中に含有されるアルブミンはこれまでウイルス、CJD 或いは vCJD を伝播することが知られていない、そして研究室での実験的な証拠は、他の分画製剤と比較した時、アルブミンは CJD 様原因物質を含んでいそうにないことを示唆した。血漿由来アルブミン含有製剤による米国、英国或いはその他の地域での CJD や vCJD の伝播の疫学的証拠はない。けれども、血漿由来アルブミン及び血漿由来アルブミン含有製剤の vCJD リスクの改訂警告声明のための我々の推奨は、これらの製剤を介した vCJD と CJD 伝播の極めて低い可能性を反映するために追加事項を含む。

2010 年 10 月、我々は血漿由来製剤での vCJD の潜在的リスクを反映する我々の推奨表示に関して伝達性海綿状脳症諮問委員会（TSEAC）のアドバイスを求めた。TSEAC は、vCJD の潜在的リスクのための表示は血漿分画製剤（アルブミンを含む）及びアルブミン含有製剤にとって正当であることを満場一致で同意した。

確定時、以下で述べられた推奨は、FDA の 2010 CJD/vCJD ガイダンスの Ⅶ. B 項における推奨にとって代わることを意図している。

Ⅲ. 推　　奨

我々は、表示の警告と使用上の注意の項での記述を以下の通り改訂することを推奨する。

アルブミン以外の血漿由来製剤

「この製剤はヒト血液から造られるため、伝播する感染性物質ー例えば、ウイルス、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）病原因子、及び理論的にはクロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）病原因子ーのリスクを伴う可能性がある。」

血漿由来アルブミン

「アルブミンはヒト血液由来品である。効果的なドナー・スクリーニング及び製造工程に基づき、ウイルス性疾患及び変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）の伝播するリスクは極めて低い。クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）の伝播の理論的なリスクはあるが、そのリスクが現実に存在するとしても、伝播のリスクも極めて低いと考えられる。ウイルス性疾患、CJD、或いは vCJD の伝播の症例は、これまでに許可されたアルブミンで確認されていない。」

血漿由来アルブミン含有製剤

「この製剤は、ヒト血液由来品であるアルブミンを含む。効果的なドナー・スクリーニング及び製造工程に基づき、ウイルス性疾患及び変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）の伝播するリスクは極めて低い。クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）の伝播の理論的なリスクはあるが、そのリスクが現実に存在するとしても、伝播のリスクも極めて低いと考えられる。ウイルス性疾患、CJD、或いは vCJD の伝播の症例は、これまでに許可されたアルブミン、或いは他の許可された製剤中に含まれるアルブミンで確認されていない。」

医薬品
医薬部外品　　研究報告　調査報告書
化粧品

報告企業の意見	今後の対応	
血漿分画製剤は理論的なvCJD伝播リスクを完全には排除できないため、投与の際には患者への説明が必要である旨を2003年5月から添付文書に記載している。2009年2月17日、英国健康保護庁(HPA)はvCJDに感染した供血者の血漿が含まれる原料から製造された第Ⅷ因子製剤の投与経験のある血友病患者一名から、vCJD異常プリオン蛋白が検出されたと発表したが、弊社の原料血漿採取国である日本及び米国では、欧州滞在歴のある献（供）血希望者を一定の基準で除外し、また国内でのBSEの発生数も少数であるため、原料血漿中に異常型プリオン蛋白が混入するリスクは1999年以前の英国に比べて極めて低いと考える。また、本剤の製造工程においてプリオンが低減される可能性を検討するための実験を継続して進めているところである。	本報告は本剤の安全性に影響を与えないと考えるので、特段の措置はとらない。	

Guidance for Industry

Draft Guidance for Industry: Amendment to "Guidance for Industry: Revised Preventive Measures to Reduce the Possible Risk of Transmission of Creutzfeldt-Jakob Disease and Variant Creutzfeldt-Jakob Disease by Blood and Blood Products"

DRAFT GUIDANCE

This guidance document is for comment purposes only.

Submit one set of either electronic or written comments on this draft guidance by the date provided in the *Federal Register* notice announcing the availability of the draft guidance. Submit electronic comments to http://www.regulations.gov. Submit written comments to the Division of Dockets Management (HFA-305), Food and Drug Administration, 5630 Fishers Lane, Rm. 1061, Rockville, MD 20852. You should identify all comments with the docket number listed in the notice of availability that publishes in the *Federal Register*.

Additional copies of this guidance are available from the Office of Communication, Outreach and Development (OCOD), (HFM-40), 1401 Rockville Pike, Suite 200N, Rockville, MD 20852-1448, or by calling 1-800-835-4709 or 301-827-1800, or e-mail ocod@fda.hhs.gov, or from the Internet at http://www.regulations.gov, or http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/default.htm.

For questions on the content of this guidance, contact OCOD at the phone numbers or e-mail address listed above.

U.S. Department of Health and Human Services
Food and Drug Administration
Center for Biologics Evaluation and Research
June 2012

Table of Contents

Contains Nonbinding Recommendations

Draft – Not for Implementation

Guidance for Industry

Draft Guidance for Industry: Amendment to "Guidance for Industry: Revised Preventive Measures to Reduce the Possible Risk of Transmission of Creutzfeldt-Jakob Disease and Variant Creutzfeldt-Jakob Disease by Blood and Blood Products"

This draft guidance, when finalized, will represent the Food and Drug Administration's (FDA's) current thinking on this topic. It does not create or confer any rights for or on any person and does not operate to bind FDA or the public. You can use an alternative approach if the approach satisfies the requirements of the applicable statutes and regulations. If you want to discuss an alternative approach, contact the appropriate FDA staff. If you cannot identify the appropriate FDA staff, call the appropriate number listed on the title page of this guidance.

I. INTRODUCTION

This draft guidance is intended to amend the guidance entitled "Guidance for Industry: Revised Preventive Measures to Reduce the Possible Risk of Transmission of Creutzfeldt-Jakob Disease (CJD) and Variant Creutzfeldt-Jakob Disease (vCJD) by Blood and Blood Products," dated May 2010 (2010 CJD/vCJD guidance)(May 27, 2010),[1] by revising the recommendations for labeling of plasma-derived products, including albumin and products containing plasma-derived albumin, to reflect current understanding of vCJD transmission through blood. When finalized, we will update the 2010 CJD/vCJD guidance by incorporating the revised labeling recommendations into the 2010 CJD/vCJD guidance, but will otherwise continue with our recommendations in the 2010 CJD/vCJD guidance as currently provided.

This guidance is intended for manufacturers of plasma-derived products, including albumin, and products containing plasma-derived albumin. Within this guidance, "you" refers to manufacturers and "we" refers to FDA.

FDA's guidance documents, including this guidance, do not establish legally enforceable responsibilities. Instead, guidances describe FDA's current thinking on a topic and should be viewed only as recommendations, unless specific regulatory or statutory requirements are cited. The use of the word *should* in FDA's guidances means that something is suggested or recommended, but not required.

[1] This guidance is available at: http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/GuidanceComplianceRegulatoryInformation/Guidances/Blood/default.htm.

II. BACKGROUND

CJD and vCJD are two forms of transmissible spongiform encephalopathy (TSE) affecting humans.[2] The Center for Biologics Evaluation and Research (CBER) first provided guidance for labeling of blood and blood products for CJD risk in November 1999, prior to reports of vCJD transmission by blood or plasma. We have continued to issue guidance on this topic as we continue to monitor epidemiological findings and other scientific data regarding CJD and vCJD. Since that time, four cases of presumed vCJD transmission by non-leukoreduced blood have occurred in the United Kingdom (U.K.). All of these were among recipients of blood from donors who later developed vCJD. In 2009, abnormal prion protein was discovered post mortem in the spleen tissue of a person with hemophilia[3] with no symptoms of vCJD or other neurological condition. The patient, who was over 70 years old, died of other causes. This individual had received blood transfusions and large amounts of U.K. plasma-derived Factor VIII. A risk assessment performed by U.K. health authorities concluded that, assuming that the abnormal prion protein finding was a marker for asymptomatic vCJD infection, the most likely source of such an infection was plasma-derived Factor VIII, rather than dietary exposure, endoscopy procedures, or red blood cell transfusions.[4]

In the 2010 CJD/vCJD guidance, in section VII.B., we recommended revised labeling of blood and blood components for transfusion to address the possible risk of transmission of vCJD as a potential risk. At that time, we also said that FDA intends to further address labeling of plasma derived products, including plasma derived albumin and products containing plasma derived albumin, in future recommendations. We now recommend revisions to labeling for plasma derivatives, including albumin, and products containing plasma-derived albumin, to reflect current knowledge that vCJD has been transmitted by blood, and most likely by a plasma derivative.

At this time, plasma derivatives have not been implicated in vCJD transmission in any country other than the U.K. In the 2010 CJD/vCJD guidance, we recommended preventive blood donor deferrals for time spent in the U.K. and in Europe, and for other risks of Bovine Spongiform Encephalopathy or vCJD exposure. To date, no U.S.-licensed plasma derived products have been manufactured from a donor known to have developed vCJD and no cases of vCJD been reported from use of a U.S.-licensed plasma derivative. In addition, published studies and information submitted to FDA show that certain plasma derivative manufacturing steps can remove TSE infectivity, although such experiments have inherent limitations (Refs. 1-3). However, based on animal studies, as well as on FDA risk assessments, the possibility of vCJD transmission by a U.S.-licensed plasma derivative, while extremely small, cannot be absolutely ruled out. For these reasons, the recommendations for labeling for plasma derivatives will include mention of vCJD for the first time, and the potential risk for its transmission. The recommended elements of

---

[2] For the purposes of this document, FDA considers the less common TSEs, Gerstmann-Sträussler-Scheinker syndrome and fatal insomnia syndromes, to be equivalent in risk to familial and sporadic CJD.

[3] Variant CJD and Plasma Products, Health Protection Agency (HPA), UK, http://www.hpa.org.uk/web/HPAweb&HPAwebStandard/HPAweb_C/1195733818681.

[4] vCJD Risk Assessment Calculations for a Patient with Multiple Routes of Exposure, HPA, Dept. of Health, UK, http://www.dh.gov.uk/prod_consum_dh/groups/dh_digitalassets/documents/digitalasset/dh_100337.pdf.

the warning label for CJD are unchanged and continue to describe its transmission as a theoretical risk, given that there is no confirmed evidence that CJD is transmitted by blood (Refs. 4-7).

Similarly, we are recommending revisions to the labeling for plasma-derived albumin and products containing plasma-derived albumin. In addition to its indications for direct infusion into patients, albumin may be used in the manufacture of other biological products. For example, it is used in the culture media of certain licensed vaccines or as a stabilizer in certain recombinant clotting factor products. Licensed albumin and albumin contained in other licensed products have never been known to transmit viruses, CJD or vCJD, and laboratory experimental evidence suggests albumin is less likely to contain CJD-like agents when compared with other fractionated products (Refs. 8-10). There is no epidemiological evidence for transmission of CJD or vCJD in the U.S., U.K., or elsewhere by products containing plasma-derived albumin. Therefore, our recommendations for revised warning statements for vCJD risk for plasma-derived albumin and products containing plasma-derived albumin contain additional language to reflect the extremely low likelihood of vCJD and CJD transmission through these products.

In October 2010, we sought the advice of the Transmissible Spongiform Encephalopathies Advisory Committee (TSEAC) on our proposed labeling recommendations to reflect potential risk of vCJD in plasma-derived products. TSEAC agreed unanimously that labeling for the potential risk of vCJD is warranted for plasma derivatives, including albumin and products containing albumin (Ref. 11).

When finalized, the recommendations set forth below are intended to supersede the recommendations in FDA's 2010 CJD/vCJD guidance at section VII.B (recommendations 2-4).

III. RECOMMENDATIONS

We recommend that you revise the statement in the Warnings and Precautions section of your labeling as follows:

Plasma-derived products Other than Albumin

"Because this product is made from human blood, it may carry a risk of transmitting infectious agents, e.g., viruses, the variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD) agent and, theoretically, the Creutzfeldt-Jakob disease (CJD) agent."

Plasma-derived Albumin

"Albumin is a derivative of human blood. Based on effective donor screening and product manufacturing processes, it carries an extremely remote risk for transmission of viral diseases and variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD). There is a theoretical risk for transmission of Creutzfeldt-Jakob disease (CJD), but if that risk actually exists, the risk of transmission would also be considered

extremely remote. No cases of transmission of viral diseases, CJD, or vCJD have ever been identified for licensed albumin."

Products Containing Plasma-derived Albumin

"This product contains albumin, a derivative of human blood. Based on effective donor screening and product manufacturing processes, it carries an extremely remote risk for transmission of viral diseases and variant Creutzfeldt-Jakob disease (vCJD). There is a theoretical risk for transmission of Creutzfeldt-Jakob disease (CJD), but if that risk actually exists, the risk of transmission would also be considered extremely remote. No cases of transmission of viral diseases, CJD, or vCJD have ever been identified for licensed albumin or albumin contained in other licensed products."

IV. REFERENCES

1. Foster PR. Removal of TSE agents from blood products. Vox Sanguinis. 2004. 87 (Suppl. 2): S7-10.

2. Lee, D.C., Stenland, J.C., et al. A direct relationship between the partitioning of the pathogenic prion protein and transmissible spongiform encephalopathy infectivity during the purification of plasma proteins. Transfusion. 2001; 41: 449-55.

3. Transmissible Spongiform Encephalopathies Advisory Committee Meeting Transcript, September 18-19, 2006, http://www.fda.gov/ohrms/dockets/ac/cber06.html#TransmissibleSpongiform.

4. Dorsey, K., Zou, S., et al. Lack of evidence of transfusion transmission of Creutzfeldt-Jakob disease in a US surveillance study. Transfusion. 2009; 49: 977-84.

5. Puopolo, M., Ladogana, A., et al. Transmission of sporadic Creutzfeldt-Jakob disease by blood transfusion: risk factor or possible biases. Transfusion. 2011; 51: 1556-66.

6. Hewitt, P.E., Llewelyn, C.A., et al. Creutzfeldt–Jakob disease and blood transfusion: results of the UK Transfusion Medicine Epidemiological Review study. Vox Sanguinis. 2006; 91: 221–30.

7. Molesworth, A., Mackenzie, J., et al. Sporadic Creutzfeldt-Jakob disease and risk of blood transfusion in the United Kingdom. Transfusion. 2011; 51: 1872-73.

8. Brown, P., Cervenakova, L., et al. Further studies of blood infectivity in an experimental model of transmissible spongiform encephalopathy, with an explanation of why blood components do not transmit Creutzfeldt-Jakob disease in humans. Transfusion. 1999; 39: 1169-78.

9. Brown, P., Rohwer, R.G., et al. The distribution of infectivity in blood components and plasma derivatives in experimental models of transmissible spongiform encephalopathy. Transfusion. 1998; 38: 810-16.

10. Gregori, L., Maring, J.A., et al. Partitioning of TSE infectivity during ethanol fractionation of human plasma. Biologicals. 2004; 32: 1-10.

11. Transmissible Spongiform Encephalopathies Advisory Committee Meeting Transcript, October 28, 2010, http://www.fda.gov/AdvisoryCommittees/CommitteesMeetingMaterials/BloodVaccinesandOtherBiologics/TransmissibleSpongiformEncephalopathiesAdvisoryCommittee/ucm244061.htm.

医薬品　研究報告 調査報告書

識別番号・報告回数			報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄
一般的名称	—		研究報告の公表状況	Health Protection Report 6(32)4-5(10 August 2012) http://www.hpa.org.uk/hpr/archives/2012/HPR3212.pdf	公表国 英国	
販売名(企業名)	—					

研究報告の概要

2008年4月、海綿状脳症諮問委員会（SEAC）は、英国における変異型クロイツフェルト･ヤコブ病（vCJD）の有病率を以前の虫垂検体調査と同様の方法で、1941～1985年出生集団からのサンプルを使用して2回目の虫垂検体調査を不顕性感染の有病率の推定値を更に正確にするため行った。
調査は2000～2012年に行われ、英国の41病院から収集された虫垂検体を免疫組織化学によって検討したところ、異常プリオンは32441検体のうち16の虫垂検体の濾胞樹状細胞内で検出され、これら陽性検体は既知の英国における176人のvCJD症例からではなかった。
暫定的な調査結果に沿った最終的な全体の有病率の推定値は百万分の493（95%信頼区間：百万分の282～801）で、1995～1999年の間に実施された以前の調査結果の百万分の237（95%C信頼区間：49～692）と統計的に一致していた。
1941～1960年生まれでは百万分の733（95%信頼区間：百万分の269～1596）、1961～1985年生まれでは百万分の412（95%信頼区間：百万分の198～758）であり、これらの結果は暫定的な調査結果に沿ったものでもあった。
この推定有病率の範囲は一回目の調査結果とほとんど重なるが、中央推定値の範囲（約2000分の1と比較して約4000分の1）は狭くなっている。
新しい調査では、以前よりも広い出生集団でプリオンタンパク質の存在を示している。
異常プリオンの保有率は英国でのBSEの流行に関連づけられるという仮説は、食物連鎖を保護するための措置が行われた1996年以降に生まれた人とBSEの流行前の両方の虫垂検体をさらに研究することによって、直接確認することができる。

使用上の注意記載状況・その他参考事項等

重要な基本的注意
現在までに本剤の投与により変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）等が伝播したとの報告はない。しかしながら、製造工程において異常プリオンを低減し得るとの報告があるものの、理論的なvCJD等の伝播のリスクを完全には排除できないので、投与の際には患者への説明を十分行い、治療上の必要性を十分検討の上投与すること。

報告企業の意見	今後の対応
英国で行われた調査において、異常プリオンの保有率は0.05%(16/32441検体)であったとの報告である。 現時点まで血友病以外で血漿分画製剤からvCJD伝播が疑われた報告はなく、血漿分画製剤の製造工程でプリオンが除去できるとの情報もある。	今後ともvCJDに関する安全性情報等に留意していく。

Legionnaires' disease outbreak in Stoke-on-Trent

Public and environmental health experts in the West Midlands are continuing to investigate a legionnaires' disease outbreak at Stoke-on-Trent after identifying the probable source as a hot tub on display in a store in the town. Appropriate control measure have now been put in place. As at 10 August, the number of confirmed cases associated with the outbreak was 21, including two fatal cases.

In the meantime, the Health and Safety Executive (HSE), having reviewed significant outbreaks in Great Britain over the past 10 years [2], has issued a safety notice reminding operators of cooling towers and evaporative condensers – the most common source of such events – of the need for effective and consistent monitoring of water quality and the importance of responsibilities being assigned to named individuals with proper management oversight of such facilities [3].

References

1. "Media update on legionnaires' disease in Stoke-on-Trent", HPA press notice, 3 August 2012.

2. Legionella outbreaks and HSE investigations; an analysis of contributory factors (Health and Safety Laboratory report HEX/12/07), HSE website: http://www.hse.gov.uk/research/hsl_pdf/2012/hex1207.pdf.

3. *Management of the risks from legionella in cooling towers and evaporative condensers* (27 July), HSE website: http://www.hse.gov.uk/safetybulletins/coolingtowers.htm.

Summary results of the second national survey of abnormal prion prevalence in archived appendix specimens

In April 2008, the Spongiform Encephalopathy Advisory Committee (SEAC) considered available prevalence data for variant Creutzfeldt-Jakob Disease (vCJD) in the British population and advised that a second appendix survey, using the same approach as a previous appendix tissue survey [1] on samples from the 1941 to 1985 birth cohort, be undertaken to further refine the estimate for the prevalence of subclinical infection [2]. The second unlinked anonymous survey of the prevalence of abnormal prion protein in archived appendix tissues has now been completed and this summary provides an update to the interim results published in September 2011 [3,4].

The survey examined appendices by immunohistochemistry from operations conducted between 2000 and 2012 and collected from 41 hospitals throughout England. Abnormal prion accumulation was detected within the follicular dendritic cells of 16 appendices out of 32,441 suitable samples examined. None of the positive appendices have come from the 176 known vCJD cases in the UK. In line with the interim findings, the final overall prevalence estimate, 493 per million (95% Confidence Interval (CI): 282 to 801 per million), remained statistically consistent with results from the earlier appendix survey (237 per million, 95%CI 49 to 692 per million) which examined samples from operations performed between 1995 and 1999 [1]. The prevalence estimates by birth cohort were 733 per million (95% CI: 269 to 1596 per million) in those born between 1941 and 1960 and 412 per million (95% CI: 198 to 758 per million) in those born between 1961 and 1985: these results were also in line with the interim findings [3,4].

The survey was conducted by a collaboration of the HPA, the Department of Neurodegenerative Diseases at the UCL Institute of Neurology, the Animal Health and Veterinary Laboratories Agency, the National Creutzfeldt-Jakob Disease Research and Surveillance Unit, the Histopathology Department of Derriford Hospital in Plymouth, and the MRC Prion Unit.

The final survey results have been considered by the Transmissible Spongiform Encephalopathies Risk Assessment Sub-Group of the Advisory Committee on Dangerous Pathogens, the successor to SEAC [5]. In summary, the estimated prevalence range largely overlaps that from the first survey, but

is narrower with a higher central estimate (around 1 in 2000 compared with around 1 in 4000). The new survey also demonstrates the presence of prion protein across a wider birth cohort than previously.

The hypothesis that the prevalence of abnormal prions found in both appendix surveys to date is linked to the epidemic of BSE in cattle in Britain can be tested directly by studying further appendix samples archived prior to the BSE outbreak and samples from those born in 1996 or later by which time measures had been put in place to protect the food chain [5].

References

1. Hilton DA, Ghani AC, Conyers L, Edwards P, McCardle L, Ritchie D, *et al.* Prevalence of lymphoreticular prion protein accumulation in UK tissue samples. *J Pathol* 2004; **203**: 733-9.

2. Spongiform Encephalopathy Advisory Committee (SEAC). Position Statement. Prevalence of subclinical variant Creutzfeldt-Jakob Disease infections. August 2008. SEAC position statement.

3. HPA. Interim data from the current national survey of abnormal prion prevalence in archived appendix specimens. September 2011. *Health Protection Report* **5**(36). Available at: http://www.hpa.org.uk/hpr/archives/2011/news3611.htm#cjd.

4. HPA. Creutzfeldt-Jakob disease (CJD) biannual update (2012/1). February 2012. *Health Protection Report* **6**(6). Available at: http://www.hpa.org.uk/hpr/archives/2012/hpr0612.pdf.

5. Advisory Committee on Dangerous Pathogens (ACDP) TSE Risk Assessment Subgroup. Position Statement on occurrence of vCJD and prevalence of infection in the UK population. July 2012. Available at: http://www.dh.gov.uk/ab/ACDP/TSEguidance/DH_125868.

B　個別症例報告概要

○　総括一覧表
○　報告リスト

個別症例報告のまとめ方について

個別症例報告が添付されているもののうち、個別症例報告の重複を除いたものを一覧表の後に添付した（国内症例については、資料3において集積報告を行っているため、添付していない）。

感染症発生症例一覧

	番号	感染症の種類		発生国	性別	年齢	発現時期	転帰	出典	区分	備考
		器官別大分類	基本語								
第19回	1	感染症および寄生虫症	肝炎ウイルス関連腎症	オーストリア	男	14	2006	不明	症例報告	外国製品	識別番号3-11000051 報告日:2012年4月18日
	1	感染症および寄生虫症	C型肝炎	オーストリア	男	14	2010年4月	不明	症例報告	外国製品	識別番号3-11000051 報告日:2012年4月18日

血対課ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正措置報告
120081	29-Aug-12	120390	CSLベーリング	人血清アルブミン 人血液凝固第XIII因子 フィブリノゲン加第XIII因子 フィブリノゲン配合剤	人血清アルブミン	ヒト血液	米国、ドイツ、オーストリア	有効成分 添加物	有	有	無
120082	29-Aug-12	120391	CSLベーリング	人血清アルブミン 破傷風抗毒素 フィブリノゲン加第XIII因子 フィブリノゲン配合剤	ヘパリン	ブタ腸粘膜、ブタ小腸粘膜	中国	製造工程	無	有	無

別紙様式第４

感染症発生症例一覧

	番号	感染症の種類		発現国	性別	年齢	発現時期	転帰	出典	区分	備考
		器官別大分類	基本語								
第19回	19-1	臨床検査	B型肝炎表面抗体陽性	クロアチア	男性	29歳	2012年4月11日	回復	症例報告	外国製品	報告日：2012年8月14日（追加報告） 識別番号：C-12000006 追加情報で被疑薬投与状況、臨床検査結果等が追加/修正され、追加報告を行ったことから、最新情報に更新した。 MedDRA/J Version 15.0
第19回	19-2	臨床検査	B型肝炎表面抗体陽性	ウクライナ	男性	27歳	2012年3月20日	回復	症例報告	外国製品	報告日：2012年8月13日（追加報告） 識別番号：C-12000005 追加情報で被疑薬の品質検査結果、患者背景等が追加/修正され、追加報告を行ったことから、最新情報に更新した。 なお、本症例はその後、9月6日にも追加報告を行った。 MedDRA/J Version 15.0
第19回	19-3	臨床検査	B型肝炎表面抗体陽性	ロシア連邦	男性	22歳	2011年6月22日	未回復	症例報告	外国製品	報告日：2012年8月28日 識別番号：C-12000015 MedDRA/J Version 15.0

血対課ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正措置報告
120087	21-Sep-12	120504	バクスター	乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体	乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性	人血漿	米国	有効成分	無	有	無

別紙様式第4

感染症発生症例一覧

	番号	感染症の種類		発生国	性別	年齢	発現時期	転帰	出典	区分	備考
		器官別大分類	基本語								
第19回	1	感染症および寄生虫症	C型肝炎	イギリス	男	32歳	不明	不明	症例報告	外国製品	識別番号3-12000020 報告日:2012年9月12日

血対課ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正措置報告
120112	22-Oct-12	120629	CSLベーリング	乾燥pH4処理人免疫グロブリン	ペプシン	ブタ胃粘膜	米国	製造工程	無	有	無